川柳 下巻

近世文藝叢書　第九



近世文藝叢書第九

川柳二

俳風柳多留三十一篇

此編は一口子の志を繼て古川翁の撰みし神社奉納の額等の秀句高點を集め、末に和笛追福の句を合て三十一編となし、諸君子の高覽をねがふのみ、

文化二丑の秋　花山麓　玉章

たなつもの持て發句の禮に來る
かんばんに生國を書くい丶おとこ
雲中に雪をせり出す能い天氣
生田流くわよう夫人が引はじめ

姫の氣に合はず高尾は所がへ
田每程けいせいの出す月の文
賴政の後家が通ると茶つみ云ひ
せんすいと築山夜の間ひに出來
きつい事あやめのだいで一首よみ
百社をうつたあしたから狐つき
ちつとべえ何かいはしつたればふり
ぼんならぬ早乙女おすみおよしなり
とんだ事夜中にお取たてが出來
六玉川ひとつは男せたいなり
當分は嫁にげ込にか丶つてる
ほふづきの仕上に遣ふつまはぢき
藏宿でかりずと來なと高尾いひ
つむりてん〳〵が十兵衞むねん也
びいどろの中でおよぐをねこねらひ
さわ栗の下駄で通つた方がもて
飯時やかみをゆふとき藤太來る
ふく將に金がなくつてろけんなり
古里寒く大めしを喰に來る
見所が御ざるとやぶ醫四ふくもり

まんぢうは喰ず阿部川もちはくひ
い印へたのめと內へとゞけもの
いろ客だなど丶新造をいやがらせ
琴の師の守り本尊十三夜
ぶをとこは尻をわるのにかゝつてる
よくそさうなさるとばゝあ帶をさせ
江戶半分はむし干しの金屛風
殿さんと只の家老はこはくなし
時鳥なきつる方は北野なり
花の雨ぞんじもよらぬをんな客
赤はぢよりは白はぢのつらい事
初午に丑の御前はいゝついで
いゝ子だいつて遊びなと娘出來
氣が氣じやねえのに笑ふ年の梅
雲井に笠があらはれて芝居也
大黑をおがみ蛙のはなしする
むりな意趣おつこちた木を根から切り
いろ男百の內では神祇なり
神田川堀わる人をふり通し
此雪に御苦勞ときに悴事

おそろしさ釘ぬきの入る病ひなり
おまへはおまへはとむなぐらおせきとり
江戶のあたごはなげずとも町ですみ
わび事で師匠から出るなきつつら
安す仁者坂で車へかたをかし
待ぶせは髮切丸をとぎすまし
つらあてにこゝろ盡しを嫁しらべ
市川と杉山紙代が四もん
直きにまけたで女房はちつとかひ
項羽が伯父さまと子房こん意なり
和かんの瓶わり溫公と勝家
しやうりまいかぶつかちりを連てくる
春秋にあかねぶとんをねだるなり
十二文が酢を下戶にふるまはれ
川ばたの御用はあたまはられけり
夕立にうれいの形りで女客
はらみ句は世上へしれて小町なし
かわらけや一日こまをまはしてる
ふく神はするを見玉ふ二日の夜
はきだめへ鶴おめかけのおなかなり

とらがはかもろこし原の近所なり
川どめの状を貳人でよむにくさ
色このまざるは關所を越て行き
道具屋にあるのは逃た具足なり
南北に新都のできるにぎやかさ
鷄ではじめ鳳凰舞納め
天井を物置にするいしやの內
わるい道手が板べいをあるく也
目と耳はいゝが口には錢が入り
げんぞくをする弟子を持松が岡
初午は男禿にせわがやけ
花の山ごせ杉の木の方をむき
なすのをさしてふりかへりふりかへり
文左衞門けいせいにちともたれぎみ
松茸の夢こんれいとうばはんじ
尻ひつからげ立むかふ下手のまり
大くせつかこひ一枚起證かき
きなこ付け〳〵おはぐろつけるなり
はこ入をくどきはじめは亥の日なり
よし原のつぶれた夢を母は見る

入しれず生醉座頭目がすわり
賴光へ出たはさゝがにどこでなし
はんじやうさ水も四角に地をむぐり

武州川口天滿宮奉納額面句合

地下は桑原大內は桑の門　芹丈
ひゐおろしよく朝聞けばつまどざた　門柳
僧正の鼻はその後たかくなり　口喜
大名の手せんじ利休させはじめ　丸龍
あく筆の後悔蟬やとんぼなり　若竹
丸綿で黑ねこをなでいとまごひ　鼠弓
勘定あつて傘はたらぬなり　千鶴
鼠の外にのふのあるからす猫　岸口
馬を飛びじやりをけたてゝ四手駕　龜遊
野にばかり紫あつてさへぬなり　鼠弓
てんがんのうるはしからぬうれ殘り　芹丈
娘どしかけにしてとる千早ふる　清江
萬治いせんはどらうちがゆやで出來　狸聲
ろうがいの譯を聞ほす極こんい　川長
千兩のつゝみはむすこからくづれ　同

かけこみの嫁もみに出るはなし鳥　如雀
替り錢やりてのこしに五六文　川長
庭は付たり帳場へのあかりとり　龜遊
見せ開きあつかましくも戸をたゝき　一馬
をかしさは古歌を吟じて百棧敷　五連
書たもの物をいつたは北野なり　美德
かくし引出しへ入べきものはなし　五鳥
これからは楊貴妃櫻だとそびき　洗路
鳥が九羽あやうい所へうろふ出る　玉章
吉原でひにんのそふをはたす也　洗路
泥中のはちすほつてる寒い事　露舟
おめかけのきんげんばかり御もちゐ　川長
寢つゞけの蛇の目さました名歌也　若竹
いきてとぶ柱のできるあつい事　龜勇
しよいつゞら紺やほし場が遠く也　門柳
三味せんのまんなか頃へはしをかけ　曾木
けいせいにふくりんかけた御奉公　露舟
神事ないゆゑ橋がたいこなり　貴柳
そろりそろりとわらはせる新左衞門　錦州
にくい事けつく便りの多い後家　一馬

川口へ吉野ののぼるさむい事　口喜
本とうのいしやになりなとしなだれる　若竹
しぶ柿はらいねんくふをむいて居る　千鶴
かこはれへくる法類はごくこん意　門柳
きくは聞いたがくふ事はなんとして　湖水
お十夜はあんじる程の旅でなし　豊好
よめる人にはつりあはず綱がすき　姫小
つめらうのやうにわいわい書ておき　錦州
春の雪せいかい浪のなかで喰ひ　洗路
ぐわんじような雛は是じやと村の市　丸水
江戸のまつらがたに駒をとめる石　狸聲
五年たつてもふしんせぬのもふ孝　露舟
子をもてば白魚迄がまづくなり　芳童
湯女のへあがり奥中でにくまれる　玉章
ねれるのをたのしみにして笛を吹き　串柿

本郷天滿宮奉納句合

御えん日までは氏子らそだつなり　芹丈
えらまねばこそ古筆を上げる也　文集
天神を拜し時鳥をたづね　川長

目に三日程はすゞしき夏の旅　卯木
白酒のない大内は玉の汗　宿禰
大どうだどうだとひなをかつぎ込　丸水
松とう寺切りでかへつてきうをする　雨潭
はらからはやり長刀でおどすなり　宿禰
けいせいをうつちやらせるに骨ををり　魚交
むめわかはむかひも柳ばしへよび　姫小
さくや姫三國一のすそつぱり　夢中
十六でうみつゝがなくはかまきせ　若竹
たばこをばうんとねじこみ下戸野がけ　雨譚
京都ではむめをぬすまれたと思ひ　夢中
らうたけて針わざならふうんのよさ　文集
能い花をもらひうつりにやぶれ傘　若竹
つつつけて見ると茶わんをのぞいてる　五連
ばんとうの手廻しわきで子をこさへ　丸水
うみ山に能い夏ものを江戸しこみ　雨譚
よかんさりかねひなだなにむめつばき　左滿
うらつけで板の間をくるまちどほさ　糸柳
ありありはいゝがおつかけおん廻し　宿禰
三日程てら／＼とする五月雨　同

生島のあるひやうばんき茶人持ち　雨譚
やすひでを目がけるけちな歌がるた　洗路
玉のきず弘法大師見つけ出し　玉章
前九年ぐそくのいしやうはつと也　同
かいまみにばかり行のに四つ手つき　雨譚
中がさと錢もつて出るひとりもの　夢中
そりやあ草だわなこんなのがよめな　由香
百人の内一人りくふはつがつを　芹丈
もんもうな孔子手くせがわるいなり　如雀
ばあさまはまだまめかとはむごくきゝ　丸水
かぢ原さまのあつらへとゑまやいひ　巵言
むごらしいのりうり首が二つなり　串柹
ゆめばかりなるかまくらに二三年　柳雨
らかん寺にもふかるといふ佛なし　豐好
牛の御前でのろついてむす子行き　玉章
おそはつた通りにおがむ手ならひ子　横好
かうじ門をいづる事三丁なり　雨譚
雨やどり出やうとしてはよしにする　同
松とう寺うれ口のよいもみぢなり　糸柳
金屛風のそんりやうのみ喰をする　夢中

のぶといつらで宮様の跡に居る　柳雨
玉にきず藏宿を出てちよきにのり　若竹
ふみの末むめの折りえだ一つかき　串柹
こいつむしんだなどゝ人相であひ　雨譚
ちんまりとすわると女郎げびるなり　如雀
人のうれひをよろこんでむす子出る　窓梅
釜をぬすまれたばんむす子大もて　如雀
すりこをばふきあはせずがなめはじめ　串柹
もめるはずさられる工夫計りする　文集
へいごしに七つの娘見えるなり　夢中
人先へちやんとしたくをせきやする　如雀
こはくないはき庭のあるけん長寺　窓梅
開眼をすると一休ぶうらぶら　串柹

田畑村早川普門院寺内西行庵奉納句合

あみだ道西行庵はきつい事　洗路
さすがおく樣御花見のねだりごと　和笛
十七里先きに淋しい名を殘し　名木
三味せんの千てうもはれそうな猫　如雀
のまぬやつ辨當くふと花にあき　串柹
傘どこか貴樣は貴樣は貴樣は　洗路
二つ三つくしやみの上をほとゝぎす　魚火
はざくらはすてものにする中の町　宿禰
こはい役わりを六本杉でする　同
どれ程くつたかしなのはらがくちい　山香
まだ夜をこめて馬のなくは品川　洗路
去りにもつたつた半年つゝらなり　門柳
おもだかとてうせんぜめは向ひあひ　如雀
はつがつをそばで茶わんをかき廻し　由香
つるは古いと入道は犬に金　雨譚
京都ではゑもん江戸では式部なり　文集
はしごおりきると二かいでひなをまけ　若竹
用がありや來やすとしきゐやつことし　丸水
嫁禮のいしやう片づけひなを出し　左滿
八樽くらつていなだをばくふところ　玉章
土みかどさまべい立てるいなかびな　花口
なべいかけ古いこまいもちつともち　そこう
なぜ一人とかまへないと下女が宿　串柹
つよいふりひるねもおきてかしこまり　横好
こよみ見て後生を年に二度ねがひ　糸柳

一廻り程ちよきがらも見えるなり　柳雨
ふらそこはちみびり〳〵と青くなり　一口
にしきでゞのむがそだよと袖を引き　五連
ねりくやうには女房をまゐらせる　芹丈
母よめへもの日にゆだんさつしやるな　若竹
下げ錢でくどいたを下女いきどほり　門柳

麻布神明宮奉納句合

神慮にも御くろうのない木曾路なり　和笛
一ケ所は和かんへひゞく時の鐘　門柳
するがへは九引てあふみ一殘り　門長
逃水を追つかけて來る文づかひ　五連
口あけに忠義なものへ酒をうり　寸魚
人のおもてしろ〳〵とむすこ不首尾　和笛
おぼえずと能いに猪牙船乘ならひ　五扇
名代にいつつけられるげびた事　若竹
むす子のかけとり大方舟で來る　同
ゆきたけのたらぬ羽織をほうり出し　清江
けんぎやうになりかねるはず人がよし　若竹
夜るよ中仕立おろしとほうりだし　五英

やつばらをかたづけに出る國家老　若竹
おもしろくないと親父はきげんなり　姫小
百両を男からとるうつくしさ　五連
まんろくに城をしてゆく國家老　同
百両で一生あかんべいをされ　晩器
其つみをゆるし呼かへす美しさ　柳順
居つゞけをとなりでしかる一人り者　五連
はんじてはみたが藥師寺きのどくさ　同
かはいやねがほみてゐるもてぬやつ　同
つらい事八九の蚊屋へひとりねる　同
きもの大きさ斗のごとく二度月見　雨譚
ゐちごやを又がしにするにわか雨　魚交
家ぎやうづく四五年むりな袖をふる　門柳
花を見てたゞすみますかとほつごん　雨譚
おそろしい車に九十出して乘り　夢中
野や草を江戸へ見にでる田舍もの　丸龍
二十四さいたる染羽の矢とむすめ　川長
ころんでもよごれねえのが名句也　蔦故
袂をしぼりお久しうござりやす　玉章
つまりんせんがより合て書て居る　五連

いそがしさ三百五十四五日め　川長
廣い江戸すて小ぶくろへ嫁はいり　雨譚
ばんは古市だと石がものをいひ　和笛
米の直を下げたも二人り百に入れ　若竹
ざんぎり本多のゆひちん一分なり　雨譚
大師河原へつれ立つた七十五　清江
ついそこへきたとははたりにくいかし　丸水
ほんとうに紙をやぶるは小松殿　如雀
なんのかのとて大門へそびきこみ　和國
大綱小づな十もんじあつい事　川長
雨やどり貧朝ばかり一人りまへ　狸聲
必よした乗りはと送りものがいひ　清江
座頭の杖にはなれたがづわうへい　晩器
行燈とぼたもちは大きなところ　和笛
はかまだれ馬どろぼうでみそをつけ　洗路
笠のうりだめ熊坂ねらつてる　五連
十三里先きで男をそしつてる　風車
まあちつとねきへつけてと手代のり　由香
雪ふりにごくべつこんな客を呼び　玉章
松の内手の大きいははねだされ　丸水

せいろうで島がくれゆくむまい事　夢中
おいくさんおたさん來なと琴を出し　可候
ひよい〳〵と帯ををどらせ下女はかけ　五連
あつい事牛王を菓子やみせへ出し　玉章
あの榎からとぶのさと野がけいひ　柳雨
刀かぢ手もなくひぢをおぼえられ　丸水
四郎兵衛に非ばんをさせるきつい事　露舟
じやうだんな堀のみそなどすつてみる　若竹
玉子のつとは玉子と見えるなり　夢中
やきもちの供にはたゞのせうゆしへ　同
ぬり立つて下女さそふ水くみにでる　五連
たゞすの涼み十兵衛で大さわぎ　芹丈
大めしを喰つてるとこへ岩が落ち　洗路

上總國長者町地藏尊奉納句合

二十五の内でしれまい御すがた　如雀
したく金來てはきだめを鶴は出る　川長
もろこしにないのは山の四方めん　芹丈
三つゆびて手まねきをしてにげろなり　三丁
殿さまの外はのこらずむかふづら　未學

ひらく時いなづまのするよい屏風　夢中
此上もなき上田に五たんなり　末學
けんじゆつの間だに竹のけいこなり　同
きぬた出されると夜ばなしかへるなり　丸水
うそと思ふと女郎買しまひなり　串柹
しあんがでると男ぶりぐつとおち　文集
定家卿ぢぞうそんをもえらみ入れ　玉章
あべこべさ公家衆を歌でいひこめる　同
一度かたかへるとふみが袖になり　如雀
せい人のうそは井戸から錢を出し　文集
御城下の名も名月にさしさはり　芹丈
けんぎやうと座頭のじぎに人だかり　柳雨
蛤はすふばかりだと母をしえ　柳順
花のよひちんのしたくも二尺ほど　串柹
ぶ男の娘の居所訴人する　姫小
あつもり及きぬうりも忍かうする　洸路
ゆうれいの月見をたのむこはい事　車道
とびらひやふくをあんちするから簞笥　芹丈
わるいはず雨うでになる嫁をとり　車道
さら地ではいやばん町のやしきがへ　柳雨

一つ東の柹八十五むしつくい　門柳
ほめぬ事せけんのひろい女なり　文集
百人に一人りはさいのかはらなり　芹丈
かんじそこなひ犬のしりおがんでる　如雀
大山へどうかしあひにまゐるやう　紀鳥
つくぼうさすまたぎやとして觀世音　洸路
二三本座しきにあふぎ明けはなし　三丁
夜具のむしんは云出すも安大事　串柹
しろうとのうるし置き所やかましい　如雀
かりるには鬮なす時はあらいなり　門柳
もう日にかけそうなものだとうすぐも　雨譚
金箱にはひふきのつくとんだとこ　串柹
はきものへきうもすへられぬと高尾　洸路
主人相しらずばんとうげい者なり　雨潭
よくよつかヽるぞと下戸はうるさがり　由香
吳の國で目ぬきの男伍子胥なり　洸路
はすのどんぶりへごヽ〱寺水を入れ　門森
淋しいよふはい御ひねりまとこ上げ　鼠弓
出來立ての男をなぶるいすヽ川　東水
江戸にないのがやつこと五月女なり　串柹

廻りどうろう四萬六千人　串柹
先き箱で來るを留守居は待てゐる　柳雨
よび出しをほつたてじりでかつて居る　玉章
ふとどきさざい家のゐそぶ所へ行き　三丁
ゆどのさんへ願をかけて御手がつき　夢中
かうげんれい色で客すくなからず　來賀
うんと云ひなんせんとつめりんすによ　文集
八朔に四郎兵衞しごく能い名なり　柳雨
らせん門六位長柄を持てくる　狐聲
百人のすけて七夕はやくなり　洗路
いざりのかけたは資朝はつにみる　如雀
ぐわんといつてしまつたのはかね供養　川長
えらしりをならべ庄やの田うゑなり　和笛
つき出しの御用木めんのもやうもの　芹丈
猫をなでるを里の母見てかへり　窓梅
しやうりやうもこつさに錢の懸るもの　唇虹
ようござりませうと馬くろこしをのし　柳雨
ほり出しをする氣で五町中のぞき　狐聲
先ぐりに去狀のくるまつがをか　末學
らく中でたんごのはかまうるさがり　窓梅

しちや迄ひやうとくのつくすいな事　串柹
ろんごはしらぬが細見はかうしやく　五連
褒めしがいやで身うけがばれるなり　唇虹
ときやかとおもや大工の入るしごと　玉章
ゐつい事じやかごの中へいもをいれ　霞朝
入鹿を〆めた此かたはかまがきれ　洗路
むごい事二ひやうこさへる村のふぎ　門柳
仲人はあばたの事をいもといひ　三丁
片月見せんものすけん八九人　蔦故
火けしつぼ一つにふたを五つかい　門柳
だて風は高尾がむねに合はぬなり　洗路
手おひやきやはんで女の淺黃出る　同
きつい事二十里あら身だらけなり　口喜
孔明がひいたも生田流と見え　如雀
宿帳をつけるとみんな御いしや樣　串柹
はらからに迄御妾は糸を引き　芹丈
うすべりのきよを廻國たれて居る　玉章
けぶりのたえぬ箱の有るじんしや也　芹丈
持參金口が二つ多いなり　夢中
五文目ぼしへ朱を入れるあら世帶　雨譚

人丸のめうじへさほを持て來る　狐聲
くへもせぬ柿をしぶやの伯母がくれ　芹丈
色白ではなすぢ通り金がなし　同
金をいかして遣ふ客身にならず　露舟
めづらしさ雲井はるかに聲がする　狐聲
のりきよといへばあらくれ武士のやう　同
うるさくはさらしふみわけなくところ　橫好
天下泰平くわよふ夫人ひき　玉章
井戸ばたに茶わんのいはれくらべこし　文集
にはか雨けつ王の代にふりはじめ　如雀
歌修行とがらしこそ〳〵きゝ出し　川長
はづかしさはじめてふとつてうになり　三丁
のめつたりおきたり琴のひきならひ　魚交
生醉にえん日のあるかみな月　同
のつつけてひらり下りると鳩はにげ　門柳
耳に目をぶらさげおやぢ大こゝと　拍之
すいたやで見合さつそく出來るなり　川長
十三里先きだにたつた四里たづね　文集
孔子ののたまくとよんでしかられる　川長
はじかいた公家は梅ぞの中なごん　柳雨

よしはらが引けますそうとほりをほり　夢中
よし廣の太刀がこはいとだつきいひ　露舟
何ものか門をたゝくとしやうとう寺　花口
見てや止みなん月ぱくのえんさだめ　雨譚
細見はよつぽどやつておつかける　串柿
いつためて置いたか女房帶をかひ　五扇
一疋になるとおもへば女郎かひ　文集
ざこねもいつそ手廻しなえんさだめ　五扇
名代のごけを甚左衞門で見かけ　鞠志
女をいけ取り手がらは四郎びやうゑ　文集
鬼のかぶつかじりひどく〳〵し上げ　洗路
ゑの木の僧正もちやの向ふなり　如雀
車でかけをおつたは木曾よし仲　洗路
兄よめに歌人をもつたふてえやつ　玉章
をか引をしそこなつたは五大いん　如雀
あつい事うらぢうかゝあだらけ也　同
石龜の伽ぎになまづが二三疋　露舟
なぞ〳〵もげんこう二つ三つ書き　川長
二條どの御用とをつて下るなり　露舟
あやせを通るやね舟にとうのいも　芹丈

天しる地しる二人りしる御用しる　芹丈
舍弟に百石玄米女色なり　雨譚
後生のわるいしやうもんをごけはもち　五鳥
よく下で見てはいるぞと百さじき　雨譚
まつりのけんくわ迄書いたものがたり　如雀
失禮のうりもの丶出る市二日　同
みなとへつくと親舟は子をおろし　夢中
おもしろさ五十二るいの外のおと　狸聲
あのたんゆうはにせ筆ともてぬやつ　芹丈
もの丶ふのくらには多いほと丶ぎす　如雀
げじ〳〵をあふぎへとれば手へつたひ　狸聲
あんに笠見えるは近所あるきなり　露舟
かし元は四郎あるきは藤九郎　芹丈
かきつばたとつたら跡はうしろやく　文集
けちな道しゆもくをもつてこすつてる　玉章
ひの衣式部に居どこ奪はれる　洗路
鳶よけのなわが西行氣に入らず　如雀
戸板をば布きせにする能いてんき　露舟
豆いりはまづきやふおふのはじめなり　門柳
きつい事東魚を汐干がりにする　洗路

切りおとしでも立てをする大あたり　雨譚
下を見ておごりの出たはひえい山　丸龍
目ぐろたこやくしそしてとおやぢき丶　洗路
もみぢかへ古句々々とてんにせず　宿禰
女房はちよつ〳〵と取替へたいもの　夢中
世をすてる外に猫迄すてたまひ　洗路
しろうとはあみと一所にふりよな事　玉章
出來ぬはずすやの娘をこんにやくや　同
手取りばいとりのかり着を御師でする　丸水
あの松こそと出た石にけつまづき　如雀
吉次が來るで熊坂はひるねなり　同
だいてはいらず石川は一首よみ　雨譚
はんにや經よまぬと鍋のそうこぬけ　三丁
夕べにはけんくわあしたは御慶なり　露舟
おしろいのまくはりをしてへんなつら　三丁
一りうものこさぬやうにきちんくひ　文集
ちう三を母にねだるとつがもねえ　同
三人にすくはれ萬民をすくふ　丸水
もてぬ夜はなほうらめしき朝ぼらけ　露舟
はやざきを土のろうからかつぎ出し　玉章

そとへ出て母あんじてるおそざくら　門柳
けいせいに間男のあるけちなばん　文集
ぬすんでも目に見えぬもの人のほね　夢中
食傷はけろ〳〵とけさ起きて居る　丸水
かつをにていせや七十五日やみ　姫小
あいつらがさくはいおらア氣にくはず　千鶴
からさきへ風かすじるとあわづなり　我雄
しよく人の汁を千日下げて行き　横好
はこね山こしたなすびはちそうなり　清江
あの義理の此ぎりのとて出られやす　花口
ろくな用じやア有るまいと飛車をなり　姫小
なへもの丶うれぬ所が目ぬきなり　丸水
おうたぼうひいてくれをれ抔としやれ　串柹
あてのみにすみそを入れるつりのふね　同
のがけ道青ばのふえをふいて行き　口喜
士筆賣しやうねにしやうとなぶられる　和笛
つめられたごぜほれぬしをかんがへる　可候

日暮里西行庵奉納即吟額面
白かねは猫こがねをば鶴へつけ　紀原

旅むかひ鮫頭にゐたはむかしなり　玉章
かはせのうちで紫屋へ拂ひする　口喜
浄るりひめの一ぞくをおとりたて　玉章
西行はしろねこむすめ黒いねこ　車道
じぎあひも時によりけり大一座　文集
品川をうらからそ丶るうら丶かさ　玉集
雨やどりこじきの中に中納言　如雀
目出度もらふ牡丹餅はかねが付き　如路
源氏もちつと解て來て病出し　芹丈
一年はおぼこに見せる金屏風　如雀
すべらずばはせをしなのへ行つもり　同
こほりのわたり初は狐と御用なり　清江
仲人の目がねとり出すだんになり　蔦故
三度笠目あてにふらり〳〵行き　口喜
赤合羽あしのしろいでとつかまる　清江
仲人はまあほうらくにみろと言ひ　和國
玉やのあげ初め曾我のまつり　清江
入り王をおつかたづけてせんを出し　紀原
そらだきをよつぼと釜の下でする　寸魚
たいくつさむげんのかねをつかふかの　串柹

大一座むり往生はじゆずをもち　狐聲
うぬ猿め／＼とそまはひだるがり　玉章
衣のたてもほころびる谷中道　芹丈
さがのおく能いしんあまが二三人　同
長命をこしたんめいなつかへ行き　同
口ちかひ湯かげんをしる左吉なり　同
風俗はけいせいていの御奉公　口喜
もんもうな蛙はまじり／＼出る　蔦故
むねわりに布袋和尚と關羽すみ　紀原

奉納の句々は是にかぎるとにはあらず、依て次篇に又々諸方の額面等をほこらさがしゝて著すべし、同好の雅子後覽を待給へかし、

文化二年丑六月朔日淺草新寺町於二西光寺一開卷
桃井庵和笛追善句合兩評點句百四十四吟
川柳風　催　惣連中
文日堂評
御靈山鳥も佛法たもつなり　古鳥
雲隱れから光なきものがたり　虵内

二ヶ國の間へ人橋かけて置き　丸龍
千代田村地形の度に鶴が下り　窓梅
したがふと紅葉の御殿出來る所　玉章
奥御殿墨畫にさびる御朦中　紀源
東方に瑠璃は叶ひし靈地なり　丸龍
佛法最初字餘りの額をかけ　集鳥
桐の光りで鳳凰は籠を出る　錦鳥
吉良びやかなるお寢卷が炭だらけ　玉章
きつい事笠木も見えぬ程に降り　五鳥
鬼のすむ山をやさしく一首よみ　狐雲
吉原を丸でかつたは文左衞門　柳雨
東西に鬮取の有る宗旨なり　孤雲
義を結ぶ上へ毛蟲がぶら下り　窓梅
侍の一粒撰りにかなを付け　如雀
花に啼ものを炬燵の側に置き　一徳
軒下へ花を咲せる俄雨　五鳥
孝靈に生れて今に二十ちなり　雨夕
九郎助の氏子百から三歩なり　東水
をしい事指を三本嫁は捨て　丸水
幾千代と思ひし嶋の時雨なり　竹二

武を捨て阿漕にくるり丸くなり　斗丸
秋吹けば草苅笛も哀れなり　東鳥
一蓮托生蓮飯の出逢ひ　雨夕
閻扇さへ右へ持せぬ孝行さ　斗丸
茶筌髮二番せんじに花が咲く　古鳥
寺々で産湯涌すと郭公　門柳
胴切りの名歌を取るが嫁上手　雨夕
晝三買ひをべら坊と親父言ひ　狐聲
結のしの書寐の上へ花が散り　霞朝
鐘のなる寺は築地か淺草か　邑市
殿様をよい〳〵にする美しさ　夢中
筋隈を出して親玉きめるなり　芋顔
嵐にはたちぎえのする燈籠客　雨夕
鰐口を惣名代に乳母叩き　斗丸
信玄の生れ替りはふてえやつ　玉章
さねの能い鎧着て出る女武者　丸龍
だんまりで聞た異見は身に染ず　柳枝
料理茶屋連理の箸を付て出し　李什
きつとした異見は障子の切張り　一口
和尚のくやみ中啓で衿をかき　カテウ

長異見鳩や烏をませて言ひ　車道
御持佛へ御寺を燈すきつい事　英子
うなつても氣にかゝらぬは藏の内　玉章
能い法事芳町へ迄花が降り　矢正
闕の地藏で笑ふまい〳〵　東水
ひよいと飛ついてはしごく善の綱　枡水
吸付て出しさうな見せ勸學や　登川
野暮で無い名は通天の紅葉也　丸龍
をしい事お月さまより一つ下　馬口
鹿の落角を喜撰は度々拾ひ　丸龍
あるへいを遣ればはにかむ芽花賣　窓梅
花をくれなゐにして仲人ひらき　同
をかしく無いに乳貰ひ笑ふなり　李什
暑い事ねずみに庭をかけさせる　斗丸
いんぎんに謠をしかるしやうぶ革　松人
負て居なさいと摺鉢かして遣り　川鳥
早いものだねと茶飯のふたを取り　萬舞
文殼で日々あらたなる枕紙　古鳥
江戸前の息子はぬらりくらりする　交鳥
是でかうつかみましたと綱咄し　五帆

小半町くんなと鼻をひくつかせ　玉章
ざん切を田町の床は待て居る　同
又玉やだとぬかすはと鍵屋言ひ　窓梅
玄翁は石泰成は尻をわり　狐聲
親鸞と弘法うら腹をゆるし　孤雲
言語同斷雜炊が腹へしみ　露舟
文錢を六文夜鷹くやしがり　玉章
兩頭の犬へ大せい人だかり　如春
股ぐらの報謝ばかりはお竹せず　狐聲
枝豆は氣の有る顏へ鞘ばしり　東鳥

窓梅評

音曲で極彩色の花が降り　雨夕
君子の爭ひで時服御頂戴　礫川
御寺號で時代の知れる靈地也　萬二
餅花の散る入相は芝で撞き　丸龍
宿かるなとはありがたい笛の音　礫川
野暮でない名は通天の紅葉なり　丸龍
靈山は鳥も佛法たもつなり　古鳥
ほとゝぎすしかも左りの大臣（おとゞ）讀み　美德
即菩提假名書にして名を殘し　礫川

二階住居の門番は文殊なり　孤雲
來年は又來年の櫻なり　カテウ
音樂の音色に名のみ殘るなり　東鳥
浪風を恪氣にたてぬ龍田山　玉章
寺參り鶴のたつのを見て通り　亭々
湯かげんを盜んだ鍛冶は片手わざ　丸水
ゑぼし首はねるとからし買に遣り　門柳
傘の供は後生のよいのなり　紀源
溜息を互にかくす廻りくら　美德
褄を取つては笑はれる若い尼　礫川
一字づゝ假名のはたらく十四日　丸龍
祭禮の喧嘩も書いた物語　五鼠
盜人は酒屋餅屋に借りが出來　菅裏
美しさ切落中あふむかせ　柳枝
何よりの紀念名主が判を押し　カテラ
御家中の舌にあたらぬやうに賣　柳雨
二十五の内にけいせいひとり見え　玉章
そりや梅の花さと言へど知り人なし　丸水
賣て遣る鏡に顏のいとまごひ　如春
げぢ／＼につひあさつてと紺屋いひ　菅裏

山門を魚鳥のくゞる放生會　竹二
極樂の先踏出しに西光寺　春駒
あきの方萬づよしとの御評定　丸水
欠びには善くさめには惡を吹き　美德
古錢買待せて鍵はどこに有る　スヾメ
きつい事茶筌で立る貞女なり　狐聲
風の穴まだふさがぬに月を喰ひ　古鳥
りんの音花嫁おやと云て起き　礫川
法の緣腰辨當で艘舟なり　門柳
大施餓鬼十六文の舟遊び　李什
色々に用立られる咳ばらひ　期程
天道樣がゆるさぬと人が云ひ　露舟
高縄の灸は他國の山を見せ　如春
もてゝも行く氣ふられても行く氣也　露舟
燒香に會釋のないが血筋なり　矢・正
子を呼んで因果ふくめる金屛風　門柳
淨瑠璃に笛を合せるきつい事　礫川
楊枝見せ正月ものを市に着る　連道
吉兵衛の有る評判記二朱で買ひ　雨譚
親元へ手取つた金は十九兩　車道

そんじ參らせ候と下駄を履き　一諸
蕪汁でなま長い額よんで居る　如雀
近くの他人朱と丈布取かへる　同
大丸は越後やがうへにたゝん事　雨夕
女房と乘合にするたから船　如春
三日には紙屑籠へ船を入れ　同
桶と花持つて定紋見て步行き　錦鳥
七種が過ては禮も拍子ぬけ　礫川
糖袋包みかつぱをそびいてく　古鳥
四つ手籠大悲のちかい道を拔け　五鳥
洗濯の糊が知らせる後の妻　スヾメ
佛壇で凧はせぬ孝心さ　錦鳥
水茶屋はとくしんしたりしなんだり　玉章
ぐわんにしくどく表具や珠數を出し　霞朝
夏桃は一つうつてもつみ直し　春駒
乘合に湯あがりもある茅場町　由之
あら世帶はづかしさうに紙を買ひ　スヾメ
讀み賣は何をふんだかうたをやめ　友呼
變生男子女だに土左衛門　菅裏
文錢を六文夜鷹くやしがり　玉章

念佛も四五遍入れる鯰汁　東水

誹風柳多留三十一篇終

誹風柳多留三十二篇

夫れ翁は葉の廣きを以て芭蕉と號し、俳諧の犬蓼も葉の廣き心にて題すとかや、近頃川柳は自らひげして葉のせまき心を思ひ名をつくるといへども、柳の枝に雪折もなふ、千歳の末迄流行する事翁にもおとらじ、其末葉集りて柳樽三十二篇を出し、君子の心をなぐさめんと願ふのみ、

千瓢菴　草麥述之

川柳風毎月連會角力　補助　初音連 カテウ　錦鳥　矢正

寛洲評

和らかにおつくちかれる山の腰　矢正

米をとぐやうに五の段さらつてる　美德

周公旦唐の練樂だとおもひ　礫川

蓙の蚤へい〳〵〳〵とつんにがし　孤雲
禿から出て大坂のおしよくなり　名葉
よけいの仕事かみゆひの角大師　カテウ
鉾先で突けば岩でも水を出し　矢正
句の反古で立圃は雛をつゝむなり　東水
鐵炮の干魚かぶとにそへて遣り　三枝
油あげさらつたやうに鶴が舞ひ　貫奴
南禪寺めんどうくさいもので喰ひ　東水
びんぼうの德は高野の山ばかり　竹子
孝靈の御代から夢にあてが出來　礫川
やくしさまたのみ藥種や向ふ面　美德
喰れぬ御馳走盛砂と番手桶　カテウ
傘をあけてすぼめてかして遣り　登川
おつむりをやつと入ると鳩がとび　古鳥
日本橋右を背と左りたそ　美德
行燈のかげから禿ひよくら出る　錦鳥
醫心があるので御所化ふ首尾なり　期程
一國せいばい振袖のひかあり〳〵　矢正
牽頭つらにはばち鬢がよく似合ひ　礫川
産綱のあんばいを見て笑はせる　同

釣あげて見れば魚偏とれた鯛　交鳥
鬮取がつれて大きな朝歸り　礫川
柳原七分通りは藏がたち　矢正
白鳥をのんだでちどり足になり　虻内
海坊主持にしやれと藤太いひ　柳雨
弘法は是が好だとあみだ云ひ　松葉
劔先はありんす國の方へ向き　如春
腐草化し人魂と見る小人島　狸疊
親父まだ西より北へ行く氣なり　儘成
てうちんや御出入れんじ窓でしれ　竹子
銅だらいくさりで繋ぐ江戸のゆや　草麥
信州へ地ひゞきがして日があたり　萬二
十月亥の日人形の遣ひぞめ　古鳥
小人島我子をおもふ晝の鶴　柳雨
弟子は子の如く勅使を二度かへし　礫川
蛇の舌でこがしをなめるあつい事　三枝
もうせんで死ぬのを稻荷ねがふなり　竹子
張形のあたまは御菜はり次第　錦鳥
もうこりたこりたと馬場で腰をもみ　丸水
一分出し夜の明る迄癪を押し　同

籾藏も立て千代田の榮えなり　龜鳥
岩屋のあんない銅壺をなをすやう　玉章
牛若はどこへ行くにも足駄がけ　芋顏
雪女あらしの中へすいとでる　カテウ
ばくだいの手柄生醉かむろ捕り　礫川
まへ帶は尻のためにはならぬやつ　古鳥
けちな口說やう拜むから後生　竹子
あつい事大蛇をかつぎ水を呑み　カテウ
つらの皮あつく唇うすくなり　矢正
いろを思案の內でして虎の卷　松歌
有りやなしやと振て見る角田川　名葉
白日としらずや猪牙に目をこすり　礫川

窓梅評

御具足へ百吟ひゞく太平さ　期程
鐘の音も息の音も出ぬ一字也　東水
御謠の日に鉢の木の賣り始め　五扇
おそろしさ御所毛たらけにして逃る　東水
葵には雷も敬して遠ざかり　虻內
春へ十日なつへ十日の花だんなり　錦鳥
舞最中けんもほろゝにあばれこみ　カテウ

末代もとけぬ氷りは片手わざ　紀鳥
ひつこみじへの振り袖を寺へ懸け　玉章
有がたき中に張日に食氣付　芋顏
雲紙へ御用をのせる銀世界　錦鳥
鐵醬を越したが跡の六づかしさ　雨譚
捨た氣で捨られて居る草の庵　期程
御曹子何所へ行にも足駄かげ　芋顏
雨あられ雪や氷りで大一座　東鳥
摺り鉢も箱も近江の土で出來　東水
汐汲はころんだばかり損はなし　儘成
能いぶんで近所の嫁をやたらほめ　スヾメ
きつい事仕付の儘でぶつ重ね　礫川
けいせいの素顏見てくるひしほ賣　東水
中なをり菰かぶりが禮に來る　東鳥
はづかしのもり島臺の向ふなり　市東
二つ宛返事をさせる三つぶとん　丸龍
鐵醬も嫁何もかもやすみなり　紀鳥
下女二度にぶつ付られる剃刀砥　丸龍
日向くさいがおいしいと梅が減り　枡水
風形りに羽織をたゝむ艘船　龜鳥

ふられた裏に寄合を付て行き　玉章
いそがしい女郎起てる隙はなし　名葉
豆大師鋏をかせに乳母こまり　柊
よく〳〵の事二間ほどあひるとび　礫川
油つぎしつかりわたすいそがしさ　同
淺漬の石澤庵のきんじよなり　丸龍
夏と冬とで本好の名が高し　期程
尤な望は牛のふぐりなり　礫川
むすこの月役も仕舞に五六枚　龜鳥
山形の星よけをして嫁をとり　門柳
番人に觀音を置く能い土藏　宣明
定紋の今戸へしれる能い暮し　スヾメ
やど錢に三がの庄の大きすぎ　霞朝
おびの派手まけずにやかん磨くなり　龜鳥
田の畔に禿のあそぶ神事也　玉章
松屋琴さはらば落んやうにさし　礫川
てうちんを消して螢をたづねてる　錦鳥
搔まはす味噌がなくなり御悦び　熊字
初松魚濱荻出合歯がたゝず　松歌
綿をかぶつて起たいとあくる朝　虻内

一か寺の大破紙くづ籠へいれ　丸水
京鶉（ケイアン）も契情ほどにうそつかず　柳子
云はずかたらず棧敷にも銚子の替り　五扇
内中に這はせた下女がつる根太　集鳥
寒い事團扇遣ひを餅やする　儘成
箱根の先から嫁の來る月迎ひ　雨譚
蒟蒻をめゝつこにする華の宵　丸水

見利評

浦で漁父山で木樵と化したまふ　錦鳥
住吉の琴は七十二度彈き　同
讀めぬ詩へさくらが散つて不審紙　草麥
紫はあさつてといふ色でなし　礫川
棺の用意をむだにせぬ忠臣さ　名葉
忠臣は漆くさいをとこなり　同
勾當の杖此上の片苦勞　孤雲
清盛もその日に夜食二度喰はれ　松葉
本望さいろはの數に落字なし　梅枝
馬印千なり桃でいゝりくつ　柳雨
三園の雨以後傘をかし初め　丸龍
京の寺雨がへをして江戸へ建て　東鳥

よし經の弓はあらめへひつかゝり　錦鳥
染色にばかり大坂からかはす　同
卯の花に三幅對の聲がする　礫川
金坊はどうしましたと狩人聞き　竹子
吉原はさくらさへ實は持たぬ所　登川
わしかへとはんどくやつとこちら向　礫川
重氏も寺號を聞かれこまるなり　集鳥
おもしろさむかふじまから女じま　寛奴
はな紙を褄と一所に持そへる　草麥
梅松さくら修行者の夜着ふとん　錦鳥
苗賣をよぶは地かりの立た跡　スヾメ
かみそりはへの字の穴へしまふ也　如春
御妾の親は役害長者なり　丸龍
閏年杓子の子なら匕だろう　名葉
新造はあんまの耳をちよいと引き　礫川
太神樂新狂言の出ないやつ　草麥
かやぶきのはそん虎ふのやうにみえ　有幸
何だかしれねえ中段に下女がゐる　五扇
西瓜の半掛略衣の天狗蒔　矢正
高どうろうはるばる虫のしに所　龜鳥

おならのそさういもじにも包まれず　松歌
やうじ見せひりたをされる仁王の屁　斗丸
去り狀をいたゞいてとるそのにくさ　礫川
御洗米女房その手はくはぬ也　柊
極ひどい施主方すゞめをどり也　有幸
こし元の大ぐわん湯殿山へかけ　矢正
はいふきが有るに唾を庭へ吐き　礫川
鎌倉の時代ねりまの鞭を出し　圓明
地獄屋は爰かと淺黄うら尋ね　蚯內
附木がゐかるむと駒込いそがしい　丸龍
水茶やを口說けばせゝら笑つてる　霞朝
じやくろ口のり地でこする矢大臣　錦鳥
なれつこになり前垂をしきやしよう　蚯內
はりがねをのめくつて出る心太　雨夕
家根舟の氣取でいざりひるね也　柊
願以此功德蓮のちやや紙が切れ　玉章

錦鳥評

荷ふのも成るも五穀のつかさなり　古鳥
むらさきはさらす垣根のそとで染め　カテウ
束帶の榎まで持つ王子なり　東鳥

はらは身のうちにはさせぬ國家老　名葉
山人をふり山鳥になびくなり　孤雲
通圓が茶屋で舊跡の道を聞き　名葉
北野へは行行のをば居て吟じ　カテウ
鋲打にきつねのをどる愛らしさ　松歌
八州も五穀も守護の御やしろ　名葉
鶯は時雨のちんをもれて啼き　雨夕
しんく亂るゝは糸やのしごとなり　虻内
門松もよめ入すればおびをとき　東鳥
晴れ切た出合ひ金時ふみあらし　矢正
かくれんぼしなのから來て見付だし　カテウ
御用意の雨具むような歌を詠み　箸水
ねだつてもないよと袋子にかぶせ　曉鳥
蛸のうつぷんを赤いわしではらし　紀鳥
龍宮のくわくらんあたまくさくなり　斗丸
うき草は歌でも居所おちつかず　龜鳥
びんぼうの片腕切て手水鉢　玉川
まはり合せで蛸を買鰒を買ひ　箸水
わんぱくさ金魚を買て料るなり　ヤナギ
神德で大尾は見せぬ年ごもり　古鳥

信心で金冠の名をのこし　窓梅
秋はさぞおやかましかろ喜撰さん　美德
花火屋は神慮にかなふ家名也　孤雲
べちやくちやがやむと柏が出來上り　ムク鳥
鶴と鯛鹿蛇百疋つちふくろ　一諸
蟬丸は見えん／＼となきたまふ　古道
五香をもらひ飯を喰ひ腰をすげ　春駒
鳳凰のたまご人參代で賣り　カテウ
桑名の娘ばつかりと明てうり　樂水
化せ／＼と黑助の御しんたく　白兎
遠い松よりも榎へかけて見る　草麥
はりまやは首を見當にかしかける　門柳
云ずかたらず孝行は上へ知れ　雨夕
抱替るうち剃刀を研直し　礫川
師匠樣千社の留主に五人ふへ　窓梅
草市へほうづきなりで飛出る　雨夕
石までも隱居の側にしとねなり　矢正
金輪寺二本道具で願ほどき　集鳥
糸道を見せて女房はじたいする　雨夕
椽の下忠と不忠と二人あり　丸水

かうやくのやうに千社の札をはり　登川
どぶ六とお傳はよるの友かせぎ　曉鳥
兩替屋一歩だめしに目が居り　カテウ
石灰は車のをどるたびにへり　福松
初午は賴みませうもとゞきかね　鼠走
惡る樽を入れてあばれる大江山　名葉
關が原てがらは笹をほうばらせ　東水
新世帶和らかに出來こはくでき　竹子
あつい事諏訪へまゐるに大まはり　窓梅
柳に〳〵やらしやんしたでもめ　美德
根ごとぬく紅葉車の齒止めにし　門柳
供の下女先づ吹井戸を先へほめ　スゞメ
人間をつかんで喰ふは按摩なり　白兎
拳をうつ仁王は五をで釋迦は三　至川
わか樣に度々だまされる御鈴番　柊

窓梅評

はんじやうさ二升にはかる土と金　東鳥
仲達は蕗や茗荷を味く喰ひ　丸水
有がたさ元は日本の稲でなし　東水
とんぼ切とは御味方に御吉相　松山

このしろの喰へぬにこまる緋の袴　斗丸
稲村がさきで二三羽餌をひろい　玉章
能い涼み御手前ものををどらせる　枡水
二つ宛水音のする中のよさ　玉章
きつい事茶やと座頭海老がする　龜鳥
よく德でないあきんどは張子房　名葉
かほばかり八朔らしい新造なり　矢正
九百人くらひがよつて碁を初め　竹子
錢のあなつらつとぬけるいゝちゃみ　礫川
逃水の巴にかはるはんじやうさ　同
さき〳〵のとけいとなつて小商ひ　曉鳥
虫一つ霜夜において集に入り　三枝
人丸も菅家も人に目を明かせ　スゞメ
伊勢町をだまつてかける初松魚　礫川
お局はちかいと奈良を貰ふ所　東鳥
小松菜を大久保千代のためしなり　同
鬼灯の文字は丹波でつけたろう　狸疊
簑ひとつ有とやさしい名はたゝず　錦鳥
いなりさま花火や二軒もちたまふ　同
釣針は和漢にたつた一本なり　カテウ

嫁入は枯れる田畑の色直し　芋顔
豐さはさい禮の武者見るばかり　礫川
杜若蛙だまつて云つける　丸龍
白象にのるまで面白い化身　枡水
執着の罪は寢鳥の目を覺し　矢正
同じ刻限に山を出海をいで　里家
さづかつた菊を三がの津で詠め　古道
松一本植たさかいで名が高し　三枝
正の字を正月染て二月建て　五鳥
勝頼はちやわん今川桶で死に　門柳
おぬしのは五月立ると母だまし　枡水
饅頭を喰ふもくはぬも忠義なり　三枝
行燈を男になれとかきたてる　鼠走
松へ首椎へ首出す屋形ぶね　錦鳥
預りものに世話のない松の內　裡斯
苔むした屋根に太鼓は死なり　矢正
金がないのとおもつたと太田云ひ　裡期
夜は來れども晝見えぬ杉の元　松葉
願書の加筆八十二軒でし　龜鳥
頼光公の上意だぞ山姥　寛奴

鎌倉は下から星の出るところ　東水
細見を持つて出雲へ御出立ち　松歌
御利生でしつぽは見せぬ大みそ日　芋顔
鼓が瀧は三河だとじやうをはり　門柳
初登山手引もなさる午祭り　カテウ
千社目の札にしこたま糊を付け　礫川
拔足でしやくりの藥そつとくる　松山
七十五日見世を引稀なこと　梅子
盲女に手をひかれ八つ橋わたる也　一德
遣り手が綾いく度取つても猫俣　礫川
扨むりな異見たましいいれかへろ　同
雷のそばへ腹がけほしておき　梅子
飯たきの通り名男女ともに三　森鳥
暑寒とも和尙素肌に絽の羽織　一東
まへ髮の中に目のあるつばな賣　礫川
かたばみの露かきわけてざくろ口　一東
是が越後やかとあねえうつたまげ　礫川
こうもんの會雪隱からにげる　松山
最う一と夜通ふと穴をさがす所　古鳥

見利評

神風の輔へかよふありがたさ　曉鳥
御社の杉も久しきためしなり　礫川
住よしの田から去年の櫛がでる　同
八景の一日に見える御城廓　雨夕
千兩が蜜柑五町へまきちらし　名葉
これは〱とばかり花は小菊也　松山
奈良漬に醉ふのはかゝり息子也　鼠走
燒酎で關羽が碁石ねえばねば　東鳥
御味を小鳥の尾からしりたまひ　東水
大丈夫國主へたのむ奉加帳　龜鳥
信玄は跡から枝を千本くべ　東水
銀世界山屋のとうふうりきれる　同
後から針妙へさす年わすれ　龜鳥
忠度は麓で七つ半をきゝ　梅枝
あたまからぬいてやさしく牛を打ち　箸水
大内の色事かんじ入て出來　春川
大悲の矢五百本ほど懸直なり　猿松
ばかされた名主いつでも能いきげん　三枝
をどり子の乘て見たがるせがき船　狸疊
搦手は裝束追手まつぱだか　森鳥

總花の立枯になるつらい事　矢正
鑓持の參詣もある十三日　五章
雨乞はあれど照り乞ためしなし　カテウ
神樂堂跡ひつしやりがはじめなり　柊
琵琶のはらから生れたのは摺鉢　春駒
紋がさかさと鎌倉の質屋いひ　同
幽靈はやはり平家も白で出る　松山
針貢に左りの袖を見せて立ち　礫川
龍宮の碇ゆで鮹など用ひ　雨夕
辨當兩役酒のさかなにすし　丸龍
うぬ惜い杜めと乳母くらはせる　礫川
奧樣の御馬も羊ほどくらひ　箸水
野馬臺の後ち十六むさしでき　行二
だきつかれるも入玉のおかげ也　交鳥
其跡でどぶつな遣手かけて見る　一東
あくたいの心から出ぬぼんをどり　玉章
竹鑓でぼさつの腹をえぐる也　錦鳥
半襟をかけて茶釜もげびる也　東鳥
木食は腰辨當に枝をさし　一交
午々と女房王子でばかされる　丸水

すごい風小天狗枝にしがみ付き　古鳥
つかはしめおそうか抔とせなあいひ　窓梅
黒油なべの化粧にいかけぬり　柊
外へでもねをれと母は戸をあける　龜鳥
白鳥は羽がへの下へひねりこみ　スヾメ
病人の手で尺八の稽古する　玉川
とつさんと雇ひ禿は芋を呼び　スヾメ
さいせんのそれ矢太皷がどんといひ　登川
胡粉地の紙屑籠を外へ出し　素人
風の神二百九日夜みやなり　龜鳥
花の會投込みといひしかられる　孤雲
わり箸に田舍大きにこまつてる　霞朝
ほこぼんのけつは赤子のあたま也　藻鯉
ぬき足でごぜの小便覗いてる　ムク鳥
猪子からかいゝ處へ手がとゞき　枡水
女房は小夜の中山生れなり　一德
年に二度旦那の釜を借て焚き　丸水

古鳥評

七つ目をしゆごし氏子にならせられ　矢正
再吟をしててつぺんの名歌なり　梅子

關東へひびきじやくめつゐらくなり　矢正
大あたり御めんの日數つるがまひ　礫川
なつの月其角はつゝみ金で見る　東水
ひやうろうが矢ざまをぬける花の朝　スヾメ
海陸の定木ははしの四方めん　矢正
請出して見ればひるまのほたる也　市風
鐃とぎかやへはひこみしかられる　斗丸
草市の跡をかたわなばつたとび　曉鳥
女房の穴へていしゆのひげをうゑ　三枝
鹿のせをわけてうちはや大さわぎ　東鳥
どじやう汁紺地に白きはたをあげ　虻内
えんさきの日を追ひかけて裾をぬひ　鼠走
客へ出すそうめんきつとかしこまり　龜鳥
寬永に三角なゆきふりはじめ　市風
さやの毛をむしつて靜しかられる　松山
そつ首をぬいておくばで嫁ならし　寬奴
長屋門馬喰町までかつぎ出し　草麥
ふじをいけどつて御庭へ五十三　礫川
げんやだなあたりに馬もたなをかり　スヾメ
だゞつ子のやうに御舟はうなり出し　曉鳥

引ばいでくんなと女房たきつける　錦鳥
かんむりとかぶとの間へゑぼし魚　門柳
村師匠山鳥の尾を立ておき　柳子
夏山と秋の田へ出るかんこどり　門柳
松を見當にこいで來てはぢをかき　礫川
意味有てわざと菊石へのんでさし　雨譚
とりおやで來るはいりくりえん女なり　丸龍
うそつきの達人駒木根八兵衞　玉章
つめられるむす子おやぢのいたみなり　丸水
りうぐうの出産ばゞあはせが來る　柳雨
店中へてつぽう玉が十五づゝ　柊
金ばくでげい者をかする市のきやく　霞朝
申上ますのはかまで弓をまき　柳雨
身をけがし捨てた操で旗を上げ　市東
一字ふやして百日はひげをなで　鼠走
是からは又小賣だと門をあけ　龜鳥
細工びんぼうまたいでも出來ます　柊
いんごうのけいこ小僧は死んだまね　市東
のりあかをすきあけあまは草たばね　龜石
よこづなはへのこに神酒を上げぬばか　春川

白鳥をろうかとんびがさらつてく　市風
ほしがふりますと雨戸をたてゝゐる　藻鯉
なめくじりとはしつぶかい蟲の事　一德
ほうわうは羽たゝきをして座をまうけ　松山
ふんだんにぬるなと下女へ百渡し　門柳
おたがひに用心をする手長島　竹子
やり持は下座をきるにも十文字　カテウ
うぐひすやうづらでものむたかのつめ　三枝
大名のしつぽをとらへどなたさま　一德
松前の屋根を値をするかんぶつや　東水
亥の日から猫の居所たかく出來　集鳥
みつものや命しらずが口につき　松葉
逆のみね入山伏がうへになり　東鳥

狐聲評

しらぬ火はあかるい御身の配所なり　門柳
しよかんにまけず御扇子はふくろ也　玉章
鶴をまと矢をいるごとく十三里　同
をしどりは水ぎはのたつふうふなり　藻鯉
法げんはくすりの內へ鞠を入れ　孤雲
ほとけにも本田神にも本田なり　虻內

母あんどむす子も嫁も月を見ず　松葉
ねん佛も他力はうけぬ御大祿　曉鳥
おだやかさ蟲で具足師世を渡り　丸水
しらなみが打と千鳥は音をはづし　龜石
權兵衛があしをふんだがうんのつき　市風
靑い手であたまかいてるそめちがひ　曉鳥
上げつまをうろこに折て嫁すわり　礫川
八橋を江戸はろじにもかけておき　松葉
うち死が奈良だと芝かうちわなり　一德
せい人ばかりだと獏はかつえ死に　虻内
三つぶとんのぼりつめると辷りおち　里冢
角力でもあるかと公家衆負をしみ　カテウ
將門の影はあづまに百殘し　古鳥
袖の下から手を出して繪をかゝせ　梅子
亥の日からねこの居所高く出來　集鳥
こたつではふかまのろまは水をくみ　矢正
千程もむちをあてると鶴が岡　礫川
帳のひもちゑのあまりでをつて出し　東水
大名の尻尾をとらへどなたさま　一德
かんざしへ一つ半ぶん紋をつけ　斗丸

小間物や來て床花をむしつてく　カテウ
くうかいと天海どれも野をひらき　玉章
祐天の外はけんびしばかりのみ　門柳
てうせん垣はひやうたんでらりにする　錦鳥
ごろ付て來ると禿の鮓が出來　古鳥
氣のきいた疊やたんすおもく持　猿松
目が覺て遣つたゆ水やつとのみ　矢正
けいせいのおこりも二十餘年なり　曉鳥
猪の早太くみしいたのは毛のはへた　森鳥
ほねと皮醫者も見所ないと云ひ　萬舞
兩方の手で大門を紀文〆め　柊
べんせつを七味にふる唐がらし　古鳥
くろい齒へあてる小粒はほまちなり　東鳥
十三は乘りて三十三は射人　春駒
抱た子をおぶつてにげるかつら川　竹子
市が谷は六番町のうらどをり　礫川
てつきうにもへざるやうなひぢりめん　草麥
はんくわいの紋とび口でやぶるなり　東鳥
いつとなく茶せんを後家は丸くする　連鳥
みそかそば殘つたかけはのびるなり　洸湯

三日月に十五夜の出る能い西瓜　竹子
すねた木の鳥居末世に名はくちず　集鳥
大はしへしゆびのそろはぬ塚を立て　一德
佛づくつてたましひはぬけるなり　森鳥
やどり木といふおはしたを御取立　孤雲
白雪糖一つ下のがとしまなり　森鳥
藪醫の年功やくどくを能く覺え　杣路
ふりよな事坊樣入水でげんぞく　雲譚
さいご屁をひるとやすちか斩止め　市鳳
兩側で小便をする柳原　ムク鳥
まんぢうに化ていくつもむしかへし　柳雨
すそのには人穴のあるふじびたい　丸龍
茶にかづけ呼でむしろをやぶるなり　門柳
てつぽうで折助あたま打ぬかれ　烏旭
皇帝のもゝにあたつて御手が付き　玉章

見利評

御蟲干日あしの通る八まん座　曉鳥
一升に少しならないにぎりめし　斗丸
命のせんたくしたんのさほへかけ　梅子
松の木をちよくしはかぞへ〳〵行き　枡水

ひづめの音を聞付て琴を止め　枡水
松風へばかり一首の立わかれ　雨夕
から木やへ下駄やをやとふ珍らしさ　玉章
きつとした女房ていしゆの名を呼ず　ムク鳥
ふり袖をはらがけにする御めでたさ　山湖
後の月見も晴やらぬ御後室　雨夕
あら櫛はふかくまゝ子の氣にこたへ　龜石
唐人も咲や姬には首つたけ　寛奴
行どまり一人わらつて歸るなり　狸疊
岩屋中わがもの面であんないし　古鳥
ぼんうたは地を鳫がねのやうに行き　鼠走
ぬかを片手に乳もらひをよび戻し　名葉
ためいきをすみつこへするかくれんぼ　古鳥
ひやあひの桃の木でまた月も見ず　虻內
馬のくら人のしよつてくばからしさ　名葉
糸まきの繪の出る頃に袖をくけ　狸疊
門徒の外はひやうとくで買て喰ひ　森鳥
大だはけかけ喰にかち三日寐る　矢正
禿から楊弓ほどなはりをもち　曉鳥
水むけも一荷でたらぬ泉岳寺　葉石

南無女房さびしくおれもひとりねる　名葉
へぼ將棋王をなりこむせいた奴　雨夕
どの子が目好古市のをどりなり　松歌
よしつねはにべのはなれた弓をもち　鼠走
座頭のかゝあびんずるとだれか付　礫川
傘は軒下下駄はかまのした　ムク鳥
ねん佛こうの本くじを取つて泣き　礫川
足音にをどる貧寺の佛たち　森鳥
けちな御座しきをどり子ごみにむせ　竹子
いしきをなでちやあいやよと芥川　錦鳥
ばからしいいやよとくらい方へにげ　梅子
羽ばたきをして挽臼の禮をいひ　キメイ
入相の鐘つく〳〵とむふんべつ　柳子
ひぢつぼが一つで二百五十兩　矢正
女に目のある男はむさしぼう　柳子
ひるねする天狗のはなでせみが鳴き　柳雨
一本づゝあつめ僧正うちはにし　集鳥
雪のはだ鹿の子まだらでねつかれず　矢正
愈された外科に花嫁かくれてる　狸疊
うでへ名をほつた女房は子が出來ず　志水

さかさまないわしを伊せやきつい好き　松山
白鳥を廊下鳶がさらつてく　市風
てうちんで餅についてる行たをれ　松山
水かゞみ山伏に見せ田うゑなり　玉章
十番のわきに子捨るやぶもあり　草麥
御脊中をきつく流すが返事也　錦鳥

スヾメ評

佛作の世にゆきとゞくいろはなり　虻内
時鳥能い月星のすでむまれ　竹子
水ぎはのたつは豆州の彌陀如來　草麥
ぶつぼうのはじめ垣根の雪をうり　藻鯉
野にあれど色はそまらぬざんねんさ　東鳥
おいたづら一村竿にはがたゝず　東水
山吹の垣口まめなともへゆひ　錦鳥
日本へみやげ木くらげ二三俵　斗丸
神木へもう〳〵にくい時まゐり　市風
しはいとこ櫻もちびり〳〵さき　紀鳥
いゝつらのかはだから又よびもどし　丸水
わざはひの門ちやうほうな所なり　梅子
かごの鳥どうしんせうと泣て居る　如石

猪牙と釣舟兩方でべらぼうめ　一徳
つき出したやりうけとめて御手に何　寛奴
たいこうりむごんで歩きやかましさ　其笠
かつぱをいけどりさて餌にこまり　長蝶
三日月のつかない前を繪馬でしり　ムク鳥
長のしに成て出られぬ席へ出る　竹二
ゆきの居つゞけふりこんで女房くる　礫川
ゆうれいはえんせうくさくきえるなり　カテウ
蛇は百二十疋出てせめるなり　市風
三軒で米つきのくふしけ上り　丸龍
水ぎれのかつぱは目高あごで追ひ　松山
ひやめしで手をやく人の世話をやめ　カテウ
おろち程好で娘を二人りのみ　連鳥
合槌は狐むじなは火をおこし　萬舞
もんがくをはさんでやれと平家がに　市風
梅がえはそれから飯をほつて喰ひ　龜鳥
花ぐもり嫁清正を供につれ　寛奴
しやちほことくじらもやひの橋かゝり　紀鳥
よし經は海せがきでもすればいゝ　長蝶
とゞくかはしらぬが好な手向なり　市東

三味せんの手でもなん所は山盡し　竹子
よしもりにともゑ尻からいけどられ　金勝
流れ官女は御所女だろう　松葉
出來る内あみだはひかり／＼待　蛇内
國がらにゝあはぬ宮はかけながし　矢正
あさかへるてい主に黑いはを見せず　東鳥
極月に二日鳩は家根ずまひ　ムク鳥
をとこ一疋まな板へ横にねる　連鳥
馬鹿あそび跡で障子の穴を張り　一徳
人形の所作はおまつり前の事　蛇内
五兩取る場を百文の小うりなり　斗丸
古い程かんにんぶくろつよいなり　露舟
あばあばしやれが持參きにかゝり　矢正
はらませたやつはとつくに陣を引き　木葉
さげ重はおもたく成と又おろし　龜石
けだ物の下方馬とたぬきなり　長蝶
唐人は平の竹輪をくひのこし　市風
すいりやうでつんぼ座頭も貰い泣　霞鳥
下戸ござれ上戸もござれいゝおいれ　矢正
捨られぬ指で妾はむしられる　カテウ

江戸のまん中に人鬼立てゐる　市風
大部やで牡丹をなでこなしてる　萬舞
忠義にはすねにとりゐのある男　市風
消しずみの茶わんへ出來る時鳥　有幸
見せ中で下女をひつぱり鰒にする　木葉
歌のゐまはだまつて草をくひ　蛇内
へん生男子ごくらくを拔けて添ひ　一德

三交評

さんごじゆの伽藍にるりの御本尊　春駒
護持院の靈ほう井出の花ざかり　カテウ
まつせまでほころびはせぬこけ衣　里冢
御建立手の內ひらくやうに出來　東烏
大たばな手に葉で啼たほとゝぎす　礫川
杖になる草を柱にかりの堂　三枝
田毎より家ごとにうつる名所也　矢正
淺草寺御門五日と十日なり　草麥
不二山にかたを並べるあまざけや　金勝
おしろいを付てよごれる後家の顏　雨夕
斷りを雨乞共に百度云ひ　美德
荒うちの日はさげ繩でひつかける　猿松

今日の碁に御かちと海を詠てる　左橘
ころりんちやんとだまかして始皇逃げ　礫川
五つ目のくわんうりやうぢに佛師來る　スヾメ
しらぬが佛おがむはなお竹どん　雨夕
錢をかむやうだとさしみ女房喰ひ　礫川
拔て取れぬ去り狀を松でとり　玉章
常の汁もるにもまりこ手品する　古烏
かんどうはかはづに水のかけ納め　市東
芝居の雪は犬よりもひつじ好き　門柳
大門は片手わざにはいけぬなり　期程
御供廻りのそろはぬは桃太郎　里冢
よし貞の士卒あらめでつんのめり　東烏
くわんぜおん爪をとるのも一仕事　森烏
ついせんはよろこぶ水の手向なり　志夕
かみなりと風が觀音びらきなり　一德
月夜にもとられぬ釜へ水をはり　市風
せんたくに聞て行野の鬼のうち　三枝
めづらしさ耳から鼻をつゝこぬき　錦烏
御下屋敷にいんがうの美しさ　雨夕
居つゞけの陣へ女房の矢文くる　萬舞

龍宮はどろぼうあまと大さわぎ　千里
内だんのとなりへしれるつんぼどし　玉章
吉原のたまだなを見る盆しらず　鼠走
さいたいのめんきよもあるで穴かしこ　カテウ
美しいぢさんは紋もだきめうが　交鳥
眼と指と十づゝよつていつ付る　期程
ていねいなぶんで衣は袖だゝみ　登川
秋茄子はしうとの留主にばかり喰ひ　箸水
千人め七つ道具をらりにされ　古鳥
山しなへたつた一軒吹にゆき　笑草
こは飯にしほのないのはあはれなり　三枝
大黒をびんぼう神と納所云ひ　寛奴
不孝もの母に夜ざくら詠めさせ　スヾメ
けさを見てから盛遠はしゆつけする　草麥
信玄のざい世あんまに事をかき　東水
しづむときねん佛のうく風呂の中　斗丸
門へ出て母あんじてるおそざくら　門柳
敷初はそばやがいつちはやくしり　枡水
むづかしさならはぬ旅の十三里　玉章
熊坂は名までが今に法度なり　柚路

目ぐすりのかんばんは呉でかけはじめ　枡水
くわい國はとんぼのからだ中あるき　玉章
しやうきでは鬼にあはれぬ大晦日　龜鳥
雨もりで百萬遍はいびつなり　桐子
ふうふいんきよ高砂町はきつい事　ムク鳥
ぐんじゆする田植はお住お吉なり　錦鳥
むかふじま里にはなれぬ魚類也　古鳥
蓮の茶やにごりに染ぬつらで出る　素人
はちす葉のにごり紅裏しみだらけ　柳雨
魚籃さま御つかひがらといふすがた　二三
大ゆきにぬれ手で粟の三ヶ國　龜鳥
在原はてんやの味をしらぬ人　猿松
子の死だやうに左兵衛は泣てゐる　宜明
歌舞伎見ながら人形のおもしろさ　吉川

狐聲評

極樂は明き手の方と地藏尊　柳雨
わうごんは三體伽羅は我一人り　矢正
ながいゆめ覺ればはすの臺なり　同
經文を八つに分けてうりひろめ　葉石
泉の壺と引かへたるりのつぼ　錦鳥

ふきがへをせぬと御幸のある關所　連鳥
ゆうとさい有つて一城持こたへ　狐雲
年號は長い間にふたつ化け　篝水
おもひ出すものでわすれる草をむし　竹二
紅癍でゆうれいの出た九品佛　玉章
若後家の水晶胸がすきとほり　龜鳥
白粉を付けてよごれるごけのかほ　雨夕
おうしろへみちびきたまふ觀世音　狸疊
無常の風にさそはれてとうになり　雨夕
うぐひすに出て谷股のほとゝぎす　曉鳥
御手水に龍のみけんをひんねぢり　丸水
三度引こしてけん人仕立上げ　柳子
おつぶせた升をひがんに母もらひ　三枝
中日に仁王のあたま踏あらし　草麥
いせしまへ或夜おそめはぬけ參り　鼠走
久松は主に忠の字逆さにし　東鳥
秋毫のすへも見分る程に冴え　一德
うら島に岡ほうづきをねだる也　集鳥
かり門はやつぱり一つ桶のたが　洗湯
一本も並木の見えぬにぎやかさ　丸龍

いつち琴がしらべにくいと天人　春川
三日月さまに買あてるけちな晩　雨夕
ひらのねは傘も一寺のたから也　カテウ
ぞうりうちいざ立よりて見て行ん　志夕
つき出されと云つて禿は叱られる　期程
西が原あみだには能い地名なり　カテウ
日の影がさすとねて居ぬ雪の竹　古鳥
花のあすまくをほしてるざん念さ　東水
大なん所しゆもくの杖をかりてこし　桐子
園女は着るものまでもかくしうら　桝水
初會の夜まづ商買と年をあて　二三
玉の寄る所へ目のよるまがきなり　カテウ
たまさかに遣り手へうれる女たび　虻内
御めかけの歌書は枝折にばちを入れ　雨夕
夜ばなしは日和をほめていとま乞　紀島
しほのかたまり評定の度にへり　同
八月閏で月が拍子ぬけ　有幸
むすこには衣もん親父に鬼門也　春川
をん靈は累ねて來ないお十念　玉章
泣くのをば勝手で笑ふからしかき　志水

みがきぬいたかゞみを遣ふ碁の義理　龜鳥
三人はいつこくばかり云つてなめ　雨夕
時さつてせいたいを出すちやせん髮　梅子
獵人のねんぶつ玉がそれた時　松歌
笹がにをみすへ包んでこゝろまち　枡水
足元へ一つ巴の風が來る　紀鳥
引汐は水さししほは湯のたらひ　東鳥
手を附る時も手を切るときも金　矢正
水向けをするもへらした女房也　早我
折介は神慮佛意に叶ふ飯　白兎
荒神のたゝり三つ子を下女孕み　雨夕
張高はしかも馬だと湯やで云ひ　市風

俳風柳多留三十二篇 終

俳風柳多留三十三篇

川柳の名は、さきに草麥子の序に、其葉のせまきをひげして名づくといへども、かの廣きばせを葉にもおとらじと、實にや萬石つむなる大船も、柳の一葉より工せし事にして、海内へ此道の大いに連送流行する事、柳が一派の功にあらんと、いさんで三十三編を著すと菅裏言、

川柳風前句合　補助　初音連 カテウ　錦鳥　矢正

接齋評

お扇子も虎も五日の風おこす　礫川
おだやかにして鳳來へいらつしやり　玉章
出家侍かみなりと鵺に召し　春駒
家老職紅葉をぬいて車留　雨夕

御歸洛は勅免がなくて雲のうへ　玉章
紫は千とせをつかむ御仕着せ　志水
跡は野とならず大きな海となり　春駒
夫婦別あるは櫻と梅のうた　柳雨
重代のゆづりものにはぬかぬ太刀　市風
三日の夜月もろともに御退出　雨夕
ちつぽけな口で大きな山をよみ　柳雨
金の牡丹を一と元は根分をし　白兎
玉座へ津浪花活がおつたをれ　紀鳥
夜の鳥射た御ほうびに夜の伽　玉章
間數は射術里數は馬術なり　春駒
地名を一字喰に出てつながれる　玉章
御大祿六尺田舍間をつかひ　矢正
京の傘手がはりの無い坊主持ち　古鳥
八百に鯛四百にはつるぎなり　孤雲
雪にかけ霞にはづす諏訪の橋　里冢
ふてえやつ河内木綿を旗に染め　カテウ
ごかひをかつて一戒をやぶるなり　春駒
衣食住そろひ代金三歩なり　柳雨
鈴虫はぺん／＼草で音を出さす　玉章

手紙には氷うつはに水を入れ　玉章
藤づるがからみ鳶の巢おつことし　東鳥
普賢でも有そうな所象頭山　集鳥
十三日梅へうぐひす籠をかけ　玉章
御感狀外科の縫てる處へ來る　九龍
首洗ひ井戶には吉良が浮て居る　白兎
白浪は三峯山をよけてうち　市東
はしの步斗りついて居る初の客　期程
ひよく染晦日に月の出た處　里冢
猫が引あけて兄氣はなまりぶし　矢正
空どけて天人しごき襟へまき　東鳥
雨あげにして若い者はなしてる　春駒
ひつたくるやうに嫁菜を姑つみ　里冢
三會目花のもの云ふおもしろさ　古鳥
つれ／＼に蛸の入道ひとり入り　柳雨
姑の角にぎ／＼でおつぺしより　龜鳥
猨のふわけ狩人二歩ひろひ　葉石
榊かと又だし貰にのびあがり　柳雨
賴朝の兜拜領してこまり　振袖
鐵針を師匠まつかにやき直し　卜丸

竹之丞じふん虎やも見せを出し　柳雨
かみなりを這入り電なりに抜け　錦鳥
油うり鼠の巣ほど持て來る　長蝶
惠比須から夷の間へ火鉢出る　玉章
嫁子がら里より鑓をついて來る　同
美なる罪人鳥籠へ三とせ入れ　同
すう／＼／＼と秀郷は客に行き　同
迷ひ子は一兩出して内が知れ　葉石
百兩あるとかうするともたぬやつ　虻内
十萬八千把線香をたてるなり　期程
股ぐらの首がぬけると金谷なり　松葉
ごみをはくやうに田樂みそを付け　春駒
はちまきが落ると藏は頭痛なり　龜石
氣のどくさどもり牡丹をやたら誉め　礫川
化粧水とつた拔売たびへ入れ　竹子
組留て見て忠盛はべらぼうめ　森鳥
袖の梅田舍もやうと下女おもひ　礫川
土間の春をわける仕掛の俄雨　春駒
あかぎれの田へかうやくの雨がふり　如春
松茸で下女はことしもいなり山　期程

横竪になつて天狗は口を吸ひ　龜鳥
一刀三禮大黒の腹ごもり　カテウ

狐聲評

海からもつくりの雪を御獻上　矢正
胎教の爲に三韓御征伐　枡水
晴天の御膝へ這入る帆懸船　春駒
御相手の鶴へ溜息ほつと入れ　古鳥
三枝ほどうへに柚の子孝行さ　曉鳥
襠でわたる戸山の大井川　龜鳥
いぢらしさものすごき月子にをしへ　玉章
御手打になつても消ぬ御諫言　龜鳥
いゝ天氣高田へ富士が二つ見え　東水
吉原へ弓を引いてるかゝしなり　藻鯉
八朔が濟むとちら／＼雪の質　東子
寐耳へ水の奏門を近江する　玉章
せめてもの孝と勤の灸をする　ヨコセ
鶯はむかしのまゝの感應寺　曉鳥
歸洛して夜も雨風が耳に付き　柳子
隨神の一人りとし寄朝臣也　古鳥
御くさめ御小袖を召す吉野丸　枡水

蝶よ花よと夢を見る十九年　一徳
竹之丞時分とらやも見せを出し　柳雨
詫言がすみだ川さともうしやれる　礫川
御家督を浮木のごとく家中賀し　カテウ曉鳥
をかしさは聟の來る日に小糖雨　長蝶
釣針のやうなかしくで客をつり　雨夕
わたし場で松の摸樣と追人聞き　市東
入のあるうちは敵をうちもらし　里冢
天命を知つて新造買に行き　虻内
二十九の暮迄孔子いざりなり　竹子
つよい風籠字の雷が家根へ落ち　美德
早馬はあんだんべいとすゝきうり　集鳥
年寄のくせにひや水番所なり　有幸
山吹を桔梗へ出したにはか雨　柳鳥
跡釜が出來ると兄は飯を喰ひ　同
御藏前閻魔の側で地藏顏　東鳥
草ざうし買て道々けつまづき　期程
玉と鍵春と夏とでにぎやかさ　古鳥
持參金松川菱の惣摸樣　磯光
平家のをんりやう湯でゝも赤くなり

敵役ばちのあたるをねがふなり　卜丸
ぬかるみへ鼻緒が切れてかしこまり　連鳥
百疋の馬は質やで利をくらひ　柳鳥
下女の名の暦にあつた日にかゝへ　雨聲
はた／＼の燒ものゝつく蕗の平　孤雲
氣ばらしに判取不二をのぞく也　玉章
天德寺そうこう院が買に來る　孤雲
大たはけさつた女房に五兩出し　枡水
汁椀へ家根うらを盛るしはいやつ　霞露
とのさまの馬で乘出す御こし元　雨夕
吸物のなかに花柚が咲て居る　其笠
これが弔ひいくさだと大一座　春駒
歌がるた袋の鼠嫁はとり　玉章
川岸へなら舟のはずだに馬をつれ　一二
桐に鳳凰通賓に夜だかなり　川章
部家頭人をころして酒を吞み　卜丸
紅粉猪口のすりこ木にする藥指　如春
新世帶灸を無にする出來心　覆露
盃へもやうのふへる花の山　有幸
孝よりも忠義は二十三多し　長蝶

冬牡丹麴町から根わけなり　柳子
鈴虫はべん／＼草で音を出さす　玉章
鐵釘を師匠眞赤に燒直し　斗丸
花より外に知る人もなし落馬　長蝶
武道でしばられ文道で解かれる　里冢
花さそふ所で聟は立ち別れ　東子
新造は豐島に醉て櫻色　龜鳥
紺染はよごれつぽいとこなや云ひ　葉石
おふくろを二人り定家はすゑて置き　里冢
同じ字を雨雨雨と雨るなり　同
もれ出る月明らかに小豆飯　虻内
河東ぶしいづれ新造買の類　斗丸
金箔の付くはお乳母の庬相なり　竹子
蛇の道を女の知るは絲と針　一德
池と堀どぶにもきよき蓮花咲き　市東
針賣を呑でうはばみ狂ひ死　金勝
すげかへはほそい煙りのわび住居　カテウ
爪に灯を燈す跡から息子消し　振袖
湯豆腐はみそひともじで喰へる也　孤雲
螺吹にふかせて見たいほらの貝　寸尺

爲になる大黑の有る小石川　竹子
三人の春中へ桃のやにがつき　東水
道具の鏡具を取れば天下一　龜鳥
ふかまをつれて鍋や横町をまがり　田龜
茶釜に化て狸はこまるなり　錦鳥
石見の國に一疋もねずみなし　白兎
馬鹿は尻利口は目から鼻へぬけ　一德
碁の留主へ間男うつてがへに來る　スヾメ
いゝかくし所に海士は氣が付かず　雨夕
小舅が側で焚付けいぶさせる　ヨコセ
使だにこま／＼／＼とごせは呼び　桐子
馬の沓横に歩行く名がのこり　金勝
女房の引ずり亭主餅につき　連鳥
五六寸入れて十分きまるなり　磯光

東鳥評

音曲で御心も晴れ闇もはれ　龜鳥
犬千代はおはを萬代御獻上　草麥
金づくになると島田は川支へ　古鳥
九代目は〆りが無いでおつつぶれ　千重
軍中へ和漢名高き乳母子守り　矢正

御刀も氣も短いに長ばかま　春駒
東海の波打ぎはで蜘はきへ　礫川
不老門すこしひねつて萬よし　カテウ
ひみつにもぬけめの有が玉に疵　美德
ぶち殺しても物を云ふ猫をくれ　紀鳥
やはらかな嫁桒姑の御歯に合ひ　龜鳥
垣が笛吹くと木の葉が舞を舞ひ　市風
身共義と云出しさうなひきがへる　溪住
こつそりと呼ぶ蛤のむし直し　矢正
あさり川岸磯邊の宮の川邊り　曉鳥
むだ書で還俗させる石地藏　竹子
筋隈の魚あつがも無い直段　春駒
石垣へ田の字を所々出し　市風
座敷牢工手間も晝夜三歩也　礫川
風鈴の下に一文世をのがれ　曉鳥
瘦たいもいんぐわで車嫁廻し　龜鳥
閙しい時はごまめもとゝ交り　川童
まんぢうを箱入にして毛をはやし　寸尺
手代にも正札附の呉服店　玉章
猿若へ七つ目をつむ賑かき　柳鳥

雪隱であふむがへしの咳ばらひ　市風
いかの腹鳶と烏と鷺を産み　柳鳥
えぼし首皿へ落るも吉日よ　藻鯉
僧正の切株へ出る榎だけ　古鳥
火ちりんへ合せて買ふはけちな鍔　竹子
駒下駄で出るとそこらでころぶ也　里冢
物さしを先づ手がゝりにおつかくし　矢正
據なき義と母は矢をひろひ　スヾメ
ひよ鳥を追つて柄杓の柄が拔ける　一德
冷飯を二合半ほど窓へかけ　斗丸
南風よく上るのは坊主凧　矢正
うさんくさい匂を亭主かぎ付る　カテウ
しぶつ柿よろこび鳥門違ひ　玉章
婆あは川へせんたくにせがき舟　桐子
藥取八百やへ寄るが初日なり　丸水
せんたく亀相内陣をがませる　曉鳥
花道へ糠みそ程なふたが明き　竹子
よは將棊雪隱へ入れやたらひり　龜鳥
坊主持石の地藏へ置て逃げ　古鳥
玉美なり十五の城をかたむける　木雅

鳴子から御使の來る長つぼね　如石
水犬のやうに前髪下女は切り　溪住
だんびらへ反りをうたせる具足櫃　如石
初鴈やいゝ元手だと不風雅さ　玉章
佐保姫の爪を取る日に琴を止め　古鳥
澤庵のおしが取れぬで下女とらせ　振袖
紙雛に角力とらせる男の子　二三
お祭をわたす向が榊原　連袖

門柳評

天然しせん武の藏へ武を納め　玉章
天地人そなはりたまふお夢也　孤雲
神慮にも若い男浪は面白し　礫川
日本の譽れ智有虫義有虫　玉章
御苗字も紋も先祖の御愛木　礫川
八重垣に結び直される山の腰　スヾメ
日の初め座附は月の御獻上　丸水
通し矢の未明に拜す富が岡　スヾメ
孝行のうつたへに鷄おどろかし　玉章
御領分田から鼓をすぐり出し　竹子
弓は涌き太刀では汐が干て仕舞ひ　錦鳥

發句ほど假名を預ける和歌の家　丸水
かすかへ山で〆て鬼の門　萬仁
ふきげんで平大名をおもてなし　柳雨
事足らぬ神樂聞き／＼田を植る　孤雲
ふきと云ふもめうがと云ふも御大祿　春駒
いた手に屈せず盤西の闕を越し　カテウ
定紋に后上げ羽の蝶をつけ　矢正
琉球の口にはびこる金ぐつわ　志水
白水をこやしに菊を植たまひ　美德
本望さすへ字を京へ飛脚也　玉章
まゝ親は花まゝつ子は月に啼き　枡水
二十五の內から一人り八文字　礫川
鯱はばらふの笠へすき通り　斗丸
其罪をにくみ其人母にくみ　期程
文道に武道を加茂の御祭禮　三枝
風鈴の下に一文世をのがれ　曉鳥
金はゆづるが紫はゆづられず　カテウ
筏乘片道竿をかつぐ也　東子
松はぬらさず山吹はづぶぬらし　錦鳥
今焚た紅葉六位の顏に出る　一德

人ませば水ます駿河遠江　雨夕
かつきりと鍬に火の出る古戰場　同
年號は名酒にのこる孝の道　同
あごの行く方へ禿は廻るなり　斗丸
目は無いが耳をそろへて持て居る　升二
木村預り大坂の冬角力　錦鳥
わる工みつぼ井の水へ菊を生け　カテウ
赤坂の虎は七里がかぎりなり　松山
飯山が有つても江戸へ喰に出る　孤雲
綱をゆるめぬ門番に御閉口　礫川
仕つけ苧は又くちびるへ立かへり　曉鳥
双六の關所をやぶる男の子　里冢
ほんとうの流官女は壇の浦　千重
品川のきぬ〴〵山の帯をしめ　孤雲
むめう院聞にかへつて呵られる　市風
唐人の紙くづ拾ひ虎がほえ　葉石
追はぎの案山子迄はぐにはか雨　龜鳥
勇しい鷹を雀が出てとがめ　三枝
牛に馬のりかへる内三つふけ　丸水
三世をも一世へらして相談し　草麥

越後の車に甲州の馬は逃げ　ムク鳥
つんぼの急用やれ硯〳〵　柳雨
東海の道は唐でも蜘が知り　龜鳥
桃の木の下で文殊の智慧を出し　三枝
出がはりの後をにごさぬ一手桶　古鳥
石橋の初日二十日はいゝあんし　登川
此くらゐ抔と三本嫁が見せ　東鳥
月は程なく入りかへのむづかしさ　寶玉
火廻しに日あたりといふ紺やの子　柳雨
もゝ引にのり地が付てしやちこばり　左逸
椎の實の下からもゝんぢいが出る　千里
樂や番岩をむしつて鼻をかみ　龜鳥
蓮飯をとろゝで二人り喰て居る　春駒
ほんにくはへて引込むと蓮の茶や　東鳥
呑こんだ入歯おかはでいせや取り　溪仕
村出逢させもが露にぬれるなり　白兎
陰陽のふいごでとつこ出來る也　カテウ

狐聲評

繁昌さ舞へども下りる席はなし　矢正
虎の後竹の園生の御座所　孤雲

こん龍のひそまる程にひどく鳴り　枡水
三面を刻で一面御手に入り　古鳥
店ものはひよみの酉が別れ也　青山
巻がみもめつきりやせる月の前　矢正
色といくさは紅白の物がたり　雨夕
突出しへ竹乗込みへ虎をつみ　矢正
棒組もなしに武勇の戻り駕籠　カテウ
藤棚は九十九軒につるがはり　集鳥
呉服店符牒で譽るいゝ女　榊鳥
元吉原で如露を買ふおとなしさ　如雀
振もぎるとは面白い別れやう　東鳥
齢ほど枝をついてる一つ松　萬仁
星のふる夜は唐崎も松ばかり　丸水
借金のふちへのり込む三谷舟　大京
丈の無い國に七里と九十九里　柳鳥
大の字を下から拜む與の院　同
言べんに寺神國でたつとまず　矢正
犬骨をつてたか取のお家なり　菅裏
熊坂は物見の松の下で咳き　萬舞
顔に火のもえる筑摩の御祭禮　松歌

生酔の出來ぬしやうか御祭禮　期程
身についた鍋は持參のほうつぺた　竹二
兄弟で書のしを喰ふいぢつぱり　山麥
富士山のあたまを押すは雪ばかり　礫川
八重垣は三重に作つて妻を入れ　龜鳥
鈴鹿山五百矢先でいゝところ　孤雲
●鯉二本人味御供に成るお寺　東水
だめをさす頃斧の柄を羽蟻立ち　柳雨
手傳の無いは行野の道で知れ　白兎
親鸞は川越日蓮波のうへ　連鳥
善惡の釘はそてつと杉へうち　竹子
姉の手をかりて妹客をかき　柳鳥
品川の星へ新田のそれや來る　如春
門跡のひばらへあたるてつぽう洲　連鳥
肴臺きり〳〵〳〵とかしこまり　二三
下馬札をした馬と讀むげびたやつ　雨夕
子天狗の呑ほどわかす鍋いかけ　如石
江戸町で賣切つて行く初松魚　玉章
袖口を服紗さばきのやうに折り　草麥
松前の踊る拍子もおつとせい　錦鳥

行燈のうら店で下女針仕事　孤雲
出口のかんばんだれにもなびき候　登川
井戸端で向ふのかこひこすられる　振袖
手の筋を買人に見せる目鏡賣　桐丸
金紋が付いて枕はげびるなり　丸水
彥の名を八十八と付嬉しがり　其誠
禿から桃色ほどなうそをつき　葉石
振られたも知らで女房ふり付る　柳子
御產所をみんな取あげばゞあ也　市風
蓑箱のやうなたがやの道具箱　東子
ほうろくと仇名のついたはへぬ乳母　集鳥
不自由にしの字を遣ふもの忌ひ　草鳥
油やはしの字にまけをたらすなり　如春
放れ馬雨鐙取るふてえやつ　雨夕
喰ふ蚊よりくわぬ蚊や泣ぶち殺し　礫川
かはらけの深草になる緣遠さ　錦鳥
御祭をわたすむかふが榊原　連鳥

斗丸評

紫の硯へうつる秋の月　雨夕
不二へ登つてゐちごやはどこだろう　紀鳥

討死のかくごは眞田紋で知れ　矢正
上げ足を三階菱で取る氣なり　吐聲
鬼は外福は內とは今戸なり　スヾメ
其當座母より熊を戀しがり　森鳥
腹わたで正月ものをすしや買ひ　竹子
氣は晴ねえが腹のはる內の月　紀鳥
三韓の王は雪見の度々御幸　草麥
孝の道橋をかけるも安大事　柳雨
清盛は末期に水をあびるなり　志水
芋つなぎそばは離れぬ中のよさ　三枝
死ぎはにもう〳〵ほしい三つなり　金勝
米つきに見せる大根の干あんばい　曉鳥
小人島いつも盆唄うたふやう　清風
ひやうそくで時參りする伊勢女　志水
おつとめを和尙地獄へさげるなり　ヨコセ
駒込は一不二二鷹三茄子　柳鳥
江戶前の相手になます賣たやつ　振袖
お足を出すは蘆の葉の渡し也　三枝
高野山みんな摺子木坊主なり　トメテ
敵役出世はことしはだをぬき　スヾメ

如才無いこんや年明け内へ入れ　期程
鬼も蛇も酒で取らるゝ尻かしら　里雀
つかみ合坊主互ひに耳と鼻　金勝
田舎馬赤い鼻緒を尻へすげ　香貞
ぼんのうぼだい蜘の糸蓮の糸　柳雨
心無き身は味噌をする西行忌　白兎
うき舟で篝火を焚く佃じま　錦鳥
君命にはづかしからぬ平を出し　市風
人の子を手に藥に乘せる銀世界　古鳥
いぢらしさ三下り書て子をながめ　紀鳥
北辰の里の光りは三歩なり　志水
實のならぬ花から歌の種を取り　錦鳥
姉のぼたもち親たちの御難なり　森鳥
火の中で妻をたすける歌を讀み　孤雲
盛久を靜が跡で千羽舞ひ　和里
留主の事聞き〳〵あてる袴腰　登川
北は馬南は牛をこして行く　里冢
忠義には夢中にならぬ作左衞門　市風
金猫は鼠とらずの行くところ　樂輔
花嫁はひらきんしやうの氣の毒さ　其誠

猪牙舟も手負になるとむづかしい　桐子
かるわざの年明國で杣になり　矢正
とうふやは下駄目位はしよしめたり　松山

狐聲評

金銀の馬は白木の臺に乘せ　古鳥
夜遊の馬もくるわの近處也　龜鳥
神代からこやねに傳ふ藤かづら　葉石
傘で俗のひらくは道成寺　カテウ
大名のふられた隱居袖ケ崎　志水
千疊の座敷にあきて四疊半　登龍
蟻通し雪だと歌がむづかしい　孤雲
天神へ飛梅あたごなぐれなり　丸龍
神國の印邊の軒つゞき　矢正
春日野へしかも名高い一人り客　柳雨
六歌仙六をかけても歌仙なり　巴水
伊勢迄は同行の付く御大祿　竹子
極樂の外で坊主を言こめる　古鳥
沓よりもづない男はざうり取り　錦鳥
虫干に霍亂をするひん學者　鯉角
花の宵裾へも幕をうつて居る　千重

西の狩すぐに山師が付ところ　鯉角
座頭を横に書たはねはんぞう　川章
師の御坊其後鼻が高くなり　紀鳥
御靈地に女夫ぐらしは松ばかり　古鳥
つんぼうは唯有明けの月ばかり　柳子
橋と田へ雁金おりる十三羽　草麥
二十四の孝より四十七の忠　里鶴
關守は手の有る鳥と氣がつかず　白兎
ほとゝぎすたはしのうへを鳴て行く　登川
地取りからどや〳〵と來て湯がこぼれ　雨夕
北へ飛ぶ御鳥に羽根が四枚はへ　竹子
きのふ負けたやつ棊盤を出して來る　カテウ
藪入が母にをしへるのし包み　如石
里びらき女房の留主の初め也　曉鳥
熊谷は今に跡から追ふところ　春駒
瘦がまん捨利で内へ干ならべ　登龍
無常門めでたく蔦がからみつき　大京
小鳥やは一日口につかはれる　鯉角
たとへ火の中水のそこ臼のうへ　芋顏
子を思ふ夜るの鶴やへ草ざうし　豐川

母親は夜るの鶴やへ迷ひ來る　礫川
叱られた四五日道に草がなし　吐聲
忠の字を言て眼玉を額にかけ　藻鯉
鉢巻や腰巻をしてうなる也　矢正
物干で黄色な聲の寒ざらし　古鳥
いゝ分限一と間氷の土用干し　覆露
ぬいた髭一本一本にねめつける　礫川
去年見た花を酢くして買て來る　至靑
どく藥を慶安すぐに盛る處　孤雲
おつぱだをぬいで娘に七つ着せ　カテウ
家根の無い女郞は雪もふり次第　鯉角
竹の子で食傷藪醫呼に行き　品能
羽二重はまげるどてらはぶちころし　覆露
とう來りとう〳〵息子まつぱだか　龜鳥
蟻一つ貞女下帶までほどき　大京
出た跡へ來るは間のよい男なり　斗丸
晝飯のかたまりだろう夜そば賣　井蛙
十八のだんをのぼつて一文字　草麥
齒がぬけたそうでをかしい牛房賣　礫川

龜鳥評

三度づゝ御製に叶ふありがたさ　藻鯉
しら魚は御代に叶ひし御獻上　古鳥
女體ゆゑ雪のはだへの御山なり　雨夕
松竹に千里同風とらの月　カテウ
金のふる雨は寶の井からわき　香貞
手傳の伊達は牛迄舟がつき　スヾメ
千載へ日かげの櫻一本入れ　錦鳥
百番は松百人は櫻なり　柳雨
吉の字の額座頭の靈地なり　カテウ
玉簾へ矢文射かへす一文字　同
月でさへ丑寅の間鬼が來る　矢正
二千歳見い／＼畔の薺つみ　玉章
京染と江戸染百へ月を讀み　錦鳥
貧學のあかりに遣ふ夏と冬　竹子
櫻ちる度に女夫は琴を彈き　古鳥
丑寅のさかひせはしい神事也　カテウ
御苗字は夏ふじ御紋冬のふじ　玉章
御ほうびは赤子に一つ乳が不足　同
宇治の茶にきせんの銘はきつい事　集鳥
新しい板に古關の御製なり　香貞

串といふ字をかばやきと無筆讀み　礫川
五風十雨で豐年な中納言　枡水
後家ゆゑに和尚八人口の人　集鳥
柳葉の工夫と見えぬひがき也　箕山
御登城に四日はへんの取れはじめ　トメテ
鶴の地へ鶉の形りでむちをうち　里鶴
はんじやうさ橋をふむ人くゞる人　矢正
白水の國に飯名はきつい事　古鳥
雨どなり初手はすゝはきだとおもひ　香貞
橋もかけ船にも蜘は乘て見る　カテラ
ぬれ事があつて道行傘をさし　柳鳥
下ばりはおれが早いと無筆いひ　其誠
かて飯のあぢをわすれる境論　トメテ
御大家の馬とこんいなはなし也　斗丸
狐は拔唐人はやしき也　錦鳥
梅の木は武藏櫻は備後なり　古鳥
諫言の文字は櫻の木へにじみ　鯉角
辰巳の唄は錢龜の水で濡れ　松壽
看病をする女房にへんが出る　草麥

門柳評

長者の萬燈初春と小春也　雨夕
新しいお棚へ上るさゞれ石　枡水
年ごとに御居間へ升を一度入れ　玉章
洗髮しばし神代の姿なり　礫川
三下りあたり雲井を棚へあげ　里冢
粟飯のに元たつ頃が即位也　孤雲
前表は都をひらく傘をはり　古鳥
鳳凰は神のかうべにやどる也　玉章
御臨月むま家寢耳へ汐がさし　カテウ
簾をかゝげてきよらかな雪見也　雨夕
金のふる雨は寳の井からわき　香貞
御持筒しかつてほめて五百挺　同
水迄も枝の咲のは花の江戸　錦鳥
鼈甲のごくわう朝日の彌陀へさし　龜鳥
しらはたと思ひ羽白に平家逃げ　香貞
千とせを取つて紫の紐となり　雨夕
しなの坂花も雪ほどつもる處　龜鳥
旅むかひ子と取かへる三度笠　玉章
仁心を甚暑の門でほめて行く　龜鳥
三階のもめかまくらの諸大名　鯉角

するた灸禿のおやに見せてやり　大京
伯父の目になみだてうしへ人をたて　至青
猪牙にこしすわると內がぐらつかあ　古鳥
大黑のほねや蛇こつをすゝにうり　カテウ
耳の穴入物にして嫁くらし　里冢
のし包やつとふり出すあみ袋　吐聲
二つ三ついびきをかくと御慶なり　礫川
もれどもつきぬ冷めしは泉なり　龜鳥
辻番のからこう內にかゆが出來　期程
たゝもゐられず師直は墨をすり　紀鳥
本腹の藥となりの見せでのみ　市風
芝の戸を家老のあけぬむづかしさ　箕山
東西へ一反づゝの上田じま　曉鳥
鴈のとぶ下たを岩城の初がつを　竹子
たのみある中の酒宴は桃の下　里冢
あぢきあるうき世で後家に足が出來　寸尺
芳と吉おなじつとめのうらおもて　集鳥
大江山下を取り下女鬼の首　スヾメ
はなれ馬のんで辻番はら太皷　カテウ
とつさんはもう十寐るが苦勞なり　トメテ

あだしはい地主かがみにうつる也　矢正
ろうそくのさい取さしははかま也　松歌
芝居の馬はちいさいが二本あり　至青

狐聲評

外をひく物とは見えぬ御所車　カテウ
御繪のけん斗のこる御着帶　孤雲
春いくらべして門松は里へ出る　錦鳥
こぼしてもへらぬ愛想嫁は持ち　松歌
松の葉で目もつきそうな惣仕舞　龜鳥
四十七すてる命に年を取り　市風
すゝはきの顏正月の三番叟　大京
元船はいつも四五萬石ならび　千重
向うから越す人の無い年の坂　里冢
十七の翁はひろく名がのこり　至青
めづらしい聲葉櫻の山で聞き　箕山
不二を見ぬやつが作りし實語敎　集鳥
光陰の矢先にたての板はなし　里冢
武德殿たてたまふのは御前表　香貞
鍋釜のふた南北でたゝき合ひ　紀鳥
まへがきも口がきもなく思ひきや　柳雨

かくを入れ手綱の延る雪の下駄　矢正
たゝかれて身のかるくなる雪の傘　其笠
物さしをほう杖にするつもり物　里冢
銅だらひたゝいて孟子しかられる　枡水
晴天になるかみ日本中ひゞき　スヾメ
秋の夕ぐれにぎやかなせかいなり　期程
あしの湯といへど箱根の天窓也　里鶴
三階のもめかまくらの諸大名　鯉角
いそがしさすわりつゞけに居職人　集鳥
大鐘も石も芝のはよくひゞき　スヾメ
湯出蛸のせり出し鍋のふたが明き　古鳥
本郷は春木うしごみ夏木なり　集鳥
紅葉がり女房はあした後のシテ　玉章
古懷紙角もつかうをひつぱさみ　大京
與五郎はかんざけ賣りと思ひつき　春駒
はらだちを猫は脊中へたてる也　期程
たゝみがへひつ付合て飯をくひ　草麥
箱入を十九で桶へ入れかへる　井蛙
口も手も土手をも越した女房也　矢正
小天狗のわざて川井やうたれたり　振袖

殺しても見ねばわからぬ匕かげん　振袖
名からしてさもくさそうな握ずみ　竹子
夫の毒だち女房の口を干し　龜鳥
さかほこでおのころ島のたねおろし　雨聲
枕さうしの間違ではぢをかき　箕山

俳風柳多留三十三篇終

俳風柳多留三十四篇

さきにたまづさのうし、額面の句々をあつめて、千つかなるを錦木ならぬ、くちぬ櫻木にのぼせて、柳だるみそひとつの編といたされしより、今とし亦けふの細布ならぬ、木綿處のむねあへる此道の好人等、もれたるを乞ふにいなまず、玉叟杖を曳拜寫して送られし句々に、古翁幷に文日翁又今の川叟の撰句を合せて、みそよつのへんなりぬ、尙是にもれたる、のつとの句々あらばつげ給へ、ぬさも取あへず再編に詫せんとおそれみおそれみて、菅裏が序す、

湯島天滿宮奉納句合

川柳評

御先祖と子孫の間いを切通し
花ものいはねど配所へあとを追ひ
鶴が岡一箱ほどの舞をまひ

御はらだちおめかけの外無言なり
花聟のなぶられる夜は四十刻
このかみの德あればこそ天降り
近付に二つ引こむ窓の顔
御やしきに寐て居たといふ遅い禮
大門へ毛虫ぐるみにかつぎこみ
あぢな氣だなど丶眞崎から別れ
霜どけで御菜えいやらやつと抱き
御姫様母方に似てきつくげび
ふり袖の長く拜むも見ぐるしい
花の雨しばしは幕でいとふなり
梅の木のばけそこなひと時平云ひ
參詣の涌くやうなので湯島也
ちんまりと歩行なさいと御菜いひ
角田川筆やも一首詠みたがり
內ぞゆかしき駕わきの美しさ
太々の料理神慮に大ちがひ
年始帳御用めつかりしめられる
いでや此世とつれ／＼に書れたり
智惠の輪をとう／＼座頭くゞらせる

氣がはれてよいとは杓子びいき也
掛取も二足三足春をふみ
うづらでもよいと藪入よわく出る
よく汗を出さずにといふ中の町
獵師だと見たが樂天ひが目也
延喜帝藪にまぐはを是となされ
疊がへ引つき合てめしを喰ひ
こ丶いらのそばはくへぬと花もどり
あの舟を寄せて見せうと三を下げ
戻りには兩國橋をふみならし
あきらかに傾城を貰ふ一人り者
人なみに泣くなとなぶる大三十日
梅若へ行くとは咥もしゆしやう也
日當りのわるい辻番直が高し
楊枝みせチトお休とわきへより
さくらをば坊主持にてらりにする
祭禮に人倫の居ぬうら長家
初い産はあまへ心でうなるなり
仲條の目を引つこぬくもめんもの
年始客一とけんくわして呑みはじめ

くつわ虫すがゞきほどにないて居る
芥川どつちも逃るなりでなし
ふり袖のりちぎに見える女坂
しかられた下女勝立のにぎやかさ
行ぬかと思へば下女をはらませる

目黒不動尊奉納句合
川柳評

十體の手斧はじめは不動尊
とんだ事餅きげんにて三日居る
石山の草紙一わり引けで出し
着け所はないとちよき舟すりちがひ
彫りかけた臼などの有る境論
爪取て出るとはずるい年始也
丁どよくあれが祐天寺の七つ
勘略をむすこがするとにくまれる
花嫁にそれほど彈きなさりながら
入聟はやつきとしたがつれになり
何さあふ事もがなさと嫁は取り
朝がへり女房の舌は利劒なり

半分は海のものなる家作り
空腹な體でうぢつく雨やどり
野がけ道糸が切れやうぞと笑ひ
裸身を龍にのまれるやうに見え
旦那敷きませうと四つ手帶をとき
かねの禮あいそうをして泣出され
踊子をおやだとほめるのはきん句
灰かきに花を咲せる御神德
秋冬のかはらけ神と佛なり
僞りの言葉の花はつげに咲き
花の山われは顏にて結びつけ
からさしを裸でなげるもつともさ
文月と書くのが抄子定木也
ふり袖でぶつを肩衣あひしらひ
なめた下女せゝら笑て茶もくれず
宿下り馬だと見えて外へ出ず
山王で見れば二階をたてるなり
乳母が千話子ごゝろでさへ笑ふ也

王子稻荷社奉納句合

川柳評

正の字を正月のうちそめるなり
能御手は天も反古には仕たまはず
猪牙の足元からにげる都鳥
物言をきけば汐くむをんな也
乳貰ひへ氣のどくそうに芝居也
羽子の子も天から清くすめらせる
年玉の扇火鉢で封をきり
子の曰入道うかり／＼きき
殿樣のものは花見の幕ばかり
まりし天のぞいて妾しかられる
初午にほや／＼の手で書て上げ
なまめける女朝めし早く喰ひ
羽子板を禿いつしかかしなくし
えぼし着た中へ出て居る美しさ
外とへ出るふりで亭主は椽の下
踊子をはにふの小家で仕込む也
とばしりが諷の師匠までかゝり
人の涼みをかはかしにひらた舟
田の草で妹大事トでからかし
てんごちもないと階子の子をおろし
あやまつてやろうと亭主まだまけず
諸士の中おめずおくせず袖をふり
どふするか見ようと世帶わたす也
神樂堂左右へふつてすつとたち
雛箱を下女氣のしれた仕廻ざま
ざうり取りなぜかくしやると呵られる
あんこうに目が出たといふ年わすれ
なびかぬと鎌でおどかす麥の中

眞先稻荷奉納句合

川柳評

神前をつらぬくほどの御神木
早い事ざんじに渡し二つぬけ
嫁の帶引出し一つおつぷさぎ
笛に寄るやうに紅葉見氣がそれる
袖口で體よくしのぐにはか雨
神樂堂扇をあてゝ何かいひ
大一座よりどりにしてしかられる
下駄の雪田町の家根へけとばされ

田舎道くやれと嫁へ飴を出し
鳥さしの淋しくかへるけつたるさ
ねだられて張合もなく胴につき
年こしの獅子はかぶりを二つ三つ
待宵にみぜんをさつし女房ふて
そのきせるめつかるなよと母はいひ
かり橋で生酔衆をはりのける
官位あらそひが終ると春になり
つるかめも湯治の内へこめて行き
かきつばた盗みませうとほめるなり
しら山のかへり太鼓のだゞをいひ
かへり鶺目きゝをしてはよばる也
いふ事をきいて云ふこと下女きかず
一年に一度蛇の出るにぎやかさ
射はづすと千里も逃るところ也
村の嫁しんづしんづとうたせたり
えんこして居なよと娘雛をたて
片道はのどかに戻る年ごもり
キの字やの松も熊手はばゞあ也
居つゞけは再三の義とおやぢいひ

はしごからあまりいそいでころげ落
歌がるた大方嫁にしよしめられ
朝がへり首尾よくゆけばおなぐさみ
おいらんでお出なんすとしやうちせず
下女が文油つきりににじる也
なまじひにくどくと下女はできぬ也

矢口新田大明神奉納句合

川柳評

多いほれ人をぬき身にてはろふやう
目のうへへ両手をあてゝ嫁にげる
するが町中ごふく物とりちらし
よみきらぬうち堀へつくくどい文
きのふまで鼻をつまんだはづかしさ
東鳥きたつてかまくらばつたばた
おきて見つ寝て見つていしゆ花の留守
股引とぱつちでもめる野がけ道
盃をすこしかしげてうらみられ
たそがれにおよんで息子ひからかし
首尾の松あれば不首尾の柳有り

びいどろの盃で下戸三つのみ
かねの禮さしうつむいて言葉なし
紙子着たのは雛樣もやすくされ
彈きがたり中休みして蚊をいぶし
切餅のやうなで四つ手汗をふき
文盲なやつをばうめぬ始皇帝
おつたつたはしごのそばに四つ手駕
一人り者よいやらさつところり寢る
文づかひそらつとぼけが上手なり
壁にたてかけてあるのをいんきよあげ
あまりものに福は四つ過の四つ手
藪入の供はとなりをかりて入れ
駕かきにくつてかゝるが女房なり
どろぼう〳〵といだてんおつかける
乳を口へ入れて番頭くどく也
百取るに上下を着て這ひ廻り
とふとい寺は三會目から知れ
喰積で子のいたづらをいひ立る
能い幕といふとかならず乳のまう

秋會川柳評

金銀の寺王樣の近所なり
唐人の眼には蜘なくよむと見え
鳩のまね每日なさるおめでたさ
升形の外とへ糀はこぼれてる
なめくらを二本ひんぬく切落し
けんもんに糸目を持つはよわいがき
げん兵衞とく兵衞雪に梅やしき
懷中へ龍のたち賣むすこ入れ
おれも中くらゐだと下女おもつてる
ていしゆの足をつめつたで行にくし
武藏野に露月町はいゝ名なり
新造のまくらをはづすほとゝぎす
下總へ音じめのひゃくいゝ涼み
いゝせかい見せ先たばこ無用なし
蛸つぼをぶちわりに出る國家老
十三夜ばつかりさせて吸て居る
いせやが惣ざいまぐろをなたで切り
師匠の花見やれちるなそれちるな
時鳥せうきのあたまけてとほり

呑喰で大工と畫師は名が高し
初夢のあてもろこしは無いところ
かまくらを羽根のはへてる金がとび
麓にすまふ商人も二つなし
玉菊はあかるくさとへ名をのこし
やれ猫といふ間に九人まへになり
道法りを秡の知らぬ不二の山
福居町ともいひさうなをはり町
くつわやの後に馬具やはきつい事
三廻りで雨こん〳〵といひはじめ
くりばゝあ娘に二俵ふませる氣
とうまるへうどんを一つすゑて置き
さう堀をうめたで夏がしのがれず
此女ひがわるいなと四天王
女房がにく〻てならぬ中の町
酒よりもさゝによつたの見ぐるしさ
辨天を唐のおく様だとおもひ
大さわぎ寐所のみやくを取て見る
つもつたときいて素一歩きえるやう
いゝ首尾だねえコリヤはないきが高い

紅葉から錦の夜具はおもしろし
えもん坂遠乗馬をつなぐ處
楮俵へ笹りんどうのゑふをつけ
境ろん中に六部は虫の息
皿に水百の旦那へお寺出し
家内安全女房と月見なり
くつわ虫しよせんなくかいねつかれず
女房を大事に思ふもてぬやつ
月參の宵顔見せや曾我をはり
燒つぎをよんでくんなと井戸で嘧き
いざこざといふ字庄屋へ聞に行き
文道にくらく櫻へ手をのばし
月を二度しまつて内を闇にする
鳥なき里の一ころは北野なり
他人こんじやういりほがな詩をよませ
新造の口へろう石おつことし
烏だの鳩のと學者子をしかり
梅やしきから東風が吹きほりへつけ
ほらの貝すどほりをするまくら蛹
あやした者におつつけて飯にする

鯛の湯づけの出る時分下戸あくび
あかるい信心けいせいと役者なり
あかるい手書四里四方書きあるき
黒いゆびをつてたのしむ御えん日
御ほうびに梅がついたと母に見せ
御後悔蚊帳の中へ御幸なり
いゝ藪をもつてとなりと中たがひ
軒下で空目をつかふ大なんぎ
すは大事ていしゆ鼻毛をぬいて居る
おくは松風お表は小夜あらし
市のばん大こくを俗つれてにげ
いゝ女房里と小ゆびをかくす也
つんぼうは光とばかりおもつてる
千両でひぢ坪四つ聲をあげ
ゆげのたつやくわん茶びんをおつかける
かぐら堂一とかたまりにほれて居る
村芝居はめをはづすと麥ばたけ
たつた一人りのお氣に入るむづかしさ
不自由なおきて瓜だのすもゝだの
引ぞわづらひ歩行内見せがひけ

もうしゆふくまへといらざる雨やどり
土手のかまどのうるほひはすけん也
羽衣の外はこまらぬごふく店
差引のこり二人り寝るはづかしさ
ねむい目は柹見えぬ目は梅であき
品川のすけんすた〳〵坊主なり
かんばんにいつはり灸すへの娘
おくろものとん出しうば乳を呑せ
御家名をどぶへぶちこむ新やしき
村きむす大きな聲でやだあよう
物の見事に三分をば取のこし
聲じまん下女ひき臼のひきがたり
居なりかとせなかをたゝく雛の客
引札はゆびをなめ〳〵ほうりこみ
大家大病長家中まつぱだか
桃をかたづけむすめはさくら也
そこら中たて切親父土用ぼし
手のかゞと向ふへ出して嫁の禮
かへりなと羽織のすそへかしこまり
ほうせん花番人これをせうかんす

引出しにいつそまごつく見せ開き
兩國で女房すゝりなきをする
ひきならび雛のからくりほどになり
神主の身うちに猿田彦左衞門
とび石の臼の目を切るひどい雨
ありがたい御代三度づゝ飯をくひ
仙人になると高尾も長く生き
あじのつり錢拍子木でゐこうさせ
ひろい事琵琶の師匠でくつて居る
朝がへりかゝあと我と十九面
若い者身どもが女郎いまだこぬ
しんだ亭主へきれる氣で茶せんがみ
さいもんをこのまれ四天王こまり
あかのまんまにとゝそへるはづかしさ
百旦那樣のたつたるとんだ門
鼻くそを取かけからし女房書き
木曾どのと翁のやうなけちな晩
おもしろさふとんのうへで雨やどり
飛鳥山石ぼとけがとたはけもの
座敷中ごま鹽にして中たがひ

けんどんや茶臼のかんな遣ふなり
杉かなと火ざらをはたき〳〵見る
きついふり傘をさし雨やどり
女に目のある男は武藏坊
夜具の返禮すゝり上げ〳〵
猫のおかげで弟はなまりぶし
火廻しに下女ひやわひと口ばしり
はんじやうさ女郎と役者ぶらさがり
早みちのあづきをしよつて子はおきる
まづさうはせまいと姑よみがへり
松風に鈴の音かよふ御中よし
味噌灸はひきようなやつがするゐ始め
御袋は外とに寢をれと戸を明ける
へぼ瓜を二つにわつた下女とせな

丑年催七月初會
　文日堂評
嵯峨やうの返事に琴の音がとまり　孤雲
御嘉祥は口に土用の入る日也　春駒
洛中へ蚊帳をつらせる御うつぷん　玉章

佐久間町あたりに蔦を植直し　香貞
御月さま次第と文をやたら出し　雨夕
息子四五日松葉やに雨やどり　登川
ほまれさは梅花へ二十六字足し　玉章
五月雨の歌であやめをひつこぬき　雨夕
下總の雪を喰消す角力客　邑市
菅笠と馬のながるゝあつい事　柳雨
ゑさ箱の無い岡釣のすさまじさ　春駒
品川は膳の向うに安房上總　雨夕
暑い事茶碗へ唐の塵がうき　同
赤腹を手づよくたれる江戸家老　柳雨
そよ風を羽織につゝむ夕涼み　千潮
三日ほど祭の通る聟の顔　如春
うすい縁へは夏物をわけて遣り　玉章
三保の谷はかへるとなたにして遣ひ　雨夕
子の物が親ので無いは嫁ばかり　儘成
けちな庭今戸細工をあひしらひ　車道
唐茄子とかぼちや兄やら弟やら　友呼
身なげのはじまり土左衞門と云男　玉章
和尚さま毎夜甲子待をする　儘成

又後のはつかりによと臼を禮　雨夕

同月二會目

文日堂評

闇の夜もあかるく歸る螢狩　柳枝
當意即妙ほころびと梅の花　柳雨
躾方迄が定家の作のやう　春駒
蓬生の巻へ艾をのせて干し　同
弓でしたふるまひ水は名が高し　柳雨
人同じからず帷子と白無垢　雨夕
蚊いぶしの烟くらべる美濃近江　玉章
こげた戸の側にざくろがころげてる　芋洗
ふんだんでないは達摩も血にまみれ　霞朝
しのぶ摺よりも高尾は島をすき　雨夕
氣の毒さ娘を羽根で撫て居る　春駒
ちら〳〵とござると鰒の直を上げる　車道
手桶を取ればオヤ市さんだと禿　雨夕
歌人は居ながら日に燒けて嘘をつき　同
二日出の猪牙舟宿のたから舟　井巴
縁先へ引立て行く指のとげ　春駒

龜甲へ浦島そつと火をはたき　マツラ
生酔の目に辛崎の二つ松　如春
星と玉との祭にも牛が出る　芋洗
ぬれるにはましと半面の大黒　霞朝
熊こい／＼と山姥はしいを遣り　眉長
牛馬は片すみ虎を中に置き　柳雨
賑さ狐と名主つかみ逢ひ　機久
三途川のぢゃい懐手でくらし　邑市
ぬれ事で大評判は新五郎　玉章
とろゝの摺子木置所にこまり　雨夕
鴫のしつぺたで夜食を下女は喰ひ　柳雨
雨方の味を湯で出し水で出し　熊字
大笑ひ踊子膝をすりこはし　雨夕

丑八月三會目

文日堂評

よごれぬ顔で子の參る御縁日　玉章
拜殿のくんじゆ三つ子の宮參り　有幸
犬の使が一代に一度來る　木賀
和漢の忠義たばこ賣肴賣　柳雨

嫁うそむくと松風がおこる也　露舟
杜若二十六字にほねを折り　春駒
三會目すつとおそばへ來てすわり　霞朝
日本をすこし下ると美人界　松歌
三韓を味方につけた桃太郎　眉長
水鳥のゆられてねむる波枕　千潮
風呂敷を子に着せて行く俄雨　素岩
行燈も戸ざゝぬ土地の賑かさ　雨夕
寐まいとは申んせんと寐ずに居る　春駒
鬼の留守嫁思たつ星月夜　雨夕
堀のすゝはき猪牙舟へ御遷宮　竹雅
鬢だらひずつしりと置く松の內　雨夕
もういゝと孔明指をねぢる也　春駒
瓜畠狸はゑんりよなしに喰ひ　雨夕
籠の鳥寄てなかせる遣人の子　機久
單物艾縞ではあつかろう　雨夕
挑灯でのゝ字を書と人がちり　機久
咽斗りかわくいせやのかしは餅　雨夕
部家持の細い日向に櫻傘　登川
姉からといつてるうちに妹迯げ　千潮

せはしなさほとんどこまる子の給仕　香貞
黒鴨とあひるを二度に宿へ下げ　玉章
かの事をすゝめて歸る小兒醫者　柳雨
辨慶は山で育つて川ではて　萬仁
首つたけはまつて綱をこして逃げ　同
店賃のはしり園女が持て來る　機久
かへりたてまぐろ程ある鯨の子　芋洗
乳首を横にくはへる天狗の子　眉長

丑八月四會目
文日堂評

天地人頭巾にかぶる庵の煤　竹雅
蜘の巣で馬を生捕るむづかしさ　是樂
繁昌さ家根からやねへ虹がふき　玉章
十五夜のそゝう無理とは思はれず　白兎
名月に九曜のきえる不慮な事　萬仁
風袋を知り給はぬが御大名　孤雲
一里塚日本一は橋をかけ　玉章
千金をもちつとにして嫁の禮　雨夕
分散の藏に巣を喰ふ女郎蜘　熊字

短命な娘はみんな下駄に成り　菅裏
ろうがいのすわると膝に目が二つ　春駒
舟の飯出來て風呂敷一つ明き　同
紙雛の首ぬきやすと姉のこゑ　雨夕
顏を赤めてきだ橋をあやめ下り　同
葉櫻になる迄つなぐ丙午　竹雅
白妙を秋も衣桁へかける所　松歌
鬼子母神だとうまがつてあがる所　柳雨
五字足して名句になつた小便所　風子
石芋は空海の無いなされかた　菅裏
酒やの戸せにでたゝくはひみつ也　竹雅
これを仰げば彌高し青樓　松歌
かりやうびんがのなれ〳〵しは踊子　萬仁
夕べの飛物あんだんべい梅の木　木賀
まん丸な日蔭の並ぶ茅場町　萬仁
大門を的に四つ手は矢のごとし　玉章
しうたんに汗の出るのは宮芝居　烏旭
五十さう江口の君のつかはしめ　菅裏
すねをかぢるのみならず臍をほり　箸水
ちつぽけなおかは生姜にくゝし付　孤雲

村祭り生酔ちゝをあます也　孤雲
すつぽんと月吉原と吉田町　有幸
花や久治を植木やと下女思ひ　春駒
上總戸をたてにてつぽううちはなし　箸水
乳首の腰をつかつて子をあやし　柳枝

丑八月五會目

文日堂評

五明樓上愁扇の色を見ず　松歌
千社札留り九郎助稲荷也　菅裏
三本の指に十萬餘騎おそれ　風子
御延引花の宴など御ろんじやり　孤雲
扨名歌々々と握りこぶし出來　柳雨
雪に寐た竹を旭がゆりおこし　如春
虫が知り大臣凶事をまぬかるゝ　是樂
面白い和歌後家をまん中に置き　孤雲
四郎九郎は門と五町のまもり神　木賀
番町のやしき皿地で相人なし　柳雨
紫はまんま鹿のこはかゆで染め　青狸
雲井迄鶴は死でものぼる也　菅裏

家やしきかたぶく迄の月を見る　菅裏
唐土で名高いふぐは無鹽也　同
しろかねの山をつく頃めしが出來　白兎
蛤も蜆も見える六歌仙　有幸
一日は皆しろ助にばけて出る　里冢
後の月嫁のはぶくら迄も出る　柳雨
神樂坂あるで近所に岩戸町　有幸
梅干のきせるむくろじゆ付てゐる　竹雅
品川の星的にして新田の矢　萬仁
ゑぼし着る魚藍縞のしめ也　玉章
夫婦そろつて神棚に酢ができる　柳子
ちの字とめの字まくり逢筒井筒　柳雨
せゝなげへうつかり落るほとゝぎす　霞朝
かたぼつけほうれんさうをけふも買ひ　李什
ぬき足をして李下へくるふてえやつ　雨夕
竹の子と栗は和漢の孝不孝　柳雨
御しやめんで机を下るくろんぼう　木賀
九月九日高樓にむすこ行く　里冢
誰に見しよとて紅粉かねを後家は付　箸水
心底づくで日本へ三日出る　里冢

よし町へ孝行の釜うつてやり　如春
さがりすが臺のぶどうをちよいと引　北馬

丑九月六會目

川柳評

實に梅は諸木の兄の御高也　木賀
繁昌さ名所の月も家根から出　萬仁
柳樽池の汀でひらく也　儘成
ぐわんほどき七十二間馬を引き　雨夕
明き樽になつてよろける花戻り　萬仁
不審紙はがさずにあるしろうるり　是樂
封切ると小判百兩のびをする　菅裏
藏宿は二歩づゝ玉に疵をつけ　霞朝
ごんぞうを嫁にはかせる六あみだ　芋洗
仲人をこよみでたゝくおちやつぴい　是樂
天人はしごきのとけた御すがた　如春
八兩の外はよまずにひろひこみ　霞朝
臺所のふしん奉行は女房也　萬仁
采配をふきんに遣ふせと物や　春駒
葬禮のとき算盤でさじかげん　如春

信玄のあたまの所へ香の物　柳雨
大八は油をなめてうなり出し　青狸
質くさを根ほり葉ほりに女房聞き　芋洗
どつちらもすまぬ師弟のころび合　龜水
茶や女ばかされに行くいなり町　素岩
豆いりはにぎりこぶしを口にあて　雨夕
秋茄子のやうなかゝとに下女こまり　柳雨
大笑南光坊をいひちがひ　儘成

丑十月七會目

川柳評

男浪をば我せこと見て鎮座也　箕山
三鳥の傳御ざしきはかんこ鳥　柳子
紅葉の方といふべきにをしい事　玉章
繪馬堂は時代違ひも軒ならび　眉長
すでの事柳が梅にならぶ所　柳雨
雪中にふしたる龍をとらまへる　木賀
時あかり三月日向をてらす也　古鳥
ひよく塚みそかに月の出た處　里冢
うつくしい玉もとう／＼石になり　眉長

年内を片手につもるいそがしさ　里梅
五月雨に上戸の膝へ星がでる　萬仁
今もつて大文字やの市兵衛　里梅
三千のうちにくされた儒者もあり　是樂
灸點に無筆よぎなく筆を取　菅裏
ふろふきはあらつた時のそさう也　萬仁
出口のかんばんだれにもなびき候　登川
境論まけかちともに貢拂ひ　玉章
尻から金とうたれたで石田負け　芋洗
寛永のなめにあるじの御隱宅　玉章
茶わんやは目見えにふちを一つはり　如春
かゝる時息子は舌がよくまはり　霞朝
まけ公事の方へ娘は行たがり　曉鳥
たゝみやは肱に覺のある男　雨夕
切づかを横ぞつぽうへちんこすげ　矢正
宿なしの元祖蕨を喰てゐる　芋洗
むなぐらを取つて亭主を猪牙にする　如春
寒念佛そば湯を吞でゑこうする　玉章
あばら家の白雨道具市のやう　青狸
ばくやがふる着は持人に寄ずきれ　菅裏

しよくの國とは信濃さとしつたふり　柳雨
春に腹はかへられねえとどら和尙　萬仁
五兩けんものと間男ぬかしたり　玉章

丑十一月八會目
川柳評

鳳凰は戸ざゝぬ門を渡る也　春駒
繁昌さ升ではかつた水を吞み　萬仁
聖人を空おそろしくざんげん仕　香貞
十月の櫻芳野で種を出し　三松
さそふ水雲の上中うかれ立ち　里梅
雨やどり額堂でもう句の話　玉章
十三度かくをあてると鶴が岡　雨夕
僧正の七尺後へおつこちる　横好
温公は年のかうより瓶のかう　同
小ぐら山十萬兩が物を書き　玉章
しのぶずり紅葉の形は付ぬ也　芋洗
かすがひの山で〆とく鬼の門　萬仁
あの雲かさん候と早太いひ　里梅
雪の下駄駒留橋でかくをあて　雨夕

かべ土に御祓ぞ夏のしるし也　里梅
寒のべにせと物や程御さい持ち　登川
ある時はさしみにかける枕がや　儘成
笑ごつてはねえと幽王あわて　箕山
どつとせぬちうさんどつか三歩也　シクト
あまざけや郭巨が釜をかゞやかし　横好
西行も初手は鼻づらこすつて見　萱裏
客をつるみゝずは筆の先でほり　青狸
二八そば七百八十のはらひ　芋洗
將門へ尻を見やれと孔子出し　里冢
くさそうな首を五助は大事がり　鳳鳥
みがゝない玉をせげんはつれてくる　雨夕
楊弓場矢取のきりを的にくる　玉章
茶臼山講釋なかば下女笑ひ　春駒
きつゝなれにし古布子下女はがし　霞朝

丑十二月納會　下谷稻荷社奉納

川柳評

稻の外一位の官を御荷ひ　礫川
御姿が其儘御神號と成り　狐雲
御神託稻に八束の穗がみのり　礫川
廣德に入の門也牛祭り　儘成
正の字を別當一字御拜領　里冢
拍子とり〳〵衣更着の太鼓賣　横好
梅やしき百社の丁度中休み　車道
目の明くもいづれ稻荷のいの字より　青露
正法ないなり針うつ杉もなし　霞朝
息子づれ田町が九十九社目也　青露
稻つけは王子を出て遠からず　シクト
舟中で遙拜をする角田川　礫川
五社々々とたつがいなりの幟也　眉長
ひめのりがへるに隨ひくたびれる　萬仁
召遣ひ一疋はげて二疋ぬり　松歌
間の能い百社こは飯を度々貰ひ　雨夕
高砂といふ身で稻を御かつぎ　青露
魯の國へ太田いなりは尻をむけ　箕山
にぎやかを狸うらやむ御祭禮　雨夕
諏訪の池狐は馬の猿田彥　是樂
婚禮のかさつぼんだり開いたり　玉章
鳥さしのやうにはつてる千社札　柳雨

安幟むすびのやうな玉を書き　芋洗
にぎやかな初午豆腐ふるへてる　眉長
狐さへ鍵はかゝあがくわへてる　菅裏
ざつとした繪馬は狐にとうの芋　雨夕
右額面摸著

俳風柳多留三十四篇終

俳風柳多留三十五篇

今年二代の川柳、親の柳と根を續て、角力のざれ句十會を催し、其句々を拔萃して、三十五編の前句集なりぬ、夫酒に目のなき五柳先生も、句には手の有眼柳居士も、豈此樽の底をしるべき、道のちまたの一と本やなぎは、元祿の流行句にして、道のべの柳影は西行の通り句也、柳よ〳〵直なる土手、口八町の柳原も、古きをいはぬ新し橋、下た町山の手おしなべて、是大江戸の寄角力、今此柳の下にならひて、わが柳風をしたはざらめやは、

文化三寅初秋　小石川の　琴我

上之部

廣き事御庭に御所の無いばかり　いろは連是　樂
出陣に關東勢はのぼり坂　鹿子　丸　龍
玉體あやうし只今とちよくし　入重垣一　口

身の志賀を隱し旅宿の花をよみ　鶴龜　柳雨
誰ゆゑに亂れ染にし御ほうらへ　櫻木　礫川
六波羅の廿餘年をびはにのせ　初瀨　品能
だいたより寐かした音の品のよさ　杜若　箕山
冬の庭わらづとにする妙國寺　鹿子　玉章
兄弟のつぎほも桃の木で出來る　杜若　香貞
見せ開き僞景で門へ市を出し　初瀨　留人
空定め無く書て出す月のふみ　名木　雨夕
天帝へ小町大きなねだりごと　蓬萊　礫川
手の裏を返して御慶申入れ　いろは　是樂
宿錢に三がの庄は大きすぎ　鹿子　霞朝
曾呂利が咄しきやつ〳〵と御笑　櫻木　横好
松の內いきとしいける物が來る　蓬萊　礫川
脇の僧納豆箱を持つてかけ　鹿子　如雀
吉備よくもすら〳〵〳〵と讀終り　櫻木　霞朝
螢狩り案じ初めは貧學者　同　玉章
肩車嫁入ほどの支度也　鳳凰　枡水

中之部

今のかゝさんは吉原の田舍だと　杜若連　箕山
筆先でみれば花嫁おちやつぴい　初瀨　竹子

飼犬だのに猫またよ〳〵　櫻木　礫川
國家老口をへの字にして居り　鳳凰　同
文殊の智惠で觀音を引上る　玉垣　孤雲
根のはへた立看板を花屋出し　鹿子　一交
姑ばゞしよておん出した嫁をほめ　櫻木　玉章
松過に鞘鳴りのするこもかぶり　初瀨　樂輔
こいつはいゝと思ふのは三步也　櫻木　礫川
生醉を卷付て來る下戶の首　鹿子　丸龍
眞黑な女房に亭主赤いうそ　いろは　三松
おもひもの元はかゝらぬ輕い者　鹿子　花夕
亭主雨歸にま見えるでやかましい　玉垣　其流
荒打に左官は衿であごをかき　蓬萊　礫川
平家の怨靈うるしかぶれに妙　櫻木　玉章
出雲にて結び鎌倉にてほどき　鶴龜　木賀
金時や達磨の中に番太郞　玉垣　春駒
むだ錢をおよしなんしと女房いひ　鹿子　霞朝
みしや夫ともわかぬまにこれに也　櫻木　礫川
料理番遣手の袖をちよいと引き　蓬萊　同

前之部

寢かゝつた金をどなつて起すなり　玉垣連　其流

弓取は坊主矢取はむすめなり　鳳凰　鯉角
八朔にふつた女郎もあれのうち　櫻木　カタル
女馬士馬から落てらく馬する　鹿子　燕子
牡丹餅の縁談すべるはずの事　櫻木　玉章
ほらの貝どふまん聲が仕廻なり　蓬莱　礫川
爰は御めんとびんづるは押へてる　櫻木　同
ゐねむりの下女は疊へむぐるやう　鶴亀　眉長
棒組やスコちらつくせ〳〵　櫻木　礫川
亭主のおかま女房のふかまなり　鹿子　亭々
引馬で大門を出るけちな客　名木　マイダ
酢に酔つてこり〳〵さするふさつちやう　鹿子　雅交
美人天じやうより落芋屋の女房也　杜若　香貞
綿に包んでわれ物をかたづける　鹿子　亭々
花がつを下女鼻息で吹ちらし　玉垣　儘成
あきれた子振分げ髮でまくり合ひ　鳳凰　枡水
屁をひつた方が居角力負になり　櫻木　礫川
きん玉へ水向けをするざくろ口　初瀬　樂輔

上之部

草も木も我がおほぎみの御紋也　櫻木連　礫川

脇當が出來て目出たき御凱陣　初音連　暁烏
肩衣の落葉かくなる御吉例　櫻木　礫川
御役替八町ゆくと三つ打ち　蓬莱　同
天が下名を流したは時平也　櫻木　同
川留はふつてわいたる御物入　鹿子　丸龍
殿の名を謡のやうに押へ言ひ　櫻木　待人
六文は歃六もんは御味方　鹿子　谷水
ぬけがらも三國一の水たまり　玉垣　春駒
その狆を淺岡厚く葬らせ　鹿子　二蝶
七本でつゝつきちらすしづがたけ　櫻木　青露
信長の下知にそてつはしたがはず　鳳凰　蘆風
なめり川一もん一家やとはれる　櫻木　青露
詩の碁のと言て日本の智恵に負け　鳳凰　志夕
張良は口も劔で賣付る　櫻木　玉章
年越しは山と畠と海をさし　鹿子　琴我
丸わげとしのぎをけづる片はづし　玉垣　春駒
紅葉へはついぞ品能くとまらせず　初音　龜鳥
おゝしき〳〵と高時上意なり　鶴亀　眉長
此度は梅も取あへず紅葉なり　鹿子　森鳥

中之部

せがまれて嫁は二をあげ三を下げ　櫻木連　青露
新造も楊弓ほどの張を持ち　蓬萊　礫川
花曇りねむつた蛇の目持せてく　鶴龜　眉長
達摩門汝元來木目也　蓬萊　礫川
おんぎやうのやうに西行取まかれ　櫻木　礫川
似せ錢を三十六字眞田出し　鹿子　美德
脇の僧一ぷく呑みたそうに見え　櫻木　カタル
砂利場から主従二騎となり給ふ　初音　曉鳥
惜しい事常世萬りやう焚殘し　櫻木　青露
雨風の前へ嚊をおろしてる　鹿子　牛賀
よう御參詣と衣をしやくり上げ　名木　マイダ
一片のゑかうすゝめる正燈寺　初瀬　留人
鸞鳳のかいこ引込み禿なり　櫻木　礫川
鹿にくら趙高及び春日さま　鹿子　玉章
大黑の親二俵づゝ申うけ　名木　雨夕
當分は來やるなと母一つぬぎ　鹿子　賤丸
女郎買のこつてうだに母あの子　櫻木　礫川
大ざつま弟子も座敷もない太夫　鹿子　玉章
いそぎ候ほどに酒手をねだり　櫻木　菅裏
兼平はりつぱに落馬した男　鹿子　霞朝

前之部

冬爪の花をちらすに茶屋こまり　名木連　マイダ
床花は五百疋さと仲人しやれ　蓬萊　礫川
木曾殿のたゝいた跡を和田たゝき　櫻木　吹唐
かたい寺かこひ樒を下げて來る　鹿子　玉章
さい角で持參の下地やつと出來　玉垣　彥龜坊
まゝ子だて程にとりまく蓮どろぼ　初瀬　樂輔
つら／＼おもん見れば芳町は損　櫻木　礫川
飯の内岡湯をみんなくみ出され　鹿子　霞朝
外面女ぼさつ内しんは火の車　八重垣　一口
顏を見ぬ日は腹の立鏡とぎ　初瀬　龜鳥
旅の留主書けば十くだり半もあり　名木　有幸
三味線箱からとゝだのあんもだの　蓬萊　礫川
鼎はぬけてやれ食よやれ外科よ　杜若　箕山
放生會納所うなぎをよほど呑み　鹿子　霞朝
振袖を着せ替はさみかみそりよ　名木　マイダ
番附は首狂言は足ばかり　鹿子　賤丸
御せんどを妾たちまち見とゞける　鶴龜　木賀
くだり賣家鳴震動してげすり　蓬萊　礫川
川留にまづ三味せんが目を廻し　玉垣　彥龜坊

歯はないが嫁をばひどくかみつける　初瀬 品能
初かつを下女鍋を出し叱られる　鶴亀 柳雨
中たがひかぼちやの蔓をたぐる也　蓬莱 礫川
過たるは醫者の匕にも及ばざる　櫻木 同
油むし木へ這ひ上る。村芝居　鹿子 和里
どら和尚衣をかけて足を喰ひ　櫻木 熊字
へつついと女房の顔に二貫貸し　鳳凰 志夕
親は子の爲に隠して後家はらみ　杜若 香貞
作つたで下女二三段わるく見え　鹿子 梅舎
皮きりがすむと娘をくどき出し　櫻木 待人
入物を借りたやうなに百とられ　初音 曉鳥
夜があけて盥のくそに人だかり　蓬莱 礫川
下女の癪至くはへのこりならん　鹿子 燕子

上之部

桃の頃室町近く御所が建ち　鶴亀連 木賀
九重は小路々々もあやにしき　初瀬連 市東
御上使は五十三次羽根をのし　玉垣 其流
大木戸に筋目だゞしきつなぎ馬　初瀬 スゞメ
こん龍の御衣を召たが嫁のなり　蓬莱 礫川

仕合は三世の縁を二世にする　八重垣 狐聲
あさの中よもぎは四十七本也　柳水 松山
東北の間だへこけるうたひ講　櫻木 如雀
花嫁は胴につかれぬ御目出度さ　鹿子 森鳥
膳立を笠でかぞへる御師の宿　名木 マイダ
玉落ちにきと語るなと御不勝手　鶴亀 柳雨
一つ夜着樂と苦界の氣は二つ　櫻木 礫川
わた入にまゝ母の氣がすき通り　初音 龜鳥
達摩忌にいゝ盛物は九ねんぼう　櫻木 玉章
むだ骨を折て扇の芝となり　鳳凰 志夕
傘の國のわきで借馬に乗て居る　櫻木 青露
四季折々の戯れに母こまり　初音 錦鳥
張物がへんほんとして嫁さはぎ　杜若 香貞
鴻門の會喰にげを高祖する　初瀬 松成
ふだらくの地より極樂北に見え　玉垣 彦龜坊

中之部

公家惡の前に傘國の實事師　鹿子連 琴我
梶原は繪馬屋がうちが旅宿なり　櫻木 青露
白樂天馬醫の先祖かと思ひ　鹿子 森鳥

ふられるもかつは其身の御爲也　櫻木 待人
さつま勢れんによ往生する所　初音 艸麥
交り見世引ぞわつらふ野暮なやつ　櫻木 礫川
地藏さま不首尾な達摩部屋子也　初瀬 樂輔
武藏坊あたかもまことらしく讀み　櫻木 玉章
出は出たが居所にこまる母の雛　鹿子 山湖
平蜘のやうに松永わびるなり　櫻木 青露
爪の火を子息夜な〳〵消しに行　吳服 如綾
鐵之助其ちよつかいの早い事　櫻木 青露

前之部

行燈へじれつたい穴二つ三つ　鹿子連 賤丸
辻番を抱いて片倉夜を明かし　櫻木 礫川
目黒みち藪から棒の連が出來　柳水 狸疊
田町迄歸り息子はおもふやう　櫻木 青露
檀用はいそぎ園でゆつくりし　蓬萊 門柳
紅葉とはふるなの辨と親父言ひ　八重垣 狐聲
取次はたすきをくゝり〳〵出る　柳水 松山
いんの子〳〵と趙雲たゝき合ひ　櫻木 玉章
二町まち二た月はやい大晦日　初音 艸麥
皇帝はヱトのこうやくやたらはり　鶴龜 眉長

だゞ廣い蚊屋に風雅な後家一人り　櫻木 礫川
つんぼうは只有明の月ばかり　吳服 柳子
善盡し美盡し代が三歩也　玉垣 孤雲
むごい事息子はうちで座敷持ち　初瀬 樂輔
茶屋がふつ込んだか何かおつな晩　櫻木 礫川
琴高が股ぐらうろこずれが出來　吳服 里冢
いゝ普請ゑんやらやつと地形出來　名木 萬仁
米俵一本にさゝせしよつて行く　鹿子 賤丸
借本をつうつとゞもり讀で居る　櫻木 礫川
大黒のおはら籠りは和尚作　鳳凰 志夕
きとう流でもまゐらぬは新造の手　名木 マイダ
田樂を子が燒き親は味噌を付け　初音 龜鳥
水溜り座頭桂馬のやうに飛び　玉垣 彥龜坊
御菜の子萠黄の紐でしばられる　蓬萊 礫川
辨當をかついたやつが口こゞと　櫻木 藥研
ける事はおいて轉んでおつ潰し　鹿十 牛賀
渡し舟木の鳶口でおつとめる　玉垣 狐雲
腹さんざ喰てさんしよの方がゑゝ　蓬萊 礫川
小間物屋娘を下たに取りたがり　名木 雨夕
居候たんこぶの有る蚊屋をつり　蓬萊 礫川

隣有り抔と屁をひる安い儒者　名木　雨夕
骨はいるぞえとからかさ貸て遣り　蓬萊　礫川
おれが金おれが遣ふにたがなんと　櫻木　同
倒れ者二百で御悩へいゆ也　蓬萊　同
今は何をやかくすべき五両出し　杜若　香貞
野馬臺のやうに剃てる搶天窓　初音　曉鳥
小便に春屋草摺たゝみ上げ　櫻木　吹唐
切落し其手でおこし買て喰ひ　蓬萊　礫川
縛り上げ先ふんどしをしめさせろ　櫻木　五嶺
毛虱を女房にうつし叱られる　鹿子　琴我
中で氣のよささふなのに下女かぶせ　いろは　青狸
湯の中でひる屁の玉は肩へ浮き　蓬萊　礫川

上之部

龍田山てり葉の色も顔に出す　鹿子連　玉章
時ならざるをくはせたも孝の内　玉垣　春駒
申譯榊ともみぢ乳兄弟　櫻木　青露
白石はいふほどの事先手なり　鹿子　青露
四十八文字で京都も江戸もふり　杜若　箕山
始皇帝あほうに民を苦しめる　鹿子　花夕

朝敵の三疋みえる十二疋　櫻木　玉章
八千の枝葉をちらす簫の音　初瀬　只鶴
いゝ趣向拔身を琴でねせつける　鹿子　青露
一つ身は母の袂のとりあはせ　櫻木　霞朝
芋が子も鳥羽へはゑごくあたる也　鶴龜　柳雨
鹽々ととけて家中は離散する　櫻木　青露
蟋蟀富士でかふのは月たらず　同　雨夕
両替屋車力は若衆まじり也　鹿子　青露
八朔にかげとけのする水道尻　櫻木　青露
四五會目時に女房の再吟味　蓬萊　礫川
もういゝ〱と楠めしかゝへ　同　同
相模から髮をほどいて伊豆でゆひ　杜若　シクト
惣仕廻一年立ず居宅まで　名木　マイダ
よき泊りの候八つ山のあなた　櫻木　玉章

中之部

寸にして其氣あるのは禿なり　蓬萊連　礫川
新世帶こはめしにでき粥にでき　櫻木　雨夕
蟲氣づき亭主まご〱〱し　鹿子　琴我
能くみれば龜一本に牛九本　櫻木　マイダ
五つ目に男やもめが五百人　名木　松都

法師武者兜のうへに毛をはやし　櫻木　青露
最初まづ御らんに入る煙草盆　櫻木　狐弟
後世ねがふ餘力に嫁いびるなり　蓬萊　礫川
契情に通夜をしてゐるあさぎうら　櫻木　玉章
ゆでたこの樣に淸盛くるしがり　初瀨　松成
木像ののぼりのあるが月行事　櫻木　雨夕
お針の子こじき仕立の下着なり　鹿子　玉章
馬鹿な事とめた女は日雇なり　同　玉章
石垣をくぢつてあるくうなぎつり　櫻木　青露
天蓋は酢にしてくれと和尙いひ　鹿子　牛賀
大一座なんでもいゝはふむ氣なり　櫻木　礫川
もめるはず花よめのゆび九本あり　鹿子　和里
牡丹餠はまがきに一人するてゐる　櫻木　マイダ

前之部

源左衞門そつと乘てはそつとおり　鹿子　青露
さいづちを島田崩しにたがひ〳〵　櫻木　雨夕
實盛が討死ほどに後家つくり　鹿子　玉章
わつちかえ八里甏こおきやあがれ　櫻木　礫川
飛鳥山なんとよんだか珠數を出し　鹿子　如雀
もてたよりふられた方がわる睡い　櫻井　靑露
とらまへるやうに出て行座頭の坊　鹿子　馬遊
竊竿へおんあぼきやあは間に合ず　櫻木　マイダ
いゝひより戶板の皮をひつぺがし　鹿子　一交
生醉の手や足四つ手ひろいこみ　八重垣　狐聲
いやらしい下女前垂をふみしだき　鹿子　玉章
しなの者つき屋が上みに立ん事　櫻木　礫川
鬼にかな棒すぎだのに美しい　鹿子　青露
きん玉のやすむ隙なきちんこ切り　櫻木　五嶺
人なみに座頭の見るは夢ばかり　鹿子　一交
やれそれといふ內破風を蹴破られ　櫻木　礫川
下の口うへより早く物を言ひ　初瀨　振袖
むね打を杓子でたゝく信濃もの　櫻木　青露
是が又毒であるまい物ならば　蓬萊　礫川
よし町のさがりをけつの滯り　櫻木　和泰

上之部

弓筆の跡をのこして御凱陣　櫻木連シクト
百首にも只有明の月ばかり　蓬萊　礫川
はうじやうゑ時政鶴の奉行也　櫻木　青露
鶴はほり龜はかためる車留　鹿子　玉章

和氣のいゝ勅使は清く奏聞し　杜若　箕山
三日にはついて五日は家根に葺き　玉垣　孤雲
三つゆびで教へ七尺飛こさせ　鶴亀　柳雨
仲の町桃の天々たるをうる　鹿子　青露
それゑがをふむなと翁告給ふ　初音　古鳥
五つ草はせたい道具で間にあはせ　櫻木　玉章
ぬれ事は小町神泉苑ばかり　鹿子　玉章
二幅ない達摩は武士の腹はいで　櫻木　青露
白石の中手で門をせきにする　玉垣　春駒
うつくしさ火のしをかける朝歸り　鹿子　玉章
相性は聞たし年はかくしたし　名木　素口
鬮とりは禿に耳をなぶられる　蓬萊　礫川
錢づかひ上手にしたは安房守　鹿子　玉章
足音の小道へよらぬ三會目　八重垣　狐聲
後ろから見ればりつぱな持參なり　初瀬　振袖
たいめんの幕で仲人引あはせ　櫻木　如雀

中之部

ほたて貝吹よせた程うはぞうり　櫻木連　カタル
行たならやつぱ行たにしておきな　鹿子　馬遊
桑をとる女にほれてひよんな事　同　定岡

いゝ質屋いばくの内にもやうもの　名木　雨夕
れいこくへ禿ふろしき持てかけ　蓬萊　礫川
ふかく／＼と息子敵地に捕はれる　櫻木　青露
ゆびをなめてはほうりこむ枕紙　同　玉章
かこはれへ旦那せんげと急使ひ　杜若　箕山
大そうな取にげかけおちは徐福　玉垣　孤雲
かたまつた六字と七字喧嘩づら　鹿子　森鳥
竹馬は輪乘をすると直がきまり　名木　雨夕
ぺんぺこと一所にしまふ寒念佛　蓬萊　礫川
報謝米楊枝やほどに出して置　櫻木　和恭
猿廻し一と鞭あてゝ禮をさせ　初音　錦鳥
精進をするが二度ぞひ氣にくはぬ　いろは　是樂
龜井戸はかぐら堂までしやみなり　鹿子　琴我
ある夜ふしぎの夢を見て富を買ひ　櫻木　青露
初がつを高くはないとかはぬやつ　初音　東鳥
遠く遊ばず地ごくだの藝者だの　櫻木　カタル
葬禮を大ごみにする回向院　鹿子　森鳥

前之部

源左衛門貧乏神に見かぎられ　八重垣　一口
此人にして此やまひのむとゆく　鹿子　玉章

妾が親古里さぶくねだるなり　櫻木　シクト
伊勢やが花見番たばこうんとつめ　鹿子　玉章
琴爪をはめさゝくれをうば出かし　櫻木　シクト
越中をめがねで親父巡見し　初音　曉鳥
釘四本丑みつ頃におきて打ち　櫻木　青露
おぼうさん屹度默つて居ておくれ　鹿子　楚雀
鏡とぎ米さし三本持て居る　名木　雨夕
ねぼけたる小僧ちりけにてあやち　鳳凰　松山
茶わん酒どうかしびれのきれた面　名木　雨夕
すこすぼめつきや吹殼手へはたく　鹿子　青露
耳の穴くぢるがあんましまひなり　櫻木　礫川
大部やで御用ぐび〳〵しかられる　初瀬　竹子
けちはさみ下女はやつたら口をまげ　流水　松山

上之部

點のうち人のない水を御獻上　玉垣連　春駒
一山へ新錢をまく御上棟　名木　雨夕
はん昌さ榎の場所へ銀包　櫻木　玉章
一手すき王へ助言をしらべたり　鹿子　玉章
お妾の寐耳へ水は國家老　同　礫川

呉の國で目ぬきの男伍子胥也　櫻木　玉章
店うけへ口をすぼめる孟が母　蓬萊　礫川
手の皮を門口でむく暑氣見廻ひ　鹿子　玉章
うつくしさ生れたまゝで引とられ　櫻木　玉章
楊貴妃は馬捨場にてさいごなり　鹿子　玉章
右大將金をいかしてつかひすて　櫻木　玉章
御曹子十四人めに熊をきり　鹿子　玉章
四つ手かご魯の昌平も立て場也　櫻木　青露
奸計に落入りなつてなりすへる　鹿子　青露
りゝしさは八丁目ごと金屛風　櫻木　菅裏
張良も土橋へいつて二度ふられ　鹿子　青露
植木やへ賚朝みんなうりはらひ　櫻木　玉章
武内とりあげぢゞの元祖なり　鹿子　吹唐
堀江町春狂言を夏見せる　玉垣　春駒
も一つで道鬼入道うめられず　鹿子　菅裏

中之部

鑓持は御門々々をなでまはし　櫻木連　魚交
上總は晝間越前は夜るまはり　鳳凰　志夕
どつからか子を晝見せへ借て來る　櫻木　青露
老若の交代をする二十軒　櫻木　青露

渡邊は手持ぶさたでなくかへり　杜若　香貞
紋日前小ゆびの先へ客をのせ　初瀬　斗丸
座敷牢千々に物こそかなしけれ　蓬萊　礫川
どらであひ日高の寺に着て居る　鹿子　如雀
人いづくんぞかくさんや後家の事　杜若　香貞
きくらげは俵にしろと小西下知　蓬萊　吹唐
臭骸を和尚のいだく不屆さ　同　礫川
いゝにつけ惡いにつけてあれが事　鹿子　馬遊
猿田彦ひにくの間にあせをかき　櫻木　巾布
村ぶげんよめ近鄕の名代もの　鹿子　箕山
よみうりは一册うると咳ばらひ　櫻木　巾布
嫁菜をばねぎり海老やでくらつてる　鹿子　箕山
丙午しつかり重荷つけて來る　櫻木　巾布
見物の下知にしたがふ下手將棊　鹿子　吹唐
靑つきりぐつとひんのみついと迯　櫻木　マイダ
熟とまじめになつておもんみる　鹿子　只鶴

前之部

王よりは飛車が逃たいへた將棊　櫻木連卷　葉
なまなかにかた目見えると無藝也　鹿子　可孝
帶に笛はさんでこゝが揚り口　櫻木　四溪

雨もりの穴を女房につゝつかせ　鹿子　牛賀
緋ぢりめん虎の皮よりおそろしい　櫻木　四溪
七の段調布欠落でもしたし　鹿子　玉章
御やしきは馬傾城はひつじ也　櫻木　マイダ
氣の毒さ御師であげたり下したり　鹿子　玉章
へつゝいは下女の居眠る後栖　櫻木　靑露
いゝむすめむこはといへば八人目　鹿子　喜佐二
輕井澤おしよく定紋つきの夜具　杜若　箕山
十の字のしりをまげるを嫁おぼえ　鳳凰　志夕
德利をさかさだと下女ほめられる　櫻木　雨夕
蹴躓よつぽどいつてしかみづら　鹿子　喜佐三
買にくい藥行燈に目が四つ　玉垣　春駒
おのが罪おのれをせめる紙帳の屁　鹿子　礫川
闇夜にともしび殿樣夜ばひなり　櫻木　菅裏
陰德をほどこし過て下女はらみ　名木　雨夕

上之部

賤が家も桃の頃には院の御所　蓬萊　礫川
吉備よくもくもは日本の味方也　鹿子　楚鶴
庭つくり殿の助言で石をする　初音　古鳥

つかねど此鐘空までひゞくなり　櫻木　期程
佛在世岐王と妓女は尼になり　鹿子　玉章
御氣に入り糸もかしこき女なり　杜若　箕山
桑原の中から勅使三度立ち　櫻木　玉章
こゝをよくきゝやと母おや小聲也　鹿子　賤丸
簫の音を閭楚の耳はかんにたへ　櫻木　青露
且もつていそぐと見えぬ能舞臺　蓬萊　礫川
くもの事普門品にはときのこし　櫻木　如雀
畔からも田からも母はいつて見る　初音　期程
孝よりも雪は不孝が出來勝手　初瀨　竹子
前後十二年干戈をまじへたり　櫻木　礫川
奥がらうやくにたゝない男也　櫻木　玉章
けだものか鳥かおぼつかなしで讀　杜若　春駒
梅干は口をすくして異見する　初瀨　留人
須田町にありさうな物白うるり　玉垣　春駒
會者定離三線山がひゞくなり　杜若　箕山
雪月花内にいられぬ道具なり　鹿子　森鳥

中之部

腰張はまゐらせ候ではかどらず　初音連カテウ
見ればみるほど此文は實のやう　櫻木　孤弟
ラリルレロタチツテトには儒者困　蓬萊　礫川
片うでになる旦方は茨木屋　鹿子　丸龍
源左衞門雪の中から出た男　櫻木　巾布
綿やの二階へんてつな三味のおと　初瀨　斗丸
はんれいは度々欠おちをした男　櫻木　青露
中條の功者は一人づゝころし　蓬萊　門柳
おもしろい火宅を和尙持てゐる　櫻木　礫川
がく屋には敵も味方も入り亂れ　鹿子　花夕
五戒より和尙やつかい保つてる　櫻木　菅裏
清凉寺もう〳〵こはいけまん有　蓬萊　門柳
客人に夜伽をつけるはやるやつ　櫻木　玉章
鳴神も雲のうへまでだらくする　蓬萊　礫川
年をへし糸のみたれでかさぬなり　櫻木　是樂
雛様をしまつたやうに呂布をぶひ　鹿子　玉章
菅原々々と時平うろたゆる　名木　雨夕
方丈の室に入後家あだなゝり　初音　曉鳥
たしない顏を持てゆくまつぱだか　櫻木　玉章
一升でも飮むが一詩はなんとして　鹿子　定岡

前之部

岡引はたいこ捕手は禿なり　櫻木　礫川

根つぎ前だに萬歳やたらほめ　蓬萊　礫川
ひなをしまふと人間の直をつける　玉垣　儘成
さもさうず淺黄ふられた物がたり　蓬萊　礫川
竹鑓で突つきちらし手をにぎり　櫻木　マイタ
紅閨にひとりむしやくしや淺黄裏　初音　曉鳥
はき溜の鶴へせげんははごをかけ　櫻木　是樂
ばちびんでごせの手を引仲のよさ　鹿子　楚雀
新芋はあんぽつかごで暑氣見廻ひ　名木　雨夕
六味丸のんでる側にいゝ女房　蓬萊　礫川
毛のはへたもゝ引で來る講頭　櫻木　マイタ
直がなつて唐なす片荷ろじであけ　初音　カテウ
八つ過のなりで部屋がた宿さがり　櫻木　草麥
うり物に疵がついたとやりてねぢ　鹿子　馬友
もみ上げの長いのが下女疵に玉　玉垣　シクト
小便も高縄だけにたれて行く　初瀬　斗丸
庚申に包をしよはせ野雪隠　櫻木　古鳥
突出しは杉本流ではやるなり　鹿子　青露

上之部

法眼のひねつた松は五百坪　鹿子　玉章

歩をとめて角道通り御佛詣　名木　雨夕
香の札客はかんむりばかりめし　初瀬　ヒコ
はつのぼり源平兩家出てさわぎ　鹿子　楚雀
石山で出來た書物のやはらかさ　初瀬　市東
すでの事きやらで豆腐をたく所　鹿子　玉章
百首でも歌仙でも猿山の中　初瀬　斗丸
大根を積とは見えぬ吉野丸　櫻木　草麥
宮重といふ武者賊をしりぞける　蓬萊　礫川
短いものにまかれたは本能寺　櫻木　期程
八九合目まで桃賣つみあげる　初音　カテウ
落書をしたで高德名をのこし　杜若　箕山
くもの子のやうに松永うち碎き　櫻木　青露
大森の茶づけ十九ではつにくひ　初音　草夢
三ケの津大坂町は廓外と　鹿子　左柳
師直が耳たぶちよいと侍從ひき　櫻木　礫川
金銀をとられた跡の歩あしらひ　初音　志水
禿計りが眞白な足で居る　櫻木　期程
上總もの一里一字の宗旨なり　初瀬　斗丸
藏宿は宰我子貢にくどかれる　杜若　香貞

中之部

初瀬連竹子　てうちんにしんば釣鐘ほどかゝり

きなんしは俗おいでるは出家なり　櫻木　マイタ

雷りの屋根へ渡邊とんと落ち　初音　志水

一本をかくしかねるに九本まで　櫻木　五嶺

取替た芝居も見たしかんざしも　蓬莱　志夕

羨む君が錢あつて色男　鹿子　琴我

袈裟をきり坊主に成はゑゝさとり　初音　志水

酒はかりなく其くせに美しい　杜若　香貞

色の名を娘火鉢へやたらかき　鹿子　馬遊

延ませぬ内と證文まいて居る　櫻木　古鳥

朝がへり諸事だんまりで輕くすみ　蓬莱　礫川

よみうりは箸一本でめしをくひ　名木　雨夕

顔をしかめ〳〵雲長打つて居る　鹿子　吹唐

狼は作事門から朝がへり　櫻木　四溪

義によつて鹽のかたまり石になり　櫻木　青露

うけてゆく禿の跡へおく禿　蓬莱　礫川

景清の內に賴朝居そうろう　初音　カテウ

中白でずいぶんいゝと子路が母　櫻木　是樂

大門へかつこみさうにしておろし　鹿子　可孝

鍔際に成て正宗たれられる　櫻木　如雀

前之部

鹿子連喜佐子　居る内はしごきをよして客の帶

もてる筈よく〳〵きけば女房なり　櫻木　礫川

李太白近所の酒やかりだらけ　鹿子　琴成

飯はしらげをいとはねと舂や入れ　杜若　其流

物いひがなをると江戸でしぬ氣也　初音　カテウ

初鰹下戸は煮てくふあぢきなし　櫻木　マイタ

はつがつを女房は質を請たがり　蓬莱　礫川

其目玉だれを見やるとしうとばゝ　櫻木　マイタ

麻病もあいつがわざと伍子胥いひ　初音　曉鳥

寺參りされてはあはぬ百旦那　櫻木　玉章

人先に音を目付る座頭の坊　鹿子　馬遊

見せさきで熟談をする素一片　櫻木　マイタ

かけ取が來ると作兵衛うなり出し　蓬莱　礫川

眞のべらぼうはけいかしんふよう　櫻木　玉章

下心有てつばなをせげんかひ　蓬莱　礫川

上總守に越前の番がしら　杜若　香貞

江戸橋へいぢかり股でやつとゆき　鹿子　吹唐

ぬけ裏で馬のりはなし失てんげり　櫻木　マイタ

是はよい御道具と外科詠てる　鹿子　吹唐

立臼をいしきとは下女ぬかしたり　櫻木 青狸

上之部

年寄を杖に皇后御頼み　櫻木連 青露
六十に九をかけ國をうごかさず　鹿子 横好
さゝがにの糸は日本の道しるべ　紅葉 加丈
めかりのきいた神職が鎌の役　鹿子 玉章
ものゝふは日歸り嫁は三年目　櫻木 箕山
わたりもの置て玉體すでの事　杜若 シクト
行がけの駄賃實盛ねだり出し　櫻木 香貞
あれか是かと聟のふがきれず　鳳凰 志夕
母親のなさけがどらのもとで也　櫻木 喜佐子
一本を片身づゝ賣る樋竹屋　鹿子 樂佳
日本だと孟母櫻の馬場あたり　鹿子 箕山
仲達はあぶない琴と引かへす　初音 志水
いたい事朔望及び十三夜　櫻木 礫川
張良は八百餘騎と吹なされ　鹿子 青露
留守居茶やらうそく鑓が二三本　櫻木 礫川
紀文が女房鼠木戸うつ氣也　蓬萊 礫川
初暦遣り手たづねる巳なる金　櫻木 琴我

御悋氣のなぐれに下女は度々困り　鹿子 牛賀
捨るなよ莖も漬ろと押領使　櫻木 巾布
一手すき石田香車の所へにげ　鹿子 青露

中之部

入王になつてかな棒引て出る　櫻木連 玉章
芋が子も二十餘年は頭だち　鶴亀 柳雨
どうする氣だか細見を女房見る　櫻木 礫川
兄弟は蜆と鍋に名をのこし　杜若 シクト
引事によそのむすこをやたらほめ　櫻木 キサコ
堀の内から來た文と女房出し　鹿子 青露
ねから氣なしに小豆飯弟くひ　櫻木 礫川
美しさおやはとんびにたとへられ　初瀬 竹子
よみ賣の草履はいたをつゐぞみず　名木 雨夕
胴は七つ目しり尾は四目十目　鹿子 森雨
ねぢ上戸句讀のきれぬくだをまき　櫻木 琴我
ゑりくづの娘を出店さづけられ　鹿子 琴我
手は雅だが朱料いまだでぶつこはし　櫻木 礫川
豈むすこ市からすぐに歸るべき　鹿子 琴我
さみせんを引かきむしる猿廻し　櫻木 礫川
何もかも恰好ものとやたらゆき　名木 マイタ

大一座すべた女郎もうかぶなり　櫻木 馬遊
見てくれろ是が二兩のたばこ入　蓬萊 礫川
ぼた餅に沽分を添て聟引手　櫻木 玉章
ほめぬ事面らのうれたる女房也　蓬萊 礫川

前之部

女房を一寸毒づく旅むかひ　櫻木連カタル
鉈豆でぶちかへつたで直が出來ず　初音 盤谷
むらさきも菰も一夜に着る所　櫻木 玉章
ばかされた樣に樂天船にたち　鹿子 玉章
吉田町かせぐをかゝァ鼻にかけ　櫻木 玉章
新そばこせなア氣ばつて二袋　鹿子 琴我
吹がらを掬してつき屋吸つける　櫻木 礫川
どいつがわざか總帳へ土左衞門　蓬萊 礫川
目見え下女飯をにちやくしあんする　櫻木 玉章
越前は肥後の加勢をたのむ也　蓬萊 礫川
姥が屁は子のほつぺたで紛かし　いろは 青狸
切みせの口舌くそでもくらへなり　蓬萊 礫川

十會目

上之部

武を納るに最上の御國なり　いろは連 青狸

天帝へ道の眞とを御うつたへ　鹿子 琴我
元日が亥の日で御遊せはしなし　紅葉 紀鳥
清見潟あたりへ徐福船をつけ　鹿子 琴我
頼政は其後水羽つくろはせ　櫻木 琴我
七情を六十條にかいつらね　蓬萊 礫川
眉にしわよせて紹巴は脇をつけ　櫻木 玉章
五十四夜品川月を見せる所　蓬萊 玉章
祐天寺わざはひの根をおがませる　玉垣 孤雲
巳の日は不忍午の日はしのぶ也　鹿子 森鳥
うろたへて曹操髭を切てすて　櫻木 菅裏
やはりくに手の皮をむきやめる　玉垣 春駒
殿樣を杵屋仕立に妾する　櫻木 礫川
七分のたましいに大きな伽藍也　名木 雨夕
糸道がついては猫もかけ出さず　櫻木 賤丸
棟梁が斧を持のはやす普請　玉垣 其流
田を行もあせを行もと知恵をつけ　櫻木 巾布
江口にて佛も一度緋ぢりめん　杜若 シクト
下手將棋土産にしろと角を出し　櫻木 雨夕
あまい酢で母に一ぱいくはせてる　初瀬 ヒコ

中之部

手遊びのろうずを仕込地藏堂　櫻木連 玉章
宗盛が實父家名は六郎兵衛　鹿子 玉章
席正しからざるやつを隱居あげ　櫻木 礫川
一本は松だが六本きがしれず　初音 古鳥
朝歸り身の毛もよだつ内の首尾　櫻木 楚雀
玉だれの内に大夫はまつぱだか　初音 盤谷
つゝとした所がいゝとむす子つれ　櫻木 巾布
ちやるめると赤熊を太刀で引擔ぎ　初音 カテウ
嚢よりは山吹のないつらい事　櫻木 横好
ばかされたやうに渡るは諏訪の池　杜若 シクト
たいこ持扨どんつくでいけぬもの　櫻木 賤丸
仲の町女房の來るは一文字　蓬萊 礫川
かな棒で由緒正しき物もらひ　櫻木 玉章
女房はよはせたやつを聞たがる　鹿子 琴我
二八月質屋の藏もあれるなり　櫻木 マイタ
ゆき廻りかん廻り飲むてんば女郎　名木 マイタ
夜やさむき衣やうすき居候　櫻木 雨夕
口と手で十六町の女なり　鹿子 信樂
もう跡は出來ぬ〳〵と五六人　櫻木 馬遊
貸が有ので密男は氣が強し　鹿子 花夕

夕立のやうにやりては笑ひ出し　名木 有幸
誠や子を見る事ぜげんにしかず　櫻木 礫川
韓信があたまのうへで一つひり　同 同
金のよの中あれがまア嫁だわさ　蓬萊 礫川
釜平の氣でのさばるは妾が兄　櫻木 玉章
べからずへせなア繋いで叱られる　蓬萊 礫川
鋲打の駕籠に乘のはとんびの子　名木 萬仁
やぶれかぶれで名代をおつかじめ　蓬萊 礫川
猿が餅ならばとぬかすにくい下女　㝵 㝵
たばねたら乳母は五本も這入そふ　櫻木 横好

誹風柳多留三十五篇 終

誹風柳多留三十六篇

今や川叟の選は正を専とし、月々にこがね花咲麹町の句々は、此道のさかへを著す、こや聖の御代しろしめす頃、みちのくよりはじめて黄金を奉しに、支那人の歌にさかへを祝し奉りしに比すべし、よてかの國の名のむつにむつをかさねし編の柳だるとなして、繁茂を菅裏願ふ、

卯の春

竹子評

掃溜は御恐れ多いたとへなり　玉章
はづかしくない丸綿を夏は取り　枡水
橋杭へ素袍のすれる御山内　ムク鳥
平人の中でも國司四角張り　志水
つゝぱまり次第に六位かぶるなり　矢正
悪ねだりソリヤ大家さん／＼　カテウ

喰事が先大一と定家撰り　門柳
もみくちやな顔に名僧取まかれ　紀鳥
舞臺から飛氣でかさを一本かし　スヽメ
細見でおぼえ咄の間をあはせ　至青
どろぼうが出ると後見井戸を埋　東子
金箱の三重したはいなりさま　三枝
歌でさへ人目しのぶはむづかしい　留人
椀をふけとは花嫁の役ぶそく　白兎
白太夫もしやてうまんかとあんじ　ト丸
禿ぼさつびんずるの御作なり　カテウ
袖留は向の人を七度よび　ト丸
福壽草兄貴のそばに居候　五丁
兄いだけだまされ安い室の梅　品能
出がたりに土手が二つにおつぺしよれ　萬龜
高札を眼で見るそばで耳で見る　松葉
熊手でも行ぬは質の弓ながし　竹二
片身こそ今は煮つける安松魚　雨夕
しはいやつ酒の使に下戸を遣り　金勝
那須の與市さまを駒込だとおぼえ　松歌
此くらゐだがあげるかと市の客　雨夕

二千九百九十九人は水牛　里冢
ふとつてう喰物らしく譽られる　其笠
喰料はすこしふとつたほうがよし　横好
和らぐ風俗いつしかにぽてれん　カテウ

門柳評

臣は水君は船にて御上覽　玉章
御開運五常を表す御扇子　孤雲
御太鼓に鳩おどろかぬおだやかさ　玉章
御奉書を納め具足へ御拜禮　カテウ
ふき合ずに御産所へ月がさし　雨夕
兩方の翁和漢の眼をさまし　玉章
氷室から雪は雲井へのぼるなり　其笠
聖代の鳥は五日の風がまへ　礫川
道中に廿日も盛る牡丹なり　矢正
あらたかさ劔をわたる雨のあし　古鳥
雲井にまがふしら波とは石川　里鳥
御ほうらつ春はべつかう秋は伽羅　玉章
賢者のためし千代もひく小松殿　柳雨
櫻には山吹のちる名處なり　藻鯉
勝色を簾に見せる二度のかけ　曉鳥

木とわらは和漢二人のちゑ者也　玉章
あんに相違をさせたのは市の正　カテウ
初登山七千兩の德がつき　留人
急へんに安いと書は春の事　春駒
山號寺號金錢は富貴なり　龜鳥
孝心のかゞみにうつる寒の水　矢正
祇園會の派手は女の叉を出し　龜鳥
梅の室から雪の出る暑い事　三松
折つたのは紫詠めたのは鹿子　箕山
花ぼろでばあをして居る子ぼんのう　スゞメ
花の山屛風をこして聟は迯げ　紀鳥
夜半の水龍も左がきいて呑　龜鳥
舟を折かけて禿はこいで居る　雨夕
快晴さ不二の裾野に江戸の町　玉章
申に手をのばし足をば亥にのばし　春駒
水行の坊主御所迄どなりこみ　古鳥
呑喰で龍と馬とは名がたかし　玉章
年あけの釜は金氣を取たあと　葉石
どろぼうが出ると後見井戸をうめ　東子
身あがりをつれのらへ出る輕井澤　雨夕

大黒のお腹ごもりは和尚作　志夕

狐聲評

御再建額も源氏の光る君　香貞
賢者のためし千代もひく小松殿　柳雨
物心なくて二度目の母をまち　市風
ごうけつさ草履を取つたお手に笏　東水
黄金はお先白銀あとにもち　玉章
思ひ知る坂に車で人だのみ　スヾメ
けちな晩すいてうこうけいに一人　春駒
相合の傘でしつぽりぬれて出る　寸尺
かち〳〵と朝まく明きのすゞり箱　志水
面白さ二日に夢を見そこなひ　期程
名僧の杢目にうかむ麹町　東水
盗人をおつたてかうのものと成　雨夕
さや町をぬけると江戸の目貫也　市風
おやぢ橋壽命の長いこまをうり　柳鳥
爪の灯を藏の常燈明にあげ　其笠
ならはねば娘はの字は出來ぬ也　留人
源氏繪は雲のはれ間へ書たやう　鯉角
一葉も岸をはなれる柳橋　龜鳥

とんで來て子の筆を取る金屏風　龜鳥
せんたくや近所の人のあかで喰ひ　樂輔
小松原かほりみちくる嫁の禮　錦鳥
年玉にばけもの本を持參くれ　矢正
かたきうち胴切にしてのしを付け　柳雨
猪の熊のやき筆にするざうにばし　矢正
六文を四十二文に遣ふ智慧　雨夕
急の腹ふばこに遣ふ忠臣さ　東水
繪馬やからお身丈ほどな道を聞き　ムク鳥
御寺號をかつた童も神となり　門柳
あいた耳つんぼうにする二丁町　金勝
愛染はゑくぼを守る面でなし　曉鳥
金きんざんが十はかに見える也　門柳
まんぢうをのつきるちよきにかしは餅　古鳥
婚禮のあすげくわを呼ぶばからしさ　東水
無禮講夕べの芋がぶつさらひ　礫川
舟後光さかさにおがむ湯くみ也　其笠
おなら茶といつていなか出笑はれる　松歌

門柳評

入込みに浪はうたせぬ名所なり　ホテウ

神と君麟と鳳とに召たまひ　玉章
瓢簞でとんぼおさへたごうけつさ　雨夕
御利運なはず原迄が御味方　孤雲
金紋の山は櫻の惣模様　松葉
入相は大門口の日の出なり　里雀
道法の掟もきめた擬法珠也　矢正
御神慮は松も齢の通りはえ　香貞
日本の掃溜め月の名處なり　萬龜
大坂の鬮切わけて江戸へ取り　志水
月雪に花を息子はまきちらし　留人
うすぐらい内から起て墨をねり　五鳥
伊達に眼は二ついらぬ國家老　金勝
饅頭はうまくまゐつたはかりごと　雨夕
飛鳥山うつむくものは榨ばかり　五町
五闔はやぶり五百では門の番　同
おや〳〵とまくる御庭の大井川　三枝
行義よき程が繼つ子あはれ也　藻鯉
薄をばよく逃水とつけんした　矢正
鶯の片言梅は笑ひ出し　玉章
木食の馳走はしごを持歩行　蘆風

一とつぶを馬附にする足の豆　左逸
有がたさ書寐に計り母衣を脊負　矢正
越後から俄に雪の衣がへ　柳鳥
眞つ黒になつてはたらく白鼠　白兎
風樂やつぱり風をひいて居る　如石
十の字の名代は酒ととうがらし　苦笑
旗色を湯出て顯す平家蟹　里雀
唐櫛を女房のしやぶる初がつを　矢正
山の神あれて御祭のびる也　如石
びんづるをもちやげて痔持撫る也　竹子
あら莚孔雀のおりる初紋日　如丈
藍瓶へ壺井の水を入れて染め　カテウ
六右衞門の中で五右衞門行なはれ　同
二番目が出ると天井馬はする　同
横町の煮うりは竹の御吸物　苦笑
せり出しは片身おろしのやうな舟　柳雨
山伏はときん〳〵と氣をもたせ　志水
尤さ黑猫ほどにはへて居る　期程
今日は是切ゆびをひつこぬき　古鳥

玉章評

御獻上たら〱汗をかいて來る　三枝
繁昌さ諸國の船を袖へ入れ　門柳
西へ行く不二の烟は風になり　卜丸
定紋の無い門前に市をなし　里冢
瓦師を召すはきのふの御饗應　竹子
八鷹が寄つて雀の亂を聞き　都柳
外の津の土は伽羅では踏ぬ也　門柳
鐺も通らぬが鐺のわたし也　龜鳥
お竹在所へ紫の雲で行き　如雀
くだものへ禮義をのこす沓冠　雨夕
具足櫃米びつよりは邪魔にされ　虻内
鶯はやはらか雀かたい事　マイタ
とがしめを勸進帳で言ひらき　香貞
千代の春あてに鶴やは仕込む也　門柳
開元の錢じんじやうな爪の跡　三枝
春をわける雨は大つぼ流にふり　同
孝行のやうにずぶ六蚊にくはれ　曉鳥
ごふく店奥へ行程年が寄り　金勝
箔附の若さまにしてしかられる　葉石
大名を胴切りにする子安婆々　カテウ

氷ではひや〱させる太神樂　龜鳥
銀ぎせる國といふ字でひつぱたき　古鳥
飴賣の見せはひさしの上へ出し　古鳥
いたいはず酒の相手に鐺が出る　柳雨
羅漢のさいせんふし〱へ上る也　矢正
明る日はだんごもかたくなつて喰　松葉
八月目に流れて女房くやむ也　如石
傘と草履のいらぬ一月寺　柳鳥
天人へ賣る氣か紅や空へ出し　仕小
すげかへになるどら打のやにつこさ　三枝
鹽の目を十七八で又はじめ　里雀
持參嫁見逢珍物茶やでする　スゞメ
井戸端へ人の噂を汲に行き　東鳥
笠の置やうで男の口も寄せ　卜丸
手負猪柳橋から走るなり　期程
品川の客取月の年増也　矢正
申の日に三行半は書てよし　志夕
腹ぶとを一口くつて頬をやき　金勝
旅の留守天井くゝりまくら也　集鳥

狐聲評

驚かぬ鷄は群集の中を行き　春駒
堀かねとよみしは麹町あたり　同
鑓も通らぬが鎧のわたし也　龜鳥
鎧着た人は渡さぬ有がたさ　五鳥
和漢の飛人八艘と七尺　春駒
三度目重ね扇はうち死し　五丁
盆へ水長家が寄つて歸す也　カテウ
直が出來て達磨九年の眼を開き　白兎
二十軒あたり矢筈の幕をうち　柳雨
孝となり不孝ともなる橋一つ　里冢
松の月枝にかけたりはづしたり　紀鳥
中の能い友にわかれて琴を止め　一德
あるへいの出來立飴とじやうを張　草麥
親も子も土用見舞は駕で行き　加丈
大黑も俵も見えるにはか雨　龜鳥
濡れた鼠に大黑を一本かし　一德
三疋の猿を心に嫁は飼ひ　同
宿に居る日も黑白の境論　玉章
かれ切つた手で生花はいきて居る　歌宿
齒がわるくなると石臼眼の療治　竹子

下女が手でばり〳〵たゝむ繻子の帶　松葉
百人の中へ關所を三つする　一德
けいこのは猫と馬程音がちがひ　左逸
虫賣の家根に四五ヶ所亭座敷　集鳥
いゝ上戸一ぱい吞むと肘をまげ　一德
晝夜共寐ずに忠義を立通し　射夕
吹けば飛ぶやうな將棊に附木の歩　龜鳥
大ちがひ芝と谷中のいろはなり　玉章
ようおほそ召すと式部が端女言ひ　雨夕
其元みだれ奥樣のさまよなり　同
伍子胥が口を閉たならそれ見たか　春駒
傘は下駄の鼻緒ですれる所　苦笑
男よりひつさきよいと天狗言ひ　住小
明き川は宇治の合戰程に見え　玉章
人のふんどしで瀧水浴るなり　蘆風
草苅よりも洗濯のやかましさ　門柳
生身魂屁をひる事と下女思ひ　カテウ
みんな鵜で居るに鵜鴿馬鹿なやつ　歌宿
相州の聟佐殿はきつい事　柳雨

賞山評

佛法と慈悲心鳥も知つて住み　龜鳥
聖德と佛意に叶ふ御名がつき　志夕
佛道は梅が枝備道竹で鳴き　竹二
未來記のちゑは佛意のうへを行　虵内
十八を越して恩知る入院なり　曉烏
十二支が出切り奥州御凱陣　一德
月を詠み古鄕の山をかゞやかせ　松歌
三人で救ひ諸人がすくはれる　古鳥
江戸見物の隨一はせにとかね　呉竹
百里餘を其日がへりの御なぐさみ　龜鳥
ふだらくと瑠理は龍虎の御山也　玉章
江戸中へ七分通りはひゞく也　寬奴
有がたき事人間も放生會　雨夕
三ヶ所は地名で知れる四神の名　門柳
御父子して千と百とを御ゑらみ　是樂
何よりの手向貞女をたてとほし　期程
稻妻を明りに孝の寺まゐり　柳雨
義經の褥五爪めの龍で出來　是樂
下の句で御意の螢は光るなり　斗丸
紫は男の國の水で染め　有幸

さる人の紋は寶に切つける　五丁
嵐山花の名所とおもはれず　萬仁
鳥籠を棟へ出しとく大伽羅　有幸
朝日出て二十餘年の夢は覺め　品能
大の字を和やうに書て點をうち　東子
其のちは衣でとほる一の谷　矢正
名はかくれても名の高い山櫻　雨夕
梅に來て佛經をなく麗かさ　青露
鶯も蛙もおなじ歌のとも　礫川
風雅さは横に折目のからごろも　雨夕
竹の根がはつて紅葉は枯るなり　東子
目と山と耳と口との名句なり　牛賀
精進が十二八十八魚類　如雀
ひらくのも卷のも達磨名が高し　礫川
女には見せぬ諸國のいゝ男　玉章
此鐘がとけましたかと芝で聞き　期程
庚申はころんだ程に箔を置き　古鳥
たんぽゝをつんでるとこへ謠也　東子
車留心置なく嫁とほり　同
奈良櫻はとんだ遠くへにほひ　市風

品川に袖深川に裾があり　龜鳥
鑓の石突でいかけは湯をわかし　有幸
三度迄通ひお蜀を手に入れる　三枝
幕よりもすだれの花と息子いひ　花夕
醫者が匙なげればさしを百なげる　萬仁
爪はぢきされたは荊軻秦舞陽　春駒
佛力で折々嫁は氣らく也　留人
せきこんで去り狀の出る寺と聞き　市風
やはらかな國で狐はかたくなり　紀鳥
なんのその大高盛を七つ喰ひ　盤谷
極こんい生まで肴を二百遣り　二丁
おもしろさ花ちる里へ身をつくし　三松
せめてもの事と墓所へ乳をしぼり　錦鳥
翁草ばせをの事としつたふり　春駒
木くらげへ五七の桐の江府をつけ　二町
かたびらをわけるはうすい緣者也　古鳥
鬼板へ夕立豆をまくごとし　有幸
尻目よりうは目遣ひに嫁あんど　狸疊
うへしたのないおそなへは無常也　マイタ
お女郎にせなあどろ田を棒にふり　ト丸

孝行もしたし身うけも猶したし　留人
産で死に聟げし人にすでの事　シクト
格子先眼の寄る所が玉ぞろひ　寛奴
盆踊りわつて遣ふは男の子　一德
柄に手をかけて弔おつかける　古鳥
地ごくには虎が澤山あると見え　射夕
賴朝の寐がへり枕おつゝぶし　錦鳥
此菊石見付なんだと中のよさ　其誠
梅やしき唐天竺をおんまはし　萬龜
蛇が出ればやはり蚊の出る江戸の富士　木賀
八幡を土弓のいのるこざかしさ　丸龍
結城縞下女大望のおもひたち　東夷
日本から極樂わづか五十間　青露

草麥評

金銀は玉座で錢はおひざ元　錦鳥
東風にさそはれて散行梅の花　龜鳥
極樂の世界こくうに花がふり　三朝
龍燈は鶴と龜との間ひへあげ　文集
ちり給ふのちの御所には花の王　龜鳥
古井戸へ利久すんでにはまる所　是樂

いつ迄も櫻ざめせぬ名句なり　龜鳥
平家方死んでおごらぬ穴をほり　松葉
御枕のそばにゆうれいねずの番　花夕
琴の音と琵琶の音を聞夜の雨　竹子
品川は月でみいらの出來る所　琴我
當住のつくりしつみは木ぶりなり　矢正
妙法の德でお粥が飯になり　留人
護持院は迷ひの種を拜ませる　カテウ
正直のかうべにやどる鍋まつり　白兎
一人りもの二人になつてかんこ鳥　同
すゝきを耳へいれられてつんぼ也　矢正
夫からは點取雨のふるごとく　龜鳥
竹婦人とは鼠の子をはらみ　白兎
針程な事でしばるは肥後の守　歌宿
ふてえやつ皮をむく氣で柚をくひ　竹子
質置の言葉多きは品たらず　曉鳥
一年の中を流れる御祓川　矢正
翌日からは佛へわたす御祓川　キメイ
有がたさ晝とんび迄放生會　留人
念佛をあつめてあるく燒つぎや　ト丸

細工びんほう玉川の水あけ　苔笑
御大家へ出すは正宗手が多し　龜鳥
しんめやうのそさう一寸一匁　盤谷
わすれかね反魂丹をたいて見る　曉鳥
九代めはでんがくをすきみそをつけ　吳竹
死人に口なし誕生に赤の飯　柳鳥
香のもの番人の付東海寺　巾布
五郎八に後家のおきせはおつかぶせ　留人
文武のほまれ時の鳥夜の鳥　雨夕
追善に寄て百物がたりする　集鳥
紙花を海へとばして大さはぎ　礫川
風引きの虱藥をすでの事　市風
雨腕と思ふ翁の雪と雨　竹二
白むくにかはれ手の出ぬ革羽折　カナウ
山屋だと先から伽羅と知つて居る　錦鳥
尻の早さうな不動は大さがみ　橫好
水損を田舍判人まつて居る　三章
唐人にいらぬ道具は毛ぬき也　集鳥
普門品五つへらして茶見せなり　簀山
バア／＼と一向げせぬくまゑとり　亭々

三年は啞となるのも孝の道　一徳
のべ小ぎくちん〳〵鴨の火をあふぎ　矢正
佛法さかん七種も祝す也　同
六人のうちをほいろへ一人り入れ　雨夕
春日野は東海道を八もんじ　玉章
撫さすり四百四病ではげ給ひ　鬼柳
立つものを寐かす計りの御奉公　横好
ヨイ〳〵の羽織ハイ〳〵天王着る　射夕
やり梅で東ゑびすにつゝこまれ　玉章
鶯の初音で龍も眼をさまし　加丈
三寸と六字はもえぬ御寶物　カテウ
天色を一首の歌で黑くする　里鶴
はづかしい夢の咄しは間が抜ける　磯鶴
まゝよかはよは居つゞけの合言葉　青狸
重兵衛かうじ町長兵衛は谷中　ムク鳥
鐵炮を扇ではなす講釋師　柳鳥
せいろうははたき小鍋は大あたり　カテウ
赤貝の味いは蛸のあじがする　宗壽
扁鵲は四月中ばに匕をなげ　三枝
眼が覺て眠つた親を思ひ出し　雨夕

今のはんどくかなつんぼうと書き　キメイ
燈のきえたあすも淋しく無い所　如雀
侍喰ず高やうじ買て居る　玉章
通し矢の數は京でもほとゝぎす　東鳥
弓手に長箱めてにはぶらをさげ　竹二
勘當をゆるされたむす施主に立ち　萬仁
三階は敵もみかたもいりみだれ　期程
高どうろ丁子がしらを天狗入れ　有幸
夏しぶく冬甘くなる堀江町　竹馬
入口はとき〴〵人をぶちころし　歌宿
とうきん東水布袋もゑこう也　マイタ

矢正評

慈悲の二字世に行とゞく有がたさ　志夕
水慕ふ梅に手向の初音也　曉鳥
御立身時には足らぬ數をうち　未學
御山號三河に緣の靈地也　孤雲
八の字で九の鳥を書く御神號　集鳥
月と日をかすかに讀は遣唐使　錦鳥
秋の雪饅もいつぱい付て出る　未學
ほんそくをかへしについの箱で來る　青露

燒香の先きへたつたが跡を立て　斗馬

長い額寺號も一字あまり也　カテウ

論に歯が立たず經文喰やぶり　龜鳥

世の中の早いは兎からす也　伊庭

佛法の序幕公家悪地藏尊　カテウ

大坂は眞田兄くじあたりなり　東夷

いが天窓取ればくり〳〵坊主なり　香貞

五字七字言ふは六字の手向なり　五丁

我一人り人手はかりぬ御たん生　龜鳥

後家の名は蠏より廣い發句也　市風

一文もいらず山から鐘木づゑ　青露

常盤は子のため常盤津は親のため　虻内

萬節より萬句にせいと末期也　草麥

面白く牛の引出すとらの卷　三枝

目出度さは米を三つに割た人　二町

目かくしを手の鳴町の窓へうち　覆露

兼好の頃からきうにうまくなり　末學

桶はざま今川水をかいほされ　錦鳥

本望さ米やでかゆをふるまはれ　紀鳥

家督公事佛も出れば鬼も出る　カテウ

唐茄子のあくびへ炭團はうばらせ　三松

極樂へたふとい寺の鐘きこえ　曉馬

いゝ娘佛がくしに三とせなり　青露

佛師やは閻魔を帳につける也　龜鳥

八朔のやうにならんだいゝ法事　期程

施餓鬼舟ぶるいけんぞくごつた〳〵　其誠

そうばんで彌陀は延たりちゃんだり　森鳥

惜しい事花の咲木を珠數にする　青露

飛梅も逆水も世に名をのこし　一德

一片で百萬遍の施主につき　三松

眼をあくと眠る間が五十年　夢中

きつい事戀のぼたいにぬれ佛　竹子

御悔を座頭は鼻で泣て居る　斗馬

放生會木綿に戻る二十八　曉鳥

だにほどな銀もつゝめばひんがよし　志夕

梅やしきから天竺へおん廻し　萬龜

おくり火で嫁は姑をいぶし出し　萬仁

幕にからまつて引込紫衣が成　虻内

通な尼ざんげ交りにいけんする　亭々

あさつてときめてほろびたこんやの子　玉章

お竹どんおがむからとは口説あて　円柳
ほうばいのお松くわんおんさまだらけ　琴我
すつぽんのやうにちりげへ一しづく　市風
生き水も取りやあがつたり死水も　文集
けいこ本新六行くと調市よみ　集鳥
般若面柳の下で茶を呑ませ　盤谷
一ぜんの箸でよみ賣二人りくひ　古鳥
辻番の八兵衛が出て馬をのみ　里柳
ひやうたんの干物へ秤入て置き　眉長
扇凧もちろんはりがつよい也　呉竹
一ぺんのゑかう地ごくのおふせ也　古鳥
叶福助おやの日にとゝを喰ひ　是樂
士農工商どうしやうも金がなし　芋洗
和のゑづを芋やせうがのやうに書き　東子
とらまへたやうに樽貫のつかゝり　同
齒のはへた袴で守る番手桶　鬼柳
綿細工三つぼしへ來てひよくらひよい　東鳥
一味よりも客の調子をよく合せ　留人
燒餅をやいてかゝあはかしは餅　家壽
尻がへをかけてすみ湯をつかつてる　白泉

蓮の茶や首をおやして鉦覗き　三松
駒ぐるみにきつてどつかどうたれる　振袖
汝元來枯木の如し妾が咎が　木賀

山路評

金色の吉の字花の雲井也　青露
有がたさ空音をはかる關はなし　一德
日本のひとり娘は甘ちなり　有幸
眞中はうら波左右としの波　未學
ふきかへて御車返す不破の關　丸龍
放生會虚空に金をまきちらし　玉章
寺だけに式部靑物二把ならべ　琴我
十月は歌仙の中に鎭座也　如雀
蕣のさかり久しき靈地なり　一德
何よりの手向貞女を立て通し　期程
藤色のむらさきになる秋の月　留人
名はかくれても名の高い山櫻　雨夕
桐一葉ちると鳳凰くろうがり　是樂
七人の一座古風な琵琶でしやれ　伊六
親にさへ逢はれぬ程の運のよさ　竹子
瓶をわる音で日本へ名がひゞき　同

梅に鳥水に蛙の鳴わかれ　一徳
佛力で寺の言葉がつゝとよめ　孤雲
御普代はない吉原の櫻なり　艸麥
河内では何しら波のたゝみざん　門柳
討死を持病としたも忠義也　カテウ
雪や氷とへだゝれどおなじ孝　牛賀
橘をふところにしておさらばえ　琴我
上瑠理へ笛を合せる御曹子　柳鳥
月の輪へ上人熊をつれたまふ　玉章
花塚のかげで色ある工みする　麥雨
名の高さ折つても匂ふ窓の梅　春駒
琵琶の音に調子の狂ふ日枝おろし　東鳥
鳥の名も二つにわかる隅田川　錦鳥
能い垢を落して光る后也　香貞
野暮で無い方へ飛ゆく赤とんぼ　竹二
四角な帯をやはらかにしめるなり　如雀
三筋町ふみまよふ程世帯染み　斗丸
兄弟も親子もならぶ百人一首　シクト
名の高い人はよし原すゞめ也　箕山
矢筈の紋の上下を繪馬や持ち　玉章

口眞似も一字ちがつて名歌也　五町
ほつたんは月から光るものがたり　礫川
樊噲がこぬと鞘へはおさまらず　カテウ
おいらんのくろう花よりだんご也　竹二
とうふやはかんむりよりも嬉しがり　盤谷
物がたり中ざしきには琵琶の音　同
晦日にも月が出んすとつめられる　雨夕
ひよ鳥は鷲の尻尾に付て行き　三枝
きつい事むさし生れは月承知　玉章
土手へ鳥居がめりこんだやうに見え　門柳
細布と高尾は胸が合ぬなり　曉鳥
仁和寺の茶番鼎でぶつこはし　如雀
梅が枝に佛經をきくうらゝかさ　青露
茶と鹿で喜撰たび〳〵寝そびれる　琴我
黒白の名の付たのは神と俗　枡水
三十二をも廿四にうる忠右衛門　横好
どつちだときくのは安いとし男　其流
つきもせぬ鐘に浪花の花がちり　門柳
代筆を兼好いつそうるさがり　同
主人相しらず番頭子もち也　琴我

初手の二字には皆まよふかなの文　花夕
野髮のやうに亂れたでよまぬ也　横好
大黒は佛の笛を身にまとひ　盤谷
稻妻をゐかりに孝の寺まゐり　同
爪先もはたらいたのは諸葛亮　柳雨
くらやみのはれ着千金出して染め　孤雲
仁和寺はおどり漢楚はちから持　二町
新織の出來ぬは蓮の糸ばかり　蛇内
七月はおがみ八九はながめてる　玉章
僧正に鴛奏をする御十念　萬仁
尉と姥とでつるかめを磨いてる　芋洗
早いものだと重箱のふたを取る　巾布
極樂の雲は東の水でそめ　三朝
藤澤の蓮は時候の外に咲き　竹子
家內無事やくしゆやでとそかつてくる　未學
とうふやは一そく飛に間が直り　龜鳥
三まいで行極樂のおもしろさ　松歌
はい〳〵〳〵を千言ふと鶴が岡　礫川
ちつた跡迄香の殘る窓の梅　如雀
さうあげに赤染衛門ならばせる　松山

知つた人計りへしひる子の給仕　カテウ
行く者はちうやを捨ず四手猪牙　白兎
夕立にぬれぬは古歌を知たやつ　左逸
かねと太鼓で息子はまよつてる　柚露
まはりつくらに負たのは項羽也　如雀
ゆうとさい有つて城廓持こたへ　松山
鴛ちんと十三貫文嫁は出し　玉章
さそふ水ゐるを聞ずにそとば也　市風
いたい事疊の上へ松のかげ　玉章
手遊を古郷へかざる老萊子　三松
萬木にすぐれて琴の音をしらべ　雨夕
又煠をはくかと隣やしき言ひ　カテウ
十六夜といふお局も胸さわぎ　青狸
小舟もゆたのたゆたの堀へつき　礫川
楊枝見せ人の口はにかゝる也　松歌
江戸ならば深川邊に喜撰住み　集鳥
酢きにがきうまきは一つ水の味　□□
たんざくも逆さに書はあはれなり　□□
寒がり坊に樂天はなし　錦鳥
百人に女二人は好きらひ　里柳

とんだ事脅の親玉をひつちばり　礫川
空色を一首の歌で黒くする　里鶴
讀と音へ杜若も骨を折る役者　春駒
保元と壽永の間を琵琶の音　曉鳥
とちぐるひ〳〵思案の外へ出る　牛賀
此お玉杓子めらがと工藤言ひ　品能
新造はどうだと氷や手を握り　竹二
千人目鼻をつまんで湯をあびせ　呉竹
せみ丸を取卷て居るいゝ法事　未學
目に付が出來女房が鼻につき　里雀
そんな事ぞんじませぬと鶴を折り　曉鳥

川柳評

御引馬半分白くあはれなり　曉鳥
丹誠さ柄杓で塔を組あげる　榮馬
なまぐさい鍋も集る百年忌　曉鳥
身まかり給ふいまは迄集の事　市風
經文を土足で秘密わたらせる　カテウ
愁腸の的をはづさぬあづさ弓　森鳥
我ものて自由にならぬ五十年　品能
から衣昔男のかたみなり　丸龍

六人のうちをほいろへ一人り入れ　雨夕
うち敷は花に嵐のさう模樣　木葉
大法會眼のあるとない紫衣二人　青露
花なればこそ高野にも女郎花　其誠
御入滅時候にもれた虫の聲　雨夕
鯰から鯉をお寺へしんせられ　有幸
清僧もいわしの鍋はのぞく也　矢正
氣のどくさきげん上戸も席により　期程
惜しい事八十七で隱居死に　竹子
御物入寛永寺とは名付たり　春駒
御詠歌を式部は耳にちかく聞き　雨夕
善女人くわんおんの前二十人　玉章
靈鷲山四十四年の長談義　盤谷
はたにする小袖をのけて記念分け　萬仁
はづかしさ信女は赤し乳は黑し　鼠聲
佛敵は舊鼠かへつて經をはみ　古鳥
風呂敷の古筆で母を思ひ出し　是樂
親の恩歯がぬけてからかみしめる　東鳥
燒つぎや人のそさうで世を渡る　振袖
角兵衛獅子せなあらしいのが笛をふき　萬龜

安御使者二八の軒に鑓をたて　玉章
茶ぶくろをしよつて飛出す籠の鳥　伊庭
靈物は朝日見物夕日なり　美德
日利安へ桃をかつたは日暮がた　車道
町は松寺は蘇鉄で名が高し　錦鳥
位牌迄はめに付てる百だんな　萬仁
有がたさひしやくで塔を組あげる　榮馬
大だんなはらみた經はお大こく　姬小
亭主火の車で女房を地ごく　雨夕
大黑を和尙布袋にしてこまり　同
賞罰たゞしく指を切り髮を切り　玉章
觀音へ通夜とは息子しん手也　礫川
四文はおよぎ十二文とんで行　左逸
撫牛のやうに寢て居るけちな晩　松歌
すいなさいどは象をやめ八文字　門柳
あくたいをつれぶしにするぼんおどり　口口
茶わんやはしんたいぐるみけつまづき　竹子
地藏より扨氣のいゝはおびんづる　松葉
茗荷谷元鍋島の跡だろう　艸麥
ソシイをくらひ水を呑二日ゑひ　曉鳥

閨女者かへすく\に米の事　龜石
土藏から調市大教に行はれ　香貞
切先のまくれた遣人じゆずを持ち　矢正
馬が關止めたが關はやぶられた　集鳥
水ぎはで藤太土產に大こまり　志水
石の寶殿たてまへにこまるなり　加丈
辛崎がいゝと石山つぶれ也　品能
佛師やをしても弘法喰かねず　留人
賴光も鬼が下戶ならどうだろう　磯鶴
小粒でも是見てくれの大がらん　伊六
二日醉かぶとを着たる心もち　同
立て居て和尙は顏を十をしかめ　都柳
生きて居て年忌かぞへる中風病　至善
忠信は負腹たつたやうに見え　靑鯉
くわんおんの功能書は念彼の段　琴我
北方極樂と息子悟道する　姬小
五位六位などは文覺ふみ倒し　一德
三度迄かよひお獨を手に入れる　三枝
くわんせおん石の枕じや濡事師　斗丸
追善を夫婦の膳とおもつてる　虎溪

ぢゞいとばゞあが有つたとさ嫁こまり　竹子
五百萬石とそつぽうくらはせる　礫川
ゆうれいも知盛計り裾があり　曉鳥
京の鐘つかぬ先から大へこみ　松葉
本尊は借錢檀で寐しやか也　白兎
高座からどつとわらはせなんまいだ　萬仁
夜廻りに所化めんぼうをついて出る　龜石
胴豚をおして見い〳〵樽を買ひ　鼠聲
ばかされた息子芒をしよつてくる　猿松
仲國が馬は枝豆くつて居る　錦鳥
衣川鎧もちろんこけおどし　矢正
俗納所よく〳〵きけば舅なり　里柳
撫角をいせや六文いれて遣り　市東
されども持參空房にまされるか　礫川
新造と白牛酪に入あげる　同
閨女はふてんの下にそつと住み　儘成
相の山馬のしつぽで猫が鳴き　春駒
田舍馬士内證咄のさわがしさ　竹馬
油やはまげによだれをたらしこみ　竹子
水入れは湯で屁をひるにことならず　キメイ

あの事の咄に成とよねんなし　青露
にくい事佛いますが如くなり　其山
無我むしんお竹が部家へ這て行き　呉竹
おしやかさまおしいらこらをねかし者　礫川
化ものをよな〳〵下女はこたへてる　同
釜じめがきたにあひにく米がなし　苦樂
緣と時節をまつてると下女ぬかし　三松
麹町狐を馬にのせて來る　加丈
ぐわんいしくどくモウどうもいけぬ也　森鳥
五十町馬はゆるしてのせもする　白泉
さとつてはブウとひる屁も佛也　礫川

俳風
柳多留三十六篇　終

俳風柳多留三十七篇

今や名だゝるこいし川の文日翁は、いにしへの川やなぎの正流にして、今の柳と枝川をまじえてむつみ深し、その翁のゑらめるは、彼すぐなる柳の正風にもとづきて、いやな風にはなびくことなく、五風十雨に此道のみのりを願はるゝものから、三十七つの編に柳の繼木して著すと言ふことを、愚朦をかえりみず菅裏が序す、

文化四卯の秋

川柳風句合吉例角力會　文日堂評

上の部

一眼で御家の出りため直し　美德
桂男の名所から式部書き　賤丸
富士の裾引張てゐる三ヶ國　扇橋
大きな内を建たからせまい也　美德
他國へは扇でひゃく芝の鐘　丸龍
美しい車力熊野のゆ場へ來る　波靜

上の部

七歌仙ともいつゝべきたから船　和里
目前のふしぎ石橋山の鳩　花夕
櫻ちる度に茶びんの火が起り　一秀
日本の夢は一夜に湧いて出る　谷水
夫とおもひの浪風は山に立ち　木賀
日本から駿河の見えるいゝ日和　青柳
不二山をひたひへ書いたいゝ女　都柳
張ごふう牡丹の散たあす納め　木賀

中の部

冠は澤山ゑぼし魚はなし　美德
やるせなく小ぬかをあびる時鳥　丸龍
おもしろく袂をしぼる汐干狩　同
江戸中を笑せに來る三河者　和里
奥樣のしらべをそしるばち當り　花夕
望れて嫁ちんぼうを引つこぬき　一秀
杜若色の鉢卷牡丹する　木賀
うつくしさ不二の麓は柳なり　集馬

中の部

北敵の伏勢駒をのり放し　一秀
兼好がいけんに付て底をいれ　谷水
衿元に足のはへてる美しさ　森烏
五七五の手に薬で足らぬよしの山　花夕
將門をよこ目でにらむきりうけん　柳子
白むくも黒むくになる最期也　集馬
どつちの露も晝顔間に合ず　丸龍
十たび目の盃はもう水いらず　木賀

同

花屋の見世に生ひしげる柳樽　千之
勝角力衣類いぎやうの花が降り　森烏
歌がるた片手に袖をしぼりつゝ　眉長
關口は馬鹿になる種つくる所　馬遊
髭のない楊國忠がのし上り　柳雨
ほうかむり律義にむすぶ村いさみ　水守
藥種屋の道具は坂と堀になり　木賀
てんがいを取ると丸ぐけ角どがたち　一秀

前の部

あんどんの掃除を見ると子供逃げ　紀樂
姉さんと言ひなと藝子つめり上げ　賤丸
ゑぼし魚てんびん棒は太刀のやう　眉長
肩すかししよい投にする猿廻し　燕子
似せと本手をかんがへる三會目　千之
芋賣の女房年子をしよひかゝへ　豆人
くれそうにして紅ゐの舌を出し　扇橋
大道へからかさをさすいゝ天氣　天作

同

菊岡が年季二味程かぢる也　谷水
お常さんお富さん一つやんなゝ　森烏
念佛でもろく弔ふ小室燒　吹唐
ざくろ口人を呑んだり戻したり　豆人
鬼の子のふんどし猫の革でする　吹唐
雷の子をすばしりの臍で飼ひ　露秀
四郎兵衛が尻はずらりつと黒塀　花夕
一枚で一分の紙を牽頭もち　谷水

同

さて苦勞嫁さと芋をたべ過し　保良
邪魔がられますとうなぎを撰かへし　一秀
居る所くぼむびせん徳利の布袋　美德

すがゝきを足に彈かせる雪駄連　散売
早太が寐ごと此猿め〱　一秀
底豆のかはり能因坐りだこ　谷水
ぼろとすさとが喜三太がかすり也　木賀
兩國で下女すゝり上げ〱　柳雨
道鏡が母馬の夢見て孕み　賤丸
大笑ひ弘法さまにゑんをつけ　都柳
すきな下女らせん絞にくぢら帶　豆人
小便を流れくわんじよへ生酔たれ　美德
指でくで赤ねをぬらす村芝居　丸龍
十目の見る所にて犬つるみ　賤丸
目無しで能いは赤貝と座頭の坊　谷水
房州もやはか相撲におとるべき　燕子

以上

文日堂評

二會目

光陰の暮明き花にはつ霞　琴我
德若の春は粥にもはしらだて　森烏
九重に詠んで名高い八重ざくら　花夕
初卯の日まだ眠そうな臥龍梅　二蝶
萬木にすぐれ萬里の門に立ち　森烏
蓬萊の中に動かぬ大武鑑　二蝶
削つても柳出口に緣があり　琴我
やさしさは簑ない花を折て出し　花夕
市戻り神の社を坊主もち　賤貌
德本はたのみ甲斐ある名醫也　琴我
肩ぎぬをかいどりにするいゝ日和　保良
上草り狸つく〲思ふやう　賤丸
つぎ竿で三味せん堀の小鮒つり　二蝶
貫之は色の眞白さうな御名　花夕
松はしのがせ山吹はぬらす也　同
雨わきの新造鹿と鳩のやう　都柳
鷹の夢見てから息子氣がそれる　賤丸
へんぽんと妾の手からひるがへり　亦樂
鞘の毛を靜こは〲なでゝみる　琴我
はせ五文小遣帳の三番そう　森烏
松の内附木のゑふで遊山旅　和里
あつたかな居ざり四輪車なぞに乘り　吹唐
年禮の串ざし芋でちよつと留め　和里
子がかけて行内仕廻ふ除夜の獅子　丸龍

午房へも袴を着せて幕使ひ　金獅
今のかゝさん三分だとあきれた子　若蝶
二日の夜獏新まいの夢をくひ　琴我
お富士さまいくつ十三七つ也　雨江
配所でもいゝたぼのある須磨の浦　吹唐
鳥追をよこに引かせて申入れ　白主
もろこしで詠んだも百の内へいれ　花夕
仙洞附を湯好きだと下女思ひ　和里
くゞれ／＼と智恵のねえ毛唐人　吹唐
彦七が苗字をおしな五はい喰ひ　同
蝶々も羽根をば鶴に引ばられ　梅里
おちよとは船まんぢうに禁句也　亦樂
道鏡がおさな名たしか馬之介　琴我
よし町の釜のつぶしは宮芝居　都柳
こひぞつもりて大根が五十本　喜丈
鐵炮の疵年を經て鼻へぬけ　散売
御意に入るはず豆やかに下女つかへ　花夕

小石川澤藏司稲荷額奉納句　三會目　文日堂評

初午の日から子の日が七つ明き　香貞
三日月の光り照そふ御神徳　玉章
三界を守護し濟度の御影也　牛賀
武の國に至極かなひし御神號　箕山
賤の男の業をその儘御神號　丸龍
一の字は裏表なき御神官　春駒
三日月の光り尊き御山なり　似佛
十二支の内でも勇む御縁日　吹唐
夢に見てさへも能い日の御祭禮　美徳
開山の名も武藏野に縁があり　同
稲妻の鍵にて開く米の藏　春駒
翁神ゆゑに豆腐を御好み　丸龍
出來秋の姿で翁あまくだり　志丸
二月から眼明きのふえるありがたさ　美徳
咄すにも三日路かゝる富士の夢　丸龍
豐年のしるし惠方もいねの問ひ　木賀
山の名も量り無き世を守る神　天作
神力の惠みも深き小石川　都柳
極寒と極暑を二人り孝へ入る　柳雨
賽錢を一貫四十持て出る　志丸
みのりして稲穂の波もおだやかさ　轉寢

御地內へ餅の降る日の賑かさ　梅里
十七檀林は蛙の聲を聞き　門柳
三王に一王たらぬ御門番　花夕
一つぽから千里へ渡る日本橋　轉寢
豐年の雪解に澤の水はまし　二蝶
三日へ午の飛込む御緣日　雨江
そば上けてぞろ〳〵參る願解き　谷水
おもだか一と葉神農も齒が立ず　魚川
初夢に馬を見た年藏をたて　琴我
しちくどく番しうおがむ〳〵也　木賀
道德で壬生狂言の蛙出來　眉長
このしろも一と位付く初の午　吹唐
言ふ口の上から雨の降る名句　丸龍
妾が兄知章がやうに馬にのり　琴我
御緣日敷初ほどにかつぎこみ　青露
おそばは二八おひねりは二六なり　森鳥
取揚もへらも蟇目も武の內　若蝶
奧樣は氏有て召す玉のこし　丸龍
神佛の名迄よし原いきなとこ　吹唐
大石のおもしで出來るかうのもの　香貞

入相の鐘に花さくおもしろさ　一秀
のどやかさ夜宮をかけて嫁の禮　柳雨
浦島ははぐきをかんでくやしがり　和里
息子づれ九郎助一社參り也　横好
すがゝきに首尾の松風通ふらし　琴我
ふせがねを腹からこする賑かさ　春駒
宗近は仲か間の知らぬ手間を入　有幸
馬をかく及物につかふ筆のさや　萬旭
かき餅をやけと晝寢の枕上げ　柳雨
御湯花はいつ咲んすと禿聞き　有幸
かんにんの四字だと無筆知つたふり　保良
願ほどきあくぬき蕎麥はきついこと　芋洗
神樂堂二八あまりはきつい事　柳雨
初午は知れぬ野山も道がつき　梅里
ふといやつだと大根は敵を追ひ　賤丸
雪を見込に駕い駕〳〵　喜丈
御寺號を夜な〳〵喰ふ名晝也　末樂
安い庭皆緣日のなぐれ也　燕志
韓信といふ身でくゞるざくろ口　林鳥
大根ですだれの出來る寒い事　和里

兩國へ二軒でとぼす狐つ火　水守
稻妻の折れを女狐くわへてる　一交
猫を彈き馬を控て猿廻し　和里
五十軒迄六足の四つ手飛び　燕子
けちなやつ世を三角にして暮し　志夕
乳母が宿けんとくのいゝ世繼村　木賀
おきやあがれ惚たではなし藪にらめ　賤丸
大笑ひ放屁の玉と下女おぼへ　森鳥

○

神風にうちまかせたる柳哉　文日堂　礫川
文化四丁卯年二月初午　願主　森鳥
右額面模寫　補助　牛琴賤千豆　賀我丸之人

西野稻荷社額奉納句　四會目　文日堂評
不拍子も神慮にかなふ午祭り　丸龍
坂を押す車力の出來る初の午　一交
弓鑓も今はねづみの丸木橋　里遊

梅ありといつたはすいなはかりごと　琴我
つよいのもむべ山姥の子じや物を　同
吹屋姫かつら男とおないどし　森鳥
いゝ世がら羊穗にまでみのる也　梅里
わたし守今は櫻の物がたり　柳雨
琴爪で孔明あごを撫て居る　木賀
唐人とりやう師てうしがあはぬ也　柳雨
矢のごとく馬上で弓のつるが岡　琴我
三重の帶二重に廻る耻しさ　猿松
兄ははや盛りが過て吉野山　里遊
子を捨る藪とは見へぬ五丁町　若蝶
王子の尻の平尾にも光る玉　丸龍
首陽山冬の分をもつみためる　魚踊
正とうなやつ紅葉から歸る也　琴我
實盛は大ざらひ程墨をすり　萬旭
めづらしい聲啼て行き呼んで行き　花夕
冬瓜から西瓜にかはる耻しさ　白圭
ばからしうありんす國の面白さ　豆人
もぎどうにわつちや亭主が御座りやす　花夕
切落團十郎が引き出され　弓成

蚊屋の夢獏はこし粉を喰ふ心　露秀
それ見ねへなと尻を出す初がつを　賤丸
男のりん氣またぐらに角がはへ　白銀
ふんどしへだにがたかつて鬼こまり　山鳥
桐の箱から撫牛を局出し　柳雨
二の午は娘勝手をもふおぼへ　一蝶
川ごしの肩ですかして叱られる　都柳
二分と百無いと高野へ登られず　同

文化四丁卯年二月廿二日　願主　琴我
賤丸
柳下

下谷稲荷額奉納句　五會目　文日堂評

兩三度風は六度と御託宣　千之
神の田の苅穗の稲を御荷ひ　都柳
春の夜の六千兩はいゝ直段　千之
正直のかうべはすぐに正一位　扇橋
はま弓を産んだで張りがつよくなり　青柳
和歌の浦さつぱりとした浪が打　扇橋
國家を落しばなしの落ちをほり　千之

二の午はもうつながれぬ山ざくら　千之
馬貝をのりすてけふは初登山　同
八重垣になる神垣に小柳を　同
早乙女の玉苗わける田植うた　扇橋
小柳の若葉もめぐむ春氣色　都柳
神前に初午そうな柳腰　扇橋
不男も坂でつくろふぬき衣紋　青柳
玉と鍵尻と口とでにらみやひ　扇橋
猪牙で見る土手の柳はあるく樣　都柳
ないくせに月雪花としやれる也　同
虎の威もかりず賑ふ午まつり　扇橋
紫蘇の色かりて大根も梅の花　同
袖と袖指でもの言ふ四日市　散壳
ゆうてうな吟味琴だの鼓弓だの　青柳
かじかんで雪を見て居るたわけ者　都柳
一年をたつた四文でいせ屋買ひ　千之
小便が野菜と化る京の町　扇橋
龜といふ身でしやがんでる寒い事　青柳
馬の打つ太鼓のばちはかすだらけ　都柳
きん玉が上へぶらりと角兵衞獅子　同

湯でひつた屁の玉あごの下へうき　散売
女湯の湯番ひめもすにぎつてる　同
大笑ひ蘇鐵へ下女は釘を打ち　扇橋
おひねりの他力でねれる神樂堂　青柳

文化四丁卯年二月廿七日　願主　青柳

下女一題　六會目　文日堂評

下女手がら百人の首三つとり　丸龍
梅が笑ひやしたも下女すさまじい　同
變學でなければ讀ぬ下女が文　散売
御首尾よく下女は五日の風を待　喜丈
うどんげを小麥の花と下女思ひ　散売
下女が髮みだれて今朝は不首尾也　萬旭
一と涼みやつて袋へ下女はいり　魚踊
下女が親このした影で五人扶持　牛賀
柳樽下女讀んで見て腹を立ち　志丸
ゆらの戸をたゝけば下女が飛で出る　散売
かつがれた下女はさせもが露だらけ　木賀
はえぬ下女髭題目をふし拜み　扇橋
花聟の鼻つく〴〵と下女ながめ　谷水
よこ太織下女がはれ着にうつて付け　保良
墨のはだへを顯して下女は灸　柳雨
後添にならんとすらんふてへ下女　琴我
馬附ではる〴〵下女の新下り　森鳥
花道をまごつく下女に落が來る　山鳥
歌がるた下女は相撲をよく覺え　谷水
おけいはくいゝお子樣と下女目見え　花蝶
なめた下女叱ればべろり舌を出し　森鳥
のせたがるはず下女大の棚つちり　谷水
田舍下女芋にはたけにそばつかす　芋洗
あばた下女かの子まだらにぬりちらし　森鳥
よく〳〵の事か唐茄子下女は斷ち　木賀
物思ひ下女雜巾も手につかず　眉長
供の下女四分長じゆばんひけらかし　丸龍
だまり臼ひかぬが下女はきついみそ　森鳥
かりた傘何んと聞たか下女笑ひ　志丸
さがみ下女助兵衞さまの御意に入り　眉長
黑鴨の色はあひるのやうな下女　谷水
這つた翌日下女ぬる程に〳〵　賤丸
龍宮の下女鰒もあり蛸もあり　森鳥

手と尻が早いで下女は半途也　魚踊
くどかれて下女どふせうかまア待な　一交
つまみぐひいつか目に立つ下女の腹　豆人
おきやアがれ下女わつちにも小町べに　丸龍
機を織る下女ばから出し〳〵　燕子
駕わきの下女は御馬で乗おくれ　豆人
三助が悴と下女は極くこん意　柳雨
大腰に下女やりかける竿つるべ　豆人
こいたごの乗りかけで下女御江戸入　山鳥
居寐むつて下女ほそ長く屁をすかし　都柳
いもの有るかはり蛸だと下女はしやれ　魚川

居候一題　七會目　文日堂評

居候花より團子うちながめ　一秀
居候寐所で杖を尋ねてる　琴我
口がるで尻のおもたい居候　志丸
捨て置く椀が世に出る居候　梅里
かけた錢紙でいかける居候　豆人
大雪やおれも人の子居候　丸龍
今年も重年さと居候しやれ　美德

店ちんの手に葉にもなる居候　萬旭
錢までが多葉粉の中に居候　眉長
二俵呑み本ぶくをする居候　丸龍
居候酢のこんにやくを不斷喰ひ　木賀
あてのない晝寢してゐる居候　森鳥
ちしやの葉とからし計か喰ふ居候　丸龍
居候足口ともにおひやなり　金獅
居候夏釣つたのを冬かぶり　二蝶
子の祝ひ百書き入れの居候　扇橋
花の留主太の字に成て居候　豆人
居候むしの居所のいゝ男　喜丈
おはむきにはさみなどとぐ居候　森鳥
春過て引きときにする居候　琴我
居候一と皮うちで腹をたち　芋洗
雪隱で歯をみがいてる居候　扇橋
四はい目はあたり見廻す居候　琴我
居候吸がらの火で烟をやき　里遊
置てくわせるは質の利居候　酒中
居候一つどもゑにころり寢る　志丸
居候百萬べんではらがへり　豆人

居候いつもせんべいかしわ餅　酒中
居候ひだるい腹を度々かゝへ　森烏
唐茄子をはむきに誉る居候　丸龍
それさそれ夫れよあすこの居候　豆人
猫はあたるに居候ぶうるぶる　酒中
中おちはしめたもんだと居候　志丸
居候せんたくをした飯をくひ　丸龍
居候あんどん部屋の假り住居　萬旭
居候多葉粉のくきを三度こき　酒中
弔ひにたらひ手桶は居候　扇橋
小山田の散藥を呑む居候　芋洗
丸ヶしんが一ッしん足らぬ居候　二蝶
居候きまつた所はひたひ計か　柳雨
居候舛を叱つてねめられる　琴我
行燈の脊中をつかふ居候　木賀
居候内義の下知で坊が尻　若蝶
親分のすねをかぢつて居候　森烏
とぼしたであかりのたゝぬ居候　牛賀
下女と屁の對決をする居候　丸龍
居候よこねの闕もこへたやつ　二蝶

花嫁が來て居候かきつばた　扇橋

半田稻荷社額奉納句　八會目　文日堂評

春牛ば田を守る神の御祭禮　森烏
秋くれば神の荷となる種おろし　儘成
農民の鍬は打出の小づち也　千之
田を行も畔を行のも神の道　牛賀
神風にのべ臥す稻のみのりよき　散売
稻妻の恵みとゞきし田の實り　木賀
正直は眞直に行くまがりがね　豆人
寶井の名句で簑や笠が出る　丸龍
半田參りは引船の一得意　吹唐
いもはしか荷もかる〴〵と願解き　都柳
願ン満の夜につめ吉の夢を見る　賤丸
めぐり來た名所を拾ふ旅日記　里遊
日本の虎は櫻に名を殘し　花夕
大川へ暑さを捨る屋かた舟　里遊
井出の蛙は金色の水に住み　丸龍
袖笠で石屋の娘内を出る　谷水
櫻木を旅籠屋にした名歌也　丸龍

郡内と植田は富士の裾廻し　千鳥
物干へ三がの庄を植ゑならべ　里遊
地下人のけるをくつ〳〵御笑ひ　美徳
名の高い奈良茶は龜屋萬年屋　一交
桶伏は金にうらみの道成寺　吹唐
影膳は戀しい方へ向て置き　一秀
新造の咄藪から棒が出る　里遊
釋尊の茶呑友達子ども也　森鳥
うち見れば忠信尻に尾がはへる　里遊
竹馬の落武者も有る二日灸　都柳
ちりとりが中立戸板つるませる　儘成
うま事の中から松ははへて居る　木賀
あぢさいの花を法印しよつてゐる　二蝶
雪佛小僧計りの作でなし　柳子
ある時は財布にもなるつか袋　谷水
あれこれとひまなく惚る花の山　木賀
時ならぬ曲水をする太神樂　琴我
男の見えはけはひ坂ゑもん坂　花夕
雨替屋鳥居に不審紙をはる　賤丸
股引と羽織で半田行く所　吹唐

白狐と地頭にや勝れぬと知たふり　一秀
床下へのれんをかける飴屋見せ　豆人
何を種とて戀歌をば詠だやら　一秀
大笑ひ狸の穴へ手を合せ　同
びくうりしてア、四月朔日だな　美徳
大部屋の遊び竹箒をほうり　木賀
どぶへ住む蛙はそゝり歌をよみ　丸龍
安くつけ下女竹馬にはねられる　同
素人芝居かなだらいどやされる　賤丸
小便を二階からするおもしろさ　馬遊
陰陽の恵みで稻の穂を孕み　里遊

文化四丁卯三月晦日　願主　里遊

九會目　文日堂評

夢さめて須彌蒼海の恩を知り　呑能
僧正へ心づくしの御はなし　賤丸
ずぶ白くなつても若ひはたち山　魚川
御上りの鯉紫の水に住み　谷水
つめのはへてる傘をさすいゝ和尚　和里
辨天の御秘藏花の君子也　散㲉

今捨る子にありたけの乳を呑せ　一秀
恩の門しんの闇にも笠をぬぎ　儘成
朝顔がしぼんで起す嫁の孝　柳雫
風のよすがで梅の木は飛で來る　花夕
ほの〴〵に出て足引の花戻り　丸龍
町地寺地にこりはてる孟が母　琴成
月宮殿の正客に息子なり　木賀
仲の町櫻も身をばもたぬ所　琴我
駒下駄の高くいなゝく仲の町　如熊
わすれても汲なといふが玉に疵　紀樂
キの字やの松尾上より名が高し　散殼
月にはくまあり熊には月があり　美德
薄雲が猫は鼠をとらぬなり　谷水
時鳥ともよみそうな文字は鵺　琴我
運のなさめかけ二た月早く立　和里
おつかさん又越すのかと孟子言ひ　紀樂
衣々の香をなつかしみ居つゞける　琴我
おしろいを雪程にぬる不二びたひ　谷水
名の高いのは鮒五郎鯉太郎　琴我
運のいゝ柳は今に根が殘り　呑能

だアまつて百萬べんを嫁はくり　賤丸
晝三はやわらかにして齒がたゝず　丸龍
山八つ越して南へ買ひに行　里遊
何くわぬ顔で男にけつまづき　儘成
捨利にて流もあへぬ嫁の質　琴我
年の豆呼ばずに通る日本橋　豆人
土手を來る客を二階で當つくら　儘成
交なさるなよ是はあか是はむし　柳雨
浪の奥にも寺ぞ住む常念佛　二蝶
女房の爪で暮していく田流　里遊
嫁手がら鍾馗で鬼の角がおれ　吹唐
相ぼれのおさきに遣ふ隣の子　二蝶
くら替に出る氣遣手をたておろし　賤丸
乘るのらぬ氣を引て見る口車　猿山
入梅はどう這ひますと下女は聞き　豆人
こはだの里を鮓屋だと下女思ひ　二蝶
春過て夏氣に富士の皮がむけ　都柳
さん俵かぶつて駈る小ぬか雨　飛入
翁助に十八下で祝ふなり　琴我
あくまでくらひさがりいず〳〵　一秀

春夏の釋迦よこたてに拜まれる　森鳥
立て居て草履を直す手長島　吹唐
うどんげの實は傾城の不調法　柳雫
廿五日は坂に押す車留め　木賀
おれが樣をなあと三浦の遣手言ひ　丸龍
茶わん酒鐵炮汁の口ぐすり　三星
けちな戀路はくらやみを這て行　花夕
玉ものまへより此物前がこはひ　都柳
其面らでからしをかけと朝がへり　賤丸
馬鹿に付る藥を兩國で買ひ　一秀
中の足計りはさゝぬ股引屋　吹唐
釣出した鰒がふくれて扱こまり　二蝶
とんだ坊主だと地藏を洗つてる　一秀

十會目　文日堂評

相生のいはれを語る尉と姥　里遊
切れ味も毛色もいらぬ御獻上　竹子
眞直に天までも行孝の道　豆人
繁昌さ土の底迄藏が出來　里遊
羽おり着て鎧を渡るおだやかさ　飛入

蛇が出ると犬は尻ぽをたれて逃　都柳
堅いはず鹽できたへた國家老　一秀
五日目のはしやぎが十日目でしめり　花夕
極月の十五日から今にほめ　留人
近江から一夜に咲いた芙蓉峯　散殼
肩をならぶる物もなき咲や姫　里遊
一軸の達磨ものりの緣を引き　柳雨
田の鳥が澤に立つたで名歌出來　萬旭
安樂の種を蒔くにも鍬づかひ　散殼
一聲は月に影さすほとゝぎす　水守
よし切は難波も伊勢も同じ聲　留人
都鳥今に吾妻のなみだ雨　花夕
御物見へ指さきの出るいゝ男　里遊
蜀王も鳥になつては名が高し　谷水
あやめふく軒を鍾馗の裾ではき　牛賀
御神樂の初はやみらめつちや也　斗丸
やかましい女房を去つて釣に出る　木賀
降る雪は鰒垣根のは鰹なり　谷水
めりやすはいれど足袋屋は入らぬ所　女琴糸
今産んだ子にちをつけるはつ幟　谷水

あまたの唐人きこへませぬと泣き　二蝶
千疋よりも壹疋に嫁こまり　牛賀
色男歌仙と百で花紅葉　花夕
ちりぬるを追ふな〳〵といの字下知　森鳥
氣のない顔で味噌一つ上戸喰ひ　梅里
梅やしき口をすくして連が出來　吹唐
業平は養られ喜撰は煎じられ　柳雫
虎の引解へのつてる矢大臣　柳雨
嵯峨の奥佛の飯も捨られる　飛入
これは〳〵とばかり花の五丁町　里遊
竹の子の番人見れば藪にらめ　牛賀
二か國は逃げ神國で堅くなり　梅里
庭涼鼠が嫁を追つかける　木賀
かけむくの直を胸にそれおもんみる　呑能
金を取るまでは親仁に殿をつけ　波靜
極樂はおさきまつくらなる所　花夕
白瓜が出ると木瓜は眞赤也　美德
五十軒しめ出しにする馬鹿もあり　燕子
おゆふさんどうだ未だかとおせき來る　志丸
五つ目は姑小言の三番そう　扇橋

うはのそら足のぶらつく奴凧　文琴糸
疊さし臂も道具の內へ入れ　若蝶
深草と冬瓜はむだな足と花　森鳥
ゆびぬきへ爪のはへたを嫁は出し　一秀
部屋持の印すなはちへの字也　美德
過ぎますとふるまひ水で下戸はしやれ　斗丸
こはい物見たし生娘封を切り　同
さし引に浪の打くる雨替屋　志丸
西海の波に眞赤な土左衛門　扇橋
一生懸命炭をなげ〳〵　谷水
飯計り十人なみの居候　欠陶
五月雨がよくたれますとせなアいひ　牛賀
本名は素見あざ名は油むし　呑能
切落みかんの皮が飛行する　賤丸
新世帶かせぎ男に喰ひ女　豆人
出來合のしびん道鏡間に合ず　吹唐
根をおして聞ば根ぶとは横根也　賤丸
はら四文とつたか見たか夜鷹小家　燕子
寢そびれた下女ふんどしで二疋取り　斗丸
ついぞない朝寐七十七日目　柳雨

おそろしい口生ま物を丸で呑み　花夕

大塚波切不動尊額奉納句　文日堂評

しら波もあたりへよらぬ御姿　春駒
邪の波を利劔で切り治め　紀樂
人はすなはち尊體の獨鈷也　森鳥
のどやかさ瀧から波へ押廻し　春駒
くりからは大きな塚の目貫也　美德
其のちは御劔のぬれぬおだやかさ　丸龍
戸があいて見れば晝間の神樂也　一交
三社は託宣三神はかなづかひ　丸龍
おひねりが當り御戸帳波を打　眉長
如菩薩とあちらこちらの御利益　横好
折釘の御堂へひゃく願ほどき　眉長
御月番かな物細工あそばされ　春駒
雪の謎とけて御簾を卷揚る　二蝶
わが庵は月と華との間だなり　孤雲
草木にない花の散る勝角力　一交
島臺の向ふに鶯が一羽見え　煎長
はま荻と伊勢よみそうな所也　二蝶

鳥の目と足は世上の寶也　谷水
中のよさ嫁こう〳〵をきざんでる　雨江
當今は嫁仙洞は母の也　其流
唐音で徐福さんげをして登り　琴我
東南の風に臥龍は香をおこし　勇賀
空にしられた雪の降るさむいこと　一交
かじかんで竹の子をむく孝心さ　雨夕
才藏に名をあてられて下女は逃　梅鳥
には鳥が鳴て日本の夜が明る　和里
居つゞけを女房目尻を上げて待　若蝶
出口まで送るすがたも柳也　喜丈
明王のうしろ大きなとさか也　粉升
こたつから毬をつく子をつめたがり　柳雨
釋杖で肩から御名をゆすり出し　賤丸
不二山へ大太ぼつちはけつまづき　吹唐
祖師の日へ一を加へて二を懸る　同
女房と官位で舘大祝ひ　花夕
かけ取りは門松に迄つゝかゝり　轉寢
ぶちこわすようにごま壇扣き立　友交
二日には松の位の程が知れ　米蟲

四郎兵衛が關へ手形を女房出し　悟遠
和かんのいけん切り張とはたを切　玉章
佛だんの門番をする鶴と龜　扇橋
心も空に名月を息子みる　花夕
見世びらきわづかな欲に市をなし　森鳥
にらめ付られて見物どつとほめ　夢中
孝行さ五百の内を尋てる　文俄
持參金さァ出されゝば出してみな　保良
奥方の琴を三味する妾方　森鳥
目の玉の時計ぜんまゐ咽で鳴り　都柳
箱根からあちらの嫁を幕に呼　賤丸
あんどんで啼ば室では笑つてる　雨江
こむそばやとちめん棒をふりまわし　吹唐
かみを引つれ萬字屋の巴屋の　丸龍
惣花に二階せましとたむろする　琴我
鳥かごの口にひよつ子客を付　楚雀
わた入も一そくに飛時鳥　平壺
陰陽のふいごの風は鼻へぬけ　水守
村のかうしやくよこ板に水のやう　和里
おいらんへなどゝこんがらしやれ給ふ　マイタ

くひつみの海老にあたまを引かゝれ　轉寝
大晦日狐は人の尾を笑ひ　梅里
あをのけにころんで金を拾ふ也　喜丈
つけやすかなぞとまんぢう賣てゐる　風鳥
きせんなら裸の茶だと信濃言ひ　枝成
腹のいゝ神馬たいこを打てゐる　有幸
おぶさると思やには鳥何かする　一秀
くろう人の山伏ひたひぬいて居る　風鳥
ひたひの瘤は昨ばんの門どちがひ　賤丸
萬物の靈一物の水で出來　馬遊

軸

寒菊や風に動かぬ花の笑み　文日堂　礫川

文化三寅年十二月廿二日　願主　米蟲
牛賀
補助　千之
豆人

小石川牛天神額奉納句　文日堂評

眞直な梅のずあえも神ごゝろ　桃林
二つない山を眞向きの宮造り　谷水

忠臣の假名は末世の手本也　森鳥
せんたくが落て小町の我はがほ　六川
御ひそうの牛萬代の古跡なり　牛賀
仕合な花嫁やくわん一人り也　和里
席書へさいかち虫を連て來る　豆人
おいらんを沼へぶつ込神事也　花夕
賴政は粽と團子見くらべる　素龍
八乙女のたぶの梅花をかぐら堂　燕子
笹つ葉を持つと尊い女なり　梅舍
松竹へころんだよふな判を押し　吹唐
我供へ茶を汲で出す宿下り　和龜
宵の間や親仁を寐かしそつとぬけ　雨江
手習子筆の隱居を神へ上げ　梅里
師匠さまこわがるやつは手が上り　魚川
初舞臺むかふのはめに目が並び　青車
ちよつとした義理は天氣の噂也　喜丈
女房に注連の張たい伊勢の留守　飛入
早蕨のよふにすげ替指て置き　一交
馬道を勇んで通る四ッ手かご　平壺
牛の御前をきらずの事とおもひ　牛尾

太宰府を下女錢入れと思つてる　二蝶
神無月かまどの繪馬も閑子鳥　筆喜
腹たちまぎれこくうになるかみさん　天作
龜の首から水の出る氣味のよさ　水守
ぞべつても本所のせなア名が高し　桂花

軸

角文字や難波の道も冬の梅　文日堂　礫川

文化三丑年十月廿五日　願主　豆人
森鳥
補助　牛賀
一交

小石川諏訪大明神額奉納句　文日堂評

御鎮座は月も名高き國の内　美德
三三九を三つかさねたる御緣日　魚川
御湯花に薪のいらぬ下もの諏訪　賤丸
もちつとで唐で産湯を召す所　琴我
宮參り天窓を杖に肩車　燕子
諏訪の橋水に戻ると花が咲　谷水
雛の顏桃色になるはつ櫻　濟我

俄雨鍾馗を先へかつぎ込み　和里
足留の御祈禱支度金で來る　森鳥
辨天が布袋に替る御めでたさ　筆喜
大そうな助太刀四十七騎也　花夕
まさかの時は七人に成て出る　一交
車坂油斷をすれば北へこけ　水守
此糸でしつかり結ぶひよく紋　喜丈
羽子板には實に北國の女帝也　素龍
十三日嫁はめつたにとかまらず　歌女
四郎と九郎尻と口とを守つてる　六川
花の山どの木でもいゝつなぎ牛　牛賀
赤坂も四つ谷も揚る春の凧　林鳥
ぐづ／＼とのすはづ姉が糸を引　梅舎
くりからになつてゝ夜具をねだり出し　泥龜
それそこがくぼんだと凧抱起し　清靜
吳服屋は木綿へ千社札を書き　桃林
吉原と見附の土手は同じ道　天作
鶴裳を着て賣歩行はかり炭　青水
傾城を見た計りだに女房すね　花簾
頭立て來ると大根もぬきゑもん　桂花

鶯も隣あるきの桃の枝　梅里
愛宕山むかしは猪の出た所　行成
月々に月見る月は下女安堵　吹唐
鳶飛んで味噌こし袖で隱す也　平壺
はねめゝず獨り角力を取て居る　豆人
鰐口と鈴で陰陽和合也　蝶

軸

仰ぎ見よ思ひの森も神樂歌　文日堂 礫川

文化二丑年十二月廿七日　願主 六川
　豆人

右三評額面模寫　補助 天作
　喜丈

俳風柳多留三十七篇終

誹風柳多留三十八篇

東都に柳風の前句盛んなる中に、下谷小石川麹町の會は、月々に句數千餘員を持てかぞふ、よつて今年三ヶ所の秀逸を集め、次篇三冊となして七九は先に出來たれば、中の卅八篇を著し、此書の世にはしる卯年の春覽に備ふ也、　菅裡が述

カテウ評

抜ぬ大刀はねぬ御馬を御獻上　春駒
南北に二面曇らぬ天下一　市風
袴ごし捻つた所でおうけ也　振袖
啌は八百鐵砲は五百なり　香貞
掃溜の中へは下りるとこもなし　龜鳥
龍造寺だけに年中經をよみ　玉章
きぐすりやせんじつめたは關が原　市風
神鏡のぐつとの奥に御太刀持　藻鯉

心ざし水にせぬうち御すみわけ　花道
廻狀を心得たりとぼうでうけ　東子
呉國から鳥二つ來て織はじめ　巾布
正直のかうべ十月かるくなり　五丁
親わんの中へ名醫は名をのこし　龍馬
淺草に鳩深川にうづら啼　狸疊
三井寺の鐘疵もの丶天下一　ト丸
日本の虎は異國で鬼と呼び　如雀
仲人は鬼を千疋ころすなり　龜鳥
ころべとは猿よりもこはいおや　青莪
山吹の後ちは濡まじものとよみ　青露
御道筋上總之助がかため也　矢正
三尺は火ぶせ六尺火のまはり　苫笑
正宗の國へぬき身の山が出來　木葉
太神宮の勅らしい物語　玉章
萬木にすぐれてまれな島の景　夢中
日本をたつた二人で掛わける　香貞
かへさザア番所にしなと母に借り　升子
氣に入らぬ相談影でた丶くまね　松歌
髮置にときんをきせる天狗の子　品能

御宗旨のゆだん他宗の手にかゝり　狸疊
手を開けば金銀山のごとく也　品能
名物をくふが無筆の道中記　躬夕
小侍うぬが手作のはこをしよひ　矢正
餅の禮大きく耳のそばで言ひ　古鳥
藁でたばねても辨慶は辨慶　銀文
顔づくで年々揉る中十日　矢正
陀羅助をのんで靜は癪を下げ　門柳
開帳のしばらくの有る成田山　柳鳥
言たてにする裸身はうつくしい　青莪
菊月にくふのが本の三茄子　加丈
吉の字の黒い鼻には燈がとぼり　里柳
丈長の鉢巻殿をやりこめる　竹子
七つから穴人國の番所出る　玉章
紅毛の家鴨爪先ねろふなり　春扇
兒の尻妹の腹を母ぬぐひ　留人
御談義が濟と勸化は母が出し　狸疊
大みそか尻つ尾を見せぬ古狸　二町
竹馬のだちん針箱からはらひ　スヾメ
わざわいの門出がすぎて尻を抱　喜ト

おしやらくの苗ゑちごからおもに出る　如雀
扨匕も勝手もやぶ醫廻りかね　志夕
請けに行ので三か月は上はの空　箕山
霧をふくよふに迯てくまけた猫　夢中
とけるほど煮こゞりに成る面白さ　其誠
生揚でやるのははやるちやうちんや　卜丸
唐人の泣出すやうな河東ぶし　榮馬
手のきいた隱居古身で鉢を割　青露
道鏡は腕人形も度々つかひ　留人
戸まどひをするはづ先が戸たて也　眞曉
道鏡が母親蟲のせいと言ひ　門柳
どろぼうをぐる／＼巻に昆布する　三朝

丸龍評

紙ならぬ神のつぎめもそくい也　品能
三が所へ千金のふるはんじやうさ　五町
名のしれぬ櫻も千の集へ入　曉鳥
淺間よりひろくけむるは伊吹山　門柳
山吹の後はぬれまじものとよみ　青露
蝶々の酒を露程すつてさし　是樂
山號の二字は埋たと印し也　玉章

四天王一人り紅葉を根こぎにし　門柳
孔明がそさうひやうたん雨にぬれ　玉章
耆婆と論ぞつとする程美しさ　曉鳥
京のかさより名の高い江戸の下駄　宜明
唐やまととんだあやうい七と八　森鳥
神無月都へのぼる雨大師　柳鳥
笑ひ〳〵わかれる橋のうへ　二町
うすぐもで少ははれるふつた跡　龜鳥
僧正へ九重の膝八重に折り　同
衣笠の落城は百六年め　柳雨
三枝の禮を土器で取みだし　龍馬
本腹の剃立幣でなで廻し　艸鳥
一と盃の水はきれいに底ふかし　市風
お物入り金をば谷へ捨るやう　如雀
月笠の内にも星の雨やどり　里鯨
口黒になつたと嫁の評判さ　龜鳥
咲そろふ花の根じめは禿菊　寛奴
あかるみへ子供の手をも引給ひ　一德
蒙求を鳥さし笛で吹て呼　玉章
四日めに愛宕の額をひつぱづし　マイタ

猫の毛が娘にはへて快氣也　四溪
櫻まで曲輪は夜るのつとめ也　龜鳥
四角でも炬燵は野暮な物でなし　喜卜
玉に疵つけて一ぷくのんで見る　品能
鰯網鱈で育つた息子なり　姫小
正直は四つ手萬八舟で見る　カテウ
初午の日から未を鹿が撫で　船里
蛇で越た渡しぼさつで三年め　宜明
三韓の犬も猿には尾をはさみ　松山
おすてが里はきつとした月行事　志丸
一寸にまるめ盃二つ出し　カテウ
三が寺は蕪と牛房とうふ也　艸鳥
十六夜は親父小言の最中也　青露
重い荷をかる石にして祝ふ也　山馬
しかられてそんなら湯をと病上り　門柳
かなへの事はつれ〳〵のちやりば也　是樂
ヱ、やつと澁柿を喰ふ八年め　宜明
御寐所の下は忠義のねずの番　松山
前髪で通つた關を髭で越し　都柳
國がらでいつそ細いこよみ也　龜石

岡崎を子の彈程は乳母がひき　市風
刀の引ずり殿でもちにつき　留人
神無月一人りのこつて笑つてる　振袖
大食もくひたくさんな月を見る　ムク鳥
藏前へ滿珠干珠を取に來る　箕山
請狀を出して肴の火をしづめ　靑我
とぼしたいやうにらうそくこしらへる　榮馬
袖なりのへらで調子を嫁合せ　寬奴
芋はたんのどくけつ迄咳をひり　市風
信玄の時代かないませぬめくら　龜鳥
おめゝつこの寒ざらしいゝ聲になり　加丈
褌がとけてけんくわの腰がおれ　覆露
こんがらが出ぬと文覺土左衞門　古鳥
產籠て兄貴の遊ぶかるい事　其誠
何とぞ鼻をおみやげと國の文　孤雲
店賃は不動さまさとうゐ木賣　雨夕
女房よろこべ手まへにも二兩二歩　孤雲
木琴のやうにしぎやきやいて居る　柳雨
上下の腰にしつかり不二の山　射夕
手にさげるよりもせつない鍋祭　松山

午の日の肴は海老で鯛を釣り　有幸
物さしをやつてこはぐ〵年を聞き　牛賀
いそ〳〵と雨と日和の中を行き　龜鳥
萬歲へ御用のたのむ年始狀　志丸
持參金小間割にするみかん籠　門柳
何かしらかけた松へは名がのこり　眞曉
丙午ゐんどう氏の娘なり　古鳥
年こしに二足の獅子がやたら出る　溪住
木戸前でなつか中々遣ふ也　留人

川柳評

御吉例寅の頭へ卯をならべ　和里
瀧のうら迄隱れない御山也　蛇内
太鼓なめらかにとんとも打人無し　箕山
御威光は臥猪の床に高枕　カテウ
納つて弓矢は鳩のふんだらけ　スヾメ
走る帆の皆かしこまる御ひざ元　里鶴
高い事五十四五里と通辭いひ　枡水
通し矢の堂は化身の間數なり　玉章
とんだ產かんしやうばくや取揚る　カテウ
杜若蛙のやうに拜見し　東鳥

寶舟ごふくや二間乘つて居る　如雀
大神樂獅子をたぐるは仕廻なり　溪澄
廿五をこへだて始皇生のびる　末學
魂は舟魄は流るゝうつくしさ　里松
鬼も蛇もとかく酒にはだまされる　門柳
暖國で正しく雪はきへたはづ　志水
坂東で座頭株のくわんせおん　水高
蒼頡が智恵で世界の眼なり　里鶴
東南の風をおこしてちくてんし　集馬
注連縄で石と石とが首つ引き　伊庭
湯の意趣を義經水で返す也　箕山
啌は八百鐵砲は五百なり　香貞
五十萬石といつたらとんだ事　如雀
門徒衆娘も光るほどみがき　孤雲
何事かむすこ御難の餅もいや　末學
初がつほ首じつけんにいれて喰　仙斧
こはいろは舌三寸の樂やなり　里柳
目づかひで内義しそふをさとる也　眞曉
功成名とげ身しりぞき園れる　森鳥
北流は親父のげせぬうたひ也　如雀

硯ぶた下戸へわたすと建長寺　柳枡
酒かつて尻を切らるゝ具覺坊　巾布
市迄は桶やの家内ちゞこまり　松山
おすてがさとはきつとした月行事　志丸
久米の平内は神だか佛だか　蛇内
姉がふらちで妹にげいがなし　志夕
土佐駒に坂東聲はのらぬ也　白兎
生揚で遣るのは流行ちやうちんや　卜丸
けちな月徳利の穴目々也　玉章
たすけるもころすも壹歩二百也　泰扇
十兩にとう／＼座頭點をうち　大古
樊噲に質やの丁稚縄をかけ　志丸
吹けばとぶやうな一歩をたいこ持ち　シクト
ぼた餅を十おいしいと大笑ひ　龜鳥
是ではどふも是ではと聟思ひ　門柳
おてんばにかまひなんなとてんば言　其誠
れいほうにころ柿もある祐天寺　市東
初午は娘も赤のめしをたき　木葉
愛相に芋うり升のだめをさし　古鳥
かたはでもこれ見てくれとせうが市　加丈

夜鷹そばかねや太鼓にみんな賣り　龜石
人間を五つに切て二朱にうり　柳鳥
事ぶれが長家の針を棒にする　黑塗
氣のきかぬはづ也內義丙丑　夢樂
まや夫人うらぼんゑからひが留り　志丸
ぶつさきのうらはのしめの七つ過　竹二
おきて見つ寐て見つまてどうせぬ也　夢中
雪の下モウ／＼こりて下りる也　加丈
瑠理どのとまじめな顏でせなあよみ　竹子
柳の下で蝙蝠の直をつける　銀文
帶をしめ五德にすはるふてへやつ　伊庭
百姓は一生こひのおもになり　五丁
丁百のうちへ穴なしかぞへこみ　曉鳥
亭主が戻り間男と拍子幕　丸龍
辻番は棒をつゑともはしらとも　舟里
ほまち錢下女德平に入れ上る　伊庭
つらの皮ひんむいて出す山せげん　花道
中直りすりや明の鐘もふならず　美德
持參金封を切られて安堵する　孤雲
下女が面よく／＼見れば鼻もあり　美德

餅はつく是から唾をつくばかり　溪澄
長つぼねおかしな物がふんじつし　古鹿

市風評

御扇子に風も當らぬ御代と成り　柳鳥
梨の木の下で冠はたと落　亦樂
評判の俵を買て餅につき　其誠
泥のつくものとは見えぬ御所車　市東
切腹をやめて見て居るつかみ合　錦鳥
ひよ鳥の道をば鷲が能をしへ　一德
染上げた子持仕立やちをつける　志丸
口よごしとは過言也初がつほ　亦樂
いゝ漁があつて三人玉の輿　里鶴
畑と田で衣のぬれる露と雪　志丸
小便を中途りに子をわたし　經角
八朔にふつた女郎もあれの內　青枝
れんぼして牛が願の虎を取り　桃林
錦木をうす雲直に取いれる　門柳
茶飯がすぎて腹切がくるしさう　同
買て來る內は二ほんで彈て居る　竹子
神代にもいせやは甥を養子なり　草麥

岡ざきをひくはきのふの調子也　志夕
日はめがねはは入ばにて間にあへど　ムク鳥
人數は九々にあはねど義に叶ひ　亦樂
楊貴妃も小町もいづれ花の王　里鶴
かたばみに直して輕い手を通し　鬼柳
西の闕日本中へなりひゞき　同
夷國本朝軒ならび櫛と餅　門柳
思ひ出す其霜月も松が岡　青枝
八つ橋の流のすゑはうづをまき　同
町の名も家名も雪に緣があり　桃林
臥して名の高いはしやかと花の兄　里鶴
へいけいをやめにしやれと親父いひ　東夷
浪人も鷹の羽だけに穗につまず　同
日本へひゞくは瓶のわれたおと　錦鳥
門前へみの市のたつ御不勝手　志丸
蝶鳥の飛んで火に入五月やみ　同
しかられた下女膳立のにぎやかさ　其誠
軒に傘あれどもひらく寺でなし　錦鳥
乞食の中にも光る二ばしら　伊庭
いゝ雨も嵐の雲も翁持ち　有幸

あぶなさは神慮にそむく船に乘　青枝
百夜目は何をかくさう穴がなし　東夷
付馬がてんかん病で運のよさ　加丈

狐聲評

日本へ鋸の帆は齒もたゝず　一德
ものわすれするも目出度老の杖　卜丸
合戰は宇治の螢で見る計り　一德
櫻咲山へ禿の放生會　市風
甲子よばれますよと橋大工　同
鮫でさへ親がなければ安くされ　同
横ぶとり下女が小袖にきつい事　雨丁
水無月に梅につもつた雪がちり　青枝
大木にならぬといへど三が國　門柳
大名におんぶでわたるぬけ參り　鬼柳
小原女はつむりで牛の脊をたすけ　花道
駟も舌におよばず妾いつゝける　亦樂
母の相槌でなまくらものにする　留人
鳥さしの子はとんぼからさし習ひ　ムク鳥
のたくつた蚯蚓を餌さに客を釣　三朝
紅の舌で駒下駄なめるなり　其笠

汐が干て東魚おさへる鍋のふた　雨且
やきめしを三つ義貞ふみつぶし　亦樂
仲の町櫻にまけぬ柳ごし　加丈
づき出しの花に賑ふ仲の町　一德
腹帶をしめると親の氣がゆるみ　振袖
大不出來淸書も顏も赤く成り　桃林
御赦免に机をおりるくろん坊　其誠
ぬけ參りかや釣はの中に寐て　市風
夏ものしめで罷出るかたい魚　志丸
霜よけに人をのせてく問やかご　有幸
藥種やはうら打のある金を取　竹子
品川へ醫心のある出家來る　一德
非にまけてあたごの市がぶつゝぶれ　加丈
れんだいへのつても下はぢごく也　志水
雪隱で出るふんべつは屁のごとし　一德
べらぼうめ湯どのでちゑが出る物か　都柳
間男は大腨ていしゆかたぐるま　竹子

川柳評

御殿山昔ゆかしき花のころ　其笠
御ちさうは東男の舞の袖　錦鳥

小牧山齒をむき出して御立腹　東夷
御乘出し徒士はとけいの身ぶりあり　志夕
三丁め醫者の藏宿らしく見え　斗丸
着せたさは子程に思ひ猿廻し　伊庭
はい水に宿を取つたは旅功者　伍町
夕立にこまつて下戶も十二文　同
吉原は雪見にころぶところなり　市風
やかぬはづ留守に女房も小鍋立　志丸
はたごやの草摺引きは七つ過ぎ　草麥
おとしだね藪から棒な御たづね　鬼柳
熊坂は十六七にしめられる　マイタ
人同じからず茶瓶とびんぼ樽　一德
武士の腹から出たは達磨なり　竹二
朝がへりそりやはじまると兩隣　伍町
川越しはからだが干ると口も干る　志水
睾丸をつりかたにする彥左衞門　柳鳥
御影堂御はらひ箱を歸參させ　同
仕立やは堀へつけろといふ身振　留人
立臼はあるくに杵はおんぶする　射夕
新道て見なとすがほの論ができ　竹子

小侍はまりはじめはうばが池　姫小
じたいわれらは初がつほきらひ也　斗丸
玉よりも女郎のなみだ金に成　姫小
越中はたらず越前あまりあり　亦樂
たんぺい急にはかどらぬ新造買ひ　其笠
増上寺三右衛門さんと下女思ひ　品能
二人扶持ひやうたん形りの俵也　志夕
百夜目は何をかくさん穴のわけ　東夷

里鶴評

御扇子は天にかゝやき地になびき　其笠
野を二つ天と空とでひらく也　笠山
水に縁あつて浮木の御獻上　香貞
鶴龜の喰ちらかしを乳母ひろひ　一德
本國は丸龜江戸ははなしがめ　同
魚へんに虎は千里も名がひかり　桃林
島原へ出たは利口な茗荷の子　カテウ
大森で桐をにしきに織て出し　加丈
蜆では蕣椎の實で簇を立て　都柳
繼つ子のこがし硫黄の有る附木　一德
から〳〵と笑三人名をのこし　同

御主人を二人りで拜むあら世帯　伊庭
木火土金水より女房が先き　ムク鳥
和漢の出世履をうち履を貰　三枝
御建立ふじをばるりに染直し　留人
御領分春の鼓を秋しらべ　竹子
猫の眼を時計に遣ふ村師匠　同
凡人と化して衣の帶を解き　同
かつがれた下女は明地て賤が嶽　古鳥
誠有るけいせい紅葉かきつばた　柳升
花火を貰ひ日がくれろ〳〵　留人
月代のはんこう代と四文取り　柳鳥
老ぼれの鍾馗日除に身をやつし　古鳥
父は口母は耳也師はまなこ　柳升
花活の獅子は牡丹をくはへかね　市風
御縁日すがほで參る手習子　斗丸
大尾
三國を廻しに取た畜生め　都柳

狐聲評

鎧迄身はゝをひろく御凱陣　カテウ
近江から駿河へ嫁入る綿ぼうし　玉章
濱荻がそよぐと唐へ吹もどし　門柳

雲水の扇でまねく四里四方　矢正
象に座す神もお鼻が長い也　市風
千の矢に五百てつぽう鈴鹿山　里鶴
切れさうな水にうたせる納太刀　柳鳥
よしきりは伊勢も難波も同じ聲　留人
八丈のしまかくれゆく御ひつぱく　市東
京の町たいらな所で上り下り　同
孝行と不孝裸で蚊に喰れ　三枝
孝行はしづみ不孝ははまるなり　振袖
買に出る市を息子は賣つて出る　同
淺草の左右太郎と太郎さま　草麥
正宗も持人資つける初松魚　亦樂
おしい錢むだにつかつて落城し　口口
菰ほごす手傳ひ牽頭上手なり　門柳
草摺は五郎鎹は四郎なり　留人
かた〲は長持のする帳の紐　亦樂
千早にてうじ虫めらを追ちらし　加丈
掛取の百度參りはさじを投げ　柳鳥
惣仕舞やがて内へも札をはり　有幸
禿に追れ敗軍のこゝち也　千慮

帆柱に賣て一村日にやける　竹二
横丁へ折れこんで行く蝈の聲　雨夕
蚊家賣はながく紙帳はせはしない　志夕
腹一ッぱいに我儘を姿する　竹子
若殿のぬけがら奥で持てあまし　錦鳥
上り藤思へば無利な紋どころ　其笠
古今武總の名木は向ひ合ひ　住小
宗桂にまけたはなしも手がら也　青枝
聞わけもなく又來ては蚊を入れる　ムク鳥
宿次に景物を取るくらひぬけ　都柳
一聲で咄の腰を折て行　三朝
喜平二がつぶてのやうに土手を行　三枝
渡邊を手も無いくせにうまくかき　志水
孟宗と叔齋平らの相手也　東夷
忠臣は椽と橋との下に住み　都柳
繼つ子は梅で育て月で啼　里鶴
あんどうも戸ざゝぬ國は面白い　千慮
らんびんな男ひつじの跡を追ひ　志水
門番は寢て居てづるくだまをやり　里鶴
どちらでも芳吉しと行どら和尚　品能

君臣のへだて二八に四文也　佳小
石突の棒で飴やは陣をはり　志水
新宿を賣るは他宗の堀の内　都柳
辨慶はかげで聞てもつよい事　三朝
辨慶も陰と炬燵は今にあり　伍丁
韓信に二歩と一本いたゞかせ　東夷
ぼん／＼にはかるほどよる蜆貝　射夕
大笑ねぶとがいえて中なほり　古鳥

川柳評

榮花より蝶より是はよい御夢　二町
御茶壺へつめるは宇治の三番叟　里鶴
五百挺まんまとのこる御獻上　錦鳥
むだ足へうつり香のする御放埓　門柳
廿四の一つは嫁のいゝかゞみ　鬼柳
前後十二年風景所こでなし　雨夕
くらの字は三人と無い國家老　有幸
どふ島は日本石の賑どころ　青枝
日本勢手代をつれた武者も有　矢正
眞つ青と眞つ黒になるはづかしさ　柳升
大坂の目貫は又とないおとこ　雨夕

片腕になつたと譽る刀鍛冶　花道
山ほどな嘘をついたは徐福也　雨夕
不老不死始皇持藥に呑氣也　亦樂
おしいものだが毛深いが玉に疵　振袖
いたづらを重しにかけて身を沈　都柳
皿に子をのせそこら中店をかへ　門柳
眞崎はいゝが夫からみそをつけ　一德
扇おつとり道をきく武藏坊　香貞
加賀土産雨と日和をしよつて來る　其笠
うぬぼれをやめれば外に惚人なし　マイタ
髭も兜もさう／＼に捨て逃　香貞
朝がへり目の出ぬ程に母しかり　雨夕
さる時は暦になんのさたもなし　市風
たゞでさへ耻しいのに仲人しやれ　ムク鳥
内損は藏も地面も呑でから　市風
いさぎよく乘出すやつはみいら取　加丈
せひもなくあつたら金に嫁がつき　門柳
一人り者しぼりばなしの蝋をつり　伊庭
きつとした座敷あくびを鼻でする　竹二
手のひらをにぎつてにらむ荒事師　竹子

借金はしよつて立れず置て逃　柳烏
惣仕舞やがて内へも札をはり　有幸
帳箱で夕部の舟を番頭こぎ　三朝
人のよさ一貫五百かりて置き　東夷
丸綿を取つて見たればもゝんぐはア　ムク鳥
家督公事下女が股からひよいと出る　卜丸
かけ取のこしを遣ふは取たやつ　同
ちゑの有る馬鹿に親父はこまりはて　同
へんてつもなく幕引は見知られる　錦鳥
韓信に二歩と一本いたゞかせ　東夷
見てくれろ二歩はどこでも物言ず　有幸
二の腕へらくがき無用のは地まへ　草麥
そばきりと白かゆの間ひ大さわぎ　錦鳥
片々はながもちのする帳の紐　亦樂
契約の水ももらさぬ鍋いかけ　錦鳥
大坂の目貫に又と無い男　雨夕
伊吹山さゐかち蟲のなく所　藻鯉
ぬか箱をかい干して行く宿下り　ムク鳥
小豆がゆ木つぱをひろひ焚付る　一德
御返事に出す山吹は無言也　都柳

青山に有りさうな物三途川　其誠
どなるはづ雷門をぬけて行き　ムク鳥
先の方御かはりうらの茶振舞　加丈
聖人の世にかゝるわざはあがつたり　竹子
女房のくすね娘の片おもて　射夕
御神樂の拍子に闇を取てなげ　留人
御祭禮前後ゆたかな鳥が出る　カテウ
一の字に辶かける谷中道　品能
大名に龍造寺寺に松平　伍丁
ちくせうは皮迄ばちがあたる也　同
人の手で無筆女房をたゝき出し　志水
もふ一里行のだはなせとまらんせ　射夕
とらの皮はいで祐成米を買ひ　青枝
きのくにやからと大門たゝく也　竹子
仕送りができて座頭に目鼻でき　志丸
御殿にも御寺にもなるやかた舟　留人
麴やのやうに鳥かごさうじをし　三朝
ふとい下女猿が餠ならサアごされ　射夕
朔日をまるめて月をおん流し　カテウ
實の持ぐさり後家のちゞれ髪　加丈

娘のしやくは針よりも棒がよい　桃林
夜ばい星見た夜に下女は這こまれ　古鳥
兩頭に八足の犬人だかり　曉鳥
目が覺て見たらどつちへ行うやら　振袖
馬宿へ文をとゞける輕井澤　寡山
氣のどくさ息子計りに脈が有り　鬼柳
大尾
鶴が岡こはけしからぬ石を見せ　三枝

鬼柳評

かちどきを八聲でつぐる紫宸殿　其笠
御緣女の東下りも讀とうた　姬小
鳥迄朝寐はできぬ御命日　柳鳥
仙人サマアと濡手でかいほうし　雨旦
はんじやうさ諸國と寐物語也　古鳥
さし汐にめでたく鍬をかして遣り　竹子
里がへり親へも義理の遠始め　ト丸
孔明の長兵へ藪から棒でしめ　亦樂
吉廣は武士とはそりの合ぬ太刀　竹二
千字文百萬兩のゑきがつき　亦樂
獻上の御馬もきれをはねる也　松山
琴爪でかゝれて通ふ御聟子　志夕

百人ながら鶯に氣がつかず　射夕
千金にかへて嬉しき里なまり　千鶴
かんにんの袋の紐を母むすび　加丈
四十二文を亂軍へまきちらし　亦樂
あたらしい場とは肴にいゝ地名　竹二
いきたより後藤の馬は直が高し　加丈
嫁入がいやとは母のきめ處ろ　竹子
生娘は枝も葉もなき姿也　苦笑
馬鹿は魚竿やは馬鹿を釣たがり　久好
女房を物さしにして棚をつり　竹子
家根ぶしん女房に穴をつゝつかせ　青我
百姓の花見は二百十日なり　ト丸
惡緣さ松へみどりを置て行き　草麥
いゝ月夜親父釜より目を拔れ　雨旦
妾が兄小刀細工やつて見る　礫賀
こはいろはたれだと叱るせがき舟　竹子
かへらぬは元の水より舌の先　マイタ
公時は親類書にこまるなり　伊庭
母の眼へ娘の乳の恩がへし　其笠
御殿にも御寺にもなるやかた舟　留人

范蠡が出やむと將碁負になり　十松
讃岐へも水の流るゝ落し胤　市風
蓮の飯やくそくのへる庚申　門柳
人込みで馬だ／＼と道鏡いひ　桃林
女房を仕立やなみにしつちかり　ムク鳥
ばつとした娘しばらくかゝり人　東夷
御名代具足にかへる御束帶　都柳
安產の後は莫邪が育あげ　古鳥
張子房口も劍もきれる也　カテウ
毛深いに三國ながら氣がつかず　杯舟
それならばさうと御暇願ひやう　藤後
むか腹のくせに飯より將棊ずき　草麥
雷の子はごよ／＼／＼と泣ならひ　松山
不案内旅で扇を一本買ひ　ト丸
曲錄は人の姿の極位なり　伊庭
廣い野を爰迄ごされ水は迯　加丈

狐聲評

萬民の正路となるも松の下　是樂
桐の木に小鳥のとまる枝はなし　ムク鳥
富士山は思ひ立つ日か麓也　糸道

五六段位のすべる夏の雛　錦鳥
延喜の金箱太宰府へおしこめる　草麥
石山と志賀は一と夜のうらおもて　斗丸
元服は異見をそへてほめる也　市風
いきたより後藤の馬は直が高し　如丈
御蟲干和歌と達磨のものがたり　竹子
細腰に柳茶どんすよく似合　古鳥
似合つたも物による也墨衣　其笠
うなるのは啌だが金はものを言ひ　鬼柳
淺草でくへば上野で水をのみ　伊庭
母の眼へ反哺の乳をしぼりこみ　雨旦
十五六だろふと柚は桐を切り　門柳
青龍や蛇棒にまさる和のとんぼ　伍丁
風ふけば女房いつこう油斷せず　礫賀
一とゝせに一と夜は牛も大よだれ　桃林
梅干の小言は嫁のづつう也　同
朝歸りけむたい面でいぶされる　古鳥
六文のやしき市兵へ町のうら　苔笑
出世してのぼつた瀧のへんが取れ　古鳥
うれしやさらば舞んとて千羽立て　カテウ

膝ぶしを十五に折てわびことし　伍丁
鯵の聲日も精進もおちる頃　曉鳥
國に無い鼓萬歳見てかへり　古鳥
眞桑瓜さん俵をば鬼が喰ひ　一德
母親のゆだん娘のはなし飼ひ　竹子
仕合な蓼い〻蟲がやたらつき　留八
火繩から傳馬にのるは布くり毛　志丸
百出して啞のうごくをつんぼ見る　雨旦
安南の辻かごはい棒〱　三朝
度々むかれ厚くなるつらの皮　曉鳥
師の影をふんで踊子よく覺え　山柳
文がらを手しよくに遣ふ破蟵帳　里雀
契情をきつかけ茶やをふみのめし　柳鳥
夕立にいせ路で一人り半ぬれる　亦樂
やぐらのうへでおんどうはいせ路也　射夕
ひきわりの袋が米を喰に來る　其笠
米の飯喰ふ入口に杓子する　振袖
いせやから到來いたみ入る松魚　有幸
豐後ぶし隣の國はよくかたり　志丸
いで其時のおはちには粟の飯　三枝

口取の重ね返事はわるい道　斗丸
うりすへの宅番をする角大師　古鳥

川柳評

御獻上不二さへ青く見えるころ　竹二
射人の名も雲井に上る時鳥　曉鳥
三宿ほど旅人は寐せぬ御大錄　都柳
あやからせ給へと宿禰御抱上げ　曉鳥
待女郎我もまたれし一むかし　都柳
梅若の三七日あたり時鳥　門柳
鉢の木は火となりのちに土と成り　鬼柳
眞中の子が酒のみをぶつつぶし　雨夕
禹に水を納めさせたでぬけめなし　亦樂
挽臼の老込み庭へめしだされ　千鶴
葉をしいて子をかごに入しよき見廻　志丸
先きがけは小西ぬけ荷を買氣也　糸道
藺相如飛車手王手でひつたくり　亦樂
つなぎ馬口取までが百官名　古鳥
林泉の爲也伊兵へ御出入り　亦樂
道成寺うろこが肌のぬぎ仕廻　竹子
借金の淵とは見えぬ三谷堀　山柳

鯱とみそと大根外になし　千鶴
萬能にたつしとりえの無い男　振袖
戸障子を酒の肴におつぱづし　竹二
書抜はあのさじきだと點をかけ　市風
馬喰町諸國の利非の寄る所　里松
初がつほこは何事の候ぞ　亦樂
すみ部やでおこつてももふ始らず　桃林
まけた碁も打て替て勝ちと成　志夕
御ざうりを持ましてもと下女芝居　柳雨
後風土記を野陣で聞は油蟲　カテウ
わたしがほんのかゝさんは粘をうる　竹二
うらもやう脛の白きを見せたさう　亦樂
棚經はどつかどふくう茨木や　留人
なまぬるい水やねからの錢とらず　千鶴
助六のとびいろで濟村しばい　志丸
おもふ事叶て二人り居候　松山
土にんじんはろうがいを追ふ計り　柳雨
若殿に道ををしへる大としま　鬼柳
重氏はほだいの爲にみそをすり　青枝
胴づきのこゑつぼんだりひらいたり　其誠

ひやめしを家老に妾ふるまはれ　曉鳥
下手畫書竹があるから虎と見え　糸道
大一座どれがおれやら人のやら　振袖
持參金何より顏の荷がおもし　都柳
金でさへはたらくも有寐るもあり　市風
六あみだ元木に増たうら木あり　松山
さる人の系圖をきけばざうり取　伊庭
御門より内は妾の手中心　其笠
虎のひつこきへ隨臣乘て居る　竹子
齒みがきは麝香のへ程匂ふ也　同
宮守より佐渡から出るがいつちよし　糸道
松前の家根板を着る源五郎　草麥
女房をあんまり書てけどられる　市風
いたみ所があつて土藏へ小手をあて　柳鳥
けん番は皆俗名へ香をたて　三朝
男土女金にてせうちなり　志夕
かゞみとぎおのれが顏へのしかゝり　里松
菊水はこもつかむりに過た紋　射夕
女房のいけん我田へ水を引き　竹子
奥家老まさかの時はこしがぬけ　亦樂

契情は生巣地ものは野じめ也　千鶴

文化四卯晩秋發行

俳風柳多留三十八篇終

俳風柳多留三十九篇

傘におしわけ見たる柳哉、とは蕉翁の佳句なりけらし、是やあめが下に、前句の彌しげりて、柳叟の評大いなるべしとの未來記の章ならんと、三十九冊目の首に菅裏亭の筆閒に記、

文化年波卯の師走日

里松樂評

繁昌さ武藏野は今松の薗　礫川
鳳凰も月に三度は羽をぬらし　シクト
公家二人舟と旅とをおしむなり　同
龍のこけ義貞むごくおつことし　箕山
御落馬はいかゞ扨々いゝお歌　雨夕
松へからんでひやうたんかれるなり　同
面白く雨風にあふ中納言　香貞
鳩は千代巳は萬代に鎭座也　シクト

石女が植ても實のる御神德　礫川
頼政の三位はほんのひろひもの　菅裏
淺岡が差添鐵のふちかしら　横好
盲目の一つ目になるこゝちよさ　箕山
青砥が由來引窓の錢をぬき　マイタ
左馬頭杜馬のとこで歩のゑじき　雨旦
青廣の作で盆前きりぬける　菅裏
忍ぶずり紅葉を亂れ染になし　マイタ
遠州流にそなれたを猪牙くゞり　横好
金屛でみれば軍も面白し　青露
借りのない拂がすむと盆が來る　末學
ひどい見わすれ桑つみをくどいてる　青露
錦着て古鄕へはいる四日也　雨旦
敷ものに異國の交る桃の御所　香貞
妾が母ほへられそつと畜生め　箕山
大門をしめたは二郎ざ文左也　玉章
不屆な弓は引せぬ藤四郎　横好
人魚だと思ひ守護人油斷する　同
下女の箔付きお竹大日如來　礫川
なべ一つ貞女がかむる神事也　玉章

なまあげのてうちんもでる大みそか　香貞
地ごくへでろとは鬼よりもひどい母　夢中
品川の月けさがけに切りかける　箕山
けいせい化して嫁となるむづかしさ　柳雨
言事がなさに初會は海をほめ　有幸
不二下向尻とかゝとが草臥る　青露
御痔疾へ曾呂利牛房をやいて付け　横好

川柳評

天元の一を三河で立たまひ　箕山
渡し守今はさくらのもの語り　柳雨
赤き心を顯し達磨世に殘り　礫川
よめ娘すくね名とらの內裏雛　箕山
いゝ嫁入り町役人もつれて行き　同
大はんにやはらみつた元龍造寺　同
肴やの忠をさくらの木に記し　香貞
なんぞかたが出ますかと樂天　夢中
桃の內裏でとつかまる袴だれ　香貞
ひなの重是もせんまいざいく也　柳雨
うきよをのがれ品川へいんきよ也　雨夕
よし原の土手は唐木で築上る　青露

お乳の人何萬石もひざへのせ　里松
御たねを宿さずんばと國家老　礫川
かつをぶし見せ先でかく小舟町　玉章
棚に乘てゝおく方は柳をねめ　夢中
つら當に女房三歩のひなをかひ　シクト
よし町は世をすて人の行く所　雨夕
十府（とふ）の菅菰（すがこも）より本所蒲がもて　礫川
藥師寺と兼好へんじにこまり　未學
李夫人をけいせいにする李延年　里松
しれぬはづ番町さまと計り書き　柳雨
どら和尚俗の談義を聞てゐる　夢中
大坂に寺といふもの出來たげな　同
ふざけなんすなとは先づ中もての部　礫川
お松が欠落はたして離の卦なり　箕山
足利は酒や新田は太神樂　雨夕
しやばもひたいも廣くなる廿八　雨旦
阿房宮きえかね九十一日目　柳雨
ゑ樽一とつで薄赤いともをつれ　香貞
ぶたの切りそのころ雷のごとく呼び　マイタ
しのばずの池で忍はこれいかに　里松

切れ凧を紙屑ひろい破却する　香貞
門松のじやみを見切に大屋かひ　礫川
持參金ならば手がらに去つてみな　箕山
かせ吹ばどころか女房大あらし　雨夕
今戸では人間ん鬼を釜へ入れ　夢中
居候ねるにはもちになる男　シクト
旅のるす間男の外仔細なし　雨夕
八つがしら蛸を煮るにはもつてこい　有幸
まつりごとおこたり息子不首尾也　シクト
惣下座へ四つ手乘かけ叱られる　青露
病み上りしばし信濃のうへを行　里松
持參金見やつた晩にうなされる　同
大尾　形りも似て一字違は木の子也　里松
是正さに天が下知る御夢也　礫川
松の根につるのよはひを敷ならべ　玉章

箕山評

御扇子は君子の德の風を出し　是樂
黃金の梅は諸侯と花の兄　シクト
江戸繪圖の里數割出す鶴と龜　巾布
一と聲に御硯水のお手がなり　柳雨

末世迄折目たゞしきから衣　柳雨
小金井の櫻は玉に疵でなし　巾布
此うへの無い結構な鬼門除け　礫川
飛んだ儀が御座りましたと安樂寺　春駒
魂はたがひにさびぬ聟引手　竹子
內ぞゆかしき鶯かきの美しさ　留人
我がせこが來べきはむかし園もの　巾布
死置き直すと弟子がへしにふへ　門柳
信玄は七書に秀いで四書にもれ　留人
樽代を二度むだにする賢女なり　如雀
法事の仕切小松殿初めなり　未學
日暮の邊り桔梗の幕を打ち　有幸
佛門は力士武門は禪師なり　春駒
雨の手を出して二見の物語り　雨旦
海底に足跡のあるいゝ天氣　青狸
嫁の甕そこ退き給へ人々よ　春駒
坊主より振袖持ちは與があり　横好
戀の重荷は二つ迄月をしよひ　夢中
錢漿は付て居られぬ槇の浦　有幸
里へ來て氣がねせず呑む實母散　門柳

橋大工茶飯を焚て禮に呼び　斗丸
よめにくい字をばしうとゝ息子讀み　里松
皆出ると千字文でも足らぬ所　青露
目に見える鬼がみの來る大晦日　未學
兵法の奥の手隅田で聟は出し　玉章
舌二枚晴れて遣ふは通辭なり　菅裏
矢取りでは三國一のをとこなり　有幸
摺鉢で呑んで瓢たんかるくなり　是樂
矢の使來ても平氣な諸葛亮　柳雨
吉原の彌陀木曾殿のゆかりなり　青露
朝歸り左右異格の二面なり　マイタ
大きなりでだまし事呂布はきゝ　横好
もう二里にして江戸入りが滯り　留人
晦日の月を見なんしと二兩借し　雨旦
ひよく塚晦日に月の出た所　シクト
五町の田地秋作がかんじん　雨夕
看板に僞りおつて坊主すへ　菅裏
先づ榎それでいかぬと松で切り　里松
鼎ませぬめくらになどゝ初手はしやれ　同
はつを〳〵と言ふやうに賣て來る　柳雨

けいさんに薪を乘せとくけちな屋根　春駒
村出合柘植の小櫛もさして來る　横好
客を見て場末の蕎麥やいぶし付け　玉章
天竺へ渡海二文が船に乘り　横好
お呼び出し迄は碁盤で境論　巾布
首をふり〳〵ふせ鉦の內をすり　志夕
花にたはむれ月にうかれたで牢　礫川
苧がら賣なんと聞たか下女笑ひ　里松
つらい事しやらん〳〵を夢で彈き　雨夕

川柳評

大名の羽がひをたゝむ大手先き　斗丸
都の空に住もせで御殘念　礫川
御同勢跡から虎が馬に乘り　其笠
ひんけいにあしたはさせぬ國家老　礫川
四十七由來天下に傳ふ忠　同
年々歲々花の頃嫁の禮　箕山
忠臣は不成就日にかゝはらず　柳雨
表梶に不二へ引向け徐福來る　巾布
とらの尾は殘して置て御建立　孤雲
本文に屛風端書幕の事　柳雨

職人を五百叱つて成就する　留人
月明らかにして客星稀なり　有幸
碁にこつて桒の葉をついで吸付る　青露
女形道外をするは太神樂　玉章
緋ぢりめん少しは風も吹せたし　斗丸
夏の桀をさつぱり洗ふ般の湯　亦樂
嫁の爪もののぬぎ星がいつそ出來　礫川
筋骨をぬかれて和氣を立通し　シクト
灸點に嫁首の座へ直るやう　春駒
楚には足しないはんぞふのたがゞはね　横好
太鼓持身に引つかけてどら打たせ　マイタ
大根武者是くつきやうのかうの物　礫川
向島女護の島へ遠からず　里松
振上げた太刀御無用と五兩出し　雨夕
二年目の土用干にはひな計り　マイタ
いつの間に息子とつちりとん覺え　志夕
後家とこけどふかあやしい芝居也　夢中
かまぼこや渡世のやうな音でなし　有幸
猪猿をうつて買ふもちやそびや　夢中
よつ程な機げん女房の謠なり　有幸

射落して虎だ／＼と源三位　玉章
市正質藏に手間取る氣なり　門柳
雨舍り賓朝むねがむか／＼し　末學
相算に目もはち／＼とふていやつ　是樂
夫婦してちぎるはけちな餅や也　一德
取る事が第一遣り手とはいかに　有幸
高砂をやんやと磬て叱られる　春駒
よしず張淺黃差づめ引つめ射　マイタ
杖と杜と賴んではころばせる　菅裏
朝歸りともにまんまをいたゞかず　橫好
柳橋舟か／＼としかりつけ　竹子
然るに紀文内では糠味噌汁　礫川
足音も木琴ほどに藝者させ　斗丸
おん身心すなをゆゑ持參呼び　門柳
呉服やで長刀なりの汗をかき　一德
戀風だのに俵屋を母すゝめ　礫川
大願成就ばれほど御めもじ　夢中
鐵綱でつらを燒てる外と長屋　マイタ
新造をおもちやに隱居して遊び　志夕
杜若鎌でかつきるよな草でなし　孤雲

好な下女呉服屋やほどに承知する　橫好
腹の虫遠吼をする居候　礫川
旅の留守させる罪なき女房也　青露
四つ目やは德意の顏は知らぬなり　里松
きたなし返せと追かける鷹のぎう　礫川
心待下女塵紙のちりをとり　柳雨
お前マア晝間の灸をわすれたか　里松
ねれぬはづくすねた錢でかごにのり　竹子
長局なくなすものにことをかき　同
それぎりにやならぬと相撲くらひつき　巾布
大尾
その跡でそらおそろしき養母也　シクト

斗丸評

岩の戶を投て戶ざゝぬ御代と成　是樂
あつぱれな山丸合にはいゝはかり　礫川
屛風とは花をいとふた地名なり　孤雲
齒のいゝ母を持たので孝へいり　春駒
花軍でもさせそふに師匠つれ　玉章
どふれと言て山吹折て來る　春駒
信玄公は名將とかりたやつ　柳雨
こつちから遣つた鹽引だと笑ひ　礫川

檢唐使詩も碁も喰ぬ男なり　春駒
奥儀のしらべをそしるばち當り　花夕
三歩出しても持るもてないは水もの　箕山
みゝだらひ仲人が來て橋を掛　雨夕
面白いのはあしでするぶん廻し　春駒
あれ姉さんが桃の木を抜やした　巾布
いたい事小指にかけたむしんなり　雨夕
知る人のあごを見付る三度笠　雨旦
奥州は赤はらたれぬ女郎也　菅裏
晝見世の持遊になるお針の子　玉章
油うりでも仕出したは道三　同
乳母が尻ほうばり叅る枕蚊や　雨旦
なる程世間は廣いこしやへ嫁　礫川
善光寺築地だと下女思てる　春駒
書てつぴん金百疋と奉加帳　青露
作り聲なぞでいばらき頼みましよ　礫川
進上申首代は二千疋　箕山
いゝ所へ來たとせい高遣はれる　礫川
深代寺棒の名手を客に見せ　玉章
時鳥からかは貴をあをむかせ　礫川

けちな助六肴屋をにちて居る　春駒
やれ虎が出たと竹の子捨て逃げ　一德
太神樂乳母あいちつと〳〵　礫川
とは知らずしてかゝァ今戻つたぞ　同
ふんどしをはずし入玉將眞つ裸　是樂
齒ぎしりをしい〳〵歩行安足駄　雨旦
猪の隼太樣と聞ては山師來る　香貞
雪の土手あぐらでかける面白さ　玉章
黑助は烏森から嫁をとり　有幸
馬の屁のさかさにひゞく一の谷　孤雲
大尾
振込で來るはゞ戀の奴也　花夕

川柳評

大おんも大しやうぐんも寅の方　一德
御利運の御旗にゑどの唱へ有　木賀
船をよく浮めて歸る國家老　礫川
有そふで江戸には見えぬ紫野　マイタ
天顏を拝しがてらの嫁の禮　礫川
屋形へも參れ此下駄とらするぞ　同
名物は萬歳およびかきつばた　箕山
死なしたり是は麟じやとのたまはく　礫川

能じゆくし澁の拔たは柹の花　花夕
諫言を目の出る程に伍子胥する　如雀
御不勝手みな紫に奪はれる　一德
面白さ是は日本の地にて候　箕山
年の內に春は來にけり妾が顏　橫好
道普請御用の外は肩車　一德
國家老柘榴裾をあざ笑ひ　礫川
さなきだに見せて侍從は持あまし　雨旦
薄墨を持て文覺伊豆へ來る　青露
咎められくわんじんの場と讀上る　箕山
施餓鬼舟檀の浦ほど乘て出る　如雀
ゑぼしをしばし假に着て餅をなげ　木賀
ばいやつて螢を兎いぢり消し　礫川
諏訪の海狐が馬を乘せる所　菅裏
毛氈で追はれて百歩わしる也　赤賀
新造で居て赤人の上へに立　マイタ
楊枝みせ侍り合ふいぶかしさ　玉章
あたらずといへど士弓は遠からず　橫好
一本の鰹日本のさわぎなり　青露
吉原は打もの業にかのふまじ　同

勝角力らしく雲長落手する　柳雨
魏の國へ手づま遣ひを呼び寄る　一德
鑓も一本ついて出るい丶女郎　礫川
時鳥白い差味はもふ喰へず　狐雲
かんざしで遣つと妹の口をぬひ　香貞
どらを打ぬいて今はた牽頭持　礫川
一腰へそり打てさす田舍乳母　香貞
返り咲仲人つぼみのよふに言ひ　如雀
負腹をたつと金瘡直き破れ　同
我落にきと語るなと輕業師　柳雨
樫の木と馬を掩てる彈習ひ　春駒
鐵棒で外科を引いてく大さわぎ　有幸
草履取むごく袴をおつた丶み　儘成
目と耳は只だが口は錢がいり　如雀
にくいやつだが這入られぬ松の門　箕山
ゆふれいと盆でうちんは入替り　有幸
御談義も聞たく嫁もいぢりたし　里松
これもちを先きへ立ろと松洞寺　箕山
珠數さらさらとおしもんで小言也　青露
妾が兒馬と刀にいきやくする　礫川

千塵評

三百で濟めば禮義も安いもの　千之
いゝ程になるとはんれい落ぶれる　青露
家業職居つた形りも閙がまへ　礫川
われ獨りさめてさまよふすみだ川　亦樂
千両の包も女郎から崩れ　如雀
兄弟げんくわせわしなく味噌をにる　雨旦
旅迎ひ遠見を出してしやれてゐる　志夕
甚寒と立派に述て汗を拭　巾布
柳橋あたりで舟を案じ出し　同
反物を安く買たる夢を見る　礫川
藪入はまさか寐られやせんと起　門柳
いやならばそれでいるかと片眉毛　青露
八月の皮きりあつい紋日なり　礫川
孔子の涙此人の膝へおち　木賀
酒地肉林の中へ出る國家老　礫川
唐松の下に大きな雨舍り　同
松の木の杜に三年侘ずまひ　箕山
新造のなじみ質屋仕立也　同
伏見からけちな女郎屋計り越し　玉章

いなみてもめで度かしく出來るやつ　横好
四日とは天氣も持ぬ皐月雨　雨旦
二度寐の蚊屋を女房にはづされる　礫川
面白く陰火の燃る芝居　横好
宮守の辞所せきをしかけたて　礫川
強そふな男まさかりふつ遣へ　横好
男女の中を和らぐは酒　巾布
鼇をのめ鯨はなきか鯨やい　礫川
輕い事泣聲で知る雨隣　孤雲
名代はたばこ盆まで手なし也　玉章
味噌用人はなゝ過た男なり　柳雨
年寄の鼻は目がねの鏡立　斗丸
暦にもない日こせへるふてえやつ　有幸
豆腐屋は時計のやうに細る也　藤後
横ざけのするは素人の鑓也　如雀
鑓持は見附の鳩をねろふやう　有幸
かゝつてゝ火を吹ている新世帯　礫川
おれがとこおれでもめると下女ぬかし　青露
大尾
犬の猿のといふ内につゝ孕み　巾布

川柳評

みなもとは月から浮ぶ物がたり　礫川
鶴が岡扮大島な放生會　花夕
ちとはやし日暮をいそぐ紅葉狩　如鶴
神と儒者ゆゑ問答に通辭なし　玉章
花の宵今道心を嫁つくり　礫川
大名に給仕もさせる四疊半　青露
弓箭を取つては引ぞわづらはず　礫川
むつのちまたに迷つたは高尾也　箕山
國家老曲つた所は腰ばかり　礫川
官服をしよつてはるばる來ぬる也　孤雲
武藏野は猪武者も居た所　一徳
死生命有とやたらにきこし召　花夕
會稽の耻をきよむる三會目　亦樂
旅をなげき堅い女は石になり　里松
書顔はどちらの露も間に合ず　マイタ
伯良は既に女房にする所　巾布
理ふじんに脊中の尺を女房さし　礫川
徒然なるまゝに日暮へぶらり　菅裏
厄はらひ年のひゐはひ驅あるき　木賀
佛法の大意は和尙不得手也　千之

盲目千人の上に立つ本望さ　一徳
そのかはり島田藏宿ではふられ　亦樂
こてのきく女房亭主を壁にする　森鳥
しかけと身仕廻ひ篠原を後家まかし　玉章
書より大じな客人を壁にする　橫好
お寺では福神在家山の神　有幸
種々な顔して讀でいるおふむ石　門柳
朝歸り聟女房に去られそふ　里松
めんつうで喰ふを賓朝はつに見る　孤雲
岡湯汲宮本流を遣ふやう　藤後
安役者位牌堂でも首計り　菅裏
息子の大病は俄に病みつき　玉章
きれい好き夜るはすこぶるきたな好　礫川
猪の牙にどらやたいこを引かける　木賀
持參金ぞつとする程こはい顔　里松
サア王を取るがくと下手將棋　巾布
座敷がつゞいてと藝者のにくい聲　礫川
大名の上げ下をする三河丁　志夕
朝歸りまんまと內へしのび入り　藤後
世を捨て身はなきものゝ居候　巾布

角兵衛獅子ゐだかもけあふ様に見え　孤雲
まさか買ひにくいものあひるの玉子　礫川
爰で三兩かしこで五兩取てたれ　木賀
乘るのかと思へば道を開て行く　マイタ
けつ若衆めがと辨慶身ごしらへ　礫川
下女承知しそふな所へ頼みましよ　里松
申子に間夫丹誠をぬきんでる　亦樂
ゑこそはかさじ出直せと質や言ひ　柳雨
かのものへかの本をそへ小間物や　青露
大尾 いゝかぎにかゝり道鏡ふらつかず　森鳥

文日堂評

一對のよふにまします秋と春　吹唐
月は今松より出て松に入り　青露
古池は世界へひゞく水の音　柳雫
二つない山三つある繁昌さ　森鳥
釣の手に團扇を持つとすさましい　箕山
賑かさ薄の中で神いさめ　同
白氏文集は大目に和歌の神　孤雲
定紋を鑑へうつす御昇進　春駒
壁にいはくの有る事が後に知れ　如雀

鳥有る里にして歸る國家老　如雀
蛙は腰折れ鶯は反つて詠み　横好
一夜子の富士は近江にうみの母　里松
鶴は千葉短冊金子奉行也　玉章
御茶壺のよふに驪山へ荔枝來る　孤雲
忠盛は里子が餘程爲になり　木賀
御所車義仲いつそあぶながり　青露
器量ある若衆うか〳〵山に居ず　箕山
玄德は三度見舞て食くづかせ　是樂
味のよさそうな熨斗目を侍從召し　横好
一と箱の杖とはねから見えぬ也　吹唐
一とふしに千代をこめたる初鰹　里梅
雪の鰒ゐに一命をおしまんや　如雀
羽左衛門が替紋崩す放れ馬　横飛
女房に仕てはふる夜がおもしろし　同
あかるみで十露盤かぢる白鼠　豆人
雜兵に宿禰はやめを買に遣り　賤丸
どの宗旨にも中のよい蓮の花　青柳
本堂で吉原と衆議一決し　青露
其日からとかく咄が雨の事　香貞

一と足違ひ名代の口おしさ　雨夕
此耳はざんせんのかと引ぱられ　マイタ
梅干を張て居るを揚べからず　玉章
座敷牢うらやましくもすゝめる月　賤丸
強そふな名で弱いのは武者所　里松
藤太様御入と海月門を明け　木賀
反古張で遠眼をする螢狩　柳雨
振袖へ鈴を付るとあはれなり　箕山
扇屋は要人傘やは六郎兵衛　集馬
いゝ縮み嫁の乳首がすいて見え　千之
六人に腹と袋を邪魔がられ　丸龍
賣れようはしか娘の足袋嫌ひ　里松
娘でも居るかとまづい夜伽也　香貞
あの娘そうかう院は御承知か　青露
百出して咽の動くをつんぼ見る　如雀
綱が伯母いもじは例の虎の革　香貞
梅干をこわ〲漬る安樂寺　青露
年寄た長屋四五本杖をつき　同
たましひを切羽つまつて質に置　志夕
種柹のひけ物をくふ居候　同

似せ升を遣つて歩行旅芝居　吹唐
入替に蚊屋を丸める後の月　豆人
石麻をなめて雪文字が出來　箕山
猨の化けを衣で芝がくれ　牛賀
呑口は陽の餘りの立すがた　横好
ようてうとたをやかにして茶碗酒　丸龍
せんじ茶の抜殻で蟬生どられ　眉長
二間四方のきん玉を狸もち　香貞
化されて德をしたのは安名也　里松
越王を呑みに上野の茶屋へより　眉長
よん所内義は月にさはり出來　志夕
とつくりとへちまと庭でつるませる　扇橋
湯へいかつしやんなと粟餅をくらひ　玉章
女房も岩戸を開て伊勢の留守　同
仕様を爰に見せ申さんと本屋　春駒
下女地口こふかの中でこなさんに　柳雨
畑の出合七夕が元祖なり　藤後

川柳評

富士山の文字は御代にも能叶ひ　雨旦
鶴翼にそなへ宿繼待て居る　青露

御出陣猿の頭へ龍を召し　吹唐
國家老實に大國の片眼なり　散殼
衣川敵と味方で一首出來　青柳
先づ味方桃の夭々二人出來　木賀
狐川より引返し行暮る　横好
あの山に不老不死有り穴賢　青露
もてぬはず重さが五百萬石餘　未學
それ矢を持せて扨痛い口上　礫川
白黑の軍なかばへクワダ見舞　巾布
國家老御意の中にはござれども　礫川
親父へは手を替へ母へ品をかへ　青露
武の子を信長やつと引つこぬき　吹唐
馬の問答に資季こまり入り　巾布
御所車義仲いつそまだるがり　青露
味噌をなめ〳〵時頼も數獻也　巾布
張良はひしほを喰はぬうちに逃げ　如雀
後ぞへは支度も里も無いを入れ　横飛
だれも見に行かぬはずだと眞間歸り　未學
客をきるやうにかぞへる料理人　雨旦
夕部も公の噂とどら仲間　礫川

魯智深が配つては行はんじ物　横飛
鎌をふり立てヤレたぐれ〳〵　礫川
朱子學もけだし息子の道具也　如雀
蚰をきる迄は常體の男なり　芋洗
新造は遣手が爲に縛せられ　礫川
駿河町人別帳も入込ず　孤雲
船で暑さを捨に出る國境　散殼
三途婆王の在のには嫁こまり　横好
和尙を敬し遠ざかる堅い後家　如雀
賴光へ三州酒を木こりくれ　如章
町人と見たは新造ひがめ也　丸龍
掛合にうはごとをいふ下手將棋　雨旦
源左衞門雪の中から掘出され　如雀
おいらんの御茶へ反哺のかんざまし　雨旦
夫たらひ桶よ鉢よと御不勝手　マイタ
冬瓜のむだ花程に通ひつめ　里梅
朝歸り寂寞として諸事無言　巾布
雪の鰒豈一命をおしまんや　如雀
醉覺に土瓶の蓋が鼻へ落　礫川
合羽かとおもや納豆箱を出し　如雀

六十にして立つ御隱居は賴母しい　礫川
棒ちぎり駑馬に劣ためめに合せ　横好
夫からねへひがなもしと鏡磨　礫川
夫といふは只一人間夫やたら　雨夕
蚊を焼てやるのが亭主和睦也　巾布
居候花の留守居が喜見城　礫川
名山を下女昆布巻の帶にする　藤後
鯛や鮃にしばらくと初鰹　玉章
村普請大手をひろげ壁をぬり　同
七根清淨々々と懺悔する　礫川
味のよさそふな熨斗目を侍從召　横好
手製と號し醬油の實くりやアがり　同
あのかゝア昔のくせがまだ止ず　青露
極重く極く早いのは下女が尻　木賀

雨旦評

御代に能くかなひし加茂の御祭禮　吹唐
唐崎の間と言ひそふな御座敷　雨夕
鄭聲と利口を憎む國家老　礫川
花の名を折句にたゝむ唐衣　谷水
勅諚はやの字勅答ぞの字也　春駒

御用札鳳凰草に麒麟角　芋洗
八百の軒端に並ぶ國づくし　マイタ
ごろ〳〵と言ふと玄德箸をなげ　如雀
あまり出來過しかられる松の歌　柳雨
大坂屋眉間の白い犬を飼　孤雲
國家老元と唯一の鈴にする　マイタ
一片の月で濟むなら安いもの　亦樂
たつた六文で一と冬持こたへ　マイタ
酢の過た東夷と公家は言ひ　門柳
孔明と正成智惠をすぐり出し　玉章
ヱレキテル玉藻の前の後に出來　春駒
知つて合點の一人り旅十三里　柳雨
石と野は大きな忠と不忠なり　森鳥
イヨ玉屋などゝもふ出ぬやうに也　春駒
沓などははいて居られぬ檀の浦　有幸
死生命有つて七の日も七夜也　牛賀
月は程なく質屋から端書來る　志夕
駒組をせぬに王手は本能寺　里遊
九里山まいふく不二だとじやうをはり　玉章
二調打娘狸の曲ばかし　醉臥

釣の小言で丸負の盆の水　芋洗
釣舟の沖に孤ならず隣出來　マイタ
あたゝかな風に曹操氣が付ず　香貞
素見物曰くよつぽど草臥た　青露
鶴龜の年をかぞへて禮を述べ　同
夜るの衣を返してぞぬる蚤で　巾布
御影堂たゝいて富士を横に出し　里梅
目にはさやかに見えねども茄子がわれ　孤雲
鍬を買て何んにすると孟母言ひ　礫川
店の青物八百に賣り跡を吊　横好
幽靈の生醉千鳥あたま也　集馬
村口說いつまで艸をむしつてる　有幸
わざところびに出たよふな名句也　礫川
勅答で見れは楊貴妃無筆也　玉章
去り狀に無筆は鎌と椀を書き　柳雫
身どもらが又きんしたと禿言ひ　里遊
たなばたを手みその娘もろく付　柳雨
あさつてをこつちで言ふは節句前　里梅
組入れの素袍あたまに神酒の口　如雀
一どきに百づゝ笑ふいゝ女　礫川

註を讀ときに螢はゆすぶられ　礫川
暇でも出たか宇治川早太居ず　箕山
空腹と立派に述て辭宜を言ひ　有幸
風の神くそをくらへとはり込れ　蔦夫
盆前の借り太刀先できりぬける　如雀
寵の竈へ女房のかまを入れ　是樂
借りが有るとは言はれぬで差が有　菅裏
光りかゞやくは銅壺と女房なり　一德
有明けのつれなくきえしけちなばん　和里
士は腹さへ切るところよみ見る　礫川
賴政のよふにして立つ切落し　雨夕
大きなすり鉢瀨戶物町で見る　有幸
はり肘で白眼ですわる暑氣見廻　巾布
お月さまいくつ品川四つ也　礫川
かぼちやどろぼふ雪隱を引つたをし　里松
運のいゝ嫁牡丹餅でたゝかれる　牛賀
熊笹の飯計り喰ふ居候　礫川
俄かづれ秋の心とそれたがり　雨折
信濃ほど有つて大軍喰留る　里遊
思ひもよらぬ後よりほふ〳〵　猿山

かけ出すも尤馬皮で張て造り　森鳥
箱入も提重も出る雛の市　柳雫
御いんぎんだねなどゝもてかゝり　礫川
並ぶべきにはあらねども下女造り　猿山
芋賣の女房におしい枕だこ　柳雨
短命丸と言ひそふな藥也　和里
なみの首尾一とつさづけてどつか行　横好
馬の腹帶が延候赤くしみ　雨夕
大尾
小將は一と夜で膽をつぶすとこ　里遊

川柳評

繁昌さ月の入るべき草もなし　玉章
鐘供養八百八町拜むなり　礫川
星の井のあたり大名小路也　門柳
客ひとりふへてさびしい魂祭り　久賀
終南山にひすべしと通辭言ひ　マイタ
神鏡に心のうつる物ならば　柳雫
まかなくに古今稀なる洗濯し　同
龍造寺末寺天草巳來出來　柳雨
足元のあかるいうちに陶朱公　如雀
乘り替への馬に手こずる一家中　□□

小ぎく一帖十貳兩とんだとこ　マイタ
神儒佛ごたませにするがらく見せ　香貞
十二まへ着たのはまれなばけのかは　斗丸
お公家樣下さりませと兩舍り　如雀
始皇帝八尺ほどは飛上り　里松
なま貝はとゝのめをして直を付る　あらし
渡邊も引窓迄はとびあがり　亦樂
嫁ある夜姑の死んだ夢を見る　木賀
八道を一と呑にする蛇の目也　芋洗
鉦と太鼓が風りんの音をとめる　菅裏
葛籠張ぶんこをおしは供に連れ　藤後
且走り且とゞまつて駕籠ねだり　如雀
笑はゞわらへおみやげに貳た包　礫川
箱根今切及び四郎兵衛　孤雲
しまつたり親父納豆買て居る　礫川
鹽の目で遣手壹分をにぎ／＼し　志夕
宗任は鼻へかゝつた言葉なり　横飛
御不勝手自身曲事にまかりいで　巾布
胸ぐらのやうに鰒はつかまれる　醉臥
みゝにあまつて女房を座頭去り　門柳

病ひ犬ちつと追つてはたんと逃げ　雨旦
手引での先生湯淺五介なり　亦樂
請出されそこはかとなく圍われる　巾布
朝歸り内の首尾合十五面ん　藤後
下げぶりを打ちに家老は國を立ち　箕山
こいつ來たなと思つたら藪にらめ　礫川
きつとしたせうこもないと馬鹿亭主　あらし
江戸の跡足し仙臺へ行てはね　如雀
シイウ鯉が高いと妾鰒を喰ひ　亦・樂
下げ錢でちよぼくれを聞てんば下女　礫川
どのくらい喰たかひいきよだと信濃　有幸
ぶらさがり又ぶらあがる井戸ざらひ　千之
行平は五風十雨ときめたろう　木賀
下女が盥の銘にいはく鶴龜　礫川
下女が横なんだか中にありはあり　孤雲
湯屋を呼で道鏡をぬり消させ　礫川
臍の垢ふとほぢり出し嗅で見る　同
鎰はかけ不申候と下女がふみ　あらし
大尾
ずるい後家これも後生の一つなり　芋洗

俳風柳多留三十九篇終

俳風柳多留四十篇

麴の莚の連衆、月々秀逸に高名を著さんと、かたづを呑、口なめずりして、披講に名乘を上給ふ、こや道に麴車を見てよだれせし好人に似て、名人の意ならんと菅裏亭主述、

東子評

日の下たの人をあつめし御吉夢　青露
野がけ道娘青葉の笛をふき　加丈
硝子の左右藥鑵とやくわん也　同
地名迄櫻のうへにかすむ也　古鳥
桃は美女菊は美男で長生し　二町
鳥飼は平家内田は源家也　志丸
扨ゝ大へん日本へ臍ができ　夢中
御苗字を三つへらして御建立　志夕
雨ふりに計り助六出たと見え　同
鳴りやんで臍くり金を女房出し　寸尺

こてりやうぢらかんのやうにならぶ也　溪住
江戸中へきかせる鐘を石でつき　眞曉
茅町でしのぎをけづる節句前　松山
島がくれ行とは猪牙のふとん也　スヾメ
長刀をうけつ流しつ御ふがつて　夢中
一と綱にかけておさめる有がたさ　伊庭
一と子に二た子見る内に嫁御でき　マイタ
蜘助が東海道をかけまはり　二町
十夕だまへ狼くらひこみ　盤谷
親子して苦とたのしみの日をかぞへ　留人
佛ゑんにひかれ蛤石となり　蘆風
建長寺箒や出入かしらめし　美・德
やう〳〵といなり鳥居のそばへ出る　スヾメ
あれおよし〳〵はしやんとかしこまり　木葉
たいくつのあくび兩手でぐつとさし　鬼柳
女人堂佛の山に入りながら　古鹿
他から來て雲井の鳥をねろふ也　龜鳥
ぐわら〳〵ぴつしやり北野へ身退き　志夕
大丈夫火鉢へ百のすみをくべ　美德
初節句武道でつひに勝利也　矢正

白石の工夫責合なしにする　如雀
そろ〳〵と座頭いの字を書て行き　伊庭
馬の脊を餘ほどたすけるふてへ馬士　都柳
白鼠息子の猫をづゝうにし　古鹿
おもへば此金うらめしや朝拂ひ　至青
金比羅の白浪うづを卷てゐる　志丸
はねる手はのみの宿禰が取始め　如雀
ぬれた中橋のたもとで三日干し　寛奴
行くれて櫻の里のにぎやかさ　雨夕
夜をこめて年の關越す鬧しさ　品能
諏訪の海狐が馬を引てこし　加丈
今にゆく所をゆしまの遠目がね　市風
關白のおそばへそろり〳〵出る　其笠
五月雨をさすが紹巴は手で留る　青露
闇仕合ひ篩のやうな月が出る　都柳
物いへば唇うすきかゝあなり　市風
歌でさへ黒はあらつてよわい也　雨夕
出雲やへいつゞけのある閏十　二町
大坂を入ると唐の一里也　孤雲
大森で乞食仕立の箱が出來　草麥

其跡のくんじゆもきかまほしい也　矢正
たちきつた機を異見の繼に當　牛賀
初春のつみ草遊ぶ人でなし　龜鳥
大手計りでからめての無い廓　盤谷
又元のさやへ納て五両取り　寸尺
かけて來た程に娘は用はなし　斗丸
雉子の聲杣は晝寢の目を覺し　有幸
田樂のわるい地口はみそをつけ　桃林
踊子は蓮花のやうに肌をぬぎ　松山
しやば以來先づ両方が反りかへり　狸疊
にぎるよりはめる音色のひんのよさ　礫川
猪がりの洒落はしめこのうさぎ也　加丈
呑事はのまふが出來ぬ詩一篇　二町
花さかせばゝあ出て來る三會め　門柳
三ケ月はおせん十五夜おまん也　置扇
氏神の庭を二葉は霜にふみ　カテウ
目と鼻のうへでぢゞいは紫をわかし　森烏
こざかしい天文を見る釣師也　孤雲
面白さ一寸八分さきはやみ　古鳥
針妙は詩あかして歌をよみ　市凧

連城はおろか親玉和歌の浦　姫小
三廻りで半分ぬれる釣師也　孤雲
綱うちの氏神に成る宮戸川　同
何院となつておてんばいゝ仕廻　東夷
凧のほね組み飛車角行のきゝではり　竹子
朝がへりあらおそろしの荒神や　マイタ
かるしめた梅あべこべとはぢをかき　竹子
風流と武勇と春中くらべ也　青露
惣領のどらは甚だ六づかしい　眞曉

如雀評

雪と露せいて衣をまちがへる　是樂
紫を着るに大坂かゝはらず　雨夕
にぎ／＼をひらけば九品浄土出來　里松
十露盤はこまかにわつてかけた橋　市凧
鶯はないが里つ子集に入り　竹子
親の湯を子は水にする御忠節　青露
月見ればちゞにかなしき御後室　圓素
果報いみじく御物見で蓮を見る　丸龍
國に無い鼓萬歳見てかへり　古鳥
假り御堂きめうむりやうに金がより　鳳凰

足を切られても手づよく持て出る　一徳
松風へ鈴の音かよふ御安全　玉章
星一つ見せにきらりと賣れのこり　礫川
やれおきろ山ができたとさわぐ也　古道
御番組白樂天で風になり　雨夕
伊賀の山道簑になり笠に成り　虻内
きやしやな手で荒わざのべの琴をひき　カテウ
淺草は道中なれた不二まゐり　フクロ
足のうら迄匂つてももてぬなり　錦鳥
寢耳に水の音をきく十三里　森鳥
猿の子を犬の補佐するつぶれ前　曉鳥
新せたい母らしい人たづねて來　夢中
船のうへとはおちつかぬ皇居なり　孤雲
女一疋三國をさわがせる　其誠
ごふはらがおこしてまはる大一座　品能
堀の蚊も柳橋迄おくるなり　市風
笛竹の音で巣籠めつけ出し　玉章
二町の田地雨村の作り取り　弓也
洗濯がおちて黒主はぢをかき　磯鶴
毛延壽せしめうるしを交て書き　柳雨

糺明は烏赦免は雀なり　カテウ
切張は大事をしやうじよりをしへ　香貞
大あたり死がいをやつとかたづける　錦鳥
瓶わりは和漢名高き司馬と柴　シクト
二人り迄若菜とつけて宮づかへ　盤谷
せつない時は歌を出す爲明　柳雨
束帶で田樂やくを遠く見る　孤雲
寒山の友達いしやのはれ着也　三枝
さむい事たけやにくらひついて居る　春駒
母おやをむすこ引たりかたつたり　留人
野がけ道人もきやすの聲を出し　雨夕
軍中でうばにおぶさる甲斐守　玉章
ずんごうの鱸に生姜のせて出し　集鳥
質草は逆おもだかゝはじめ也　大京
飴細工ふくれたつらで撫さすり　白麻
にじむぢのかゝあや娘二十人　箕山
泣上戸其くせ大のをとこ也　伊六
素人の月代うちはなぞを出し　有幸
大だわけ家根へみそこしほうり上げ　フクロ
竹の皮持ていせやは客に行き　門柳

惣菜にまぐろをいせや鉈で切り　玉章
波の底迄もと海士の娘逃げ　カテウ
常ねぶつさもいやさうな後生也　里松
やきばからも〳〵杭同士しめし合　フクロ
馬鹿も海あんぽんたんも海で出來　蘆風
十四本手を出し藪蚊追てゐる　門柳
琉球のやろうはつぎにへこんでる　牛賀
首までもにごりに染で蓮を掘り　宜明
せなあ大病赤銅の匙をなげ　門柳
雪隱で入王しあんしてにげる　東子
清少納言御筆とかし本や　箕山
言ふ事を下女夜るきく〳〵と書きかず　其誠
欲心で半分盲女の娘を取り　口口
命毛を喰きつて書くはたし狀　有幸
炭部屋で御城での事覺たか　桃林
亥の日から新狂言のやぐら下　一德
こんれいの料理松茸貝割菜　鳳凰
ぬかるみを毎日歩行こんにやく〳〵や　志丸
ぶちのめす下地うどんやふみのめし　宜明
寶升以の外の夢を見る　曲也

なげられぬ土器師匠花につれ　眞曉
佐殿は實朝公を御てうあい　三枝

川柳評

眞中に蓬萊山の四里四方　志丸
御馬氈は千里をこえたさゝげ物　三枝
さればこそ弓矢の神の御誕生　礫川
江戸のいせついのぼうしはおく同者　福露
僧正のちさんも天のなす所　礫川
さりとては又と讀人のない名歌　夢中
あたらしい鍋は天草已後に出來　如雀
手うち勢櫓の下たへおしよせる　伊庭
且おそれ且はじしめる國家老　礫川
かたい子へ似ぶつな親を鮫や入　ヤカタ
芳町でしのぎをけづる節句前　松山
腕づくにかつたは綱と七郎べゑ　玉章
小娘は武勇を鼻であいしらひ　古鳥
兄弟は伊豆と吉野でかくれんぼ　都柳
立入たはなしの多い御ふがつて　竹子
つばくらにきけば雀の御同勢　龜鳥
かうやくをのす內關羽はまを上げ　古鳥

鬮取は人を下た目に見る男　夢中
田舍道石の地藏に聞て行く　志夕
雲助は東海道をかけまはり　二町
銀ぎせる是も異見の數に入り　志夕
切て血のたらぬ豫讓が敵討　喜卜
さめてからのんだ所をかんがへる　伍丁
葬禮のつれぎんみして叱られる　古鳥
いつ見てもふりのかはらぬ角兵衞じゝ　志夕
小便に座頭扇をえりへさし　孤雲
御世つぎのぬけがらおくで手におへず　箕山
ぬけまゐり人の情をくんでゆく　樂輔
菜畠で莊子の夢がつるんでる　大京
おそろしさ六文ぬけの首でこし　姬小
雨ふりに計り助六出たをとこ　志丸
乘ものや棒先迄もつもりこみ　柳鳥
何院となつておてんばいゝ仕廻　東夷
一日のちがひ一歩が十二文　竹子
陰豚を取て御運をはかる也　蘆風
さう花に紙くづひろひやたら出る　一德
花ものいはず姑がしやべるなり　門柳

後妻の元直をきけば三歩也　斗丸
猪の早太鵺のへのこをすでの事　礫川
じや／＼馬は時々くらをかへる也　桃林
百人を五六人して追まはし　寛奴
わきざしに似た物をさすかつぱかご　古鳥
大黑も馬に乘るのは極秘佛　姬小
八月めは仲條流にいせやする　樂輔
色文に拙者事とは大たわけ　五樂
ぶちのめす下地うどんやふみのめし　キメイ
若後家は佛の兄をうるさがり　其誠
本草で金のなる木を醫者たづね　有幸
投こみの施主はふんごみなぞで行き　其誠
行平はおつに手もあり口もあり　口口
切見せも品こそかはれのんでさし　其誠
わたりもの前だれにする酒問や　香貞
妾が母さげ帶こりやあどふしめる　至青
大一座こゝに二朱だの四百だの　泰翁
酒やの戸錢でたゝくはなれた奴　スヾメ
五月で下女雜物をながす也　斗丸
天德寺おんむくじつてやぶい見る　古道

寶舟すりこ木六本鍋一つ　里鶴
長雨にかはつた花も百へゑり　曉鳥
吉原は雪長崎はかねがふり　草麥
經師やで見附の幕は洗張り　玉川
袖なりにきびしい母の手がのこり　香貞
鞍馬から出る牛虎の尻尾也　錦鳥
こよみには大名もあり鑓もあり　留八
鳳凰も仕さうになる緣遠さ　集鳥
なりひらときせん秤と升でうり　竹二
新造のいけんをいふもほとゝぎす　礫賀
欠落をめでたくさせる奉加帳　留八
河東ぶし上手のはから水がもり　鬼柳
花の江戸けんくわに迄も枝がさき　柳鳥
三がの津お傳はみそであるく也　三朝
ゑへやつと生れる一歩死はやすし　伊庭
亥のふしがのびて唐土ざうに餅　五友
竹村は最中丸やは朝日也　柳鳥
大黑がないと御寺は富貴也　五鳥
口一つ土手八丁のにぎやかさ　柳鳥
雷にみいらのできるあつい事　鬼柳

かみなりをくへば小びんでいな光り　三朝
あつい事芝居正札つきになり　草麥
肴うりひよいとほふつてかみ合せ　伊庭
犬もほうばい御守殿の居候　曉鳥
野だいこはうそとよくとの皮ではり　古鳥
のり賣のいらざる後家を立とをし　藤後
とんぼうをころして蜘は酒をのみ　集鳥
おぶつたは位だをれにくらひぬけ　矢正

箕山評

七つ目の御年にかのふ桃くばり　其笠
紅葉狩りしたので跡は車留　錦鳥
武のほまれ其日に鶴を見て歸り　里鶴
若竹へおく樣筆で御さしづ　柳雨
束帶で見るはまことの都鳥　龜鳥
さし汐に參内をするかつら姫　虻内
はんじやうさ一箱出して土をかひ　錦鳥
てうほうなものは鳥の目鳥の足　竹子
汐時を一度は太刀でくるはせる　錦鳥
御はなをば何をすげたと小十郎　是樂
そば腹で本望たつしかゆをくひ　里鶴

近江からかり出す露の不老不死　錦鳥
御目見えに琴はいゝへのうつくしさ　竹子
大坂の日照風雅な雨はなし　カテウ
たいさうな木ちんでとまる佐野の雪　竹子
桃の木の下で文殊のちゑ者也　錦鳥
下駄ざうりはいてたひらな孝の道　龜鳥
すべらきのお名におかしき次郎左衛門　千鶴
花の王けづるも王へ忠義なり　龜鳥
早太には花しやうぶでも給はらず　矢正
戸隠しは油の直段ぐつとさげ　門柳
つれ〴〵のちやりばにかなへ舞を書き　一徳
思慮あつて雪中に行く梅やしき　カテウ
かんにんの紐も嚢砂でおつぽどき　杯舟
梅花兄弟はなにかけてよみ　集鳥
木曾殿も粟津が原は夕日也　志水
盃に松影のさす三會目　斗丸
いゝ娘母も惚人の數に入り　藤後
毛氈のうへから近い旅へたち　一徳
さんごじゆは妾の毒に氣がつかず　青枝
江戸のはり永代のこす貞女也　玉章

顔に手を遣ふ計りの御奉公　龜鳥
櫻にはつれなき名也あらし山　市風
不仕合三百やすくそだつ也　一徳
留られて夜具はあるかと母あんじ　五町
ゐんろうのとなりそろばん名が高し　市風
子なきをばさるにできぬをうけ出し　亦樂
夏の桀王殷の湯王取のめし　杯舟
人同じからずかたびらとしろむく　雨夕
暑い事雪のもようす文がくる　斗丸
落城をするとおもてへ札をはり　伊庭
しよくだいを何ぞあるかとかしてやり　志夕
藪からは棒よりひどい鑓が出る　里松
秋ごとのうそのたねとは知らずうゑ　雨旦
迷子は子よりも親がまよふ也　里松
遠方の土産近所のゑだる也　其笠
淺草でうられ目黒で年が明け　龜鳥
子供客くふほど喰とおさらばよ　玉川
四十七軒ありさうないろは茶や　草麥
マアあがんなんしと格子のたまはく　木賀
わきものゝやうに百兩くんなんし　古鳥

歯のぬけたそろばんのある村しちや　香貞
ほんとうにまゝ事をするあら世帯　二町
目をこすり餅くらはんか酒くらへ　加丈
匙に身をやつし杓子におつぽまり　振袖
馬かごのだちんであをぐ旅扇　都柳
おそろしいつのはらふそく三本也　十松
知つたふり杜若が內は三河町　柳雨
かなしい哉此女と此やまひ　杯舟
長つぼね牛馬の道にくらからず　市東
辨天の茶やへはすはな女くる　一德
御門徒の破戒よし町さしてくる　如雀
かの石は實朝公の御奉納　志水
間男の晝寐大たんふてき也　志夕
坊はだが子だとはふてへかゝあ也　苫笑
ふといやつ金はないから首を取れ　柳鳥
あつたら口に風いせやにいかねへか　竹子
關寺の所化衆あれでもあらと言　松山
其味ひ同じ玉もの前くづの葉　芋洗

狐聲評

天迄もとゞけばとゞく筆の先き　草麥

袖代さへ海山陸の家督わけ　鬼柳
其つらさ左右のたばこぼんを取り　里松
江戸と京かつぎの姿大ちがひ　千鶴
へぼ學者やつたら灸のふたをはり　松山
師のるすにうたゝ寢をする折手本　竹二
大江山かへりはたぼとむだをいひ　井蛙
中皿にひやざうめんは袖だゝみ　宜明
人だまとほたろまちがふ小人島　里鶴
桐したん宗旨ちがひでおくがもめ　芋洗
ふりきつて飛なと花容夫人いひ　未學
高繩の茶やからかみの引手也　如雀
買ふひしやくどうこの口にのみこませ　斗丸
三がの津二つは繪馬にふしぎ有り　門柳
謠までうそで仲人おつゝける　針人
三つうろこやすとたかとは大ちがひ　志水
青砥にて相模守をとぎあげる　マイタ
十郎はたび／＼とらの皮をはぎ　一德
客をきるやうにかぞへる料理人　雨旦
帳の紐禿のうちに織ならひ　古鳥
長船もながして仕廻ふ御不勝手　龜鳥

ひんのよさ枕ことばで文をつけ　花道
針妙も中ゆびねぢるきうな客　雨旦
匙に身をやつし杓子におつぱまり　振袖
いそぐほどすげがさの紐とけこぢれ　亦樂
下村の雪にかくれるいもばたけ　木葉
神木の梅すゞなりはうつてつけ　門柳
若衆よりやつこのへんに僧まよひ　龜鳥
道草に小僧口上おつことし　志夕
うつかりと口上どぶへおつことし　青枝
藥種やの鹽おしくまのゐと思ひ　矢正
かるわざは柳しぼりに日があたり　其笠
重箱のすみでとゞめをいもさゝれ　香貞
賀の餅をばか／＼しいとさとでくひ　竹子
山へんに上下八里をとほしかご　龜鳥
大石は土臺府帳はいろはなり　雨夕
下た帶で化をあらはす棚つ尻　同
江戸まへのうちは時々ひどい音　スヾメ
うなる藏はち卷迄もかたくする　集鳥
合の手に否うちをするきり／＼す　古鳥
たゝまれた蚊はかみなりによみがへり　藤後

松茸の有りさうでない松が岡　二町
産かごの返禮かるいさかな也　柳雨
御妾はゑちごの下へ緋のはかま　竹二
石塔の赤い信女が又はらみ　五町
洗足でかすかにおがむ奥のゐん　曉鳥
姫君の御乘出し十三四から　花道
めゝつちよの神奈川にある咲屋姫　木賀

集鳥評

加茂よりも葵の元は三河なり　西光
豊さは鶴の舞日に鶉狩り　葉石
腹面で摘のは賤の冥加也　矢正
いゝ夢を政子御前は買あてる　玉川
日月の門は雲井の外になし　里鶴
御役から四書の始を名につける　如雀
頼朝のおとし種でも大あたま　杯舟
松は皆もらへど德は下されず　如雀
常盤木の左右で梅と櫻なり　都柳
二千年見合てふへるひんのよさ　高與
張良は十五兩目で傳をうけ　松山
鹽賣はよせと大星ふかいちゑ　竹子

大坂は六文ぎりのいくさ也　射夕
いたいけさ鏡へおもちや借氣也　スヾメ
百樂の長と李白は初手に讀み　有幸
國家老成金めらをにらみつけ　シクト
せんたくで留守かと思ふ四天王　亦樂
たてものゝおくがたの物寐かしもの　苦笑
小林の朝比奈苗字計りなり　香貞
三つぶとんやはらかにして齒はたゝず　如石
聟を見に茶臺爭ふ下女はした　都柳
十うものゝ鰯を釣たがいゝ發句　市風
口計り大名になる御膳番　留人
祭禮のたびにふへるはほりま鍋　三朝
小人島産衣に鶴のもやうなし　錦鳥
八朔をのがれてへんの無いをくい　都柳
あらひ髮伯父に破戒の罪一つ　曉鳥
股引を中々うなる皮たびや　如雀
足引の娘につける家やしき　可笑
紫は朱けより黄色よくうばひ　カテウ
母は弓子は絃に寐るまくらがや　龜鳥
ゆび折つて見れば鏡にとがはなし　青枝

さすよりもはぢかふと云ふ下手將棋　青露
我は化たと思へども所化と知れ　カテウ
巳なる金どころかいせや卯なるかね　五友
横板に水が利をする家督公事　カテウ
材木やあばらの見える氣煩ひ　井蛙
かべに耳とうふやしきと下女思ひ　竹二
泡盛のさかなは猫のやうにくひ　柳鳥
鳥獸のこわいろ遣ひ笛をふき　香貞
きつい聟鬼千疋もわる氣なり　ふくろ
おきやあがれ下女聟に丸いの子　五友
手みじかをしてとつかまる手長島　香貞
舟かごにのらぬお客は馬をつれ　吉門
かねてたくみし事なればたれる也　留人
じつとして居なと行燈足でけし　八重喜
舟まんぢうは生洲夜たかは野じめ也　糸道
梅干の露かはらけにしみたらず　千鶴

狐聲評

評判の俵御手柄はじめなり　圃素
おだやかさ雀のあさる目安箱　春駒
神代にもおしなはとかくあら仕事　東爽

國々のみよしは江戸の方へ向き　其笠
來る風をほめてはとほす暑い事　留人
國家老すみうちをしてものを言ひ　青露
金銀もやつぱりさびて見える寺　市風
重いのはいの字輕いはすの字也　竹二
お妾は二世と三世の間のもの　錦鳥
甘露梅寺から來たとまじめ也　草麥
いにしへの團扇扇は今の京　竹二
本鄕は是我國の梅の花　玉川
夏ざしき三幅對の軸の音　有幸
新造はきこえる方を知つていゐ　古鳥
うらからも見せるで瀧の名が高し　同
さと言葉習ふもぬくも一とくろう　竹二
大まかな所だに菓子や伊勢とつけ　カテウ
きゝ肩で左りをねだる四つ手かご　ヨコセ
庄やから正月の來るいゝしめり　市東
芝よりは又かくべつとぱつく〳〵　山柳
稲の花櫻のやうにあほふなり　集鳥
南京であろう小さい帆が見える　志夕
かすりの前だれで假橋をわたり　桑虫

くらひこむはづ箸紙が出來ている　如雀
葛が出て花の名所と思はれず　柳鳥
ごふく店人も上み方仕入なり　春駒
早乙女の笠はうらから日があたり　都柳
床闇をてらし信濃へ鎭座也　三朝
あほふは寐て待つもふくるか〳〵　團素
鐵炮洲うそをつきぢの近所也　苦笑
かまぼこの板程あつて鮫が橋　集鳥
不老門しめれば内の藏が明き　スヾメ
ゆび拔はにぎつた人の手にのこり　曉鳥
主もうつ爺打栗も出る處　同
八朔に小袖を着せるむごい親　有幸
うんのよさぺん〳〵草が種を取り　竹子
女湯で世上のあかをこすり合ひ　三朝
妾が親簀になつて門をすぎ　亦樂
螢にも寐ぼけた禿アイヽ也　矢正
正札を是はいくらとはづかしさ　夢中
此世から一つ蓮の茶やを借り　龜鳥
三つ股のさいごみそかの月夜也　虻内
女房の癪をたゝみやひぢでおし　竹子

一樽で三百五十詩をつくり　亦樂
德に入る門へは息子おもむかず　圓素
楊弓場矢の羽からして色めかせ　カテウ
町内のちゑを階子の下へよせ　其誠
雛迄も三とせ長持住居なり　箕山
去年見た花で茶をのむ梅やしき　竹子
はげた齒を子に引かされて染直し　斗丸
團子ふしゆび母親にまるめさせ　春駒
直をつけるまへに樽かひ灸所おし　志水
齒がなけりやほつてもくへぬ孝行さ　振袖
神道者すくなひこなで半ばらひ　草麥
すてぶちのいまだに切れぬ三の糸　其笠
きげんよく借す鋸は息がきれ　都柳
釘のおれでも千金に通用し　松山
首二つさり狀そへてくれて遣り　寛奴
手のついた下女は旦那を足でよせ　可笑
三荷半ほどにからげる去り荷物　春駒
きつい成人といふ身の鏡とぎ　曉鳥
首のすげかへに湯番はゆだんせず　スヾメ
人のふんどしで目黑はこりを取り　東夷

御かんりやく道鏡兜雨もちひ　ヨコセ
夜るの鳥しめて夜る取る物をしめ　桃林
すまたのいしゆを三つ股で御はらし　錦鳥

川柳評

かるき身も重き忠義のかずに入り　寛奴
一ところゑは月にのこして集に入り　里鶴
井出御うけと花を持ぬれて出る　集馬
夫婦見る月には跡のくまもなし　マイタ
舞さうな娘も見える鐘供養　鬼柳
兄弟のほまれは宇治と藤戸也　集馬
七賢の一人り目色がちがつて居　玉川
野がけ道親父のぶんご初にき〻　吐聲
おしい事末代見えぬ翌日見村　竹二
まだやまぬ内に欠出す中納言　如雀
桃園で新宿へゆく義を結び　雨夕
かご迄もほつたて尻は時行いしや　山柳
とび入りがはいつてあらす幕の内　柳鳥
暮の文筆のてまへもはづかしや　志夕
小松菜を千把程買ふ彥左衞門　柳鳥
身の内の財くつる事無き達磨　竹二

みけんじやく意休らしいも一人見え　芋洗
うろたへた旅人耳塚奈良できゝ　シクト
詩の語のといはせず始皇皆埋め　集馬
宿書を調ながらに左兵衛出し　高與
是やこの行くも歸るも土手の内　都柳
股だちで弓師と矢師をせがんでる　糸道
張子房座敷がすむと身をかくし　スヾメ
的驢さんつとめなんしとお蜀いひ　集鳥
麥畠蛇になるまへは波がうち　其笠
をかしさは來月分も母しかり　留人
賴光は一ときれやつと鵜呑みにし　三朝
安禮者五種香賣を供につれ　東夷
太神樂太鼓に着物着せて來る　桑虫
口説かれて母もせひなき帶をとき　振袖
大一座一番首を下戸ねらひ　集馬
化されたやうに日雇は二本さし　如石
江戸まへのすぢで息子はぬらくらし　門柳
一國に三本あての尻つ尾なり　同
內股のほくろ呂后にかぞへられ　玉川
人間に卷ついて行安だゝみ　桑虫

佐殿は石橋山の穴さがし　都柳
藏宿へ其のち親父計り來る　集鳥
合羽籠さりとては又かるくなり　吐聲
三保の谷になつて大門かけ出し　藻鯉
蚊帳を出るやうに口上ひよくら出る　古鳥
水茶やを大師引ずりひん廻し　藤後
土だんごいなりも人にばかされる　ヨコセ
どくなはず斑猫よりもうつくしい　留人
はかな事舟のまきはらやたら射る　箕山
胸ぐらとたぶさをわける雨どなり　春駒
居候人間なみのをとこなり　其笠
かまぼこの板ほどあるが鮫が橋　集馬
母の雛草津の湯でも最ふいけず　虻內
相州の分野にあたり夜這星　亦樂
生ま壁にそろばんづくの妻を持　糸道
其にくさ間夫へ女房五兩遣り　集馬
しんで見りや隱居の腑もあか計り　雨旦
剃たてのかうべにやどる風の神　松山
持參金右同斷の下女をつれ　吐聲
鳥のくそ顏へべつたりさぼんうり　如石

らんとうの地藏亡者の組頭　木賀
丸の内きよろり／＼と田舍もの　箕山
更科の月見一升あてにたき　門柳
くらがへを馬につけてくかるい澤　如雀
角兵衞じゝかつぶし後家の子も交り　井蛙
丸の内しりへ手をあてまご／＼し　里松
一の谷六の方から坂おとし　玉川

俳風柳多留四十篇終

俳風柳多留四十一篇

此卷や、雪月花をかねて、閑に忍が岡なる小林亭に月月催したる判の句々なりけらし、其秀逸を筆まめに、とめて／＼おつとめたるを、家内喜多留四十一の篇となすと菅裏が言ふ、

戊辰春

玉章評

林の中でおさへたを御獻上　青露
道成寺上野へ芝を提て置き　吹唐
旗色のいゝのは初の節句也　青露
呉服屋を毎日のぞく吹屋姫　亦樂
蘇生して格別秋を觀じたり　礫川
大黒をすてゝとんぼをおさへたり　梅鳥
木に竹でもて給ふべきはずはなし　礫川
雲中子氣どりで國を家老立ち　芋洗

貧朝と持貧雨で智恵が付き　柳雨
大きいも白いも常の石でなし　有幸
北星は晝夜三分の光りあり　散殼
月の塲を逃るに水が手本なり　集馬
宵よりも今朝かむりたき綿ぼうし　素道
唐獅子と鹿に甲陽へちを卷　青露
白酒を雲の下から嫁は出し　礫川
晝春中夜るは善光腹がひへ　里松
宜士があがり南風吹いてきえ　菅裏
肴屋が助言入り王勝ちになり　雨旦
辨當の事で御室の仲間われ　如雀
袖口と扇を持つて急ぎ候　春駒
正月のつぼみ暑中にひらく也　如雀
五々の日に欲心の無い手を合せ　里遊
鞠の會ぐつと流してゑもん坂　儘成
時宗はそふじ祐成あわじ島　門柳
かはいゝ坊さんだよのふと花の朝　礫川
伏せ玉の束帶に嫁ほれるなり　同
木曾殿の守り本尊丸屋もち　如雀
引窓の車にこまるむつのくに　是樂

元の御座へ御直しばからしい　巾布
ふけ禪師とは尺八をすゝめる名　亦樂
足下は君子だと金をかりる也　礫川
四書をはらひよし原大全をかひ　同
月星のたゝり日の目を息子みず　同
知らぬ子のあたまを撫る野がけ道　同
こひはくせもの太郎から氣がそれる　同
すわつては拜みてのない六あみだ　里松
十六の娘ぶんぶく茶釜なり　礫川
蜘の子のよふに松永ぶちこわし　香貞
血眼になつて景政おつかける　里梅
豆どこか家根をまごつく市二日　魚角
後ろからまねいた扇毛請也　門柳
一歩そんこゝか〳〵とおして居る　里松
女湯は汐干隣はいなりやま　有幸
きつい事ほり出しに仕た井戸茶碗　横飛
親は爪子は蠟燭へ火を燈し　蔦夫
儒者のてんぷら趙王捧へる　如雀
木像の鳩は隱居のぬくめ鳥　眉長
わび事のひざをば五十六に折　藤後

金ぱくを付るはきずのある娘　三松
ふられた夜按摩かな棒耳に付　虎聲
上は繪書き陰日向ある仕事也　菅裏
二合半奴が在所きつい事　木賀
關が原眼くらはつゐと賴れる　里梅
手拭をのべつ丸めつ安い客　牛賀
笑ふ門立聞をする福の神　同
夜着の裏すんく\にするけちな客　礫川
むく度になを厚くなるつらの皮　雨旦
拔身にて守の殿にはうたれさせ　牛不
十兵衞はきうせん筋に天下すじ　藤後
あまり物にはおたふくで引けを打　菅裏
金銀をころして遣ふ下手將棋　吹唐
大暇日四百五病でうなつてる　礫川
こふもんの會芳町の大一座　シクト
蛇いちご釣がね草へからみつき　礫川
投げ入のひからびて居るけちなへや　志夕
人間にてはよもあらじ暮の嫁　如雀
氣をわるくしては蓮堀ひつこ拔　和恭
律僧は氣ざして來ると土砂を掛　素道

自然生程はほらせぬ百旦那　雨旦
かけ喰に勝はかつたがうごかれず　雨夕
朝がへりふられたやつは湯やでおへ　亦樂
弓削村で面ら中はなの子が生れ　礫川
大はら問答亭主下女にまけ　如雀
湯やの評判見ぬ人にうばはほれ　里松
はなくたにからしがきいて大わらひ　魚角
樂んで媱せず歸る淺黃裏　散殼
下女が戀五すぢほどに思ひつめ　礫川
陽にぶち陰につめつて出來かゝり　丸龍

川柳評

寅の月千代を祝せし松と竹　マイタ
天帝へ心づくしの御告文　玉章
梁はそも萬木に勝れたり　森鳥
御本社のあたりへ鎌を埋給ふ　丸龍
立ならぶ軒端も月の名所也　牛賀
ずつしりと忠義に重き國家老　礫川
薄雲で少しは晴た御胸也　雨夕
信玄の頭にやどる諏訪の神　玉章
姥を捨て月なればこそ名所也　友尾

妄語戒破り能因一首詠み　玉章
堪かねて嫁は優婆夷に三年せ成　里松
師直が事を頓阿とはなしてる　如雀
裏目ほど御高を分た梅の花　春駒
藪から棒の御最期と明智方　和恭
長崎で駿河路を先づ除禍聞　未覺
梓巫日傘頭巾は自分用　有幸
下駄がけでくる修行者は雨にこず　香貞
八丁を犬馬の勞で築上る　青露
信玄はかわつた物を目の敵　同
音樂の中へ文覺あばれこみ　同
女房はそのはいかんを見る如し　蔦夫
皿の音亭主座敷で目をふさぎ　雨且
桃園で關羽一人が呑んだよふ　吹唐
白日西に沒すると息子出る　礫川
王と釣師を一と車引て來る　菅裏
出家にてもふけ醫者にて遣ひ捨　里松
見物のかげへ張良むぐりこみ　如雀
きれろとはうたての仰候よ　横好
三十一相揃たのは小町　梅鳥

家中皆惡みんずるを殿好し　横好
此里へ流れて來たは水の年　猿山
江戸のはりちぎりにかけてぴんとする　玉章
仁和寺へ鑄物師も來る外科もくる　和恭
三會目あたゝめられつあたゝめつ　礫川
死せる平人大名を走らしむ　木賀
硎ぐ如く磨くが如く後家作り　青露
やぶれたる褞袍を着て母に逢ひ　亦樂
松永が元服袖と裾を留め　猿山
旅の留守内へもごまのはいがつき　シクト
雪陰で未練出してる下手將棋　有幸
よし金ゆゑにふられんは力なし　シクト
鎌倉からの早乘りは初松魚　青露
國家老妾殿樣三んすくみ　横飛
公家惡は一段高く無理をいひ　志夕
鼠一疋伏勢が五六人　扇橋
駕ちんを女房無言でほふり出し　青波
あの音〆うたがふらくはいゝ女　眉長
旅の留守内にもやたら恙が有　巾布
キカイから上へは針醫に身をまかせ　横好

外面は養母内心は女房也　散殼
餅莚だのかますだのと玄德　巾布
大晦日足音膽にめいどふし　マイタ
新宿は鳶凧ほどの張を持　萬仁
非修非學めがと園の喧嘩也　青露
時ならぬ藪入是だかもしれず　礫川
御小柄はなしさ／＼とけちな客　同
衣のたてはほころびてはんじ物　醉臥
藥禮の先づ脈を引く下品た醫者　萬仁
硯蓋出るより早く闕所する　青露
せひ歸るサア帶を出せ／＼　礫川
下女色身旦那以の外こまり　亦樂
仕付莩の儘で三分はものいはず　礫川
堪忍の四字が大事と庄屋いひ　香貞
居候慮外ながらの蕎麥を喰ひ　雨夕
供歸り鐽に二腰く丶りつけ　木賀
屁をひつたやつから鼻を先づつまみ　虎聲
おもひつ丶ぬればや下女はうなされる　巾布
新ら馬を娘しんまくしかねてる　都柳
船で賣るまんぢうぼろで一夕　是樂

大尾
大けつの元のおこりは下女が尻　有幸

マイタ評

天然さ郡を山の名にとなへ　礫川
道の實時にあはざる御殘念　森鳥
月陰のあけをうばへる物がたり　巾布
三保が崎あたりを五湖と除福譽め　青露
弓矢神腹から他國御征伐　玉章
武藏野に原と名付て月の廓　牛賀
日蓮の末世に殘す波の髭　谷子
一眼二さそく三寸の舌五百　扇橋
源三位女すか男すかに氣が付ず　有幸
うら丶かに稻妻のする鶴が岡　牛賀
空也寺の畑ひやうたん植付る　和恭
竹と栗和漢名高い孝不孝　柳雨
はらをかゝへて富士川を源氏越し　里遊
春の巣をかりて夏の巣うみ落し　森鳥
秋の雪ふけてゆかうに消殘り　同
よりだせば淺の實たつた四十七　三松
日本から月本國の家根が見え　礫川
あれなるは鵜で候と渡し守　巾布

立て耻ざるは獨身の朝寐也　眉長
鳥のすね一本で城を持こたへ　シクト
茗荷畑から名馬が一度出る　柳雨
翁そば元祖芭蕉としつたふり　菅裏
命と魚をうけやつて鰒をうり　三松
よいお手を反古にしたのは延喜帝　礫川
北風に勇むは胡馬とはた息子　如雀
秀吉も紙の袋にきもをけし　藤後
番新は味噌用人の娘なり　横飛
品川でふられ照れ〳〵坊主出來　菅裏
太郎から人間わづかなぞと行　雨夕
曇りなき寺に傘さしておき　魚角
一とからげ涙のとゝく島千もの　雨折
片鬢を摩滅している大持參　横好
生節をなまりぶしとは江戸なまり　歸朝
惡や姫らしいも見える御不勝手　青露
陰道の實に鈍なりあの坊主　礫川
一日に十里ほどふむこんにやくや　青露
輕井澤ぬくとめられつぬくとめず　柳雨
筆をえらまず松の枝でをしえ　萬仁

中たんぼおよしなんしの心實さ　有幸
どふしても女の運はまたにあり　猿山
旅の留守女房そら錠ぴんとする　玉章
おすざんす是通人のねごとなり　柳雨
破風の外黒雲じつと待て居る　礫川
春秋を周倉よほど聞覺え　シクト
糠味噌の汁で一ぱいおやじくひ　有幸
下坐をした天狗は鼻にどろが付き　谷子
獅子口へ扇子などさす安家中　玉章
なんとでもおいひなんしとつれて行　礫川
虚に乘じ陰にもと付月を負ひ　シクト
頰骨が出たと花聟なぶられる　礫川
とこ闇でひらくは下女の岩戸也　如雀
おへ馬よ變だ〳〵と下女わらひ　横好
いつきなんすはきぬ〳〵の仕着也　猿山
間男をとらへて見れば養子也　萬仁
萬能を一文で買ふ湯やの見せ　梅烏
下心あつて針箱などをほめ　礫川
山烏とあしか寐ているけちな晩　白烏
居候いまだ殘著といふ身なり　有幸

先納に勤をさげるけちなきやく　青露
國家老ほしいまゝにはさせぬ也　礫川
國家老しばしが程は無言なり　同
わりい事ばかりといふがおきるしほ　里遊
しばり上げ忠盛糠で手を洗ひ　和恭
相手有ながら死ぞんじんきよ也　里梅
詰んでるに肺肝くだく下手將棋　有幸
鰹節きんてうをしてうつてやり　如雀
いとゞ猶ひだるい秋の居候　柳雨
七人を井戸堀にした深い知恵　如雀
つれ〴〵のちやりば鼎のおばけ也　集馬
花嫁の其夜いふべき言葉なし　礫川

川柳評

法眼の筆萬木にすぐれたり　雨夕
拝見の鐘はどんすで七まとひ　青露
一不二と言へど是にはおとるべし　青狸
明石も須磨も外ならず式部入れ　三松
高縄にすぢめたゝしき刀鍛冶　シクト
めうがあらせ給へやと大般若　玉章
新錢座上野と同じ時分出來　箕山

三つ蔦に直して輕い手を通し　志夕
殿よりも一目強い國家老　シクト
手をひろげ平等院のもの語　巾布
木牛も仲達も首ひねる也　同
蝶花を詠めせしまに娘ふけ　横好
緣のない寺までそのよ大さわぎ　如雀
もふ二厘買んせニヤアと黑木うり　礫川
何事のおはしますかは姑なき　有幸
御不勝手淺黄帷子黑小袖　巾布
呂后でもしやうがひしほにならぬ也　如雀
ものいふも夫婦づれではよわくみえ　志夕
鶴と龜壽命と足はつり合ず　同
丸山の傾城船をかたむける　是樂
板の間と長田異名を付られる　魚角
大黑の子にうち敷を二つ着せ　和恭
雨ふりを知らせて廻るたいこ也　三喜
迷ふまいものかひつしと並んでる　藤後
楠はなきものにして扶持をくれ　青狸
孝行さ藥の鍋へ身をなげる　青波
沖釣りは心肝腎の糸の脈　都柳

北辰に向ふ衆星士手を飛び　散殼
房事とはなんのこつたと女房聞き　礫川
よつぽどなきげん坐頭を杖につき　有幸
婿謀のくわだてをする若ざかり　里松
百貫のかたに麻上下をくれ　同
不屆さ子は親に似て父ににず　横好
六か敷さ事毎に問ふ姑ばゝ　同
國家老笑て損をしたをとこ　同
いゝ仕舞わるい仕廻も横に寐る　玉章
いゝ娘はだか承知で齒がたゝず　里松
高はごに鳶がかゝつてもちにつき　礫川
勾配のはやいたぼだと屋ねや言ひ　香貞
ひなへあさづきいかんとも解せぬ也　礫川
あんでごすなアなア〳〵とみつ物や　蔦夫
よく聞ば看病人と迯たげな　藤後
いかめしく兩敬にいふ若い者　如雀
咄されぬわけで和尚は咽がはれ　和恭
ほれ代を錢でとるのは神樂堂　里松
番頭をくどきつけては配所させ　巾布
きんならまごら嫁笑ひ大不首尾　礫川

心實はなしかゝさんは繼ざんす　礫川
ぶきよふな杵は木馬のあたま也　眉長
飜翻（へんぽん）とふんどしを干すあんまりさ　菅裏
屁のやうな月を息子は内で見る　和恭
里芋も息子もかぶる後の月　礫川
なぐさみにすればほんまに下女じくね　森鳥
玉にくらぶるなら葛は地もの也　亦樂
是さにはよふきゝますと玉子賣　藤後
下馬を出し附馬にはねられる　青狸
二た所の三國一に夏の雪　玉章
文と武にかほりの殘る梅の花　雨夕
天の戸も地の戸もいらぬおだやかさ　礫川
こま廻しのふしやをうらんはかりごと　丸龍
おもかげのかはらでつもるさくや姫　杯舟
海邊だけ牛にまで帆をかけて出る　桑虫
本望さ明き手のかたへ人をつれ　玉章
伊達な事唐木に穴を六つあけ　礫川
付ぬといふに此子はとさとのしち　同
右に見る時は不首尾な木ぶり也　シクト
御無人とみえてどふれのひんのよさ　品能

威風りん／＼と童女を二人りつれ　箕山
御座敷の疊は鶴とおないどし　シクト
きつい事根太は黒鐵門は石　玉章
紋付でなくて一夜に出來たもの　礫川
其あした青菜を獻じ鶴で候　同
暮の嫁來年中の御重寶　横好
家名にも郡をなのるいゝ酒屋　孤雲
町内の一つ家ほしいものだらけ　山柳
相談がきまり柳を北へむけ　和里
さはらば落ん風情にて嫁羽織　桊溪
膝の下から月の出る歌がるた　二松
九重に尾をふりまはし迯去んぬ　森鳥
旋主でもなくてとぶらひに傘が入り　末學
とうふやのもみぢ他生の緣で付け　玉章
三界無庵内證は二た世帯　里松
兎から一日飛んで四海浪　美德
おく山は佛法僧がおかをひき　五友
目藥を二階でさゝぬ國家老　如雀
下戸ならぬをのこ二親くろうなり　玉章
近所口上すゝはきとぞんじ候　同

きついやつ三十二兩染てやり　青露
ほうろく頭巾あつたかな隱居召し　大橋
みす紙で狐狸のかほをなで　可笑
眞間の翌びつこ引たて女房くひ　里松
郎を房にしたで息子のどらがやみ　礫川
桃のない時は蛙を鵜はくひ　同
間男はいきを活して舌を出し　杯舟
香のあしきのをくふのは下女が色　横好

川柳評

有がたさ仰ぐも高し御扇子　是樂
はんじやうさ芦のつのぐむせきもなし　礫川
三井の入相に花ちる里をかき　玉章
せう／＼な御身をけがす時の難　賤丸
高砂の松は侍從に任せられ　琴我
手と口で僧正水をくみ給ひ　箕山
三國はものかは天下一の山　礫川
膳白し名織のあけをうばふ也　横好
淀まずに御うけを申す市正　礫川
小むすめにいくのゝ道ではりこまれ　徐來
玄宗は尾張詞にたらされる　玉章

弔に行がたしれぬ二三人　素道
大内は植木のつぼがたんと有り　箕山
朝歸り裏へ廻れと母小聲　礫川
意趣ばらしい丶きみをした源九郎　箕山
談義場で芋一俵の施主が付き　和恭
目に立つたはたらきをする權五郎　香貞
日半日形づくりに嫁かゝり　礫川
だがよ〳〵と實盛は木曾へおち　玉章
いづくにも筧は水をおつぺしより　銀文
嫁の禮姑のあるく所迄　琴我
仲の町無地の感狀息子出し　玉章
ふりそでを着せて梟引程たかり　和恭
妾の手からせうきだの關羽だの　礫川
びわの曲下手か上手か知れぬ也　玉章
其あがり口は八町手は二町　品能
旅の留守亭主の様な者が居る　シクト
わる樽を入れて童子をぶつちめる　礫川
なぜぐちにしなんしたよとちくせうめ　松歌
おいらんの左右住の江明石也　雨夕
龐德がてだては施主にたつたやう　シクト

月夜には郭巨別してゆだんせず　礫川
先最初たばこぼんから天上し　森烏
舟廻し鬪付も來るくるわ也　箕山
すべり道目をさらにする茶わんうり　留二
醫樂のいやすべきなしほれた病ひ　礫川
氣のよわひかけ取笠を取て來る　孤雲
しうとかへつて嫁をはむ不落着　素道
和漢のてんぷらとうぞくと儒者でゞき　南折
火が降て石の燒てる御不勝手　猿山
主人相しらず日雇はまご〳〵し　是樂
雨やどり入もせぬもの直を付る　大橋
猪は仁田にけつの毛をぬかれ　香貞
樂み其外にあり女房やき　松歌
馬喰は三人よると馬をのみ　素道
疊屋に老こんだ杵二三本　如雀
ほれ藥十日過てもさたもなし　素道
姑の婆々はしのころぶを待てゐる　桑虫
赤貝は近目の鼻にくらひ付き　志夕
打出しにいたゞく菓子と大屋いひ　和恭
門内の井へおつぱまるどら和尚　菅裏

みすく〱きやつと思へども借りが有り　礫川
間男のうはまへ大屋二分しよしめ　和恭
口切を下女口明けと覺てる　大橋
村姑へたばりついて居めさろよ　マイタ
賤がたけ下女をおつかけ追回し　杯舟
おしろいをした下女首を繼だやう　マイタ
辻番のおやぢふんどしよんでゐる　五友
神樂獅子きん玉二つ首三つ　松歌
廿日過何んのかのとてする間なし　狐雲
筆の毛のあるくを墨やうるさがり　萱裏
四會目にまだ文も見ぬけちな客　梅烏
妾が兄尻馬は扨上手なり　如雀
お夜づめが長いと薬見どくを言ひ　ヤマキ
うぬらこそたびの樣だと切て出る　礫川
べらぼうめ又煩へと湯女の文　同
あの家根はくわんおんさまとやす涼み　ヤマキ
たのしんでいんせずゆびがけつたるし　如雀
文日堂評
檢校と嫁で一と間をおつぷさぎ　未學
大根は白髮にうてとのたまはく　如雀

あの時は氣がもめたよとあやめ言ひ　ヤマキ
櫻もる月の一と夜が三歩也　シクト
二つとはならびが岡に無い草紙　青露
二つとは火入れもあつい涼み臺　雨夕
狩場迄出たは大きながはづの子　同
寐せつけて我身を盗むまくら蝙　里松
名高い蕨日坂と首陽山　玉章
挽き屑を入札にする毘首羯磨　如雀
じやまなものさげて富士から女郎買　青露
ひいた茶を客にのませる姉女郎　雨夕
出來ぬやつマアそふ言て見た物さ　同
遙拜をさせて侍從はもてあまし　如雀
松が岡野郎は疊計りなり　梅烏
胴切りの奴田町で名が高し　和恭
大門であはれ端武者に生どられ　青露
芽を出すとぢきにつまれる鷹の爪　如雀
首と尾が有るで大川をおよぐやう　玉章
鹿島よりよもやぬけじは伊勢の留守　萱裏
大笑ひ二たのでは乳母尻ばかり　雨夕
切見せの名にお百とはきつい事　ヤマキ

おやつかなふとつかみだと村出合　雨夕
おれが女郎はおめえかと大生酔　シクト

川柳評

不老不死こめさせ給ふ御寶藏　シクト

雨夕評

住の江の岸に樂天寄る氣なり　青露
里心始終ふつたは政子なり　箕山
新造其高尾が不快見て參れ　礫川
いたくない腹さぐられるおめでたさ　如雀
奥家老よく／＼見れば野郎也　ヤマキ
いの字から京までもれぬ江戸の町　礫川
雪にとめたで豐年の源左衞門　如雀
玉の盃そこのないい丶むすこ　玉章
てうはんぱねこそぎ劉備負こける　孤雲
晴間を待つは古歌を知る雨舍り　同
天草の後ちもせいろう不出來也　如雀
玉くしげ箱根でほどく女旅　菅裏
一と月も習ひこくうに吹たがり　梅鳥
やく女房小言をとこしなへに言ひ　礫川
折鶴の開眼口でひとつふき　孤雲

ふつ丶り悋氣せまいぞと仲人しやれ　ヤマキ
さし口でおいらんの出る仲の町　同
其猫をくれさつせへと村子供　同
もうちつとおそいと孟子うめられる　未學
あみ笠の内を御かごに見ぬかれる　ヤマキ
鼻へこよりをおし込めと張飛言ひ　和恭
堅田流ともとのふべき琴の面　菅裏
姉さんがけふは芝居へ灸するに　同
新造が寄つてふり出す袖の梅　礫川
首じつけんも相濟と仲人しやれ　曳尾
聲あつて人こそ見えねぬり物師　礫川
元木にまさる標木あり六あみだ　千之
酒かつて尻をきられたやつも書き　青露
舌うちでき丶耳をする料理人　雨夕
かんにんをして三百目落手する　礫川
師匠の花見お筆だのお墨だの　同
火を吹てござると新造出てあるき　同
暮の文こいつ古句と點にせず　如雀
くつ／＼と瞽女のあばたを嫁かぞへ　礫川
孝行さ須彌蒼海をはやく知り　シクト

突出しのまだ文も見ず仲の町　ヤマキ
手がいゝでよしなし事を賴まれる　箕山
たらちねはかゝれとてしも仕込む藝　菅裏
しうれんの臣妹のうつくしさ　シクト
わしる事でんたり息子四まい肩　青露
兄は竹妹は虎を喰つて居る　雨夕
朝がへり大家さしそいやつとすみ　巾布
松浦潟向て高尾はしうたんし　末學
素人に借すとかうだとうるし刷毛　礫川
合羽かとおもや納豆箱を出し　玉章
こはさうに勝手をのぞく文使　横好
三つ星へ切られた腕をつぎに來る　雨夕
大門でばたり端武者にいけどられ　青露
女房を持て所をかまはれる　ヤマキ
かへ玉をひねつて春やぱつく／＼　孤雲
苫をつきぬいて船頭ひよぐる也　同
持さん金顏にこつくい切れも有り　ヤマキ
居候たゞくひたいがやまひ也　同
おかしさは密夫とらへてむこふるへ　同
アヽいつそ牛の角文字ゆがみ文字　曳尾

文日堂評

御拜領戸びらも鶴の聲を上げ　萬仁
花ぞむかしの虎の尾は香に匂ひ　玉章
どつちらも上の字のつく靈地也　末學
二か國へ一艘うかむ吉野丸　シクト
竪板に水はまがらぬ御さばき　ヤマキ
時鳥弓張月に矢のごとし　萬仁
へんなものぶち殺したと西の狩　如雀
俤もかはらず今にはたち也　シクト
松の內箔やの石も二見潟　横好
鳳凰は三分孔雀は十二文　雨夕
あつい事疊の上へ雛をたて　里松
てきたいをせぬと七兵衞雨しゆもく　雨夕
松はつれないが櫻はつれがあり　同
小姑がたきつけ嫁をいぶし出し　ヤマキ
五月雨に四五文かけてやねをふき　文魚
猫の目によくにた顏に嫁くろう　シクト
將門の友はゑんぽうよりきたる　箕山
遊女にはぼさつ下女には如來也　玉章
抹香と藥を女郎かぎわける　巾布

音のせぬ大きなどらを息子うち　シクト
けんどんな箱へやさしい銘を書き　曳尾
色事の書籍はかたい所で出來　箕山
毛氈へちとお笑とすけんぶつ　曳尾
亂酒の盃桂角のやうに飛び　孤雲
隣ではヲヽあついのにまだうせず　里松
喰ふ事は老甫にしかず馬喰町　横好
こわい咄はかすうかに灯が見える　同
端午重陽やりくりの節句なり　雨夕
奥家老ころぶと口のまがるたち　礫川
居候引きぞ煩ふはやり風　青露
しあん橋ろくな思案の出ぬ所　礫川
毛深いが味ぢは親さとかしううり　同

當座五節題

川柳評

武藏野へよもぎしやうぶのうれること　梅鳥
露にぬれつゝは七日の節句也　巾布
うるはしい主上さとから受禪也　箕山
月の間ひ菊も傾城ひとくろう　シクト
紙くづを寶舟からためはじめ　梅鳥

妾手柄清和源氏をおんならべ　箕山
四斗樽のそこをふみぬくあやめふき　青露
長芋を下手に作て五月うり　玉章
せうぶ湯はけんちん鍋へはいるやう　巾布
中元を下女折助と思つてる　シクト

當座題　徙移　梅雨　息子　御不勝手　下女

川柳評

引こしの初手の車に一萬度　箕山
五月雨こよみのいらぬ入梅左衛門　シクト
わたましの先づ日當りをほめる也　青露
梅雨の內月迄笠をめして出る　如雀
入梅に藥種を一味うつてくる　玉章
參宮に息子は渡唐ほどさわぎ　如雀
雷がことわりにきててんきなり　箕山
息子月銚子はづれな所で見る　青露
いつかうにげせぬ息子の六あみだ　玉章
しんたくまさにあらたなるかゆができ　シクト
二百ごみ息子いけなく成にけり　礫川
御ものずき是は〳〵と御わたまし　雨夕
御不勝手佐野から出たる御家也　礫川

三度めは昌平橋へ荷をはこび　如雀
御ふがつてかべに木の子を生じさせ　玉章
いきすぎた下女はきらずで米をとぎ　同
臍ねらひ雷およびむすこなり　菅裏
扶持かたのぬけがらで葺く御不勝手　如雀
取次にふるなを遣ふ御不勝手　シクト
ぬす人上戸女郎でも地者でも　箕山
張良儀風とまかり出申そろ　横好
旅のるすあだし心を女房出し　礫川
若後家へもふ入札が五六人　同
物茂卿とは佛かと文盲さ　同
だがくるか御用家樽を置て行　同
傘とつかみやつてる大あらし　ヤマキ
八朔にしよふ模様で安女郎　青露
範頼はぐつと上座にたまつてる　礫川
おけんくわの邪魔ながらどふぞ駕代　如雀
人をはらつて扨野郎めが事につき　礫川
口取りをとらまへ四部の弟子はよな　如雀
やかた舟どじやうがはせを釣ている　雨夕
義理わる息子善七が手下にされ　玉章

けいせいに火を打かけてのらへ出　如雀
米見升取雨作を小者さし　玉章
十三日窓から下女が横に見え　礫川
馬のけつ覗きこのきれはいくらだ　同
若衆ずき郭巨と仇名つけられる　里梅
たてのものよこにして出る使者の供　雨夕
趙雲が鎧小便くさくなり　里松
かこわれの親寺社よばり仕てゆすり　如雀
下女晝夜つとめて内がもめるなり　里松
天の網間男蚊帳でとつかまり　青露
それのこる首とは見えぬ三歩也　ヤマキ

川柳評

御虫干見ぬ御先祖のものがたり　雨夕
片男波芦邊をさして二千才　横好
英勇をろんじて口をすつぱくし　如雀
姿見のあたり道灌雨やどり　青露
郎等に太子はわたり者をもち　如雀
我かよひ路の關守りは四郎兵衛　シクト
其當座あやめは鵺にうなされる　礫川
叡山で坂本ごえを息子する　来學

禪尼の慈悲は一門のあだとなり　里松
赤松でたつた火の見の其高さ　如雀
鐵棒で俊乘坊はあるく也　同
國につゑついて新造かひに行き　シクト

玉章評

目出度さは夜舛で春の富士を見る　ヤマキ
孝行の一ばん筆はまゝ子なり　箕山
酒中花を見て重氏は世をすてる　孤雲
江戸馬が來たと見に來る雪の下　箕山
雨の宮かさやと下駄や信仰し　里松
文月の頃に御法の巻は出來　礫川
五月雨に腐草ながれる宇治の川　雨夕
花の枝ソリヤ坊さまのたびにちり　横好
行燈をすつぱり車胤もじではり　礫川
門の名で見りや風神は居候　菅裏
北の極樂で身代往生し　如雀
雨やどり清政を買ふひんのよさ　横好
太々の夜具けちなばんなどゝしやれ　雨夕
弓をれ矢つきて息子すけん也　シクト
ちさん嫁雨に一つのあばたなり　ヤマキ

巾布評

鷹司鶴御披露の御家柄　玉章
紫を着るとうき世がをしく成　青露
枝や葉をあばつて常盤落る也　礫川
櫻もる月にやうやく酔がさめ　同
夜が明けてよく見りや伽羅に違なし　シクト
重箱でみそをすらせるいゝくらし　礫川
けんをふる妾鍾馗をうみおとし　如雀
御目印三國一のごふく店　青露
甲州のかしかり丸くすます也　如雀
よごれぽい裙で女郎にいやがられ　箕山
宿下りはならぬ御家風だとせげん　礫川
針疵を數か所かふむるできぬやつ　同
腹をたつてもたゝいても一歩そん　ヤマキ
べちやくちや〳〵とヽとんだひまな晩　香貞
ぢれつてへヨウと廊下をばつたばた　礫川
うばが宿きけば下谷の廣小路　梅鳥
首をあらはずと忰を見ると知れ　末學
紋日まへ尻でのゝ字を書きのめし　礫川

文日堂評

甲冑に樟腦匂ふ太平さ　玉章
淺野でも忠義は深き國家老　ヤマキ
金銀をいかして遣ふ段將棋　梅鳥
小倉山でも第三ははね字どめ　香貞
野路の村雨山吹ののちにはれ　孤雲
有常が娘きれいなりんき也　青露
つらの皮あつく名歌が一首出來　菅裏
百首にも源氏一帖式部よみ　如雀
仲の町計かにぎやかな秋の暮　雨夕
つみで無い釘をきかせる妙國守　如雀
鳳凰は燕雀をつれ仲の町　青露
いゝ女郎世上の髮に名をのこし　シクト
吉原の道を蛇の知るあつい事　同
とぼ口の櫻がいつちおもしろい　玉章
深更の月も品川もん日なり　同
爰やかしこで茶をきつす緣遠さ　同
持參金きづかひの無い留守居也　箕山
四會めは三とせなじみし猫のやう　巾布
坊主持ちどころか下たに〳〵也　礫川
洒かつて尻を切られたことも書き　青露
さし口でおいらんの出る仲の町　青露
嫁いびりいはんや下女においてをや　玉章
親王面らでもあるめへと藤太云ひ　橫好
壽經寺と小石川中たづねてる　如雀
三島女郎三國一のけしやう水　橫好
隱居さへ行くに息子においてをや　如雀
大一座すでに先陣坂おとし　青露
かんにんをして三百目落手する　礫川
其鼎跡でつぶしに賣て遣り　同
名にめでゝ折れる計りにおつこちる　橫好
嫁で御座候なぞと持參出る　シクト
つれぶしに障子のうなる御不勝手　礫川

川柳評

競べきものなし加茂の葵艸　青露
玉川の色に加茂川うばはれる　シクト
錦木を納れず紅葉はくちはてる　巾布
高尾よりきりやうすぐれた留守居也　青露
花ものをいはず傾城受納する　里松
三輪の神たゞ一筋に思ひつめ　雨夕
安い時出し高い時つぶれ．　如雀

周の代のほろびる迄は慈童生き　未學
外戚の叔父はすこぶるこわくなし　礫川
おく家老髮を逆さになでつける　如雀
晩學に身が入り袖をとめて遣り　未學
よしの丸しづか御前がひきたてる　玉章
十五日いや是はいゝお上ゥ様　礫川

十一月三日冬籠三十評
左簾　佛外　宗佾　旦尾　月枝　乾什　龜貝　小知
立几　志山　松楓　李岱　靑峨　百恭　叟馬
當日即考
雪志　得兆　瓠山　姘尾　長鶴　律佐　湖十　永機
風瓠　午道
右於自庵相催十二月三日開卷仕候、當日御出席御入
句は當朝迄に奉レ願候、
十二月三日年籠
了阿　皐波　田女　春色　戀稻　春堂　唇秋　不崩
三湘　田社
右は御一評持にて相催申候間、是又御出席奉レ希候、

あたらし橋外
會　寶　井
助　社　中

俳風柳多留四十一篇　終

俳風柳多留四十二篇

古木のかはやなぎが連板なる、門どの柳が評を册の入り口にそへたるは、花やが見せなる一株の目印なりと菅裏頓首、

戊辰秋

門柳評

天土はうごかぬ御代の御宗躰　春駒
一本の菊は日本の靈鷲山　マイタ
御山號三河に緣の靈地なり　玉章
繪で見ても内裏守護する源氏雲　玉川
犬骨を折て高野の靈地也　留人
鷹居ゑた拳も鳩の杖と化し　市風
束帶で出たしばらくは燒香場　カテウ
忠と義の二つまつたき巴なり　靑露
御の字を下たへ廻して御名代　糸道

五十帖目にまぼろしの卷を書　矢正
男山舟で見逢のさくや姫　木賀
藤澤の蓮花時かうにかヽわらず　矢正
僧正のかんしやく柚を呼に遣り　如雀
扇おつとり實に扨も芝の鐘　カテウ
法官で踏む七艸は入院也　竹二
一聲は時雨の亭にほとヽぎす　雨夕
忠度の夜具はさくらの惣模樣　曉鳥
大そうな奉加國主の馬を譽め　古鳥
佛在世黑くなりての御味方　東夷
念力の馬島原で草を喰ひ　カテウ
彩色の文で御里は安堵なり　矢正
精進の禿一座もかはゆがり　スヾメ
大の字で碁ばんを蟻の這ふも見え　カテウ
其ほとり石よりこはいぬり枕　矢正
割床の世界は知らぬ金屛風　木賀
をしげなく錦を破る筏さし　紀鳥
鐙へも屆かぬ足で代をふまへ　圓素
發心も谷法躰も谷でする　木賀
唐の寺和の賢人は一旦那　曉鳥

人情の欠けをあつめて母はつぎ　井蛙
災ひで無い根の殘る祐天寺　カテウ
放生會奉行職には千葉之介　竹子
淺からぬ慈悲草枕せよとよみ　玉川
年寄で衣の色はわかくなり　志夕
古渡りのあくたい馬鹿と阿房也　三枝
星の影消て月見は闇になり　カテウ
墨丸がほしいと請けぬ御墨付　同
呉服屋と陣屋判取大違ひ　曉鳥
負て勝とは拜領の恭ばん縞　雨旦
神の聲色笹葉を顏へ當て　里梅
かたみ分け貰ふ氣で下女やたら泣　マイタ
王樣の側金銀の御寺なり　夢中
性は善也科料を出して垂れ　鳳凰
良藥を耳へつぎ込國家老　亦樂
借りものを返すと佛樣になり　山柳
花でさへ千日草は坊主なり　柳鳥
大黑の里で羅子羅を育させ　志丸
錢と小判を石碑の前へほり　眉長
うす墨の玉章里で安堵也　八重喜

上下で持つは哀れな螢かご　五友
女房よろこべ牛口は取て來た　葉石
草餅を產んで妾は胸がやけ　錦鳥
兵粮のからを楠武者にする　スヾメ
祐經の虛病御年貢つかへ也　カテウ
かこ付の汐干仕合蛸をとり　山柳
行所は湯殿流しは置土產　木葉
九つの團子月見に味噌を付　亦樂
年禮は預け過して喜左衞門　糸道
牢番の目を貫き魚のゑらを拔　錦鳥
細見を詠めて女房此あまだ　園素
魂しひを成佛させる樂屋番　錦鳥
悋い國たまるの地名きつい事　曉鳥
人同じからず三步と二十四文　有幸
下女膳を炙しめ一つで居へ步行　カテウ
みな色と金だとゑんま帳をくり　里松

狐聲評

月花の友は次第に雪ときえ　マイタ
光明は三日の月の跡へさし　井蛙
釋門へ魚鳥の這入るいゝ功德　竹子

芝でした扇へ夜の金砂子　草麥
酢の味の三色凡夫の口でなし　亦樂
振りかへる時は善光まぼしがり　巾布
やさしい鳥歌も詠み經もよみ　木賀
御危難は鰐の口より龍の口　古鳥
傾せいと化身こくふに花が降り　里松
雨の脚ふり草臥て時明り　市風
胸中も水晶らしい善知識　吉門
御茶とふの伽を茶せんで立通し　里鶴
命毛の先きも辭世で丁度きれ　古鳥
そうめんはそばを進めて身退き　紀鳥
名山がふとると月もすごくなり　青我
追善がすむと神事の仲の町　木賀
燈ろうも戀の部に入別世界　二丁
奉加帳表八句は筆になし　志丸
常の水流す紺屋の忌中なり　古鳥
佛躰に御後ろぐらい像はなし　矢正
おく樣の見る度腹の立つ女　山石
黄金で高尾交り深からず　亦樂
浮草は歌になつても水に入り　門柳

附ひぼで名跡をつぐいちらしさ　芋洗
鳥羽殿をかの玉どのがつまむ所　柳雨
年もつもれば雪ほどに白くなり　亦樂
居なんしの味方に雪は降出し　藤後
うろこ形あれに御舟と指をさし　里梅
三所へ假りの皇居を二月立て　園素
六月は其日歸りの内裏びな　糸道
此世の夢も見仕まひと先きの夢　草麥
高山へ登る念佛杖になり　志夕
口よりも齒を參らせる高野山　柳鳥
魚鳥留せずに風雅の手向也　カテウ
祝ひは千年佛だんの鶴と龜　三枝
如才無い嫁御經をもよみ習ひ　如石
坊主持あじろはあまり大き過　糸道
塞翁が馬どちへでも行次第　亦樂
六字より五字と七字が手向也　鬼柳
其後はぬか味噌和尙計り出來　虻内
ちよつかいがうごいて來ると猫で張り　木賀
精進の禿一座もかはゆがり　スヾメ
十德を仕立茶臼を押におく　草麥

城をさへいはんや藏においてをや　マイタ
大食の國は月迄たんと見え　左逸
いが栗を鼬こつこでつまみ上げ　錦鳥
一と拜みするが珠數屋のしあげ也　竹子
梅やしき珠數屋は無理な詠め樣　志夕
九つの團子月見にみそをつけ　亦樂
さん〲な月見星まで消たまひ　東爽
奢はて今は甲良に似せて堀　矢正
人數で買ふ丸綿は哀れ也　可笑
朝歸り敷居が箱根八里ほど　五友
長い夢狸寢入で五十年　古鳥
なき人の爲かやけふの六あみだ　市東
焚付て茶釜の豚を引て見る　寛奴
太郎兵衞あいびやれみいらの迎ひ也　團素
坐頭の坊家ごしにさすり草臥る　其笠
アヽイとは偕いけづるい返事也　鬼柳
はたご屋の下女三保の谷をおつ放し　杯舟
やぶ醫者はげんよりへんを見せる也　竹子
どんなものさしかわからぬ釘の寸　カテウ
井戸堀は上り家根やは下りて喰　千鶴

行がけの駄賃十月二百かけ　矢正
かうろげに氣を付られる手ぶつてう　藤後
鳳凰を見て茶をあがれ仲の町　スヾメ
うるさヽに貞女茶せんを剃こかし　三枝
釋尊をよこたてにする春と夏　竹子
床下にひよめきの有將碁ばん　糸道
桐の木を下駄屋に見せる哀也　木葉
荒海や闇を着て寐る樂屋番　松山
氣が付いてかぢつた臑をさする也　同
おさらばを乳母は旦那にして貰ひ　可笑
勘略の障子に種々の花が咲　藤後
手や足を山形にする安す日待　雨夕
しもく橋鐘つき堂の近所也　志水
芋畑親子引とるふてへやつ　集鳥
念佛に力を入れて湯に沈み　蛇内
そばやの入聟芋つなぎを仕出し　市東
割り物にわれ物も有るまヽ子算　シメコ
おくの院鈴ふり立て拜む也　寛奴
辨慶が悴けんごに出家する　木賀
赤貝が吹くとたしかに五明樓　里鶴

川柳評

影武者に六萬べんの御味方　園素
拜領は其身に餘るきすの魚　虻内
沽劵狀かみもかたみも厚い綠　古鳥
志しこぶし一つを精進ニ　曉鳥
大法事富士や淺間が罷り出る　如雀
米の餅扨極樂にほど近し　古鳥
手にかけた袈裟を淚で首にかけ　井蛙
念佛を質に置たもよすて人　香貞
御法から花ちる里へ大一座　雨旦
死金をいかして遣ふ野邊送り　志水
燈ろうも戀の部に入別世界　二丁
龍造寺だけに御紋も八百や物　柳雨
やれ鼠〳〵と三千坊さわぎ　カテウ
死でおしまれたは小松どの一人　玉川
觀音でにじむじ言ふを進め込み　東夷
勘當を救て母が泣はじめ　伊庭
御詠歌で慈悲百番をかけ廻り　都柳
かたみこそ今ははでなる上着也　葉石
上を見て法圖の有は知恩院　箕山

紙花を和尙のちらすねり供養　柳鳥
手向水一荷でたらぬ泉岳寺　マイタ
念佛も大きな珠數でらんがしき　青我
天王寺極樂からのまん向ふ　門柳
無常の風にさそはれて壹分消え　青枝
十八をこえて忽ちせん化也　松山
たへま寺佛の手織ものを見せ　玉章
御詠歌の跡へぶら〳〵御膳かご　志夕
彌陀經の通り見て來る善之允　玉章
俗緣で和尙は骨をかぢられる　カテウ
念佛をせりうりにして堂を建　桑虫
抹香をひねり嫁をもひねつてる　志丸
身延山名號ほどな御面相　矢正
若後家を進めて和尙法をかき　其誠
辭世より哀れは金を貸た人　玉川
はんどくの墓所目白の近所也　三枝
もうせんをぬがせあみ笠かぶらせる　志丸
石切りは用にも立ぬ字を覺え　錦鳥
正銅寺咄しは一とつ葉もあはず　山石
臺所でたばこのんでる百旦那　咄聲

スヾメ
出次第に蘇生した人啌をつき　葉石
白粉をぬつたは後家のつらよごし　矢正
煩惱をきやうげの爲の苦界也　桑虫
過去帳をくるは御寺の店卸　門柳
ひよんな事たいぞう界の下女を置　蛇内
淺漬の押に無緣を納所する　青枝
ねはん會は仁王に哀れとゞめたり　松山
放生會鶴より鳩にすればいゝ　矢正
哀れさはべろん〳〵と物語り　寛奴
善光に請出されたも流の身　糸道
坊主持あじろは餘り大き過　玉章
とふとさは蛙無言の行をする　三枝
地藏尊お好きは鹽やとうがらし　里梅
折々は火はたきになる石地藏　志丸
錢箱のあるはらかんのくみ頭　東夷
法印の器物とはほらの貝　射夕
かん應寺付けもせないで取たがり　雨旦
此世ではたつた三筋にまよはされ　木葉
念佛を百萬べんの坐へならべ　交鳥
大黒を祭る和尙はなまぐさし

門跡のひばらに當るてつぽう洲　園素
ふせ鉦や天がいを喰ふどら和尙　千鶴
九品佛とんだ茶釜が禮に來る　柳鳥
羅かん寺に百觀音は居候　志夕
道具やで作のつく芋堀出し　市東
五りんは墓所七りんは臺所　里鶴
青鬼のつらへ忌中の札をさげ　寛奴
欠びにはおんあぼきやアはそごなはず　斗丸
御談義もちよつ〳〵と聞ば小うるさし　振袖
客は大象おいらんはぼさつ也　三枝
でも坊主じがけなんどは鼻でよみ　井蛙
お朝しはあそこや爰で穴かしこ　同
六字より五字七な文字の手向也　鬼柳

亦樂評
本草に葵の能は書殘し　如雀
本陣の上段に鶴羽をやすめ　玉章
車より留主居の舌はよく廻り　矢正
神風は凪て不斷の漁父計り　春駒
駿河から御言葉重き御順道　鑓持
かたのない智謀熱田のおさいせん　古鳥

大名の中高になる橋のうへ　里梅
近江では田地へ琵琶の糸を引き　桑虫
乳が一つたらぬと亭主うつたへる　山柳
通辭がないと唐人の無點物　一德
むつの花四季に咲のは江戸計り　雨旦
雪や氷とへだつれど同し孝　如雀
我春を二本はのこす小松うり　松山
御殿山から見おろしてくはだてる　門柳
あたりへも知れぬ秋葉の御神德　其流
ちゑ袋和漢黄色な石と門　集鳥
八橋の樣にならべる琴の會　古鳥
みんな馬だといふ所へ國家老　青露
北國の雪に寒さを内でうけ　ト丈
門松を取り重藤の眞木を出し　門柳
薬品を飛び草臥てゆめは覺　松山
來年を苦にする無筆八十七　山柳
ありがたさ島の女房が後家に成り　川車
加賀紋を着て風流な後家を立て　市風
ごろふじろ手も相應と保名ほめ　留人
極上は臍を去る事遠からず　雨旦

眞つ晝間茶にうかされる廿軒　可笑
はたご代直切つた顏を汁で見せ　松山
帶ときは男を尻にしきはじめ　桃林
餌さになる雀はたかをぶつてしめ　五友
檢唐使すでに芻にて拂ふ所　伊庭
先のより後のがまゝの紅葉也　振袖
問おとし母のくろうが一つまし　市東
殿さまはばゞで片肌御日にやけ　竹子
蛇の腹を内義のくゞるいゝ日和　鳳凰
尾ゝ見える迄は九郎介化かすなり　五友
ありし昔にかはらぬはさとの啌　竹子
聟土手で三の足迄ふんで見る　雨旦
人主しを三文持せかいに遣り　水馬
立つ女よこに寐るのが御奉公　山石
さあ飛んだ事だと荊軻秦舞陽　春駒
きついつみ坐頭の内へ入びたり　金勝
二季のかけ山と拔て取りはぐり　五友
納豆はさぞ寒さうなゑぼし也　錦鳥
味噌になるしたじはまめな小侍　山猿
三兩でもふ武士の部にはいり　志夕

こたつの手あかるい方を出しておき　八重喜
我尻を置てたらひを小さがり　後藤
景清はしり餅四郎つんのめり　竹子
親の目はぬいたがけつの毛はぬかれ　東猿
大そうなたんすぞうさもなく上り　木葉
赤みそでなあと鐘馗はにらみつけ　有幸
弓削の道鏡參内と市の客　同

柳雨評

繁昌さ月は四分一地をてらし　山柳
御物見にさゝがにの仕下やしき　三枝
色には出ねど焼桐の御しらべ　春駒
顔へ波打てばらんぐいうごき出し　志丸
まくのるす下女もうせんへ足を出し　錦鳥
ふつゝりりんきせまいぞと綿を着せ　雨旦
足袋のそこへちま流にて書て出し　竹子
霜月に來年中の顔を見せ　振袖
千金の場所は餅やも竹に虎　柳鳥
星下り納所のつもり細工也　カテウ
談義場で嫁の仕打を交易し　瓦合
黒木うり横ぐしいやみからみなし　亦樂

お小町様と近郷へ名をふらせ　山猿
羽おり着た千鳥權兵衛とかまへる　松山
ふきげんで退出すぐに飛脚立ち　木賀
紅いの舌をならべるいゝさじき　其笠
顔見せに顔を見せぬは馬の足　蔦夫
もうせんで虫を追出すさじき番　若松
五丁のてつぽう四季に打御免也　其流
檜扇へ片目出るほど出來かゝり　儘成
申酉の中へ辰巳も引出され　一徳
權の字の門に未明の供廻り　圖素
追かけるやつを西瓜の皮がなげ　十丈
はうき千里は竹やぶと知た振　其笠
呼子鳥千鳥が鳴て目をさまし　湖來
兄弟か夫婦かげせぬ二王さま　芋洗
角田川是くつきやうのさそふ水　亦樂
ぬれ事の里へみの輪は近い所　松山
とう〳〵たらりたらされて居續　醉臥
なまぬりなうちおつぱげる長曾我部　亦樂
打取た印へ笹を可兒が入れ　五丁
ひとり旅とめて櫻の名が高し　錦鳥

三軒で夏の敵を春ねらひ　如石
割こんでくんなは安い女客　ヨコセ
鳥居よりはしごを稲荷こへ乗る　市風
とこぶしで馬ぐそをさらふ小人島　里梅
名作は手もなく切れて名がのこり　ヨコセ
頼政へ出たは誠の美景也　其流
白波にたゞよふ千鳥聲をあげ　其誠
ひへごたつでもすゞめをばぬくめ鳥　カテウ
七な巻と七變化とを藤太射　青我
せんたくを止めヤレ氣つけ〳〵　井蛙
下女ひたひ外山の霞ほど造り　マイタ
鹿の子まだらに雪きえる下女が面　同
みやげにもならぬ杓子を旅で買ひ　井蛙
不首尾な杓子割かへし計り取り　眉長
深いからはだかて買ふは富の札　五丁
こまつかいくせにあらいは人遣ひ　矢正
諸事萬事暦のごとくしわい國　千鶴
猫舌で取のこされる宮の舟　鳳凰
桑名にてやかれる聲はすゞめ也　射夕
帳尻に手代は化の尾も見せず　藤後

打出しにおくみの客がすそへこけ　水馬
まくつかへ六部俄に雪あたり　カテウ
しつぽ迄見せぬ官位はいなり町　志水
つらい事嫁はめん鳥よばりされ　門柳
小侍聲がかわるとかびがきえ　東猿
三升やと大家泣子に呼出され　志夕
吸付てくれたきせるがはしご也　留人
宿なしのこたつおこるとくらひ付　汁人
ふとい木へかけ鳥が來てくせる也　山柳
追こんで來ると井戸綱かべにされ　竹子
あアラあやしやくわりんどう油じみ　虻内
せんたくのそばへふとざほさけて落　可笑
とこやみにして立歸る二たばしら　三朝
出合茶や暮るゝわびしく日もすがら　十丈
引物のあらみ折紙一とつゝみ　矢正

狐聲評

唐までも淸き流れの國となり　一徳
和らかな國で異國の歯はたゝず　留人
月一つ異國へ殘す和歌の徳　カテウ
御座敷へちるはきのふの御いへづと　雨夕

末なまかべへ生鯛がやたら來る　門柳
山吹の帶は目録臺に乘り　里鶴
十五夜にくらひ勅使はさが野也　瓦合
紅葉で定家の机そら明り　カテウ
御年ゆへ左右寒むがり早くおき　金勝
山吹にこりてぬれざらましとよみ　瓦合
二た間持細見棟を分けて附け　矢正
女房がいつちふめると見たおしや　亦樂
見臺へ細見嫁のわるさなり　儘成
近江では田地へ琵琶の糸を引き　桑虫
山の手は老馬のちゑを辻で借　瓦合
番町の道は馬臺にことならず　千鶴
車には嫁も日傘でかぢをとり　木葉
盆へもどして去状を水にする　春駒
百人へ有明たつた四つ入れ　桑虫
大部屋へ無心御新造あらい髮　矢正
門番に化たは一つ眼こなり　留人
下總の馬にたわらはつかぬ也　其笠
寐た形りに請取に來るとなりの子　斗丸
舌打をするとあんどうよみがへり　枡水

風の子といふは女護の子供也　里鶴
時しらぬ櫻のさかり雜司が谷　伊庭
草木きばみ造り花〳〵　柳雨
逃るにも逃すにも琴ひやいな場　瓦合
星下り納所のつもり細工也　カテウ
さあ飛んだ事だとけいがしんぶよう　春駒
飛んで出る咥を梶原つきあふせ　錦鳥
紺やの手目出度白い松の內　集鳥
舊惡を思はずわらびなまで喰ひ　杯舟
竹藪を七人よろけ〳〵出る　枡水
まくの紋あてにまごつく祭り客　亦樂
三軒で夏の敵を春ねらひ　如石
よし原で小田原をいふ素見物　三朝
しこなしで袴をたゝむ言なづけ　里藤
目がねから大きく見える嫁のあら　八重喜
しくぢつた譯はお針が幅をかき　吐聲
不首尾な杓子割かへし計り取　眉長
辨舌は口先しあんはなの先　ヨコセ
こまつかいくせにあらいは人遣ひ　矢正
旅日記夜る乘たのもひるへ付け　門柳

長い夜をちつとづゝ見る乳母が夢　八重喜
掛合に嫁と佛をいぢつて居　瓦合
花嫁の花のちる頃實が出來る　桑虫
下り坂車が人を引いて行き　木葉
魚へんに夏の元氣で雪見也　亦樂
たかてこていましめ鋏とひて居る　眉長
黑じゆすへ嫁のゑりあか白く付　竹子
手拭で旦那をはたく雪の供　マイタ
ぐわん〳〵のぐわんとおんばは琴を彈　蔦夫
箱入の花ものいはぬ病が出　山猿
才領に名主をつれるつけおくり　矢正
我尻を置てたらひをちいさがり　藤後
引物のあら身折紙一とつゝみ　矢正
きん玉を産んでつりかたお取立　如雀
御夜づめが引て互ひの貝合　里鶴
油であげた小ぢよく出る四六見せ　志夕
下女の尻土藏のかべにわれて有り　現世

市風評

君が代は將首に着なすゑぼし也　春駒
くわんおんのかけ直五百の矢先也　湖來

せんたんな二葉よりまだ文も見ず　山猴
留守中は我にも見せぬ天下一　矢正
うつくしい佛に尼が二人りでき　里松
白梅を出して赤はぢかゝせられ　カテウ
名作の名は世にさびぬ薬研也　其流
なには津の歌は四角な口でよみ　一徳
あてやかなお手へ小松のとげがたち　芋洗
杜若いたづら者がおつぺしより　同
御位はたつた一ばんしやうぶ也　亦樂
孝行な娘我身をせんじさせ　竹子
關東の小路諸國の大あたま　古鳥
師匠さま風を引ひたとうれしがり　一德
鮒は本店鯱は出見せなり　亦樂
拜見に手形のいらぬ關をこし　香貞
孝行の惠みは瀧を水にせず　升子
都鳥さと船頭は無雅にこぎ　虻内
身あがりの部屋へさしこむ月と癪　枡水
袖留て母へ土產の入れはじめ　斗丸
關の雪正直者の鼻の跡　猿松
嵐雪が所へ翁ころびこみ　青露

多田滿仲に二役新五郎　春駒
名の高い家老は廿七郞兵ゑ　草麥
名香もおつれは土馬と六つの穴　其笠
上みの句で其角は下もの苦を休め　可笑
せんたくをしたでよごれる己が面　矢正
三本の爪を能ある嫁かくし　亦樂
おいらんの灸所お針が知つて居る　東來
ちへな事味方は梅でよみがへり　錦鳥
神前へ横づけにするかたぐるま　カテウ
青山は馬に引れる善光寺　團素
笹がにはかさのうら程ほねを折り　其笠
奈良櫻一重よけいに匂ふなり　品能
娘もふいくの丶道も承知なり　一德
勅命に赤面でぬぐ緋の袴　東猴
日本へ手を出す度に耻をかき　伊庭
雙方で十兩無事なよめしうと　虻内
町かずが梅ほどあつてすいな所　山石
網しいて笏で舟虫追給ふ　草麥
冠をおさへて梨子を一つ取り　可笑
霜天にみち三角な雪がふり　錦鳥

藤棚の跡へ都の菊をうゑ　針人
紺龍の御衣はまぼしき初日の出　志夕
白粉もごふくも同じ見せで賣　ヨコセ
三度の神正直やつと帶をとき　八重喜
駒下駄にきせつぬがせつ緋ぢりめん　藤後
物たべよとは大たばな乞食なり　干犬

狐聲評

鹿の毛ではねぬ御馬を御獻上　柳雨
御ひざ元から鳥のたつ年の暮　如雀
はんじやうさ諸國の膝をやつと入れ　一德
うんだ子にをしへて貰ふ親の恩　斗丸
あねさまの助太刀で讀かたきうち　柳雨
待女郎不二の高根の雪を取り　芋洗
大鳥の中の雀は大あたま　振袖
一眼で取かへべへをあかんべい　矢正
一眼で御家のひづみため直し　川車
誰も非をいれぬで今に冷ごたつ　亦樂
御先祖は小六子孫は御大錄　五丁
杜若いたづら者がおつぺしより　芋顏
半産の中へも江戸は日千兩　古鳥

今の世になつても上田丈夫也　草麥
うらおもてあるのにすそつつぎをかい　井蛙
桃園に手織莚をしきならべ　藤後
ちりぬるにもふお成かと嫁の禮　里梅
地藏迄あだ名のつくはさと近所　志丸
急用を引ずりもどす中おさへ　春駒
馬の尻持つたで宮は落馬をし　兎合
柳ごしみどり來やアと仲の町　三朝
尼寺は女の花のちるところ　杯舟
雪見酒面が白いと呑かける　志夕
宗任と梶原梅の文武也　集鳥
廻る氣でことづけて遣る風車　古鳥
金よりも遣ふは水が大事也　如石
芝居ではしのんで行にかつた〳〵　山石
芝居の迎ひもふ行ふ〳〵　糸道
うけ出されいつた先にも又遣人　カテウ
米といふ字を三つに割餠をつき　里雀
我子ならつれては出まい雪の供　一徳
霜月の雪駄は盃にのせて出る　左逸
顏見せの朝でおふちやく尻がわれ　伊庭

能い手跡勝手につきの見ぐるしさ　如石
たどんやの女房の顏は白く見え　福原
重代の刀なまくら者がまげ　針人
月はほどなく產籠をかりに遣り　醉臥
韓信へ劔のやうな口でうり　錦鳥
死たくば喰にござれと極こんい　市東
草木にもない花をやる面白さ　山石
借豆をくつた跡から馬がつき　竹光
はでなうら氣のきく風が人に見せ　五丁
一本のひしやくで參るありがたさ　可笑
ろうそくを二てうにらめるいゝ役者　柳雨
どんつくなやつには出來ぬたいこ持　木賀
祭るのは四角な穴のむじな也　雨旦
あら計りいふは身で無い親子也　矢正
百目玉ほねへからんで鼻へぬけ　西光
八つの耳ふり立て歸る手習子　如雀
馬鹿をつる餌さにみゝずをのたくらせ　井蛙
御玄關小用の過料おかはなり　若松
大丈夫過金を出してたれちらし　如石
帆柱をねかしてかへる天の川　留二

草深い所のやうなうばが池　松山
かはらけ町は草深い所でなし　留人
ゑんこうの月かげうつる下だらい　矢正
ふんどしをくりかへし讀む南窓　東猴
鐘の外わり物はせぬむさし坊　五友

川柳評

御獻上みなする墨の名馬也　門柳
ばんじやくを扇でくだく關が原　衿扇
やせ馬の一駄におもき三が庄　三枝
かな手本いの字は京にわび住居　同
尼寺は女の花のちるところ　杯舟
十五日車のかぢを母が取り　柳鳥
路中へ女さかしく牛をひき　カテウ
染物を先子に卷せたゝせて見　古鳥
福人の中に紋付き一人り見え　サ一
紹巴かやうにけづられぬ鐘の銘　青露
太宰府の空からひかり〳〵來る　松山
すゝの日も息子がはたき母がふき　矢正
正月は初子七つ目二月なり　三枝
隅田川いけんの耳を洗ふ所　可笑

七穴の身にくろうしてしゆもくづへ　福原
子路が妾の兄方に居候　亦樂
虫干にきれいな顏をすゝぐ也　園素
風呂敷へつゝむと鳥の直がさがり　射夕
辨天は江戸へふるまい水を出し　山柳
置ごたつ雪のけしきに引きづられ　藤後
妻を乞ふ馬と趙高詩につくり　春駒
西行も柳の下で水をのみ　三枝
藥種やもいぬで夏負しのがれず　如石
髮ゆひがかはつて人のあたま也　伊庭
在鄉いしやひんどう〳〵で御見舞　可笑
ちぐはぐな棒組で行のり物や　門柳
口先で膳立てをする小間物や　木葉
うら茶やのかゝあしばらく幕を切　ヨコセ
手なべよりあたまへかぶるはづかしさ　古鳥
大こくをぬすまれ和尙後家になり　柳鳥
宗旨論馬鹿との同士がちゑくらべ　福原
かゝる事息子さうめいえいち也　青露
一ところゑは辻が鳴たかとをしかご　東來
手も足もすりこ木にするこんにやくや　柳鳥

しうとぢい道理をつけてつゝこまれ　糸道
りんきおふへんたいこ也やぶい也　春駒
旅おくり杓子くわほふな大一座　門柳
遣るあても無いにことしも暮て行く　芋洗
さと芋は大つぼ流であらふ也　伊庭
さるほどにつがう其勢大一座　玉川
かたみわけ後生も何も打わすれ　草麦
ふんごんであたんなさいもおそろしい　鑓持
めいやうに見たがるねへと女房同士　市東
いでもの見せんといふまゝに五両取り　同
人質を利あげに行はむづかしい　市風
毛がはへて御月見をする居候　鱗
甚六ば蛇と油でのらくらし　若松
へぼ役者子は三階の首つかせ　亦樂
供がへり鑓持路次でむねんがり　山猴
ふき組へ小便組がけちをつけ　柳雨
小便たごでこんにやく〳〵　竹光
犬をけしかけるはきやんなはした也　春駒
親分をこたつの首か一つはぎ　山猴
にしが腹またでかいなとせなあきれ　門柳

おくそこのないが地ものゝ取え也　五友
わざわいの門おそろしいもゝんぢい　杯舟
へをひつておやぼうさんとうばとぼけ　鱗
生娘はそつと申ときやつといひ　瓦合
水もたまらず戀聟はぢんきよする　亦樂

俳風柳多留四十二篇　終

俳風柳多留四十三篇

草庵をいとなめる川叟の助力をなさんと、四方の諸君詞の林を山の手に切出せば、下谷につみ流し、神田に地ならししてはつき地に地祭りし、かの五七五のかずなる良材を、手々にふんでの斧に工みして、すゞりのすみかねなる評をうけて、一字の冊子となれる、其入口に柳多留四十三の額をかけて、月雪花の此うちにある事を背裏が案内す、

卯小春催　辰發行

雨夕評

虎の尾は花より外に踏ぬ御代　マイタ
颯々の風御錺へ一度吹　礫川
毛色より墨色で濟む御獻上　柳雨
南枝花始めてひらく御出生　礫川
一と枝は唐までかほる御家柄　集馬
新田開發稲村が先の所　香貞
千代田から一と伸にする鶴が岡　萬仁
御領地も御庭に籠る大そふさ　錦鳥
柴船にめしてくるわへ御かよひ　千之
金銀に吹替のない京の寺　如雀
木像も繪像も達磨名が高し　青露
彩色の中に墨繪は奥家老　芋洗
此とうふやでこそあれと國家老　礫川
あたまから來て文覺は耳こすり　青露
梅よりも先につぎ穂は兄の歌　マイタ
孝行を水にはなさぬ養老酒　千鶴
名月にはじめ十夜に書終り　有幸
夜書た物語りゆゑ夢で留め　孤雲
三國一の化物は雛の袴　礫川
本所で大ざらひするいゝ手本　由之
日本へ響くは瓶の割た音　錦鳥
虎を生捕るが後藤の目貫也　萬仁
ねから讀めませぬとこてでほぢりだし　是樂
首陽山二人りひからび名を殘し　玉章

白鳥のおひねりを呑む賑かさ　是樂
名高いは螢地紙は古跡なり　錦鳥
まきぞへに貧友犬に叱られる　如雀
落城をする笞錢を遣ひ切り　里松
さくらにはかすみ虎には藪小路　斗丸
佛師屋へ遺言にする諸葛亮　集馬
君は船臣は歸れとやなぎばし　如雀
雨風を除て野垣の蹴る日なし　有幸
艸かりに年玉をやる武藏坊　玉章
既に關所でとがしめをくろふ所　猿山
二た股は分てはたらく大根武者　礫川
針と按摩でやふ〳〵と片撞木　山喜
此猫で俗のときなら銀ぎせる　雪平
似せものと知つてがてんの長局　藤後
大さわぎ一山猫よ升わなよ　玉章
追々に割込のある初の雛　藤後
鳳凰の玉子を女衒見付出し　萬仁
いたい事星に月夜をねだられる　礫川
法印は干物和尚は香の物　谷水
寐耳へ鷄のこわ色で關を明け　玉章

壹町の内に雨乞ひよりこひ　里松
冷飯を喰せ末世へ名を殘し　錦鳥
ふつゝり悋氣ぽつきりと三が切れ　是樂
打かぎてはんれい豕をおつ拂ひ　丸龍
帆柱で寐てけつかると張飛言　高與
美しい嫁は本來無一物　里松
条がすこたん開たかと仙仲間　礫川
棒ほどな事針程に母かばひ　賤丸
鶯をすつぽりだますほとゝぎす　谷子
面白さ牽頭を集めはやし立　青柳
桃のやう〳〵たるをもぐいたづら子　菅裏
醉なんしたのと袖から梅を出し　青柳
ちつとぬりそつとぬり後家元のさや　香貞
あそこから關取出たとおもはれず　礫川
氣のきかぬ禿二分二朱持てくる　同
花よめのやくまけ姑快氣也　青波
さくらんぼ禿はならせたがる也　玉章
錢金がこふたまればと十三日　同
よし町の鐘も上野か淺草か　雨折
大手が四郎からめてが九郎也　花夕

あろふ事封じ違ひで二人り切れ　マイタ
小便に花を咲せる誹諧師　友尾
い丶名付壁にそろばん算違ひ　同
神樂堂二六なげれば二八舞　管裏
ひどい風田植の笠に指びの跡　梅里
まづい事茶やへの義理にほれる也　礫川
そこいらの餝だと親父目が黒し　八橋
後ろから女房をくどく月迫さ　礫川
大ぶくを醫者に呑せるふていやつ　櫻住
此味噌は一と幕見たに違へねへ　礫川
中直り五分々々と呑む茶碗酒　里梅
手の平へちよつと乘てる暮の金　留人
巨燵ぶとんに辨慶はきつい事　艸麥
やるよふに並べて直切る交肴　兎石
吹降りにちやるめろに成けちな傘　猿子
摺ぼくち抔持て居る安大工　礫川
神酒の口御初穂程の元手也　横好
あの四つは天龍寺かと安いやつ　如雀
店賃が濟んだか路次のたゝきやふ　千之
裾つぎがきれて仕替る裏やぐら　猿山

椎茸へ松だけをうる小間物屋　和恭
い丶道を歩行土こねひまな事　里梅
どぶろくでづぶ六になる村日待　集馬
こわ珍らしき御對面傘はなし　礫川
水賣の舟はしづんだやうに見え　山喜
摺鉢の音ぞゆかしきひとり者　巾布
天幕をはらへ張つてる小荷駄馬　眉長
鳥の引とき柿の木へつるし　マイタ
輕井澤待身なりやこそ簀子ざん　礫川
蜘のふるまい毒害と下女おもひ　同
下女が文おらんだ文字でくせつ也　斗丸
市みやげおめへの程と下女ぬかし　牛賀

三松評

低き家の煙りは高き御製也　竹子
君は山臣は螢を野でなかせ　萬仁
御三代海は山から御助言　杯舟
ねぢれたる袴には似ぬ御捌き　亦樂
五色蔦よりも紅葉を買かぶり　門柳
北からも一度朝日が登るなり　青狸
誰が目にもい丶七郡の中どしま　青露

翡翠は難波も伊勢も同じ聲　是樂
猫が出て鵺程騒ぐ桃の御所　萬仁
御隠居所だけに廓も二町なり　香貞
釣鐘はかるく拜見重いこと　如雀
蔦を莉朝顔をまくいゝ地めん　萬丸
卯坂ではたゝき築摩はおつかぶせ　琴我
陸奥一國で二か國の夏くんじゆ　菅裏
うぐひすは一分二百の損をする　是樂
蚊帳よりも衣で凌ぐひどい雷　錦鳥
釣鐘も蘇鐵も古郷戀しがり　青狸
頼政の扇に夜るの金砂子　艸麥
竹に雀は品川へいんきよ也　雨夕
地利を習つて筆を買野掛道　如雀
忠臣の石は川ばた海のはた　香貞
一門は蟹と遊女に名を殘し　歌交
如月を卯月にするでいしやはやり　集馬
南北に咄しの合はぬ紅葉也　山石
唐崎で濡た傘勢田で干し　萬仁
和らかなたばこをうるもきつい忠　斗丸
大げんくわ池の鯉鮒ふみちらし　玉章

御妾の手はなげし迄とゞきかね　丸龍
肴やをまねて櫻で落をとり　箕山
名の高い原を死でおつぶせる　松歌
役不足せず門兵衞と國家老　如雀
さすが龍三つの指のはかりごと　一秀
張良は流れる沓をうけてやり　麓溪
挨拶をうしろへほふる洗髪　里遊
富士山に日月のあるいゝ女郎　和里
束帯の中へ袴でしのびいり　里松
もめる箒胞衣は狩場のゑづのよふ　青狸
鐵釘のいろは柱へ大工かき　是樂
吹ば飛身のおもく成る紙の鯉　亦樂
倉と内藏とかく短慮な殿を持　里梅
乳もらいの外は詠めぬ冬の月　玉章
朝歸り女房片倉流であけ　箕山
我顔へつばをしかける鏡とぎ　銀文
猪早太弓手へ七つ目がからみ　雪平
夏の夜に打は足袋やの碪也　青狸
ふじ川はほんの赤はぢかいた所　菅裏
水性と土性左官いゝ夫婦　谷水

弓削の道鏡參內と市の客　有幸
粉藥を含み銅壺へ指をさし　礫川
太閤記一本鑓で賣てやり　櫻仕
賤心有て山吹見せるなり　青露
あついゆきたけ呉服やでつもる也　香貞
妾の十分內へたて外へたて　孤雲
道成寺風鈴でする小人じま　有幸
しつぽくの供を團子でよび集　集馬
事制て燒繼代を五兩出し　木賀
照魔鏡もたぬ計の國家老　シクト
窓より其手を取てあがんなんし　一秀
勘介も片身信玄氣に入らず　青露
傾城は一と綢うつてすわるなり　醉臥
母の片腕羅生門つとめてる　二蝶
どくになるやつと並んで藥喰　兎石
しんの闇つきあたらぬは梅計り　同
生醉の水千兩に直がきまり　衞門
違ひない眞中蜘がさしづ也　是樂
はんにやめと大森細工ぶつゝける　美德
鏡山下女がほまれは天下一　梅鳥

かんじんの道具縮屋のかなめ石　青狸
唐ならば三里の餘だとどら和尙　五笑
實盛の身仕廻で出るよし田町　玉章
むしのよさ鱣にかへて蛇をたち　孤雲
介六は頭痛持かとせなアきゝ　艸麥
足袋の底へちま流にて書て出し　竹子
淺間と鳶とうなすは下々の夢　丸龍
ぶんぶくは人を茶にした變化也　礫川
玉菊は死んだ跡までとぼされる　里松
本所で大ざらひするいゝてほん　由之
奥樣は椎の實妾いてふの葉　美德
村げいしや二百もやるとそべる也　斗丸
藪いしやの竹格子とは思ひ付　品能
松風もはへ際迄はしほになり　魚秀
しなびた松茸しひたけの守役　集馬
鋲打の駒下駄で來る安妾　萬仁
大佛の鼻ほどあると奏問し　瓢簞
ひくい下女金毘羅樣へ願をかけ　丸龍
大角豆ばたけでそべつたで豆はぢけ　瓢簞
口あけだ寄ていきなと情のなさ　礫川

大尾
船が下直で帆柱に疵がつき　有幸

末學評

はんぜうさにげかくれずに世を過し　礫川
白浪にしつとを讓る龍田山　玉章
天台の歌仙官女も公家もなし　横好
柴船に乘て三浦へ御かよひ　千之
花をやる客が今宵のあるじ也　門柳
傘で顏のかくれぬ京の町　萬仁
八朔の雪越後から脊負てくる　亦樂
八百といふと片倉咥になり　雨夕
切る指と折る指梅とかきつばた　シクト
むや／＼の關守髭をはやしてる　琴我
とがなくしてしす名譽のかな手本　扇橋
御火燵へ直ぐにと布衣の御退出　孤雲
杜若水へ梯子をかけて切り　礫川
よし原でひとり遊びは材木屋　玉章
飛んで出る咥を梶原つきおふせ　錦鳥
源平はとんだ違ひのものがたり　香貞
武勇するどく御門まで名を殘し　箕山
先きのいもじですもふとるいゝ娘　藤後

姉の手にあまる朝献は退治　散亮
うつせみのもぬけのたんす女郎持ち　礫川
膽をつぶした事のない姜維也　巾布
稻を苅そうな苗字で麥をかり　如雀
此世の人とおもはれぬ三分なり　玉章
公家の外鳥もかよはぬひどいふり　礫川
光明はかくやくとして賣殘り　同
こふするとよくなりますとおしへ鳥　品能
あらおもといふと拍子木カッチカチ　礫川
大名を下方にして靜舞ひ　玉章
和らかに直きしめてやる山の帯　是樂
月による戀とは息子ひどい題　箕山
禪僧のもくして通る達磨門　礫川
ひつじのくそをふん付る朱買臣　玉章
奥樣の御ぐしへ一つ蘭の蠅　横好
人の口戸は建られぬ程にこげ　雨夕
雲水の身へいかづちの御勅使　眉長
いでや此世に生れては文も書き　礫川
神慮にも霜の降る夜は寒くこそ　同
越前は成人してもおさな顏　里松

雨舍り乞食の中に中納言　シクト
末世迄かほりの殘る御ほうらつ　玉章
時平は文景時は武を讒し　シクト
白き糸よく染たのは孟母也　箕山
僧正を召す綸言は本の汗　礫川
退けて我住の江に御歸り　同
かんざしであす咲花を嫁かぞへ　同
十疋のせなかへごまめ二本附け　雨夕
樂んでいんせず野父な柳下惠　礫川
さてとやの所からげびる暮の文　斗丸
追々に割込のある初のひな　藤後
來朝によか〳〵といふさくや姫　志夕
あづま遊びの數々を御饗應　礫川
ありがたさむさし居喰の出來る所　菅裏
お妾の歌書は二上り三下り　雨夕
都では萩吾妻では草を喰ひ　銀文
正夢を後醍醐帝は御ろうじる　如雀
今は心も亂れ候須田の土手　醉臥
猫に灸ばかしてすへる三味線や　賤丸
鰒汁に精進日だとよわいやつ　櫻住

出立ばへ能き風俗へ駕い駕　礫川
がんせない晝寐の上に袖疊み　雨夕
將門はあいそう過て見かぎられ　如雀
一人旅留めたで櫻名が高し　錦鳥
夜着の袖から海を見る面白さ　三松
源平の若衆名のある笛を吹き　箕山
北流の謠講さと息子いひ　同
金銀のふき替のない京の寺　如雀
人間の猪もある大三十日　里松
旦方に八宗のある泉岳寺　同
三千の中ではね出し美しい　錦鳥
草苅に年玉を遣る武藏坊　玉章
きざはしの下で見立る源三位　青露
大はんにや琴に合せるうら〻かさ　有幸
眞の闇つきあたらぬは梅ばかり　兎石
藥禮の時は遲々せぬ通ひ箱　如雀
武藏野は祭の時に見る計り　里松
ほまれさは敵へかたみに茶器を出し　玉章
草の波巴にかはるはんじやうさ　礫川
大一座しよてつぺんからけつかふざ　巾布

然るに香せんは仲町の酒好　横好
日の本だけに琴の場を箝也　如雀
さゐん場を大工のつもる御立身　雨夕
極安いものゝふは百八十匁　シクト
夜の鳥に百人首ほど寄たかり　酔臥
面白くとこやみの幕所作であき　芋洗
跡でさげすみなんせうと三會目　礫川
あそばされたであの腹と下女が宿　シクト
仕はしたと見えて持參の日がとまり　礫川
（大己）神棚にまでおやしてる遊女町　牛賀

文日堂評

御立身やうやう射御の地を餘し　孤雲
白き糸よく染たのは孟母なり　箕山
市正あんにたがはぬ事をしり　巾布
兎から一日置ひて猿が出る　和恭
和らかな國でも犬の歯はたゝず　品能
花の頃月の名所へ勅使立ち　青狸
氣味のよさ日の丸程な蕗を出し　留人
たんぽゝは茗荷畑へ暮に出來　木賀
ひえおろし源氏四五帖吹ちらし　蔦仁

嫁の琴聲今さらにはつか也　白馬
僧正の引ぱりたらぬおそろしさ　留人
爪音に勅使は嵯峨で駒を留め　有幸
竹の子が雪にはえぬと廿三　玉川
うちとけて旅人を留る咲屋姫　木賀
諸木の兄は弟の名歌なり　三松
氣の長さとふ〳〵鯛を片身釣り　吹唐
夜る書た物語ゆへ夢でとめ　孤雲
一家中狼河原に手を喰はれ　柳雨
金賣りが御味方とは吉次也　谷水
お妾の手はなげし迄届きかね　丸龍
きり〳〵す鳴よりはやく嫁はとり　谷水
さゞれ石三十一文字で苔がむし　森鳥
いゝ天氣十六俵へ花がちり　同
蜘のふるまい唐人はあまく喰ひ　集馬
忠臣の矢立の中へ散るさくら　錦鳥
三度目にやつと落着く孟が母　酒好
注連繩で大盤石の首つ引き　都柳
今度は頓阿に書かせうと師直　シクト
罌に暮れ晒に明る奈良の町　錦鳥

傾城といふ字が直ぐに異見也　兎石
日本へは最ふこん／＼と御所を逃　里松
ヤレむみやうゑんと名歌が一首出來　三松
千雨が買つても駕で入れぬ所　錦鳥
鮭の子をねろふ鼠のおそろしさ　瓠重
へつつゐの地からはへてるい丶暮し　一秀
藥とり始皇までどもくらせども　青露
きつ丶なれにし大紋ではやす也　谷水
そんならい丶と膝へのせ糸をまき　徐來
あろふ事封じ違て二人り切れ　マイタ
神代もきかずどらも仕た歌人也　松歌
門と口を足にて扣く逆り膳　瓠重
元と長屋へはいきやんなと孟母いひ　玉章
高い白く人も一日江戸でうり　箕山
駿河町取揚ばヽア用はなし　由之
束帶の中へ袴でしのび込み　里松
狐火を一と月とぼすにきやかさ　雨夕
はやるのもむべ山師めが仕わざ也　琴我
もり遠はあぶもとらずにごそり剃り　雪平
葉うら／＼葉おもて／＼上は草履　銀文

べからずで釣師したヽか叱られる　巾布
高い敷居の踏臺に母はなり　有幸
猿若のやぐらに霞むいてう鶴　雨折
つかれたでぐうの音も出ぬ鐘くよう　萬仁
御佛器へ善光へしに盛て上げ　和里
他生の縁をふり合す袖の梅　香貞
隅田川是くつきやうのさそふ水　亦樂
ねからよめませぬと鏝でほぢりだし　是樂
尾の先をひしげ／＼と源三位　森鳥
御會式の餅を髮から一つ出し　和恭
しんこんにてつし鎌倉迄はだし　亦樂
百合の花恐れ入つたといふ姿　山喜
帳合に猪牙にゆられたくせがつき　同
石の欠けなせ木ッぱだか解せぬ也　菅裏
飛車角行が蟄居している下手將棋　巾布
こてのきく女郎で裏をかへしてへ　一秀
むや／＼の關守髭をはやしてる　琴我
二千里も行ほどきばる月の駕　松歌
明け六つの花居續と氣が替り　谷水
ばかな事提灯をつけ螢狩り　玉章

はねる子を海老にして乳母犬をよび　松歌
月見前淺黄しば〳〵もてる也　如雀
蓼喰はぬ虫であばたがうれ殘り　雨夕
しゆみせんに隱し三味せんけいこする　一秀
ちぎ箱の飴で女房はうまくくひ　集馬
そこいらの飴だと親父目が黑し　八橋
巨燵ぶとんに辨慶はきつい事　艸麥
本名を忘れあばたが用に立ち　里遊
此顏がまよわせへすともてた晩　賤丸
ゑてきちは淺黄愚案に落かねる　柳雨
大坂が來ると立派に足が出來　志丸
目の尻に物をいはせる中どしま　織好
初登山熊や河童の住み所　醉臥
女房もたへてしなくば中々に　藤後
ずいとくじさまと尋て茶屋がくる　和恭
手が有るに氷た足でおがみんす　里洲
木のぼりで雪をふらせる村芝居　雨夕
小便に花を咲せる俳諧師　友尾
牛の刀なを用ひずにねぢつてる　三松
とこ闇の夜だとしやれてる木賃宿　香貞

ふつゝりりんきほつきりと糸が切れ　是樂
土佐節を落花みぢんに下女削り　散壳
眞中にあんよは上手ぶら下り　靑柳
遣手言へる事ありいつも御若い　眉長
うら店の鴨納豆と見さげられ　亦樂
おたふくは八目くつよいかとたわけ　靑狸
鬼王はまさか草履も作られず　横好
光陰の織目矢文がやたら來る　未學
鳳凰の玉子を女衒見つけ出し　萬仁
あの四つは天龍寺かと安いやつ　如雀
仲條は腹つぷくれが爲になり　吹唐
朔日を當とは後家の不覺也　未學
岩屋の入口毛のよふに注連をはり　木賀
殿の火とともに高ぶる妾がつら　同
あんどんを消しなといふにマア消しな　松歌
かげま茶や時計の尻をおつぺしより　如雀
あなおそろしや損料に五両出し　芋洗
相撲下女乞食仕立の子を孕み　有幸
夜鷹ではなくて島ひよ鳥のよふ　和恭
伊勢の留守女房の岩戸明はなし　和里

息子連れ時に夕部はいくつ出た　巾布
關取の悴おもひの外小兵　萬丸
西行は名高ひ屎を一度たれ　里梅
ぼんのふの犬が寄合ふ下女が部や　都柳
辨慶はまだしも小町からむたい　里松
大勢でいけどる下女はふとり肉　一秀
牛の屎にはあやまると猿田彥　玉章
正宗と同國で下女ぬき身好き　如雀
うら中の笑ひ齒ぬけの午房うり　同
大尾
椎茸へ松茸をうる小間物屋　和恭

川柳評

武は戈を止る字義の御入國　亦樂
御拜領鶴上段に羽を休め　雨夕
高き家はひくきを惠む御製也　礫川
つりがねはかろく拜見重ひ也　如雀
御肩衣枝もならさぬ風で取れ　雨夕
霜霧もおつれば同じ和歌の波　礫川
大名も熊手をかつぐ能舞臺　シクト
下馬札と高砂の松向ふ合　青露
孔明が指三本は百萬騎　里松

黒髪とふり分け髪は雨の御手　木賀
八百駄すゝきのうれるはんせうさ　青露
芦の穂を着ても心のあたゝかさ　マイタ
婆々アも鹽も引てくる御目出度さ　如雀
御家の釘と成たは鐵之助　礫川
むもれ木は扇の芝の下へ植　織好
餘程もふ積りましたと駿河町　錦鳥
絕て櫻のなかりせば母あんど　未學
挨拶をうしろへほふる洗髮　里遊
御馬が三疋かけ出して十三里　横好
趙雲が膝であとなく伸をする　同
神酒の口御初穗程な元手也　同
文の事をばつれ〲としらぬ顔　未學
いそがしさ鮒に正月物を着せ　斗丸
手見禁で女房十軒店へ行き　琴我
制札にまでも勇氣を武藏坊　紀樂
萬卒を孔明羽根で疊む也　青露
月花を明りで見るは仲の町　三松
三度目に馴染になつた張子房　白馬
正宗をかつぎ藪醫者日をくらし　玉章

おだやかさ猪牙と四つ手が飛道具　集馬
歸依僧に賴み甲斐なき花の雨　礫川
わしはもふ案じてのやと綱が伯母　同
馬に燒がねがいこんの源よ　如雀
出來もせぬ事に小侍從骨を折　箕山
鯛片身獨身になり釣上る　玉章
血眼で彌三郎めと追かける　二蝶
顏よきにめでゝしかける横れんば　集馬
源左衞門走らぬ馬に鞭を打ち　山喜
こいつ妙笛々々と楚軍卒　美德
玄德に言葉たゝかい虆がでる　九龍
忠盛はおみやをそへて拜領し　雪平
旅の留守女房逆意を思ひ立ち　青露
炭部屋で去年の事を忘れたか　藤後
おいらんの指は人參よりたかし　青露
しめ繩で大盤石の首つ引　都柳
北辰の光りで地もの影はなし　同
一文つ天目山ではたらかせ　玉章
聟土手で後ろめだくも引返し　如雀
ちつとぬりそつとぬり後家元の鞘　香貞

船頭は風をあげたりおろしたり　徐來
似た聲に娥眉をひそめる心待　礫川
信玄の武勇に道鬼相もとめ　有幸
爪の火を息子湯水に消しなくし　二蝶
高い敷居のふみ臺に母をする　有幸
あたまから來て文覺は耳こすり　青露
生ま塗の内おつぱげる長曾我部　亦樂
かく罷り出たるものは國家老　礫川
彈く斗かでどふ二親がすごさりやう　和里
三味せんを嫁のからだへ立かける　マイタ
下駄の直を聞くと半下坐程に打　礫川
鯨汁ぶたよりいゝと徐福喰ひ　亦樂
さればこそ人の居候麥の中　礫川
蠣を喰ふよふだと咄す夏侯惇　玉章
大喧嘩藪醫は匙に反をうち　千之
芋が子も頭立つては二十年　散壳
牛連て吉次危難をまぬかれる　如雀
まきぞへに貧友犬に叱られる　同
我顏へつばをしかけるかゞみとぎ　銀文
傾城の涙は客のよだれなり　品能

十三日調市のさがすなめり川　有幸
鬼瓦の爪のはんにやと口を吸ひ　瓠重
おきてを破り西河岸へ配所する　巾布
居候能島がらと馬にでる　魚秀
仲條は腹つぷくれが爲になり　吹唐
鰒汁を勇を振て五はいくひ　礫川
押賣は御法度だのにとかまへる　同
きん玉をうんだつりかた御取建　如雀
三度迄くだし藪醫は身退き　青波
妾に肥たる肉あり旦那痩せ　横好
手を合せどふぞ是程かし給へ　青狸
相應な玉だがとかくうれのこり　礫川
こつては思案にあたわずとやたらのみ　猿山
ひどひ醉うぬがひたいをにらめてる　蔦夫
藏宿に地藏の供がのつゝそつ　同
酒のかん下戸亡魂にしてしまひ　豆人
しさつて考ればふられたがまし　礫川
とげに柄をすげて辻番出して置　香貞
惠比須講百萬雨がどぶへ落ち　如雀
彭越を茶漬の菜に呂后する　同

二本棒おれこんだのをしよつてくる　二蝶
毛ずいの へ柄をすげて持唐紙師　雨夕
三味せんを下げて鳶は鷹の供　衛門
藝者の仲間すべつたのころんだの　猿山
是も人の子巾着を切りならひ　礫川
舂米や木馬の尻をふんでいる　里梅
ありやこりやに黒鴨下女が毛をむしり　醉臥
喰もうし喰ぬもつらし居候　礫川
日しよくのよふな鏡で下女作り　里遊
年禮にかた身のすばる早桶や　虎聲
あごなしに一本なげだす局見せ　礫川
醴をまずく作るが下女上手　横好
居風呂へ下女が飛込水の音　和里
大尾
權右馬の頭に道鏡任ぜられ。　青狸

軸
林にもあまる茂りや冬木立　文日堂　礫川
世の中の惠みをうけつ歸り花　川柳

俳風
柳多留四十三篇　終

俳風柳多留四十四篇

川叟の庵なつて、諸君子月々に花やかなる螢宇をつみ給ひし、風雅の句々を見るに、こやかの太平の聲といはん、よて目出たき君がよゝしの篇となして、たへぬ柳の絲すぢを、菅裏が筆にそめる、

辰の春

青露評

中啓のはるかにあがる神事也　藤後
內氣には似ず內裏をば小さがり　菅裏
女房にすると榮花の夢はさめ　箕山
こゝちよさ海を枕に山を見る　是樂
念力と法力を見る紫宸殿　孤雲
うね／＼は盛りおちめは誘ふ水　萬仁
白ら浪に千鳥は高く音をはつし　有幸
鐵之助鼠で忠の名をのこし　礫川

蔦の跡家土産の無い花見なり　礫川
茶と螢宇治拾遺には書のこし　シクト
御殿山いつか心はころげ落ち　里松
白眼くらには勝さふな國家老　笑語
强い絹短い木綿見とがめる　是樂
袖が崎ほたけに蜜柑御買上げ　玉章
一年を廿日でくらすいゝ男　香貞
難波やで秦の始皇の物語り　玉章
いかゞ仕給ふと紅葉へもたれてる　礫川
さつぱりとしたと曹操へらず口　香貞
錦着た山は裸に成る下地　菅裏
呑み口が有るに義與氣が付ず　一德
唐崎はついぞほこりのたゝぬ所　橫好
源左衛門莵砥一挺研ぎなくし　兎走
いよ仕懸などゝ眞田の城を譽め　ヤマキ
武の內若いと評のつく男　玉章
思ひもよらぬ浦波と浪人　巾布
飛だ身のかるい野郎と能登守　一德
空をねめ／＼辨當を內で喰ひ　里梅
門松の替りをするも秋田者　ヤマキ

朋友の信吉原で頼み合　巾布
挽臼の獨身庭へすへられる　梅鳥
田甫からおさらばをする安い客　ヤマキ
有てくれ南無三の絲たらぬ也　礫川
よくつもつても見なせいと雪の朝　笑語
おんばのはよつぽど幅の廣い音　兎走
戀病の豚はもちやげるやうに打　横好

文日堂評

素足から白無垢に成る不二の夢　箕山
御寶藏三國一にそびへてる　千之
粟散邊土とあなどり風を喰ひ　箕山
松竹が建つと鶴龜舞に來る　梅鳥
白幡に一字違ひのつかはしめ　笑語
雪に寐た小松子の日にゆり起し　是樂
魚を得て孝子は虫がかぶり出し　一德
けんぎやうは夜はか出來る物と見え　玉章
秦の代に鹿のいなゝくとんだ事　箕山
玉姫は外と黒助は内に居る　兎走
入道に毛のはへて居る百人一首　孤雲
蓋をとり野暮でねへのと箸を割り　巾布

海を見通し新田勢陣を取り　玉章
借金の穴とは知らずはまるなり　ヤマキ
淺草で高い楊枝を武士つかひ　里松
足元とを闇で歸つて首尾がよし　雨夕
無いといふつは者の居る御不勝手　横好
采料はサンナ釣臺リャン貰ひ　同
鰒にあてられ玄伯さまにかゝり　萬仁
酒盛にキャンといわせる御國柄　一德
三月が來てわれ鍋に蓋ができ　衛門
女房も春の一と夜は姫になり　孤雲
かの道の鏡ともなる天下一　青露
秋一無冬そろばんとたはけ　菅裏
おもしろい狂言炬燵やぐら下　横好
味迄は書かぬ雨夜の品定め　一德

川柳評

拜領は時服にまさる簑と笠　一德
乘物の棒はまぎれぬ御家柄　同
駿河町あづちのやうに不二が見え　里梅
大黒も俵もうれるにはか雨　礫川
淸盛は佛のためにまよはされ　里松

いざ臣が命召れど國家老　礫川
女のわらは左右に具して仲の町　同
金箔のつかぬは木地のいゝ娘　ヤマキ
片つ桐喰ずに紙につゝむ也　礫川
時平がたこくうむてんにびく／＼し　香貞
大根武者人參よりも氣の强さ　巾布
けんどんや亭主らしいが高足駄　同
不風流雪にこたつへ首つきり　玉章
若い後家和尚しば／＼おもん見る　千之
大晦日箱ぢやうちんはこわくなし　香貞
鼻油つけ／＼氣ばる鐵の鍔　礫川
太子講夫から根津の大一座　ヤマキ
眉かくし主の女房にやふけたかへ　礫川
手まへ升出すとむきみや水をまけ　ヤマキ
きなこやの木馬豆計くつて居る　藤後
足でまゝ焚たを喰つた虎之助　梅鳥
しくじつて土こねになるこんにやくや　ヤマキ
みれんなく扣くがつきや仕廻也　礫川
御茶挽と見えて二人り面壁し　千之
息子最ふずぶとく成て晝歸り　礫川

味噌すりの廻る所は百旦那　ヤマキ
もちやそびの中で番太は子をこさへ　横好
下女過言あだに枕をかはすとは　シクト
北國へ行けばかんきを詣るはづ　ヤマキ
いさゝかな事も湯にする姑ばゞ　久露
びつこめが下知かと座頭くやしがり　ヤマキ
居候二八一つで二度あるき　同
伺濟で追焚に下女かゝり　箕山
小便は向ふへしなと柳原　里松

シクト評

伊達な事音にひゞいた御出立　萬仁
はゝきゞをだまし花ちる里へ行　青露
山吹はどの道かさぬ色と見え　雨夕
幼君を守りたてに來る端午勢　青狸
其下駄が白い紅葉の德に成り　礫川
年號の始め鎌にて鹿を切り　里松
まゝ母の事もおかしく式部書き　如雀
張良へ文も手わたし三會め　青露
金銀を毎日のばすいゝ箔や　梅鳥

千慮齋評

飛鳥のまさしく落る御鷹狩　青露
書きものを柳ごりから取かへし　箕山
本望さ都をさしてつんのぼり　礫川
一帖は螢に光るものがたり　同
我勝に豐年まねく御田扇　同
うら店で琴をしらべるはかりごと　ヤマキ
嫁の禮もすそへからむ爪の絲　礫川
三日見ぬ間に花の咲く仲の町　萬仁
士いの山は文字にも表裏なし　礫川
若殿の駕籠にお乳母はおもい事　梅鳥
呵るはづ三分の味はしらぬ母　横好
内裏造營押入を明わたし　是樂
角田川どつと笑はれ聟わかれ　ヤマキ
近江どろぼふめと源太くやしがり　萬仁
韻字をふんで日本の地を踏ず　是樂
多葉粉から光明はなつ三會目　シクト
振袖の野郎女郎をおがんでる　是樂
まだ咲ぬ櫻の事も母異見　シクト
春の夜と紫同じ直段也　同
廿にもなるやごとなき茶見せ也　箕山

鵜の眞似をして烏金ごせはかし　里松
ぬき足で蝶々を取る五郎丸　瓠重
初松魚賣は腹立ぽいをとこ　横好
へちまの水でも取ふかと獨り言　瓠重
我儘を功にして居る宿下り　如雀
新川の菰つかぶりは藏住居　同
出るとなぶられる瀨戸物やの娘　礫川
討死を日逡りにする講釋師　瓠重
女房のむねは團子の外にやけ　ヤマキ
北國は行ほど寒くなる所ろ　同
さつぱりとしていゝのさと與吉言ひ　礫川

文日堂評

御名句は啼まで待ん時鳥　箕山
和かんの智ぼう太鼓のね琴の音　玉章
春のきず富士を折々隱す也　里松
命日に生まで手向る本望さ　如雀
田と谷の間ひへ流る富士の雪　同
うこん紫赤染も百で出來　香貞
萩を唐津とあらそふは素人也　瓠重
松の義理櫻へのべる嫁の禮　青露

善人の來る迄中うを龜およぎ　玉章
表具の糊も九年程くさらせる　如雀
むごい事梅の繼穗に柳なり　是樂
富士びたい雪でうづまる耻しさ　里梅
たいまひの櫛三つまたの四つ手上げ　シクト
誓詞の條々に愚息大はまり　菅裏
暮合に朝顏の咲く呉服店　一德
番に出て何をなんすと尋られ　巾布
きつい事二度目に遣手笑はせる　里松
惡ざれな和尚と三河すり違ひ　ヤマキ
へんちきな獻立を書く長崎屋　如雀
義太夫でせがみ土佐では申入れ　同
赤人の尻に猿丸きつい事　三松
飴賣だよと唐人へ指をさし　横好
くどいてもけんもほろゝな木地娘　菅裏
白酒の節句に位ひだをれ出來　一德
天窓はいきなあたまだが錢はなし　瓠重
鰐口の音のきこえる安芝居　香貞
江戸では無用京都では擔桶を出し　玉章
三文もねへつらで百兩の持參　萬仁

此人にして此病ひ又五兩　如雀

川柳評

物の具へ荒い風さへあてぬ御代　青露
能き折と參內もする嫁の禮　孤雲
天人も唐人も來た清見潟　青露
六割半も直の高い雛をかひ　シクト
極野暮をふらぬも里の意氣地也　礫川
秦の代の福は日本へ吹よせる　一德
大名もにぢりあがつて茶を貰ひ　藤後
國家老たんそくをして鼻をかみ　礫川
信玄の母衣を勝頼みだす也　青露
雛細工我敷島のみちならで　同
うち死を日送りにする講釋師　瓠重
出おるなと出やるな二人り異見也　青露
魂祭りうばそくうばいやたら出る　里松
千早振神もたぼをば好き給ひ　同
射落すと十二支四足いどみ合ひ　玉章
神德で蔦にからまる樽ひろひ　孤雲
そば腹でふくれかへつた床を取り　箕山
肴よと呼れてこまる田にし賣　礫川

おきて見つ寐て見つい ぶす御不勝手　梅鳥
かん鍋とやらへおやられなんしたと　礫川
朝がへり近所へ來るとしやちこばり　巾布
せげんの子女を玉とおぼへてる　里松
芋をくひ／＼屁のやうで無い談義　青露
月見にははたして切れるへちま客　礫川
一と包程に切つたを下女かぢり　里梅
おく方もなまねれになるうら丶かさ　瓠重

ヤマキ評

目出たさは千代を込たる御城地　萬仁
まんぢうやあたりで鶴の御見分　玉章
三國の二を寶永に産おとし　青露
手習を書き終る頃三井の八つ　三松
武藏野を家毎に表す二度の月　玉章
一日にみやこへのぼるい丶御庭　里松
琵琶の曲行も歸るも立どまり　三松
西行は廓の花を見ず計り　同
天顏のうるはしいのを姉はわけ　里梅
三國一の大木は梅の花　梅鳥
六郷をしづかにこへる三年め　雨夕

息子づれ紅葉の寺で法をつけ　巾布
八幡も上覧あれと山びらき　青露
はれ小袖光りのどけき嫁の禮　礫川
鹿が勇めば花のちる奈良の當地　一德
いかに久しき物と知るうは草履　礫川
かはらけがそれて櫻の花がちり　是樂
須磨ぬゆゑ淺黄一夜をあかしかね　梅鳥
目出鯛をとち萬兩でかひ納め　礫川
植ゑたかと聞けばうゑたとどら仲間　青露
朝飯に鏡をそへていせや見る　玉章
持參嫁此下もなき器量也　萬仁
はらんだを水にはさせぬ下女が宿　同
出代りの乳母は寐顏にいとまごひ　衛門
前と春に不用な道具武藏坊　萬仁
人を化すで年越しに狐來る　玉章
匙にやつして飯盛にくらひこみ　是樂
あす芝居人丸どこか寐ずにゐる　如雀
富士の夢山がはづれて一分捨て　礫川
長局生もの知りはつとまらず　里梅
いせやと江戸や兩方でべらぼうめ　横好

鐵槌の行方知れぬいやな氣味　礫川
霖亂の髮文がらでむすびゐげ　牛賀
毛ばだつた盤でさしてる下手將棊　青露
花の留守内にも誰か居候　三松
松の位をふんばりと女房いひ　礫川
妹をふみ臺にしてのし上り　同
居候はらはりたやとおかんきん　同
釜の鳴り止む迄女房無ごん也　同
かつて來る内二味せんで彈て居る　三松
ばんじやくだこづかつせいと輕井澤　青露
溜息を尻からついてしかられる　藤後
御虫干土佐の名畫で笑はせる　萬仁

青露評

公は松文武にわかる手に葉也　青狸
御馳走に牡丹と鐘はおもい事　巾布
嫁の顏まで桃色の節句也　横好
寵をさけ愛をこばめる國家老　礫川
御立身御名は楷書に改り　里松
一を得て萬民浮むなめり川　礫川
牛に馬乘りかへ宮は落給ふ　萬仁

九十目を二つに切て御揚り　久露
眞中は萬卒の買ふ顏で無し　一德
天神も辨財天も御大祿　箕山
花の江戸だけに水迄枝が咲　雨夕
出代りの乳母は寢顏へ暇乞　衛門
桐は鳳凰紫檀にはとんび也　雨夕
賴政と與市扇子で名が高し　玉章
鼈甲と伽羅は榮花の沓冠　三松
かんこ鳥住所は無し四里四方　里松
繼子は風に貰た凧を上げ　一德
よごれた顏を叉炭でよごす也　箕山
孟宗が母姑にはいやなたち　礫川
我が思ふ連のありやと隅田川　青狸
妾が兄馬場で無口な男なり　玉章
西河岸へ美人天井より落る　巾布
千社札天狗の所爲がきついみそ　礫川
旅立を送つた跡で汐干狩　衛門
片々の妻戸一枚仕足し物　如雀
袷着る人には買へぬ初松魚　玉章
野雪隱つれは大根の出來を譽め　雨夕

骨のある禮をいはれる俄か雨　雨夕
下手の鞠足をくらへと言つたよふ　礫川
大社屁ひりの神は末座なり　萬仁
金がなければなんのいの暮の嫁　如雀
丸山は伊久ももてる所ろ也　里梅
狂ふにもとちの付くのは面白し　礫川
けちな晩なんだ鼠か化物か　巾布
つかれ果拐能書をよんでみる　礫川
殿の鑓先喰留て兄出世　玉章

文日堂評

御入國以來ひきやうな水はなし　一德
知らぬ火をあてに飛行梅の花　三松
帷幕のさうどう毛虫がぶら下り　孤雲
雷りを率頭に連て御通ひ　三松
西行忌腰を折るのが手向也　横好
鶯の初音に北の窓を明け　玉章
桃の御所息子は菓子の袴垂　萬仁
つれ〴〵草の實といふは白うるり　如雀
一國は入相からの櫻なり　シクト
忠臣は疊の下で死ぬ氣也　如雀

寐て計り居た材木が牛になり　如雀
松になる禿二葉のかんばしさ　香貞
閨のひまさへつれなきは初會也　横好
きよらかな枕は親の前で見る　シクト
忠うぎつな多葉粉をうかり〳〵買ひ　如雀
顔見せで見立御講で直が出來る　同
伏勢に女軍をつかうらんがしさ　三松
又頼みますと車力へ孟母言ひ　雨夕
性は善也もし何歟落ました　横好
つばくらに國の便りを雁は聞き　梅鳥
倅が替り卒都婆へゑつとこさ　横好
不埒さは服紗小袖で大一座　青露
あだ櫻西行及び息子見る　玉章
せいろうでうか〳〵素見夜をふかし　如雀
二つ文字牛の角文字娘知り　巾布
深更に五德の歩行おそろしさ　三松
畑けと內の番人はかゝし也　如玉
空をにらんで味噌漉を持て居る　ヤマキ
雛の酒裾へかゝつてうたぐられ　同
甚五郎酒が好きかと御用聞き　梅鳥

ふんどしも縄目に及ぶ五丁町　玉章
ため息を尻からついて呵られる　藤後

川柳評

結好さ高麗縁が五百坪　青露
馬上では蟻もとふさぬ宮居也　横好
物語月もろともに隈もなし　青露
六月はひや／＼思ふ御獻上　一德
ひろつても大事の無いは命也　玉章
増上寺扇おつとり鐘を見る　青露
琵琶の曲行くも歸るも立どまり　三松
桃園の院拜見と生醉來る　青露
仲の町八文字は女郎也　巾布
梅が枝に鶯とんだ長い節し　青露
朝がへり大名でさへしめ出され　玉章
彦七は大いの氣ありで初手おぶい　如玉
神國をやつと飛んでく善界坊　シクト
なまじいに息子讀るで手におへず　礫川
日々／＼に木登りをする張御府　如雀
且用を仕廻かこいへさきんずる　横好
講釋師錢を扇でたゝき出し　ヤマキ

麴屋はゐんの下にて金もふけ　箕山
二度はつちや行ぬに親父どらよばり　礫川
たましいでみゝずほぢくる小侍　同
姉に賓が入れば妹に花が咲き　藤後
せいろうでうか／＼すけん夜をふかし　如雀
鹿島は地もの住吉は女郎好き　玉章
身仕廻部屋の有さまを見せたいな　礫川
吉田町持を女房鼻にかけ　ヤマキ
くらいぬけ手足の長い野郎也　玉章
兩方がまぬけなつらで境論　衞門
行燈ちやうちんぼた餅はづはづれ　玉章

青露評

黄金は驘（はだか）のまゝで御獻上　横好
ほまれ有る和睦あつかい三つの鳥　玉章
唐を見て其日矢橋に歸帆也　一德
はんじやうさ江戸の隅でも都鳥　香貞
兵粮の穀は千早の味方なり　青狸
三つ股と馬外和漢のおしい者　菅裏
居つゞけの夜具をもぬけの花の宴　玉章
始皇帝蟲のうへで旅やつれ　久露

人を茶にして山門へ高あがり　如雀
とは知らずよやたすけよや猫股よ　巾布
もとゝりを切れとおいらん下知をする　シクト
かげぼうしとらまへたがるがんせなさ　萬仁
五條あたりは下谷でのみやこ也　横好
干からびた花や蛙を歌ぶくろ　久露
どなたへもこうしてあげる三會目　礫川
小枕のしまりかげんに目をねむり　ヤマキ
一をきゝ萬やを知る禿なり　巾布
三くだり半へお松どの岡右衛門　箕山
御不勝手どうれ／＼の作り聲　礫川
土手で祈念あわれ見せに居てくれろ　同
すてつほのかは勞痎へ昆布するめ　同
よこそつぽうをはられてる丸ぶるひ　香貞
つみ草に出した儘さと下女笑ひ　横好
俗ぶつさ鰹に雉子の味ぢをつけ　礫川
安い客いろはで女郎買ひ習ひ　同
川留の狀を二人で見やアがり　同
くぼい所へ水たまり下女はらみ　シクト
幟にも下たに成つてる母の紋　横好

嫁は居ぬはづお袋の御物也　箕山

文日堂評

しら川の夜船を明石から起し　シクト
よく書くがすかぬ手風と時平言ひ　里松
てとたの字濁らせて讀むいゝ頓智　ヤマキ
花の山手毎に折てしばられる　玉章
野がけ道地下も青葉の笛を吹き　菅裏
あいぐまのしばらく受は鯛ひらめ　玉章
にくい事妾手すりへ腰をかけ　同
耻しさ盛たる飯は富士の山　一德
かねのわらじでかけさせる面白さ　箕山
おもしろさあぐらをかいて土手をかけ　菅裏
げぢ／＼の毒に義經あてられる　ヤマキ
ゆうれいになれば平家も白い也　如雀
烏を見せて鷺をうる道明寺　同
ぞろ／＼とそばやへはいる四十七　巾布
つまらねへもの吉原の朝ざくら　シクト
羽子の子を樋からほうるあやめふき　横好
遠緣に義をむすぶのは丙午　里松
一人り來る獅子はかい取ばしより也　和恭

あたまから惚られるのはちゃれ髪　青露
くつはやは馬のやうなへ神酒をあげ　雨夕
うばが前だれ唐桟はきつい事　梅鳥
鳥にだもしかず夜る出るはら四文　香貞
灸穴で無い皮切りが嫁くろう　青露

川柳評

三が所は焚火の御間で拜領し　青狸
御自身に召かえらるゝ鐘の中　三松
仲之町花の外には三歩なり　シクト
泣くよりもあはれ捨子の笑ひ顔　礫川
上下もで死賣つてるにぎやかさ　同
聖人も三とせ羑里に身を沈め　シクト
花の山手毎に折てしばられる　玉章
飛石の三つ四つあるはいゝたびや　菅裏
上下もと三人扶持で泣寐入り　ヤマキ
その事は夫成けりに緣をくみ　箕山
虎五疋龍一疋で蜀を取り　三松
北國の心ほそ道只一騎　萬仁
人同じからず車の紋どころ　同
足柄で頼光無宿召しかゝへ　玉章

人を茶にして山門の高上り　如雀
まつ白くなつてはたらく石灰や　梅鳥
おまへばかやれ芝居だの花見だの　巾布
鳩の杖豆は豆腐で喰ふばかり　一德
所がらあだかも螢うじのよう　礫川
遊ぶ事法あり今宵三會目　青露
源三位首たけはまる歌をよみ　礫川
孝行を仕過て養子評がつき　萬仁
御枕を一つおつぺす國家老　礫川
月花はいけん雪には追だされ　ヤマキ
叡山で碁盤ながめるふてへやつ　香貞
鬪わけて出ぬ乳を口に子は寐入り　礫川
一疋の馬が御家中くるわせる　萬仁
酒ものめ色もしろ鰹はくふな　礫川
此松たちまち乘つ切るの面白さ　ヤマキ
身をすてる藪へ光秀うかと行き　古道
禰天魔紅葉で息子氣がそれる　萬仁
からくりのやうに師直のぞく也　孤雲
二十軒石橋山のすぢむかふ　瓢錦
おどり子は師匠のかげをいつもふみ　里松

けいせいに淺黄いせやに初松魚　ヤマキ
唐詩選切うりにする安い書家　如雀
軍勢のさいそくに來るかしは餅　青狸
おかしくも無いは謠の下もがゝり　萬仁
やりくりをしたとは見えぬ仲の町　久露
目がさめて今はあだなれ入ぼくろ　ヤマキ
そこはかとなく書ているひまな見せ　如雀
こは飯も取あへず聟迯て行　ヤマキ
寐たふりが過たで來たを取迯し　礫川
守りが宿およそ二寸といするなり　同
足の親指反つたのが下女じまん　同

文日堂評

三笠山四角な國で丸く詠み　青露
敷島の道草に折るかきつばた　曳尾
晴嵐をながめ野分を書かゝり　雨夕
千栽へたゞのりたがる執心さ　箕山
ならぬにも罷りを付る國家老　横好
唐の夢うつした上をほとゝぎす　シクト
賤心あつて山吹出して見せ　萬仁
はゝきゞをだまし花散里へ行　青露

子をたてに女房王位をのぞむ也　玉章
日の暮をまつち山へと夕こえる　巾布
鶴樱に舞のたばこはきつい事　梅鳥
けふはまだ白いとにうりやへは入り　巾布
戸隱の祭にうれる岩おこし　梅鳥
雨足をすてゝ名玉世に光り　孤雲
霜がれは吉野ねりまの山に成り　玉章
行時に小道に寄て醫者になり　シクト
よねんなく遊んでいるとト者言ひ　同
ちやうちんにつりがねを書き夜念佛　如雀
ちとこんやむつがかしいと格子先　巾布
俄雨つらおしぬぐひ〳〵　如雀
たび〳〵の不幸藏宿笑つてる　同
よく口をたゝくをもつてたいこ持　雨夕
かの一ち黑が猫よりもいゝ薬　同
小便を枝折に犬の遠歩行　曳尾
ゆくわん場の笑ひ一向げせぬ也　和恭
りんといふ下女施しに馬を解き　同

川柳評

御家がら馬に千里の鞍覆　青露

武藏野はあたかも甍計り也　青露
鶴が岡後刻々と乘て出る　シクト
何れの緒でも一曲と嫁をせめ　礫川
法師だけかゝる佳肴をいましめる　同
山吹はどの道かさぬ色と見え　雨夕
はだのいゝ子供をつれて徐福來る　青露
軍勢のさいそくに來るかしは餅　青狸
縲絏のうちで息子は後の月　シクト
大木戸に臀四五てうまいふくし　同
宰予に問ふていわく寐足らずや　横好
彼岸はと姑はしらへ目をしかめ　同
たいこ持どらをうたせて陣を引き　里松
ぼん前はゑんまの内へ鬼が來る　ヤマキ
三十になるやならぬを息子入れ　雨夕
妾の追こみ竹の子に喰あきる　礫川
亭主の理屈おれをなんだと思ふ　同
ぬけはぬけたがずんべら坊主に成り　同
松もろ共によくどしいばゞあ出る　菅裏
兒が淵いわれを聞てべらぼうめ　礫川
宵はまち夜中はうらみあたけてる　同

蹈のくさめを待ているへんなつら　礫川
おきやアがれ油さしめが上ざうり　同
朝がへり先んをとらんと膳をなげ　同
言なづけある身だと下女おきやあがれ　同
居候ちとはたらくは目が廻り　同
從一位に昇進したる道具也　箕山

即興探題　鶴龜松竹梅　五題

川柳評

弓矢神世をしめよとの御目釘　菅裏
大鳥のお庭に鶴のはなし飼ひ　青露
其にくさ是はなんだと梅の花　同
畠で鶴を取つたのは彥左衛門　萬仁
壽老人ほどに愛する餌まき也　巾布
けいせいのかうべに龜は含る也　青露
梅やしき古いしやれだが息子づれ　久露
是ほどの梅を垣根に村芝居　梅鳥
しばられたわきに竹の子二三本　玉章
御拳しを下女生貝とおもつてる　梅鳥

青露評

藤色を濃く書てから名をのこし　巾布
歸朝して讀のはらくな雲のうへ　礫川
江戸は卯の花都では梅で啼　萬仁
かく年んに枕淋しき御内室　ヤマキ
何冊物に成ますと和尙聞き　礫川
目出度さは帶と刀の取かはし　横好
天竺の下駄で日本の坂を下り　シクト
譽め言葉かたく書たを勇士持ち　同
仲の町おふさきるさにとつかまり　巾布
毛氈へ魚鱗鶴翼姿手がら　箕山
うる方で鉢卷をするあたらしさ　如雀
三會目わいろの筋でもてる也　礫川
なんのあのくらいぬけめと大野言　里松
嫁の禮頃は陸月のすゑつかた　萬仁
古郷へは錦袋圓をみやげ也　シクト
たいこ持雷門にまちあはせ　玉章
耳に目をぶらさげ親父鼻をかみ　礫川
裝束で二人かけ出す紅葉の賀　里松
丸綿をぬぐと鼎のぬけたやう　ヤマキ
中たがひこまるものかと井戸をほり　礫川

知りやせんたちかと嫁の前へおき　雨夕
先づはしの步をついておくけちな客　礫川
雨やどり他生の椽へこしをかけ　同
梅へ屛風をたてまはす十三日　玉章
一步すて猶うらめしき朝がへり　礫川
持てたやつぼうぜんとして土手を行　ヤマキ
手心で文錢を知る鷹の牛　礫川
無心での格好ものはたゝみがへ　同
つきやはものをいはないで五杯くひ　雨夕
けむつたい親父湯や株三つ持ち　横好
あだ娘生れつかない目で笑ひ　玉章
戀の花けふ咲そめる耻しさ　礫川

文日堂評

六月の布子は天へもふちつと　如雀
二十四重垣根へ妻をこめる也　青露
蕨より栗は大たばな物がたり　如雀
椎が本浮舟で行くおもしろさ　同
大社榊へ紅葉むすびつけ　巾布
下々ならばしみ／＼腹が立田山　末學
兼好が何んと書ても呑るやつ　雨夕

鳥籠のひごから逃てどぶをこし　雨夕
酉の町息子そらねをはかる也　曳尾
御妾は先どくやくの一味也　萬仁
十徳と十二ひとへでいゝしめり　雨夕
こつちらへ御向なんしの面白さ　ヤマキ
五つ文字は四文字の親に育てられ　横好
琴の音のせぬはづ嫁は羽織也　シクト
すがゝきで夜光の玉を見せる也　香貞
鋏とぎ來たらよべよと口をまげ　横好
注進をにべなく弓師申し上げ　如雀
跡先もない夢を見るたから舟　同
くもつたで敷く毛氈をかけて見る　同
無縁寺の一圓相は土俵なり　孤雲
金の無い衆は歩行で御ろうじろ　箕山
仲人が來て田を山に結ひ直し　雨夕
御不勝手しぼり放しの蚊家を釣　巾布
觀音を賣るは息子と勸學や　未學
品の月もりつけられる山の芋　ヤマキ
三會目一歩下さんやしよが出る　如雀
突出しはみす〳〵紙を遣ひ込み　青露

川柳評

御立身御運も藏も御開き　巾布
鐘の中わすれた面で名の高さ　礫川
千金の御身にあぶない浮世也　箕山
しかうしてのちをかんがへぬりこめる　如雀
取られたと言のもつらし片鐙　菅裏
薄雲を秤にかけて見たいもの　礫川
義經はげに源との九郎人　菅裏
行き暮て此下蔭へ息子寐る　シクト
忠助と義兵ゑ一所に店を明け　未學
楠は鼻をつまんで下知をなし　ヤマキ
佛でも請取わたし晦日也　曳尾
なんのあのくらいぬけめと大野言　里松
こうしやくし眞田が丸で錢もふけ　青露
西瓜うり首じつけんのやうに見せ　巾布
母くろう娘おかしなこへに成り　玉章
觀音をうるは息子と勸學や　未學
やゝあつて又切れ文をよんで見る　礫川
まのあたりさくのを見ては地獄店　同
せきとめに乘て關をば安く越え　菅裏

六夜をば大念佛で引き上る　曳尾
我命長くもがなと姑ばゝ　青露
燒飯はこつちのものと居候　ヤマキ
朝がへりおまへは〳〵　礫川
下女が文かなを楷書にしたゝめる　青露
六夜待もりつけられる山の芋　ヤマキ
番太郎どれもぶさくな物を持ち　箕山

即興　上野淺草芝品川吉原
　川柳評

御入院に雲の上から御下向　巾布
蓮の花ちらすあづまのひえおろし　雨夕
仁王門そのかみ鯛のきたところ　如雀
それとなくさて花やかな見合也　箕山
大門をはいるとこれは〳〵也　同
奉行職くわんおん堂で髭をなで　青露
會者定離きぬ〴〵は我山のかね　シクト
ふくろ谷是一つ山のしめくゝり　青露
切りかける夜具はしんけん勝負也　同
品川へひつぷの勇はちよきで行き　玉章
品川の遊びどこやら毛がたらず　シクト
品川へしば〳〵通ひ毛をはやし　玉章
飯盛の客に釋氏はきついこと　孤雲

俳風柳多留四十四篇終

俳風柳多留四十五篇

諺に麴町の井戸といへるは、ふかきいゝ也、其底の深をさぐるは、前句の滑稽なり、其井戸有る町に、月々くみあげて、水ぐきにうつしたる句々はにごれるなし、よてくめどもつきぬ數の柳多留四十五の篇と、菅裏筆を柄杓のかはりに取る、

辰仲秋

芋洗評

聖堂へ向けて鳳凰かつぎ出し　花道
豐さは冠けちりんかたむかず　汁人
御肩衣使者目錄で請に行　カテウ
橋杭で國と國とをぬひ合せ　マイタ
歌は顏書物は腹を日にさらし　瓦合
うつくしい鬼が生木の枝をさき　鳳凰
榎の僧正餠やと向ひ合ひ　春駒

まへだれへ折鶴の飛ぶ富が岡　井蛙
山林をさがしあてたは西の狩　其流
御膳ゆゑ海苔もさかやきすつて出る　集馬
大黑を市に俵の町でかひ　二町
大それた無心おく樣去りなんし　枡水
まんぢうのあんにたがはぬはかりごと　針人
さゝがにのほまれ四角な巢を作り　里鶴
化されたよふに柄のない斧を持　瓦合
井出御覽あれと頭陀から出して見せ　木賀
時に半禮出來ませぬ座頭金　亦樂
引かついてぞ失せにけりかねたいこ　松山
初てのお客に赤のめしをたき　井蛙
そろ〳〵とあじに名のつくとまり客　射夕
ひんのよいこいとりかさい太郎也　亦樂
引窓の車もはづす火のくるま　桃林
鋲打のもじからもれるいゝにほひ　可笑
さそう水にて白粉を後家はとき　玉川
其みさほ立る茶とふの茶筌がみ　山猴
火のしのそさう白むくに朧月　蛇内
ちゝんぷいへの字の口をうば直し　山猴

からかさの灸で子供の俄雨　藤後
伯母と叔母の目をぬき鴨はつがふ也　猿松
闕の雪雨手を付た跡ばかり　錦鳥
知つたふり不二見の馬場はするが臺　柳雨
女ん鳥すゝめ男ん鳥あごではい　瓦合
もめるはづ娘のこぬか母はなめ　カテウ
門松に芝ゑびかざる小人じま　亦樂
きんかんをかざりへつける小人島　春波
又有るとよんで悦ぶさかな代　二町
客もはたらく草庵の手打そば　木賀
かねの聲かゞみのはてとおもはれず　春駒
つるんでる釜を引ずるせはしなさ　三朝
抱た子があるで亭主はおんぶする　瓦合
藏と倉米と鹽とて名が高し　五友
あらかじめ母に言せる嫁の禮　集馬
旅の留守海賊共が入びたり　一徳
佛體は魚の脊中でたゝき出し　山猿
三分をばむすこ七分は親父出し　三枝
寒ごゑのいろはやつべし帆を上る　干犬

狐聲評

粟ちらす國にうゑたる民はなし　一徳
諸國へは扇でひゞく芝の鐘　可笛
文は加茂武は鶴へ乘るくらべ馬　錦鳥
山吹の色は實のあるさかな代　青露
小金から大金に成る名馬出る　亦樂
謠講金剛夜叉の方へ行き　箕山
追々に割込みのある初の雛　藤後
碁に勝てまけた〳〵が大當り　桃林
新ん田んの義貞どのとせなあよみ　同
犬よりも猿にそつたは利口也　西光
北國の雪に火のしをお針かけ　亦樂
重箱でみそをすれとの御仁心　門柳
見せ賣はせぬ扇やのあふぎ也　如雀
氣違水もひんのよい角田川　門柳
丸綿へ不二の山ほど高く盛り　柳鳥
氣のそれぬ内と女を取て遣り　醉臥
我儘な返禮鶴をたばで出し　竹二
文の書初めを恵方の客へ遣り　玉川
新造は人見御供に度々上り　八里喜
土佐ぶしを猫の皮にてうまくひき　西光

源氏方湯の返報に水でかち　春駒
上總でも丈のあるのは七兵衞　杯舟
天人が土間でみかんの花がふり　猿松
飯計りやはらかなのに嫁こまり　瓦合
おいらんの目出度顏へ禿泣き　三朝
箔置ぬ内は衆生へ手を合せ　可笑
ねむがらぬ禿は松の二葉也　猿松
麥飯を珍らしくくふ有がたさ　〆子
女房が團十郎で亭主ぐにや　東來
雷も鳴りつぶされる市二日　志丸
うら店のかべには耳も口もあり　射夕
あんこうのふわけして見る料理人　東來
居續けのあげくはへんの糸がきれ　松山
けいせいがくぼに有りたき五丁町　市東
わるい道垣根と塀をつるにつき　東來
勘當の息子とう〳〵水をあび　玉川
國家老來てヱヽきびかしやんとする　木葉
陸地をも柴舟に乘り御通ひ　木賀
化粧とはだつき此かた言ひ初め　如石
にぎりこぶしを目へ當る玉子賣　眉長

碁盤より將棋に緣の有る二か寺　如雀
はヽきヽの捨子と見えてみえ隱れ　松山
疊やは杵で俵をついてゐる　柳鳥
山伏で度々落を取る源氏方　二町
中黑の歸り目黑へまはる也　集馬
箱入を隣の息子封を切り　鑓持
年忘れ年忌と讀んで笑れる　市東
店中の尻で大家は餅をつき　猿松
おしい事壺は蛸だが面らは芋　木賀
硝子を落してはわるいヽ男　千鶴
書事もする事も又鳥で出來　眉長

川柳評

玉簾にかヽる寄瑞の御紋なり　猿松
春雨に潤ふ江戸の御饗應　箕山
朝鮮迄も猿猴は手をのばし　春駒
紫の衣奉加は琴の弟子　門柳
目に飾り耳に三藏法師也　箕山
不二だけにせこを入れたも大あたま　其笠
紅葉狩春日龍神より不出來　如鶴
咲や姬雲のびんづら雪の肌　芋洗

猪牙舟は深さの知れぬ灘をのり　亦樂
頼政はいゝ獣をねらひあて　西光
ひんな儒者持參の爲に晨され　猿松
お妾へ齒のたつものは櫛ばかり　木葉
瀧つぼを出て大内へどなりこみ　カテウ
武をすてゝ西へ行のも讀みと歌　斗丸
三廻りで下たにはおかぬ越後者　桑虫
しんがりを女房にさせて年籠り　市風
仙洞つきは御妾の役不足　亦樂
羽ばたきをしてあんころの禮を言ひ　斗丸
やけどした小田原あばら片身出し　眉長
ぶつさきの大ふり袖をおさへ着る　里梅
さもやん事なき女郎の蟹もくひ　白志
どふ見ても親ほど馬鹿な者はなし　十六
淺草と長谷は札所の落頭ら　鱗
荒神の内でどぶつは中へのせ　枡水
三浦やでよつぽどむしる芝肴　一德
二親はすねをかぢられ手をくはれ　亦樂
五匁の國府やみ／＼内でのみ　八重喜
げどふめを埋艸にする西の海　竹光

御誕生まくりもあげず茶づけ也　若松
三成は肩より尻で風を切り　東猴
さき習ひ鱣といつそつかみ合　山柳
おかべのうへにたゞのりはきつい事　集馬
こんにやくや桶でじだんだふんでいる　眉長
雪の客門口へ來てはねまわり　〆子
親よりも榮花をしたは屁の息子　市東
いかぬやつ地藏の顔を四度なで　其流
損料を着て耻ざるはそれ勇か　圓素
是がみな金ならどうだ十三日　五友
ちくしやうと言れる程な美しさ　藤後
日影町うろつくやつを叱りつけ　千鶴
酒を買尻を切られる四六見せ　柳鳥
南向きいきぬ親父の捨處　西光
湯でもよし飯でもよしとかゝりう人　木葉
生まの薪下女巣籠りを吹ている　市ケ谷
たましいのぬけがら奴一本さし　東來
月雪花が責よせる大三十日　虻内
大八は見附や橋で馬鹿を釣り　伊庭
うぬが女房と思つてるたわけ者　藤後

親分の夫婦におんぶだつこする　山猴
安珍はすでに蛇婬をおかす處　猿松
中ッぱらあぶなつかしくかしこまり　鑓持
過去はふんどし現在は頭巾也　亦樂

亦樂評

神號の枝でさへづる寺號也　志丸
稲のみが花の園とは御風流　青露
秋の田を苅取頃の御姿　桑虫
稲の神ゆゑ玉川の水を引き　盃船
神の名の一字を筆の取り初　青露
御ひねりを二つにわけて御味方　品能
梅の雪極暑に成て御目にふれ　糸道
御作事も鼓師に成る年の暮　斗丸
百社目は三光院と息子づれ　井蛙
初の午江戸も能書の種おろし　里鶴
神鏡のうらへ十一面うつり　市風
初登山蚯蚓は龍の下地なり　盃船
鶯にふつと宮守目をさまし　針人
本掌さ笠木で腹を三度すり　里鶴
八つ目より七つの假名が目の藥　若松

茄子通る比は八里の山櫻　五友
妾にはへうひの方が惠方也　死合
此冠糸に着せたが江戸じまん　二町
手習に上げて我子を見違へる　鬼柳
みごろから帶迄も出る竹の皮　二町
見たてに引きぞ煩ふあやめ也　松山
息子願何とぞ鍵を御さづけ　虻内
下總へすこし鐙をふみのばし　古鳥
珍らしさ苧で契情の髪をゆひ　シクト
雪で寐た竹を朝日がゆりおこし　其誠
花園に續てあやめ盛り也　集鳥
御社内の梅に初音の月日星　香貞
宵越の上の句すゑる花の雨　雨旦
正の字は幟に書くも筆始め　里鶴
日照雨降るは社の吉事也　木葉
繼母も破れた簑や笠なり　虻内
唐人は年始の跡で寒見舞　志水
豐作の國に備はる御神號　一徳
けづりかけ春なればこそできた物　留人
車坂息をつかぬと能書なり　桑虫

叶ふてもわけのいはれぬ願ほどき　八重喜
足を手に讀は百足の文字計り　千鶴
不二はまだ雪に裾野は時鳥　鱗
なつかしや枝にすらるゝ山椒みそ　桃林
玉取は水を霞に迯るなり　醉臥
米で馬洗はぬ御代のおだやかさ　蘇竹
夜着ふとん出して都をうつす也　門柳
人の子を頼んで雪に酒をかひ　錦鳥
濡された雲を峠で踏のめし　猿松
女郎かひさとつて見れば無一物　雷成
調法な物で邪魔なは女房也　留人
眞白な名歌を赤い人がよみ　夢中
初午の日から踏れぬ影が出來　香貞
二の午の百社手習師匠なり　有幸
かいどりに月をかくして嫁の禮　里鶴
初午にてんでに二本持ている　五友
美しさ御幣をかつぎ通し也　里梅
湯でかたる太夫は升で水を飲　柳鳥
天顏のうるはしいのを姉はわけ　里梅
かけたかと路次を飛こす時鳥　東鳥

氣のきいた手引無い目を懸られる　東猴
闇雲になつて月夜の里へ行き　可笑
すねた子の側にあきれた母の顏　〆子
氏子には穴の稲荷を持たまひ　カテウ

狐聲評

赤のまんまにとゝそへて氏子上げ　雨旦
有難さ五社で五穀を守らしめ　錦鳥
春秋を一つに願ふ御神號　柳雨
雨部では荷ひ唯一成と書き　品能
稲が出來荷へば棒の折れる程　其流
豐作はうけ持神の惠み也　里鶴
江戸見坂千社一目に午祭り　同
はんじやうさ太鼓の音の果も無し　杯舟
正一位塀のうへ迄顏を出し　雨夕
農民のかり干す稲を御荷ひ　可笑
神號に花表の文字は叶ふ也　カテウ
千早振波に鳥居のめづらしさ　〆子
天晴と戸隱の神譽られる　松山
かんな屑すこしながらの土産也　柳雨
化される息子かぎやと玉や也　望松

このしろが鯛になるのも御縁日　鱗
初午が有るでこのしろ臺にのせ　古鳥
胸ぐらのやうに鰻はつかまれる　醉臥
あしたから手習ダアトたゝいてる　瓦合
下戸の年禮阿部川に留られる　丸龍
鰐口や鈴にも布が五六尺　二町

亭々評

一社にて一穀づゝを御守護也　猿松
石になつても飛鳥は落る也　松山
神前の雪に梅ちる御あし跡　市東
不拍子も神慮に叶ふ御祭禮　可笑
初霞ほつと言ふ息立のぼり　東猴
空色も鶴のもやうははれ着也　若松
祭つたりたゝいたりする賑かさ　香貞
化された方から先きへ尾を見せる　山猿
瓜實顔は鳴子より手まへなり　虻内
にくらしい形りにはへてる稻荷山　花道
三年に三度ならちやを無事でくひ　山猿
疊屋と紙や寐て居て物語り　如雀
十七里四方は雨をばらつかせ　留人

引つときの産衣をはおる神樂堂　如雀
琴をしらべぬと中々知れぬ所　桑虫
かさぶたのやうに日陰の雪はとけ　東來
能因が顔を取こむにわか雨　雪成
ぬらされた雲を峠でふみのめし　猿松
嫁の留守もふ近所では指を折り　東來
目の見える目くらも金を溜る也　木葉
玉と鍵かけ奉る御寶前　一德
白齒に白及ありがたい神樂堂　春駒
信心の門に惡魔はこんと啼き　志夕
玉川は流れ川竹浮き沈み　杯舟
初午に七千兩のえきが付き　五友
馬の足阿字に聞たで尊とがり　如雀
大一座お針も返事すけてやり　可笑
鳥の目を取つて達磨の目へ入れる　木葉
枯枝に海苔を咲せる袖が浦　志夕
御姿は腰がいたいと言ふ身也　同
日くれ道遠し六本足でかけ　亦樂
草苅の翁は米の御姿　古鳥
金をまく畠廣さは五丁なり　桃林

實のならぬ花で實の有る返事也　留人
山吹の花物言つてなある程　蔦夫
秋の田を苅取頃の御姿　桑虫
末の日鹿とひつじのぬれ始め　桃林
もてなんだかはりにけふは眠くなし　如雀
さああした何かくるぞとくらくする　兎合
扨けちな戸だとやつたらぬかつ釘　松山
午の日は正月無いと下女おもひ　〆子
御ひねりを二つにわけて御味方　品能
ちろん〳〵と五分切りのそばを賣　蔦夫
持參金鼻より面らが高い也　兎合
玉垣のわきにおや〳〵五六本　品能
稲むらのやうにからげる二人り扶持　柳鳥
ふとざほでとしまのかたるふるへ聲　東猴
ゆるくしなさんなと爪を取あげる　酔臥
のろわずに穴二つほるいそがしさ　蔦夫
あうんのはまぐり十三十二なり　同
越中は越前さまの衣服なり　射夕
はな息に笛の音のする持參金　糸道
信心の門には惡魔こんと啼き　志夕

三條の小鍛冶稀代の手間を入れ　有幸
合槌の音こん〳〵と世にひゞき　井蛙
葛の葉は折々に焚く小豆飯　三枝
拍子よくどんともふけた太鼓うり　柳雨
義太夫が土佐に變じて御慶也　亦樂
翁神ゆゑに豆腐がおすき也　可笑
牛の角文字を午の日から覺え　春駒
ざつとした繪馬は狐に唐の芋　雨夕
洗髪ほどにたばねて稲を干し　柳鳥
節分に骨我では鬼が豆をまき　二町
鬼の王でもかけ取にせめられる　夢中
師匠さま集り勢のそなへ也　一徳
をしへるに師匠子供におぶつさり　〆子
昨晩のお笑艸をかゆにたき　錦鳥
本藏くるしさ打忘れいゝ春だ　十丈
さる程にせう〳〵たべて赤く成り　針人
目かどのつよさお講に着た小袖だの　枡水
けだし天より生民を下女が腹　亦樂
人間の御難は土のだんごなり　柳鳥
着ごろしになるぶちころされのこり　矢正

年玉のくらがへこりに乘つて行き　五町
木刀で計りたゝかふ有がたさ　夢中
貧學のあかり吹消す南風　集馬
やれひくな／＼と梅の凧を取り　門柳
馬の足阿字に聞たで尊とがり　如雀
須磨の月見せ給ふのが御しかり　兎柳
業平を追ふのに水も逃るなり　錦鳥

志丸評

かみくだく慈悲萬民の齒にこたへ　マイタ
其國の主じ御家の要石　山猿
君が世は地もゆるがせぬ要石　針人
一聲に鶴も小松の御場初め　市風
御座船の小べりに藤の花が咲　花道
國境百足四疋の春を渡り　山猿
一筋の鑓でお家を百にわけ　蛇内
衞士の火で下座見の見るは春と冬　青露
澤山な米で大きなすゞめなり　雨夕
ふりこんで來るは奴な娘也　卜丸
鶴の御場所に龜有はきついい事　芋洗
奉札の調合をして下座見出し　カテウ

我儘な鶴は畠のものがたり　有幸
二か村の作はあたると直が上り　桃林
立のまゝたらひの屎をにらみ付　芋洗
目かくしの人形手の鳴方へうれ　三朝
三十日に三日せはしない御ゑん日　二町
はへば立てたてばあゆめの親ごゝろ　針人
梅くつは竹に雀は三幅對　市東
兵者の交りかたは斗りなり　松山
御やしきも武鑑も間口廣く成　蛇内
濱のまさごだと禪よんで居る　マイタ
鹿の住みさうな御山に鳥住み　東鳥
入聟は年中天野三郎兵衞　瓦合
施主の笠小家へ落るとめでたがり　亦樂
引かける氣でざらに出す釘の折れ　井蛙
衣うつ酒へ調布を割てうり　猿松
やつたらに師の影をふむ鞠の弟子　八重喜
鑓の柄を切つて奴は石に成り　加丈
折々は立臼もする下女がいろ　雨旦
見とうしに居るのに汐干あんじさせ　志夕
せきこんで下女口上を咽へつめ　馬猿

新宿で御張御符の才覺し　猿松
七りんへ武運つたなき鑄鍔也　矢正
百人にりんびやうの藥一人り有り　五友
咳の願御茶湯程に井戸へかけ　加丈
たいこ持仲之町での下座見也　一徳
たまさかに淺草見附三つうち　カテウ
麥飯は賢人そばは御寺なり　二町
植木にも草芽が出ると屎くはせ　市風
とゞくだけかりるはやはり手長島　三枝
お内義へ口傳がいしやの極意也　山猿
苧をかけた女房にきく水かげん　猿松
にごらぬとにごる加の字は御大祿　青露

狐聲評

歌の大閤難波津に淺香山　柳雨
八つ橋で世を渡つてるひんのよさ　雨夕
い丶仕舞手形の戻る年の關　木賀
和らかな風でから風よりひどし　カテウ
十哲の中かで一哲たんりよ也　杯舟
母の臍持て雷門をぬけ　同
たましひをきたいて元の鞘へ入れ　柳鳥

かねが出來しゆもくは京へ取にやり　里鶴
室でなくだまされて咲床の花　蔦夫
下の戸で上の戸ふさぐ花の山　カテウ
梅干に成るは間のない梅の花　市風
忠臣は疊の下たで死ぬ氣也　如雀
鳴止んで折目をたゞむ普門品　〆子
花にうきは嵐かインニヤ生醉　蔦夫
江戸味噌といふは大名小路也　井蛙
から〳〵と笑ひ日本はいがもねへ　青露
初花が咲けばほどなくみのる也　針人
藥禮は取よりはやく脉を見る　志水
座數窄友達共の齒が寒し　一徳
土へんと鹽やを言つてみそを付　瓦合
錦着て古郷へ歸る四日なり　雨旦
矢人迄不仁にならぬ御代の德　亦樂
大名のはたしになるも浮世也　同
ゆで玉子々々と八聲ほどによび　香貞
秀郷は帶をとかれし三上山　岩猿
くちびるのとび色になる御祐筆　里梅
雷も諸國へひゞく名所なり　桃林

江戸の馬田舍芝居で人に成り　山柳
聟ゑらむ内雜兵の手にかゝり　其誠
袖をとめほどなく帶のさたに成　桑虫
ゆうれいになれば平家も白い也　如雀
花はほめ葉はじやまにする明り窓　志夕
おつ取刀でだゝを言ふ五月雨　其笠
兄弟で引つぱり凧のみやげ也　里鶴
六躰で七日ある日をくんじゆさせ　鱗
とうふなら一箱だけの音羽町　集鳥
世事の無いやつだとなぐる毛延壽　柳雨
車井の雫とつちりとんと落ち　東來
仲の手が高瀬の窓へ二本出る　木賀
足ずりは鬼界手釣はつくだ島　春駒
我きせるいたゝいて呑氣ばらしさ　旡合
はつといふ跡でちやわんがぴんといひ　其誠
京傳と左傳のならぶ古本や　柳雨
夜着の脊へうまい身はゝを一との入れ　東鳥
仲條の引札おろし直段也　有幸
御預けの内から和田は足をつけ　糸道
ほそい手で又帆柱を引おこし　其誠

三國で割られた跡を和尚わり　馬猿
ちく生め石になつても又わられ　雪成
桐の木ををひきわる頃に娘われ　五友
新造の色客いろにほへと也　青露
瀬戸物もわれる前には聲がはり　矢正

亭々評

御扇子の骨ほどに折るかきつばた　亦樂
駒下駄で越すは御庭の箱根山　三枝
澤山な米で大きなすゞめなり　雨夕
其方は仕合ものとしんせられ　糸道
星計り糸瓜のやうな月見なり　柳鳥
れいの字のはんてんを着た肴賣　如雀
神國のしるしは不二に表裏なし　品能
二代目がふるとたしかに車切り　錦鳥
晝の鶴とう〳〵嫁をつゝき出し　猿松
かしましく成ると女郎の手がら也　八重喜
病氣見舞に奴のしりをやり　蔦夫
九軒目の隣でやつと買て來る　〆子
山吹をわけ〳〵蛙一つとり　三枝
塗桶にわたをかぶせる御物入　里梅

傘と氷の間が鎧なり　桑虫
首と尾のあるのは松も面白し　亦樂
もつたいないがかゝさんはだましよい　木賀
蝶二つ雪とあられの中を舞ひ　雨旦
田へ行も橋へ行のもおなじ琴　里鶴
心安伊達が高尾はきらひ也　マイタ
櫻に腕をこき交て下戸こまり　門柳
口をすくして青梅をたべやんな　志夕
つれ〲草の實だといふ白うるり　如雀
二月下旬公家の流が見せを出し　里鶴
一夜明け夫婦にこ〱四十六　山柳
こう〱にいわくは臼でついたあと　虻内
居るはごうはら歸るのもねからそん　八重キ
天然自然聟入にこぬか雨　里鶴
でもござろふかのと嫁の脉を見る　市東
母の雛めでたい計りとりゐなり　死合
よくつらを見い〱いせや汁をすひ　松山
べつかうの光り金毛九尾なり　虻内
白酒のつもりは鼻の先きへつけ　〆子

雨旦評

君恩に萬民のふむ厚氷　木賀
川數に五つよけいの橋をかけ　猿松
敷島の道草内の窓で喰ひ　樂輔
釣鐘は啌八百はほんの濡れ　如雀
おないどしいつでも若い月と不二　三枝
篝火の元へ源氏の魚が寄り　香貞
四日には夫婦別有る内裏雛　有幸
桐の無い鳳凰天々舞て居る　杯舟
溜息が異見の膝へつきあたり　馬猿
雨やどり他生の縁をかりてかけ　古鳥
十三は啼音三筋は差味也　猿松
腕をつゝこむは錦の袋也　如雀
都鳥事問ふ間なし歸京なり　虻内
墨染の袖を白猫すきとをり　古鳥
ものいはぬ主に一夜の宿をかり　木賀
腰帯で袖へふんごむうらゝかさ　カテウ
サハいへど酒やも藏をたてかねる　溪住
不二びたひ雪にうづまる耻しさ　里梅
廿八から草と木といつしよなり　期程
ながいきをすれば短い杖に成　若松

幟でも雛でも手間は三百工　木葉
母おやの相づちおやぢきたへてる　志水
延壽齋覺明どれも太夫坊　虻内
やはらかな嫁は姑の歯がたゝず　其笠
さいかちにとんぼのほれるつゝ井筒　志夕
かはぬ氣で見りや正燈寺紅葉也　雨夕
御きんこう殿中で足一本ふへ　樂輔
春は嫁秋はしうとのきうじ也　期程
玄翁の後はいさづちばかりでき　針人
升の外とからし三合程こぼれ　里松
先きぶれに鐵棒をひく鳶の魚　溪住
南から北は十町ちかいなり　薫風
水ざうすいといふ腹へ燒た餅　キテイ
茶のみ友だちに藥鑵はからに成　東猿
やきつぎや南無三寶の惠み也　其笠
はぐき計りでしんざうにくらひこみ　瓦合
耳を取りはなをにつかふ竹のかは　カテウ
二階から遣り人おろしが見せへ吹　マイタ
今の世もさいご小便する妲妃　矢正
ねんぐわん成就不自由な新世帯　山猴

うらゝかさしきりに錢がほしく成　留人
六づかしい樂屋すそまく引返し　志水
ふんどしはちりめん義理はかきどうし　カテウ
御わぼくの夜が茶臼山御陣也　樂輔

狐聲評

切り張りに禪尼天下の矩をとき　猿松
御みやげの水はどびんの御茶に合　井蛙
玉川で諸國の人をさらし上げ　一德
肴やに鯛より目だつ二三本　錦鳥
鑄直して又大佛の御さいせん　志丸
鯱の目貫見に行くさや廻り　有幸
嫁姑子へんの糸で中をぬひ　猿松
けいせいの小指でうごく石のふた　其誠
七騎落迄はげほふの下り坂　木賀
ゆびをきるからは九ほんの淨土也　市風
半分はのこす智略の十二文　雨夕
卯の花も小櫻とも着る御祭禮　市風
卯の花が咲たで耳のあかを取り　三朝
此梅がそだとこわだゝ指をさし　花道
先箱は雀道具は大鳥毛　古鳥

鳳鳥いたらず先づいづるたばこ盆　亦樂
秦の閻魯國の壁であかるくし　猿松
我庵はかり穗の庵の八軒目　花道
お妾をシテおく樣はワキに成り　東猴
かるい身がおも荷に成つて玉の輿　若松
薄墨の竹を障子へ月が書き　瓦合
入道のよだれ源氏のこやし也　杯舟
哄や姫おへその下たで雷が鳴り　五友
うらだなのかゝあ子ぐるみ帶を〆　鱗
春は嫁秋は姑のきうじ也　期程
大一座けふの寺のと口ばしり　市風
十日づゝ春夏へまたぐ花壇なり　同
ぼたん花がちると忠兵衞二分のこり　同
師匠さま子をかきわけて客を上げ　里梅
名の高い傘一か寺の坊主もち　古鳥
餅になる草がへんじて赤だんご　花道
風の神せなかをながす身ぶり也　志丸
御門番おもてもうらも雲のうへ　亦樂
ほうろくも二三荷いれる檀のうら　雨旦
神は牛佛は馬のかしら也　猿松

雨の日は下たからてらすこんや町　柳鳥
初がつほおやぢやつぱりもらつた氣　マイタ
こがなしを御へいかつぎの妾たち　樂輔
あしたくふみやげの飴に左文字　春駒
壹分でもゆがまぬ物で曲りがね　振袖
あらめからおやぢいそ〳〵してわたり　市風
つゑをつくくせにのゝ字は子を孕み　三枝
十月きめにのゝ子のはらの子は生れ　古鳥
花の山酒呑童子の遊さん場所　射夕
きよらかなかわらけにたつ白羽の矢　古鳥
孝行でほるとほらるゝ釜があり　針人
いゝかまはへつゝい河岸の近所也　萬舞
組うちを具足櫃から出して見せ　加丈
こんれいの晩は種まき三番叟　桃林

川柳評

御到着水かさ增るたつの口　錦鳥
うごくはず孔明羽子で下知をする　マイタ
賴政に駕籠は無きやと御たづね　衿肩
宇治々々として御茶壺に叱れる　其流
傘かしてふりこめられる一人り者　山猿

五六宗見せにより合大佛師　畔道
鶏を子路おんのけてうんとしよひ　樂輔
だらすけをねだられている四天王　井蛙
牛町をのろ〳〵ゆくは本の醫者　亦樂
かぢけてる隠居は内のやぐらばん　一德
朝がへり天高けれど脊く〻まる　マイタ
口しよくのやうにたどんは消のこり　東來
うすくても一生きれぬ欲の皮　岩猿
三つぶとん武道は終に勝利得ず　矢正
赤くして又黒くするつなぎ馬　井蛙
碁がたきは自身番からはたし狀　市風
ゆうれいもきえかねているほめ言葉　岩猿
片瀬でも錢でかはれぬ初がつほ　柳鳥
ずうる〳〵引いて別れる三輪の神　萬舞
乳が一つ赤子にたらずうつたへる　木賀
關取をかつほのやうにおして見る　マイタ
赤くして後家は一と花やる氣也　有扇
井の頭尻尾の長さ四里四方　亦樂
押入でかたり人計りないている　桃林
今迄の事は仲條水にする　有幸

つひに見ぬもの元年のこよみ也　カテウ
こねられて嫁あいさつを餅につき　山猿
案のじやう内儀妹と不和に成り　亦樂
御留守ならあのかげぼしに御意得たし　加丈
十兵ゑが馬をのんだは本能寺　瓦合
土手の床あたまかくして尻を出し　矢正
やす土藏土こね迄も足をぬき　古鳥
やはか三分におとるべき十匁　振袖
匡衡にとなりの夫婦度々見られ　瓦合
やかれるで女房くすぼりかへつてる　同
間のわるさ御物見下でくそをふみ　八重喜
あどけ有る白歯ていしゆをすごしてる　木賀
世間にもま〻有る事と養母いひ　柳雨
にくいやつ嫌すくもだと思ひおり　東輔

俳風柳多留四十五篇　終

俳風柳多留四十六篇

いや榮ふ大江戸の、其江戸川にそふて、流たえせぬこいし川翁、月々わいだめの前句はいづみをなし、言ふ人の秀吟は盡せずして、しかももとの句々にあらず、その句々を筆のしがらみせきとめて、かの蜘手なす四十八つの瀬ならぬ、四十六つの篇となして、生茂れる柳の糸口を、いとぶきやうに菅裏恐入てむすぶ、

文化五辰仲夏

川柳風吉例角力會

川柳風　文日堂評

上の部

御領分春の鼓を秋しらべ　竹子
蔓ものをこひで櫻や菊を植る　木賀
鶯の聲に小松の手がゆるみ　竹子
六十の人には梅も弟なり　牛賀
富士筑波虹天秤に引かける　呑能
我が朝は木のはら呉國魚の腹　竹子

上の部

貝殼が鳴くと道風にらみつけ　志丸
霞の幕明き口上は蛙なり　二蝶
浮草のよふに波間の都鳥　呑能
いつみても蘆生が顔はもえぎなり　竹子
鬮取が踏はづしたでわれるよふ　森烏
帷子を着て北國の雪見なり　牛賀
雜司が谷歸りいそげばまわるなり　儘成
龍虎の勢ひ月花の敵き役　森烏

中の部

父母兄を三筋の糸ですごす孝　呑能
錢金に羽ねのないのはいゝ暮し　森烏
待わびる耳に田螺の聲ばかり　千鳥
商人の三人まじるたから船　豆人
猪牙で風召すなは美しい客氣　森烏
八丁の寒さ五丁であつたまり　柳雫
嫁のあら事鬼灯の首をぬき　集馬
おかしさは按摩音羽の瀧を詠み　志丸

中の部

下駄かたし持て日待の禮がてら　散穀
里からの夜食のこらずくへる物　木賀
古渡りの官女も果は石となり　里遊
姉さんと坊が居るのと水かゝみ　同
はらいつぱいの我儘をめかけする　竹子
御妾のぞんざい御國までも知れ　芋洸
仲人は千箱の玉をぐいと呑み　竹子
謠までうそで仲人おつゝける　留人

同

狩人の山を見る日はあぶれなり　卜夕
精靈の疊を貰ふ源三位　同
產籠の返禮かるい肴なり　柳雨
ざいおつ取て女房のたゝきばき　牛賀
三筋すて只一筋に世帯じみ　志丸
そうめんの糞かげん壁がぞんじ候　同
嫁入を馬づけにする村の曠れ　梅里
座がしらへおこし一盃村の後家　千之

前の部

品川は御心見ほど出しておき　里遊

原は前を賣り町は尻をうり　呑能
こわ色でつばなをねぎる野掛道　竹子
おつと糸びん吸筒はうけとらず　竹二
唐士のきぬ〴〵こはせかけてやり　牛賀
深林人知らず竹の子を盗み　竹子
猫の目を時計に遣ふ村師匠　同
切落し理屈も無理も根こぎなり　燕子

同

錢賣とさし賣きつい違ひなり　和里
暑い事酒の相手にやつこ出る　柳雨
我腕をいたゝくよふに伸をする　里遊
むごい事娘をよしの原へすて　和里
北國の鳳凰元はとんびの子　同
ほれた眞似上手にするではやるなり　集馬
百ざしきそしておいらはどこへやる　竹子
きんつばへ九日晦日の指をおし　水守

前の部

氣にほれんしたは山吹色だらふ　梅里
櫻より蓮の花見のおもしろさ　和里
かつぱひやろは化ものゝ三番叟　猿山

運のいゝ嫁牡丹餅でたゝかれる　牛賀
四斗樽の底をぶんぬくけちな井戸　豆人
醫者の名がつくと茄子も安くされ　竹子
けつたるいはずとつるべる吉田町　留人
播磨者相撲女とひとつ鍋　猿山
間男が留守にはじめる付祭り　豆人
頼政はあやめ隼太はかきつばた　木賀
間だには腕人形を弓削遣ひ　美德
いそいではほつても出來ぬ提燈屋　若蝶
以上

二會目

川柳風　文日堂評

つよい國二見の石も首引き　卜夕
松下よりは木の下がすさまじい　蛙聲
六人の望で琵琶を御彈じ　谷水
春は花冬は實のなる紫宸殿　丸龍
おし鳥の橋の懸たい天の川　柳雫
御虫干和歌と達磨の物語　竹子
孝靈の夜なべ大きな仕事なり　志丸

三つまたで二つ一つの御氣色　森鳥
詩學にて來れば歌學でぼつ歸し　竹子
豐臣の螢紅葉の中で鳴き　串竹
主人相知らず門番國家老　里遊
春過て夏氣にちよつと御所の客　煙幸
切わつて見れば名香寺號なり　志丸
孝と義を末世にのこす蝶千鳥　友牛
げつそりと夏やせをする咲や姫　蛙聲
春のすを假りて夏のすうみ落し　森鳥
八重ざくら鹿の晝寢の上へちり　竹子
いなづまは山を見せたりかくしたり　二蝶
いちどきに生れて御所の車力なり　梅里
千金の紅葉を伊達なずんど切　丸蝶
一寸の草にも五分の花がさき　柳雫
ごうせいなきちんで泊る佐野の雪　竹子
時にはんれい鰹はいくらするな　同
朱で書たきの字飛でく秋の空　柳雨
雨風で行平須磨を立かねる　花夕
とぎ立た月には虫がさびて鳴き　卜夕
椽がはへ一と谷こえるすゞみ臺　柳雨

猪のしゝのねがえりにちる萩の露　二蝶
世の中にかねのなる木はしゆもくなり　針人
來る人が日和をほめる旅見舞　留人
敷しまの流れ汲こむ家内喜樽　二蝶
豆銀を池へうつちやる蓮の風　猿山
木曾殿はいゝ陣だいこ持ち給ひ　友牛
よし原の方へ柳の葉を飛ばし　和里
とんだ事敵地の繪圖を繋引手　谷水
どぶ六をてつぽう拳で庄屋呑　志丸
にが桃の坊主にされるあつい事　柳雨
手の多いとしま海老やの御職なり　丸龍
雨だれに猪首ばかりはせわがなし　志丸
文字ずりはいやでざんすと島を着る　同
われおちにきと語るなと後家は落　賎丸
あつい事たんすの角どに赤とんぼ　集馬
虫籠で西瓜のたねが鳴て居る　花蝶
ざくろの火消て程なくぽつちぽち　柳雨
此里へ流れて來たは水の年　猿山
耻しい耳へ謠のきれつぱし　柳雨
おつな物やくわんの瘤は内へ出來　同

拍子木で松原になるきつい事　丸龍
あげ椽の足は逆にかしこまり　燕子
町人も鑓で振込む山がへり　豆人
天德寺最明寺へはひしがくし　猿山
いばらきも足だとあゝは逃られず　同
あんどんで眞赤なうそを賣て居る　志丸
花の宵下女こんにやくへよりをかけ　散売
居ねむつて天狗は鼻を摺こはし　眉長
夕立にふんぞりかへる瓜のかわ　柳雨
目をこすり〳〵薪屋に下女小言　若蝶
手いらずのばゝアとかはる花の色　散売
持參金虎のふんどしせぬばかり　都柳
前だれを肩衣にして下女は髮　和里
股引で餅をつく蚊があばれ込み　牛賀
さがみやの亭主はごほり〳〵咳　谷水
すきな下女竹光公のおもひもの　蛙聲
水性はさがみ金性はりま鍋　集馬
伯父坊主流し目でみる洗ひ髮　谷水
けちなやつ廿四文の事でにげ　里遊
開帳をうらから湯番おがんでる　同

笑ひなんすから猶出きぬと新造　竹子

三會目

川柳風　文日堂評

武藏野を車にのせて御上覽　都柳
身が大事さやをまはりて御參宮　喜丈
源は名頭らまでも上座なり　吹唐
耳の穴すき鍬でほる日本勢　和里
手のひらで巴を落す妙な事　春駒
魚篇のなひ鯛を釣るすさまじさ　二蝶
三鳥の傳に一と間は閑子鳥　春駒
沓音がすると僧正うなり出し　若蝶
お蝶お花をらりにする國家老　散売
紅ゐは夫としら波妻が詠み　花夕
繪の富士も元は硯の海の水　儘成
何が喰ひますと四馬から下りて聞　春駒
藪でばか筒音のするおだやかさ　和里
五色には二色たらぬ不動の目　都柳
笑ふかと立聞をする福の神　牛賀
こん／＼を串ざしにする王子道　蛙聲

殺生としつて和尚は石を割り　里遊
秋の雪更て衣桁に消え殘り　森烏
きねやとはつくのではなしひくのなり　喜丈
客帳はけだし女郎の秘書にして　舟駕
よく結へばわるくいわるゝ後家の髮　柳雫
人間も上み方仕入れ吳服店　春駒
灯籠が消えて俄にさわぐなり　森烏
なけなしな鼻へ持參をぶら下る　蛙聲
女松やら今宵の月のさわりなり　豆人
眞間へは何十里有りやすと女房　二蝶
月二つ息子はやみが雲になり　牛賀
笛太鼓かねでまい子を呼子鳥　久賀
ありんすで嫁きなんした里がしれ　同
ふき殼の煙りで狸さとられる　久世成
擂鉢がじだんだをふむ蕨のり　拔唐
乳と腹玉と達磨のかくし所　和里
富澤へ流れて落る人の皮　豆人
身になるは歸した跡の一と寢入り　散売
いちやつくとやみと巴は首をぬく　蛙聲
暑い事質屋野陣を張て居る　美德

晝過の太鼓を和田は夜る叩き　呑能
ひがわるひから婚禮を七日延べ　春駒
編み笠ですりこ木の來るせわしなさ　久世成
たらちめの臍はおりふしゑぐられる　牛賀
お妾の子はてい〳〵が上手なり　蛙聲
惡い夢ばかくわせると獏小言　猿山
きんかんが中立をして二子山　儘成
居候女房のくせをよく覺え　吹唐
十二三おしやらく豆に花が咲き　舟駕
それ見たか夜鷹でころり鼻が落　扇橋
何神か知らず鳥居がたれさせず　猿山
小狸は下座敷ほどにおつぴろげ　舟駕
川越はきん玉だこが衿へ出來　同
元と木にまさるうらきなし根迄入れ　牛賀

四會目

川柳風　文日堂評

夜の雨琴の雫が琵琶へ落ち　散売
名の寶いたゞく笠にぬれぬ簑　久賀
元祿に建たる藏は朽ぬなり　丸龍

神樂坂上に岩戸は面白し　蛙聲
なで角く寢物語りの新錢座　扇橋
四位のみを三位に仕たは歌の德　花夕
せつさたくまの功成て太夫職　里遊
お妾も相馬の内裏部やへたて　蛙聲
侫は下總公は武藏なり　春駒
御茶びんの後から藥鑵馬に乘　森鳥
八景を六つにたゝむ屏風の繪　虎人
關白を曾呂利〳〵と口車　里遊
喹よりも八町多い江戸の町　柳雫
ぎしやばつて師の坊妻戸こがされる　若蝶
地の恩を木は一葉づゝなし崩し　儘成
おまんまに鯉くらわせる興福寺　牛賀
どけへいきなさると女房けどつたり　和里
赤いわしはくわせ蛸は知つて喰ひ　二蝶
孔明をもふ二三册生かしたい　吹唐
夕立にすました顏の石地藏　織好
六波羅の佛で嵯峨に尼が出來　花夕
一目くのまけ取り返す權五郎　散売
八朔の雪見もころぶ所まで　丸龍

壹雨で迷子の內をさがし出し　梅里
長き夜の口舌七福神は聞き　友牛
手をかりて足をおさへるだゝが灸　好女
彌太郎が娘突出しからはやり　賤丸
百人に有明たつた四つなり　和里
朝比奈はどふか鰹に醉たよふ　猿山
むすんだり解たり風の川柳　千鳥
白くなり赤くなる夜の耻しさ　二蝶
もふ一つ水の惡玉出來る所　和里
出這入に同士うちをする繩簾　豆人
劍術の奥の手さんり灸すへろ　都柳
幕明きの口上蚊屋へむぐるよふ　青柳
村日待ちやくわんの蓋をあすたづね　散売
寐つ起つもへぎの蚊屋に淺黃裏　和里
氣のきいた化物足を洗つてる　扇橋
けちな繪師竹に猫など書て居る　串竹
寒念佛いらねへ聲がよふく立ち　梅里
しつたかはくそをくらへの里なまり　賤丸
韋駄天と虎と光陰はりま鍋　久世成
四十九の嫁高盛をぺろり喰ひ　和里

新世帶今日休みかのへ申　里遊
雨風の味ぢまでも知る中納言　散売
コウ息子さん寄つていきなコウ〳〵　猿山
じゝむさい手で茶をくれる新世帶　牛賀
かんにんの袋は臍が緒締なり　同
蛤にぱつかりさせる十三夜　千鳥

五會目

川柳風　文日堂評

買色一題

おさまつた床へ鳳凰來義する　菅裏
田毎ほど身仕舞部やに照る鏡　玉章
御下駄はふられ傘はもてるなり　萬二
傾城はほこらに餘る願をかけ　竹子
三尊は西より北がありがたし　和里
ほうべんに江口の客はかけられる　萬二
鳳凰になるのは里の小夜千鳥　森鳥
月の文長さがおよそ十五ひろ　是樂
よしなにはくみわけたれど金がなし　柳雨
みどりから一さんにのす太夫職　雨江

ふりつけざお高の方といわりふに　集馬
傘も下駄も三浦屋はでな事　森鳥
けいせゐを根太つ切り買ふ材木屋　美德
玉菊とたぞやあかるく名が殘り　玉章
たぞや誰ぞとくるわ中大さわぎ　美德
夜櫻の詫に七重を八重におり　是樂
新造の船は屛風が浦で漕ぎ　森鳥
居つゞけがちらつきんすと禿言ひ　丸龍
むさしやの客へ最中の月を出し　梅鳥
かたむくまでの月を見るどら息子　森鳥
素見物買へばあれだと指をさし　里松
ふりそでをぐつとすくつて新造逃　マイタ
細見の目貫き一佛一祉なり　丸龍
くちびるが赤いばかりの紋日なり　有幸
新造にむかし噺の根をおされ　森鳥
山よりも櫻は原と息子言ひ　花夕
雪ぐ緣あるので垢のない紋日　橫好
客人でざんすと香の札を入れ　巾布
燈籠を見に行き風をしよつて來る　美德
有し昔にかはらぬは里のうそ　竹子

八月二日よし原の雪こかし　二蝶
八朔の雪解は八月目に流れ　菅裏
あすから花が咲んすと文がくる　マイタ
名代は雀の外で鶴を折り　木賀
居續は文で下からなぶられる　志夕
細見のすみを新造引ッつめり　美德
ちよつきりと切て門前拂ひなり　和慶
吉原へ行ふと猪牙はうなるなり　儘成
細見を見てこいつだと女房言ひ　柳雫
駒下駄で禿のいさむ花の頃　玉章
我も淋しいか名代どつか行き　靑露
上あごへ舌をからんでさがりいす　和恭
もつとよくされる氣で居る三會目　品能
きつとでざんすウン忘れなんすなウン　蔦夫
新造の客へ山屋の平らをつけ　玉章
岡づけも船でまわすも衣紋坂　柳雫
南んは橫小粒は竪に並んでる　雨江
かつもつてふる氣ではなし寢る氣なり　吹唐
番頭は子に行き寅に歸るなり　マイタ
はんせうさ歳々花もかけ流し　志丸

實にならぬ客は花から知れるなり　有幸
二朱だアな見るなと素見氣の高さ　蛙聲
土手で逢ひ今は何をかつゝむべき　柳雫
居ながらの花見は外に仲の町　儘成
おいらんは山を見かけた灸をすへ　〆子
安い女郎は知らないと提灯屋　マイタ
文に曰くけふしせひ〳〵格子まで　木賀
玉づさと女郎の胸はうらおもて　女文魚
いくらやつても返禮はたばこいれ　留人
客は顔にほれ女郎は衿にほれ　志丸
番新はむな算用が上手なり　横好
しら紙の謎花と解くたいこ持　蛙聲
股引と羽おりで籠の鳥は迯　里遊
新造をたいことふ〳〵いじりけし　散壳
出して來やアイ〳〵と禿買ひに行　雨江
ひや酒の肴に禿しかられる　柳雨
吉原はいづくも同じ秋でなし　竹子
御茶ひきもせんじ出さるゝ惣仕廻ひ　散壳
けいせいに鼻をあかせるうそつ月　和慶
とんだ所紙一まいが壹分なり　吹唐

もてた晩あさぎゆめみし心地なり　和里
鼻をかむのだにたいこは笑ひかけ　魚角
化るはづ玉屋の内のおしよくなり　蛙聲
きんき書畫及び四分利くらからず　丸龍
起りなんしたと名代かけて來る　シクト
西河岸はおさらばを二度する所　玉章
足元とは四つ手衿元たいこ持ち　散壳
品川を的に新田の矢がそれる　森鳥
傾城の鐵漿七文が買ひ初め　志丸
馬道が駕道に成るはんじやうさ　留人
手が切れなひのは指を切つたやつ　集馬
どぎまぎ〳〵してとんだやつを揚げ　マイタ
手ぬぐひをもちやそびにする安初會　集馬
一ち分を傾城たてゝくれぬなり　マイタ
さしがねを預けてあがる根津の客　和恭
情なしなやつは簞笥の無い女郎　青露
唐ことを言つて丸山しやれるなり　志夕
極樂の遊びが過て火の車　志丸
裾つきが切れて仕替るうらやぐら　猿山
金次第すきな音の出る撞木町　志丸

手を蓋に仕て居てウ丶と言なんし　竹子
毛もはへぬ海鹿を二朱に買かぶり　雪平
さあちくとそべりなさろと輕井澤　志夕
わたくしに度々させて河岸へ落　蔦夫
四郎兵衞が關でかげまは引んまくり　豆人
聟は惡ひがそれのみではやるなり　散売
寢入つての一義は新造おもほへず　横好
たび〳〵の御めんなんしに仕こじれる　集馬
おちよ船苫を敷寢のかぢまくら　丸龍
行水の傾城を買ふ間のわるさ　玉章
草まくら竹光けつへひんまわし　〆子
鐵炮で二百置きなは二つだま　吹唐
よし原へ屁をひりに行くきつい事　品能
賣り物は毛ばをむしつてよく洗ひ　吹唐

六會目

川柳風　文日堂評

化物一題

繁昌さ化もの水とともに迯げ　木賀
化けやかた大入道が上座なり　吹唐
ばけ物の親玉牙の白い猿　千鶴
土蜘は化て四天へ巣をかける　串竹
相槌が來ると宗近ぞつとする　志丸
猫またの踊にやんにやとほめるなり　集馬
化ものゝ鎮守は黑い狐なり　森鳥
化ものでいつち目だつは雪女　吹唐
ろくろ首しのびがへしで咽をつき　芋洗
よくばつたばゝあ化物うんとしよひ　志夕
三つ目をよせて入道にらみつけ　同
婆々にばけうまくくわせる狸汁　辻木
小半町とうふ子僧につけられる　豆人
けさがけになつて地藏の名が高し　和恭
何にしろけうな茶釜と大さわぎ　都柳
すりばちの化物うぬがうぬをすり　青波
幽靈も手持ぶさたな枯柳　雨折
御隱居に化ても時に目が替り　志丸
腹つゝみそばで二たまた踊るなり　雨江
見た者はないががんばれ時鳥　針人
雪隱へ出たはへま虫夜入道　千鶴
醉覺に河童は皿の水をのみ　狐重

幽靈は御枕元に根津の番　可笑
九十筋頃から變化身ごしらへ　玉章
麥わらが化て蛇となる暑ひ事　散壳
猫を追ひながらはや桶おさへてる　卜夕
番町の古井戸で呼ぶ燒繼屋　和慶
垢なめの齒にはさまつた灸のふた　集馬
泰成は見出し保名は化かされる　如雀
寢ころんで立聞をするろくろ首　儘成
伯母といふ二字だけ心ゆるむ綱　谷水
化ものへ一寸まへの五寸釘　青露
狸と猫は化ものゝ藝者なり　一交
播州でぢゃいばゃあと松は化け　串竹
壁に耳聞て座頭は化て出る　五友
五位の鳥ゆへ地下人を化すなり　菅裏
化物の列つにして置く石地藏　芋洗
手ぬぐひをかぶつて猫は追出され　梅里
七丁の町に化もの住んで居る　五友
南國は山から化て海へ出る　賤丸
年玉に遣る化物にのしをつけ　竹子
美しい官女そとはが化け仕舞　志夕

人はすなはち天が下の化もの　森鳥
下總の猫は小判を嬉しがり　マイタ
實方のおんりやう鷹の餌食なり　玉章
千兩が化ものを買ふ紀伊國屋　有幸
ころされた袷さし身に化て出る　菅裏
樽ひろひ河童と思ふ夜の雨　志夕
横に來て狸を化すふる狐　芋洗
金平の夢に化物うなされる　賤丸
桶の化物神酒の口買て行　眉長
堀の内道に化ものならんでる　青柳
八つ下り黑い化物わアやわや　志丸
た薬粉やゝ鹽屋と化て付けねらひ　集馬
鬼門からとんだ化物息子呼び　芋洗
香箱の少指たちまち夜具と化　雪平
手拭のとかくなくなるいやな氣味　谷水
いゝ男初會に化てあがるなり　玉章
わん〱の皮にあたるは化の皮　久世成
美しく化るをもつて化粧の間　箕山
鐵扇でぶちのめされる化け鼠　芋洗
渡し場で鈴をころして武家と化　竹子

眞赤に化て四郎兵衞が闇をこへ　花夕
ぼうふりはいゝかと思ひ蚊と化る　都柳
化ものよりは馬鹿者がこわいなり　青柳
柳はら合羽と化る正一位　志丸
光陰の化もの嫁が姑なり　森鳥
年よりの化もの手塚組とめる　一交
清玄のこんぱく姫につきまとひ　一陶
化て來た醫者は上野か淺草か　梅里
神農を化物だとはむがなやつ　紀樂
正丑の時參會とばけ仲間　猿山
左次兵衞は四國を廻りて猿と化　醉臥
納豆うり腹ぶと餅と夜は化け　竹子
化ものを紺屋こわ〴〵しんし張　豆人
田舍者土手で化物しよわせられ　森鳥
行燈に目はなの有るは廻し部や　青露
火廻しに彥七といふ般若の子　柳雨
下女がはれ丑みつ頃に裏を付け　和恭
化物を產んで獵人金もふけ　谷水
ころされたやつ八月き目に化て出る　織好
野暮と化物とち狂ふ二十軒　可笑

親むじな鍛治屋へやると子を叱り　豆人
下女がはれ下着化物仕立なり　里松
內中が化物を着る御不勝手　青波
化そふな釜を芳町後家へ出し　如雀
下村で夜な〳〵化るけちなつら　杯舟
天狗の卑下は愚貧事などゝ言ひ　柳雨
きん玉の會ならこいと狸言ひ　扇橋
毛のぬけた鷹まんぢうに化て出る　芋洗
いゝ頓智まぐそを持て朝歸り　同
ふんどしが頭巾と化る柳はら　竹子
親狐保名に腎虛させるなよ　雪平
化物を一本づゝ消す物語り　竹子

七會目

川柳風　文日堂評

箱いりの御夫婦桃の花を待　魚川
せう〴〵な御身をにごす時の難　賤丸
氣のよふな多葉粉信玄きこし召　丸龍
釜の中柱がたつと松がとれ　古竹
さがしましたと仲國は馬を下り　和里

そのゝちは雨も折よくゆたかなり　森鳥
ずつと出た顔は三國一の美女　女鳥友
錢金を左右に彌陀の本願寺　丸龍
まゆ墨へ手をかざさせる時鳥　牛賀
四海流しづかにまわる四文錢　女登蝶
雪見客庵にせわしき一つ鍋　一松
傾城のうそ積みのせる口車　助樂
兩替屋鳥居は波の中に見え　和里
風車淺黃の頭巾あぶら虫　久世成
密談は火鉢へ顔をくべるよふ　散壳
きつとよと爪判を押す肩の先　鳥向
霜月は村から村へ入り替り　志夕
袖頭巾あつたら顔をきなか見せ　丸龍
金ならば酒だ〳〵と十三日　里遊
淺草の門番夏はいそがしい　扇橋
村酒屋軒へ天狗の巣をつるし　和里
すつぽんの骨をかぶつてたゝきやい　下手也
合羽箱ばかりよろこぶ俄雨　吹唐
衣やうすく片そぎの箱を抱き　散壳
五十兩しめたが最期鰒を喰ひ　梁主

いざよひは御用薄を引こぬき　久世成
羊のふわけ丸山の文が出る　志夕
橘のはやなり植木かとたわけ　森鳥
十代の太刀七代でまげるなり　猿山
鬼のくわくらんせうきさんで直り　猿子
岡場所の小ぢよく油で揚たよふ　志夕
切落し青い三か月ぶつゝける　志賀美
瀬戸物のよふに息子は聞たゞし　梁主
鴈が來て瘡の藥がよくうれる　煙幸
一朝のいかり擂鉢まつぷたつ　里遊
內職にかまけて下座を仕そこなひ　燕子
あいた口よしな〳〵と下女ひろげ　豆人
かの人で下女おしろいがたんと入り　助樂
つら〳〵おもん見るにきん玉はむだ　賤丸

八會目

川柳風　文日堂評

長者の萬燈はつ春と小春なり　木賀
浪の上あげごしで來て恩を謝し　女鳥友
琴の音の通ふ廣間で蕗の論　和恭

床の間の富士の裾野に福壽草　志夕
七種を足で踏せる御立身　猿子
からたちのそばにでつかい梅の花　久世成
高仰の文字は尊き御茶の水　一松
一酒を呑まば一詩を吐けと李白　森鳥
待女郎富士の高根の雪を取り　芋洗
耳の根へひとり來なよがしみ通り　同
居るも歸るも丸くなる松が岡　里遊
繪のよふに扇へ宇治の螢飛び　芋洗
似せは陸本手は船で泉岳寺　二蝶
彼岸中嫁の笑ひの本調子　里遊
粟飯で三箇の庄は海老で鯛　辻木
天に壹つ地にひとつ江戸の夏　和里
鳳凰も元とはと問へば旅鳥　蛙聲
鏡餅見れば取粉のうす化粧　猿山
幸村も消へてなくなる夏御陣　梁主
竹馬に乗りしはきのふけふの杖　一松
腹のいゝとんびこくふに高く舞　木賀
らうそくを二挺にらめるいゝ役者　柳雨
思ひ逢ふ闇になさけのくらまぎれ　里鶴

淺草の名代むらさきひわ茶なり　天作
寢所から獻立を言ふ病み上り　猿子
人だちの中に壹人は捨た親　散売
押合て目白の茶屋で見るわせ田　豆人
丸山のさわぎちやるめるなどを吹　志夕
どうともしいせうで直が出來るなり　ト夕
キの字屋の荒野に禿寄たかり　散売
岡場所の河東ヲヤ／＼ばからしい　森鳥
かわらけのよふに下馬先笠をなげ　賤丸
手まへ物お染敷居へ引て置き　散売
大たんさ生た島屋のおまん喰ひ　木賀
瀬戸助と五郎八茶のみ仲間なり　蛙聲
手を出しておあしいたゞく物貰ひ　煙幸
秋う一つの眞先がけは天の川　儘成
運は天にありぼた餅に惚られ　二蝶
鰒の世話して仲人はあつたまり　眉長
品川はいびつな月が大もの日　一陶
安見せは鐘馗のよふな酒を出し　和恭
山伏はとつこを呑で反吐をはき　吹唐
主人相しらず娘を調市しめ　紀樂

光陰の矢の根を祝ふ弓やはま　眉長

九會十會打込滿會兩評
　文日堂評

御煤竹濟で千年を待たせられ　木賀
千年を每とし京へ獻せられ　森鳥
人丸も菅家も人の目をあかせ　竹子
御愛樹の梅も自在に飛あるき　志夕
もろこしに無い夢を見て神酒を上　吹席
まつ白と紫一ち夜仕立なり　丸龍
繁昌さすゝきは二度の月ばかり　煙幸
異口同音に船おしむ花の宵　散売
鬼龍狄姫と妻との中に見え　琴我
陸路をも柴舟に召し御通ひ　木賀
取揚の飾をくゞる御年づよ　丸龍
十四日門の見えすく藪小路　森鳥
あをむひて讀むは昔の錢相場　豆人
馬道も人でふさがる市二日　同
松ではしのぎ松風で助けられ　玉章
有がたい追手のかゝるぬけ參り　久賀

飾りわら袴を取るが規式なり　丸龍
前九年年賦のよふに首を取り　同
千兩の色一と箱の水で出來　散売
尻の火を集て胸を明るくし　同
松風をくらつて司馬懿引返し　里遊
かりやうびん〳〵と組呼べと佛在世　和恭
迷ひ子の塚は名高き古跡なり　竹子
眞那板へ鯉の乘つてるいゝ天氣　久世成
鶴の凧龜屋の家根へ引つかゝり　豆人
鳳凰も大門まではつひて來る　串竹
藪つ蚊を追ひちらす手は十四本　梅里
蝶々の酒を露ほど吸てさし　酒好
來る年の笑ひ初は煤はらひ　女鳥友
客もはたらく草庵の手打蕎麥　木賀
鉢卷の場を女房は帶をしめ　黄峰
川魚に海から着せる寒い事　森鳥
秤目でおやまを揚るしわい所　蛙聲
腹の立つよふに氷つた戸は走り　丸龍
はな紙も書き出しになる花の里　鳥向
れんじから天文を見る安い客　舟駕

十三日生捕ましたなどゝしやれ　里遊
見世で書くかしくに眞のうまみなし　里鶴
たつた一聲北野でも小ぐらでも　木賀
くどかれる娘袂によりをかけ　散壳
むだなかね浮世の藝に三つすて　辻木
しんぼうのいゝ嫁やくわんかぶつてる　竹子
呑代ろがそりや又出たと十三日　若蝶
ゆうれいは皆俗名であらわれる　黄峰
うそばかりとは口篇に十のうら　里遊
石川へ千鳥飛ぶ夜のさわがしさ　茶口
しごきを解かせたよしかと髭をなで　銀杏
古井戸へ西瓜飛込む暑い事　ト夕
赤旗のおん靈海を横に這ひ　谷水
矢師の炭上手に組んで穴一つ　登蝶
ぶつかけがいゝと鶯塚づつと入り　谷水
手を出して梨子をいたゞく下戸肴　ト夕
おそなへをそつぱひやろに仕てやられ　豆人
拍子よくこまをはやめるちんこ切り　同
懸取りの引返し幕御慶なり　舟駕
人の來ぬ間に口べにを盗みとり　酒好

おい込でくると井戸綱壁にされ　竹子
駕かきの尻こんにやくのよふにふり　杉丁
吼る犬卒都婆を持て追つかける　谷水
鐵炮は命を的にうちくらひ　猿山
よし町の穴は湯島へぬけて居る　斜鳥
湯左衞門が出來て今日休みなり　和里
ざせん豆濁りを取ると小町なり　美德
井戸綱が家根にのたくる御不勝手　久世成
芳町で遊び廻した尻が來る　素連
やりくりに松やにを出す尉と姥　猿山
庫裏ばゞあ元とは二俵も踏んだやつ　散壳
子待ちより牛待をする長つぼね　和恭
惣割に仕て出す下女がおろし代　木賀
下女出合紙は上田か淺草歟　舟駕
そのあした見れば炭部や屎だらけ　蛙聲
折ふしは毛も引かせるで射手がまし　里遊
神樂堂ねれつゝ〱と亭主打ち　和恭
毛をわけてづゝと押込長かもじ　一陶
村持參しかも大きな芋ばたけ　丸龍

川柳評

つかの間は暑さ忘るゝ御獻上　礫川
小國なれど日りんの御膝本　森鳥
眞中はまだうら若き御容顔　礫川
花の頃風に色づくさがよし野　辻木
紫宸殿なむ八幡と引しぼり　竹子
門松は雪より年の積る所　猿子
小松ではもりのしげらぬはづの事　礫川
こはけしからぬ御肥滿と國家老　同
しわい國だが太々とした料理　和里
すみやかに御腹召されと引き出し　礫川
天草でその働きの甲斐々々し　和恭
川魚に海から着せる寒い事　森鳥
身を伊達にせぬのがけつく名が高し　賤丸
せんたくに嫁長刀の身ごしらへ　志夕
此たびは父もとりあへず母の詫び　枝成
すめる物はのぼつて神鳴と成　礫川
朝歸り番頭烏雀内で鬧き　玉章
昨日は青樓今日は座敷牢　礫川
よく〱の事辨慶も珠數を出し　梁主
國家老諸事が平内左衛門なり　牛賀

越後者一つ眼の首を取り　串竹
紺屋てうあさつて迄とのたまわく　リユウ
大森へ海苔のなる木を植て置き　串竹
晦日にも息子最中の月を見る　舟駕
裸身を女に見せぬいゝ男　玉章
まがきまで是非參内と綸旨來る　雪平
源左衛門戸塚の臺で乘つぶし　玉章
なまこにはちつと過たる金花山　蛙聲
着替ると女房中々いゝ女　礫川
團子屋は夜半の嵐にくしけづり　竹子
腰帶の眞田を解て茶臼山　呑能
凧喧嘩からんだ事を言ひつのり　礫川
さゑぎつていやとも云はぬ茶や娘　同
景清は尻もち四郎つんのめり　竹子
されども紀文是といふ深間なし　礫川
立聞はくさめ一つをもてあまし　同
尻の火を集て胸をあかるくし　散売
なで刷毛をふのりへ落し手におへず　礫川
花嫁のちくてんをする十三日　猿子
關取は廣島やくわん大たどん　美德

眞中に川といふ字のやふに橋　煙幸
未明からトテン〳〵と三味線屋　礫川
耳首に珠數を引かけ馬鹿な論　若蝶
利上して高くうけ出す流の身　卜夕
儒者のどら十三經を先づ拂ひ　礫川
馬の足當時師匠に居候　志夕
時に判禮一萬引く他人宿　有幸
たつた一文でもやあら旦那なり　森鳥
持參金よく〳〵見れば鼻も有　礫川
きぬ〳〵に岡場所一つどふづかれ　舟鴛
御不勝手一つ地震がゆつたらば　礫川
間の惡さ人いづくんぞかくさんや　同
たいこ持つとはよく〳〵のばち當り　吹唐
茶袋を肩へ張つとく赤合羽　蛙聲
横つつらはりたいやうな傘をかし　リュウ
弓削村へ勅使の前に山師來る　礫川
下げ繩を三んぶりはづむ新世帶　卜夕
向後はたしなめぐらい屁ともせず　舟鴛
鐵炮は命を的に打ちくらひ　猿山
下女が頬赤く時雨るゝ寒い事　竹子

新宿の尻つぽが五寸曲つてる　牛賀
ゐらもつて來たで嫁ごはでけへ面　竹子
間男の來べき宵なり酒さかな　礫川
はりま鍋我身の事としらぬ下女　助樂
門どロをつゝつき座頭のめり込み　牛賀
間男はうすき氷へそつと乘り　登蝶
欲の皮屎をけて見つ踏で見つ　豆人
傾城の年增まくれば新造なり　里鶴

俳風柳多留四十六篇　終

俳風柳多留四十七篇

此編は川叟草莽定連十餘輩の衆義判成て、庵主の撰をもまじへ、おの／＼句作にはやる心の駒を繋ぎとどめて、一駄の冊子なれることを菅裏が言、

文化巳の夏

黒白のちがひ伊勢米魯國米　如雀
いちじるくおもほゆるから裏に行き　巾布
芳を刈すてゝ上面五町出來　シクト
遠からん者は音に聞け耳塚　礫川
いろは塚是武士の手本なり　同
まじなひもあるもの癪に小判なり　シクト
信あれば德あり五兩取て去り　雨夕
節句だにまけなと内裏二朱につけ　礫川
けちな晩又あすのばん女房ふり　玉章
へぼ助言けつから金とくらはせろ　礫川
村芝居むしろ破りをしつちかり　ヤマキ
此上の後生はねへと後家の色　同
せきうつを一度にはらす池の中　如雀

菅裏評

書き替て山に一つの荒もなし　礫川
舟で寐た翌る日浪の御吉例　巾布
夜やさむきほの／＼として立歸り　梅鳥
御下がりも梅からひらく初霞　雨夕

簀山評

石陣の備をくづす虎の巻　玉章
八重垣を折句のやうに讀給ひ　青露
烏帽子の緒ゆかりの色の御立身　同
直きをすてゝ曲れるを御寵愛　シクト
長生は金で買れぬたからなり　青露
紫を着る寺格にも江戸で成り　シクト
三階菱は花菱のあらしなり　礫川
わづうかな波濤をこして藤を見る　玉章
もてぬのも道理文さへ石の所　シクト
名の高い香一箇寺を焚こめる　菅裏
からつ手で賓合せに伍子胥勝ち　シクト

かたい錠前に容顔嫁くづし　礫川
牧こんで御屋敷にある兜塚　菅裏
糸針を持て玄賓僧都待ち　青露
きよふまれてはつんのめる相馬公家　礫川
大さうなうるしかぶれも忠義なり　雨夕
車馬往來にかまびすしいゝ女　如雀
能き衣を着た商人を御上覧　礫川
御太鼓で内外の櫻ひらくなり　如雀
冥加さは伊兵ゑが花檀人拂ひ　玉章
日月を脊中へ入れる咲屋姫　マイタ
繁昌さ四角な四里に諸國住み　玉章
能い所へ請出されやと哀なり　シクト
床の間の不二麓から煙たち　巾布
晝は釋迦夜は神農の弟子に成り　礫川
大社ゑびすは多分使者ですみ　巾布
一本の矢取に乳母はあきはてる　礫川
つらに似合ぬ牛かけは五郎丸　シクト
御格はいゝがおふとんのわるい寺　箕山
さう花の隣の初會つぼんでる　如雀
息子さかりに月は苦もなく仕舞　梅鳥

けちな庭ずき御縁日待て居る　シクト
つれがわるいと兩方の親父言ひ　マイタ
庫裏ばゞあお閨づきに成て出る　如雀
御祈禱に口說を交る大神樂　礫川
元吉原もから簞笥ならべとく　同
子の天窓ぶつた柱へしりを遣り　同
正直のそばで息子をだましてる　梅鳥
心爰にあらず息子は芋を喰ひ　如雀
床花のきどく額に八文字　礫川
園者しつこい坊主旦那にし　巾布
格別に勞す無ふんの雨舍り　シクト
日がへりにねりまの里へ亭主遣り　箕山

子明評

雨の手に傘と瓶子は冥加なり　巾布
御連歌は十日の雨のあしたなり　青露
颯々の風は三日の晩に吹き　マイタ
本の字はいづれ名高い梅屋敷　菅裏
御年づよ産着に雛が添てくる　雨夕
千栽へ日かげの櫻ちりのこり　同
紫は千箱の玉の水で染め　ヤマキ

いゝ藪を持て寢かねる半夏前　玉章
けびたものむかで小判をおもちやなり　箕山
中田甫只一すじに息子行き　ヤマキ
皆同じよふなすだれで門違ひ　如雀
緣なき衆生後の四つ見世で聞き　ヤマキ
師匠さま机は重き罪科なり　シクト
おもしろさひとり來なよのみことのり　ヤマキ
ぬかるみへ座頭飛込む水の音　雨夕
おいらんに叱られんすとけちな晩　ヤマキ
新造をはやして牽頭たゝかれる　如雀
笏はわたしに持せなとおぶつさり　箕山
惚れたのをちよつと矢先にかけて見る　如雀
面を彫よふにむいてるつくね芋　同
あつい事寢るにも骨がおれるなり　玉章
猿田彥しやんと小褄を取り兜　巾布
料理人建長寺だと鍋を見せ　如雀
玄關からおめずおくせず百旦那　巾布
知らぬが佛竹々とこきつかひ　如雀
桐に鳳凰よしづには夜鷹なり　ヤマキ
つめられるたんびに禿そだつなり　同

マイタ評

武藏野へ虫うりの來るはんじやうさ　青露
御具足は春と夏とに見るばかり　シクト
時知らぬ山をたづねて徐福來る　青露
初雪はふりかゝつての紋日なり　礫川
おまへ其胸の所はあぶらだね　巾布
糸針を持て玄賓僧都まち　青露
門すゞみヱ丶モ爰におりやすよ　礫川
心にもあらぬ泪はからし味噌　同
駒留をひれふると見て松浦がた　箕山
子の寢顏見に入る母の門すゞみ　雨夕
いろはにて買習つたはけちな客　巾布
遣手の笑と秋の月はすごい　礫川
箸一ぜんの主しとなるおもしろさ　同
なげ込みといつて生花叱られる　シクト
花物をいふはこよひの三會目　梅鳥
草木および新造もたわいなし　玉章
綸言が夜な〳〵出ると益氣湯　菅裏
雪の首尾よし原内は大不首尾　玉章
過分々々と豆腐やを御かへり　礫川

こわい事灰をならして晩は留守　箕山
鼠鳴きするはづ客は猫のやう　ヤマキ
はづかしさ嫁目のうへが闇に成り　礫川

雨夕評

御祭禮異國間近く御上覽　青露
評判の俵近江と野州なり　箕山
一景は龍宮迄もひゞいてる　如雀
立つ女おつぺしつける國家老　礫川
三うらやへ島がくれ行く面白さ　ヤマキ
夏の句で千代萬代へ名をのこし　梅鳥
陸で詠めては嬉しの森でなし　箕山
戀の重荷は芥川かつら川　礫川
つれ〴〵の牛は男が賣りそこね　青露
あづきがゆ孟母上手に焚き習ひ　玉章
實は孕まねど作德のいゝ田地　如雀
二三人伏勢の出るそばの客　巾布
どさあにしては錦木の風流さ　シクト
一年が一とふしたつとさしみなり　如雀
唐茄子や猿を抱てる藥取　巾布
あて事があつて玉子や賣れるなり　ヤマキ

青露評

孝靈に生れて今に後ろ厄　雨夕
聖人のかたはらで射御けいこする　如雀
朝起は子房寢坊は諸葛亮　同
大名の來た程とうふやへ群集　シクト
ゑり蓮やゑり蓮と賣る周茂叔　巾布
見るもの聞ものにつけ車力言ひ　同
盤のそばに論語だの孟子だの　礫川
雨乞もしたり鸚鵡の眞似もする　箕山
けいせいに蛭の取つく神事なり　玉章
たをやかで荒波よりも目が重し　菅裏
蘆久保とゑくぼで茶店にへ返り　玉章
歯のはへた袴で守る番手桶　如雀
おかあさん坊はどつから生れたへ　巾布
川越しのちりけでひつて叱られる　梅鳥
妙の字を二字に引つさくどら和尙　マイタ

如雀評

一か所は櫻の中に水車　梅鳥
奥方を高家にすると義士は出ず　箕山
筑紫でも梅干親父御氣に入り　礫川

釣鐘に物をいわせる法師武者　ヤマキ
甲香のわからぬでなし名がちがひ　菅裏
老尼のくさめは比叡のうわさなり　同
朝がへり今よりのちは通ふまじ　青露
其魚はうれて居ますと忠臣さ　雨夕
吉田でもてこでも行かぬ小夜衣　ヤマキ
小姑が嫁目の下の瘤に成り　雨夕
蜜々にばかり繼子のはち拂ひ　箕山
折節は楊枝ですます御不勝手　礫川
枕蚊や廣げて胸の手をおろし　マイタ
泣く妾かゝへてはかりごとに逢ひ　雨夕
曉は丘隅へかへる夜の鷹　礫川
まだおれだろうと蛇の骨借て來る　同
盃おどり土器賣とすりちがひ　同

ヤマキ評

幾千代を田鶴に壽く御座所　礫川
笑ふのもうらむも奥の名所なり　菅裏
賞罰は佛と鬼にまかせられ　青露
さまの板ひらき古物を敵にやり　箕山
御在世に參宮したは局なり　シクト

本所にひきめ正しき武者一騎　巾布
下戸の子に上戸つぶれた大江山　雨夕
小娘の唄で夜宮を安くする　箕山
遣手迄花にやわらぐ三會目　青露
娘寢てかせぐで親は遊んでる　梅鳥
金神の方からけちな嫁を取り　シクト
へらず口われても末に燒つぎや　梅鳥

梅鳥評

萬乘へ千代のためしを御進獻　礫川
松の間はいづれ太夫の御席なり　雨夕
樂人は上み下もですむ桃の御所　菅裏
八重垣を折句のやうに詠み給ひ　青露
忠度と高德花に名をとゞめ　玉章
楠はつくりの方へ御味方　雨夕
水底の紅葉業平一首詠み　青露
二言ない高尾に君子こまるなり　マイタ
將門の旗ひるがへるいゝ神事　箕山
血達磨の實は本來無一物　シクト
三めぐりの名句雨こん〳〵と降り　礫川
豆いりをかぞへるやうに嫁はくひ　マイタ

京と江戸かつぎの妾大ちがひ　菅裏
ゑんがわでいさはに涼む夏の月　マイタ
おもわくの中へ夢助目を覺し　玉章
ちよんの間は地下をうらやむ緋の袴　雨夕

シクト評

捨た世を又ひろひたい御膝本　礫川
松作り殿を下た目に御意を受け　菅裏
住の江と明石の中へ男波うち　玉章
大名が締出されたも浮世なり　ヤマキ
母親は叱りすごしてわれも泣き　礫川
京江戸へ匂ふが夜るの櫻なり　如雀
はづかしさ眞綿で首をつゝまれる　マイタ
迷ひ子札ついてる犬に人だかり　巾布
傾城の城かたむける色男　菅裏
ふしぎや見れば御隱居の妾孕み　雨夕

礫川評

右左詠歌で見ても御老年　玉章
聖作にあらぬ樂器が妾は得手　マイタ
横笛の卷ともし火へ來たで出來　玉章
七寶せうごんしたのを圍ひさし　マイタ

昌平の外とだに內田とはいかに　如雀
即吟で美景いたゞく源三位　同
うらゝかさ花相似たる連が出來　同
お妾の宿はときけば三筋町　ヤマキ
素見に鼻をあかせたは久右衞門　青露
福きたるかならず死すは高尾なり　シクト
月をしよひ息子は內を闇にする　同
柳原大納言ける下手な鞠　梅鳥
客に留守させて火入を持て出る　雨夕
杓子面ら尻目で飯をもりつける　梅鳥

巾布評

椽側でいさ葉ながめる夏の月　マイタ
しほ〳〵と城をながめる一家中　ヤマキ
業平を見のがしにする大社　青露
留守をよくしたり娘は猫をだき　梅鳥
眞中に乘つてござい とわたし守り　マイタ
おじき合すむとなり出す合羽箱　同
五枚かぶとの緒を締る二日醉　玉章
旅の留守おもひよこしまたんとあり　青露
いもんどヤアなどゝやとひの禿よび　ヤマキ

すつぱりと吸せてそしていつきなんす　礫川
にくまれる下女は廻りのお手にあひ　マイタ

玉章評

萬民の立寄る蔭は大樹なり　シクト
神靈は王手と成て角行を取り　同
放火臺焚火の禮に一度たて　如雀
今もつて孟宗母の歯にもくへ　シクト
押領使薬は汁の實にくきはつけ　巾布
親をいゝこめたも兼好書のこし　菅裏
門すゞみヱヽモウ炙に居やすわな　礫川
髪をゆふにも張方をいれるなり　梅鳥
喰い過ぎておつかゞ腹は大きいと　菅裏

文日堂評

月の場を十三町で分けはじめ　梅鳥
後は野となつて染井を御拜領　雨夕
紫は御屋敷越しの水で染め　マイタ
飛鳥も馬をも下りる入木道　巾布
北は池南は海へひゞくなり　如雀
山高ふして貴きは駿河なり　同
一年が一とふしたつとさしみなり　同

晝まへは優婆夷出ている二十軒　如雀
廿七から足袋をはくふはたらき　菅裏
五合でもふいけねへと富士同者　梅鳥
つげのせつかいですがゞきこすつてる　マイタ
首帳のよせ算小西役目なり　ヤマキ

川柳評

たをやかで荒波よりも目はおもし　菅裏
蜜々に計つてまゝ子はち拂ひ　箕山
遠くも來ぬる物哉とて田樂　菅裏
息子盛りに月はくまなきを仕舞　梅鳥
火浣布はかりて來て火へくべるなり　菅裏
竹々と知らぬが佛こきつかひ　如雀
ぢんだ瓶持たぬばかりの座敷持　青露
物おもひこれもつんぼに近いなり　玉章
新造をはやしてたいこたゝかれる　ヤマキ
つとの梅花を嗅いでいるけちな晩　礫川
あの男にかぎつてはとばかていしゆ　ヤマキ
にくまれた下女お廻りにとらわれる　マイタ
是より大いなるはなし勅使立ち　シクト

シクト評

秋の田の露にはぬれぬ人もなし　マイタ
はんじやうさ水もたまらず迯て行き　ヤマキ
妻乞ふ鹿は紅葉からかへるなり　如雀
吉日に箱から出して錦を着せ　礫川
鈴鹿山敵も味方も雲のうへ　巾布
びんぼうを長者うらやむ高野山　里松
我もので我まゝならぬ五十ねん　巾布
身揚りの日はなき父へそなへもの　礫川
よくねんの雪には炭の火にあたり　マイタ
蚊に喰れながら螢で讀んで居る　礫川
巳なる金よりは目出たい卯なる金　里松
神代にもだますは酒と女なり　青露
じやく\馬にはねられ國香さいごなり　如雀
雷りに布袋ほとんどうろたへる　礫川
日夜朝暮におこたらず後家作り　青露
山に星息子は月で大不首尾　ヤマキ
なぜ咥をつくとは禿叱られず　礫川
寢なんすなよふとは枕言葉なり　巾布
安はかせぱつちの切れを柄へかけ　マイタ
見る穴へおとす小判の面白さ　同

長い帯ざんすとたぐる三會目　礫川
文日堂評
初午に七千兩が字をおぼへ　雨夕
染出來で千代萬代へ禮まへり　同
石公が沓は片々こわくなり　如雀
筆先で若紫をそめあげる　青露
名歌をば知らず河内で待ぼふけ　如雀
身にあたる物は座敷の松の風　ヤマキ
紙入れを枝折にはさむ三つぶとん　青露
からくれないに水くゞるむごい事　玉章
鳳凰の羽たゝき雀手にのらず　巾布
道中は八文はたご三歩なり　雨夕
大丸のあたりすがゝきひいた所　シクト
一つ家の自分からさと繪馬や言ひ　如雀
實體な娘天魔に見放され　マイタ
入墨があるで禿にめしとられ　青露
油へらしがまだ居ると素見いひ　箕山
歌屑を目にかけさせる公家の下女　菅裏
ばゞあが笑へば傾城帯をとき　ヤマキ
二三合くんなとけつをひんまくり　巾布

又蛸に引たくられるかぶと形　マイタ

川柳評

御饗應今年も松のものがたり　シクト
はんじやうさ風も得あてぬ花の江戸　礫川
龍の口すでに一宗たゝぬとこ　箕山
豐國の神はあがらせ給ひけり　玉章
みのかさとさはぐ十寸穗のすゝきなり　如雀
三韓の耳へ日本の草がはへ　マイタ
兼平がつくしぬくはと一家中　青露
おもひかねいもがり行て二歩下がり　巾布
門どすゞみそれみそこしよ丸盆よ　玉章
六月の晦日神主いゝはらひ　巾布
田舍者湯をくむ口へはつて行き　玉章
入聟は一とかわ内で腹をたち　ヤマキ
入聟は居候ほどあつかわれ　巾布
橋杭を曲錄にする安すゞみ　マイタ
馬鹿亭主内の戸棚が明けられず　青露
女房の供をして行くばか亭主　ヤマキ
古鞘へ又おつぱめる馬鹿ていしゆ　玉章

玉章評

働いた後は動かぬ御代となり　礫川
夕立の後ち江戸中へ名をふらし　如雀
始皇帝其緖に付て飛び給ひ　青露
鵜ぎりで雷上動のさたもなし　如雀
機の手間西方からも二人り來る　同
俄でもないといづくも同じ事　同
兩親の手にはとまらぬ蝶や花　マイタ
兄さまお馬尻もちは妾なり　シクト
二千人唐と日本で埋められる　如雀
燈火くろうしてすこふ咳をせき　箕山
奉加帳むづかしいのはろしやな佛　シクト
あたらずといへど酒色は遠からず　礫川
縫ものも料理も捨て禮に出る　シクト
こゝろばせ誠しやかに暮の文　同
仲人へかくの始末とまづ預け　巾布
藥種やにとうふや下駄をはかれたり　如雀
腹のたつほど不二ははれ喰ては寢　玉章
空海はやはか郭巨におとるべき　シクト
馬鹿むすこ胴〆のある下女をしよひ　里松

即吟題　涼、御祓、田舍、入聟、ばか亭主、

川柳評

れんかんの中を花火のかよい舟　シクト
祓川夏の印しも晦日ぎり　礫川
妓をのせて波にまかせるいゝ涼み　同
加茂川へぬけがらの輪を流すなり　玉章
殊更に柳で聟はしかれてる　礫川
秋の田のよつぼど後に御祓川　青露
一片の初會かげろふ水の月　マイタ
けちな晩心耳をすますうはざうり　青露
酒やの通ひ拂へども又生じ　礫川
申ては見せうといふできぬ金　シクト
げいしやの亭主賽尻にしかれてる　礫川
乳貰ひの覗ひてかへる若夫婦　同
手の付た下女に女房は目を付る　里松
長つぼね馬のやうなが牛で出來　同

文日堂評

夕部にできてあした着る本望さ　雨夕
文月に古歌の吹ちる四里四方　同
定紋へ眞田は六をかけて出し　青露

化粧して再縁をする千鯛箱　雨夕
おもしろさ假の宿りをいつときめ　同
吉原は旭品川夜るの彌陀　如雀
素一歩は眞中を行く仲の町　玉章
一片の初會かげろふ水の月　マイタ
魚と水尻目にかけておかんきん　如雀
あつ物を喰ふたび嫁のびんそゝげ　青露
芋などのつゝさして有る安玄關　如雀
菰かぶり家根に寢ている御不勝手　玉章
おつかぶせられたと見へて不釣合　シクト
ふせ鉦で小僧へひさし六部かけ　マイタ

川柳評

文月に古歌吹ちらす四里四方　雨夕
鵺ぎりで雷上動は沙汰もなし　如雀
時鳥なし鰹さへまながつほ　玉章
物もふを娘はおくへしよつてにげ　マイタ
一つ餘て大津繪を内へはり　雨夕
造り酒やは功成りしさかな賣　如雀
一片の初會かげろふ水の月　マイタ
四疊半こつそりと出る茶筌髪　礫川

座敷牢あはれ今年の秋もたち　礫川
村芝居幕べエながい錢づかへ　如雀
かれ是と他に事よせて息子出る　礫川
息子の世寶さかつて出たつきり　同
しさつて考れば女房が德く　同

即題　つれ〴〵草、俄、品川、忠義士、げい者の情、

川柳評

御輿をば三歩でわたす神事なり　青露
鹽々となつて見せたもはかりごと　同
雨ふつて俄にさわぐ仲の町　里松
とは知らず家内安全などゝしやれ　ヤマキ
かんじそこなひ尨犬のうしろ向　如雀
つれ〴〵に鰹は喰ふな鯉は喰へ　玉章
文使御犬をぶつてしかられる　學子
品川で客のたばこの香の高さ　巾布
足輕の論吉右衞門平右衞門　如雀
すゝ竹や竹やと林ほどかつぎ　玉章
九太夫はかうろぎなどをふみつぶし　ヤマキ
俄をばうしろから見るけちな客　巾布

かはらけをなげる手つきで藝者のみ　巾布
根繼のばちで馬をひく安げいしや　マイタ
亭主を尻に敷親父を尻につれ　玉章

シクト評

大自在無實無筆の難を除け　里松
ほの〴〵と衣やうすく透通り　青露
鳥の名も人の心もかわる所　里松
子を持てやう〳〵見へる山と海　マイタ
桐に實が入つて安堵の一家中　礫川
櫻ちる下たに葛桶うるしおけ　如雀
花の色はうつり替てそとばなり　梅鳥
壹人たんれいわたしからわかれ　如雀
仲國は笛で迷子をたづね出し　礫川
三味せんをうたわずに彈うつくしさ　巾布
どらに入る門を五町の口へたて　里松
袖のうへからものを取る正直さ　雨夕
名代を取た氣で居る柳下惠　礫川
けふこそは禁酒だと言ふ後の月　雨夕
藤づるの具足油で揚ている　青露
十五城ものだと素見學者なり　礫川

證文でかさぬ金をも文でかり　里松
うなされる傾城胸に月があり　ヤマキ
とむらいになんぞやつれをよみんずる　如雀
中宿のかゝあおどけて脈を見せ　ヤマキ
あげんしやうなどゝおつこちさうに持　青露
どら和尚寺を質等がらんにし　マイタ
色直し後はおしへねど承知なり　玉章
人こそ知らねかわく間も嫁はなし　菅裏

雨夕評

あたつてはくだける波の和歌の浦　マイタ
本膳にうまみをつける國家老　礫川
須彌蒼海も破らずに下駄草履　如雀
大たばな寢言を盧生へしに言ひ　礫川
夕顔の巻は暮六つ前に出來　ヤマキ
面白さ花間笑語の仲の町　礫川
ひよんな代筆に兼好とつかまり　同
しかとは見へぬともし火で車胤よみ　同
錦では中やたへなん夜具ふとん　シクト
秋きぬとさやかに見ゆる五色竹　礫川
傾城の胸は八朔まへに荒れ　ヤマキ

其間てうなぎがいやになり　礫川
留吉は一人り息子の名ではなし　マイタ
三みせんできけば砧はねむくなし　里松
につこりと多葉粉をひねる三會目　礫川
松のきどくをあらはして一歩取る　シクト
十五町程見るうちに引けをうち　玉章
いつかつた紙だと姑ばゞあ言ひ　マイタ
子のあたまちよいと叩て知らぬふり　礫川
用心をしい／＼美濃で寢て語り　千之
ふんどしで銚子をつるすけちなやつ　礫川

文日堂評

加賀紋へ梅の折枝つけはじめ　雨夕
二つ無い御家領地も三が國　玉章
蛤をどんとかついだ一とやしき　里松
定家卿四五月頃の月も入れ　如雀
常の日は渡守さへありやなし　シクト
袖のうへから物を取る正直さ　雨夕
鳴子道鼻緒がきれて儒者こまり　菅裏
かぞふれば息子も遣ふ最中なり　シクト
燈籠の灯にとんで入る若ざかり　マイタ

ひよつと來だつといつそくる地主の子　マイタ
らにのしをにのとなまがみな歌學者　如雀
玉川がかむろに千鳥はきつい事　梅鳥
緣組にばかりわるいはあきのかた　里松
切れ服紗今は何をかつゝむべき　雨夕
水仕合ひや〳〵思ふ切おとし　ヤマキ
借金を山ほどしよつて盆に立ち　同
大いの卷せんべい弓にくゝしつけ　如雀
どなたから出ますかときく大一座　マイタ
又きよふではなしけちな初會なり　雨夕
養母への孝祿山が仕はじめる　如雀

川柳評

萬國にすぐれ大きな日の出なり　礫川
蓬萊は錢がめの脊にそびへてる　菅裏
恐悅さ島人別のへりがたち　マイタ
品川で打て替つたおなぐさみ　青露
免許はとく御立ちとうたい講　同
名將を花や今宵の客に取り　マイタ
鯛をつる迄しんぼうのできぬ妻　青露
首一つ九十四眼でにらみつけ　礫川

三國志手紙はよまず仕舞なり　菅裏
紫は胸算用で染めさせる　礫川
九十九日うつら〳〵と晝寢をし　里松
藤づるの具足油であげて居る　青露
尻をきられて其後は不覺坊　同
證文でかさぬ金だに文でかし　里松
不受不施に生がい守るかたい後家　同
のちの月吉原で見るつけのぼせ　シクト
暮の嫁されども手取九十兩　礫川
三會目無欲に似たるばゞあ出る　同
然るをいきどうらず大馬鹿亭主　同
村嫁入聟はわざつと口を取り　玉章
湯をのんで短命丸に仕て仕舞　礫川
雪隱の出合あまねく御用觸れ　同

俳風柳多留四十七篇終

俳風柳多留四十八篇

家内喜多留四十八篇におよぶ、撰は今の川柳に舊連なる老狐の判の聲を、會々ごとにうけて著す、尙諸君子玉吟をはげんで、此道の鳥居を越へ給へかしと、敬て菅裡述、

文化巳の秋

山猿評

泥中の蓮田うゑの神事なり　一德
逆水があるので井戸も掘兼る　香貞
源氏は江戸染榮花は京の染め　木賀
やはらかに養るも反哺の一つなり　一德
夢に見た人相書を五月たて　樂輔
三味せんの生きたを女三ひき給ふ　花道
いゝふしんきやりで金を埋めている　畔道
まゝつ子が出て唐土をよく治め　シクト

やれおきろ山ができたとさわぎ出し　溪住
光陰の矢かずにたわむ腰の弓　東猴
深淵をうめに出てくる國家老　亦樂
ふりつゞく跡に薄雲なびくなり　松山
白はたを建てふるまひ水を出し　有扇
猿よばりされて車ににげるなり　振袖
子福者の一と網うつた雷の蚊や　新連
農民の手に豆が出來米ができ　鯉好
正直に舞て仕廻てとんで行き　期程
御代參池の茶やでも手を清め　志丸
はやるはず喜撰を小町くんで出し　集馬
淺草へみどり千鳥の放生會　草麥
一つ目をもてば座頭も出世なり　三朝
佛をはがし大黑へはくをおき　志水
せなが代になると泥田を棒でうち　松山
木曾山の木にて東海道が出來　亦樂
うぬ猿め〳〵と杣はひだるがり　如雀
娘まだ十六七で人見知り　市風
唐りやうりなぞと豆腐の耳をそぎ　萬舞
とんぼうはなまづの上へとまるなり　一德

二のうでを反古染にして年が明け　草麥
みづからをすてゝわつちを御寵愛　死合
能く耻をさらしあげたは紺やの子　マイタ
たつた二朱持つて吉原ほれあるき　五友
手をならしすぎて銚子へ所がへ　期程
腹四文取るは臍迄まくるなり　山柳
ほねまでしやぶり赤ぶちにいせ屋やり　春駒
彼岸には人もすれ合ふ珠數や町　市風
神子を見て内ぶところが猿田彦　不覺
おこされて猫は脊中へ腹をたち　其誠
四海波見附で書くは七つ過ぎ　畔道
鑓持は旦那のあたまかき廻し　里梅
根をたつて葉をからすのはへちまなり　可笑
入聟の小言ぬか釘ほどはきゝ　井蛙
ろうそくと同じつとめの流れの身　桃林
三升やでしばらくだゃをおつとめる　〆子
波のうつやうにうなぎはうねり合　柳鳥
行やつは一寸八分先きはやみ　亦樂
細見の埋め木は歸り花が咲き　山柳
筆墨の外には知らぬ病なり　馬猿

鳳凰もしほの目をする桐の花　杯舟

狐聲評

山號は光り照らすは御神號　東猴
飛鳥のおちる御壺は鷹の爪　里鶴
はんじやうさ金と呉服で橋ができ　志丸
九尺四方で大名の茶ぶるまひ　如雀
初子の日是見てくれのちからわざ　加丈
かりこんだ草で二聲きり〴〵す　可笑
眞つ直な針にて國を仕たて上げ　一德
樽代を二度そんをして德に入り　山柳
つれてきて見ればつひえな女房なり　有扇
光陰を親へおしみて子にいそぎ　市東
只一歩あつて淋しき逆さ桐　溪住
夕立に青天上をづぶぬらし　其笠
醴のつくりは村の御祭禮　五友
子が老をおぶうで孝といふ字なり　如雀
我老をわすれて孝の舞うたひ　一德
橋と草十三に折る名所なり　箕山
大佛をころしていかす寶なり　鑓持
元船は袖猪牙舟は裾へつけ　里梅

和漢の玉取海の中敵の中　シクト
神主も自分の内ははらひかね　萬舞
日にやけて眞青になる唉屋姫　畔道
子福者の一と網うつた枕蚊屋　新連
十九年たつ桐の木を下駄やかひ　亦樂
金箱の明方夢はやつとさめ　岩猿
浪人のけいづばかりを喰のこし　山猿
油うりまけに一筋糸をつぎ　同
引出しにいつそまごつく見せ開き　其誠
銀ぎせる持てたばこにやたらよひ　桃林
雷のおかげで新造にだきつかれ　斗丸
京生れだから羽二重きめがよし　鯉好
壁に耳あれば長屋に角がたち　若松
錢ほどに風をあてがふ御影堂　其笠
おしたてがゑゝといふので顔が知れ　志水
雷のうちへ太鼓をかひに行き　柳鳥
さそふ水あつて流の身もうかみ　志丸
初がつほそろばんのない内でかひ　マイタ
あかざ屋根やつとようじや程にたて　一徳
あげさげのじせつとお釋迦ほで知らせ　東猴

りうきうの袋へ石やさつま芋　三朝
質に鑓うけつながしつ武士合せ　市風
髮あらひ日にむしらるゝ米だわら　草麥
三枝ほどうへではたらく杣が聟　二町
借りひきはとかく山吹むづかしい　一徳
座頭の將棊見えたとは言にくし　志丸
此世では佛師の帳に閻魔つき　蘆舟

川柳評

御武徳は是萬代の記鑑なり　杯舟
一瓢の飲でぶらつく花の山　亦樂
花嫁はまづ袂からちりはじめ　東猴
一町に二た張三はりかやあ〳〵　山猿
矢表に勢至ぼさつは向つてる　如雀
時は今ゐめが下たなる初鰹　杯舟
深淵をうめに出て來る國家老　亦樂
おかひこにくるまる迄は桑をつみ　東猴
大門千兩は但し文字金　木賀
眞つ書間かへるもいかゝ御宿にか　山猿
高徳は板行下たのやうに書き　如雀
あんまはうづめけんぺきは越後勢　亦樂

賣すへをきのどくさうに茶や詠め　マイタ
大小の仁義でかりは御ことわり　振袖
四つ手かご下戸のかつがぬ物と見え　期程
かくれんぼすると女房鬼になり　岩猿
御不勝手しゆもくに金をせたげられ　井蛙
どらむす子とう〳〵母衣をみださせる　松山
鳴やきは油をつけて櫛をさし　鯉好
朝がへり一つ眼ににらまれる　カテウ
あく衣あく食で豫譲はねらつてる　一德
けんどんな箱にやさしき源氏の名　志夕
品川で我れは化けたと思へども　有幸
なれた糸脈ふころびをたのんで見　山猿
羽衣をなまぐさい手でらりにする　市丸
たましひも錆つまつてころされる　志夕
念佛と小言毎日三百篇　有扇
あやまつてはゝからず來るふてへやつ　市東
化かすはず縫め〳〵にをが見える　加丈
太平さてつぽうやばでうつたまげ　五丁
五言絶句について行くやす茶代　春駒
佐野の宿其日雨だと居所なし　新連

くらがへは猫と杓子を取かへる　桑虫
御誕生そふかふ院の大祖なり　杯舟
一とこゑは何やつだヱ、郭公　市風
おかしさはかゝしの笠にかなつんぼ　萬舞
片耳へ珠數をあづけてひよぐつてる　樂輔
樽ひろひ三ばい漬の匂ひなり　有扇
糸びんの鍋にしつぽくこしらへて　其流
辨慶にわられ鐺つんぼうになり　花道
御ふとんへ寢てうずをさと局いひ　春駒
片身こそあだなれぺロリ初がつほ　兎合
猿もゝでひつかゝれたでざらに行き　松山
戀路のやみに迷ふとは下女ぬかし　シクト

岩猿評

蓬萊のふもとへならぶ國づくし　錦鳥
日に光る骨は五色の御扇子　五友
筆すてる松で筆取る旅日記　志丸
黑白に唐と日本の眼を配り　志夕
何所迄もまつすぐに行く天の道　振袖
一貫がぶつ切りを買ふ鬼子母神　五友
言すごす言葉の質はうけにくし　志夕

一りんの菊で鬼門をおつぷさぎ　里鶴
かみなりの鳴ときばかりさまをつけ　桃林
飛石の臼の目を切るにわか雨　其誠
そろばんをはしごに建て直を登せ　志丸
我さした傘をふんでく水たまり　市東
去り狀へひろふた文もふうじ込み　八重喜
サア寢たとたゝきつければとぎ付る　萬舞
孫ができ姑はじめて嫁をほめ　花道
手を出して足をいたゞく足袋の禮　桑虫
七つでも帶ときをせぬふられた夜　畦道
初花が咲て母親垣をゆひ　東猴
孫の手で姑は嫁にたゝかれる　青露
辻番へうばが差圖のかしわ餅　錦鳥
黑白の鏡くもらぬ砂利のうへ　カテウ
ふり袖の片そで落るすゞみ臺　錦鳥
迷ひ子の腰をたづねる月行事　市東
潮干狩り女房火のしのこげる程　加納
吉原は鐘までうそをつく所　三朝
高いはづ眞白なのは九合なり　井蛙
あのお子もこゝを出たかとさぐつて見　喜卜

笑ふにも泣にも袖が道具なり　青波
あのいぼを爰の蛸へと大やしろ　里梅
城ぶしん手はづをくばる猿眼　カテウ
二度くわれいせやお茶漬でもがやみ　蘇竹
行燈のうしろでくらい文を書き　振袖
夫れどこかあすの米わに一とちゞみ　不覺
明けがたをよくしなんしと姉女郎　青口
芝の鐘無常にもなり戀になり　箕山
ふんどしをわすれて家根や氣が詰り　期程
はづかしい腹にうれしい母の顔　牛賀
くどかれて娘うちはを廻してる　カテウ
極樂へ大悲の道をとふりぬけ　志水
下駄をはく所へからかさ灸をする　牛下
目も鼻も無いが女をよく見わけ　三朝
出は出たが跡の祭りがむづかしい　花道
アヽラふしぎや人だまの綱わたり　〆子

狐聲評

敷島の道は熟せし杮の本　有幸
字で見ても久しき三輪の御神木　如雀
大石を文鎮にするかな手本　猿松

三度目に出て天晴な緋の衣　井蛙
讀みと歌公家衆白歯の嫁を取り　同
大佛は身を粉にくだき濟度なり　瓦合
時知らぬ山入り夏も布子なり　一德
毛唐人及ばぬ戀は吹屋姫　柳鳥
鬮一つ安藝筑前の國ざかい　春駒
さら地ではいや番町やしきがへ　加丈
たきものをはき物にする御放埒　樂輔
生ものを墓所へ備る忠臣さ　未學
日本橋まがり廻つた道はなし　斗丸
玉簾をつゞれの袖で巻かへし　東猴
いなづまをさせてうつむく仲の町　竹子
しうとばゞうはべかう力内作左　糸道
夕日はまねげど朝日にきへるなり　松山
お妾は七去兼備の女なり　亦樂
水くさいはづ蛤はむしかへし　斗丸
今日の雨建久四より降り始め　市東
寢た人を匕でおこすではやるなり　若松
妻の閨孟子無言でしかられる　青露
口へんに及ぶところへ邪魔が入り　柳雨

放し亀身をしづめるが身請なり　鯉好
糸竹に浮身をやつす岡釣師　牛賀
二上りにうかれ世帯は三下り　岩猿
小でうちんはなはだくらい所へ行き　錦鳥
てうちんがきへて座頭に手をひかれ　八重喜
扇子やで息子萬燈あをぎけし　期程
一角はできず南鐐屋角し　其流
年の功より溫公はかめの功　亦樂
色白はかくべつ目立洗ひ髪　三朝
近江源氏だけぬすんだと思つてる　瓦合
振袖をふだんに着せる所へすて　未學
すりこ木と馬鹿の太いは手に餘り　雨旦
道中のごまはおこはにかけるなり　三朝
こぬか雨ぐらいは聟に迎ひ出ず　可笑
路次口へ井戸宿札をかけて置き　溪住
赤はらを箱根では喰ひ陸奥でたれ　里鶴
二つとは無いすばしりとこのしろと　斗丸
南鐐のうろたへ物ははね出され　其笠
おふくろがまゝで紅葉の事が知れ　集馬
割土間は四角にひざがくたびれる　其笠

鶉から呼んであふむを買て居る　眉長
こつそりと所化のほふむる魚の骨　里梅
影膳をすへる女房ひもじがり　岩猿
產み出した跡當分は御門留め　一本
番附で祭りのわたる下女が腹　杯舟
アノイッソ牛の角文字ゆがみ文字　一德

川柳評

簑笠で御運めでたき天が下　松山
口先きも矢先きも的は雲の上　草麥
御府內も東のはては津輕なり　志水
水をうり波を受取はんじやうさ　五友
墨つぼを出るとは見へぬ大がらん　有幸
御即位をへらへいとうに押拜み　香貞
紫でしゆもくへとまるいゝ仕舞　志水
上總でも豫讓ぐらいはある男　杯舟
奥中で大はゞをする緋ぢりめん　志丸
こんりうのやうに引出す諸葛亮　可笑
熊谷の土手と稲荷は大ちがひ　一德
清盛の鼻毛を世帶くづし讀み　山猿
城ぶしん手はづを配る猿まなこ　カテウ

あんちんはみかんをくゝみ／＼逃げ　門柳
そろつたも物によるべし二たしうと　糸道
水鳥におちひよ鳥で目をさまし　有扇
切先きで鑓の直をする山がへり　志丸
丙午守本尊とのりかえる　戸猿
苗うりが見こんでは入る御不勝手　樂輔
借金の淵におどるは利足なり　一德
冬よりもすごひは秋の月でおす　市風
風の神雷門にいそうろう　吉々
夕立をはだしに成て追かける　馬猿
水道の穴へ御幣を大家たて　山猿
路次口へ井戸の宿札かけておき　溪住
あじに柄をすげたきせるでいぶしてる　一本
木曾山は熊よりお六名が高し　其誠
じしん番あんま一人りに二つうち　雨旦
二君にもつかへず錢もつかはれず　岩猿
ぬりたつた妾はおくを壁にする　志水
國家老大ざつまにて罷出る　青露
高いはづ眞白な所九合なり　井蛙
子路曰く御勝手向きは古米なり　山猿

よつぽどな無心遣り人も列座なり　有幸
江戸まへの奉公人はくへぬなり　マイタ
よもすがらあんまとうぼへしてあるき　シメコ
知盛は蟹にもならずもゝんグワア　里鶴
やぶ醫者は竹の油がごくいなり　五笑
小倉山鶯ばかりつんにがし　其流
甲乙はふとんを敷てごろうじろ　玉川
目も耳もゆきぬけにする初鰹　其笠
すへ膳は向ふの腹があんじられ　雨町
つかいはたして二歩一本もてあまし　牛賀
無念こつずい盗人のくそさらひ　山猿

里梅評

國主にも無いはすゝきと杜若　鑓持
三千の枕は夢の榮花なり　岩猿
凡人の鑓舟底へとゞきかね　松山
太平の矢挾間は風もぬけぬなり　春駒
天顔は繪師も恐て御簾で置　岩猿
大内を桑原にする御うつぷん　青露
御茶壺の泊り一宿寝そびれる　一德
筆先で唐へも渡る雪の舟　錦鳥

水車片桐質におくところ　カテウ
うちかけの孔雀衣桁へ羽根をのし　馬猿
辨天の左右は梅と櫻なり　溪住
本くじが三步で花が一步なり　松山
ひんの能い直うちは月の名句なり　竹子
露の葉でしのぐ秋田の俄雨　加丈
松永が上へを略した門徒宗　未學
待女郎すがほは嫁にちさうなり　井蛙
三尺の劔で四百切りしづめ　竹子
駒下駄の遠馬五六騎富が岡　キタカ
蓮根を馬で付こむ當麻寺　喜卜
孝行さとうふにあきた顔もせず　松山
忠度は木賃も出さず宿をかり　亦樂
唐人の目には蜘なく讀と見え　木葉
虫の聲大般若程がらん跡　山猿
孔明も三會目にはうちとける　如雀
燒鹽のやせが產婦の肉に成り　花道
剃刀も老てわらじの髭をそり　志丸
何見せる物かたゝみへかつぎ上げ　青露
神風で寺の言葉を吹もどし　柳雨

丸の内四角にかける俄雨　若松
ほふろくをなげて見たいと不二詣　貞丈
江戸中をあかるく書て歩行なり　錦鳥
先のかたおかはりと乳汁鬼子母神　里鶴
三つぶとんほうりこまれたやうに寢る　玉川
夫婦公家取膳にするわたしかね　木葉
本ぶりに成て水賣匕をなげ　門柳
のし餅の裏はむしろの忍ぶ摺　山猿
大せいづれで舟頭は山へたち　期程
骨ぶとの源氏やの字を棚へ上げ　里鶴
善光のイノメ蓮花でひつこすり　東猴
屛風坂飛び越すやうに聟は逃げ　門柳
やせた子の露命をつなぐとしま町　竹子
枕元帶と〳〵が子もちすじ　不覺
丸づけは臍をぬかれて雷に成り　柳烏
早乙女のたばここうがいぬいてのみ　志夕
湯やげんくわ唄のふしから枝が咲き　葉十
中條は月をながして日を送り　萬舞
相生の夫婦牡丹餅獅子つ鼻　東猴
三助とお三そひ寢の六つまじさ　吉吉

ところてんつきのめされてかしこまり　鐺持
問違て嫁そんをする末の日　期程

狐聲評

繁昌さ三箱の外は限りなし　斗丸
道のりは唐も日本も歌仙なり　如雀
鶯のこゑに小松の手もゆるみ　里鶴
ひたいにも雲のうへとて星二つ　馬猿
鎧ゆへ鐺はとうらぬ渡しなり　東道
鎧師はあぶなげの無いみそを上げ　鬼柳
からごろも蜘手に讀めばかきつばた　一本
身の持てぬ所櫻も咲たきり　振袖
天が下紹巴もやはり日和を見　瓦合
忠臣の朱けにも染る緋の衣　井蛙
京と江戸梯と鞭との十三里　春駒
冠はあれど烏帽子は無いところ　カテウ
初もの丶極官ときくゑぼし魚　花童
切先は雨やあられと田村川　松山
白面の狐に今も迷ふなり　志水
君が代は具足を出して笑ふなり　五友
實のならぬ花が歌道の種と成り　猿松

其せいか辨慶縞に子持なし　畔道
義經はげいしやをつれて吉野山　玉川
針ほどな仕事棒さき取にくる　初メ
孔雀のひよつこ向ふの人と鳴き　有扇
大きな藤を九十九に根わけなり　期程
孫の手で時政かゆいとこをかき　梅人
川竹に流ておやをたすけ舟　志夕
一筋は夏しめ切た眞田帶　畔道
花に實がなると毛虫をおつことし　萬舞
あんどん〳〵疵をつけぬが嫁の疵　里梅
喰いついてとく垢すりの結び玉　松山
名の高い草は双が岡にはへ　其流
御持佛に夫婦別あるむつかしさ　亦樂
手のひらへ國々のみる穀問屋　初メ
丑の月十八町へ市がたち　草麥
やう〳〵の思ひ鯨を片身買ひ　花道
やす公家の着物もしきしだらけなり　三朝
花嫁のひろいは帶のはゞばかり　里梅
茶が御意に叶ひお釜をおこすなり　瓦合
細見をかりてゆふべの名をさがし　鑓持

相生の夫婦牡丹餅獅子つぱな　東猴
四つ手かご夕部の旦那故事に引き　樂輔
滿月になると三か月落すなり　三朝
蛇の目をば鬮の目でさす大嵐　錦鳥
ふられたり又てらされる淺ぎうら　喜卜
長い物にも卷れぬは藤太なり　期程
猫撫ごゑで引いて來る鼠木戸　醉臥
けんくわには勝つたが亭主飯をたき　猿松
ねまき帶嫁そら錠を締て寐る　山猿
十四日すへは野となれ山へたち　松山
一と休みしろと元日戸をさゝせ　糸道
十念に座中のあたま波をうち　馬猿
辨天の貝とはしやれたみやげなり　溪住
ねんころが上手で藝者はやるなり　萬舞
つきだしがたこでおしよくの上へのし　一德
おつぼねは牛の涎をたらすなり　志夕
三人で下女を三ばんばらへつれ　門柳
長つぼね牛角の勝負ばかりする　瓦合

川柳評

三人で姦からぬ嵯峨のおく　猿松

あんずるよりも産やすき御がいちん　門柳
日本橋龍宮城のみなとなり　桑虫
しのぎなら六十本も出來る笠　期程
達磨の尻を米でふむ六代目　香貞
初がつほ陶淵明にくわせたし　キタ
西行は女郎に一度手をあはせ　一德
土俵迄ひねつてなげる急用事　柳鳥
古今稀なる大名のどろ仕合　亦樂
風雷でぬれる氣になる息子連　杯舟
口に入る土用は四季にかゝわらず　期程
氣に入れば氣に入つたとて氣にいらず　其笠
江戸へ來て國の縮へ手を通し　花道
市川で舟をとふれとにらむなり　求己
火へくべた文でお袋かぎつける　一本
猪牙舟でざんじはしける家やしき　井蛙
國府かとよつてたかつてこなにする　玉川
駒下駄でてんば五六騎富が岡　キタカ
葭の根はたへて後には女郎花　岩猿
是や此人は座頭か何者だ　水鏡
雷の内で仁王は臍を出し　ハジメ

みそ用人は口もまめ足もまめ　可笑
雁的を生捕にする下手でやひ　志水
内の首尾ちよき舟よりもぎつちかあ　可笑
年忘れわすれた程に穴が明き　馬猿
章魚蚫土手を迯たりむぐつたり　其流
三つぶとんふはと乘るからくるめられ　桑虫
桃どろぼ桃どろぼうと西王母　加丈
庄やどの飛こんで先鎌を取り　十六
本闆が三歩で袖が一歩なり　松山
たで酢などのんでしやれてる四疊半　八重喜
おぼこ娘も祭からすばらしい　雨旦
お妾のなり歩は盤をくるはせる　山柳
かわらけへ手を出し隱居なげられる　志水
辻君はあまだれ程な流の身　鯉好
つき出しは病氣此かた底を入れ　玉川
れつきとした侍たわしや〳〵　竹子
ところてんつきのめされてかしこまり　鑓持
くつはやで馬をつけるは豆のかし　三朝
そちは二世ふれは三月四日迄　糸道
ぼた餅はかつへた奴が來てちぎり　水鏡

足は千鳥かしらは猿のごとくなり　醉臥
容體におなら一つと內義書き　市東
細末を藥研へつけるふとつてう　里梅

柳島評

山鳩は三枝の外の禮義なり　矢正
ひとり寢に五十四郡は大き過ぎ　亦樂
生薪の煙も御製の内に入り　同
松の葉を焚て旅僧へ心ざし　松山
明の字がわれて世界を寐せおこし　岩猿
淺漬の石たくあんの近所なり　斗丸
黑雲にもへてはきへる緋の衣　牛賀
足柄で育ち手柄を世にのこし　猿松
廣德寺御二人りと無い百旦那　門柳
鼻で眼をつくは十日の御緣日　古鳥
ひよくらひよい出たは日本の綿細工　亦樂
立つ鳥が末世平家の名をにごし　雨旦
なめくじに口をすはれた石地藏　一聲
敷島の道を鷹野の雨で知り　カテウ
二三間つとめて鯛は暑にあたり　伊庭
雨大師歌仙の外は御本坊　可笑

湯と水の違ひ神佛のりうつり　矢正
十月目の岩戸をひらく神の御代　鬼柳
しやべるのがきらいな車力後をおし　ウロコ
屛風坂むかしおねまのあたりなり　瓦合
膝栗毛はねて一九はおちを取り　井蛙
御厩の祈禱三味線でおどらせる　加丈
けんどんや裏見が瀧に干して置　其笠
虎の卷出すは手のあるむすめなり　杯舟
日にやけて賣るが定齋の無い藥　古鳥
鶴は男體つかうは女體なり　八重喜
つよい雨俗が坊主を着て步行　香貞
人の來る詩は地顏の咲やひめ　五町
二九の尊二九の堂には二九の德　鬼柳
明店が四十七軒暮に出來　期程
むだらしいかんばん暮の風藥　香貞
男竹は天の川女竹は三途川　カテウ
あぶりこのはそんを呼で藏を見せ　門柳
床の間の不二へもなびく香の煙　竹子
男見てほへる犬あり松が岡　貞丈
つき出しはまだやう／＼と六文字　馬猿

大黒は鼠の着物縫つて居る　可笑
ねつからの下戸ならづけの舟に酔　加丈
敦盛もうたるゝ頃は聲がはり　貞丈
湯とうふを喰逊にする風の神　木賀
蚊やたゝむ手元綱うつ氣持なり　志夕
涼み舟藝無し猿が能い涼み　山猿
いぢらしさたがよ〳〵と戸をたゝき　泰川
舟宿は花火のさたでねづみ鳴　カテウ
からしより仙波は鼻をとうすなり　半下
かし本や唐と日本を脊負てくる　可笑
嫁入の問やのやうに綿をつみ　柚路
女房の湯上り李伯ふつてしめ　志丸
顔に波うてば姿も海老に成り　山柳
ひやかしは五町かはかし二町なり　矢正

狐聲評

額にも星の出ている雲のうへ　有幸
我朝は松を諸侯の笠に着せ　弓元
孫君は彥をばヂイと御尊敬　志水
末世迄尾は上げさせぬ弓の先　竹子
ことわりを小町一生言ひとふし　桃園

ゆかしさは菰の上から雲の上　鬼柳
一と聲で琴の音の止む奥御殿　井蛙
不二山は下手が書ても不二と見え　有幸
あはぬはづ親の目鏡で聟を取り　柳鳥
子を持てやつぱり親の恩に成り　猿松
筆まめも老ては閨の伽になり　井蛙
覆面で乳房を二つ明けわたし　青露
孝行で踏めば氷もうすくなし　同
詩は七步和歌は踏み見ぬ內に詠み　猿松
傾城の文字もはたらく長異見　斗丸
鋤鍬に手をつくさせて名井なり　カテウ
弘法は點をうたれて點をうち　泰川
御ちさうはさでゝすくつた鯛鱸　錦鳥
落かしらよみ込みに買ふ大一座　木賀
風なりに羽織をたゝむ舟遊山　斗丸
茶にうかされて旅人も螢狩り　亦樂
三人の祝ひ料理も七五三　山柳
ちる花の山吹になる勝角力　亦樂
賣れのこる星はきはめてくせが有り　庭花
拔けた子を釼御祓で元のさや　志丸

おつとめは親父つとめは息子出し　ウロコ
池堀につゞきどぶにゐ妙な蓮　有幸
珊瑚の鞭をいきやくして君は船　亦樂
のふれんをよみ〳〵天神さまへ行き　龜石
時知らぬ娘はいつもはたちなり　一德
主從の緣切れて行く奴凧　木賀
更る碁に勝手は將棊だおしに寢　山猿
木あまりで下駄迄できる村の嫁　柳鳥
醫者の山二つ一つの玄關なり　葉千
西行は鼠取らずの猫もらひ　鑓持
地ごくへの人穴のあるかうじ町　柚路
ひやうたんや駒は出ね共箱が出る　時計
井戸ばたへ茶碗持てく暑氣の供　カテウ
涼臺おうばこは〳〵こしをかけ　八重喜
首つたけはまつた後でまつぱだか　泰川
かやの穴乳ぶさにくゝる手ぶつてう　若松
それるはづ矢大臣から拔けて行く　桃林
手をくふはあたまの黑い鼠なり　柳鳥
用のたるせたい道具は女房なり　馬猿
西瓜をば小刀針で身請なり　桃林

飯よりも盛り人をしいる輕井澤　志水
親の榮花は子にむくふむごい事　杯舟
此うへの良藥はなき飯と汁　馬猿
雁皮紙へ文を書くのはうつて付け　半下
雁が來てつばめ土藏を置てにげ　桃林
法體をかち〳〵山で小僧する　志水
御祭をわたし〳〵て氏子出來　初メ
うはばみの毒氣赤子の尻へかけ　猿松
小兵ゆへ靜は思ひ切りゐゝず　兎合
ひやうきんな末期きんたま望みなり　木賀

川柳評

日月の御旗もくもる湊川　草麥
御扇子に四海の浪をたゝみ込み　桃林
天晴れと叡慮にかのふ師の御坊　雨且
一大事弓師は弦を欠て行き　門柳
忠孝は七十一が手本なり　振袖
買ひきらぬ石を心ですへて見る　馬猿
舞扇三本嵯峨で毛うけにし　門柳
耳かきで妻子をすくふ御膝元　里鶴
あわぬはづ親の目鏡でいれた聟　柳鳥

はんじやうさ獸迄も店ずまひ　亦樂
喰ふ事も武勇も眞田英でたり　青露
迷ひ子をとらへ小判を改ためる　錦鳥
娘の氣母あらかじめかんつうし　木賀
手の長いやつと魏と吳でゆだんせず　亦樂
先生がそれと宰予はおこされる　一德
桶ぶせに温公が智もとゞきかね　槑京
三階のそばは舞臺の言葉質　カテウ
王も佛もいゝ後家に見かへられ　箕山
玉の緒の延びのいゝのが米を出し　半下
辻番で叱られている張果良　キタカ
御留場で鮒をびく〳〵釣ている　加丈
けんどんや裏見が瀧のやうに干し　其笠
本店で來てそろばんでせんたくし　同
法師武者けんくわと言と下りて逃　期程
吳服やの臍の緒は皆伊勢に有り　泰川
細見で見れば黑目がいつちよし　キタカ
番町であきれた顏で聞いてる　草麥
是を着て出たかと思ふ祭り過ぎ　志夕
ふせぎたゝかう盆と暮二度のかけ　一德

すてる子は親父の年に四十下た　期程
蚊いぶしにまぎれて息子どつかうせ　〆子
僧正の外三階を宿とする　杣路
四十五六間目へかごはおろすなり　綾丸
目もなくて耳を揃へて貸しかける　志水
中宿の火のしは化の皮へあて　岩猿
生まぬるい亭主茶の下焚かせられ　千鶴
芋の皮でもむかふかと邪魔に成り　岩猿
田舍間の短册に書く天の川　志丸
助言して頼政王をうごかせる　木賀
目を下駄へとふして上る座頭の坊　庭花
樽そこになると取あげばゞが入る　時計
暑い事きのふの飯をみいらにし　木賀
夫婦してつるんではいる安無盡　青露
ふと股の出るが氣に成る繡習ひ　蘆夕
古狸もしやのわなに引つかゝり　萬舞
義理仁義惡魔外道と伊勢や言ひ　山猿
安樂寺繼穗どこかとしかりつけ　青露
片月見では氣にかゝりまゐらせ候　一德
ぬれ文をやれば人目で無筆干し　家壽

細長く呼んでくんなとふがひなさ　期程
此客じや傘と下駄とは放されず　草麥
まのふりでお三お六を横にさし　ウロコ
萬客に借す方圓の器もの　山猿

俳風柳多留四十八篇終

俳風柳多留四十九篇

前句合は、川叟世を辭して後、舊連和笛子、後を次でさかんなりしに、風雅を泉下におよぼし、暫此道たへんとす、時に好人テウ錦麥正曉古の六子、麴街に再建の催をなすに、古今の好人其意を助て、中興の會始めてさかんなり、これや世に大江戸の町の始めなりとゝのふる所に催せしゆへならんと、萬々歳も此道のさかへを、菅裡伏てねがふ

文化午之春

山猿評

千歳の貢萬代不易なり　亦樂
お茶の水竹に雀がひとりあび　庭花
島原の智謀はすへぬにぎり飯　古鳥
三韓の幽靈耳なし山へ出る　酢交
執權のうまみは味噌で呑んだ所　瓦合

ふくら雀へちよつ／＼と婆々あくる　カテウ
糸針でほそき煙りをつなぎ留め　水鏡
親は子にかんでくゝめる飯の種　松曉
りゑん狀いぬとさるとが言ひつのり　中丸
魚淵におどる十日のくんじゆなり　山鳥
文金で千兩が買ふ籠の鳥　有幸
歩行でゆく女房小脇に馬はあれど　草人
姥は甥は冬奉公に出し　カテウ
深座蛾眉をひそめたが賣れ殘り　瓦合
弓に弦はつて氷のうへを行き　龜石
女ぼさつに一夜のつとめ三歩經　草人
杖となる嫁で親子にふしがなし　全亭
面白し舞子の濱に波鼓　佃
御詠歌を琵琶に合せる竹生島　同
無念さは義興底に氣が付ず　同
戀しさは吉野多葉粉に櫻張　柳鞠
泰平の武者は五月に出るばかり　壽山
春雨で肌を穢する咲屋姫　三鱗
幸も消えたりや日出度夏御陣　多居
あはれなる柳猿澤隅田川　未青

裏に書くてにはは花に寄る戀　魚交
旅僧は裾に見とれて腰が拔け　水治
紅葉をばちらする御腹龍田川　十九
篠原へ白髮を黒く殘すなり　白水
片桐の肝饅頭はあんのじやう　一聲
北條の時分天下は坊主持ち　風松
いろは武者兼てちりぬる覺悟なり　魚有
細見をおとし異見の種にされ　水治
突懸る水音高し鐘が淵　佃
八幡を取揚ぢやい武の内　笹鯉
妹は杵やで兄はつきやなり　斗丸
切れた顏するはなまくら娘なり　矢正
時は得たれど地の理にはふみ迷ひ　シクト
神やどるかうべ心に佛なり　河楊
割る時はまづ三つ組へ三をかけ　古鳥
鮟鱇の片身へ手紙いれて遣り　雪車
歌でさへ穴目々々と身をかこち　瓦合
女房は乳ぶさ出しての小言なり　シクト
もや／＼の闇は三里の峠なり　杯舟
妾起きうごくと暮る中十日　五遊

吹ぶりのやうによませるちらし書き　マイタ
勘略の巻女房の智でひらき　喜ト
鳶の夢見た夜娘をさらわれる　的丁
舟宿は客のきげんのかぢも取り　里鶴
赤坂に四つ谷からんだ子のけんくわ　振袖
お妾の舌は干將莫邪なり　亦樂
舟頭がさすつておこすかしは餅　如雀
碁盤のうへは井目がかぎりなり　期程
繪のとこを見せなと娘できかゝり　山鳥
ほしべりのたつのは嫁の衣裳なり　鑓持
良樂を三つ指でもる國家老　柳雨
尻の毛をぬくは流れのかつぱなり　古粘
あさつては間違のない水淺黄　有幸
馬道で心の駒をついそらし　山馬
錢塔は目の子にお禮申上げ　市風
疊やはひげをむしつて鼻をそぎ　カテウ
桶挾間ふたをする間もあらばこそ　亦樂
御戸帳の建立女房日がけなり　矢正
温石にしたりくつたりあつたかい　半下

狐聲評

我國の大樹は松にとゞめたり　柳猿
御時服は眞とに身にもあまるなり　草麥
三韓へ重き御身のかるはづみ　里梅
帯と袴で呉服やへ十二両　志丸
お里への使者は月もろ共に出る　矢正
身上の柱ともなる親の杖　志丸
ほりかねる井戸の近所は水も逃　一本
丸綿の不二寶永を膳へもり　畦道
股引きは鵜目で鷹をすへて行　松山
できたまゝつかぬ鐘だがやかましい　未覺
時にあはぬで聖人も壁にされ　瓦合
漁父と化し我田へ水を引給ふ　市風
らく〳〵とこぶしへ杖の鳩をすゑ　同
化るのが二丁化すが五丁なり　柳猿
白鼠猫の皮をも止めにさせ　草麥
山吹の枝でつぎたす片撞木　東猴
子福者の祝ひ料理も七五三　市東
はて珍らしい對面と洒落て喰ひ　門柳
詩もよませ歌も讀せにぶらさがり　瓦合
身上がゆがみ上げさげばかりする　志丸

平蜘をこなにしたので名がよごれ　松柏
面かげは年増盛りでよんだ歌　柳雨
蒔いたのは金うゑたのは櫻なり　里梅
たんすから上手のさした風が吹き　水鏡
流し雛主上をはじめたてまつり　克々
そばの客きれ〳〵に來てこまらせる　中丸
雪のかご雨に四挺と相場たち　柳雨
政道にわつちが有つて國がもめ　河楊
石持ちといへどもかるい肴なり　里梅
夜ふけての咳はしまりのたしに成り　門柳
矢大臣あたり矢筈の幕を打　期程
こいつ風呂吹と頭ぬけをあみ殘し　カテウ
大内の雀は陸奥の歌まくら　馬猿
田の鼠化して雲井へのぼるなり　里鶴
わたし場でいざ事問ん土手の道　非蛙
いざ事を問れて鳥の名が替り　市風
うろたへた參詣叱る丹羽の紋　如雀
大谷は棒うちならぬ下知をなし　門柳
あぶなくも無いに舟頭抱たがり　克々
山いしやのりやうち錢取病ひなり　牛下

竹之丞時分とらやも出した見せ　如雀
寐がへりの自由にならぬ三つぶとん　草麥
庭作りけつこうな火で吸付る　古鳥
鳳凰は三歩で鷹はばら四文　可笑
ほねへからんだで障子がひつぱづれ　カテウ
菜の花は蝶山吹はごまの蠅　門柳
木娘の段々のびて花が咲き　酢交
茨木の城に片うでもげている　水鏡
一から六迄嫁をいふあみだなり　五遊
耳塚へあぶの出さうな草がはへ　凡得
足は喰ひ其手はくわぬ由良之助　古粘
言はず共ひきづり下駄をかゝあはき　弓成
憎いもの高い利を喰ふ烏金　猪青
隣りへは音とをふる廻ふ鳥の骨　赤生
物中におらが姉樣ハツトにげ　虻内
大たばな取次の出る御不勝手　亦樂
水仙を一手いくらとたわけ者　岩猿
角み町に立つ股引の素見なり　畦道
つき馬はかけを地道に追て行き　柳鳥
湯どのさんむや〳〵の鬮すこし見え　龜石

狂言はやぐらの下で五両取り　三朝
松浦潟男なら木になる所　西光
川柳評
御祭禮四九で三十六里なり　錦鳥
勅額に霞のかゝる花の山　志夕
はんじやうさ船にかぎらぬ大湊　半下
四百餘州の折紙と子房言ひ　如雀
百官の形に將門名をのこし　香貞
治部いはく此人にして此やまひ　シクト
一つ瓢の飲では李白承知せず　一本
七度び日孟かくごして生け捕れ　赤生
青海浪を山につむ雨がへや　シクト
出づかいのやうにして行く十五日　錦鳥
ちよつかいを出されて莊子目を覺し　松曉
九代目のうろこ龍宮でも憎み　松山
弓矢取る客はかゝしのやうにされ　山鳥
冬三月き休ませて置く腰の物　背青
膽出しをして鎌足は召あがり　克々
マアどふかしいしやうわなにひつかゝり　雨旦
しよつてきたはごに油を取てやり　龜石

八重にひざ折つて櫻の詫をする　振袖
榎茸腹立ちまぎれひんむしり　水鏡
まだ目が舞ふと蛤をくつている　岩猿
苔むした屋根に太鼓は死なり　矢正
鯨から腹わたの出るいくじなき　志丸
錢づかひわるくしたので落城し　振袖
六十は月夜時雨で百ゑらみ　錦鳥
なでられるばかりびんづる尊者なり　克々
蚊のすねを姑のいぶすむごい事　水鏡
破魔弓は光陰の矢の射切なり　里勇
人穴へいのしゝ武者をのりこませ　柳鳥
つらの皮むかれ蜜柑はすじを出し　志丸
御こんれいその夜お妾お茶をひき　一本
つらあてに女房は雛を見立てがへ　有幸
かるわざ師どつとほめたとさいそくし　柳雨
無間をばつく氣異見にやつかないき　虻内
初鐵漿を小一里貰ふ村の嫁　矢正
鐵釘の折れを眞赤にやき直し　木葉
菅家此たびは筑紫だなと時平しやれ　杯舟
目を鍬にして立て見る柳原　志丸

高輪の日の出で出來るみいら取　古鳥
むねうちに皿をころして猫はにげ　樂輔
棚經は尻をはしよつて讀誦をし　口口
甲州はさすが武道の名所なり　酢交
御茶の水竹に雀がひとりあび　庭花
都にも江戸にもまよふ原が有り　古粘
材木や生洲を出すはもふけ口　柳雨
お通と小町はおの／＼それ者なり　里勇
豆がらで豆を煮ている嫁姑　瓦合
命がけ六百貫を一人りしよひ　松柏
帆立貝火鉢の中で破船する　瓦合
しめく／＼りい／＼は眞田がかいの口　西光
木曾山のやうに火をする妾同士　松柏
あぶなくも無いに舟頭だきたがり　山笑
くわんおんの門にもたいこ持がいる　里勇
村出入り先祖やたらに引出され　カテウ
こゝをよくきゝなと三を少しさげ　古鳥
一向かまはず鯛鯉を臺にのせ　箕山
錦木のやうに生ま槇門どへほし　正丸
隨て妻儀とよめば聞きとがめ　東猴

神道者身にぼろ／＼の不淨を着　河楊
子に飯を盛らせて喰はむごい親　井蛙
丸わたを取りや龜山のおばけさん　酢交
いきた金見た事ついに藪醫なし　如雀
壁と見ていしゆのつらへどろをぬり　錦鳥
寶舟ある夜凡夫が二人りのり　門壽
痰持のやうなきせるでセナア呑み　カテウ
つき馬はかけを地道に追て行き　柳鳥
旅の留守いはれ序に皿をなめ　亦樂
瓢をば射わつて敵をじんきよさせ　酢交
雪隱で大坪流に乳母は乗り　松山
佐殿は二度古る穴に助けられ　井蛙

振袖評

はんじやうさ江戸往來に國づくし　雨夕
能書さへ無筆の難に逢たまひ　古粘
武の譽れ小判の親を御拜領　キタカ
目の下たに帆をかけて來る御立身　柳鳥
月の出る時刻もてうど丑の鼻　同
鳩の杖禮義はいらぬすがたなり　里梅
矢のごとく立て腰迄弓になり　五友

訖言のたねに日かげの孫を見せ　河楊
御ふがつて有りあまるのはお子ばかり　樂輔
泰平の修羅ゆびを切髮を切り　喜ト
向ふのかねで齒をそめるいゝ娘　鱗
紅葉ほど有る手を出して手向山　草麥
三みせんが琴のおこりのはじめなり　志夕
桐の木のほうにはげびたふしはなし　如雀
桀紂の世には車を横に出し　箕山
神佛凡夫と化してお名は竹　弓成
文道は字つきを杖にわたるなり　斗丸
撫子がちると榮花もすへになり　西光
馬印難波の町の名にのこり　門柳
雪を取りぬれる其夜の耻しさ　非蛙
出ぎらひの妻にしてある御不勝手　木賀
たま棚へまだみごもらぬ品を上げ　鑓持
飛金もふる鎌倉の御代に出來　門柳
水の出してより見てがひいやく　如石
紫の垣根の外かは十六里　十六
鉢巻でくしまきをやく眞木ざつぱ　雪車
尾のかづは九品淨土へいゝみやげ　西光

無いといふつは者盆と暮に出る　亦樂
賀の餅を腰も強いと誉てくひ　カテウ
面白くおどる座頭の五兩一　草麥
竹村が月は座敷をかゝやかし　綾丸
ゑり元へつくがとしまの狐なり　木葉
古くても通りのよいは銀ぎせる　一本
仲條は札もながれるとこへはり　半下
足音がすると咄しの川岸をかへ　糸道
かなだらひ落て盜人飛あがり　不覺
豆と德利で身上吹けばとび　ふくろ
傾城のあまりものには福があり　竹子
けちな客月は程なく成ると逃げ　古鳥
親船をはしけて息子猪牙に乘り　柳鳥
肩へ巣をかけるは古いゆかたなり　三朝
口黑になると給金下女も出し　龜鳥
兄さんはお馬尻もち妾なり　シクト
鐘つきの名に權助はおもひつき　西光
床か下におし鳥の住池の茶や　箕山
釜じめに南無三寶は米がなし　桃林
石垣にせつたのかねが舌を出し　古鳥

水向けはさんざへらした女房なり　斗丸
恐悦さ木綿にふれる御はだへ　河楊
狐聲評
千代迄も光る源氏の放生會　里梅
はんじやうさ雪に他國の草をうり　青露
三韓の耳へ日本の草がはへ　松山
床の間の不二高島の海で出來　斗丸
文の道學べば孝の道が知れ　カテウ
放し鳥うれしの森へとんで行き　木葉
此糸で六十帖をつゞるなり　青露
御そへ乳は冥加にあまる風を受　河楊
とうろうの俄にきえる雪の宵　杯舟
鳩の杖禮義はいらぬすがたなり　里梅
おりはならもつたりと言御先箱　草麥
かんざしであすさく顔を嫁かぞへ　如石
鳳凰の中かに反哺の孝も有り　赤樂
つもる程道はあかるし年と雪　桃林
顔に紅葉もちらさずに龍田山　糸道
櫻より民のいとふは稻の花　木葉
神風の外とを乗つきる吉田船　柳鳥

年の旅松竹の有る一里塚　シクト
田と橋でばつかり遊ぶ品のよさ　期程
秋の田を一枚下女へ嫁ゆづり　桑虫
歌がるた夫は上手に取る女　千鶴
嫁の手で取るのは飛ばぬきり〴〵す　柳雨
めでたさは盃に魚類を喰通し　錦鳥
すゝき苅る鎌三か月の見えがくれ　若松
鐵之助子のちう刻にゆだんせず　藤後
たから船逆櫓にしても同じ歌　一德
藥鑵から呑やうに吹く笙の笛　竹子
ほんそくをかへしに元の鎗で來る　伊庭
花の咲く國で金商人も出る　香貞
切れ文にみれんらしくも返事書き　千鶴
五六文長いで親の手にあまり　樂輔
先住のひらいた後はがらんどふ　振袖
桐の木の方にはげびたふしはなし　如雀
烏より三聲はやいがしうとばゝ　赤子
横に寐るきしやごはじきは難所なり　雨旦
紋日まへ硯の海を鹿がのみ　其笠
とんだいゝ首尾だと內へかへられず　期程

火の中かで氷のできる刀鍛冶　錦鳥
まがつてもまがらぬ物はまがりがね　鐙持
道ぶしん鳶につかはる鶴つぱし　一聲
見世の戸をどたんとおろす大坂や　玉丸
ふてへ馬士道で俵をひよぐらせる　千鶴
九そふばい程な袋を外とへかけ　柳鳥
乳のみ子の力で留るりゑん狀　柳雨
ふき自在茗荷を敵はむまく喰　弓成
大黑も病氣の時は嫁に成り　草麥
いけぬ晩振袖を着た番がつき　期程
眞つくらでろうそく鼻をつまゝせる　柳鳥
肉食もするに木食いらぬこと　糸道
ころされにきたに七つや繩をかけ　五友
つくま鍋あたまかくして尻がわれ　一本
古今の序小町ばかりは穴がなし　河楊
おしい事小町本來無一物　亦樂
下女の文籠の鳥とはぬかしたり　カテウ
口黑になると給金下女も增し　龜石
はへかゝる頃桐の木を根からきり　可笑
長かけの蝶はおいどの上へを舞ひ　東猴

川柳評

御上洛不二に手入れをせぬばかり　山猴
名月にむかしゆかしき四里四方　斗丸
御利運でからたちの實は枳殻なり　針人
紅みうらを御めん殿中のゝ字なり　河楊
高繩を三里の驛とつうじ言ひ　如雀
御同勢ひや飯を見てきもを消し　カテウ
死せる鶴活る人馬をわしらしむ　河楊
ぬか袋長田ぐんにやりふみつぶし　亦樂
御本家へかゝへて足をおもくする　糸道
雉子橋でけんもほろゝにしかられる　西光
宇多の天皇を梶原くやしがり　一德
後刻御意得やふと息子懐中し　期程
猿だ虎だとしばらくは鳴り止ず　シクト
一ち眼であぶない所を闇にする　振袖
あらそへどみんな比叡から出た宗旨　志水
長曾我部先祖は秦の樂取り　靑露
山の餌をのがれ鹽干にひろわれる　山猿
相づちはいなり山から喰かよひ　龜石
のふ〳〵其舟と我も行氣なり　伊庭

郎等に質盛墨をこくすらせ　青露
菅家此度は雷の仲か間入り　キタカ
い丶男にぎりこぶしを貰ひに出　志丸
弓手に盃馬手にはばちを持ち　有扇
雨乞は二口締て四十八　山柳
おりはならもつたりと言御先箱　草麥
田の中に居れば八朔猶くろう　門柳
言譯けに紺やはすこし曾我を交　可笑
此雪じやそだもこまいと源左衞門　一德
生醉本性たがはずつりを取り　弓成
かまくらは昔にかはるなまりぶし　柳鳥
燒香の大詰に出る普代ばゝ　赤子
傾城の書くは似せものがたりなり　桃園
やぶいしやはてうまん程にふくらかし　雨旦
人の子を吸かうやくにかりてくる　柳雨
金の德鬼の女房に美人なり　霞露
旅の留守咄上手がぶつてしめ　亦樂
今日休み小便をしてかへり　同
置ざりはどちらの耻とおぼし召す　有幸
ころばして喰ふは狠親父なり　田舍

山の神いんぐわ地藏の前であい　庭花
はきだめのきわが大家と御用言ひ　志水
ふんどしで名をさらしたはひん學者　一德
むつ言は八朔なりと月なりと　市風
安うりを女房一心ふらんに見　期程
田舍いしや匕をなげては馬で迯　亦樂
きくからにひみつの事も下女しやべり　雪車
扱火をともしよく見れば大家さん　市東
松が岡邊は石迄やもめなり　斗丸
不孝者そいとげるかとあんじさせ　山猿
みす紙で小言ぬぐつて取たやう　市風

河楊評

月の定座を花にして御入國　如雀
雲に龍月には虎の御在城　志丸
神風に吹ちる帶の異國張　雨夕
酒で詩をつくれば餅で歌を詠　錦鳥
御利生は金づくでなしたゝ賴め　尾光
三步金東江流の扇なり　有幸
得がたきは金さりがたき嫁を取り　雨旦
火にくばるのをふりつけて水に入り　亦樂

三拍子そろつた息子門とに立ち　庭花
まよひ息子たいこは有るが金がなし　雨旦
六寸の舌で六國まどわせる　亦生
竹村へ虎をかり出す賑かさ　杯舟
親芋の皮を女房あつくむき　柳鳥
眞言の砂で他宗もぐにやとさせ　半下
井出といふ時山吹と間夫平氣　尾光
鯱の百ひろはなれ馬をとめ　亦樂
懐に金氣が有つて北へ向き　期程
藤澤の鼠大黒きらひなり　可笑
親知らず子しらずさつた峠なり　鱗
さつてやをこくそにかつて下女ねつぎ　柳雨
金毛織九鳩あたりへ妲妃しめ　雨旦
通例の女郎にふれぬ大鳥毛　振袖
三が國いで其時の木ちんなり　竹子
廓の伏見でも酒くらへ餅くらへ　龜石
吉田町ほくちのやうに氣をやらせ　同
大そふな色事門で笛をふき　糸道
くたびれ者すこしのゑんに腰をかけ　古粘
大黒も風で俵をのんでいる　山柳

よふざんす六つがとつちやあ喰めへし　錦鳥
ひあわいで下女月蝕をやみとされ　カテウ
最中さん十五郎様がきなんした　同
ちんぼうへどく氣を殘しみゝず死に　東猴
綸言をふき／＼雛の土用干し　芝友
桃の義は決ておいどにかゝわらず　杯舟
御相手の碁は勝さうでかんがへる　期程
濡た御衣次の御歌で干し給ふ　如雀
切おとし入れはいれたがつかわれず　竹子
納豆うりからしを甘草程くわへ　里勇
孝行さ柄杓のたゝぬ飯をたき　志丸
木の端のやうで血氣の僧こまり　山笑
景清の内にとつたり居さうろう　木葉
目と鼻の間で見える藪のそば　矢正
かなひませぬ玉でいざりに卞和成り　草人
古着やへ豫讓死がいをうりわたし　圣亭
かこち顔にてやつといふ月の事　弓也
猪牙舟でしに行やつも北枕　亦樂
來年の分迄肩と腰へ入れ　樂輔
御妾は火うち箱やの娘なり　斗丸

狐聲評

神儒佛是も三種の御寶　岩猿
女體でも化粧をせざる宮居なり　河楊
德に入る門の戸たゝく手習子　酢交
三尊の姿極樂世界なり　花道
間に合ぬ家根はめでたいゐぼし親　桃林
敷島の道横しまの道はなし　竹子
御立身櫻へのぼる武の鏡　其笠
耻しらず武藏に生れ月を迯げ　弓也
日出度すぎたで能宜は叱れる　春朝
我せこへおだ卷となる蜘の糸　井蛙
人日は皆拍子よく目をさまし　亦樂
文月を越すと常磐の文便り　カテウ
忠と義のそなわる二つ巴なり　酢交
西陣の龍玉簾の雲に入り　河楊
良藥の異見も母はちと甘し　同
八丈の縞を海なき國で似せ　柳鳥
桀紂の世は田の畔でつかみ合　春朝
丸綿を取ると一番鷄が啼き　市谷
一眼二さそく五百萬石と言ひ　門柳

慈悲で結ふ垣は其身に能こたへ　其笠
鯱の作りばかりの御門なり　松山
愛宕山登た汗を帆で拭ひ　花道
提げ帶といへどもぴんと成て居る　雪車
古い女の御きげんを取る女　亦樂
楠は嗚呼の御意にて石に成り　河楊
楠の葉武者は落て土に成り　喜卜
座敷の水練細見をくりかへし　亦樂
十二支に入らねども目は時計なり　斗丸
からすねこめでたく喰ふはするめなり　河楊
聞く人が死ぬと琴をばぶつこはし　赤生
書たより捨たで松の名が高し　竹子
やはらかな國ゆへ忠の假名遣ひ　其笠
すてゝ置琴へ笹蟹糸をかけ　里梅
薄ではとかく手も切れ足も切れ　里鶴
執心の色雨になを十寸穗なり　河楊
べつかうのふより買人のふがきれず　志夕
釘ぬきは紋折釘は髭へつけ　花道
江戸町の水で仕立る小むらさき　木葉
脈よりも足元を見て醫者は迯げ　カテウ

石臼は隣あるきも夫婦づれ　鬼柳
けいせゐはたんすもふだん遊ばせる　山柳
福山は樂やへそさうかつぎ込み　庭花
やはらかな舌が鍬の名を取らせ　志夕
けんくわのほころび手きゝの外科が縫　牛下
顔に火をもやして娘にへきらず　如雀
胸の火がもへて泪がにへこぼれ　草人
八郎はつよ弓九郎弱い弓　一徳
一本で六字の御名にきざみ分け　カテウ
知れぬはづ番町樣へ麻布より　同
八朔や白きを見れば夜ぞ更る　錦鳥
啼くほたる尻を結んで御意に入り　カテウ
直は五両心のうへにおく忍　河楊
正直のかうべにかるき鍋まつり　松曉
樽酒のぢんきよほつたて尻でいる　柳雨
くらへねへ女郎杉本流で泣き　湖鳥
湯殿さん齒黑へ御手が付き初め　市風
十露ばんの師匠に割れる弟子はなし　尾光
鵜鴿は人より先へ色氣づき　圣亭

川柳評

舞ひは瓶うつは作りへ響いたり　斗丸
海の月箱入にして御獻上　柳雨
鞍かさにつゝ立上り十三里　カテウ
お茶〳〵と五十三ばい次いでくる　如泉
九重に武者の小路はそごなはず　シクト
六波羅の館に小松のなかりせば　一徳
城ならで寺を枕に不覺なり　山猿
六寸の舌で六國まよわせる　赤生
草市は千鳥小蝶の放生會　十六
追々に嵯峨へ舞込む白拍子　杯舟
炭部やは忠義湯どのは不忠なり　木葉
竹ぼうき高砂程は掃て賣り　香貞
文珠より普賢ばさつは乘おくれ　龜石
あまさかさまに際を取る松が岡　市風
錦袋は髭と智惠とを入れて置　藤後
即吟にまだ見ぬ文を娘讀み　カテウ
舞臺から飛ぶ氣で土間を二軒かり　柳鳥
古井戸へ入定をする雪ぼとけ　期程
蕎麥の客かねて夜打と定たり　錦鳥
紫のからは行義をよくすてる　志夕

范蠡は一疋賣るに一荷買ひ　如雀
入王の臣はのこらず成り上り　十六
花にたわむれ枝にふし十二銅　期程
あの煙褒姒おや〳〵けしからぬ　杯舟
しあんして呑でも酒に又のまれ　不覺
編笠を袴へはさむ猿廻し　錦鳥
根葉のある杉へ恨みの釘をうち　柳鳥
莾賣六十以上十五以下　逸飛
十有五にしておしへねど心ざし　山猿
八つ乳にて母をやしなひ返すなり　草人
買たりのんだりしたる君子有り　振袖
勘平はめやすかるべき一期なり　河楊
大嵐大黑がさで舞をまひ　藤後
國がらでむたいこまかい暦なり　龜石
福山は樂やへそさうかつぎ込み　庭花
菊の世話和尙脱衣で鍬づかへ　カテウ
栗盜人は陣笠でのつさ〳〵　花道
すゝき後は息子ほうけた心持　三枝
こは飯の禮に娘は赤面し　尾光
むなぐらをうなぎのやうにつかむなり　庭花

よふ〳〵と狐を放し嫁を取り　杯舟
御隱居の夜なべ細工に伯母ができ　里勇
外科いしやのやうに見立る鄕右衞門　期程
鼠木戸親はだきつくやうに出る　同
店子を見る事大家さまにしかず　不覺
敷初めにみゝずのやうなへどをはき　桃園
目くら馬簑をくわへてしかられる　其笠
座頭の坊目迄手傳ひ大あくび　柳雨
ねぶと町市兵衞町の穴つぺた　尾光
爰ざりの咄とやたらふれちらし　花道
くふ喰ぬぬさかひは臼も粘を挽き　龜石
けちな番頭調市にかせといひ　振袖
碁をさす客はいやだよと下女欠び　木賀
あんどんへ下女はこぎつけしかられる　桑虫
賀の餅はさぞてうちんでつくだろふ　逸飛
四つ目やは馬鹿に藥をつけさせる　柳鳥

鬼柳評

岡崎のから御手がよくまはり　馬鹿
青々と神世の儘の二た柱　赤子
紙の舟折てきげんの梶を取り　山猿

賀の餅は千とせをへたる松の臼　東猴
六はらの夢は朝日が出るとさめ　里松
紙でさへ鶴はかくべつ折目高　門柳
親に似ぬ子ははつめいで鬼瓦　若松
唐人の寝言日本の山をほめ　柳鳥
呉にまさる蠶のわざも桑の國　河楊
胸はれる跡かんたんの虹がふき　古粘
軍配をひつくり返す御扇子　柳鳥
雪の夜にころがしてゆく文字の弟子　草麥
かきのしを心で書て一歩借し　弓成
江戸染の位を京でそめて出し　糸好
雲のうへ車の輪にて黒く染め　柳鳥
鶺鴒は極秘を神に傳受なり　加丈
月見にはひさうな松も邪魔に成り　畦道
縫かけて下女すそまくの金づかへ　門柳
おし鳥の放生會するいゝしうと　井蛙
親の恩けいせい禿持て知り　門柳
八朔のゆきたけつもるお針部や　馬猿
池の茶や一つはちすとちぎるなり　瓦合
番頭とうしろみそして三役なり　山猿

糸道がなくなる頃にせたいじみ　錦鳥
土の金延喜の世から賣始め　里松
海川の岸へ一里をわけた町　弓成
二十六心から出てぬひならひ　河楊
我聲にほれ大どぶへのめりこみ　亦樂
御局のそさう亭主をふみつぶし　木賀
男なら爰迄ござれ能登の守　酢交
出口へは〱にうへておき　三朝
むいらが身には遣手國家老　口口
若後家の素顔花賣見てかへり　亦樂
大門の内へ竹門かつぎ込み　凌丸
木場の釣つれぬと釣が三匁　糸道
百人は言葉もかけぬ花の兄　木葉
灸ざうといつて女房にしかられる　草麥
引けまへに旦那行ます六つ手かご　期程
くらまぎれとぼして見ればおうば殿　尾光
はへぬきの女房枝葉の桐でなし　マイタ
野雪隠かりて菜畑ほめて出る　錦鳥
ふりそでをかついで帯を締させる　里梅
口へんに尊をするなと師のおしへ　赤子

ひよめきへ一雨のこる御げんぶく　其笠
國づくしのれんで出來る四里四方　可笑
君が代の合戰宇治と池に有り　若松

狐聲評

赤人はしぶ〳〵柿の下に立ち　草人
和らかな國でへこんだ事はなし　桃林
冠にも御衣にも時の花はなし　凌丸
朝起の枕時計に成る御歌　カテウ
大江山一人りでいつたからわかり　期程
紙でさへ格別鶴は折目高　門柳
蜘つかむやうな詩を出す毛唐人　柳鳥
唐土でうけとる啌の八百里　斗丸
棟梁へながれ矢の來るいゝ普請　竹子
雲の上車の齒迄黑くそめ　柳鳥
尻宮がこわさ出替る般若櫃　如雀
つかつてもこがね花咲御領分　一德
獨り旅腰を折々頭陀へ入れ　中丸
夫婦くふ飯に米やは五俵焚き　柳鳥
長久手を出して猿猴持ちあぐみ　西光
迎ひ火も鵜飼の門はものすごし　亦樂

宮中へ忠盛月をすてゝ行き　古粘
山吹といはず紅葉を出してかし　門柳
水鷄にも母は出て見る物あんじ　錦鳥
大松を引けとがまんな相馬公家　門柳
油手の豚をめでたく見てもらひ　志丸
芹燒の返答肝を煎つける　河楊
溫公が居ぬとあたまを割る處　克々
一鎌で後しら波の神事なり　三朝
禾へんの家にかならずよけい有り　マイタ
秋きぬと目には見えねど客が切れ　雨旦
光秀が得たは三日の天の時　シクト
槿花より桔梗は二日よけいなり　兎合
と出た所ろ素見とは見えまいの　シクト
留守居と呼んで留守の日はなかりけり　山猿
隱謀ろけんとむらひに親父行き　如雀
楠も泪で一度敵をかき　期程
淺草で惠方手桶へくんでくる　和水
市にゆき息子正月しよつてくる　梅又
二丁町せはしい飯を壺で喰ひ　克々
藪いしやに藥種や二季に匕をなげ　亦樂

はれる迄寺に佇むにわか雨　半下
惜い嫁かはゆい孫をやたら産み　五町
他國へは廻らねへはづ角なぜに　門壽
とむらひのかへりいろはを始めさせ　山馬
凧の子が寄てふいごをはやすなり　カテウ
前たちにゐるは楊柳くわんぜおん　松山
質草をうき草にする三かの月　其笠
入かへの言葉多きは品たらず　雨旦
遠足の達者二人りて六郎兵ゑ　竹園
うまくないひらめは百が一里ぬけ　里勇
一つから田毎ほど出る七つ鉢　柳鳥
行燈を女房かまくら山にする　逸飛
干ものがぬれますなぞと猿は泣　和水
臑おしの一人り角力を灸でとり　柳鳥
下手將棋時過てから二歩がしれ　糸好
書のしを心で書て一歩かし　弓成
向ふにも荒神のあるけちな晩　有幸
三月五日いぬおさん門出よし　龜石
まな板へ首塚をつくかばやきや　如雀
七ころび目にはそとばへけつまづき　志丸

おいらんの足を袋へむすこいれ　竹子
花も咲身になる金の無盡會　若松
ひき習ひ犬馬の勞をつくすなり　里勇
猫ではりたがる娘はしやれ下地　木賀
生薑酒呑迯にする風の神　可笑
おもしろくないのは風の引つかへし　門柳
柄まへがよくて後家鞘そりが合　西光
地廻りの文は奴のけつへ出し　凌丸
祝言の夜は隱居でも餅をつき　庭花
大久保は君の御くわほうさぐり當　松山

川柳評

日月の一構とて雲のうへ　里鶴
神國はだゝをいわせぬ芥子坊主　門壽
名月の下馬武藏野のすゝき程　錦鳥
うつすりと出ばなは二十一日目　斗丸
ひよくれんりは平人のちわでなし　赤子
きめひきがすむとかなでる羽衣の曲　マイタ
虎の威を三成既に呑ところ　庭花
賑やはぬ煙をさとる安房守　矢正
一の谷巴豆芒硝でおつくだし　河楊

越王はふさ〳〵しくも拜味する　里勇
勘當は神代からして男の子　お猿
石山は伊勢を一と目に見る所　里勇
辨慶の持さうなのを珠數やかけ　三朝
本玉と見たは卞和が目がねなり　馬鹿
御殿山海手の方が長つぼね　木葉
引けものでこそあれ常世取そろへ　葉千
伊勢平治なぜおこつたかげせぬなり　瓦合
すゝはきは一とはきはいて三番叟　逸飛
もやうした雪は駿河できへはてる　西光
あのかゝあこんとでてふど十五兩　お猿
糠袋二ばんせんじを母用ひ　門壽
どうしても僧正榎ほねがらみ　カテウ
堀の内今に二天はちつ居する　門壽
茶坊主の頃から石田駒上り　集鳥
彥七も初手は業平氣取なり　尾光
請人彌兵衞松下へ度々呼れ　虻内
あす見れば見えぬを直ぐに村名なり　竹子
吹ぶりの蛇の目あたまを呑で行　カテウ
猪牙舟はいやと似たりの息子いひ　亦樂

かへる所を知らんとて馬をつけ　期程
六貫目取てけたいな嫁を入れ　マイタ
安南の鳥を的に書て置き　志丸
卷わらの鵰をにうりや的にかけ　柳鳥
萬能に達しかうやくなどを賣　有幸
江戶の眞中ぬれ物も干す處　山猿
とうふやは一足飛に仕出したり　木賀
いにしへのくつわや今の馬具やなり　矢正
鍋いかけ足一本は無げいなり　山猿
月そくで芋やだん子に手を付ず　集鳥
下も妻の上茶とんびの爪くらひ　竹子
なまくらに息子は燒に成てから　里梅
子にはふけ亭主にや若い新世帶　山猿
十五兩ならと女衒は玉を出し　カテウ
木曾山のお六とをりのいゝ女　斗丸
馬喰かと思へば村の流行醫者　五友
朝がへり是くつきやうの犬くゝり　里梅
旅日記此二百わへ〳〵　カテウ
燒石へ其才角でぶんまける　五遊
一つ此むすめと書て顏とかほ　岩猿

遠國へだて此さとで淺黄のび　柳鳥
人知らず產穢を和尙着すなり　吉吉
どれ見ごろ見せなと馬の皮をはぎ　カテウ
地廻りの文は奴のけつへ出し　凌丸
女房の手先に日なし度々ふまれ　カテウ
客の屁で下女は四角に身がんまへ　弓成
我が聲にほれ大どぶへのめりこみ　亦樂
つんぼうは正札付で門どへたち　樂輔
客の屁をさそくな遣手しよつて立　可笑
又してもく下女ふとつぱら　古粘
はらみ出入りが又ながれく　龜石
間男を生どつたりと馬鹿亭主　樂輔
入用次第明わたすたなつ尻　西光
無心狀火を吹さふなつらで讀　亦樂
折助へ鳶の羽虫がのりうつり　路岱
三世相見ればおうばは穴の熊　亦樂

俳風柳多留四十九篇　終

俳風柳多留五十篇

年々歲々相かはらず、さかりめがれぬ花久が柳樽は、汲ども盡ぬ養老の、瀧にゆかりの川やなぎ、流をしたふ礫川翁、其えらめる句々を共にして、終にこの集五十篇となんぬ、猶此上を松の茂り、幾代たえせぬ竹丁が、柳の株の若みどり、はねたしゆかふの糸口を、どうどう書てよかろうと、春の始の春駒しかいふ、

文化八のとし未のはつ春

吉例兩評角力會　文日堂評

上の部

此君と太夫と契る御代の春　木賀
四里四方御の字の付くありがたさ　森鳥
時津風琴に皷をあいしらい　木賀
衿袖へ白く芙蓉の花が咲き　春駒
晴天に簑をもたせる御立身　琴我

今もつて色のかはらぬ物語　如雀
御味方と敵で二六が十二文　賤丸
三鳥は勇士鸚鵡は官女也　和恭
宇治の螢がそれて來て卷に成　賤丸
立田山顏には散らぬ紅葉也　同
三日月に蛙一句も出ばこそ　和恭
將軍も彌陀も旭は北の國　如雀
どらもうち敵も討つた國家老　串竹
てうほうな歌を篁詠で置き　竹子

中の部

我が國の耻しくなひ歌を詠み　竹子
下から河へ指をさす秋の空　丸龍
大一座闇には勝て一人寐る　里鶴
海からも出ると山から啼て來る　串竹
辨慶の道具飾るも七つ迄　燕子
歸洛して雨降り風間思ひ出し　如雀
同じ雪唐と日本の孝不孝　酒好
御殿山芝の響きで花が散り　吹唐
戀聟に四火くわんもんの跡を見せ　散売
平八とばかりではつよそふでなし　春駒

賴の字を穢して金をたんと持　谷水
三千の似面らを書くも金次第　里鏡
小指を切て大袈裟にふつかける　賤丸
禿曰く二分ほつきやあ借いせん　同
大津繪は上手か下手か知れぬ也　竹子
からかさを上へすぼめる大あらし　楚江

前の部

狹箱扣く拍子に首を越し　豆人
三人が初手は光り木だとおもひ　如雀
がん首で小言の拍子親仁とり　舟駕
親分の門とに目方の知れた石　玉章
ひやうきんな末期の望みふぐり也　木賀
父の目をぬき母親の臍をくり　散売
御不勝手樽の上着を家根へ上げ　梅里
言ひ流しにはさせぬ氣で言葉質　木賀
藪醫者の家根に虎猫さかつてる　豆人
仁田んには穴まで見せる咲耶姬　吹唐
傾城は生蠟女房はだ蠟也　一陶
わたくしも五番下谷の六阿彌陀　串竹
鳥の目を折助鷹に取りほされ　如雀

かくや切る下女は樂屋をばから明け　豆人
鐵炮を並べ一挺百で借し　梁主
竹婦人旅屋のかゝあだと思ひ　琴家

吉例兩評角力會　川柳評

上の部

千歳を建て萬里の春を待　賤丸
御拳になるのは鶴の千年目　マイタ
御大鎌裝束付も一とかまへ　玉章
和歌の神何れおとらぬ名所也　竹子
大あたま是ぞ武將のはじめ也　古竹
一と切れが一年程の御吸物　木賀
横車留まる五常の道普請　散壳
孫の手で時政かゆい所をかき　丸龍
北國の彌陀は御丈け三歩也　猿子
あろふ事曾我の初日が金づかへ　如雀
萬歳にどこのか乳母が推參し　礫川
通言を氣なしに母は言ひ覺へ　同

中の部

山形の手くだて息子城が落　竹子
盆太鼓團扇と從弟ぐらい也　森鳥
店越しと去狀さわぎ二軒也　酒好
八の字の筆法いまだ有る女房　如雀
手をむなしくは返すまじ三會目　賤丸
小便もならぬ股引買ひかぶり　煙幸
花にたわむれ枝にふすいゝきげん　猿子
きぬ〴〵に淺黄もく禮仕て別れ　舟鴛
鎌が切れ息子すゝきを兩度刈　玉章
つよひ風じだんだを踏む奴凧　燕子
どふせもふ知れたと下女の其づるさ　若蝶

前の部

手長足長かけて行く俄雨　賤丸
年寄れば糸爪足下にかけられる　扇橋
しゐられて横ぞつぽうへ手を合せ　酒好
久物にも汗ぼが出來て天くわふん　扇橋
身揚りに禿の皮も引つぺがし　礫川
結構なしめりにこまる御不勝手　猿子
素見だと見たはひが目か日和下駄　賤丸
どら和尙妙八ともに寺に居ず　若蝶

前の部

ゑて吉をお乳母書寐に仕てやられ　酒好
居酒屋の亭主ぶう〳〵屁ともせず　猿子
切目正しからざるを喰ひ鉢卷　竹子
人々眠ればよき隙と這ひ出し　同
きん玉が降るよふに湯の大喧嘩　楚江
論よりせうこ晩に來て見さつせへ　里鏡
もぎどふに引しやなぐつてふけへきな　酒好
すかしては隱すより猶あらわれる　賤丸

二會目

川柳風文日堂評

水行は國常立の姿也　梁主
喰積のだい〳〵松の根をかため　煙幸
靑陽の富士は霞を注連に張り　猿子
造營の梢にのこる繪の具皿　一松
鶯で鰌のケンがおそなわり　木賀
浦島に二千歳ます三河者　梁主
富士から登るさんだんで天下り　丸龍
のしはたち鏡はすわる暮の餅　古竹
元日の賣物はせが瀨ぶみなり　燕子
せん年の通り舞來る鶴太夫　二蝶
諏訪の橋雪と霞に懸けはづし　梅里
松前を近江に着せるいそがしさ　木賀
榎から鳥居を越すとぢつき春　キユウ
鳳凰のあたへは桐が三つなり　木賀
傾城の大赦のどかな日のはじめ　同
寐亂れの髮文がらでかきあげる　牛賀
傾城はふさぎ禿は日をかぞへ　志夕
栗はどふしてこふしてと暮の餅　丸龍
娘同士箱根を通ふる松の內　梅里
川水のふとりは富士の瘦初め　黃峯
明け方をよく仕なんしと姉女郎　靑口
若水を地主の跡で大屋くみ　豆人
年禮の供は片た足內へ入れ　魚川
いゝ仕舞懸取り拜謝して歸り　木賀
負て立ち勝てたをるゝ首つ引　里遊
去狀のさわぎちんばな草履から　酒好
壹文の凧を繼つ子あげて居る　豆人
あきれた顏で寺を出る堅ひ後家　若蝶
とてもならなせ吉原へうせおらぬ　賤丸

店借りの門どへ鎌がり建て置き　牛賀
鶯と梅は鳴ひたり笑つたり　和里
おたふくの泪は横に流れ落ち　素連
花賣の娘は花の里で賣れ　里鶴
しつこけ帶を止めおれと親父ねめ　賤丸
あの仁がよしんばさそつたにもせい　同
辨慶もあごに有りつく橋の上　梅里
生酔の顔はあかしの千鳥足　二蝶
先づ出して見せい〳〵と勅使言ひ　美德
むき身賣ばかを言ひ〳〵しぼつてる　猿子
姫はじめサア正月と下女まくり　其尾
牛は牛連れ仕てやつて仕てもらひ　二蝶
きん玉も入れなと女房烏賊を買ひ　梅里

三會目

川柳風文日堂評

唐までも稱美をするが富士の山　志夕
咲屋姫霞の帶は春のはれ　谷水
耳たぶを見込に張飛義を結び　和里
いゝ日和梅から龜へおし廻し　梅里

參内の冠かたぶくほとゝぎす　其尾
金箔の付た淺黄を高尾ふり　賤丸
めつそふな計りは富士の八合目　二蝶
富士の山あてこともない土細工　同
大守の御下駄一文で見て歸り　森鳥
釣あげて見たら七十餘城也　萬旭
木で花を削つて門へぶらさげる　串竹
羽子のこを家根へ迯して手を合せ　猿子
水縄で凧をあげてる大工の子　豆人
そも〳〵持參男だか女だか　賤丸
鬼の留守嫁せんたくの水調子　志夕
彼岸中蛇をつかつて嫁は樂く　青口
龍宮の武具は鐵炮飛の魚　里鶴
堀ぬきの水は下から上へ落ち　串竹
四つ切りを破りそめたは息子也　魚川
本復の以後から南無に髭がはへ　谷水
子を捨る藪に住む虎にごる也　丸龍
傾城のゑくぼは人のはまる淵　萬旭
なた豆を喰つて傾城豆を賣り　久世成
初午にお乳母ぬつたり着替たり　和恭

馬の引解きいなゝいて時が知れ　牛賀
尻つぺたのあざを聞かれて扨こまり　和里
楠の智略こやしのよふにかけ　青口
だい〳〵へ尻尾を付けて叱られる　猿子
首代をまけて堪忍五雨とり　煙幸
起きたてのきげんは人の知らぬ事　酒好
乳母こゝはもゝんじいかと足をやり　若蝶
娘から先へ仕てやるとらの巻　女鳥友

四會目

川柳風文日堂評

女房一題

伊弉冊の尊女房の始めなり　牛賀
女房の譽れ定紋門に建て　古竹
女房とは知らず桑畑追ひ廻し　萬旭
土手を行らんとは女房歌人也　枝成
女房を廿一日ちつきよさせ　猿子
女房は忍びの術を見あらはし　青露
緋の袴せんたく賃を女房出し　豆人
不二びたい雪のはだへのいゝ女房　梁主
錦繪と並ぶ女房の美しさ　里鶴
女房は火のしの脈を膝で取り　猿子
櫻丸女房に八重はきつい事　志夕
狀さしへさゝぬが女房氣にくわず　枝成
おはぐろの口を四角に女房ふき　里鶴
女房の十六丁で藏をたて　魚川
奥庭の櫻へお方ゆるぎいで　大古
足袋をはく程に此頃女房じみ　和恭
後朝に女房の胸とかまの下　素連
酢の過た女房で内が瘦る也　散売
多葉粉は四匁女房が一匁　美德
朝歸り女房舌刀とぎすまし　散売
隣から埒も内儀をつれて來る　二蝶
女郎屋で女房三行り半を取り　青露
南無三ぼ女房こくうへ舞上り　女鳥友
面も瘦た女房秤り目よく覺へ　散売
岡場所の女房遣り手の場も勤め　志夕
摺鉢へ祟りのひどひ山の神　散売
我儘をいふははへぬき女房也　志夕
女房の古瀬にこまる里の母　猿子
神號の付くは古瀬の女房也　和恭

雪隱の小言大屋の女房也　和恭
五文づヽ突ては女房押て見る　美德
早く寐る女房七十六日目　若蝶
つまならぬ妻を重ねる不屆さ　森烏
煩腦へ女房菩提で味ぢを付け　美德
六躰の利益で女房ねれる也　梅里
女房の元祖せきれい仲人也　和恭
雷電がかヽあ其時臍を吸ひ　若蝶
じよせへねへかヽあけつくで作らねへ　琴我
女房の化猫亭主とグルニヤア　散壳

五會目　川柳風文日堂評

子一題

人の子を雪に結んで名が高し　青露
けんぺいに飯をせたげる手習子　楚江
片々は敷居の外とに子の草履　儘成
鵜鴿の振り付で子の初舞臺　若蝶
ごんぞうをはいた千鳥の愛らしさ　里鶴
鐵鉢の中へ鬼の子隱される　串竹
這つて出て語るが雛のあるじ也　二蝶
意見世へ借りられる子の食もたれ　枝成
眞赤な川童賴光の御意に入り　楚江
どろまぶれだヽをこねてる左官の子　酒好
とんぼうを是もんでさす餌さしの子　同
子を捨る藪に竹村うつてつけ　和恭
まヽ事の店だてをする大屋の子　二蝶
まヽ事のかヽさんになるおちやつぴい　志夕
繼つ子の硯の岡は藥研ぼり　豆人
繼つ子の灸おさへずにすへて遣り　舟鴛
鷹の子を産んだ鳶は羽子をのし　谷水
めへめつと泣く子餅より赤團子　煙幸
養つて喰はせる方で口を明き　青露
山伏にこんな扇をもらつたよ　美德
姉さんと言ひなと藝子子を育て　散壳
子を賣つて親をすぐすは芋屋也　一陶
鯨の子取れて賑ふ三さと牛　靑口
町所聞けば猶泣く無札の子　煙幸
寐付く子を側であやして叱られる　酒好
馬の模樣ではね廻る田舎つ子　二蝶
子がもりそふでばあさんを呼にやり　梅里

毛がはへて文をくわへる鼠つ子　豆人
天狗の子鼻をおさへて飛でみる　谷水
狸の子はやきん玉も四疊半　青口
素讀の師くすんだ顔で子をでかし　賤丸
子で子にあらぬすり子木がおへたがり　森鳥
捨子めをひろつて餅について居る　猿子
先づしんを切つて捨子のまたを見る　和恭

六會目

川柳風文日堂評

來朝に通詞のいらぬ山一つ　志夕
末世まで尾は上げさせぬ弓の先　竹子
忠臣は春日太神宮を賣り　木賀
木へんの反りは眞直な御捌　同
鐙までたらぬ御足で代をふまへ　牛賀
大將もたば粉もきつい一か國　森鳥
古池のぼちやんが末世迄ひゞき　竹子
右大將天地の間ひへ金をまき　玉章
江口の遊女ありがたい手管也　木賀
鳳凰の羽音に禿目を覺し　猿子

富士の雪仲と欠びの間ひへ落ち　楚江
馬蔦も入らぬは江戸の五十三　豆人
辨天の琵琶なみならぬ水調子　牛賀
色里の手本は紅葉かきつばた　里鏡
富士山は大きな鉢を持て居る　二蝶
殿風を吹かせる面らの美しさ　玉章
先づ菰でふさいで置けと綱はいひ　和恭
白石は六十四五手先きが見え　美德
きやつ／＼と召すのにそろり／＼出る　竹子
相傘の中を隔る水溜り　其尾
知たふり團扇の芝は奈良に有る　竹子
とつくりへにが桃をさす村の雛　和恭
眞黑な達磨硯で尻がへり　竹子
神佛に叶ふ表裏の扣き鉦　其笠
桃の木を天窓へ植る暑ひ事　猿子
己が名のつくりを鳴て人を喰ひ　森鳥
品切れで眞菰の馬を百で買ひ　古竹
紺屋の子あさつてにして腹を切り　玉章
忘れた扇熊谷で呼び戻し　竹子
十月の十日ヲヤ最う日が暮た　同

ふてへやつ水も茶碗も呑で行　竹子
きん玉の上り下りで時が知れ　辻木
小はだ小平治肴屋と下女思ひ　賤丸
はき溜へ召連られる西瓜賣　豆人
牛ほどに角がこうじて時參り　木賀
にわ鳥があくびをすると聾言ひ　儘成
張り替る太鼓の客へ火打箱　其笠
相撲下女下地はお好き御意はよし　雨曉
八百七は小姓を呑で暑く成り　喜丈
底をよく入れなんしよと姉女郎　梁主
疊さし一と釘ぬきに手をおやし　賤丸
追ひ羽の素までで下女はまくられる　猿子

七會目

川柳風文日堂評

師の恩は千里へ届く筆の先　志夕
裾わけを三國へする咲耶姫　若蝶
むつと遊ばされ秤にかけさせる　美德
米一字老入れの學に書き習ひ　散売
日本の蛇の目唐までにらみつけ　梁主
御誕生アレ時鳥ソレかつを　猿子
雷りが鳴るとかけ出す孝行さ　酒好
賴政の古跡は宇治の要なり　吹唐
江戸からも工藤が死んだ所は見え　黄峯
春過てびつくりさせる紺屋敷　猿子
トイキンは見附の外とへ追出され　和恭
机から雙紙のすべる書き仕廻ひ　丸龍
美しひのは喰ひ殘す大江山　梅里
鼠木戸中の字言ふとつまみ出し　猿子
門どちがひ蜂風鈴をのぞひて見　谷水
名月は牽頭しめこの兎なり　楚江
俄雨口をすぼめて傘をかり　猿子
跡月のまゝだと女房指を折り　五英
北國の諸太夫雪のはだへなり　二蝶
竹の子はどこが前やらうしろやら　里鶴
質屋の手代辨慶に繩をかけ　賤丸
豆腐屋の暮し片足程もなし　里遊
男まげ止めねばならぬ花が咲き　枝成
手めへから先へまくれとぬけ參り　梅里
おまんまを孕ませ味噌はこまつてる　串竹

お妾は十筋へらして膝へのせ　吹唐
いり酒を鍋にのまれて叱られる　和里
蜆汁そつぱは妙に早く喰ひ　牛賀
座頭の坊乳母をあやして笑れる　梅里
にこ〳〵と五菜は桐の箱を出し　谷水
梻の花すぼんだやふに開くなり　賤丸
あたらしいびいどろを割るくわほう者　二蝶
十ふの眠りには三人足りやせん　琴我
風の神平氣で屎をくらつてる　森鳥
割れそふになるとお袋箱へ入　里遊
義經はお好き辨慶嫌ひ也　梁主
こも僧の押合て居る下女が文　志夕
長局お馬が濟と牛を出し　猿子
大あじになるとかげまを後家が喰　五英
棹へ筋出して悴は腹をたち　二蝶
きん玉を襟巻にする大井川　丸龍

八會目　相州江の島辨財天額奉納會　文日堂評

琵琶の海神慮に叶ふ浪の音　和恭
鶴見から一とのしにする金龜山　琴我

江の島が家づとに成る物ならば　千之
辰午の中にまします御縁日　紀樂
天然さ男波打込む奥の院　若蝶
浦船の帆は尊躰の裾もよふ　萬旭
島臺の廻りはみんな四海波　儘成
龜の子を萬放したき靈地也　和里
いさぎよく卯の日に江戸の地を放れ　一交
江の島の姿は富士を後ろ帶　扇橋
荒海の中を江の島とはいかに　シクト
いつちい丶利生祈れば金が出來　箕山
仕合さ島の財布を拾ふ也　一德
㕦耶姫琵琶は天女へ置土産　香貞
僞も二字にはゆるす神の國　里遊
浪の上こえて一聲ほとゞぎす　楚江
江の島へ福人連が呑みに行　串竹
蛤が吹たよふなる宮居也　散売
琵琶の曲音ともよきかな寶舟　梅鳥
すさまじひ羽音で千羽舞上り　梅里
うら丶かさ汐干潟にもさくら貝　玉章
烏帽子着て神を守護する夏の魚　煙幸

江の島の刷毛で八景撫る也　吹唐
紫で岩から岩へさぐり足　丸龍
不斷行内を夜宮で門違ひ　青柳
江戸自慢是紫の色のよさ　雨江
首尾のよさ嫁江の島へ遊山旅　青露
まな板石へ七草の波がうち　菅裏
日歸りに鶴龜へ行きつい事　里松
相生の松の根じめは尉と姥　里鶴
一と雨はほめられて行夏の旅　一陶
波銭をくゞつては取る島子供　天作
島もふで先づ中食は萬年屋　富林
旅姿海士の見る目も耻しく　素連
相傘も男まかせの横時雨　織好
案内子の古歌もおかしき兒が淵　横好
柳から乘て櫻へ漕ぎよせる　一秀
包から屛風を出して子へみやげ　萬仁
辨天のよふだとはやる神樂堂　ヤマキ
同行は十五童子と島でしやれ　猿子
飛込んだ海士をせうがを摺て待　志夕
煙草呑む内も思案の庭作り　梁主

かたられたげなと渡邊笑はれる　谷水
辨天の穴へ子種の願をかけ　黄峰
兒が淵ぬしはたしかに海坊主　六川
江の島のしやれた土産は貝屛風　二蝶
衣までめでたく見える寶舟　舟鴛
村巳待とぐろかひたりそべつたり　豆人
裸でもいゝとお辨は貰はれる　魚川
江の島は濱に懸直のある所　喜丈
あを向て居なと突出し叱られる　枝成
十三里來るとぽつかり穴の宮　古竹
つる見橋あじに氣取て下女笑ひ　酒好
江の字から江の字へおさめ奉り　森鳥

軸

よろづ代も光り尊し金龜山　文日堂礫川

文化五戊辰年四月廿三日

願主　富林
　　　和里
補助　豆人

九會目　幾千女追善會　文日堂評

林では鶴も無常につかはれる　如雀
世の暑さ捨て蓮の涼み臺　萬旭
叱りたる卓に手向の阿加の水　若蝶
御忌中が明くと風引く一家中　里遊
當麻寺機の餘りが茶に成　里松
眞直な煙りも香の心より　猿子
延命は皆短命な子の御世話　如雀
しら鷺の一とむれ下る墓參り　市東
三年は軒に哀れな灯をともし　散売
信心さ祖師から廻る風車　梁主
蛤を座敷で拾ふひんのよさ　竹子
達磨墨摺て一行物を書き　琴我
重箱の內も手向の廿日草　二蝶
六字より十七文字はいゝ手向　紀樂
極樂の馳走蓮飯などをしい　哇道
路次口に法眼の駕慈悲な事　竹子
三笠山ちんぷんかんの中で詠み　同
十八を登りつめると軒の傘　同
十七字讀んで百度尋ねさせ　酒好
范蠡が頭痛にあたる大南　木賀

瓶を割る智惠も終には瓶の中　箕山
蓮咲ば人で緣り取る池の端　都柳
品のいゝ直打は月の名句也　竹子
一筋を九十は婆婆へ置みやげ　豆人
觀音の庭極樂へ通りぬけ　竹子
げぢ／＼を捨る團扇のいそがしさ　女文魚
惡もみな善にかへりし切の幕　梁主
衣着て行けど一向かまいなし　ハシメ
先立し子の年くどく繰位牌　煙幸
悔狀寺澤流で書て遣り　市東
石切も貰ひ泣するいゝ辭世　里松
夜も晝も不如歸と鳴て暮す也　谷水
時鳥寐言に云て名が高し　和恭
夜晝となく啼あかす郭公　串竹
品川を淺草で賣る海苔の庭　猿子
西と北こくふに花の降る所　賤丸
あす咲と思ふ莟に根切虫　豆人
精進の料理豆腐の七變化　黄峯
光次は業平よりも色男　竹子
煎豆に花は娘の二十つぶ　同

葉は菩提根は煩悩の眞菰墨　峯白
お袋の異見は二日坊主なり　竹子
嫁の狼御談議がきつい好き　里松
簾から編笠の出る氣のどくさ　猿子
極樂の役者金箔ぬつて出る　扇橋
談議場で居眠つて居る後生樂　豆人
六文で濟ば極樂安いもの　扇橋
こわ飯に目玉を入て涙ぐみ　森鳥
精進日看板門へ出して置き　丸龍
機下手な嫁へ姑のかすり島　同
悔みに行て先づと言ひ跡が出ず　賤丸
雪隱の家根にへの字はうつてつけ　二蝶
白酒のうまみは富士の腰に有り　同
間男といわれず和尙くやしがり　竹子
へんぽんと杣ふんどしを干て置き　同
屁の論に泣くのもさすが女也　同
六道の辻番で聞く西の方　畦道
五つ目と三つ目の間ひで下女は泣　竹子
送り火にきん玉迄がまかり出　猿子
十念の度びに天窓をおやす也　豆人

凡人へ普賢の濟度もつてこい　玉章

千之翁の娘幾千女ことし一めぐりの忌に當られしに此童女世にいませし時よろづの道にかしこくはた川柳ぶりのざれ句をもよく口ずさみ給ふものから此道を好める友どちうち集りつゝ思ひ思ひの句々を吟じて手向草となしぬ予もまた愚吟一句を吐てそのなき人を悼むのみ

譽らるゝ側から散るや芥子の花　文日堂礫川

角力十結滿會　忠臣藏一式題　文日堂評

富士は孝鷹は忠義の夜討也　雨江
富士と鷹これ忠孝の夜討也　一交
羽手本にして大名へ御預け　青露
鹽の恩水にせぬのは四十七　和恭
一世二世すてゝ三世の仇を討ち　弓成
鷹のさわぎに雀まで出る所　琴我
御馳走は上へ見ぬ鷲の武藏也　ヤマキ
大石の重みは四十七貫目　猿子
御馳走ち鹽の辛いが先不念　雨夕
本望さ一のがんぎへ首をのせ　玉章

しつゝりが鷹と雀でむづかしい　梅里
曾我と義士忠と孝との鏡也　砂十
一世二世去つて夜討の本望さ　牛賀
羽二重で始め木綿で終る忠　玉章
本望をとげて納めの十五日　森烏
九寸五分一歩も引かぬ國家老　杯舟
主の恨みを次平で晴らす也　如雀
石塔も大きな石が内藏之助　和里
臣は忠君は短慮に身を果し　都柳
首一つ五萬石餘の方たに取り　枝成
日本に二面とはない武の鏡　竹子
末世まで外に二つと無い巴　振袖
空蟬のもぬけの床を義士さぐり　黄峯
忠の字をいたゞき天はいたゞかず　靑露
赤穗まで大きなたかがのして行　賤丸
泉岳寺江戸一見の道具也　丸龍
尺八も一本入れるかたきうち　一德
五萬石しつかり抱て五百石　門柳
本望さこつくいの有る首を取り　丸龍
腹わたに能くしみ込だ赤穗鹽　志夕

腹わたを見せて一味の數に入り　一德
小夜衣から綻びは切れかゝり　亦樂
主従で四十八鷹名を殘し　森烏
鹽々と國をはなれる殘念さ　竹子
靈寶に武器たくさんな泉岳寺　舟鴛
孝よりも一倍多い和の忠義　雨江
御家老が惡ひと杉も枯る所　〆子
鹽あまく見て上野はなめ過る　若蝶
八べんを丸で討ち取る十四日　柳雨
初幟りほどにかほよは並べたて　一秀
金鐵の忠義を石で組み立る　一德
づぶ六の仕打末世の鏡なり　楚江
朝飯を四十七騎は陸奥で喰ひ　友牛
手向水一荷で足らぬ泉岳寺　舟鴛
聲を帆に上て似せ首岡を行　紀樂
由良之助宵の明星より光り　織好
藥師寺は次郎り〱とねめ廻し　古竹
弘法の作一字づゝ家老わけ　玉章
家老職心は錆ぬ赤いわし　斗丸
首のせんたく戰場と泉岳寺　山湖

吉良の寺あれかと指をさした切　美德
泉岳寺石碑はみんなちうみがき　森烏
いろはから工みは京のわび住居　五友
直義は眞向き師直尻目也　半下
木望さ間が鑓は赤穗也　丸龍
更科は月山科は星が晴れ　有幸
忠と義に扨松を切り竹を吹き　森烏
主の命金で買ひ取る白鼠　扇橋
鷹の羽の矢は一筋に桑の弓　牛賀
黑ろ吉の口へ喰はせる蛸ざかな　門柳
計略で置く魂しいは眞赤也　若蝶
赤穗の敵を熊野のすみで討ち　亦樂
うら表字配りをする假名頭　丸龍
いざ先づと和尙いろはへ粥を出し　里遊
鹽を出て月の名所へ名を殘し　一秀
大石のちからとも成るいゝ悴　ヤマキ
一門の顏まで炭でよごすなり　箕山
當分は御鉢卷をと外科は言ひ　山湖
下總へ上野の來る運のつき　其笠
江戸の本望京の字が無くて濟み　里松

星が出て淺の恨みを夜るはらし　木子
蜂の子の飛ぶよふに散る一家中　里梅
戒名の文字もつばなの穗を揃へ　亦樂
義と忠の重荷を送る天川屋　梁圭
鷹の羽を網へぶち込む不慮な事　和恭
綻びの元とは一首の小夜ごろも　竹子
る留だと判官あゝはならぬ所　杯舟
京の字に入れてやりたい天川屋　梁圭
目かくしとかくれんぼする由良と吉良　煙幸
炭部屋はおろか火の中水の底　一德
兼て好く道へ師直たのむ也　雨夕
いゝかほに迷ひせう〳〵疵をうけ　〆子
敵討最ふすみ部屋と義士勇み　一交
鮒のたとへに鯉口をぬき放し　二蝶
笛の音にちりぬるいろは寄て來る　市東
鷹の羽の越度は餌ばをかわぬゆゑ　串竹
御饗應鹽屋大きに味噌を付　木賀
高輪の花屋へ來るも〳〵後家　辻木
居續はまゝよかわよが相言葉　紀樂
毛せんへ乘つてもおかる名を替へず　自適

不破と堺よくも飛んだり數右衞門　若蝶
四十八からは不忠の家來也　志夕
蛸の意趣いわしではらす心地よさ　吹唐
萬昌院へ參るのは茶人也　丸龍
初手も色末もいろはのかたき討　散売
回向院すでに早鐘つく所　森烏
墓參り樒を九十四本買ひ　和里
定綻の知れない假名が四十五字　森烏
かんざしが仲人をする身うけ也　其笠
その年の市は本所へ皆廻り　玉章
本藏はゑんやらやつと抱留る　梁主
追ひ焚を朝から仕たは泉岳寺　和恭
翌年の公家衆みけんをじいろじろ　里梅
その外は鹽目の惡い家來也　和里
輕い身で重い一味の數に入り　斗丸
世上へ知れた若死は早野也　門柳
加古川が娘に小浪おもしろし　木子
九太夫は佐用姫とこそ芥子之介　二蝶
唯七は煤はき竹を賣るつもり　其笠
大そふな夜盜と思ふ回向院　豆人

權門でからくり的の大當り　扇橋
一力で性根をさぐる犬と鷺　梁主
了竹は娘を餌ばに犬と成り　里鶴
鯉口を鳴らせばちやんと起き直り　志夕
侍の犬もやつぱり椽の下　糸道
めつぽうな棒が番人大當り　豆人
かんざしは忠と不忠の間へ落ち　酒好
重いのはいの字輕いはすの字也　竹子
首と胴萬昌院へ二度に來る　玉章
多葉粉屋はいつちはむきのいゝかん者　木賀
かけかまひ無い人迄もうれしがり　市東
手を出して菓子をいたゞく下戸仲間　吹唐
裏門を主稅まかせにぶつくだき　舟鴛
御屋敷計で喰へますと煙草や　玉章
九段目の切へ地口を一つ入れ　柳雨
いゝ時に煤を取たと泉岳寺　市東
蕎麥屋の口書御火消と存候　玉章
迎ひ駕女房泣く／＼祇園町　木子
どら打つも敵を討つのはかり事　谷水
銀ならばいゝと九太夫手をのばし　畔道

逆疵も後ろにかゞる物でなし　マイタ
主殺と力彌従弟だと知つたふり　香貞
くるしさは蛸の交つた反吐をはき　一秀
朝歸り敷居のひくい由良之介　山柳
牛込と芝へわかれる首と胴　雨江
鐵炮と矢狹間の間に小提燈　可笑
由良鬼は手の有るやつをとらまへる　扇橋
門番の奴あら身で先づためし　雨夕
九段目の口だと草鞋はいて出る　畦道
女房を賣るは忠義の六段目　同
けんどんや初手は押込だと思ひ　マイタ
大石の子に主殺とはきつい事　志夕
勘平に狩人の成る村芝居　畦道
生醉のさんだんをする由良之介　竹子
村芝居蚰の目にこまる定九郎　同
大星をすつぽんにする七段目　山湖
上野こまれては叶はぬと炭部屋　森鳥
津波ほど鹽の押込む一と屋敷　青露
壹人りでも女の死なぬ假名手本　谷水
長持へ義士々々つめる天川屋　亦樂

杉へ隱れるとほつても知れぬ所　雨夕
泉岳寺納所ぶる／＼し　巾布
上るりに仕ても苗字へ鹽を入れ　丸龍
平右衞門妹にひどひ無心なり　梁主
下女も調布も名の高い假名手本　和恭
勘平はおらがすべいと村芝居　紀樂
寐ぼけたで四百七人程に見え　有幸
赤穗記を下女あく桶と聞違へ　柳雨
其店を大屋自腹で跡祈禱　豆人
尋て爰へ來る人は下がり取り　丸龍
黑仕立島の財布へ聲をかけ　有幸
大星が智惠女郎やに借りが出來　鷄子
主人相知らず勘平色狂ひ　里鶴
秋の月梯子の下で由良拜み　鷄子
鰒に當つて死んだのは定九郎　和里
吉良はれる主も家來も横れんぼ　梁主
五十兩しめの財布だなどゝしやれ　森鳥
了竹は伊五に甘草いたぶられ　素連
福來るすなはち死する野鐵炮　亦樂
七段目わさびおろしが骨を折り　其笠

・ともし火消さじぬらさじとそばいそば　柳雨
すみの一もく打て取り功をたて　森鳥
精進を落ち用心を止めさせる　古竹
勘平は四十七騎のしいなより　枝成
其あした幾世淡雪賣り切れる　玉章
ちゝくつたむくひでおかる祇園町　雨江
野良之介どのとせなあは覺えてる　木賀
下女が戀りんきばし仕てぶたるゝな　春駒
九太夫は手の裏へ踏む猫のふん　豆人
其あした穴ほり肩へ灸をする　山湖
瘦せたせと力彌をなぶる義士仲間　梁主
爰を仕切てこふ責て鼠狩り　里遊
伊五そんな馬鹿をするなと叱られる　一交
伊五を呼ぶのだに芋賣わつちかへ　豆人
播磨屋がたば粉はいゝとうつそりさ　門柳
抱とめた人の娘を抱きしめる　一秀
炭部屋で先づ四十七くらわせる　木賀
藥師寺は茅場町だとこけまじめ　ウロコ
山とかければ山といゝしめられる　玉章
此かい道の夜ばたらき鶍い鶍　散売

鰒に當つて即死とは天の網　綾丸
下女のりん半鐘ほどな聲を出し　一聲
門番を切るは餘けいの仕事也　扇橋
とんだ事穴堀九貫四百しめ　斗丸
はへぎわを見たで師直氣が違ひ　マイタ
あんどんを下げておたふくどふしやうの　山湖
村芝居おかるきん玉ひよくら出し　猿子
行安は小浪にはいゝ引手もの　糸道
あら浪を使者二の段で割はぐり　〆子
だなはんを取つた〳〵と猫が來た　扇橋
鐵炮疵には似たが是は毛切れ　木子
炭部屋の屎が師直たれ納め　豆人
鬮て夜討と定たり下女が部や　黄峯
是も無ふんと本所の檢使言ひ　丸龍
遲刻したわけはおかるに二つ玉　志丸
きたない最期白無垢が屎だらけ　美德
ホヽヲそれにこそ手だて有り帶で這ひ　斗丸
氣のきいた下女は夜討に色と迯　酒好
うろたへて拔身をふつて迯て行　市東
ぱつかりと割れたをたつた一夜切　古竹

おやかしたよふに大小となせさし　其流

右相評自句勝番の分

忠臣の鏡くもらぬ天下一　文日堂礫川
武の手本末世に殘るいろは塚　同
前表は兜の數も四十七　同
いたむべし四十七八後家が出來　同
進物の鹽屋がゑんや手ぬけ也　同
繰返す文へびつくりこぼれ松　同
二階にて讀み取る文は左り文字　同
疊へいろは書た翌す夜討也　同
子に迷ふ鶴の巣籠り吹て來る　同
物したを又物される定九郎　同
風雅でもしやれでも無いが錢がなし　同
言ひわけに返魂丹はきかぬ也　同
蕎麥を喰ひ仕廻つて一句出來たわへ　同
その時の蕎麥やとちめん棒をふり　同
鷺のまねする鷺坂がつかみづら　同
ずぶ六と見せて心はゑひもせす　同
・傾城の名におかるとは四六めき　同

その首を寺から貰ふごうざらし　礫川
いゝ娘もつたが與市兵衛いんぐわ　同
士いの女中が來たとりんさわぎ　同
利口だと伊五ひや飯を喰ふ所　同
猿松が能くよし松をあそばせる　同
すわ夜討下女や座頭か逃るざま　同
夜討だに下女豆どろぼ〳〵　同
紫色鳫高我開とはおもしろし　同

誹風柳多留五十篇　終

俳風柳多留五十一篇

序

月に名高き地名を名のる武藏野といへる茶店に、月月催してうみ出せる前句は朗にして新月のごとし、これや、紀の納言の月の光を賞し給ひて、皆我家の光を爭ふと詩賦作し給ふも、諸雅君の秀詠に高名を著さんとしたまふに髣髴たる事にやと、三五夜中の月ならぬ五十一篇の柳樽と成すと、月に隈なる愚言を

菅裏述、

文化七秋

ヤマキ評

有がたい御製菜の雪稻の露　青露

燒筆を忌む松の畫は五百坪　礫川

勅額のひかりも花の雲の上　有幸

上み掛りゆゑ御肩衣拜領し　里松

孝の德櫻へ鬟を入れさせる　春駒

螢に心飛ちらず卷に成り　玉章

二つ無い山を唐歌大和歌　箕山

琴箱を棚からおろす國家老　礫川

角力を連れて投られに御通ひ　如雀

時雨では百首月では物がたり　シクト

仇は舟恩は車へつんで行き　マイタ

歌はうちまき發句では米を下げ　如雀

梅の近所で澤瀉も匂ふなり　春駒

正直のかうべの輕い神無月　マイタ

實にならぬ客山吹の花もなし　有幸

雪降りに出るは和漢の孝不孝　是樂

首つ引どちらも負けぬ二見潟　里松

こくうに花ふり音樂で息子しやれ　和泰

山吹どこかこうぬれた見やあがれ　香貞

やぶれ後こうで新町のみだへ行き　玉章

爪音を司馬々々きいて引かへし　青露

嫁の里廓といふ字で内がもめ　其流

夜ひと夜寐せぬが宇治の馳走なり　有幸

道成寺おらが地主と大家ほめ　酒好

大げさに芝へ六夜をぶつかける　一德

七十に成るおどりこも孝へ入れ　柳雨
こくうにもてるは月の出るしたぢ也　玉章
さはらば落ちんふせいにて茶やはやり　同
黑髮と友に捨てたる陣扇　梅鳥
二代日はたいこのまざる夷講　箕山
木娘も最う花の唉くふりが付き　木賀
惣座中罷り出候春二日　青露
武藏坊あたかを越して舌を出し　礫川
月のためとてまん丸いうそを書き　孤雲
きやつほれたなと思つたら月の事　一秀
客こそ見へね秋の來るつらい事　シクト
舞臺の笑ひ三階へ福來る　菅裏
いはずかたらず引出しへ貳兩入れ　礫川
新しい通ひの口に古いかけ　里遊
植るのだのに道普請かと淺黄　青露
ぶんごをばよせと梅干親父言ひ　豆人
鯉の反吐太郎の犬がみんなゝめ　礫川
初雪や供はいやだとでつちよみ　散壳
持參嫁たとへる顏にこまるなり　梅鳥
御局の˙相亭主をふみつぶし　木賀

土弓場の與市官女の尻を射る　巾布
文日堂評
又も此世に二人りなき御容顏　雨夕
源平で文武名高き物語り　同
花のほか小倉へ秋の御幸なり　同
結構さ御庭に木曾路無いばかり　是樂
富士見の御藏ら寶田の舊地なり　菅裏
夜が明けたばかりで殘る竹生島　藤後
一里餘の御門々々と通辭言ひ　雨夕
天人も唐人も來た富士の山　玉章
きさごでも仲尼はよせとのたまはく　雨夕
大きな山を言つたのは徐福なり　同
國々をくぼく見て居る唉耶姬　玉章
紅白の粧一チ夜に二度作り　マイタ
千年も用る札は木で出來ず　如雀
太神樂嫁岩戸ほど明けて見る　菅裏
娘の身沈むと親の脈が浮き　一秀
南朝の石ずゑ動きなき名字　玉章
唐崎の雨で比良のゝ雪を消し　青露
唐崎は中の頃からくもるなり　散壳

伜の替らでつもる咲耶姫　一秀
扇屋の要もちろん三分金　有幸
元和から武器は納まる藏の内　春駒
御茶の水禮樂射御の地を並べ　同
野の月とよんだはぐつとむかし也　玉章
巳にあまり時政家の紋にする　同
清麿はうさをはらして歸參する　巾布
鵜の跡美人天上より落ちる　一德
廣有の時は端女も下だされず　如雀
月令に芋が鱣の事やある　柳雨
鎌倉殿の嚴命で緣を切り　礫川
花嫁へすでに拍子をすゝめけり　其流
義理時宜をのべて熊谷首を取り　木賀
廿八程で北斗の地を離る　香貞
これもちは其以後はたと禁酒也　和泰
木枕もなくて顏淵だゝを言ひ　酒好
狩野家にも土佐にも畫ぬ仲の町　青露
闘一つへだて羽帚鍋の尻　如雀
富士と傾城は夜る見るがよし　玉章
物申と言ふと小督は彈きやめる　青露

世の中の秋の哀れは知らぬとこ　未學
國々を手の平で見る米問屋　木子
初午に牛の角から書き習ひ　里遊
菓子屋には月女郎屋は朝日也　春駒
松の下迯げた時分は手長猿　同
傾城は一生知らぬ親の恩　里松
羽織の裾へすわり御歸りなんし　玉章
唇へ反りをうたせて紅粉を付け　マイタ
元とより藥りはき物をこねかへし　木賀
足元のまつくらな內月を迯げ　是樂
ひつとりも地者を入れぬい丶田植　如雀
晝前の禿は首を縊いだやう　ヤマキ
裾繼はせんたく島の近所なり　藤後
主づかつせへとおどける大一座　ヤマキ
さりぬべき傾城は皆下戸が撰り　如雀
馬の屁のみけんをかする小侍　柳雨
安藝宥あたまも三味も馬で來る　里松
南無あみだ佛と屁をひり芋を喰ひ　巾布

春駒評

藤の字を七の字にして御建立　是樂

井に板がないとあぶない家督也　柳雨
売で胴突いて國民の腹つゞみ　散売
六郷の内に九合の山ひとつ　礫川
あつちらを向いて鶉は餌を拾ひ　其流
蒸籠で智者と役者ははたく也　和文
色事の與儀も逃ろ〳〵なり　遊高
暮の嫁なんぢを呼ぶは金の事　ヤマキ
美しいはず世ざかりに來た女房　シクト
謠講猪牙に乘るのは下もがゝり　ヤマキ
門番に玄徳のゐる御小身　如雀
おいらんの事を太夫と申とかや　雨夕
地主は頭痛大家様杖で出る　木學
旅の留守ある夜ふしぎな咳拂ひ　雨夕
かんきんの聲と河東は大違ひ　如雀
釣りがねをぐるりと廻りおして見る　巾布
ふく水をぼんに返して五兩取り　シクト
涼座に蛾眉をひそめてる心待　是樂
のまぬやつそうさ〳〵とばかり言ひ　マイタ
いかんともすべきやうなし又ふられ　ヤマキ
庄屋殿草を分けての聟ゑらみ　梅鳥

先づ端の附木から突くへぼ將棊　礫川
醫者へ行鼎を犬がやたら吼え　同
すはろうせきと辻番は戸を押へ　里遊
御神徳花や芝居の目を明石　玉章
詫言の側にしほれたかきつばた　ヤマキ
うぬめは晝の煙草やと渡り合ひ　礫川
菊月の十五夜に來るけちな客　同
しのび三重で蒸籠かつぎ出し　マイタ
碁盤の側に急用と書いた狀　礫川
賣のか買のかしれぬ拂合羽　同
されども此人代金三分なり　高輿
孝行の次第を重い二字で賣り　其流
殿樣とじやれて斗か居る猫の皮　里梅
石山も比良も承知ときつい奴　和文
歌がるた小町もとれば穴が明き　指安
源氏は借家百人一首地借書き　玉章
今ひよぐりさうに葬杏んでる　横好
ぼた餅をはらぶとにして手におへず　礫川
まだ跡にこりやと淺黄の三會目　同

文日堂評

豐さは石の鳥居の丸洗ひ　雨夕
梅が香は武鑑にしるき御大祿　横好
透き通る外に三十二相也　和文
千代迄もはたちでふけぬ不老不死　木賀
入り海の弓手は筑波馬手は富士　梅鳥
三味線も琵琶も近江は名が高し　一秀
富士山をごとくにかけた三ヶ國　都柳
平地だと榎を九本植る山　シクト
孝行のほまれ名酒に名を殘し　雨夕
折鶴のめでたく出來る藥紙　ヤマキ
男べしならば落馬を語るべし　横好
足跡を見て世渡りの道が明き　箕山
桐の木に花を咲かせる國家老　ヤマキ
辛崎でぬからぬ旅は雨を譽め　雨夕
松風の音に仲國駒をとめ　和文
薄雲が座敷は伽羅で蚊をいぶし　有幸
眞崎にすゝんで息子のつゝける　ヤマキ
此列でどつと押さうと寺を出る　青露
釣り上げた蒸籠中がいつかすえ　如雀
燕の子白い鳥が出て助け　菅裏

るいせつの内で見て居る後の月　里梅
啼かぬならひつかき殺せ時鳥　横好
姫をこわきにかい込んで糊やのり　里梅
賴政を留守居にたのむ切落し　マイタ
みかん籠家根へおつぷせ手をはたき　巾布
いそがしさ濡手でけつを扣くおと　玉章
甲子を祭で寺のびんぼうさ　高輿
楊枝見世四五軒笑ふ神馬の屁　雨夕
お百さんごさかんだねと戸へもたれ　ヤマキ
御不勝手ぶち殺すやらいかすやら　巾布

川柳評

七十有五國に杖つきたまひ　礫川
御利運はすき鍬で堀る耳の穴　同
すみを火へくべたではねた上使也　柳雨
片桐も淀へ申すはくち車　雨夕
人間の目貫三寸二たところ　青露
ふてへやつ不成就日をつくり出し　玉章
二十一史のはな棒にいゝ女　礫川
甲胄の儘で巴に緣に付き　玉章
初手五百鐵砲聲で叱り付け　礫川

生酔をやれ〳〵〳〵と落手する　柳雨
山しなは石が枕を割たとこ　シクト
名曲ではんゑきは首棒になり　青露
留守居茶屋扨萬八な娘來る　礫川
なぞ〳〵で忠守脈も見ず歸り　青露
蜀の棧道燒けぼこるはかり事　菅裏
野良か坊主かわからぬは茶せん賣　梅鳥
あばれ喰茶飯一と鉢平どんし　如雀
桓武天皇十代は海に有り　一秀
旅送り青山通り氣がねえの　菅裏
三味線で親兄弟をひきたてる　玉章
たいこ持あるひはいさめ又しやくり　里松
朝歸りまづ門どロに角大師　春駒
質草につきて息子も蓼を喰ひ　遊高
東雲の黄昏を下女棚へのせ　其末

雨夕評

僧正も其日は梅の珠數をもち　如雀
泰平の小手は錦の善つくし　春駒
歯をかんで十月待つてる國家老　礫川
此杭は西へ打てよと太田言ひ　箕山

鹽鶴になつても下りる場をゑらみ　マイタ
どつちへも二里行てから閑子鳥　春駒
両方へ杖と杜を眞田分け　青露
一富士二鷹親の仇主の仇　柳雨
西王の桃東方でぬすみ喰ひ　玉章
螢火で直なる道をたづね出し　ヤマキ
けん脈で張良四百餘州治し　香貞
四百づゝ両方へいふ仲人口　里松
そろ〳〵と母が手を引く山盡し　三松
千早ふる御捻りもふる美しさ　礫川
利いた温泉を女房たちまち水にする　山猿
山吹を貸さず藏宿傘をかし　春駒
人に見せばやおいらんの田植也　和文
新造の落し咄しは落ちこぼれ　礫川
不二見やげ女房からんだ事を言ひ　同
冷飯を見て一同にあたゝまり　ヤマキ
よめの膝月雪花にかこち顔　箕山
切れ文を見せて女房に鍵をかり　散壳
ふつて締るといふ儀にて帯をやり　横好
よし原へ不二の裾から息子ぬけ　梅鳥

朝歸り面の十ある女房出る　箕山
君の寐姿後ろから一分そん　和文
食するに語らず信濃五六杯　是樂
引つぱるとむかご隣へみんな落ち　青露
そりや坊さんが居なさると水鏡　里梅
もてぬやつ待かね山の烏なり　如雀
扨はうたがふ所なし月の事　高與
足づくで取る給金はこんにやく屋　梅鳥
花の朝下女下の句で飯を焚き　玉章

文日堂評

金玉の論を大久保申上げ　玉章
柴船で火の付くやうに御通ひ　柳雨
御舞臺へあづまからげの錢をつみ　春駒
富士郡御化粧料に能い地名　青狸
血達磨に成て月夜に御退出　如雀
天草勢を馬鹿にする御紋なり　菅裏
天晴な智恵戸隱の謀事　里松
裾野へは勘略でない勢子を入れ　木賀
ぬれ手で秘書を摑んだは張子房　如雀
商のつるを守るはつるがしは　是樂

腰押も腰抱きもした武の内　玉章
歳暮には濱荻年始かきつばた　有幸
山吹で桔梗をじらす俄雨　如雀
しつゝこい笛の音のする驪山宮　玉章
こと〴〵く和氣を奏して不首尾也　青露
見給へと海棠の雪仲人取り　山猿
春日野と傘をさそならきついもの　和文
かならずと扣く磁石のはかりごと　山猿
御せう德普請の好きな太子なり　横好
薄雲で海老屋も鯛を釣りげなり　如雀
聟一人おもふ人なき隅田川　青露
唐崎は曇り石山さへて居る　梅鳥
きつい事一町二百兩のあて　玉章
短命な塚長命の近所なり　狐雲
笠に笠かさねて宇治の晝休み　梅鳥
指の尖ぬく内横を向いて居る　孤雲
だいの虚言を書仕廻ひ萩野ヤア　箕山
あま鹽のゑぼし歳暮の祝儀なり　其流
紺足袋でふん張て居る安烏居　巾布
尾かしらを聞かれて困る海鼠賣　マイタ

井筒にかけしまろがたけ下女笑ひ　青露
狐のぼた餅新宿で市がたち　玉章
堀の内道に鼎のぬけたやつ　如雀
やうやくと天窓がなへて鼎ぬけ　青露
人面じうしん聟どのやく〳〵　横好
たのしみいまだ半ばならず御迎ひ　菅裏

川柳評

駿足は弓矢の神を的にかけ　玉章
鐵砲のかくをはづさぬ御出立　是樂
千早振御歌洛中立さわぎ　ヤマキ
往てい亡す日なりとて御出陣　礫川
君命をはづかしめぬは乳兄弟　横好
意氣を三千いはせぬは始皇なり　菅裏
梅の花宗に任せてずつとよみ　礫川
植ずとも花の里だにかつぎ込　同
惜しむべし重盛一人ひつそなり　青露
袴をたらし兄嫁に懸想する　横好
船橋へふはと乘たは信雄勢　木賀
萬歳は明き地もないに建てに來る　横好
目が明いて見れば南無三賣れ殘り　如雀

石菖を巻くのが鍛冶屋仕廻なり　巾布
草木黄ばみ息子は工風なし　玉章
三丁目まんぢうの外にがい見世　里松
どつからか鐵砲を出す疊さし　礫川
切見世と船宿の部はよんで見ず　巾布
もてんとすべからずふられじとすべし　如雀
ちと御供いたさうと聟なじられる　礫川
初芋の元手遣り手にかりて來る　有幸
何となく惜い姿を遣り手もち　礫川
順をよく死ぬのが姑むねんなり　青露
白無垢を圍れやたらかいで見る　礫川
我内へ間者を遣ふ朝歸り　三松
急ぎ候ほどに田町からねだり　玉章
遠くのていしゆより近くの他人也　散売
扨はじまらぬ物かげまの年ン明き　礫川
傘はかゝあがねえとぬかしたり　里梅
入らぬ事むせうに下女が瘦せたがり　其流

當日即言五題
川柳評

冬角力預つたのも木村なり　孤雲
はん昌さ空八百里建つゝけ　柳雨
角力好き入歯の工合くひ違ひ　里松
人込みをあたまの歩行角力取　里梅
散る花を帯でたばねた勝角力　有幸
今死んだやつ新道へ顔を出し　是樂
傾城の半途で出るは手がら也　同
どうかしたさうで遣り手の高笑ひ　香貞
大一座のむやつ中へ〳〵と出　マイタ
百両へなまぐさに付く暮のよめ　同
萬歳にびつくりさせる暮のよめ　如雀
尻に敷き金持参する暮のよめ　山猿
暮のよめ百人並とぬかしたり　ヤマキ

文日堂評

日出たさは此上もなき富士の夢　梅鳥
あづま下りの名鳥は片羽がひ　玉章
結構な異見障子に花が咲き　同
御本坊經よむ鳥の宿も有り　孤雲
方圓の懸桶で出來る江戸の色　マイタ
海棠をあざみに書た毛延壽　雨夕

書林共奏の役所へ皆呼ばれ　横好
花嫁の禮を見捨て歸る雁　青露
夜る顔の花はまがきに三時咲き　和文
百韻を隣へ出して他出する　如雀
うつくしい富士三日月が二つ出る　和泰
よし原の近所菩薩も文使ひ　如雀
三つ蒲團仕立屋迄もはだをぬぎ　同
鞠崩れ衣紋坂へと流すなり　玉章
木食の馳走梯子をかつぎ出し　香貞
のび〳〵と木綿ぶとんに歸り花　梅鳥
餅で仕た花に女房の嵐なり　シクト
美濃を張り近江を替へるいそがしさ　如雀
五分々々の不沙汰は寸の隙がなし　和泰
雪の朝親仁大工につもらせる　里梅
めづらしい忠義主君をぶちのめし　玉章
初剃に金百疋は福祿壽　有幸
船遊山神代もたぼを一人入れ　同
百八の内五六十嫁のこと　里松
將門は朕をわすれてわんと言ひ　松雫
江戸の金四つ手で運ぶ銀世界　其流

綱を引張て島田を寄せ付ず　青露
松葉屋へ行て女房にいぶされる　和文
すきんせんやうで隣できやつが聲　横好
いけすかぬまゝに硯に向ふなり　如雀
市に行き息子疊をしよつて來る　倡中
猩々の子をとめ糟で飼て置き　和文
見ん一が上つたらばと小町言ひ　横好
故事の有るあくたい馬鹿と阿房也　里松
提灯の張替をするいゝ女　春駒
きたない根性尿を蹴る大三十日　雨夕
文六に買はれた夜鷹くやしがり　玉章
鱣屋へ古提灯を張りに來る　春駒

川柳評

御利運は關八州に八をかけ　里梅
隱れ居る願は廣く出やうため　春駒
春日野も笠の骨程さしちらし　礫川
虎の尾を踏んだが石田百年め　同
百兩は塔より高い願ひなり　是樂
拍子木をぶつちがへたるひどい積　玉章
駕へ乘る嫁身がまへのむづかしさ　礫川

百の口少將ぬけたお顏つき　礫川
餅の皮むかぬは小松殿ばかり　横好
ぶつさきの下たで肩衣ひぢをはり　香貞
俎豆をつらね四人詰め一歩なり　春駒
日は西へ息子は北へぼつしたり　柳雨
見切りのわるい勝負師は英布也　横好
梶原が歌を讀むのは疵に玉　ヤマキ
日が暮れてイヤあんどんを張らうぞよ　礫川
ちく生の皮をかぶつた鬼童丸　玉章
寒念佛蒟蒻の蚊屋につき當り　礫川
おすべりの馬は飼料持參する　山猿
十三日獻立までがごみ〳〵し　礫川
師の御坊だけにやけども仕給はず　横好
いけづるくおいてけ堀に聾居る　松雫
穴物で寺の男は安く住み　礫川
炭をつみ〳〵むいて居る面の皮　青露
すがゝきは異見のあはぬ調子也　有幸
村芝居百俵以下の工藤が出　マイタ
産時はもう是切りとおもへども　孤雲
入聟は居候にもことならず　ヤマキ

すつぽんのつく〴〵思ふ放し亀　礫川
四海皆兄弟などゝ腐儒たおし　菅裏
鼻くたの下女で今年は静なり　松雫
儒者だけにかゝぬは義理ととくびこん　萬仁
是なしに下女いづくんぞなびかんや　如雀
悪い事ばつかりわれてうせながら　礫川
鼻の穴くじつてなめて叱られる　同
鐵砲の玉は五年に十匁　梅鳥

武藏野茶一題
文日堂評

武藏野は諸國名茶の寄り所　有幸
珍客を寐せぬが宇治の馳走也　菅裏
武藏野で賤山吹を客へ出し　有幸
分限者の茶には山吹きつい事　里松
はやる茶屋外と迄客も奓えこぼれ　ヤマキ
宵に鷹のんで雀の聲をきゝ　雨夕
色も香も能うはかくさぬ鷹の爪　萬仁
御ゆるりと言ふが茶みせの花香也　横好
氣に入つたさうで見合も茶を譽める　同

茶畑を積政勢がふみちらし　萬仁
古井戸へはまるはとんだ茶人なり　シクト
茶屋娘理不仁よけをしめて居る　横好
鷹の爪呑で隱居は氣がそれる　ヤマキ
しぶい茶は親父お袋甘茶なり　菅裏
連れもなく一人り茶を挽くつらい事　里松
何時と聞けばあをむく田舎茶や　萬仁
人を茶に仕たと梶原くやしがり　雨夕
ばあさんも煎じ出されるはやる茶や　ヤマキ
茶は出しで娘をのみに淺黄寄り　里松
すつぽんと月下妻と宇治の茶師　有幸
茶を取りに乳母廣島を持て來る　梅鳥
馬の小便は番茶の名代なり　シクト
扨明ばんは茶臼だと講師言ひ　マイタ

武藏野額會
川柳評

宇治へ茶を移すははるか後ち昔し　萬仁
牡丹散る頃に名茶を摘みはじめ　同
一と聲は茶つみも笠をかたむける　梅鳥

茶の種を植たかこひにけんねん寺　ヤマキ
今は昔と茶に書いた宇治拾遺　雨夕
入唐を茶にして明恵持て來る　シクト
口切は利休の像へ先づそなへ　礫川
世を宇治山を喜撰とはおもしろし　同
世の中を茶にしてくらす四疊半　ヤマキ
うつむいて茶をきつすのは其二人り　玉章
武藏野の見世に茶碗は田毎程　マイタ
錦手で呑むのへ仲人ゆびを指し　礫川
口切や山吹色の事といひ　萬仁
茂林寺に有るのはとんだ茶がま也　箕山
傘の斷り山吹をくんで出し　梅鳥
あたへ千金山吹の醉覺まし　同
六人の内に茶坊主一人り入れ　シクト
餅も茶も扨阿部川は惡るく無し　礫川
武藏野はつきのよいので客が有り　萬仁
繁昌さ見世はぶんぶく茶がまなり　同
武藏野で能有る鷹の爪を出し　有幸
福茶をば梅干親仁やたらのみ　雨夕
客を茶にしてお茶を挽く安女郎　菅裏

口說かれて宇治々々とする茶屋娘　里松
前だれの内ぞゆかしき茶や娘　萬仁

文日堂評

眼のどくを急に仕立る御立身　横好
唐迄も知れたは富士と三笠山　和文
松竹の蒔繪で鼓名が高し　同
よき折に咲て名高いかきつばた　有幸
梅は龍さくらは虎の名を殘し　マイタ
三國一の横丁は三井なり　横好
本店と出店の間に淸見潟　同
湯王の盥むだ書世に殘り　玉章
喰かけの芋を忠盛拜領し　如雀
細見を釣した樣な淺草寺　シクト
花やかなはづ扇屋の御しよく也　ヤマキ
桃の御所六位の席によめ娘　萬仁
明る日は愚札を呈す三會目　如雀
持つたが病ひ又湯治々々々　偶中
しんこんにてつして嫁は十三里　ヤマキ
突出しはかうべをたれて見せを張り　萬仁
ぶち殺しても役にたつ猫をくれ　ヤマキ

寐ころんで聞くは女房の異見也　有幸
吹売で狸正躰あらはれる　萬仁
朝歸り同道人へまづ預け　巾布
手みぢかな戀よまん同士かゝん同士　松雫
きんたまを產んだ釣り方御取立　玉章
とゝの目を仕て見て鰹直を付る　有幸
方丈の何かゆかりの大黑屋　横好
くどくに利あり茶せん髪芝居好き　玉章
分別の外で伊勢屋も五兩出し　萬仁
むや〳〵の關をおろぬくてんや者　横好

川柳評

御加增の加の字を馬の上へ乘せ　孤雲
かれ是と夏を隣によめの禮　礫川
六夜には扱能所と市の正　ヤマキ
秀吉をそろりとはめる紙ん袋　偶中
奥家老七日引込みなぶられる　礫川
殿ばかり安い妾とおぼしめし　ヤマキ
もろ〳〵の米を焚いてる社家の妻　紫
口偏に空おそろしき起請文　礫川
振袖を振つて娘ひよんな顏　同

妾が兄馬場へ召されて疑惑する　礫川
息子もう地利を考へ中田甫　ヤマキ
嫁の顏かゝあが寄つてなんを付け　萬仁
跡で聞きや肝のつぶれるさし身也　礫川
嫁はないはず是々のわけだ物　ヤマキ
梯段子おめいて登る大一座　礫川
皺に成ますと火伸しをふり廻し　如雀
わらでたばねても男の見る棧敷　紫
兵書だにまご子と讀んで笑はれる　礫川
にくらしい新造だつてきゝいせん　同
知るよしにかりに居にけり迯たやつ　シクト
奸通露顯三百目ふんだくり　礫川
供先でわつ〳〵と泣く小侍　同
どこがいゝやらごてれつを可愛がり　同
いやなやつ水など汲でやりやアがり　同
鹽がつをぱつかり明けて嗅いで見る　同

文日堂評

たいまいな金のかゝつた笠を召し　萬仁
秦の闇み魯國の壁であかるくし　木子
言偏に成りたけ盡す孝の道　マイタ

息才は人の盗まぬ寶なり　是樂
二ヶ國へ一夜に出來る父母の恩　里松
不老不死たもつは今に二十山　萬仁
ありがたさ手偏に別の依怙はなし　酒好
咲耶姫九重ならぬ雲の上　マイタ
上みの句で其角は下もの苦を休め　有幸
鶴の極官腰黑に赤烏帽子　美德
花の名に和漢の美女の唱へあり　青露
髮剃砥韓信よりも氣が早し　マイタ
十分に斗り九合へ徐福來る　雨夕
月は譽め雪にはこまる不破の關　萬仁
相槌が母でなまくら者になり　如雀
御姿のこけつこつこを御用ひ　横好
あつく成り火焰玉屋へ通ふ也　松雫
序と切りは三河太夫に伊勢太夫　香貞
男女席を同じうせざるは初會　菅裏
石を見て木のやうになる鶴ヶ岡　里松
大あくびがつくりゆるむ笠の紐　雨夕
竹馬を裏へ引込むかゝアたち　梅鳥
鬼灯を串ざしで干す提灯屋　有幸

三味線のいろは三河の泊め女　一夕
衣川茶臼に歌を詠んだとこ　古京
睾丸に縫上げの有る狸の子　和文

川柳評

金銀は將棊でばかり御手に觸れ　里遊
すでの事御家も原にする所　ヤマキ
其身迄次第に重き御てう愛　同
六づかしく成つたはかねの出入也　松雫
花の山よろけたる武士五六人　ヤマキ
評定に刑部はぐつと中へ出る　同
さなきだにうかれる町へ花を植る　礫川
はつ雛のあるじ盃しやぶつてる　同
雨いとふふる夜其角を盛りつぶし　水砥
神樂堂上手か下手か解せぬなり　萬仁
こき交ぜたりんき三月十五日　孤雲
蒸籠をおろし軍を餅につき　和文
木に竹をついでわかるゝ聲同士　扇橋
輕卒を四人り連れて息子出る　マイタ
此返答に行きくれし夜具の事　同
さし樣の指南して借す破れ傘　菅裏

萬歳主従こけおしの强いやつ　玉章
牛が淵のろ〳〵歩行き叱られる　横好
かまぼこを帯へはさんで下りんす　礫川
朝歸り下女おはむきにつんとする　ヤマキ
御不勝手障子ぶてどもたゝけども　同
たんすから炭が出るとは思はれず　夕可
傾城の屛風は夜具と大違ひ　玉章
いつ見ても壁土番所すたを切り　礫川
はやい所ろがそれよしか五兩だわ　同

俳風柳多留五十一篇終

俳風柳多留五十二篇

此篇は麴町の句合、暫彼の室に入て冬を越せしを、巣鴨なる柳の雨てふ雅君のめぐみによりて再び催しなりぬも、是や彼春の柳の芽を吹しを見て、誰が家にか麴塵を曝とのべしも、此會麴莚に發起し、持柳だるの表號によれるやと、五十二篇序にたはれ言を述ぶ、

文化八春　菅裏

柳雨評

一と聲は鶴にも恥ぢぬ雲のうへ　弓成
おもしろく敵をあざむく撥と爪　亦樂
雑煮も喰はず御用心々々々　其流
削る字の跡へ其文字書く才智　其末
白式部でも書きさうなものがたり　互帆
雨漏りの遷都の供奉に嫁は立ち　木賀
明き手から煮え湯は金吾中納言　亦樂

千鳥取るはごはにしきの陣羽織　斗丸
親のよく日か知らねども持參金　亦樂
下女御供春狂言も藏衣裝　有幸
仲の町空にしられぬ雪を植ゑ　古丸
明かぬはず貧家の幕で金支へ　春駒
さううまく行けばい丶がと吉田書き　木賀
出來立の髮へばらふの日が當り　桃栗
水溜り柳絞りの風が吹き　畔道
里の母女鬪羽で五月來る　散売
同順に近付きでない百左衛門　春駒
言ひしほが惡く女房に聞干され　雨且
湯の盤の銘に曰く此ぬしさん　志丸
匂ひぬる哉を一枚下女は取り　言者
耳に沓口にはゑぼし身に袷　木賀
べら坊にうまいとほめるざつな客　蝶々
うろ覺えあわぢを崩しこまつてる　由香
猫なでの姑に嫁の鼠舞ひ　世夢
鐵砲見世に鑄直しの玉計り　其末
五つはられてさいかちの髮が出來　志夕
向ひ風嫁うつかりとはづかしさ　マチ名

前足の屁で跡あしは極難儀　木賀
前の屁がこもり跡足ア丶くさし　其末

狐聲評

日の下の人も寐覺のい丶御夢　古遊
君子のあらそひも肌をぬいでする　如雀
破魔弓をおもふ矢坪に產落し　艸人
正直は天地の間萬づよし　マイタ
世渡りの道も七尺去て知れ　斗丸
忠孝の二字は誠の二千金　ヤマキ
不破の關降て來たぞと大騷ぎ　古丸
面白し帶から解ける雪の肌　艸人
眉髭の雪は解べき春もなし　木賀
產籠を重いといつてしかられる　柳雨
突出しの振付をする姉女郎　半下
立葵敵にとんぼう返りさせ　針人
兼好は世にない艸の根を殘し　散売
孝の道踏はづしたは橋ばかり　斗丸
うぬ惚は三度び我身を省る　亦樂
養生に蕨の山は灸をする　畔道
仲の町きれいに袖へすがる所　柳雨

引裂いてかむは娘のうまい文　艸人
朝敵の志賀を隠して集に入れ　如雀
花の頃櫻の馬場へたはけ來る　菅裏
蚊屋賣は聲も一張りはつて呼び　半下
觀音につゞきおれだと畫馬屋言ひ　雨夕
はつ松魚くふと袷も利をくらひ　畔道
又出來るさうさと姑不足さう　古遊
兩親の御難ぼた餅むすめなり　互帆
大當りむたいに錐を立てに來る　春駒
のし餅は蓙目の付いた方がうら　福松
四國迄船賃なしに酒を積み　蝶々
もろ／＼の鼻毛あつまる神子の顏　菅裏
鳥飼は一文見世と下女おもひ　市東
さゝ呑んだ狂女も見える隅田川　雨旦
僧化して醫者月令にいまだ見ず　柳雨
極樂なよめは姑が地藏なり　杯舟
藪醫者に富貴さづける風の神　萬仁
女房の疱瘡抱らうにはこまり　若松
酒菰だるは土間にある水仕合　春駒
さあそこが渡りやすホイけちなやつ　其流

金箔のやうに狸はのばすなり　呂十
大屋さまふへて悅ぶたなつ尻　半下
何くはぬ顏でおなかをふくらかし　古粘
日に三箱喰たり見たりしたりなり　亦樂

川柳評

内外との櫻は八重の御要害　船橋
瑠理色もさだかに見えぬ花曇り　市東
御大祿陸尺迄が京間なり　カテウ
武士は書くも含るも櫻なり　ト、丸
日月の雲僧正の名にたゝり　如雀
御座敷へ散るはきのふの下屋敷　斗丸
朝起は家を寐かさぬ心がけ　木子
國家老高をくゝつて申上げ　萬仁
差かゝり止む事を得ず無心なり　ヤマキ
今時は耳を洗つて聞くべきに　五友
大軍を喰ひ留たのはおしなどの　古粘
しまだ金谷に大名のろくろ首　亦樂
土手へ船着けて候おもしろさ　其笠
仲の町たへて櫻のなかりせば　由香
彈正が釜を信長取る氣なり　杯舟

漆をも塗てかためて忠臣さ　船橋
禪僧の相方書は目が見えず　由香
目と腮に釣合のある聾同士　有幸
朝歸りかうべをたれておもふやう　マイタ
麁しゐをくらひ水を呑み二日酔　龜水
漬物屋羅漢のやうに肌をぬぎ　四目
腹を切かけてけんくわを見物し　弓成
おてんばの尻へさはつてはねられる　半下
智恵のなさ四月びらめのさしみ也　雨夕
金持と見くびつて行く初松魚　雨旦
土砂の入るほどにお袋のりをつけ　留人
飛魚は羽根の有るだけ先へ來る　朝湖
錦を着し夜る行くが息子好き　菅裏
大一座燒香順にのんでさし　春駒
馬の屁に四五人こまる渡し船　若松
物さしを隱し心の丈けを見る　松風
其客が來て三ひろほど反古にする　朝湖
居候拳をおしへてしかられる　由香
けちな晩鐘より先へ突出され　古粘
古道具屋十二一重の夜鷹あり　其笠

イヨつんとしましたと又下女をほめ　互帆
辨天も相撲は穴で入りを取り　五友

五友評

大君の德に五穀も禮に臥し　草人
天草の時に茗荷な御加増　留人
八雲たつ迄は氣まゝな和歌の道　井蛙
冠と烏帽子は梨と椎の下た　亦樂
宵やみの頃に牡丹の花は散り　志丸
郭公遠馬の殿もあみだ笠　亦樂
鳶鳥産んで其身は鷲と成り　弓成
尻金に香車で石田突くづし　山柳
肴屋が智略で國のせんたくし　散売
風の神迄が日本びいきなり　春駒
御不勝手太い煙りを蚊で立る　草人
太刀兜陰見世にする五月雨　庭花
金の氣で明て浦島腰がぬけ　水鏡
文學盛ん梅干が極安し　木賀
汚れない餅を五軒の子は貰ひ　可笑
湖の肩入にする竹生島　東猴
旅歸り美濃と近江をまづ抑へ　雨夕

生酔は潰れる前に見世を出し　柳雨
御ぶさたの段は御免と傘を借り　散売
爪に火を燈せし晦日闇でなし　可笑
牛込の舟蒲焼を不斷かぎ　山猿
十三里義理で旅だつ雨隣　有幸
火をもつてこたつへ水をさしに來る　木賀
大門へ彌陀三尊の客迎へ　五政
千金の上端駿河の貳丁町　斗丸
其歳を一字に直し餅を搗き　志丸
豆腐やに目高をねだるぐわんぜなさ　同
安い茶屋いぶい火箸を附けて出し　春駒
梅若の四十九日はかしは餅　可笑
海士よ玉よは龍宮の合ことば　釣好
日本が集ると伊弉冊言ひ初め　井蛙
御祭りに泣くは機嫌の能いの也　山柳

狐聲評

水に迄道ある御代のありがたさ　如雀
白水の流れる所へ鯛が寄り　和文
御愛樹を菅公梅と世に唱へ　散売
松島は目の閙しいところ也　卜丶丸

おだやかさ鐵砲の音でびつくりし　留人
四日とは天氣も持たぬ皐月雨　斗丸
是も緣道灌山で雨にぬれ　留人
伊勢縞を着切て暖簾地を貰ひ　はじめ
よごれない餅は五軒の子が貰ひ　可笑
茗荷賣錢をわすれて笑はれる　市東
早乙女はおやまじやさかい美しい　井蛙
結目に名を殘したる帶曲輪　松風
掛鯛は頭巾を尻へかぶる也　蝶子
金銀は山々入の帳と書き　里曉
むらさきも菰も着ようか好きな所　斗丸
愁歎がはづれ泣くのは金主なり　亦樂
神代の物入瓶を八つ買ひ　里曉
豆腐屋と酒屋へ三里郭公　五友
いつ迄も直のしれて居る火打石　春駒
初會から馬鹿らしいねとちく生め　魚冠
御主樣ぶると北條つけのぼせ　斗丸
せんべい屋口を明して舌をぬき　其笠
筋隈の魚髭撫て作らせる　志夕
花の山と書いて小便よみがへり　蝶々改 常住

福島がだゞは伊奈ともいひかねる　木賀
傾城の小指で藏へ穴を明け　岩猿
清書の珊瑚珠に成る黑ん坊　志丸
卯月八日を娘へも母張る氣　里曉
摺子木は我物でする粒山椒　草人
女湯で羽衣ほどに下女歎き　留人
現金にかけを賣るのは夜鷹そば　雨旦
幟にも女房の紋は下たに居る　ト、丸
言譯のくらい顏には火がとぼり　松風
鼻紙を當て草鞋の食を留め　常住
隱居した雀は袖へ押こまれ　如雀
貫之は嘸色白と下女おもひ　斗丸
田植唄下から見ても田うゑうた　里曉
小姑へ嫁のきしやごがやつ當り　釣好
山伏の疵へときん／＼を入れ　常住
割さうになると桐の木板に挽き　可笑

川柳評

僧正の一生稀な日和乞ひ　和文
頼朝はうみの恩より池の恩　菅裏
御身請家老は後車をいましめる　雨夕

嫁の琴座中仲達ほど恐れ　亦樂
醫王山小松三千兩が植ゑ　木賀
仲麿は頭をたれて山の月　同
相の山波の礫は江戸氣性　樂輔
犬ばね折つて高時はめつ亡し　魚冠
八駿の駒下駄をはき旅をする　古丸
問詰めて見たが母親仕方なし　釣好
鐘馗迄内へ欠込む俄雨　四目
年しても異見はかんでくゝめられ　福松
郭公娘にくどき落される　木賀
土手から里を見おろしてむほん也　同
突出しは田鼠鶉と化してから　登川
火の事に付て勘氣を水にする　木賀
業平に氣の有常じや出來るはず　由香
豆大師俵を積んだやうに見え　里梅
吉原は足深川は手で急ぎ　可笑
猩々が來ては李白を誘ひ出し　半下
獵師町庄屋波分からの家　亦樂
柳橋角に大きな啌つつき　魚冠
錠口でかき付られる二世兄き　艸人

まづ鎌をかけて質草ちよいと借り　卯人
嫁が來てわしを談義へいびり出し　同
竹の子をぬいてむかれる面の皮　同
百姓よろこべそろ〳〵鳴つて來た　魚冠
魂祭り草葉のかげへやたら上げ　水鏡
江の島へとてもで參る千日目　山柳
蓮芋を投入にする居酒見世　卯人
摺子木をうつちやりていしゆ筆を取り　青波
強い雨御番葛籠に首がはへ　はじめ
茶のみ友達といつてるがまだ〳〵　井蛙
六づきて見なと女房二百かけ　志夕
我尻はいはずに帶を短かがり　岩猿

卯人評

書替へる二字は天下を照らす山　水馬
忠孝は五常の道にくたびれず　半下
直な氣の冠はゆがむ梨の下　雪洗
夏の月戸ざゝぬ御代の高咄　亦樂
杜若折るは二た藍三重だすき　柳水
骨つきりぬれて歌道が身にしみる　五遊
松島へうつすりとした雲なびき　可笑

千本の松は神慮の大仕掛　松山改 柳水
雲の上でも師匠には留られる　里曉
弓となる親は矢だけに子を思ひ　古粘
二日には母の手あつい恩をうけ　留人
日歸りの雛には桃の實を上る　可笑
稻の霍亂やれ其角〳〵　釣好
千兩も三分も見える團扇見世　有幸
古今大きなどぶさらひ禹王する　魚冠
切張の譽れ明るく世に殘り　山猿
不受不施を小町ばかりは立通し　五友
摺鉢の頭ぬけ瀨戸物町で見え　斗丸
異國迄灰汁で洗つた蛇の目なり　カテウ
鳩の住む御門禮義に三度打ち　半下
八人の口から獅子は子をゑらみ　其笠
庭訓は花の頃からづるけ出し　半下
ふみ出しは蚯蚓の多い筆の道　春駒
蛇のこけは二十七枚目にへげる　互帆
下女の大關湯殿山にかゝみ山　其笠
麥わらの蛇すいの當る不二歸り　弓成
金箔の付くのは疵のある娘　有幸

しつぱりとしたは赤穗の國家老　井蛙
檜扇のふさで小猫を御てうあい　千虎
ことば質取て利に利を押て行く　龜石
うづらから餌をくふやうに首を出し　朝湖
一分の夜もう貳朱ほどに成るに來ず　雪洗
傾城へ私慾連理と契るなり　山猿
大袈裟な無心小指はかすり疵　竹子
口上といふ身でむくる幗の裾　古遊
小指から意氣地のはしる紋日前　樂輔

狐聲評

御寺號の文字も自然と大樹なり　柳雨
御寺號をくふは鹿毛の名馬なり　亦樂
年をへし糸を亂れぬ御代に干し　水馬
不運迄天に有たは時平なり　雨夕
武藏野は榎四本を引こぬき　五友
金屏風立て鐵砲高まくら　志夕
德に入る門を覗かぬ明きめくら　庭茶
たいまいの金をあたまへ差て居り　水鏡
ひさしの論で隣とは不破の關　芋洗
鎌倉からの早打はゑぼし魚　志夕

おいらんの初會威有て猛からず　龜水
竪板の水は胸から湧て出る　山猿
日の永さどこの内でも宰予なり　喜多留
公冶長あさつての晚によみます　朝湖
中田甫冥途の客も乘てゆく　菅裏
はづかしさ嫁は木綿の帶をしめ　里梅
雨親の雪を柳に嫁の孝　マイタ
よしの山お久しぶりのやうに譽め　雨旦
一とふしで下女がゆかたは出來る也　龜水
迯のびて鎌でかつ切る嫁の緣　由香
親にゝられて平目の濱へゆき　木賀
亡どのや出てくださいと二位の尼　柳雨
金閣寺迄はお石も和らかさ　市東
おもかげの四五日見える御祭禮　雨夕
いにしへの都の風を丸く賣り　常住
ぎり〳〵の詰り小西は破算する　其笠
夕だちに顏を拭うて寄る不沙汰　眞地馬
べちやくちやの側に木鉢と柏の葉　柳雨
山吹ともみぢ兩天秤にかけ　千虎
鐵砲も通らぬ幕へ伽羅はぬけ　龜石

むすこのかぶる毛氈は三分なり　和文
万の字を書くにも一がはじめなり　木賀
みす紙はどうか官女が遣ひそう　船橋
しら波に驚き千鳥音を發し　眞地馬
金まうけ明るくしれる大花火　千鶴
はな紙をはしけに賴む硯ぶた　常住
豆と德利で身上を投げほうり　雨旦
粥といふ字は中落が身所なり　其流
やうじ屋は用事もないに腰をかけ　常住
迷ひ子を呼ば我子も呼あつめ　雨旦
虫の付かぬうちと桐の木を挽かせ　可笑
孕んだ石垣地震で產み落し　錦重
鷹がたけ過にけらしな新をしめ　杯舟
うはばみの出さうな所へ鳥居張　其笠

川柳評

慶びの長く續くは君の恩　散売
大內も一の御殿は江戶の色　不覺
奥家老三韓迄も御供なり　春駒
犬と猿及び櫓の名の高さ　柳雨
塔を組む大工は蟻のやうに見え　不覺

卯の花と新茶へ松魚突當り　和文
九十ぬけても馬鹿でない軍師也　志丸
茶立虫東山どの以來出來　里梅
九十の賀おとゝし程はよろこばず　有幸
大手は生田搦手は杵屋なり　柳水
伴頭の犬で潰れる大坂屋　其流
箔を置くやうに花嫁汗を拭き　里曉
六道の辻で和尙は道を聞き　五政
竹れきを取てる顏に後家の相　亦樂
戌の日にばゝア尻尾を振つて來る　草人
品川は旅を拍子に行くところ　留人
蛇の目だぞ鮓に成なと下官共　柳雨
御茶瓶の跡乘奥の大藥罐　千鶴
山吹の花で牽頭は鼻をかみ　菅裏
泊り客藏の濕氣を引ッかぶり　水鏡
さりとては白い顏から赤いうそ　松風
座鋪牢どつち付かずの後家が出來　芋洗
申分には手入らずと仲人言ひ　有幸
氣轉さは佐吉かつぱの屁を呑ませ　留人
大げさにはなされ親父赤く成り　庭花

とほ〲の所を付てく竹柄杓　留人
龜の子は首をふんばり起返り　菅裏
さうまくいかぬと姑快氣也　弓成
小便所せんをこされて月をほめ　柳雨
放れ馬理不盡に嫁かけ上り　三好
長範は吉次來つて凶事と成り　逸飛
後の月内證も少しいびつなり　柳水
大難儀どの雪隱もエヘンなり　水鏡
とんだ花嫁鼻紙で火をおこし　シクト
目に見えぬ鬼神を息子和らげる　マイタ
村芝居團子よしかな牡丹餅は　由香
手のかゝと沓をはかせる疊さし　互帆
見かけより蚯蚓よつぽどいきな聲　柳雨
生酔が紙をくれたで不安心　龜水
ゑご芋をぬすんで屁にもならぬ也　如雀
さそふ水下女汲みに出る手筈なり　マイタ
脈と腹見せると跡はべかつこう　龜水
蓮飯の咄にひよんな根を押され　古遊
眞を切る毛ぬきがねえと下女まじめ　山形
釣好評

こん龍はうへなき雲の上に住み　木賀
泰平にして元トに歸す十二體　春駒
方二十四里の城下と通辭言ひ　木賀
世に青葉殘し二八の花と散り　古粘
西行と遊行は春のにしき也　里梅
鹿に手綱も付けかねぬ妾なり　散売
大和歌萬千百の廣大さ　孤雲
三日月は痩せて出るはず病上り　市東
敷島の道普請には軍留め　里梅
あふ事のたえて難儀な坊主持　水鏡
切れたふりするはなまくら娘也　岩猿
咄をば跡から配る京みやげ　松風
御庭から駿河へ杣が道を明け　五友
折鶴の玉子ばかりは四角なり　松風
旅日記袖から筆をとり始め　樂輔
こひに綾あつて娘の細作り　其笠
船軍首をとつても河岸をかへ　柳雨
羽衣をとられてんてこ舞をする　古粘
火打石としまになると火が留り　千鶴
陰日向はれてするのは上繪書き　雨旦

ぼうふらもやつぱりこまる蚊屋のきれ　有幸
廿八文で地紙へ首を乗せ　柳雨
文は梅手紙の末はいもで留め　同
極内で霍亂をする定齋賣　有幸
藪針醫實にも藪蚊のさす如し　魚冠
齒のたゝぬ無心新造成就する　青露
琴の一踏潰されたやうに彈き　里曉
羅生門鬼も十七客をとり　山柳
腰張に疊鰯を鍋へ入れ　芋洗
安物を買た自慢を鼻にかけ　古粘

狐聲評

七十餘古來稀なる御軍配　雨夕
生身ンの太神宮へ春日ゆき　和文
御上洛ほど掃除する御庭方　亦樂
繁昌さ草より出る月は見ず　カテウ
呑込んで見れば巽見も苦くなし　千鶴
御馳走に鐵棒も出る四里四方　杯舟
孝靈の後㕣の字を書きはじめ　里曉
唐人もよか〳〵といふさくや姫　岩猿
萬代の明りは壁の崩れより　同

清書の紙の間に〳〵もみぢなり　草人
ありがたさ未だ打杖が身にこたへ　山笑
品川の沖で姫路の塔が見え　岩猿
秤目は世を正直に駈歩き　松風
御名に似ず滿仲御子に甘くなし　菅裏
とぶよと見えしがたちまちに大門　芋洗
元服のかうべに舍る小判形り　五友
遊女の目貫三分には安いもの　杯舟
片棒で忠義にこつた門破り　四目
ちつぽけな藪で大きな煤を取り　雪洗
首と尾をとれば羊は吉夢なり　孤雲
未だ花の内に實の入る嫁の腹　草人
炭部屋を搜すは冬のかたき討　弓成
煩ひなんした顏さと燒ぎせる　雪洗
湯加減の片手水にはならぬ也　志夕
ごおん〳〵と宗近が槌の音　和文
夕立の日傘は破れかぶれ也　千虎
愛相に客を突出す柳橋　可笑
其後は御袖に紋がふたつふえ　其笠
藍屋へもあさつてといふ口ツくせ　志丸

儒者の肩衣絽の昌平でよし　常仕
朝顔の絞りは翌を間違へず　雨旦
孝行の道に屆かぬ橋をかけ　マイタ
ぬけ穴は北口にある江戸の不二　古遊
二度目には時宗虎の子に生れ　木賀
萬客になびく印を門へ植ゑ　五友
市川を成田でつがもない通り　志丸
はだか身へせんじの羽織トウきたり　其流
八疊の座敷に狸ふられてる　雨柳
秦の代に穴にはまるは恥でなし　有幸
指でさへあそこへ親子手は付ず　五友
御まつりの跡でおこわを五兩喰ひ　芋洗

川柳評

名將も勇士もしれぬありがたさ　如雀
武藏野は中の一字でおつぷさぎ　釣好
珍らしさ都はたつた八聲ほど　雨夕
御建立左右赤味噌金山寺　五友
おしい事樹をゑらまぬは島左近　シクト
手引をば皆追出せと三郎兵衞　如柳
鐵扇でまづ蜘の巣を拂ひのけ　芋洗

母の好き孟宗根ほり葉ほり聞き　樂輔
兼好に見限られたは柑子の木　雪洗
勝逊の元祖は五湖に遊ぶなり　水馬
眩暈さ下戸脇差を二本さし　笠下
鍋島と佐竹は琴の組がしら　春駒
松坂をこえねば錢も遣はれず　斗丸
其すみへ手桶こつちへやれたらひ　五友
別世界振袖を着せいましめる　井蛙
居候聾にもなり啞になり　山猿
只頼めでは氏神も御不承知　弓成
五尺の武士にも二尺餘のたましゐ　散尭
子が出來て時計に合はぬ嫁の腹　亦樂
船頭は疊の上へ世を捨てる　香貞
勞咳はおたふくの病む物でなし　志夕
髮削りゆあみし女衒手を入る　柳雨
居續けの迎太郎兵衞傷でゆき　井蛙
三國一の最期屁は那須野也　菅裏
遍昭は腰うち歌もよんだ人　同
蟬丸の明き手の方は穴がなし　亦樂
山茄子が出ると玄伯匕を投げ　半下

長四郎が聞いてあきれる嫁を取り　亦樂
難波せなアと覺えてる村講師　水馬
へたに吸て見なめて見る下手料理　魚冠
田舍嫁考へもなく鬌を出し　雪洗
世の人に穴どられぬは小町なり　水鏡
蒲燒はあふぐじやなくて引ぱたき　龜水
燈臺元くらしていしゆうかりひよん　里曉
穴ッのあなせまい大屋をくそこなし　有幸
鰐口は惣名代に乳母たゝき　斗丸

有幸評

自在なる御身にもかゝる時の難　樂輔
上白の九合唐へもしれて居る　古遊
薄氷を親に踏ませぬ孝の道　半下
北面も風雅の道は西へ行き　亦樂
千代迄も殘る操のいゝ女　雨柳
琴爪ではしの歩を突く始皇帝　亦樂
楠の息子は櫻限り歸り　青露
鳥三羽稻葦竹麻の中に生き　孤雲
能かれあしかれ長刀も馬も有り　ト、丸
佐用姫の御出を猪牙は見て通り　雨夕

床花の咲くは實の入る遊びなり　笠下
鯨ほど騷ぐはぬいた赤鰯　千鶴
もてるはずつもる咄しは雪の事　留人
未來にて高尾浮世に禮を言ひ　箕山
母衣蟵も欠びをするとしいをやり　釣好
同じ木で琴迄出來る嫁入前　柳水
泊り客少しは義理の朝寐する　釣好
黑鯛は白木の臺へ乘らぬ魚　其流
朝顏は隣屋敷の目も覺し　其笠
いぶされる後ろで嫁は蚊をあふぎ　山笑
打つの緣切るの緣にて義士はそば　里曉
芋ばたけ足の長いに油斷せず　一秀
冷かして爺い樂しむ婆ばあ瓜　市東
結納を置去りにして二人逃げ　樂輔
肴賣劔の舞で犬を追ひ　可笑
幽靈の火で煙草のむ硝子師　芋洗
放し龜いつぱし逃げた氣で游ぎ　一秀
山坂を蚫のたくる九十九夜　散売
極内で小町も一度外科に見せ　樂輔

孤聲評

橋でさへ江戸と日本を掛け合せ　半下
配所だけ少し欠けたる月を友　如雀
玉のやうなると御使者は汗を拭き　可笑
さうかうに秋賑かな寺の庭　志丸
嵯峨流の氣違水も隅田川　如雀
主從のぬり笠二階堂がもち　青露
老僧は翠簾からもれる玉箒　雪洗
神代もきかず水くゝる繁花の地　萱裏
神代でも男女で二人島流し　船橋
殿上の闇に明るい太刀をぬき　雪洗
手の筋で雲井迄のす奴凧　志丸
すいな身に甘く喰せる甘露梅　同
愛相をばひ合うていふ吳服店　笑丸
鐵扇で打たれ不忠と鼠啼き　青露
婚禮の屛風に書かぬ和歌の浦　可笑
婚禮に灸もしたくの數に入れ　偶中
關ならば名所にも成る御不勝手　志丸
北齋だねと摺物を撥で寄せ　古遊
陶朱公前かた河岸で見た男　亦樂
御門下鑓持蜘の巢を拂ひ　雨柳

二本さすから日本人かとたはけ　朝湖
孔明は四百を三の段で割り　亦樂
月代を剃るとりきんで耳を拭き　志夕
四分ン利に主上を始め奉り　木賀
虫干にりんきの種を拾ひ出し　黑十
比翼蓙ふられた時の名ではなし　千鶴
わるざへにさへた夜床で月が出る　樂輔
もてるはずつもる咄に雪の事　留人
ひくは臼屋で有さうな所杵屋　其流
大江山一枚下女が鬼の首　雨夕
人相見鼻の下からよく〳〵見　里曉
天のあたふるを待てるいゝ息子　市東
ちつぽけな松ッぷくりを紺屋干し　柳雨
隱してもゝ嫁來なんした里が知れ　留人
雨替屋五十四文ははね過ぎる　釣好
九十川留守で女房も首ッたけ　雨旦
むだ足を明かずの門へ九十九夜　亦樂

川柳評

結構は御代納まつておがむ所　五遊
やす〳〵と玉をまうけて御凱陣　カテウ

御不運さ笠木で雨を凌ぎかね　雨夕
四奉行は鼻を覆うて列座する　如雀
虫賣の荷物武藏野うぢの里　五友
傾城と下駄に守隨が罷出で　有幸
臺所で落武者一騎鹽茶乞ひ　山猿
高上りするなと桂馬建てゝ置き　萱裏
子の爲に母入道をひん丸め　千虎
稻荷から米の守を其角出し　香貞
彼の法師〳〵も一度書き　木賀
物眞似で鷄いつち用に立ち　柳雨
さあ見せろ〳〵と伯母は角目立ち　水鏡
水の年娘はついに流れの身　斗丸
齒ぎしりに神馬喰料かはかされ　柳雨
膝からは少しこぼれて水調子　笑丸
横車おめかけあぢにかぢを取り　山笑
祭禮に一村釜で汁を煮る　笑丸
蚊屋の日あはひに禿の倒れ者　里梅
翼德は一六物でやつて見る　柳水
朝顏を親父見て居るにはこまり　五遊
米舂は横に歩いて日をくらし　常住

月見だに糸瓜のやうな一家中　孤雲
腹あしく紅閨を出る淺黃裏　如雀
婚禮に下女も三々九度かれる　笠下
屁の種を一村石に見かへられ　樂輔
小菊にて花が三文にもならず　雪洗
鍋鑄かけ引出しはみなぐつろ兵衞　如雀
鴨燒の三つさしたを下女は喰ひ　木賀
びんぼうはこもつかぶりの子樽也　志丸

俳風柳多留五十二篇終

俳風柳多留五十三篇

今の前句は、名所舊跡神社佛閣故事、貴賤となく往き來のさま迄、一章のうちに陰陽こもりて、勸善懲惡の俳道扶桑最上ならんと、驛路の第一なる東海道の宿次に比して、柳だる五十三次の篇とすと、旅笠の紐を口もとに菅裏がむすぶ、

文化八

文日堂評

能いまねの御目に留りし孝の道　マイタ
聖堂は時にあつての御建立　萬仁
葵から先づ書きさうなものがたり　雨夕
御所と富士お庭の内に無いばかり　青露
繁花の地錐を立るは井戸ばかり　木賀
知らざるを知ら猿とせよ呼子鳥　同
飛ぶ鳥の羽子をひんもぐ國家老　シクト

禁裏樣あれに召すよと御所おこし　横好
荒波が乘つたで船に事があり　マイタ
入相のかねに花咲く一ト世界　シクト
尾張丁福居丁ともいつゝべし　玉章
五丁ある田地へ鍬を一度入れ　雨夕
門番はうらも表も雲の上　美德
うち出て見るに及ばぬするが丁　マイタ
錢でさへ丸くいかねばはね出され　如雀
火打石網へならべる日の長さ　狸聲
猨の齒を寒くさせたる富士の夢　青露
男をばてらし晴天をば降らし　如雀
齒にあたる肴を貰ふ三會目　木子
雪の夜に炭部屋わるい隱れ所　松雫
どんどんとはやる土弓の美しき　梅鳥
女郎買仕たが薄田德になり　萬仁
熊谷は扇をさして太刀を拔き　和文
十の字を眞直に書くいゝ工面　孤雲
坊さん山道四つ手の直が高し　水砥
横笛で口を吸つてる驪山宮　玉章
駒下駄のはな緒をなめる緋ぢりめん　マイタ

あんどんを片身づゝ買ふ安い客　一半
逃げた客噂の度に八九さめ　和文
間男と亭主あんぽんたんで呑み　菅裏

川柳評

千里も走るいきほひの御引馬　和文
松に目を休めて通るよし野山　同
ほとゝぎす後徳大寺にはな明かせ　里遊
下戸ならぬこそと雪見に二三人　和文
豆銀をとうふに崩すぎおん町　三枝
御寵愛眞綿で首をしめさせる　マヤキ
薄雲はいつそ松島見たうおす　和文
鬼簾せうきは見えぬ仲の丁　有幸
生涯の疵は辨慶京言葉　礫川
親知らず子知らずの道五十間　菅裏
あらかじめ頭痛承知で百につけ　礫川
うる人をにくんで酔魚をにくまず　水砥
いたひ事傾城他出願ひ也　シクト
お妾はいろの白いにやにくまれず　里梅
人の短を言ふ事なかれ居つゝけ　菅裏
下戸の生酔おうせつな〳〵　萬仁

かね四つに見世を引かせる玉のよさ　梅鳥
かこはれといはれず世話に成やした　偶中
足の皮むくと天窓にふたをする　孤雲
一寸にまるめて茶わん二つ出し　偶中
寒うおつすとにじりよる珍重さ　横好
だらくして無一物なる後家ぐるひ　古京
こつそりとかんしやく起す居候　礫川
朝歸りいも虫が出て戸を明ける　マイタ
ひやめしの長刀で下女たすきがけ　牛賀
片意地な下女何ンがども屁をちんじ　礫川

文日堂判

武士の手利は鴨の羽根も縫ひ　萬仁
諸侯にも二つとはない不二の紋　如雀
御ひざ元要の場所に扇なり　有幸
寶田のあたりは今の御寶藏　萬仁
菱形りに疊敷せる江戸の町　和文
川留も手形もいらぬいゝ御庭　ヤマキ
御目出たい輿もさかさにかつぎ出し　水底
御妾の手柄は武者を並べたて　ヤマキ
初幟追々に來る諸軍勢　シクト

おしろいがとけて島田に逗留し　里梅
日本のみそは摺鉢ふせた様　山鳥
生田(いけだ)を埋て十三の町が出來　青露
持ち運ぶうちは眞乳の山ざくら　和文
あをむくは父うつむくは母の恩　萬仁
道風は目で見桃青耳で聞き　木賀
其禮に十七俵はいゝ氣なり　十口
松かざりうしろをむける別世界　ヤマキ
鳳凰の壁にからしは面白し　狸聲
ほうおうも羽根をすぼめて月の事　如雀
雀屋の世話で鳶が鷹を産み　有幸
歌がるた富士と淺間があたり合ひ　和文
駒込の不二の裾野に御鷹部屋　猿子
引窓へ付ても錢は廻るもの　有幸
借金がみぢん積つて山へ逃げ　ヤマキ
岡釣は狐の蕎麥を腰へ下げ　玉章
牡丹餅の功能首が廻るなり　山猿
糞ころばし取膳で喰ふ不屆きさ　樹柳
ほられるも堀るのも釜は孝の道　ヤマキ

川柳評

茶臼山敵を粉にする御備へ　木子
時の難せう〳〵世々の御怒り　有幸
石山で隈なくつゞる物がたり　ヤマキ
いらぬ事池の禪尼が子ぼんのう　和文
其昔嵯峨の奥にも松がをか　同
膳所の城うらに青海波が打ち　鈴成
一生に遣ひ餘るは伍子胥が眼　如雀
呉王にはあだにちかひし西施也　菅裏
緋の袴流れ〳〵て下の關　十口
長じゆばん蓋し娘の派出にして　和文
若殿をおらが孫だもすさまじい　萬仁
酩酊に及ぶと鯛の湯漬出る　和文
八朔はことさら目立つ緋ぢりめん　礫川
女房留主ハテナ〳〵でさがしてる　偶中
三つぶとん息子は親に生れ増し　和文
御歸りを力いつぱい小侍　同
泡盛も茗荷もわつちやすきんせん　同
是ではどうも是ではと嫁おもひ　礫川
家根舟の何かあやしい首尾の松　狸聲
人鬼はないとはいへど大晦日　ヤマキ

紫を檢校やたら嗅いで見る　礫川
髻ふつと押切つて行なんし　シクト
宿無しは風來人に門をかり　十ロ
相談にまかりひつ込む新大屋　萬仁
あやまつて改る代二千疋　和文
大的の矢取斈丸ねれるなり　青露

文日堂評

拷問に花も實もある畠山　十ロ
加賀紋を引ぱぎ蛇の中へ入れ　木賀
高足の隣へそれる時鳥　和文
泥中の蓮を饅でほじり出し　如雀
一字でも薄墨のない假名手本　同
雨の手を出して二見の物がたり　木子
長篠で武田の仕かけ糸がきれ　和文
ぬれ事は東男に京女郎　同
咲耶姫寶の山を一つ産み　雅交
橘といてうで二丁おつぷさぎ　古郷
夜ざくらに朧豆腐で呑めるなり　狸聲
巾着のひだは富士から思ひ付き　路人
いゝ天氣戸板に猪牙を並べてる　狸聲

通し矢の折々それる祇園町　水砥
毛せんを疊むと階子ばつたばた　雨夕
起て見つ寐て見つ蝙の穴だらけ　十ロ
一束に一帖たらぬ京の町　マイタ
竹村の月もくまなく息子喰ひ　ヤマキ
男坂あんよ上手で嫁は下り　里梅
躰のいゝ馬泥坊と源三位　シクト
御先へ拜見と女房文を出し　山猿
けんくわにもされず禿に引ずられ　木子
口を利き過ぎ成り金と寐て歸り　横好
衣々の肩へ紋日をたゝき込み　散売
村雨と寐たあす松につゝつかれ　ヤマキ
御妾の小便無用金屏風　横好
玉磨かざれども光る孔雀の尾　松歌
ほら貝はねじられた聲と思はれず　路人
花見頃うつりにけりな湯屋の棚　横好
箱入をかぢるは内の白鼠　古京

川柳判

御一世に藥研も一度功を立て　如雀
御登城を厝で見出す神無月　和文

歌の德天まの渡川をひらかせる　ヤマキ
十四文字添て豐かな年にする　木賀
長篠で武田の仕かけ糸が切れ　和文
鉢卷をして鎌倉と書きかゝり　雨夕
あやしやな魔界のしよゐと雲中子　シクト
晝寐して車胤すこぶるなぶられる　礫川
いづれ名所はさまにうりつくし　和文
一家中團子ものどへ通りかね　ヤマキ
平蜘をつぶして虻も蜂も迯げ　雨夕
祇王祇女味噌とうしほの間へ出る　和文
かたいやつ和らか夜具はついぞきず　定麿
指を貰つて置所にこまるなり　山猿
素人になるとぐらつく枕なり　シクト
うたゝ寐をろせい起ろとしやれて來る　狸聲
辨天を息子忽ち布袋にし　古京
廿七八の花嫁しやれたもの　礫川
素人の壁ぬりいつそ喰こぼし　偶中
客帳はやぼに譯らぬ合印　青露
仁和寺へ俄ふぎや〳〵一人出來　雅交
とんだ詩を出して讀めとは唐むてい　礫川

降てきいしたに素一分ぞつとする　狸聲
粟餠でごまかさうとはふてへやつ　一半
萬歳に下女腹筋をこぐらかし　礫川
不忍へ池まじ〳〵と二人り連れ　同
俄照り尻でおし合ふ井戸の端　三京

文日堂判

鳥まで宿にこまらぬありがたさ　狸聲
すでの事狐王子を孕む所ろ　如雀
三十（みそ）どこか一トもじで名の高い歌　青露
小式部は形りにも似せぬ山をよみ　松歌
要害もさやしやに聞ゆる須磨の浦　和文
三將で思ひ〳〵の時鳥　萬仁
文車（ふぐるま）の車力はみんな片はづし　青露
四十七俵ほど積んだすみへ迯げ　里梅
白酒で夕燒のする不二びたゐ　同
くらまから出たのはとんだ早い牛　萬仁
五斗よりも三斗五升の方がもて　横好
反古團扇大和路のぞみなどゝ有り　同
鳥の目も陸奥出生は角（かど）が有り　マイタ
俄雨池田伊丹に足がはへ　里家

侍が來ては買つてく高やうじ　マイタ
人同じからず持參と支度金　雅交
舌と齒と取替てやる雨替屋　雨夕
すゝはきに金銀の出る將棊好き　菅裏
相槌は狐むじなは火をおこし　和文
喰ひ逃でおすと寐に行く裏階子　志孝
年玉の給仕を調市仕て歩行　和文
わたくしも四十つまらぬひとりもの　横好
くりからを出してからんだ事を言ひ　雪下

川柳評

鐵石の忠義御家の伊達道具　ヤマキ
面ンもかぶらず鐘を出る大丈夫　同
後悔は身にしみ水は土へしみ　マイタ
得がたきはときと本能寺へしかけ　シクト
御隱居は粉屋の後家を庭へ呼び　志孝
山一つ十文錢とおない年　雅交
こはい事あさつて鮎は皆ごろし　和文
お茶瓶を是へとやかん差圖する　雨夕
眼が一つふへて信玄やたら勝ち　礫川
げんのうで和尚野干をぶつぴしき　同

少々は降るも可なりと息子出る　シクト
白も〳〵の咄しで身の毛よだつ也　萬仁
三夫婦は中の夫婦が先へ起き　志孝
持つて來た聟は京間な男なり　横好
大たん不敵素一分で座敷持　狸聲
三會目淺黄武運につきた首尾　和文
すがゝきで諸人を引きぞ煩らはせ　礫川
他にことなりし四つを聞く面白さ　同
殿樣をもしえ〳〵と妾ゥぬかし　同
そろ〳〵と論語知らずに息子成り　和文
つらが芋其くせ形りはゑご〳〵し　里梅
百まけて下女は小普請入をする　如雀

木賀評

子の方へ大しやうぐんは鎮座なり　春駒
御運强みな口々に賀し申　水鏡
小國なれど大國へ點を打ち　一秀
忘れても面目のある鐘の中　如雀
煤唄の中へ千年の御注進　青波
格別な智惠で錦の袋入　山笑
三ずいの龍西と化す孝の德　散売

御宗旨がみんな指ざすいゝむすめ　雨旦
妙のあるたび寶劔の名が替り　丸龍
おだやかさ油斷の外に敵はなし　春駒
四方へ名を上げたは歌も味噌氣也　斗丸
嫁無筆小倉の山で紅葉する　ヤイタ
諸國から談合のある御膝元　志丸
股ぐらを雁がねの飛ぶ阿房宮　柳雨
住持樣ばかり亭主を持て見ず　斗丸
八つ橋はたま八つ乳へは度々御入　美徳
腰縄で行く盗人は玉を取り　柳雨
居つゞけのれんじを明て香爐峯　樂輔
王の召す迄はかゝらぬ躰で釣り　笑丸
安康と書いたで鐘も釣し限り　亦樂
櫻田で出ると霞もかゝる所ヨ　同
孔子より五町も行ば紺屋町　和恭
廻り合ふ春を鶴屋の藏で待ち　雨旦
餅つきの邪魔を柳で片付る　柳雨
大通と替つて和尚手を扣き　志丸
龍宮は淺草海苔を落し紙　秀奴
龍宮の祭り鯨はやとはれる　黒十

座鋪牢夢に廓を欠廻り　里冢
氣が氣じやあねえのに笑ふ年の梅　茂ル
其山に豕も居るかと阿部に聞き　ト、ク
一盃も喰はぬは蜀の軍師也　有幸
尾上の松も年ふりて子に讓り　牛下
柿の相とつくりと見て勝負する　有幸
明る朝嫁六角の化粧部屋　茂ル
傾城は實の道を横に行き　井賀
りきむはず妾鉢巻腹へする　斗丸
ほんのりと娘返事を顔へ出し　五遊
口切も格別早い茶屋娘　笑丸
十三をぱつかり伯牙斧で割り　カテウ

狐聲評

御拳の雲井へ届く年の暮　亦樂
天下一しらぬ翁の影がさし　留人
ゆたかなる御代の備へは餅で取り　五友
天然さ王城の地は將棊盤　一秀
金の子はみんな他人が産でやり　井賀
御袖にはいつも四五萬石たえず　斗丸
明らかに晝夜をてらす偏作り　カテウ

酢吸の三評は聞きが別々　柳雨
八萬をぬけ一萬へ御立身　カテウ
古き軒茢穗の庵の百軒目　芋洗
結構な夜具だが指の切れで出來　五遊
琴爪で嫁はあたまをかゝぬなり　桑虫
伊勢暦太々と書く三ヶ日　坂丸
手見禁にすると荊軻はふつてしめ　亦樂
鬼をあざむく嫁を取り福は內　同
末世迄大きな星は鏡なり　桑虫
名はのろしでも其上る事はやし　其流
いつ迄も櫻ざめせぬ野宿なり　留人
八重垣の城に寄手も陣を引き　錦重
はん昌さ霜に花咲く二丁町　茂ル
待女郎おはぎで嫁に花が咲き　酒人
傘は雨より風にほねを折り　里冢
泰平の修羅明日の前座なり　庭花
元服の鏡にうつる母の顏　桑虫
堪忍の袋は母の口でぬひ　五蝶
九郎助の氏子の玉も光る也　市東
其時はおもひ切たる後家の髮　猿子

石田詰尻から金吾中納言　柳雨
東南の風でそふ〳〵吹拂ひ　市谷
錢のかゝつた袖なしを軍に着　龍枝
節穴を座頭の見出す寒い事　柳雨
眞の闇雪や螢の明りたえ　笑丸
長刀のさんまた關羽持て出る　里梅
木が餅に成て年とる八瀨の里　雨旦
目は無いが八人口を樂くに喰ひ　斗丸
料られる鯉もおすくひ取られた氣　市東
湯屋男名が六助で能くいごき　トヽク
紋付の茶ほうじを干す染物屋　黑十
割合の土間着到の帳に付き　芋洗
夜軍に佐々木が出ると長陣し　雨聲
唄ですむ娘太棹握るなり　畦道
馬の付くのは茢豆を喰た客　木賀
夏の國も桀へ廻ると仕廻なり　同

川柳評

七種は米に二挺の弓はじめ　斗丸
寛かに永く鬼門を押ッぷさぎ　芋洗
芝で粥くつたは淺野むつ時分　木賀

繪に寫し此山昨夜と奏問し　市東
國に杖突て賴政おもひ立ち　柳雨
手廻しのわるさ短刀長袴　亦樂
正雪がむだぼね折し一つ忠彌　三四
荒事も所作も靜はした女　春駒
我身でも口は油斷のならぬ物　木賀
三會目傾城流の文が來る　有幸
感應寺まづ突べりが二割立ち　卜丶丸
五千石焚きがいつちの小鍋なり　芋洗
大坂下り評判の市の正　有幸
俄雨おもひ〳〵に化て行き　三四
勝軍向うで焚いた飯を喰ひ　錦重
旅迯り江戸是ぎりの所迄　ヤマキ
笑ひなんすなおいらんのかゝさんだ　一秀
酉の町鷄舌樓としめし合　弓成
雨風の打身に藏の小手療治　志丸
川一はねりまの客が乘り納め　庭花
紙でした拂子で達磨扣かれる　眉長
信濃路へ來てどつさりと臼を居え　壽キ
緣遠さ平内樣も片便り　草人

蕎麥好きの曰く痴氣にかへがたし　茂ル
鹽引の洗ひ張する八百屋見世　雪下
染物が舞へばもがりが笛を吹き　可笑
百員のぬけがらを持ち三を買ひ　孤雲
荒繩で馬の山出し引て來る　里梅
角兵衛が姉とは見えぬ八文字　亦樂
浮む瀨の帳に孫左衛門と付き　志丸
うま〳〵と後家方丈へしのび入り　有幸
里の母うぬが姑は棚へ上げ　錦重
賴朝を棧敷で後家は附ねらひ　山柳
隱元の後はおしやらく豆和尙　木賀
鷄の引解き居酒屋の軒へ下げ　同
反吐の出る程化される狐拳　壽キ
正直に十ッ粒盛つてしかられる　山柳
打出しに馬遣るべいと村芝居　膳聲
家内中闇はあやなし鹽まくら　柳雨
湯太夫は鐵砲ぎはへうき上り　庭花

登川評

御先祖は半其外は長日なり　杯舟
御神德氷で草の火を鎭め　志丸

具足師の上手はしれぬおだやかさ　其流
鶴龜の喰ちらかしを乳母拾ひ　亙帆
國家安全と書かぬが落度なり　雨夕
瑠璃色に夜の明かゝる御先番　亦樂
御代長閑櫻の外は霞なり　其流
我家の客椀で喰ふ里びらき　偶中
むさはんの九合大きな山ばかり　ヤマキ
雷電と稻妻雲のかゝへなり　集鳥
村芝居鄕士のやうな工藤出る　志丸
冠を着て又當るかきつばた　其流
市川は冬三河では春素袍　有幸
かきつばた弟子が踊れば花あやめ　雨夕
土壇場の太夫棧敷に姐妃なり　木賀
黑幕で片付られるやす死骸　其流
三味線は八つ乳面をば馬皮で張り　黑十
寺山金ほしい所にいゝなづけ　其流
孝を立て貞女を破るとんだ嫁　猿聲
家臣例月雜用を借に行き　其流
羅生門河岸で手を切るけちな客　雨夕
まづ今ンも言切らぬのにどうろ〳〵　茂ル

蝶々の酒を露ほどのんでさし　亙帆
八の日を三所へ出る植木賣　里冢
平つ面ともに桐の木ふとり過ぎ　猿子
代脈へ片腹痛く見せるなり　柳雨
吉日の棧敷狂言うろ覺え　雨夕
諸太夫と四品の間を息子乘り　木賀
賣れる程ぢだんだを踏むけんどんや　笠下
曲水に親椀を出す相馬公家　釣好
旦那は雪見御供は死身なり　五友
高輪で化けたで來世牛に成り　瓦合
ちやくやといふが高尾はすかぬ也　山笑
甘口でないを李白は作り出し　斗丸
草もちが過ぎて伊吹の赤團子　壽キ
手習と前句取替へ半紙なり　半下
韓信といへば又かとしつたふり　田夫
嫁にくい文が姑の自筆なり　如雀
一軒燒けさと行燈へらず口　柳雨
角道も飛車道もある女醫者　雨夕
男にむだな遠道とちゞれつ毛　スヽメ
襟元にほれ足元で切れるなり　五友

氣のしれた病脾胃虛と腎虛也　有幸
小人島並は六厘胴返し　針人
押入へかくまつて置く菰かぶり　朝潮

狐聲評

花葵百間つゞく小石川　志丸
むらさきの掃溜四角四面也　柳水
双六の上りむかしは數度替り　カテウ
素盞烏もじやけんは切て捨給ひ　雪下
光次は何所でももてる男なり　木賀
身の內の智惠を搜すに目を眠り　一秀
名を取て德をば殿へ奉り　留人
百藥の長も風邪には生姜入れ　針人
さあ降て來たと關守きうに立ち　志丸
醴もかために作る生姜市　草人
雨風に行平歌も句も入らず　ト、ク
鯉が利き瀧のごとくに乳が出る　山猿
伊與染に日影のうつる干温飩　眉長
忠度をたゞのせて置く和歌の卷　柳雨
四角でも三方やぼな席へ出ず　市東
周の魚周の正月前に賣れ　兎合

ぬけ參り人の情を汲で行　斗丸
堀割の時分は丸い錢廻り　其笠
師匠さま一日釘を直してる　福松
晴嵐にこまるは膳所の傘屋　五蝶
士民から改元のある孝の道　香貞
片腕を棒にはふらぬ刀鍛冶　猿聲
禁句だに禿雪こん／＼と言ひ　里梅
月代は殘し御菓子はみんな喰ひ　猿子
かはらけといへど毛高い御盃也　カテウ
打鍵に下る新場の藤の花　其笠
二寸餘の夢は旭が出て覺る　斗丸
御意に入るはず奥樣に十ウ若し　ヤマキ
六せんを分け一もんをたやさぬ氣　木賀
お月さま雨の上でも笠をめし　青波
不二をせり出す孝靈の五立目　芋洗
息子をばとんつくにするたいこ持
紙雛を隣の米屋春倒し　女蛙井
圍ひ者しつこい坊主旦那にし　雨旦
末世迄弘法芋の石返し　木賀
正燈寺樣の談義とむすこ言ひ　雨柳

頼光をおぢいといつて御意に入り　ト、ク
文臺へ乘た御用は人に成り　カテウ
傾城のうそ八百が元手なり　雪洗
聞く人が死んだと琴をぶつこはし　偶中
闇の夜に啼かぬ烏で柿が減り　登川
傾城の挽く茶はつひに呑で見ず　猿聲
貸借で魚と水とがつかみ合ひ　笑丸
忠義には鵜の眞似をする鳥居なり　ト、ク
ひよつ子はみなふは〳〵の鬪をこし　田夫
急度した座敷欠びを鼻でする　五帆
曲錄へ乘る女房のおめでたさ　其笠
あやふやと家名の替る三代目　錦重
かゝる時せつに渡さずば向じま　菅裏
惜しい事いゝ後家なれど貞女也　市東
律義な紺屋當分は出來ませぬ　笑丸
眞靑なもみ手あさつて相違なく　柳雨
源兵衞藤吉とおもつてるむがなやつ　市東
二箱は日に鼻の下臍の下　可笑
不二川へ手水をひよぐる咲屋姬　草人
川柳評

鶴を取る鷹は進獻勝負なり　常住
筑紫にて御身の上の御天奏　菅裏
口取も上下で出る御獻上　雨夕
御なぐさみ品かはれども切れた殿　ヤマキ
死石が出來たで鬪が崩れたり　弓成
千年の上は汁を吸ふ一家中　朝潮
むらさきは目明きも杖の入齡ひ　木賀
蓮でまんだら杜若ではころも　同
置き石に手を取て居る吳の軍師　山笑
ほり物が弓の稽古の邪魔に成り　福松
正月は隣からでもしやちこばり　ヤマキ
一瓢の飲で跡引のみたらず　半下
花嫁はありし娘にかはらねど　シクト
しめつてもいゝと一ぷくかはかされ　針人
田市へ出るとあの家根だ此やねだ　龍枝
棧留に成て柿苧の澁がぬけ　山笑
再興に佛師閻魔の舌をぬき　樂輔
樂屋では範頼公に茶をくませ　有幸
三人で一分足らぬを二朱餘し　魚冠
生醉の糸目を取て引て來る　加益

孟宗を七賢既にしばる所ヨ　和恭
大吉へ度々手をかける大卅日　亦樂
けいせいがあらはれ息子世を亂し　山笑
山形を取るとやかたも追廻し　カテウ
そこにやこたつが有やすと出來ぬやつ　柳雨
裏町へ勝手に付くと負おしみ　岩猿
其中に喜怒哀樂の大一座　登川
とつかいべいの親玉は十五城　雨夕
鳥の糞顔のはたけのこやし也　一秀
青菜小菜しほれた形で賣歩き　釣好
御不勝手井戸車迄廻りかね　黒十
神農といふ身で嫁をねめ付る　由良人
妾が兄蓋し鈍武士にして　ヤマキ
月を見る程は持てる芋ばたけ　里雀
こまるまい物か仲人泣上戸　一秀
割込みに鍬を預かる村芝居　柳雨
聲は黄色で三絃は青いなり　芋洗
耳に齒もなくて何かを聞かぢり　常住
馬鹿狐啞に取付きこまつてる　秀奴
ふられたも持てたもしらぬ呑たほれ　岩猿

耳に角立てゝ座頭ははらを立て　笑丸
ふてえやつ傘へ黒田の紋を付け　錦重
目の玉のぬけ出ぬやうに母しかり　集鳥
ぬき足へいんぐわと當る銅だらひ　秀奴
錢湯で一人りよがるは濕つかき　加益
間男をされてつく〴〵おもふやう　其笠
鍬鎌をあんぽんたんで下女たづね　雪下
口上にすわ〳〵動く下女が尻　柳雨

俳風柳多留五十三篇終

誹風柳多留五十四篇

此冊子の卷中は秋の野の錦にして、其うちにすだく秀吟のこゑ〴〵は松虫鈴虫の外を出ず、こや有幸子むさし野の大江戶を草わけしつゝ、集たる玉聲を彼六家の大人すぐり出されし秀吟也、夫をおのれに送られしを、たゞに置んも本意なく、櫻木に止て諸君子におくるに、撰者六子にの虫の音のひゞきをかりて、頓武藏野六士撰と題し、柳樽五十四の篇とすと、萱裏謹言、

文化六巳秋

青露評

天顏へ簾はくもらぬ雲の上　志夕
ありがたさ木偏公より御拜領　春駒
篝火は光る源氏の春と冬　巾布
天下泰平をしらべる松の風　里梅

婚姻に子孫長柄の銚子なり　朝湖
詩の智惠も舟の工みも糸を引き　箕山
かれる程美しいのは手跡なり　斗丸
箒木が有るで塵なき物語　散売
香は兜名をば末世に留るなり　福松
烏丸歌はよつぽど黑い家　巾布
御佛閣吉祥日に出來上り　山柳
ありがたさ今責るのは食斗　雪洗
人麿は枕時計りを世に殘し　斗丸
淸正は人參などに目をかけず　ヤマキ
自力では締りかねたる嫁の帶　亦樂
元服の祝儀は酒も男山　卜丶丸
母迄がともにやつるゝ物おもひ　ヤマキ
萩大名で御烏帽子の緖がゆるみ　礫川
萬歲の歸りは山の笑ひなり　芝橋
散る花を追かけさせる子ぼんのう　和文
螢雪の窓で明るい文の道　喜多留
大晦日朝寐して居る艸の庵　雨夕
直が出來てげぢ〳〵の出る石燈籠　里冢
龜四疋鶴が六羽の御ゑん日　春駒

かまくらの艸を喰せて乘返し　横好
派手娘江戸の下から京を見せ　雨旦
鼻で嗅ぎ手で取る遊び品がよし　錦鳥
日本の草が他人の耳へはへ　同
忠臣は花の仇をば雪でうち　和文
詩に作る白髮馬鹿々々敷長し　箕山
むらさきの書いたは白い物がたり　有幸
おのしもといふが異見のなぐれ也　志夕
面箱はどうやらこぼれさうに持ち　竹子
夜がふけて無心花柚と三の糸　和恭
錐をもむやうに拜むはひどい願　賤丸
面白く光る湯水を子は遣ひ　一牛
大坂と江戸で引張る眞田帶　可笑
不二山を地引にかける田子の浦　藤丸
高砂は跡かき消えぬ名所なり　樂輔
御國迄御供の叶ふ美しさ　蝶子
晝素見制札などを讀で居る　孤雲
辛崎は古ぼね買の多い所　歩卜
いゝむすこ母の丸めた月見也　逸飛
花で家根葺きながら聞く時鳥　和文

和らかに口留をする女郎花　福松
疊を五寸切詰めるはん昌さ　礫川
まだ御沙汰ないかと嫁をいやがらせ　三都
權柄さ御庭の柹を妾もぎ　古遊
蕎麥をうつやうに大的仕廻ふなり　留人
賑やかさ時代違を牛へ乘せ　柳雨
晴天の時に額を唐へ見せ　雨夕
船頭に水をゐぐらせ息子行き　藤後
冷飯のみいらは灸の時に出し　榮我
幸若は舞々同じ所に住み　箕山
舞曲はなさで其儘にころぶ也　里梅
聾と呼だは常世ひし隱し　和恭
お月樣次第と文をやたら出し　其誠
汗をふく嫁はれ物にさはるやう　里曉
我鼻の先を見て行くいゝ女郎　巾布
其許亂れ奥樣もいたこぶし　可笑
なら漬も嫌ひイヤハヤごうざらし　礫川
三合に足らぬ新米早く出來　横好
しかうして後の月見は座敷牢　礫川
足音でふたつに割れる魍魎　河楊

市みやげ娘貰つてほうり出し　里雀
春日野の櫛は御笠の切れつぱし　孤雲
惣花に其夜二階もよしの山　横好
山形を眞ンのへの字とせなアよみ　圓玉
返す〴〵を初手によむ椽の下　玉章
小便も反古にはならぬ花の山　三朝
重箱の蓋氣さんじな給仕なり　藤後
落付たていしゆ戸棚をぴんと締め　船橋
赤子抱くやうに豆腐を取廻し　雪洗
金の猫一時一分目が替り　若松
禿の坊主おいらんのかすりなり　是樂
私(わた)しのといはれぬ櫛の有所　若松
吉原は足深川は手で急ぎ　玉川
間に合の火箸はさめば煙るなり　箕山
かうろぎで女房晝寐の目を覺し　矢正
二上りの返事で禿駈け歩き　志夕
燒もちがてら燈籠へ女房行き　礫川
四本ざし生酔の手を引て行　山猿
見つかつた文をぬからず鶴に折り　丁孝
御ていしゆが猪牙で女房はあたけ丸　東紫

小便をして逃るのは妾と蟬　礫川
傾城の癪人を見て起すなり　岩猿
吸付て煙をいたゞく野がけ道　天輔
これはといふを蒸籠の中で聞き　喜丸
新宿の藝者自然と聲が立ち　由良人
恭の留主へ間男打て替に來る　吳服猿子
朝歸り親父も實はあんどする　雪洗
弓削村へ下る勅使はあふぎ町　散売
曲水を疾の藥と下女おもひ　樂我
茶の時は女房がにじり上り也　雨旦
男子花はじめて開く聲替り　吳服猿子
とつときの臍も女は持て居る　礫川
舌が三寸五分あつて下女暇　黃峯

ヤマキ評

牧狩は上なき不二の御物入　十口
恐悅さ臥猪の跡に猪の簈　雨夕
御座鋪も柳は外との御構へ　香貞
恐悅さ鶴龜口を明いて待ち　雨夕
上みの句へ名もおもしろく折給ふ　萬仁
八重垣は異國の人に破らせず　一湖

神風で締る間もなき雲の帯　市東
月よりも筆のさへたる物がたり　如雀
建込で中々霞むせきはなし　春駒
琴といはれて始皇ほど嫁は迯げ　木子
御領分しらべて蕗の論を分け　竹子
御怒りで家老に蕗をしらべさせ　留人
花ぞむかしの御屋敷へ入らせられ　シクト
あんに相違とにらんだは市正　雨夕
平家にも須磨はあれども逆落し　如雀
大江山鬼も和らぐ名歌なり　シクト
投げたのも捨てたも筆の名が高し　萬仁
櫻さめせぬ忠言を兒島書き　香貞
手を上げて居るのは高尾斗なり　黄峯
一二三引切るに出る國家老　是樂
天迄と通辭咄に山をかけ　古遊
玄德が箸で曹操くらひ込み　十口
赤腹はたれず御高中上げ　水砥
御國迄わつち〳〵がひゞく也　志水
萬卒は得安く三分買ひにくし　鯉澄
負さうな手を考へる御相手　泰水

手づかみに似合ぬひんの能い音也　船橋
さへて居る月にもくもる母の胸　古遊
はん昌さ照り降りなしに賣る所　志丸
漸々と德に入たともう越さず　同
千早ぶる神代にも無いゝ男　的丁
評定に勘助よほど中へ出る　青露
親の名が付いて母親呼かねる　梅琴
おの〳〵提灯蕎麥屋から灯し　五蝶
きつい事心づくしを嫁彈じ　釣好
啼鹿の聲も聞かせず嫁が取り　錦重
小遣ひに大和言葉は嫁の筆　和文
久しぶりもう琴爪がはまりかね　木子
さへぬはづ俄仕立の初會なり　散壳
渡邊は片腕になる家來なり　志水
茶立虫扱聲あつて形なし　集鳥
屛風の詩聞けば主人も相しらず　三枝
おたがひに御無沙汰をする諏訪の夏　亦樂
溫公が親燒繼を呼んで見せ　雅交
物着星客禍に逢はんとす　シクト
染るのは娘も翌のあさつての　如柳

しつぼりと小町も雨に一度ぬれ　古遊
一ト雨でたちまち八九升下げる　克己
唐崎としつて合點の夜の旅　雨夕
茗荷にも蓼にも母の氣扱ひ　散売
店請に孟母すこぶるしかられる　礫川
辛き目を見せてくれんと大根武者　同
狼煙だとかこつけ晩の相圖なり　集鳥
時は雨居續三日むほんなり　シクト
二八の嫁にけんどんな婆々ア也　〆子
旅迎ひ品によつたら泊るぞえ　礫川
はつ松魚遣手に賴むからし味噌　遊子
御不勝手御供廻りはかけ流し　斗丸
ハテ珍らしい鯛麵で呑るなり　和文
みどり子に引されおまつ立歸り　同
提帶の女殘らず棚ッ尻　玉川
長い御湯だと思つたらとんだ事　木子
おもしろい物は茶をせぬ園ひ也　玉章
道成寺ほどの鼎のさわぎなり　青露
江戸ッ子は二朱も殘さず四十兩　藤丸
武士の數には入れど小侍　和文

敷初めの夜具と禿は丈くらべ　礫川
雪の下蚫の貝を좇えこぼれ　草人
女房の智惠巾着を付けて出し　一湖
川ばたで本ンの小僧をぶちのめし　桑我
きつゝ馴にし降らぬ日も旅合羽　雪洗
關取を女房ばつかりちいさがり　同
夕だちに暑さ何所へかぶん流し　松風
あま酒しんじよ生酔の歩行やう　集鳥
火の降るは水に遣つたむくい也　五遊
女郎買咄しも市がさかへなり　有幸
此耳は留主かと禿引ぱられ　トヽ丸
大小をなまくら者が曲げに行き　賤丸
こはめうがなき仕合と牽頭しやれ　礫川
べら坊がすくな〳〵も二十人　青露
紙花を遣り過したで拾ひに出　瓦合
獸屋足を秤に掛けて見る　香貞
せんじは下戸で山右衞門上戸也　雨夕
御妾は火づら張ても此世限り　有幸
ハイ馬といつて風呂屋で笑れる　三枝
持參金切れの有るのを包み込み　壽キ

下女鼻がありやなしやとふとり過ぎ　山猿
冷氣催し扨こまる居候　有幸
下女承知襟へ冷やりさそふ水　山猿
されぱこそ金が付候大あばた　賤丸
掃溜を小楯に取て下女出合ひ　半下
大尾
不禮講屁をひつてイヨ玉屋也　玉章

横好評

九つは日本に餘る御齡ひ　ヤマキ
御遷宮廿露降るべき今日の空　礫川
傳奏の障子尾長の影がさし　五友
御三男迄は神號名に呼ばれ　孤雲
水無月の獻上鱈の片身也　古鳥
霧霜の中に目にたつ和歌の浦　赤坂 里鶴
御上りの鷹は穗をつむ宇治の里　木賀
初子の日羅綾の袖に松の脂（やに）　礫川
大將の氣性あらはすほとゝぎす　伊庭
御奉書の跡にて不二の物語　雨夕
日本も唐も一里は歌仙なり　竹二
御馳走に啼くと御一首殘る所コ　雨夕
千萬を文車で引く奥御殿　青露

衣食住第一番に定家入れ　里曉
孝行も日本は數に限りなし　山笑
吳の國の智は女房を連れて迯げ　木賀
清書する迄はひそ／＼假名手本　集鳥
主水から廻る御庭の五文取り　如雀
卯の月は寐て卯月には起き給ひ　竹苞
人參は九段大根は五段なり　畔道
三夕を詠む所のないはん昌さ　里家
御高盛寶永山に分けて上げ　其笠
松に時雨を染めたのは中納言　竹苞
八重垣は他國の人に破られず　一湖
扶桑を向て念ずれば蜘が出る　ト、ク
金紋は外山の霞わけて入り　和文
康秀は二百十日に一首よみ　亦樂
アレあれを見よふしぎやな孝靈五　春駒
我も手を取ると角力へ御咄　古遊
一御殿二階へ飾る御祭禮　斗丸
殿に見しよ迚べにかねの憎い事　玉章
武藏野に春屋の殘す朧月　其笠
七賢はどれも一ふしある男　如雀

山吹の已後裝箱を持せられ　孤雲
忠臣の符牒初午からおぼえ　酒人
差汐の使者は安藤三太夫　散売
神代には妻にも八重の垣を結ひ　如雀
竹束の中で茶杓のしほらしさ　雪洗
鮟鱇の腮を釣るすは恥でなし　笠下
朝顏の卷は日の出に書終り　ヤマキ
御使者の禮儀鷄の蹴合ふやう　孤雲
ぬひ出來た小袖の壓に京の町　和文
八ッの耳ふり立て聞く手習子　小日向 猿子
百雨を錐で突つく谷の中　雅交
雪に似た物を謙信使者で遣り　山猿
いゝ天氣駿河で駿河見える也　玉章
竪板に豆弟は詩を作り　玉川
市と四の間に二三の谷はなし　雨旦
七夕の仲人月も宵の内　庭花
三百里家を建てゝも雨にぬれ　キヌタ
一の所作だと盃の稽古させ　木子
御望で獅子は半元服に成り　留人
高が首代と胴をすゑなせへ　河楊

これはならぬと身をよぎる家根の漏り　礫川
かむりふる娘ふらせるやつが有り　茂ル
御枕を上げやと爪を嫁はづし　水鏡
石に判押た手合はみんな逃げ　克己
芳町へ行なと女房承知せず　礫川
仕舞には夫婦別ある雛の箱　登川
字餘りで板の間をふく居候　亭々
吸筒の中も名所の隅田川　里梅
勤向出精に付夜具が出來　巾布
八ッ乳にて父母を養ひ返す也　草人
日暮しにほの〴〵の有る不釣合　是樂
絹と木綿の間から綿が見え　かしく
むら雨を丸くふらせる太神樂　和文
子を持てやう〳〵見える海と山　榮我
里歸りむかし〳〵をまづ咄し　和文
されども彼の人ていしゆの爲に成　同
鉦太鼓小判を持たぬ子を尋ね　亦樂
緋おどしを二つに割て膳へ付け　狸聲
御如才はねえと棒組杖を立て　和恭
出來るやつやつたら狆を抱きしめる　礫川

伊勢町を研く上とぐ龜井町　志丸
ひどい負け平家一門なしにされ　山猿
嫁が來てもうかき廻すあま酒や　十口
夜着蒲團助太刀よりも六ヶしい　克己
乳母の名は請狀の時よむ斗　天輔
重ての爲と雫の儘返し　和文
何條の事か身どもが女郎來ず　箕山
合羽のお化が出たわいナァ柳原　加丈
姑でも死ぬか悦び烏啼く　香貞
口上をつるんだ所でうちやあすれ　萬仁
千垢離で見れば大小不同なり　里鶴
夕べ庚申かへと嫁へんな顏　錦重

文日堂評

萬民に御手垢のつく有難さ　青露
春夏に片々薰る紫宸殿　ト丶丸
勅筆の額も櫻の雲の上　里冢
恐悅な御片身分けは五百年　美德
御生國江戸におとらぬ花の色　畔道
月の定座を松にした御構　庭花
ありがたさ神樂の上を明烏　雨夕

文道は北野武道は日の光り　岩猿
香の圖は末世に匂ふ筆の跡　遊商
恐悅を八萬二百申し上げ　横好
來朝の度に目につく綿帽子　其笠
伽羅で踏む土地ゆゑ土も直が高し　畔道
馬柄杓をさして御里へおくればせ　和文
浦人も目を赤穗した御不慮なり　横好
はん昌さ魚鱗の備へ河岸へ立て　半下
啼ぬなら啼かせて見せう螢でも　瓦合
櫻には霞虎には藪小路　三枝
敷島を眞似て猿島郡なり　森烏
貝桶は源氏小倉は桐の箱　赤坂 里鶴
夕立を見かけて出るも孝の道　里梅
漢の元帥も士卒を能く廻し　亦樂
くらべ馬疊の上の品ンのよさ　錦鳥
忠と義の血肉で石に判を押　留人
歲末は濱荻年始かきつばた　雅交
番傘へ啌八百はいゝ暮し　ト丶ク
白い手の間違て出る雪と露　和文
おめかけの手柄火で干す子持筋　登川

川の瀬を分けて太郎と太郎様　千虎
兄弟で四十八字の歌をよみ　兎合
月かれせぬ艸を双ヶ岡へ植ゑ　如雀
我用は後ろから來る御關所　孤雲
汐汲の一荷に荷ふ田子の不二　花道
夕立がしてはねをとる道成寺　登川
橘と銀杏で分る日千兩　竹子
庵室の馳走は不二と煮花なり　横好
鷲と雀和漢の詠人なり　其流
むつの子を既に鼠が引く所ろ　卜丶丸
伊達ぎらひ吉原中に只一人　里曉
雲や螢とへだつれど同じ儒者　兎合
關寺の姿に花の色はなし　五蝶
はん昌な土地水に迄通ひ帳　孤雲
賤心ないとつぶやく無風雅さ　五遊
短册を其角降る程もらはれる　龜石
八十二斤で桃の枝がしなひ　藤後
夜討の時はいつかどの主税也　和文
信濃者だけ大軍も喰とめる　榮我
眞白な夜に眞黑な所へ逃げ　和恭

小石川猿子
笹の雪鍬でふるつて堀かゝり　是樂
やさしいは出口怖いは高野山　志夕
花の頃押て登りし車坂　杯舟
名月にさすが達磨も血の淚　春駒
横顏は見せぬ日本の不二額ひ　和文
美しい蟲を出したと源氏方　萬仁
三年の戀もさめるは松ヶ岡　其笠
町人の二本はこがね作り也　里梅
むづかしさ琴の糸程嫁歩き　木賀
信玄の遺言魚鳥留はよせ　谷水
正月二日鳳凰が舞はじめ　和文
花で家根葺ながら聞く郭公　笑丸
桐の木で二棹出來る緣遠さ　箕山
借用にしろ家毎に金屛風　里松
ひどい勝歩迄なり込一の谷　山柳
元氣廿年八月雪を喰ひ　萬仁
おそろしい工みは虎の爪をぬき　糸道
底の無い盃でのむ內の月　木賀
神でさへ中座は玉が美しい　和文
日本からありんす國は遠からず

英雄は同じ枕に十三夜　和文
白魚の首剃刀ではすに切り　狸聲
みどり子に引されお松立歸り　和文
米かみと能く氣の付いた俵也　市谷
菅原が所から來たと甘露梅　狸聲
雷の出るを太鼓で觸れ歩き　カテウ
山に星息子月とは大き過ぎ　葉十
子を見る事親にしかず孟が母　和文
十面を母は二ツにやつと割り　〆子
素一分は曉傘の智恵も出ず　登川
鉢卷もしつかりとするうなる藏　志丸
月雪にもれたる花が床で咲き　弓成
舌打に聞耳をする料理人　葉十
たぎらねばへんてつも無い茶の湯也　井蛙
文七とお六は髮の友かせぎ　畔道
花よりも月に一指を女郎切り　可笑
去狀を子がしやぶつたで反古に成り　芋洗
酣に及び二を上げ三を下げ　僞名
起き居て寐やしたといふ面白さ　春駒
御新造に成ても松のやにが出る　萬仁

土弓場の當り役者は甚五郎　曲水
未だ漉の浮世に殘る甘ぼうし　竹子
袋から出さぬは弓師藤四郎　雨旦
あいた見たさに鏡迄曲げんした　的丁
ひよめきの毛は薄くてもいゝ女房　魚冠
掃除を仕かけアレ鶴が／＼　錦重
かたわの內じやア坊さんがようざんす　河揚
やみ雲の上へ經上る相馬公家　的丁
平家の怨靈打物は鋏なり　菅裏
燈籠にたかるは里の油むし　其笠
猪牙で見た顏に又逢ふ小便所　雪洗
女房のおもつた程はもてぬ也　玉章
十三は息子も月の尻が割れ　しらし
片桐が爲にはちや／＼の局也　シクト
おだやかさ清正鮓の見せを出し　竹子
結納は仕廻て置た心なり　松風
三國一のぶせう者翌す見やう　留人
痳病が直ると國を只とられ　里冢
辻角力大關の名は臼ヶ嶽　艸麥
平服で禿おはぐろ買に出る　青露

鳴り込で來るに牽頭が座附也　ヤマキ
鳳凰はどの道桐が好きと見へ　同
巾着のさし身抔する吉祥寺　三枝
男なら下駄だと桐の實を植る　五蝶
しんにうを掛て米屋の子を尋ね　散売
善惡を照らして歩く鏡とぎ　森鳥
一ッ家の婆々アも繪馬屋こんゐ也　一半
泡盛に醉ひ飯盛を買に行き　一秀
安ス月見薄一斤窓へ出し　東鳥
鶯は諸鳥の兄でい丶理屈　竹子
一も二もないと三くだり半を書き　東紫
夕だちの日傘はらせん絞り也　五蝶
紫衣も心をうばはれる朱の大姉　横好
もうよめるやつは無いかと始皇帝　杯舟
猿をぶつやうな音のする附木突　樂輔
いろはのむつ言當たらほんにかへ　亭々
晴天に成りそこに時雯に平　里遊
盤面へ耳を配つて座頭さし　草人
當時難澁北てきの矢文來る　芋洗
飾ッた鍋を仕廻ふあす釜が明き　菅裏

繪の事は黒きを後に達磨の眼　雨旦
小田原を付て又消す長評義　同
本堂のゆがみ大黒ばしらから　里梅
合羽屋の後家に引かれるのろいやつ　十口
笛をふくやうに唐もろこしを喰ひ　紀樂
から筒でやうやく凌ぐ二季の敵　古粘
釋菜へにきびだらけな息子行き　如雀
茶のみが出來たで藥鑵をみがき立て　千布
御目覺はまだかと早太にが笑ひ　有幸
貞任は質屋で貸さぬ歌をよみ　ヤマキ
八朔にていしゆが留守で女房荒れ　里松
姫氏國の出臍は一夜細工なり　雨聲
まあム丶といひなせえなと息子連れ　巾布
大黒でしくぢり傘で開くなり　谷水
更て妻戸のおとづれは酢をくんな　雨夕
惣領を產んで常盤はがつかりし　酒人
病付きは吊ひからと親父言ひ　ヤマキ
雷の鳴るたび聾目を押へ　マイタ
持參嫁揃つた物は耳斗り　志水
門前に案山子の並ぶ御不勝手　有幸

大悲だけ風雷ものを御門番　香貞
つるねぶと皮肉の間のむぐらもち　柳雨
切落し一つ荷四文の雨がふり　卜丸
今夜行くやつも有うとぶいとひり　留人
する事も又書く事も鳥で出來　偶中
早業がきかず百文只とられ　賤丸
紛れふんどしでばゞあをふんじばり　喜多留
ばち當り鳥居樣でも妾され　龜石
なされたでナア御ざんしよと下女が宿　如雀
飯盛が寐ぼけて二百棒にふり　辻木
鼻角力とるは天狗の日待なり　庭花
唐崎は古ぼね買の多い所　歩卜
動くとけつだと尻馬に武藏坊　松歌
辨慶を提て女房のいゝみやげ　畔道
樽ぬきのやうに匂ふが李白の屁　柳雨
睾丸の陰干もある大江山　扇橋
くじつたりひねつたりする玉煙草　古鳥

狐聲評

干滿の外にも玉の御降誕　春駒
山鳩の冥加は雲の上へ仲し　古遊

堀を埋め世を平らかに遊ばされ　春駒
日本の譽れは雪の土用干　箕山
おのづから人文に化し武をはげみ　礫川
大きな夜なべ細工琵琶と擂鉢　春駒
武藏野へ草市のたつ繁昌さ　樂輔
はん昌さ錐の立つ地は井戸ばかり　香貞
婆々ア去りぢゞいは川へ釣に出る　巾布
日の本の顔も立派な國がまへ　雪洸
月日さへ年の行ぬは正二也　常住
和らかな國で堅いは禮智信　市東
千疊へ異國のへりを付けて置き　シクト
竹光は御代に目出度道具なり　畔道
燈籠と川は七難八九なり　樂輔
七條と五條の間が珠數屋町　市東
武には勇文には才も有る御家　志丸
上げるほど道の明るい初登山　シクト
須磨の浦配所にしてはいきな所　錦鳥
針仕事大きな國を仕立上げ　ヤマキ
古市も新造を出す御遷宮　如雀
孝の徳四方の瀧水ほど呑る　三枝

足の利く大將筑紫迄逃げる　丸龍
まん丸な日だに長いの短いの　森鳥
くだけても割ても定家百へ入れ　シクト
綾錦よりは立派な木綿店　萬仁
寒い事海に枯木を植て置き　遊子
雪の肌鹿のこまだらに蚤が喰ひ　半下
龍の口虎口の難も法の德　雪下
源左衞門扨ひんなりとした男　和文
紅葉から錦の夜具をしよつて來る　同
白石のかためと主人相しらず　和文
みの輪から曲り曲つた輪へ這入り　森鳥
わる口を古今奇麗に初手へ書き　和恭
武勇するどく末世迄血鑓なり　シクト
はげあたま能分別をさすり出し　福松
蟲の音に包まれて居る草の庵　雨夕
藪入は田鼠鶉と化して來る　木賀
水を潛つて業平で取て居る　里梅
人間の手の跡鳥の足の跡　河楊
耳を取いよ／＼日本鼻高し　礫川
篁筒から上手の指した風が吹き　水鏡

隱れ行く舟かくれなき御歌なり　ヤマキ
七つ梅ふり出す袖の梅で散り　草人
萬木に勝れて筆を捨させる　和文
國のため一文惜む滑川　礫川
筆先で海をかい干す手習子　里梅
百萬騎阿斗をも見ずに逃る也　水鏡
三味線の胴に扇の高蒔畫　斗丸
姪の目に田毎の月は凄く見え　亦樂
詩は七步和歌は文見ぬ內によみ　河楊
恩愛の小指を君の爲に切り　木賀
無理無體雀は袖へ押込れ　庭花
孝行の墓へ蚊屋釣草がはへ　カテウ
不屆な雪駿州へ來て消る　如雀
うら屋にも天のなしたる娘出來　横好
父母の恵みも淺きながれの身　三京
松島の繪圖撫角の錢で買　柳水
淺黄裏蘆刈はづぶ謠なり　如雀
から事の願のきゝそうな塚一つ　雅交
入仕事大工煙草に念が入り　雪洸
能景と初ておもふ赦免狀　亦樂

御飾をなべての人が畳て行き　礫川
敵に蘆味方に葭の唱へあり　水砥
はたき賣役者の路次で呵られる　十口
禮樂の屋根を見て居る射御の供　春駒
見世先も繁る花屋の柳樽　志丸
こがなしを忌む婚禮の硯ぶた　カテウ
永代の袂で見ゆる袖が浦　里梅
鹽加減うすくしたのは武の內　香貞
お互ひに御無汰沙をする諏訪の夏　亦樂
燒飯に天草勢の齒は立ず　古鳥
後添にかくす泪の土用干　呑丸
やかましい女房紅葉の根をほじり　萬仁
十月目に曲錄へ乘る山の神　畔道
仁和寺で其後じやうだんしつこなし　和文
妙の字は波と石とにしみ渡り　酒人
綿入の女房に一間かゝり切られ　梅琴
あれ程に制し勝利を得ざる事　一半
孝行で荒びる嫁の爪はづれ　松風
蓑笠の名は末代のたからなり　シクト
ほのぐに一群ねりの出舟也　カテウ

茶屋はみな音斗聞くはん昌さ　水治
箱と額和漢名高く年が寄り　雪洗
御國ではしらず月見にさへて居る　柳雨
精進日知る肴屋は掛直なし　ト、ク
內損もするはず家も藏ものみ　散壳
漆よりまさる忠義は酒に醉ひ　玉川
慾のない夢は鷹と淺間山　壽キ
いゝ見世が出たと家中の淺はかさ　ヤマキ
はる人が有て三味せん立派なり　一湖
鎌倉は客を牢屋へ連れる所　菅裏
阿字な所を御出家は聞咎め　水鏡
よしの山靜に行けと御わかれ　ヤマキ
鑓持と金持遣ふ物でなし　逸飛
園にはぼた餅よほど茶人也　古粘
江戸氣だけ廻りくどくは言ず降り　矢正
けんくわかとおもや手見禁待てくれ　和文
駕供も引馬もある朝歸り　狸聲
左りから涼しい風は姉の孝　古遊
有たけの力でたゝく嫁の孝　里曉
凌雲の二字に積つた老の雪　花道

紫で都を捨てる本望さ　ヤマキ
三人の繼穗も桃の臺で出來　竹子
秋の野でつゞれもさせば機も織り　カテウ
殿樣をどぶへ立せる拜領地　斗丸
おぶさつた肩を今更さするなり　山笑
初松魚魚仲間でのいさみなり　和文
いとゞなを物うき秋に座敷牢　里梅
兵粮が出來て案山子も陣を引き　志丸
物かわと召せどけろりと其當座　雪洗
藏人は我が物かはにして歸り　巾布
修羅道へ我鬼に引れて妻戻り　水砥
下女が手をねらつて眞綿喰ひ付き　十口
端手むすめ江戸の下から京が見え　雨旦
かるい身で重き一字の數に入り　斗丸
ぼた餅に出來たは親の御難なり　古遊
戸守りに坊主のせうぶかはを張り　柳雨
振袖が來てはいぢめる乘物屋　如柳
屋根のある女郎は雪を苦勞がり　井蛙
手のよさにつれなき文を繰返し　一向
親ゆびを出すと引込む朝歸り　志丸

さう甘く女房は喰ぬ甘露梅　和文
一箱のほかに駕賃紀文出し　其誠
四日目は明智日陰の守に成り　礫川
弟子は雨先生雪で名が高し　竹子
雪が催しておいらん頭痛なり　杯舟
松浦潟堅い女の鏡なり　笑丸
大師さま奈良茶は龜屋萬年や　有幸
啼鹿の聲も聞せず嫁は取り　錦重
負さうな手を考へる御相手　泰川
燒繼屋南無三寶を信心し　曲水
傾城は傾く家へ請出され　有幸
藥研堀子おろしの見世いゝ所　蓑裏
深代寺とち面棒で馳走する　錦鳥
ひどい足力日なし迄踏たをし　十口
紅葉ばを稚なき筆に押て上げ　和文
いゝ後家が出來さうなので醫者は迯げ　横好
小舅の袴に式部度々こまり　香貞
化物も關所があるで江戸へ出ず　五友
稻村が崎で取れるは太刀の魚　志丸
不細工な五色の蔦は金のつる　花道

追取り脇差で禮者を追かける　玉章
美濃者は寐物語に油断せず　萬仁
親達が野暮だと囃す藥取　雪洗
前髪で寐た刄を合せお針縫ひ　雨旦
茶漬ばかり喰て冷飯いせ屋吐き　常住
姑の生水をとる聟を呼び　草人
いくのゝ道をしらぬのは小町也　杯舟
長刀に成と草履も切れるなり　草人
多くの中でこなさんと下女はめど　カテウ

川柳評

天恩はつのぐむ蘆に人の種　礫川
凪切りをとめて御庭の二千歳　マイタ
讒者をば自在天から蹴ちらかし　木賀
粟の飯時より是を御囃し　青露
二た親の海老に成たも飾りなり　ヤマキ
安い德帝位八年水の泡　礫川
四輪車に乘せても惜しく無い家老　和文
天迄届く鎌倉の御物入　文集
陸奥の關で咎める四十七　孤雲
掌さすが國主の御建立　散売

其御笠をば下された沙汰もなし　礫川
蜀の國しろし召るゝ耳ッたぶ　狸聲
年をへし糸でゆるみし御弓勢　ヤマキ
本能寺大破に及ぶ軍なり　半下
天晴さ武勇も小西丸そうばい　竹子
恥を血ですゝぐさそくの鐘の内　礫川
御庭にも樵歌牧笛廣い事　横好
夜學する爐に螢ほど消え殘り　東猴
聖人の代にも繼母のむづかしさ　竹子
物語書く頃はまだ藤式部　青露
玉だれをつゞれの袖で卷返し　東猴
百人に容義勝れし花の色　萬仁
座頭一先方を置古今集　樂輔
甲斐玉で三年たもつ法師武者　常住
稀に來て既に羽衣なくす所　巾布
雷とうなづき合て違勅する　礫川
諸鳥に宇佐を晴させる御託宣　菅裏
不成日でも成就する主の仇　如雀
深窓にもれ出る顏のさやけさ　横好
古今集貫之和歌の道奉行　半下

見附から久しい中へ聲をかけ　散売
仲國は月毛の駒で文遣ひ　和文
松の木の下へ草履を捨て出る　茂ル
人形屋太平櫃へ武者を入レ　藤後
大明ゾの後詰に小西匕を投　十口
阿字な所を御出家は聞咎　山笑
鼻唄も淨るりも止む五條橋　〆干
趙高は馬鹿もの始皇阿房もの　雨旦
更科は月も影武者四十八　一笑
青砥にて相撲守を研ぎ立る　散売
芋四五駄眞乘院へ着けて出る　如雀
叡山で大きな山を談し合　〆干
足柄の奥で頼光金を堀　常住
孔明及び牛馬も木で作り　青露
安藝様は赤し勿論黒田様　丸龍
すがわらが所から來たと甘露梅　狸聲
其色としもなかりけり座敷牢　礫川
御祓を笠にきて來るぬけ參り　其笠
枯れた手で花を咲せる料理番　志水
あつ爛で引かけ張飛雪の供　和文

初鰹錢とからしで二度泪　喜多留
あらざらん此世の外の嫁いびり　口口
十二分別て二人りは死ぬ氣なり　集烏
奥家老若松さまで意趣返し　里鶴
三阿彌陀むなしく歸る草鞋喰い　車連
鼻の先あぶない智恵の置所　雨柳
親父橋もふろくすると車留　志丸
滿月に成て三日月剃落し　東紫
醉がさめ見れば潮はあたま割　古烏
一人者目のさめる迄うなされる　玉章
下手地口田樂燈籠味噌を付　樂輔
船に乘る時分高尾は正味なり　登川
ゆるし迄爪も二三度ぬけ替り　亦樂
はづかしさ嫁居風呂の湯がこぼれ　和里
鳴り込で來るがたいこの座附也　ヤマキ
大風に傾城客を買たやう　鷄子
ほふたうへ水向けをして女房寐る　亭々
身仕廻部屋は夕顔の花斗　蛙聲
櫺の外には松斗かとばゝアいひ　狸
漢の書肆とんだ堀出し物を買ひ　如雀

いざさらば月見に吞る所まで　五蝶
片腕と頼れた下戸あぐみ果　雪洗
月花に女房心地例ならず　礫川
頼政が自腹は宇治の芝居也　木賀
寅巳申四つ目に當る猪の早太　大素
四角でも堅くないのはこたつ也　礫川
明店に住むは駿河屋下妻屋　常仕
なまぐさの替りに如意を一本書　和文
妾へもたぎつた藥罐水をさし　矢正
蛇柳も出口も女むづかしい　山柳
顔斗跡は屋鋪の御物入　如柳
何かしらしよわせて送る仲の町　如雀
火を摺てあきなひをする本升屋　菅裏
六夜より宵の質屋の賑かさ　草人
所作事も太刀打もした社家の嫁　弓成
供部屋で其下駄寄てかひで見る　礫川
葉隠れに息子なくなる正洞寺　梅琴
宇津の山團子をぬつて口を口　山猿
虎の子をどらな子に母してやられ　礫川
玉の輿かつぎ物さと一つ家中　古遊

御主人とおもはぬ妾首尾がよし　和文
去り迚は又少將も根ンのよさ　森烏
輕業の口上みんな門徒宗　里松
吉原に伊勢町はない筈の事　菅裏
高が首代と胴を居へなせへ　河楊
口小言御用枯野をぬいて行　カテウ
御徒町色の白いは地借り也　海富
三味線や太鼓で土手の道普請　青露
韓信は男女の股を出た男　逸飛
連て來るのは汐先の婆々あはせ　木賀
武士の年數ものを奥家老　和文
後の月息子も心づくし也　藤後
燈籠にたかるは里の油虫　其笠
本堂のゆがみ大黒ばしらから　里梅
長刀を長押へはさむ俄雨　五友
作がよく出來たで當る村芝居　牛下
大晦日何を當たか御在宿　有幸
引四つを相圖にてきが陣拂　草人
稚名を呼れて尼はうつたまげ　トヽク
繻子の帯尻のあたりに詩に曰　〆干

鬼も九つ豆蒔に尊まれ　如雀
雨の役ぬれる棧敷を見付出し　古遊
戀しさは親父が臑と母の臍　草人
ちり〳〵〳〵とどつか行三の糸　マイタ
親の目の黒い内だと引ずられ　五友
糸を取側で生酔くだをまき　一笑
嫁のあらほき出す樣に姑いひ　一向
來年の初物を喰ふ御不勝手　志一
夜は嵐の吹ぬかと仲の町　文集
聞けども聞へずいけねへ棧敷也　礫川
船をこぐ鼻へこよりの棹をさし　三朝
こはめうがなき仕合と牽頭しやれ　礫川
鍵だから蜻蛉突ていゝりくつ　針人
雞肋(けいろく)をやつぺししやぶる居候　和文
麥こがし鼻の穴からつむじ風　草人
膳の下迯込む芋のとゞめさす　扇橋
いつ迄隱しはつべきと五兩出し　シクト
なら漬も嫌ひイヤハヤごふざらし　礫川
大當り口上啞のごとくなり　文集
聖堂の屋根鯱のおすだらふ　斗丸

目黒から尻が曲ると十夕　雨旦
女房に聞ては流す物はなし　有幸
素見物野には臥とも宿からず　錦鳥
錢を突いせや一々押て見る　山猿
三ぴんが五厘もなくて百官名　十口
下女したり水ざうすいを冷で出し　常住
わすれ形身と帯をするふてへ後家　和文
なまぬるい亭主かゝアがごふわかし　半下
壚梅しきの有事で後家を立　横好
奥樣が召すに寐ぼけて下女どふれ　草人
能い顏で憎い面するめかけ也　蛙聲
親も親子も子隣の後家も後家　由良人
雪隱をうかと明れば聾が居　笠下
後家の髮マア伸たとは〳〵　里鶴
目の見へぬ姑はじろり〳〵聞　萬仁
內黒のたらひは下女の御手道具　雪洗
雪隱で生捕れたはくそだわけ　シクト
御殿ものねき寄らんせを忘れかね　ヤマキ
有ながら去らるゝ覺へわたしやない　横好
長局誰やら馬を乗放し　水砥

屁でもない事雪隠で考へる　萬仁
氣の向た所へ芽を出すつぐね芋　礫川
雪のした蚫貝から糞こぼれ　草人
念佛と屁斗ひつていゝ姑　岩猿
田舎下女法螺吹く顔のがんぶつさ　礫川
大屋根へ屁玉を落す火の見番　草人
利足をばわしが出さうと下女せたげ　岩猿
傾城はどの道泣くが極意なり　里松
新造の仕事丁場が長く成り　五友
きやんな下女尻を扣くとくらひ付　梁主
いも見ざる内うつすりと娘はへ　礫川
組伏せた所が馬で取逃し　兎合
四つ足を見てはたまらぬちく生め　雨柳
小豆飯ほつ立尻で娘喰ひ　礫川
日ざかりに出るちやうちんは鼻の穴　かしく丸
なされたでナアごさんしよと下女が宿　如雀
祭り前氣斗(ばか)せつ込てうちん屋　朝湖
添乳して居るにひよ鳥越をする　的十
大尾
待ちかねて逆か寄せにする女武者　其流

頃は菊月十日、此柳多留の行末永きをかの慈童の七百とせにたくらべ、はた花久の二字をもことぶき侍りて、

花も香も盛ぞ久し殘る菊　文日堂礫川

俳風柳多留五十四篇終

誹風柳多留五十五篇

山笑うしの發起せし麻布の催につるゝの方貴の連衆の句々はなをくしてゆがめるなし、其なをき吟をかり集めて五十五荷の篇とすと、

文化八夏　　菅　裏　述

志丸評

御寐卷は江戸紫に京鹿の子　　笑　丸
御座舟は陰陽丸く名付たり　　三　朝
墨染の御門櫻の近所なり　　河　楊
三河砥で研たる太刀に屑はなし　　虻　内
八重垣の種と尊む梻の本　　雨　夕
月雪に四百餘州も目を覺し　　水　鳥
喜連川口德殿の御場所なり　　半　下
品ンのよい車は古撰などを積　　笑　丸
武の道で文は柳の林なり　　僑　名

袂から落ぬる孝の名は立ず　　蛇　内
一石橋も半分は掛けかわり　　半　下
郭巨おもへらく甘酒屋を出そふ　　蛇　内
小豆が勝て赤くなる甲斐の色　　草　人
大江山文見た德のさそくなり　　水　鏡
春日なるとなりの山で鹿が鳴　　千　虎
當分のしのぎで三分かりてきや　　龜　石
藤の花側にたどんを出して置き　　常　住
いゝ壺井咄した夢を堀に遣り　　的　丁
ろうそくとふんどう安房と上總〆　　鐵　也
寐返りをうたれて亭主目を覺し　　千　虎
高松を湖にする深い智恵　　市　東
金着せの後藤目貫ははげる也　　龜　石
身斗りか金迄延る御山なり　　常　住
出來秋の護國に臼の御開帳　　半　下
かんざしでかけば達磨の音がする　　其　流
六地藏河岸へあみだの御材木　　常　住
何んぞや鋏とあなどつてずん切り　　礫　川
百合若の譯を新造聞たがり　　蓬　萊
でつけへ挑灯だなアと村素けん　　半　下

女房は流れますよとしちくどき　野雀
目をこすり〳〵朝日つ朝へ行　山笑
一つ餘つて大津繪を内へ張り　雨夕
いゝ姑孫々として内に居ず　的丁
鳳凰の嫁はたんすもから渡り　樂輔
槌の音三度ひゞくと餅を蒔　目多丸
瞽女に手を引れて渡る生田川　花道
いゝ若衆病かむりを寺でうけ　針人
お妾の夜着に鳥居を局書き　河楊
風上みに居て楠は采を振り　志夕
下剤のひどきくりからや犀ががけ　其流
乘り戻す頃相州の午の刻　春駒
植へぬのにひよんな所へ茄子がはへ　水鳥
下女がふんどしうどんやで染たやう　半下
どてつ腹ゑぐつてかつぐ箱番所　仲吉
かんぷんで四十八文字下女が文　狐穴
源兵衛も茂兵衛ものみに責られる　虻内
とばさせて胸の燒るに下女こまり　瓦合
御意に入舌もゆもじと長いなり　玉陶
廣いやつ目の寄る時に玉が入り　千虎

狐聲評

不二山といふは唐をも入れて也　錦重
眞直な道を字突の杖できく　里梅
風よりもしみる障子の御敎訓　同
嫁持參重荷に小附一包　仲吉
鳥もけふ宇佐を八幡ではらす也　草人
錐で岩もみぬく程のいゝくらし　可笑
扨若い御手と壽の字の餅を譽　志丸
武藏野の家並草の波の跡　草人
放れ馬怪我をせぬ子に人だかり　梅笠
衣笠へ籠つたは百六年目　福松
切り張りも五常の道はくらからず　其流
名城へ傳ふ天下の玉の水　水鏡
山門のみこしは公家のかつぎもの　同
江戸の關百萬石でかためて居　圓玉
みどり子に心の殘る松ヶ岡　計丸
一ト言に譽つくされぬ武勇也　水鏡
難有さ百旦那でも天照らし　留人
九そう倍どこか攝津に任せられ　交樂
臆病は君子に近さ病ひなり　山猿

陸尺にやの字の揃ふ御内庭　玉陶
一つ家の頃はようじの無いところ　糸道
持べきものは子なるぞと二人うり　盤谷
附髪でなみだこぼるゝ歌をよみ　玉陶
情あるためしに小松どのをひき　山猿
一つ身を縫て二つになるをまち　猿聲
立波をいゝ汐時にうみ落し　加文
錢を投たはかたのない智謀也　山笑
四里四方玉を流してみがく也　笠下
一分でも曲り目はなし天の道　一本
人の道造りし後車の車留　其流
孝の道横に車はおし出さず　半下
峠をこすと眼の覺る年の坂　福松
のろし見て笑ふ后に王のろし　瓦合
ちらすのは火花ちるのは梅の花　笑丸
北向きの武士やめて西へ行き　糸道
角田川ありやなしやとふつて見る　柳水
御寐言にまで諸社山の社僧中　春駒
門跡前の居酒屋へ下戸這入　半下
身ン上はぬかみそ汁でぐつとやせ　樂輔

大明神樣は鳥居の筆で出來　志丸
したん棹母は杖とも柱とも　留人
僧正はけふもとうふに榎たけ　一德
芝のなら反魂丹もあいイせん　右遊
米に弓二張り雀鷹へ出し　水鳥
古い帳棒をしよわせて隙を遣り　柳水
大橋の上をのたくる長雄流　狐穴
松島の咄を伊達にはなへかけ　千虎
武士々々と喰た大根剛の者　松歌
桐の木の脊板も嫁の道具也　志夕
口まめな小言性空聞つける　山笑
手代ども進めと小西下知をする　笑丸
感應寺命から〳〵一分すて　盤谷
千石も鑓も持つてる春米屋　笠下
甘口の酒を伊せ屋はからくつぎ　木石
空海も手をとつたのはしゆびん也　圓玉
膝は八重口はひとへに〳〵と　常住
六波羅の禿いつゝけ口がすぎ　瓦合
朝歸り扨智のいたる事をいひ　マイタ
さいそくに矢師孔明じや有まいし　ト丶ク

彼の木のくまを見ましたと田舍儒者　マイタ
夜に入ると醫者先箱で歸宅する　盤谷
新米はぶつこぬき程早く出來　計丸
ふんどしをしごいて登る開帳場　麥仕
ねきへ寄り過て大和を半めぐり　盤谷
さわがせて屁にもならないけつだん所　千虎
娘ざかりを親分はあまよばり　福松
灸點を大屋は腹へすゑかねる　三朝
ぬりこくる後家何かしらなくつちア　玉陶
安月見屁をひつてちと腹がすき　雨夕
茶釜の見へにしんちうの襟をかけ　樂輔
下女どぶへ手を入かつぱ摑出し　半下
籤よわひやつか杓子を抱て寐る　笑丸
藥喰人目も草も枯れてから　目多丸
けんほうの小もんよい〳〵羽織也　花道
おもたましとられる尻で玉のこし　東猴
牛若を辨慶大屋へ預る氣　市東
笑丸評
一ツ時の榮花千とせの放生會　柳鳥
年號も八重に吉野の御座所ろ　雨夕

黑染の袖へうすずみ申うけ　一德
御知行は源氏で和歌の御家がら　里梅
祇王祇女庇の下へつき出され　和文
白石は濱をへらさぬ御うけ也　雨夕
博望坡水の差圖で火ぜめ也　鷺安
紫の手綱鐙の水でそめ　志丸
母の雪日々にとかすも嫁の孝　斗丸
念力で岩もとをしたかゞみ山　柳鳥
やどらぬ月に千代のふがむねはゝれ　山笑
一ころは松千ころは竹で啼き　川車
高砂は御夫婦ながらきれい好き　木石
花の色はそとばのうへにちりかゝり　水鏡
うらゝかさ櫻の中に秋の色　柳水
外にない會府かまぼこに齒を立る　志丸
大神宮へ荒神でのつつける　一德
東南の風を羽扇であふぎ出し　ト、ク
三夫婦は眞草行のくらしかた　梅笠
鴐を三たびまげたは直ぐな針の德　其流
かたぐるま餘程まはりのいゝいわゐ　山笑
上ミ下モでたびやざうりの禮に出る　〆子

石垣の鮒にもすこしこけがはへ　木石
酒は梅松は櫻でゑいがさめ　柳鳥
母のすき根をほつてきく孝行さ　水鏡
針みぞのとなりをあるく老の坂　雨柳
星が目に付て異見を空にきゝ　古遊
針ほどもおもはぬ客の名をもほり　同
居風呂で酒の相手にたこをゆで　龜石
皿のかはりに丼とむごいこと　鷺舟
和のほまれすきくわでほる耳の穴　和文
おくゆきと間口のしれる三代目　錦重
雀にはおとると學者子をしかり　斗丸
金銀を取られて和尙かこい切れ　山笑
かなぼうであやせばわらふむごい事　有幸
だんごにもまるめ鯛をもだかせる氣　玉陶
ぬしの夢ばか見いしたと三會目　雨柳
うすいくちびろであつ板ねだり出し　古遊
よくあるく子にくたびれる親の口　常仕
うらなりの子をばころがしそだて也　盤谷
母のげい昔とつたるきねやなり　柳水
ころんだら金をひろへと母おしへ　和文

長者町さゆうにぜにもかねもあり　草人
ごうはらさあしかのさんにかいあたり　庭花
風車わるく廻ると泊りがけ　古鳥
かねはあつても火のふるはかぢや也　朝潮
よし町へ蛤がきて鹽をふき　山猿
まゝ母がやいてするめはひきさかれ　艸人
母ひとり古風なかみのひいき也　〆子
よし町のかまは御てんをうならせる　木石
蛤がすきでしゃみに名をのこし　山猿
實にかんしん寐てうづとぺつちやくちや　東猴
三みせんのしびれは筆のさやをつけ　不覺
ひるあけて見ればぐあいのいゝしやうじ　留人
すゞめやのせはでとんびはたかをうみ　有幸
くびを取るたんびに大家肉がへり　柳糸
てつぽうは湯に入り弓はふくろ入り　志夕
覺めるのは本歌ねむるは子守りうた　留人
女房の夜なき命をかたむける　山猿
內外でほばしらのたつそでが浦　庭花

狐聲評

月星の國までとゞく日の光り　山笑

御大勇それで中身を拔て見よ　死合
宮居にも色氣をさつた内外也　仲吉
たゝかつと召すもゑんぎの御出陣　庭花
天と地を丸のみにする御船藏　亦花
覆面でひゞくちぶさは身に餘り　斗丸
目がさめて須彌蒼海がやつと見え　山笑
孝行さ我身を母にせんじさせ　留人
秦のやみ壁をこはしてあかるくし　志丸
神風で四角な口へ戸をたてる　古鳥
袖なりに鹽の干あがる花の頃　志夕
白びやうし見るも嫌ひと靑びやうし　半下
梅の花おほみや人はもみぢ也　里梅
一つ身は二つにならぬ内にぬひ　葉千
ぬかりなき人もふみこむ戀の道　雨旦
平仄の中で手に葉の月をよみ　笑丸
すてむちをうつてたんけいこし給ひ　一德
なか橋といふから川もないところ　圓玉
雪のふるしたくは空も手間がとれ　仲吉
新らしい田へは龍神水を引き　亦樂
女房にさうだんをする深いちへ　渡政

尻の火であたまをかゝぬ修行をし　山猿
笠に着てまいる餘國の伊勢乞食　柳鳥
やねのかさ十八檀のうゑへさし　古鳥
十八の林をこせば芝をふみ　常住
大久保は葉斗りおほく鶴と云ひ　雨夕
大名を五色にだますいゝ手づる　散賣
眞つくろな月に霞はどでごんす　古鳥
玉のだん一つの利劒うけてくる　河楊
たぬきには狐がさせぬ三會目　半下
深川のやぐらもねこがいる所　一德
狂言のできるこたつのやぐら下　麥仕
中納言いへ持とよむしん大家　マイタ
いつゝけにむかい酒とはきん句也　麥仕
はらへども通ひにつもる雪の酒　雨夕
かなくぎもできずぶつ付くどく也　市谷
しやうゆにも酢にも酒にもみそ一人り　三朝
とめておく人質つれがうけにゆき　龜石
ばんづけもぎつしりつまるやうに書き　柳水
てうせんでほつてもとれぬ耳の垢　山笑
耳を取るころは軍もはなにつき　柳鳥

口へんにそら音で鬮をとをりぬけ　雨夕
にんべんにことばをつくすいけん也　里梅
かつら川口に辶（しんにふ）かけて行き　松歌
魚へんに交てはよせるかまぼこや　半下
茶や女ちやせんにゆふはいゝあんじ　志丸
すみ町へ股引の客つきがよし　龜石
尻馬にかげべんけいは直にのり　東猴
土器の豆をつゝつく鳩のつへ　草人
とるといふばんにとられるはづかしさ　留人
流すのに下女は一分がしちをおき　草人
おこすのに下女きなすつたかとねぼれ　其流
賀のもちをついたで隠居目がくぼみ　庭花

川柳評

落葉かくおもては松をだかせられ　山笑
二位どのは我物顔に一本さし　和文
おあしの旗は眞田かと淀の方　同
鴫たつたより酒たつた秋のくれ　〆子
七つ過八つ山下を四つ手かけ　里梅
のぞまれて嫁一本はめ二本はめ　錦重
身をこにし手がらは敵に九さうばい　樂輔

すゝはきは紋日の内のちりほこり　僞名
ごばんをのけてしつけ苧をくつている　朝潮
東門に呉はめつぼうと見ぬいた眼　水鏡
川中へおした車はかんちがひ　的丁
目のきいた四つ手衣の袖を引き　麥仕
一往一來橋げたをとびあるき　水鏡
吉隆はかごふんばつて下知をする　古鳥
としてからさきはあいつがちへでなし　笑丸
觀世音處を庭籠でかつて置　山猿
わり土間は七八人を一トたばね　半下
子をくすねかち逃にするてうはんば　カテウ
そさのをはおはらひ箱をしよいはじめ　草人
紋日まへかよはぬ神にたゝりなし　葉千
ゑびすだといふのに下女はゑべす講　松歌
こんの卦は母と清明まづおぼへ　水鏡
つがもねへだん食をする成田山　留人
いなか道一里は京間より長し　笑丸
うなぎやの女房小串をちよいとさし　常仕
納豆をおびひろどけの人がよび　春駒
しり馬にかげ辨慶はじきにのり　東猴

帶をときなんしは皮をむく下地　常住
小式部が緋のはかま迄ぬすみ出し　瓦合
女房のこんだてせつぴいもをいれ　其流
六尊のみだとなまゑいおがむなり　草人
目黒道ぢゃいとばゞあつたとさ　加丈
早太おもへらく四條へだしたらば　玉陶
そんのたつ物とくりとは是いかに　山猿
朝がへり女房ひたいに八文字　有幸
ごくこんい大黒まひを寺でみる　瓦合
目や口へ豫讓こくそをかはぬ斗（はか）　古鳥
鳶のけんくわを親分はさらつて來　杜蝶
めくらには叶ひませぬとおふがつて　瓦合
百兩もつてかつらぎのおかみさん　藤波
雪よりも女郎にふられ興がさめ　瓦合
はしたなくよたかに百の口をとき　草人
じやうのある女でかぎをまかせてる　瓦合
どろ水でてつぽう玉をみがいてる　水鏡
どら和尚げいこのばちでのどをなで　水鳥
口さきにのり舟にのりかごにのり　的丁
いづもよりこたつ手ばやいゑん結び　カテウ

ひるあけて見れば工合のよいふすま　留人
くちびるはうすくあついはつらのかは　山笑
辻ぎみの御所へ竹光公御入り　草人
ぼろつかひ二歩一ぽんのふと元手　水鏡
さがみ下女よらば組んといふやうす　笑丸
ふかしたてにぎつて下女の餘念なさ　岩猿

東猴評

國の杖より殿中は冥加なり　二松
泰平の鎧は虫がうらをかき　里梅
おそれおゝくもはきだめと名づけたり　兎禿
芋のぼうこん聲あつてかたちなし　散売
白黒の名をしのはらでさらしあげ　岩猿
玉だれをおち雨だれの下たにたち　叁亭
枕さうしを書て手でみすをまき　瓦合
雲中をおぼつかなくも射ておとし　カテウ
落角の一度もしない兜なり　虻内
たがいせん定石をうつ甲斐越後　和文
金馬代小づかの馬も同じ判　是樂
おにが島廻るじぶんに子は寐つき　一徳
出しいれのならぬ土藏のつゝら石　柳鳥

老こんだ家はしやうじもしはだらけ　三朝
身上は日の出むすこはふところ手　樂輔
八味丸ねりまのやうな足でけし　河楊
權五郎さげぶりといふ目でねらひ　三介
かたきうちすむとさぬきへ坊さらば　同
富貴天にあり鯨の初うなり　水鳥
ほてい竹こゝをにぎれと生れつき　岩猿
無理むたいつんぼがあけるさうがうか　ト、ク
こぼれたで水もたまらずさとる也　山笑
切ばりの花は實になる女房なり　古遊
手のひらへ書ての丶字は口でいひ　梅岨
長安の御用ふらすこあつめてる　里梅
ものもうに公家をさらつて嫁はにげ　錦重
お目見へに琴はいゝへのうつくしさ　里梅
滿月も黑くかすみをおつぷさぎ　庭花
一言鈍白樂屋はそばだらけ　盤谷
竹垣のふへは耳より身にこたへ　庭花
代參は外にうれしい手もあはせ　留人
人かいになれとすゝめるすみだ川　雨旦
てつぽうで士卒はしのぐ冬御陣　笑丸

すでの事酒のさかなにいなだ姫　三介
まだはたち山の神とはいひがたし　雨旦
あらがねの土にて出來ぬ和歌の道　草人
ひりかけるやうな禮義を陸尺し　平喜
そでうちはろふかげもなし鲊や〳〵　笑丸
かんざしでしつぽく鍋のふわけする　志一
孝行なむすめに某むせかへり　〆子
口べにをさすと笑に手間がとれ　朝潮
しやれたばゞつくばひたいて鼠色　草人
劔一がしちやを出ると無刀也　河楊
くわいりきらんしんをかたる講釋師　三松
つれぶしでそれはうは氣な水あさぎ　晴風
すいむすこからい親父にあまい母　里梅
一歩二朱ぐらいまつたにまたうせず　雨柳
雪は鴫をにてのんでさんたんす　有幸
下女がたこ其匂ふ事九十九里　河楊
みそはかへどもおとのせぬひとり者　マイタ
そばかすへうどんをぬつた信濃下女　河楊
馬士のしんまい小便をどぶへたれ　錦重
だんなさんへぎりたゝず下女いざり　笑丸

かゆづへのあとが赤子のしりへ付き　梅笠

狐聲評

御舞臺へ出るは治世の七騎落　三松
是は善い子だぞと梅の枝をわけ　水鏡
山もりの土一升を唐でほめ　可笑
鶴の舞ふ頃はかまくら日の出也　志夕
南無石清水八幡と弓でつき　水鏡
かなづかひ迄も定る御家なり　山笑
御座敷のなりにすわらぬ國家老　水鏡
名作もまげればまがる御ふがつて　常住
あづまへ下るしをりにはかきつばた　笑丸
ぶつ付た筆もたつしやな壽を祝ひ　古遊
暮の嫁なんじをよぶは金の事　柳水
拜領の二字はたからのかずに入り　朝潮
めやうがをばしらずに喰ふやつはばか　斗丸
市にうる小判延喜の御代にでき　有幸
孝行さおやの手本をほごにせず　古遊
小からかさ雨より霜によくうれる　眼多丸
しよくを取る手だてに箸を落す也　水鏡
たこざかなはさむちへよりたべるちへ　射夕
やみうちにあはぬははくの付たちへ　水鏡
年のなだこぎぬけて出るたから船　同
しらなみの行衛を古歌で御さばき　瓦合
南無御いせさまとは釋氏定木なり　河楊
日本の夜なべに唐で日をさまし　亦樂
鳫皮紙へ書くかうがいのむしん文　古遊
赤人の歌白いのを百へ入れ　青露
尺八もぼろ〳〵とした古土藏　盤谷
子の糸のねだられている凧の糸　岩猿
おちたるをひろはず戸をもたてずねる　瓦合
ふたおやのつへと頼むはころび也　河楊
八艘と七尺和漢ひやをとこ　柳水
きよみづのぶたいでいせや芝居也　ト、ク
しり口でしやべつてほことたてをうり　瓦合
生國をよくぞんぜずか一歩とり　其笠
らせう門がし腕づくで引あげる　僞名
座がしらはにぎりこぶしへあごをのせ　春駒
千人の子がのむやうな乳のゑま　一德
うはばみが出たと宰予はおこされる　和文
大尾
もや〳〵の關はゆるさぬ高尾なり　巾布

川柳評

慶安四藍より青くしたまはず　兎合
千年もなじんだやうな御飼つけ　可笑
くだされながら先づ引きぞ煩らはせ　兎合
ぎふの城まづ道草にひつこぬき　和文
御しき日合羽の並ぶ御ほりばた　三枝
千ざゐもよみ人はくちぬさくら也　河楊
餘の木だと御目障りだに首尾がよし　可笑
海上のみさご本間に射て落し　水鏡
仲逵はにげ仲國はのつゝける　盤谷
こんぴらへ壁訴訟して願をかけ　古鳥
二はい目はかるう／＼と最明寺　靑露
口買でも高尾三十二相なり　河楊
六歌仙娘一人りにむこ五人　兎合
老子もう七夜の頃に茶をきつし　和文
澤庵はから／＼とした寺をもち　新鳥
講釋師すど戰場をふんだやう　散壳
てつぽうもすいつけで出る御家がら　志夕
せきとめて見ろと一騎で乘やぶり　水鏡
三國志たんぺい急はつよい人　水道

ふんべつは藥罐に成てせんじ出し　古鳥
尺八もぼろ／＼とした古土藏　盤谷
ひとり異郷で異客なり初會　兎合
こうりやうのくいありなどゝ居候　笑丸
おいらんへいつそ謠をかたりんす　草人
三州の火いりだろうと大江山　鷺舟
なんりやうはせうが一片程な禮　松歌
一合を下戸三人でもちにつき　平喜
孝經で大めし喰がからへ知れ　杜蝶
二三ばい火ぶたを切てどんとのみ　柳水
井戸がへに大屋のさ／＼高あしだ　玉陶
なべいかけ四疊半ほど取ちらし　巾布
ひちりきと赤子の聲のやかましさ　同
昔おとこありけりぼろをかつたとさ　兎合
肉おれをのんで隱居はほねを折　岩猿
さて爪は長いが琴はからつきり　山笑
五丁町孝と不孝のざこねなり　岩猿
さつさとござつて困るのは大晦日　笑丸
衣やうすく片そぎの箱をだき　散壳
山歸來さてかさばつたくすり也　水鏡

しちくどく番衆おがむ〳〵なり　水鏡
下女ちぼうなべやを〆ておどろかせ　僞名
すりこ木のおいこみにくいなりに成　可笑
下女に神酒あげろといへばわたくしは　散壳
一ばんであつ板下女がつらのかは　三朝
衣食住ふそくもなくてぢんきよ也　玉陶
あら世帶見ればていしゆはけふも内　麥仕
雪霜にいんきよきんたま斗りおへ　虻内
かの海底のおくに入るりんの玉　笠下
重槖のごとくで下女のくさき事　和文
麩のごとく大久保にぎりたてまつり　同

朝潮評

東海の道をば蜘が能おしへ　笑丸
名將さみかたの咽を御酢いさつ　古遊
大丈夫米を三つにかみくだき　兎禿
ゐげい僧石田にくんで都づめ　僞名
年々に木扁に登り取て出し　其流
水よりもさむい氷も孝にとけ　亦樂
きつとした御慶は風を臺にのせ　古鳥
人を需(もとめ)てまつすぐな道をきゝ　河楊
かねつかふ七人衆は賤が嶽　河楊
鬼か人か鹿とわからぬかぶと也　東猴
筋違た机で筆をとりはじめ　志夕
筋違で机を直す御書きぞめ　可笑
南國ゐんぎやとこゝろざす僧に候　兎禿
師走だと忠盛水をあびるとこ　同
かんざしでさす出格子の雪の寸　東猴
干鯛箱二度のつとめにうすげしやう　和文
遍照は乙女になんの用がある　柳鳥
千客萬來みな來るとこまる也　兎禿
てうせんべつこの簪を呂布がやり　水鏡
雪の禪僧あたまからくさるなり　庭花
ないもせぬ足で達磨は江を渡り　鷺舟
母の手にあまるはどらと鬼の豆　晴風
湯やの唄あかのぬけない聲斗り　里梅
てうちんのひつときではるけちな窓　半下
逖足の嫁はま弓に射とめられ　〆子
左りがきいたから水をのみに出る　狐穴
水くみの年禮戸じりから申し　平喜
かんざしのうたがいはれる十三日　兎禿

客とるは蜘手かくなは八文字　山柳
一トしづくこぼして水をあびせられ　目多丸
やにつこい留めやうきせるかくす也　河楊
じれつてへよと火鉢にてむけん也　狐穴
いそがしさ松から雪が首を出し　志丸
おはぐろへぶ形り書たは女筆也　目多丸
明き手ではこたつの上のねこをなで　山柳
足輕も棒をつゝぱる御こんれい　河楊

狐聲評

御治世も扇になびく御道筋　古鳥
茶臼山冬ひいたのは甘ま茶也　亦樂
人といふ文字迄上みに立ちがたし　山笑
楠へア、の御聲で猶くちず　麥仕
甚五郎左りがきいてけづるなり　權八
太子講ほぞをきめたりけづゝたり　水道
手本にもなる子は墨にそまぬ也　梅岨
唐さらさ南部の下にへこんでる　河楊
ふじびたひつくば鼠に下女つくり　笑丸
そばきり色をぶつかけて開帳し　山笑
杵をかひ先餅につく年の市　水鏡

さむい事まわたで首を〆ている　山笑
うごかざる事山出しのおしな也　杜蝶
はだか參りはちんぼうを振て行　目多丸

川柳評

諸社山を一目に御覽遊され　龜樂
六朝につかへた竹は弓になり　水鏡
一トまがり十萬石の御かまへ　朝湖
せんだんの二歯にめして御ほうらつ　散売
六尺を七尺にしておかけぬけ　志夕
いなか道仁者ゆづゝて田へころげ　杜蝶
サア鷲についてごされと御あんない　三枝
長刀の下タを八十二騎とをり　水鏡
箒のない文字は慶安四年なり　亦樂
へんてつもあるはたぎつた遊也　笑丸
産家からかぢやへきたいなる里子　鷺舟
御ゆどのであのとのさまのおふけなさ　死合
かくし妻ありとは主人相知らず　半下
京だんと鼻ごゑ九年いがみ合　笑丸
うつくしい顔で楊妓妃ぶたをくひ　平喜
鈴が森目にもろ〳〵の不浄を見　狐穴

松の内でき合の武士二人前　平喜
のし餅のやうに生酔あつかはれ　梅笠
暮の金やはかなんじにわたすべき　其流
女のたましいばかげたおとことぎ　柳鳥
杖をつく頃からけつまづきはなし　笑丸
猪牙をやめ親舟にのる大みそか　水鏡
處の内は年中どをろどろ　山柳
材木もきめうむりやうに寄てくる　笑丸
何萬石もはいるのは江戸の升　三枝
よくいへばわるくいわれる後家の髪　紀樂
しわい國から御はらいがたんと出る　朝湖
さり狀の硯へしたむ盆の水　古鳥
あまくさをおんばの馬が喰つくし　河楊
おもしろくなるは三たてめ三會目　紀樂
おめでたさ馬がはやめの御使者也　里梅
こがらしに青葉のはいるたばこ入れ　目多丸
矢より後光がまばしいと鬼神逊　巾布
火がふると見へてかけ取あつくなり　平喜
雲龍の湖水をわたる三日すぎ　水鏡
ありつたけお杉をなぶるはしたせに　梅笠

女房うるさくもち米はくく　葉千
かけ取のかへつた跡でふてへやつ　水鏡
論語よみろんごしらずにかりだらけ　杜蝶
あたまからあびらうんけん氷つき　半下
餅米をおこわにかけてひいてくる　水鏡
うつくしい下女御作法を度々やぶり　マイタ
口ばかりやみくもたゝく下手あんま　樂輔
御ふがつてながれん武者に利をくわへ　和文
鳥臺が無いと亡者と施主のやう　柳鳥
ひやめしのたきたてをうるひなた向　山人
太子講ほぞをきめたりけづゝたり　水道
すゝはらひうばは男を尻でなげ　梅笠
おちもせぬ物を握てさむい事　和文
御家例だくじれくくと十三日　兎禿

俳風柳多留五十五篇　終

俳風柳多留五十六篇

前句の盛んなるや遠く信陽におよぼし、こたび天白雨社へ奉納の催し成りぬも、正直を第一とす、撰者の意ならんと、東都の連衆の秀逸の冊に、かの句々をむすぶと言ふ事を、其冊のかふべに神ならぬ凡夫菅裏其意を恐記、

文化八秋

遊高評

有がたき神代も聞かぬ水くゝり　松歌
萬代も闇く大炊な御寄附也　横好
ぬれて干す衣が百の父と母　如雀
二人共交屋は秋の風を詠み　春駒
芋喰の和尚ゑご〳〵して歩行　青露
松竹の間から義理を述初め　梅琴
御謡が濟と脣も細字也　木子

片乳は里子へひゞく暮のかね　釣好
産後十五人扶持に弟召出れ　竹笆
轉宅と聞て萬歳舌つゞみ　谷水
はせ賣の聲に戸棚をひよくら出る　同
寶舟布袋の方へかしぐなり　菅裏
おきやアがれ馴染で見れば泣上戸　雨聲
まり場から衣紋流しの面白さ　和文
夜來風雨は素一分の頭痛也　里冢
きつとして武家へは紺や明後日　里遊
其内で關羽緋桃の樣に酔ひ　礫川
油屋を弟子にほしいと車胤いひ　同
はかり琴有りと仲達引かへし　賤丸
風の神に送られたのは樂天　釣好
ひへ巨燵でも雀をばぬくめ鳥　散亮
即吟でおもふ矢坪へ又當る　其久賀
むつまじい夫婦摺鉢目が潰れ　横好
佛檀の下に凡夫は氣が付ず　同
黒砂糖道々なめて高がらせ　牛住
村芝居じやらりぶちだとせなアいひ　和里
四斗樽ほどの泡のたつ鯨の屁　瓢金

如雀判

からうたのしろさはすみにおつけされ　遊高
川に禹が有て洪水させぬなり　一露
切杭の噂が止むと蛙なく　金牛
手廻しに足を洗ッた張子房　和文
還幸の跡へ目出たい陣をとり　同
雪氷筒切にする孝のとく　里梅
萠黄の顔でなま長い夢を見る　金牛
七景は見て一景は聞て寐る　春駒
方四里は民のとゞまる所なり　横好
萬歳は柱に節を付ていひ　遊高
朝歸り須彌のいかりを海なだめ　木賀
鬼の留主嫁洗濯の水調子　釣好
素一分は此雪にいざさらばなり　有幸
くすし忠守茶にされて腹を立て　青露
伸をしい〳〵賣て遣る凧の糸　雨旦
呼出して我顔を見る二月堂　里遊
玉をあざむくお妾のはすは也　雨旦
なきにしもあらず禿に仕て育て　賤丸
俎板に乘るは目出たい佛の坐　芋洸

兄分に廓の尻をぬぐはせる　和文
長持や琴を植とく氣の長さ　春駒
借はかりたが傘は上へあき　金牛
荒波もくだける石の御門番　里冢
嫁の禮先キのが三分あとが貳朱　和里
直をきめて結跏趺坐するかゞみとぎ　猿子
三日月で一句も出來ぬ蛙ども　谷水
十三日鼠の巣から下女が文　三四
半口を讀書丸にておつぷさぎ　谷水
あした取爪で薺をつんで居る　有幸
富士びたい女も廿チぐらゐまで　春駒
御不勝手御臺所は紋づくし　黄峰
花角力行司が宵の内びらき　横好
ぬれわらといふと新造もう笑ひ　礫川

文日堂斧

わづか五字守れば廣き人の道　春駒
年の幕明き正面が不老門　美德
曇なく九里を手に取る御寶藏　横好
眞黑に成て佛も御味方　谷水
大鍋の松へつる程まわりみち　壽キ

白波が來たで千鳥は音を發し　里冢
雁門をあほう〳〵と鳥ぬけ　和文
扣かねど來て賑かなたいこ樽　其末
木の下陰を宿とする福壽草　有幸
口をすくさせ梅がえを嫁しらべ　和文
もれ出るまで花嫁はいわぬなり　里梅
金的と見込まれ矢文やたら來る　横好
新門をぬけると古く醫者に化ヶ　同
心中は大師河原で見た女　同
節分に精進落る角大師　雨二
痩馬に三ヶの庄は荷が過る　如雀
兄樣おんま尻持は妾なり　雨旦
淺黄うらすべきやうなく夜を明カし　和文
あられからぱつちの見へるやす禮者　春駒
節季候も忌中の門ドはせきぞれず　牛佳
追ひ羽子のそれ矢調市は盃で請け　猿子
美しい天魔に息子見入られ　女聲
火の病迄はおもしろ盡しなり　五蝶
はつかりの町は米にも花が咲き　有幸
桐の木を伐る頃娘ずいが明き　里雀

かの所ヨは武藏々々と一ッきり　雨夕
文日堂判
菊月の晦日はきくへ鎭坐也　猿子
五日目に風鈴の鳴るおだやかさ　和里
四里四方水も四角にしみわたり　猿子
夜學でも胸はあかるき夏と冬　木子
松風に吹ちらされる司馬が勢　里冢
鶯も蛙も鳴かぬ小倉山　賤丸
儒を穴に仕たから秦のやみになる　和文
天竺へ梅から廻る日の永さ　青露
南風雪の達磨は無一物　雨旦
人知らぬ酒もり味噌で名が殘り　松歌
長安の酒屋李白に倒される　木子
清盛は佛なぶりの元祖なり　金牛
なまくらな武士は青砥に合ひかねる　如雀
鶯の聲に臥龍も目をひらき　木子
八百と呼び八文で迯るなり　青露
手箱を明れば琴の爪でなし　金牛
夜るの富士屛風が浦でふし拜み　猿子
口切の使其手はくはぬなり　東鳥

鳳凰やきりんが出ると獏はやせ　萬仁
駕賃は一分とお松岡づもり　和文
お七がたい夜ありもので客を呼び　金牛
木場の釣つれぬと釣が三匁　文蝶
牛の角文字は役者も女中向き　如雀
兵狠が矢ざまをぬける花の朝　雨旦
四斗樽へ矢ざまを明て下戸を入　横好
黒染の上りたばこでつやをつけ　黄峯
天窓づくしで龍宮のやくはらひ　金牛
ひな棚の家主らしい治郎左衛門　雨旦
先き行はせまいと亭主乳を貰ひ　文蝶
質草は逆おもだかゝ初なり　如雀
ぬるそうな亭主茶の下焚せられ　雨旦
年に二度年季大赦に行われ　梁主

如雀評

叡山へ其日に勅使四度たち　礫川
かく年に夫婦別あるおだやかさ　雨夕
萩大名を笑つてる御大名　金牛
非修非學切りていさかい殊勝也　青露
さかんでは雨おとろへて食を乞　散売

白酒で嫁桃園に義をむすぶ　里冢
文金でひと目大きな門を〆　雨聲
紫や水も箱から出してそめ　和里
御櫛上げ苧を結び上げ隙に成り　文蝶
長閑さや諏訪の親類遠くなり　里冢
なわばりをしい〳〵鶴の評義也　和文
ではござるまいと藥師寺にが笑ひ　柳雨
目隱しのひなは手の鳴る方へ賣れ　雨旦
素見さと十軒店へ女房行　礫川
あまといつてもしやア〳〵と素肌武者　金牛
飯もりの先きに大もりいゝ地名　香貞
又雪の寸かとお針かしてやり　柳雨
けつこうな繼穗をしたは源左衛門　釣好
落穗集腰元拾ひ〳〵よみ　横好
左近それお手を〳〵と石田いひ　里遊
もめん荷のうしろに一ッへの字の木　金牛
四輪車と四ッ手和漢の軍師也　青露
田樂は狐色より引かへし　釣好
雪中で高ひねの出た鶯菜　煙幸
主上を初め奉りよこに這ひ　金牛

汗水も溜れば白い水流れ　雨旦
稲妻でぐわら／＼と藏を明　丸龍
鶴ほどに小判を付る鬼子母神　和文
馬鹿野郎いもりを五ッ六ッやき　金山
夜講釋しびれの切る水こでん　和文

柳雨評

無敵とは治まる御代の流義なり　春駒
後悔は四馬の車の跡に立ち　同
和歌の二字浦山かけて風雅也　青露
物がたり迄も若菜は二葉なり　金牛
師の坊の七尺四方水がにげ　一露
繁昌さ今はもへ出る草もなし　賤丸
松はげに幾世も杉のへんを取り　眉長
是は御加筆と兼好下書を見せ　金牛
其板はみんな正サ目の御捌き　木賀
子を見る事親にしかず直な板　和文
坤の卦が出たで康成腕をくみ　遊高
虫が知らせて頼光の寐ぐるしさ　金牛
花の献立て切ておく屏風坂　辻木
ちり込んだ花香煎をくみなをし　眉長

大あらめさつくと着なす源左衛門　和文
鉢の木が無いと粟津を貰ふ所　礫川
粟飯で大祿をつる源左衛門　谷水
下乗でも桂馬の次へ鑓を立テ　雨夕
人ン間ンに霜がかゝるとしぶくなる　一夕
須田町で秋は木へんの市が立ち　遊高
和國橋あたり娘のゑもん坂　雨夕
親は弓子は弦に寐る枕がや　古柳
碁仲間に打て付たる春の雨　里冢
花の山師匠の連るまゝ子算　木子
花の山師匠扇で下知をする　竹笆
一本宛さづけて師匠花見虫　森鳥
若衆を休ませ野郎を取替る　松歌
摺鉦入りの相方で米相場　金牛
辨當をいてふでひらく花の雨　谷水
長曾我部左宮の先祖かとたわけ　笠下
明キ樽と生酔下戸の荷やつかい　黄峯
花は見せ實で身をすぎる梅やしき　梁主
長州は筋目正しき遊女也　東鳥
旅おくり大和をめぐるほど遣ひ　和文

こわい事庭籠の口に鋏虫　雨夕
蛇遣ひへびをつかへばいそがしき　水治
茶計で盤若しること白眼でる　松門
足ではたらく油揚の追落し　香貞
土手節の馬士はあみ笠のせて行　杓子
羅漢の後ろ三階のさゝい堂　其流
村芝居さくら生どる妹脊山　谷水
精靈へすき切レのある膳で上ゲ　横好
むく鳥を鴨に仕立る松の内　雪雫
薬しようがで下女ぬかみそへ棡をふり　金牛
こん地に白キ立テ葵こま廻し　梅鳥
心太ひよろ／＼／＼とかしこまり　有幸
上の字の口で中の字下女覺へ　雨夕
下女芝居極逆上の躰に見へ　青露
主人ン相知らずとは下女いわせぬ子　里冢
三會目ずつとぽつぽへつゝぱいり　里梅
横に來て舟へ狸を乘せる也　礫川
芋の幽靈聲有てかたちなし　散壳
佐久間の下女は箔付のちゃれ髪　如雀
文日堂判

羽根を干す鵜は御たもんの前朱雀　横好
湖と富士は日本の鼻と口　柳雨
日出度さは産所を的に弦の音　雨夕
結ばれる上に八月の雲が立　金牛
三面ンをすて一面に御握り　雪雫
細々と兜をぬいで和歌の傳　青露
月を春日を産むよふな廿山　新右
御車に廻り合せのいゝ高尾　梅鳥
七人一坐酒盛はうしほなり　水治
暑イ事嫁のちりけの灸が見へ　雲路
坐禪より名の高いのは腹籠り　水治
さり狀を傳法暇のよふに書き　谷水
最ふ押せぬ年も日出度御箆役　横好
雪の竹いんぎん過て通られず　柳雨
唐崎はほこりのたゝぬ地名也　ヤマキ
殘りては貞女妖婦も同じ石　可興
なまぐさい風で冥途の鳥が出る　和里
罷歸るが來んしたと禿言ヒ　雨柳
錢口もあぶなく迯るなめり川　雨旦
こわひ事庭籠の口に鋏虫　雨夕

膝からは少しこぼれて水調子　雨旦
御春中を流しましやうと長田言　經芝
過去帳へ利上して置御齋米　可興
七色をあつめて辛い世を渡り　竹笆
あれさおゆるし遊ばせと百合の花　横好
病上り神酒へ切火も力わざ　柳雨
黑猫のしばられて居るむごひ事　雲路
稗蒔の細工烏賊さま鷺のよふ　里梅
骨と皮醫者見所がないと言　釣好
弟は桃の都の袴だれ　和文
古井戸へ利休すんでにはまる所　是樂
むぐらもち一寸ン上は地ごくなり　喜丸
留桶に膝直し程湯屋で打　由良人
一チ膳籠でうで卵〳〵　香貞
富士の裾二十四郎が大手から　木子
死だ金生かして遣ふ化た醫者　松雫
猫の額におしろいが咲みだれ　森烏
千兩と三分が堀江町に見へ　雨柳
いゝ天氣串差首のさらし物　一草
四人が小貮朱にあたる汗をふき　東烏

鼠木戸化して鶉の番と成　如雀
三國へ屁を一つ宛ひつて迯げ　金牛
人魂で草りをさがす樂屋番　有幸
むさ判を湯屋水船へ二つ浮け　半下
女の身なげおどざとも言つべし　黄峯
天然さ輿屋の亭主うれい面ラ　森烏
呉ぬならかのと妾へ母の文　和文
よしなよの上のよの字は下女置字　梁主
まんぢうは蕎麥に八文高くうり　芋洗
むごい事下女三文で子をおろし　雪洗
大尾　鐵炮であつたら鳥居押つたおし　ヤマキ
横根に抜て名山につゝがなし　細芝

春駒評

光陰を矢とおもはれぬ日の永さ　礫川
神に飛び佛に降る梅の花　芋洗
羽團扇で鶴の翼へ下知をする　三松
草化してむかし迯たる水を呼　散売
扨遠い一里と言て徐福來る　和文
源氏より奥では光る源之介　雨旦
四三から中ぬきにする能い棧敷　里梅

扶桑應な山だと唐でそねむ也　雨夕
立つ鳥に筆を殘して一首よみ　柳雨
不順の時候すゝはきに端午也　釣好
望まれて爪をかくして猫を出し　ヤマキ
口に手があり衿元に足があり　一草
人篇に我も〳〵と雨やどり　里梅
いつからか川ばた駒を通す也　夢中
題目の樣に芝海老串へさし　里遊
得こそはやらじ出直せと飛車をなり　柳雨
アヽつがもねへ海老の出る木場の釣　梅鳥
つがもなく利くと三升の灸をする　雨夕
蚊やうりはやはりひろがる聲を出し　紀樂
藥種やの調市現金湯とよみ　志丸
樂屋では上席をする平衛門　竹笆
來付けた商人ちと來ぬと死ンだらう　横好
長安の居酒屋葱に羊なり　和文
柹の皮むいた自慢に立て見せ　里松
重ては煮られるおもひ鍋の數　柳雨
一箱は晝一はこは夜落る　如雀
賢人と孝子を平ラへ盛て出し　三松

伊勢孫のあたりへ孟母こして來る　如雀
彫より外は針業はしらぬ嫁　釣好
かくては果じと淺黄手を扣き　ヤマキ
皺うりが來べき宵だと茄子を買ひ　雨夕
晝八つ乳夜るは密事もかたる也　雨旦
竹光の領分らしい二合半　其笠
金を湯につかつたむすこ垢がぬけ　金牛
飛車先の歩の樣に死す稻荷町　三松
汐汲に屎桶を出す村芝居　柳雨
水にしてすむは濁らぬ夫婦也　梅鳥
看經の外はにしむし姑いひ　里松
豆銀を崩して蓮を錢にする　三松
初鰹下女雞肋をしやぶつてる　和文
あゆみまで下女來は來たが土間ぐれる　其流
姫糊も毛のはへる頃くさくなり　其笠
闕斷所下女よし町とおもつてる　梅舍
中條のはれた下帶下女ねだり　青露
中ゆびにしわのよるほど長いまゝ　同
女房に舌の長いはなめた下女　酒好
滿面に笑みをふくみて下女承知　賤丸

引こした晩よもやとは下女油斷　雲路
下女が部屋是より左夜這道　金牛
文日堂評
今は花むかしは月の名所也　青露
日々に孔子出張の繁昌さ　若蝶
花の江戸御門に桔梗櫻也　是樂
咄にも五指を折らせるかきつばた　其流
虞氏西施まだ櫻には咲かぬ也　雲路
うけに入前夜めでたき不二の山　雨夕
花の色は美しけれど實はならず　五蝶
品ンのよい爪を花嫁のばす也　錦重
掛るとも敷ともつかぬ花曇　雨旦
かねのわらじで尋ても無い御下駄　三松
名の高い月は更級晦日なり　新右
誓てし人の命へ灸をする　金牛
もう舟もいゝとさし身で呑で居る　雨夕
生ぐさい荷だこ忠義の肩に出來　散売
壇の浦野郎は地下の土左衛門　香貞
繩でする不二の裾野の茄子畑　佳遊
追風に帆は弓なりの矢橋舟　雨旦

唐さきは一入ゆかし地名なり　梅鳥
短か夜を鳴くと扣くで寐せ付ず　志丸
江戸の不二夕べに立て朝歸り　有幸
惣銅壺尺取虫が六つ這ひ　眉長
新造は伏見海道目を配り　和文
四日には古御所となる通り町　新右
年禮の雪にあられは難義する　三松
練馬の國の住人と名乘て出　雲路
御妾は足り三寸の舌をまき　和文
角な玉子を三つ股でぶちくだき　喜丸
長唄のこねどりをする杵屋也　其流
坂へ押す車力當年もう九才　金山
五明樓淺黃愚案に落かねる　賤丸
もつけ調法神道者手がふるへ　横好
山だしで用ひられるはほとゝぎす　雪雫
錢質を八百かりる大だはけ　水治
口明けの樽の呼吸の大拍子　柳雨
子は夢で盗まれて居る小判形り　春駒
かゝさんの着物はとなりのおばさんの　和文
きんたまもたらりと伸る時津風　辻木

おきやアがれ鐵炮玉まで廓なまり　梅鳥
夜のあみ笠吊と下女おもひ　笠下
サア／＼と二の膳迄も下女は据ゑ　遊馬
是で來るかと宿屋女の手を握り　松歌
折介の遊びはたかゞ原四文　志丸
拔たかと聞けばおへたと田舍風呂　有幸
おう寒いのうで初會は先づあんど　雲路

青露評

日の下の人夢の景御手に入　礫川
爪折を差す指折の御大祿　雨旦
松風に石も飛びちる關ヶ原　鶍船
梅干を左右に花の御容顏　一夕
木に眠る人も競馬の放れ物　柳雨
花嫁の文あら／＼と初便り　横好
枯るはづ千盛り後は三つ成　雨旦
出雲ほど守のあつまる惣出仕　同
手習の卷は清書に念が入り　木賀
母は子の爲に住所を三度かへ　酒好
花の根を仲人は度々廻しに來　木賀
寐ていた蛇の目覺させた名句也　礫川

くの字からもの字と糸の道しるべ　芋洗
乘り物へあやめを活て御所を下り　散壳
生マ梅の種こつそりと嫁は捨て　礫川
宇治の火も衞士の焚火も晝は消え　艶里
つかまると蟬は地聲で鳴てゐる　有幸
何を種とて面影を惜んだか　一聲
三漢の人のはりこを付ねらひ　里梅
日本へふじな使を始皇立て　木賀
腰掛に寐さうな役を徐福うけ　横好
海士よ玉よが龍宮の合言葉　里冢
眞黑になつて賣のは烏丸　三松
親の恩蜜柑籠から御発駕　草竹
心中の縁組を見る結納屋　巾布
三年で晴れるは長い尼あがり　三松
高砂にいびられ嫁は松へ逃げ　礫川
妾の子がさすられて居るかしは餅　水治
瀧水を升で計るは和泉町　志丸
有りつたけ笑て茶臼かりて來る　茂柳
アヽら用がましう娘かけて來る　里梅
鼎着た形りつく／＼と醫者詠め　里松

じやうだんにしても鼎はこはひ物　里冢
腹がけで欄間の出來る呉服店　眉長
一寸とひく琴へ風呂敷ひしにかけ　一夕
和田鈴木いづれ筋有る蒲燒屋　松歌
蛸洗ふ樣に百萬べんをくる　辻木
少將も百にはたらぬ男なり　鍋屋
こりやだまれ譯はこうだと朝歸り　若蝶
船頭は朔日丸とよんで行く　夢中
せつぱつまつて娘をば眞ぷたつ　器水
初つ王手目の藥だと差して居る　福松
後ろからぐつと乘り込一の谷　煙幸
佐野の馬車に腰をかけて居る　梅鳥
四會目は遣り手やつぱりこはひ面ラ　賤丸
晝見せの上坐に遣り手咄してる　巾布
子ぼんのうおゝね利屈の有ることよ　和文
猩々をうたつてどぶの端を來る　同
サア事だ寺は箕輪で七つ時　谷水
其足を玉屋と御用譽て逃げ　新右
大雨はあばたに見へる丸の内　里雀
紅葉ばを一ッに割れば鹿の角　茂柳

ちゝんぷい〱ト御袋療治なり　シクト
持てたのも余の義にあらず夜具の事　ヤマキ
出て行けもすさまじいねと雪の朝　礫川
夫レ一分花じやと淺黄相渡す　和里
淸盛の幽靈不動かとおもひ　田鼠
化物も無筆ではなし札におぢ　草竹
時に半ぺん菜を入る安す料理　賤丸
とくびこんはづして宰予いびき也　如雀
銕漿の張札下女の筆意也　螢火
伊與染にわつちもしやうと下女ぬかし　志丸
まだ出ます〱と脊中下女流し　里梅
うんざりは花嫁いつか三井のかね　雨夕
大久保に手を洗へとは御運强　同

文日堂評

四人目は三國一の御□□也　煙幸
天草で古今めうがな手がら也　ヤマキ
小笠原流で御朱印取り戻し　巾布
富士島といふべき所を竹生島　和文
日本へ鬼の出て居る繁昌さ　器水
大下馬の鑓武藏野のつくし也　水治

一本の松を日本の唐に植る　艶里
空色を鼠に染る美しさ　里梅
俄雨秋田で蕗の葉をもらひ　器水
不二詣一トむれ雪の白ゆかた　巾布
勘定にすれば芍藥十日草　金牛
春秋をよむ燈火は夏と冬　其聲
螢より蜘と讀だは吉備がよい　東丘
火入にもまだ有明のほとぎす　横好
桑の枝提て孝子の墓參り　里梅
義士々々と石碑の並ぶいさぎよさ　艶里
句の以後は瓜に獣のへん付ず　和里
女めもぐるだと荊軻秦舞陽　和文
おつれ／＼疊半疊小倉山　青露
前通り下たに／＼で靜舞　和文
睦言はきらひざんすと高尾言ひ　酒好
よしの山横手を打て十八字　竹笆
奈良の風江戸で吹せる暑い事　釣好
抱付て御坐る眞下へ猪牙を入　魚冠
感應寺花をとりては身にならず　雪下
須磨左内殿に逢はうと坐頭來る　シクト

にが虫が寢て入りの出る涼だい　木賀
宇治の火も衞士の焚火も晝は消え　艶里
サア事だ寺は箕輪で七ツ時　谷水
對の人魂が田甫をふうわふわ　同
三尊にすくひ取られて眞ッぱだか　夢中
息子連れ一寸八分先きはやみ　森鳥
雪の段ろうそくへ降きなくさし　一夕
繁昌さ春の雀や目白おし　三松
何に付蚊につけ嫁をいぶすなり　谷水

信州松本天白雨社額面奉納

願主　里冢
　　　五蝶
補助　有幸

松歌評

松の本神も二枝跡をたれ　金牛
月雪の國へ花から十七字　有幸
花のない春は出雲の花配　雨聲
御熱氣が醒て所の名にのこり　里遊
四海浪しづかに國の賑かさ　一聲
切張は風よりしみる御敎訓　竹笆

煎豆に花の姿で禮參り　時朝
宮普請中にひとりはかゝみとぎ　里冢
始皇をば壁と見て書を塗込る　如雀
勘介が嫁山鳥の尾からよみ　茂柳
參詣群集弓からも弦からも　横好
諏訪や狐が渡ッたと觸歩行　里松
京からは華表峠も越す宮居　菅裏
人の子に翁起して貰ふ也　礫川
祉也句也と繪馬堂の額を譽め　里雀
仲人へ渡して神は知らぬ顏　路人
犬責に猿が下知して虎をやり　里冢
御妾の銀言耳に逆らはず　和文
親を見る事子にしかず母へ泣き　一艸
掌術を指でうち合おだやかさ　辻木
いゝ地面まゐらせ候に書とれず　林鳥
須彌蒼海の中に寐てあまへてる　春駒
辻番は鼻の障子もない所　一艸
戀に上下の隔有る古今集　竹邑
蟋蟀土龍の穴へ居候　茂柳
御紋から眞黑田よと覺えてる　女聲

遠州の上に駿河を掛ておき　花一
降雪をいたゞく八瀨の白木うり　可興
五月は張子六月は銕を干　螢火
やせがまんかさごの中へ武者一騎　志丸
駒下駄を片々外に稲光り　五蝶
ほとゝぎす此盃は殿方から　猿子
犬を見て猫は脊中で腹をたち　可興
桶狹間一度に籥がおつぱぢけ　竹笆
松竹と書て紅葉の判を押　里遊
棒ほどに針醫の手がら觸歩行　五蝶
巫女の色神かけてとは得手勝手　和文
神の餅内義淨々だと晒落る　如雀
長局のしこし計り山はなし　芳柳
生は堅く死後安々と後家渡　竹笆
鈴の緒ははづし御戸帳ひんまくり　釣好

文日堂判

正の字の並ぶ武の神稲の神　其流
信有る州には薄き氷なし　散売
米は俵に納まつてゆたか也　和里
八幡も上覽あれや米の出來　ヤマキ

稲妻は田畑清める様に見へ　有幸
戸隠といへど岩戸の闇がはれ　雨聲
虹の吹く頃御社も色直し　雨旦
新宅の魂いれる一萬度　釣好
智仁勇三句に出來る時鳥　雨聲
おとふかに又五つ増す御縁日　金牛
腹わたの末世に殘る越ッの魚　里遊
どふ見ても眞田は男二疋也　其流
鳥の目と仙臺にては申されず　可興
唐人はみんな嫌ひな蛇目ずし　香貞
風雅さは簑の答へにいはぬ色　和文
是は〳〵と顔の降る旅もどり　同
時明りでもおつ立る初のぼり　和里
夜宮には神馬も髪がちやんと出來　和文
二世の縁三世相にて糺すなり　螢火
息次のみかん下部の忠義也　五蝶
小鍛冶とは言へど大きく名を殘し　松歌
咲た櫻になぜ駒で御延引　美德
生酔が來ぬと名のないさくら也　雨聲
稲をおうりなんすかへと新造聞き　笠下

宮普請中にひとりはかゞみとぎ　里冢
鰐に呑れて御捻りはぶら下り　是樂
色よきと女郎の書くは金の事　松歌
嬉しさはかゝり次第の上ぞうり　水治
異見する身も踏はづするもん坂　路人
雷で御待申とたいこしやれ　錦重
親仁はしら川息子は夜舟也　里冢
栗喰の娘しぶ皮むけて居る　螢火
還幸に蕎麦屋へ勅使三度立ち　和文
江戸ッ子の聲は肩からゆり出し　散売
是も他生の御縁さと息子もて　里冢
楊貴妃は星をお先にして契り　松歌
二日月西から出たる様に見え　千里
嫁のいぢ片肌ぬいで茄子をつけ　和文
梅へ行人は櫻へ行氣なり　器水
橘と銀杏は金のなる木也　女聲
村芝居ある日狐にかはかされ　水治
鳩の祭りは石橋で出た地口　香貞
丸洗ひ何と聞たか嫁笑ひ　夢中
べらぼうにもてたと茶屋へ片手見せ　杓子

松茸の並んだ樣な田うゑ笠　林鳥
よし町の釜はこがねの鍬でほり　五蝶
からしなの月とは下女の聞かぢり　紀樂
つばをつけ毛を撫まはす筆細工　可興
神子の名にお稻おまんはきつい事　和文
鰐口に舞はせて鈴は太鼓打　其流
てれつくで晩も樂む神樂堂　キヌタ
神託正さに大釜へ入だかり　柳雨

川柳斧

抑唯(あほげたゞ)八まん五社の鎭守也　青露
神風の尊くうごく白幣(にぎて)　里冢
天白は二人と白(もうす)御社　香貞
納まつた弓矢は鳩のふんだらけ　是樂
月花と分けて兩社の御祭禮　雪下
力雄の後は戸ざゝぬ秋津しま　遊高
御神德案山子の弓も田を守り　礫川
御神木武の内ほど年がより　林鳥
取組の能さ男山稻荷山　半下
參詣群集弓からも弦からも　横好
楊國忠が威をくじく國家老　里遊

扨永い日だと光陰かろんずる　礫川
見送つて思ひは岩へねじり付き　林鳥
錫杖と御經の間に咳一つ　可興
布衣以下の娘ではなし神樂堂　青露
駒犬へ笠をかぶせてがあんがん　釣好
治部くられ刑部かなはず關ヶ原　和文
弦音を聞けば綿屋も手だれ也　横好
このしろで禰宜の呑でる未の日　一夕
大名の臍をうごかす狂言師　和恭
忠盛へ芋殼ともに下される　和文
萬卒を捨て一妾御寵愛　芳柳
圍れのすきやがゝりはちとにくし　礫川
曉の鐘六つ事をつきくづし　器水
春の夜をすこぶる氣ばる毛唐人　礫川
淸めの御手水ひしやくのろくろ首　柳雨
正宗を梁へ釣つとく村ぶげん　礫川
有明のつれなく見ゆるうれ殘り　玄里
五味の内親仁はにがし母甘し　其流
三味せん屋くるつたけがも療治をし　其久賀
かびくさい匂袋は母の所持　松歌

拔參り無間の錢をついて行　遊高
學者かならず間ぬけなる面らつ付　一聲
狐付かつこんとうを藪醫もり　螢火
おや〳〵と嫁とり兼る稲荷山　雨曉
居候胸を撫々笑つて居　金山
輿言葉鼻の障子へつきあたり　路人
下女が蚊屋仕立おろしの亂がしき　如雀
灸よりも後七がこらへにくい也　竹笆
裸でもいゝがぱつちりではないか　礫川
地震だにやつひし臍を下女押へ　一草
神樂堂一寸と一トねれ十二文　釣好
中條へ人の目をぬく蛇の目がさ　松里
口おしき淺黄武勇は茶屋に置　其久賀
てれつくで晩も樂しむ神樂堂　キヌタ
下女が物怪摺子木を握つてる　一草
輕井澤狐の鳴かぬ日はあれど　キヌタ
はやり神子白あわはませ〳〵舞　雪下
奉二神恭敬一之
松は猶ときわかきわや今年竹　文日堂礫川

俳風柳多留五十六篇　終

俳風柳多留五十七篇

月々有幸うしの催集す雅君の秀吟は、實に玉のごとし、彼の玉を惜みし卞和ならで、句々の萬象にへんくわせしを、一句も惜まず書著て五十七の冊とす、菅裏序、

文化未冬

亭々評

御笏より上は土佐繪も恐入り　是樂
御社參の道を平らに鶴がほり　手枕
もりあげた鹽で日本を甘く見ず　山笑
御屛風へかきつくされぬ御手がら　喜丸
御年貢がすむとつゞみをしらべさせ　猿子
豆のない手につき給ふ鳩の杖　香貞
御生國とてゆび折りの名所也　可笑
鍋島のおもて門からものわすれ　半下

せきれいののちにかつぱが出ておしへ　手枕
かほえそでどうでもおしと無言也　住人
むかし男ありけり大門をしめ　香貞
八ツはし流のゆび折りと嫁をほめ　三松
すきな下女一年中の御てうほう　春駒
化ものゝよめ入り大きな物がいり　雪下
唐へつうじた日本のもぐさ見せ　酒明
木のまたもたとへにならぬ御出生　錦重
一ツ嫁の琴姑の氣にいらず　青露
ちよきで風めすなと内でいやアがり　雨柳
みゝのねへ一人りきなよとしみ通り　芋洗
忰がさきへきゝつけるうはざうり　シクト
ほうわうの羽がいにすだち二羽並び　辻木
大わらひどもりぼたんをやたらほめ　酒好
あいたのとないを和漢で埋る也　水鏡
くじよわいやつが杓子をだいてねる　笑丸
下女がおびむすんで棚へあげたやう　松歌
いゝけしき比良一めんに眞しろし　器水
嫁のとりくみも晴天七日見せ　錦重
十月の神慮にかなふはづかしさ　金牛

三井のかねなると唐崎くもる也　シクト
雨にほし雪にはなまでくふさかな　可笑
吊にむすこかうでん一歩也　木賀
よめのさいしきは白キをのちにする　笑丸
むらさきの虹高しまの海へふき　散壳
目に青葉山ほとゝぎすしやうじん日　金牛
皿のかはりに丼とむごい事　杜蝶
らくにくふ土地だけ人はくへぬ也　半下
木のぼりの上手木くいのおめしたき　斗丸
碁にかつたほうへ植木をたんと出し　春駒
ゆげむらへこはけしからぬ子が産れ　シクト
人間の生死二つのたらいなり　金牛
つるとかめ夫婦のやうにとぼす也　ト、ク
氏よりそだちなんざんすばからしい　杜蝶
まづさいしよ隣の嫁を姑ほめ　有幸
夜半にや女房一人寐て腹をたち　礫川
たゝみさしけばをむしつてようじに仕　平喜
大小つゝくるみ一年が四文　猿子
死すべき時に死なざればなまりぶし　柳糸
あたゝかな町に家名をさむくつけ　雨夕

まつくろと白くよごれて春を待　鷺舟
氣のつよいところへ外科はこしてゆき　三松
あねいもとごいしのやうなはで笑ひ　辻木
ひめゆりの花ひあふぎの葉でかくし　金牛
鶯がうづらへくると一歩也　雨柳
ていしゆのいはくたがきてもゐすといへ　青狸
白うをでなまづをにぎるしつの事　有幸
かつがれた下女はいき物ぐるひ也　礫川
ふくろくじゆ子どもの時のだきにくさ　雪下
けちな棟あげさげなはでけずつてる　三木
馬のくびかますへいれて馬士はのみ　麥仕
いなりさへ素人らしいお名でなし　雨旦
生國をよくぞんせずが一歩とり　其笠
それはマアおめでたいねとくはをかし　斗丸
長はいたやうにあるくはふんだ也　平喜
おきやアがれ油さしめがうはざうり　礫川
曲どりはじまり三會め／＼　松歌
火がふると見へてかけ取あつくなり　平喜
しらみくひ下女ぐにやとみの身でこすり　亦樂
鹽にしたやうでざんすとなぐさまれ　雨柳

文日堂評

卯の花も小ざくらも出ぬ松の御代　二松
御武德は具足をぬがせ服をきせ　半下
人はだを鎧のしらぬ御せいしつ　和文
おだやかさ鎧は馬の脊にのらず　留人
日晝に駒引かへす星月夜　有幸
御上使も一こゝろですむ御拜領　春駒
獻上のころはすがほのさくや姫　谷水
かゞり火に明石の殿も御登城　柳雨
きりばりで國家へ穴をあけさせず　金牛
さくや姫びは天女へおきみやげ　和文
おくさまの不二を見おろすおぐしあげ　可笑
おち葉ほどさいせんのふる御本坊　松歌
いぢをはりつめて氷の下もみぢ　金牛
いこくの口もひらかせぬきんぐつは　三松
唐人を繪師にかゝせるおめでたさ　夢中
千鳥から鳳凰とけす別せかい　眉長
三井のかねなるとからさきくもる也　シクト
三國を一狐でばかすふじびたい　雨旦
三と呼れてもなすびの手がら也　福松

はながみでせきとめかねし泪川　散売
かつぎ着て綾や錦の中をゆき　三松
さうじゆつがふじのすそのへやたらうれ　金牛
ことの音に夜るは名高き雨の足　散売
さくや姫雲のびんづら雪のはだ　芋洗
おにこもるさとに狐のそのおほさ　新右
百二十字をやみくもによんでゆき　雨夕
待女郎ふじの高根の雪を取り　芋洗
ゆうれいも春迄やすむかれ柳　巣山
忠ぎつないゝたばこだと一家中　和文
おとしたらひろへ〳〵と奈良の春　水鏡
一まいをわり一命を井戸へすて　時住
ぬかりなき人もふみこむこひの道　雨旦
大あたり平ラの四五迄まつか也　留人
待かねて女郎蛙へはりをさし　酒好
鳥かごに口をすはせるいゝ天氣　時住
西行は大尾ねらいは萩でよみ　斗丸
おあんなんせんかとふきがらを呑せ　シクト
そのときばゝあ大おん上でわらひ　柳糸
まん中へまたぞろあさぎ寝てかへり　金牛

いゝ湯だにくひながはいり水にする　盤谷
高ようじおはうちからしたかさごや　住人
子をだしにおやがまんどを持あるき　水鏡
三ッぼしへ片手きられたばゝアくる　盤谷
ひさまどへつけてもせには廻りもの　有幸
にぎ〳〵でしほの目をする玉子うり　眉石
さくやひめへそのあたりでごろつかれ　住人
土左衛門とおどざの多いだんのうら　梁圭
ときに判禮二朱ですむけちな宿　手枕
すききらいむさしと相模名が高し　三松
ぶゑんりよな物はくるはの油さし　散売
さむさうなこへで商ふあつたかい　三路
よし町はこの手柏で客を取り　有幸
三河迄しれた大きな下女がしり　三松
ごんめやうな身で尻をふく手長島　福松
つぼかずにすればきんたま四つぼ也　猿子
今日やすみ小便をしてかへり　亦樂
おつときたなとふたを取そばのかま　賤丸
かはらけになげられてゐるへぼ隠居　福松
おやばからしいと本やにぶつゝける　梅舎

よし町はかなけのないを客へ出し　金牛
かごの鳥だけ天上の目をかぞへ　同
下女ねばうしのび三重でとられてる　雨且
村出逢ひいもの畠でたこをしめ　里梅
ひやめしへよばひにかゝる居候　和文
きしむ戸をこしを遣ておつぱめる　マイタ
富士の句が山ほどはいる下谷會　紀樂

里梅評

小牧山長く久しき御手がら　青露
餅に迄御普代のある恐悦さ　同
富士の歌山の邊りの人がよみ　賤丸
藤四郎藥研も弓も御用立　其流
御受をも一つひねつた袴腰　古遊
一つ首出るうちにはなれる松の月　雨且
島だいは口に植木を一駄付け　金牛
一トロ茄子を二タ口に嫁は喰ひ　三松
秋のかゝり春はつばめ（燕）て返す也　雨且
面白く染出す和歌のうら摸樣　志丸
醫書にない御脈伺ふ彦左衞門　一夕
勅命にあやめの顏は緋の袴　三松

大願の娘大かた男ざか　鵜舟
べつかうのてんびん棒を妾ねだり　亦樂
大名に木陰の晝寐うらやまれ　麥仕
棠の花のあたりに虻の糸車　巢山
松島で枯た紅葉の名の高さ　芋洗
行春の名殘り堅田に足の跡　松歌
花嫁を琴責にする十三夜　可笑
初會には鳳凰高くとまる也　半下
迷子札孟母は三度書直し　亦樂
白粉の看板白く出來ぬ也　和文
朝顏は合せ鏡の中で咲き　雨且
眞白な齒でぷつり切る三の糸　古遊
なるならば鳴らずにどうぞ一トしめり　畦道
あとの子が日好きと數萬取り圍み　山笑
面白く泪をこぼす三の切り　紀樂
りんの音花嫁ヲヤと言つておき　トヽク
人品こつがら恥しい妾が兄　青狸
下タを見てくらせばけつまづきが無　美山
月に鳴くのは傾城とほとゝぎす　是樂
いくたびもむすぶは嫁の髮と口　雨且

隣から根の這て來る信夫草　雪下
小人島いかのとんびをたばへ入　猿聲
引窓を寐て居てたてる手長島　雨夕
うり物の下卑は正札付木なり　半下
寐もやらず紅閨を出る淺黄うら　和文
內の夜具四五十出來る程かゝり　賤丸
身代も雪月となる雨もん日　松歌
けんぼうはわすれた頃に又流行　山笑
逢ふ事もたへて久しき座敷牢　梁主
鷹の爪ほふらる下女が鷲づかみ　三松
大黑を升かけ筋の手でぬすみ　賤丸
とう綱の樣に見付は水を打ち　福松
餅に舂く軍とり粉にやたらされ　酒好
出來きらぬ內に寐て見る涼臺　雨旦
大名の尾にこぐらかる拔參り　礫川
八寸壹分つもつたは秋の雪　有幸
名月に宵から寐るは檐計　雨旦
たて付ケた藥で障子をばたすけ　古遊
家根舟の下女半分は日があたり　靑露
似面繪の論は團扇のけんくわ也　哇道

四角でも豆腐はづんと和らかさ　哇道
俊寬を壹人り殘して皆芝居　三松
兩頭の虎に唐子は水をかけ　器水
もみ尻をする下女芋のむくひ也　白人
遣り栗と言ふは九月の節句前　有幸
糸薄キ小町の穴を通すなり　和文
はみわりの樣に乘てる下女が馬　春駒
上は這も夜這もたへぬ下女が部屋　亦樂
たれながら下女くり返し卷返し　辻木
追れると尻でかぶりを家鴨ふり　礫川
奉公の片手間に下女孕む也　喜丸

文日堂評

ゑぼし着る國にまねきの樣な山　柳雨
雨風でなごりの袖を御しぼり　松歌
生た三味線を女三は曳き給ひ　雨柳
言つくに成と紫ほとゝぎす　扇町
松島は目へ草臥の出る所　五遊
筆の德世にさへわたる湖月集　柳雨
辛崎も今は十雨の夜の景　三松
うき草の吃忽に洗はれる　藤波

床の間の不二の煙りは獅子が吐き　福松
娘いやだのうて覗かぬ鞘うつし　横好
五月雨にぬれぬは紹巴計り也　亦樂
生た三味せんへ土佐節添て遣り　是樂
足る事を知て九合の御山也　林鳥
隠居して元服をする根來衆　有幸
望まれて堅田の景へ娘居り　散売
舞臺の下でからしのおろしたの　扇町
狼の屎かへおや／＼と笑ひ　柳雨
穏さ二百十日に不二がさへ　一夕
孝靈に近江の年貢皆無也　是樂
せんだんの二葉を寝へ引込せ　福松
時しらぬ山はいつでも廿チ也　紀樂
能く丸められて息子は月を脊負ひ　里松
娘皮で洗たくをする鬼の留主　雨柳
不忍へ左りが利て呑に出る　和文
ちやらんぽん濟で吉原評義也　賤丸
孔子から答て曰くばからしい　雨柳
燒餅形の頂上はおはち料　木賀
第三はおしきせ通り遣り手留め　梅舎

月雪の飛車手王手に引かゝり　雨旦
腕押しは握り拳の二見潟　眉長
けちな客三五の月をいきやくする　器水
不二の雪消て島田も解かゝり　雨旦
契情の手跡大かた信田流　有幸
其くせに花はくれない人は武士　雨旦
不二の夢谷中へ一分遣て見る　是樂
毛唐人聞えませぬよ加藤さん　志丸
奈良の風諸國で暑氣を凌ぐ也　艶里
左り前左り團扇と大違ひ　畦道
最中の月を三日月の形りに喰ひ　三松
殘月を平ッたくして女房燒き　眉長
千垢離を仕廻て波へ又這入り　春駒
ひざをゆすつて連て來てくんなんし　市東
十三をばつかり割は伯牙也　新右
面ンならば作とも見える姑ばゝ　如猿
おぶさつた天罰床で尻を抱き　古遊
糸爪のがいこつかゝとをおつこすり　眉長
蓮飯は五ッ月立て腹がはり　是樂
むごいやつ質屋田の字の儘で干し　金牛

獄門のひよくを閻魔臺に乘せ　和里
村出逢きじの卵をふみつぶし　其笠
びり出入いびつを丸めひし隱し　笠下
とぼさうといへば消しなと女房言ひ　猿聲
飯を焚く下女天然と杓子面　酒好
屁が高ぶつて芋喰の和尙死に　金牛
目藥を瘡の看板かとおもひ　器水

靑露評

御開運此時初め駿河米　雨旦
王の召迄はかゝらぬ躰で釣り　笑丸
一年に三十六度傘を干シ　猿子
御別火の供奉は紅葉を踏分る　横好
御上京諸事御子息へ引渡し　巾布
さへ渡る月を歎て集に入れ　木賀
日本の恥は寢事がよくわかり　靑狸
外の津にないは大名小路なり　畔道
唐がらし迄紫衣を着る結構さ　可笑
御跡をしたふは花の兄計り　猿子
蜀をとる手立で箸を落す也　水鏡
仲麿が相談相手月計り　有幸

陣中でおうやうに寢るふところ子　笑丸
名高さは石でくだけた物語　雨夕
志野流の競馬は奥のおつれ〳〵　木賀
空灶で遊ぶ女ウの字を迷はせる　同
顏赤穗させたが事の起り也　礫川
知れた火の北野に燈る御神德　有幸
孔明もコロリンチャンでほつと息　里松
おもいれに泣せて雲雀山へすて　谷水
大そうに積るは雪の立姿　水治
駒下駄の旅は御庭と仲の町　三松
おりはなら篇を放さぬ御先箱　雨旦
つれ〴〵と知らぬ顏にて文も書き　和文
御衣德陸奥樣と茶屋覺え　麥仕
せんざいの內へは入れぬさつま芋　雨旦
女房の水に遣ふは黑いかね　香貞
ト〇イ〇キンは見附の外へ柱が餘り　木賀
風雅さは師弟の名句雪と雨　和文
よし原のよし野玉屋のしつか出る　三松
アレサどうも桑の葉が穢れますよ　礫川
手傳も見物も有る嫁の髮　有幸

咳一ッせかずに這入無二の中　和田
主従で鵜とあやめをさし通し　山笑
千金の其日ぐらしは花の山　三丸
伊せの留主内義清淨にはいかず　計丸
ぬかるみのあんころ母は餅につき　留人
何に用の鋤か遣り人がかんら〳〵　徒水
谷中道にこり〳〵と十九日　柳雨
新造を三度起して身退く　笑丸
しつとりと似顔のしめる螢狩　和文
名は暮（ぼろ）路で形りは立派な一月寺　三松
色外に顯れ烏猫いとま　有幸
山吹を見せて淺黄はぬれかゝり　春駒
櫻からさくらでさめる下女が色　和文
小姑のきさごは嫁へ八ッあたり　山笑
稲光り咄しをついと突きやぶり　徒水
傾城の枕にむだな寶舟　三松
中元の御祝義下女は首ひねり　徒水
笊作り蜘の巣からのおもひ付　茂柳
扨邪魔なものは母より女房也　若蝶
さつ急な燭臺茶碗おつぷせる　礫川

大井川六文だけは首が見え　夢中
時に足下の嚢中と土手で聞き　木賀
針箱のないので内がほころびる　市谷
りん氣大變大門へちらし髪　夢中
寺小姓間坊主をしておん出され　同
遊びの奥の手切かけたら逃ろ　柚路
折釘もぬか釘も有るうたい本　笠下
干瓢の下で喰ひ氣のない涼み　木賀
朝歸り戸の明く内は歩行てる　水治
大一座冬瓜の花と見縊られ　礫川
秋冷が出しぬきに來て質を出し　半下
ひだるいにまずいものなし持參金　和文
御祭の車の様に下女作り　錦重
文左衛門歸ると跡は小うりなり　其笠
はないきをあらく臥猪の跡に住み　畔道

文日堂評

御先祖は天神今はまもり守　辻木
御子孫は三國一の梅の花　和文
三國へはびこる富士と梅の花　巾布
三ヶ國好文木で押ッぷさぎ　雨聲

未だ富士も鹿の子まだらの御下向　志夕
御所近く飾師も召す放生會　古遊
御舟だにほの〳〵と詠む奥御殿　麥仕
水の無い月に登るは雪の山　三松
とんぼうの眼は富士と筑波也　時住
目の下たに唐を見くだす和の譽　山笑
心よさ目が明く〳〵と富士どつか行き　青露
三漢の王初雪へ梅の花　時住
色白のすてつぺん也咲屋姫　其流
鶯の初音は聞かぬ小倉山　和文
年來のうらみは雪の中で解　器水
若白髮伐にはへるかるい事　一夕
石塔も無腰では居ぬ四十七　留人
御出陣乳母はめうがの爲に死に　藤波
和泉なる瀧を上戸はあびたがり　辻木
花嫁の毎々に問ふ初の暮　木賀
あて事が八十五萬石ちがひ　夢中
生酔としらふの間を雁はぬけ　里梅
翠芝居夜の間に嫁の富士が出來　畔道
禿にも薄を二本ねだられる　水治

二むかし榮花の夢は舟で覺め　樂志
月雪の手に葉を母は直しかね　和文
唐崎の琴の飾りも湖が有り　木賀
からさきのほまれ石山闇にされ　三木
日蝕のたらい禿の筒非筒　金牛
駿河なるでもあるまいとゑりをかき　横好
細見へ女房こいつと燒ぎせる　和文
つがもなく利くはづ藥艾也　山笑
七難を凌ぎ八九の月を脊負ひ　東志
書置の事なむさんと十三里　可笑
土手の床門前拂壹分出し　金牛
澁川がむけると人をなげたがり　山笑
緣のある紅葉に鹿も包まれる　有幸
山家育でもお六は垢がぬけ　三松
籠の鳥どうしんしやうとくせる也　和文
肩衣をかけて百膳喰に行き　有幸
卯の花が咲くとつんぼは身を悔み　三松
村師匠眼時計を飼て置　若蝶
二八と聞てあつ盛を打かねる　笑丸
うらなりの子をばころがし育也　盤谷

母親は娘のころぶところまで　和文
雁金を付けぬ内から蛸は飛び　釣好
生かはり死かはり猫ひざの上　山笑
辛さきは夜なべに雨の降る名所　和文
其ふした下女ぬつたとは〳〵　其笠
寶盛は死出のはれ着をねだり出し　賤丸
四ッ手駕五臓六腑をもんでかけ　酒好
山迄も二タ子のかたは相撲領　一夕
三味せんのどう桶屋かと下女は聞き　新右
菰かぶり元樽酒も呑んだやつ　山笑
周易と交代をする吉田町　和文
五月目下女御の字の篇を取　紀樂
夜舟こぐ下女は小よりの棹をさし　釣好
唐なすも松茸もいや下女末期　柳雨
道鏡に評義のつかぬ大やしろ　木子
御暇て尻金をつく寺小姓　山笑
聞なせいおらが隣は芋出人　其久賀
わらんじを百に四ッに入れあげる　志夕
鐺先は兜比興な軍也　雨旦
割床の地震隣てゆりかへし　金枡

是樂評

染色にかのふあづまの紫宸殿　和文
朝霧はきえてものこる御神詠　有幸
音にきこえたは御庭の太鼓橋　礫川
八重ざくらけふ九重に嫁はあげ　同
孝の德櫻へのせて世にちらし　山笑
ほの〳〵と誠明石で目がさめる　喜丸
行きくれずとも宿とする廓の花　山笑
雪の舟唐までわたる筆の德　志夕
きりばりの花は實になる女房也　古遊
ふられてもぬからぬ顔のきやらの下駄　葉千
和歌の國榎のあいも歌仙也　有幸
西陣でおるのは地下のからごろも　青狸
指のさしてもない札を梅へたて　賤丸
もみぢがり今ははんにやが内でまち　芋洗
ふぢ川のながれかのみや地白也　匕助
蝶々にならぬとばくがくふところ　器水
間のわるい役者そばやの一だんな　樂志
きざんてやろうと煙草やはとぎすまし　古臼
井戸ばたの櫻は秋の色に榮え　柳水

朝夕はあれどひるがほ集にもれ　新右
功の者部家までさがす鹽の仇　マイタ
おふくびは見頃がよいと袖を引キ　綾丸
一歩二朱ぐらいまつたにまだうせず　雨柳
ものいへばくちびるとよみいくらだね　三路
孝行さうたれし杖の脈もひき　和文
たきつける顔へ火の出る朝がへり　水治
けんぎやうと嫁と妾で二十筋　青露
見せさきの柱かくしは本直し　横好
孝はなでふかうはかぢる親のすね　古遊
しばらくの時分に下女も赤ッつら　三松
ねめられぬうちに枕を嫁しまひ　横好
あかすりで皮をすりむく嫁のよく　三松
柳にけまり往來のじやまに成り　東ノ如猿
とげぬはづ小田原町が嫁のさと　錦里
いせのるす女房おはらひ箱をしよひ　キヌタ
文七が女房お六でいゝりくつ　金牛
御るす中御そゑんなどゝふてへやつ　和文
長つぼね大工砥石に氣がおかれ　平キ
櫻見に師匠はむめとまつをつれ　雪下

からさきはぼんぢやうちんも油ひき　晴風
神泉苑でやれかさよそれみのよ　金牛
みづうみになるからぐつと山をあげ　梅舍
てうし迄ざしきをあけるけちな晩　市布
べつかうのおつこちさうな中の町　其笠
猪牙にのる息子親父の手にのらず　綾丸
初會きりこぬ氣肴をうらがへし　松里
南ンのくめんをやつとして北へゆき　マイタ
がつかりとたいこははなをかんで捨て　器水
すひものゝふたで上戸はそこをいれ　酒好
鳶の子をはなし飼とははゝゆだん　三松
こんれいの月からといふはづかしさ　松歌
のみの狂歌で酒もりもぐつとはね　留人
柳下惠しんぼうづよい名をのこし　其雪
高土間のけんくわうづらをおどろかし　青狸
らくがんの景を御くわしと下女思ひ　喜丸
わらだなでよべば迯てくなまこうり　半下
一歩二百が質をおきながす也　山笑
ほたけほどまきちらしたは紀の國や　柳水
ア痛いと德平さんを下女はまち　梅子

九合目の夢で手どりが九十雨　柳雨
一の富ほどついたのをくれにおよび　笑丸
やくそくの顔に格子の跡がつき　龜樂
くらやみを目ばかりあるくからすねこ　杜蝶
さすが命のかなしきに二千疋　和文
むりむたひつんぼがあけるさうごうか　トヽク

文日堂評

御神德梅迄自由自在也　山笑
其つみを身にしらぬ火の御ざんねん　賤丸
とりわけて梅といふ字が御得手也　横好
聖賢へ櫻のかほる紫宸殿　靑露
勅筆のせにで寺號を御もとめ　靑狸
靑天十日一ノ日は雨でのび　金牛
雨乞も島にふらせる四十八　和文
唐人の耳へ日本の草がはへ　手枕
文でとび武ではゑびらへちりかゝり　山笑
一文惜しみで百姓に德をつけ　柳水
內心はぼさつ外面は遊女也　杜蝶
忠臣はにくまれ口を三度きゝ　葉千
凸凹は文字のいもせの不二湖水　花町

だくぼくの文ン字もわたる孝靈五　鷺舟
大吉は他人ずれせぬたから也　其笠
身を筑紫てもあはんとぞ梅はとび　加丈
三かくなものを四角な文字でほめ　山笑
さりとてはよくかきますとそうもんし　鵜舟
色よりも白いうき名が辰五郎　杜蝶
まつしまでかみをとぢたす旅日記　紀樂
おやゆびの外でかぞへる山でなし　里梅
手のある忠臣は足をかみしめる　松歌
かんおう寺諸方にかけのある御寺　庭花
二の膳は能ならぬと國家老　和文
ようざんすおなぶりなんし夜具の晚　雨柳
不二まうで六合目から橫へきれ　天龍草
父母まさにいますがごとくたま祭り　シクト
よこたてすじかひであこや申わけ　古臼
かはかぶりでも大さうな御どうぐ　靑狸
吉日がこゝにもいるとこそぐられ　巾布
あどけなき俗語新造にくからず　横好
佛店うなぎ火葬のけむりたち　酒明
みゝのないゆうれいの出る釜山海　其雪

くみいれへあかりをともす二丁町　眉長
さいけんをかつて夕べの名をさがし　水治
あたらしい橋をよほ〳〵手をひかれ　古臼
これからずつとながさうと柳橋　器水
からさきでひけばかた田で枝をたてる　天龍草
たゞでない藥師と母に見ぬかれる　三松
さんざ出あるきあつためてくんなんし　盤谷
二のうでゃ金をほり出す紋日前　加丈
二朱もつたなまゑい川岸へすべりこみ　水治
もし一寸のころ客の五臟へしみ　綾丸
かんにんをするが韓信かなめ也　藤波
けいりやくの外には用の泣き男　和文
それだつてしかられへすにばからしい　鷺舟
するが町わたの仕入も不二の山　水治
つれないはたゞうつり氣で川岸をかへ　シクト
さじきにゐるは夜の内にできた不二　可笑
初がつをさいなんがれん生キのびる　水治
手長じま川をへだてゝつかみ合ひ　器水
しやくり上げ〳〵泣く夙けんくわ　金牛
しやくはちもぼろ〳〵とした古土藏　盤谷

ぬひかけて下女すそまくの金づかへ　是樂
神農の腹けつしたりくだつたり　酒明
右大辨おやきたないと下女ぬかし　其流
寐ると又かちやふいごをおつぱじめ　夢中
きうするゐて一寸見に出るするが町　ヒ助

俳風柳多留五十七篇 終

俳風柳多留五十八篇

緒言

味酒の三輪にあらねば杉ばやしたつる門にもあらず、版元の花屋のしるしは柳樽の汲ども盡ず、跡ひき上戸の何篇もくり返して、今五十八編の大盞引受たる志津丸子の手際は、すつぱりえらみ出せる句々はみな一本木のまじりなし、予も飯よりは好の道、此酒の美味を感じ鼻のさきをひこつかせて斯の如し、

文化辛未　　十返舍一九誌

賤丸評

衣干す御歌はさすが女帝也　梅舍
頭巾より外に鍛は入らぬ御代　酒好
六ッの花五ッの花の御獻上　煙幸
乳貰ひの親は子よりも泣あかし　轉寐
神儒佛直なる道を三筋つけ　金牛
聖代の風鳥四日置に喰ひ　小雨
こげた妻戸の評判を御ろうじろ　金牛
孝行も忠義も和漢雪の中　猿子
二タ股太郎だはゑヱと大根武者　金牛
草も木も東へなびく關ヶ原　其岩
古郷の山を笠に着て月を詠み　白駒
賤ヶ嶽鬼をあざむく猿利口　住遊
島臺の梢にかすむ嫁の顏　莖売
鳥の聲迄も慈悲ある御山也　金牛
義太夫を酒で引出す夏御陣　住遊
玉兎には送り金烏は迎ひに來　飛牛
かための盃持參の氣にかゝり　如猿
品川のうみ大海のゑびす紙　住遊
孝行は天も只見て居給はず　金牛
抱キとめた片手が二百五十石　林鳥
三角な雪年代記にのらず　雲路
石山で藤むらさきに咲はじめ　和里
土金水箱入にする繁昌さ　同
降雪をいたゞく八瀬の白木賣　可與
今めいりイすと禿が上使に來　松里

ふられてる耳腹の立ッ子規　梅枡
峨眉をひそめて言出すは金の事　梅舎
呉服屋で飯をうる日の賑かさ　猿人
サア事だ寺は三谷で七ッ過　谷水
せいがんに構へてはいる路次の傘　雨麥
岡釣はさとつた貌で結跏趺座　可興
貳分だよと禿の耳へ口をあて　猿嘉
こよりの棹を新造の舟へさし　飛牛
美しさ目の降方ゥへ傘をさし　林鳥
廿日程過て場すへのはつ鰹　一龜
何其角ぐらいはなどゝ雨墓　彫人
又つらまへて放し龜〳〵　同
實ッに路考は男かともつともさ　金牛
行ゥ水のたらひに月の皺が寄り　野鯨
いぢらしさほくろのやうな乳を捜る　梅枡
御乗代魯の昌平を江戸へかけ　酒好
極官の夢で任官遊ばされ　猿子
雀は四角うぐひすは梵字組　白駒
鬼燈に禿ぶどうを貰つてく　金牛
勘兵衛と藤兵衛御帳消しに出る　彫人

下駄などでおどかしたのが御ぬかり　白駒
江戸の富士裾野は茄子の名所也　猿子
菊の名においらんあれば禿あり　其岩
出立はへよくて事にどくづかれ　金牛
座敷迄足跡のつく酔た客　酒好
時節柄借さぬの枕言葉也　白駒
突出しはあしかと狸見わけへず　扇町
白太夫青竹九本初のぼり　赤下手
針よりも箆のきいてる柳原　佳人
短兵急に押よせるもてたやつ　新右
鼓うち紙とつばきを尻へつけ　林鳥
衣川かげ辨慶のはじめ也　螢火
山の宿クあたり酒手の謎をかけ　莖壳
其くせに紺屋の亭主律義者　螢火
さゝがにの宿を見出す小ぬか雨　佳人
人同じからず江戸ッ子金をため　巣山
八文は見た計カ素貳朱かしへ行き　扇町
紅葉の錦此たびはがんづかれ　白駒
片扉二郎兵衛づゝに目を配り　飛牛
田舎道問へばヱトにて方ゥをいひ　曲撥

琉球をかぶせて踏れ棒をしよひ　金升
初がつほ女房くらつた上へ小言　猿嘉
盆で出す茶へ二三人手を伸し　白駒
佐野の馬鞭の酢くなる程たゝき　金牛
嫁遠きおもんぱかりでぼろをため　酒好
鰻屋のうちわ時々どうづかれ　松里
緣と時節を待兼て四火をすへ　飛牛
牟ぐつは息子へんくつ親父也　久世成
ぼた餅の下女御新造の御氣に入　扇町
間男としらずやたらに亭主譽め　猿嘉
男にせずに連て出るいたい事　白駒
まだ文もみず突出しの手持なさ　飛牛
鳳凰は吉原鷹はよしづなり　森鳥
三升を干してわんぱく寄りつかず　牛木
藥取のしこし山は調市作　金升
母親はゑつちおつちと赤の飯　和田
空寐入のつ引ならぬ蚊に喰れ　梅枡
支度ないとは入聟の大禁句　白駒
短くてふといのがいゝさつま芋　松葉
焚付る悋氣は顏へもえて出る　酒好

寄りねへと羅生門から腕を出し　莖売
御三ッめも濟ンで四ッ目を御用ひ　酒好
下女が有卦殿の御胤をやどしたり　同
おゑてるに扨々長い文を書き　莖売
氣のきいた下女はてゝある子を孕み　猿子
女悅丸男末期の水をのみ　金牛
女房に腹一ッぱいをあばたされ　彫人
ごうはらさ初會あてがひ扶持を喰ひ　若蝶
お竹殿どうだと凡夫つめる也　梅枡
下女作意きうりを持てたんのうし　白人
ひるたれる叱るとほえるけちながき　酒好
大尾
午だから王子へおめへ計カいきな　三木

雜司ヶ谷鬼子母神奉納額面　願主　梅枡

梅枡評

法の字は流れぬ筆のとめ所　牛住
草刈笛を吹せたひ神事なり　賤丸
妙法は百日でさへちゝが出る　曲撥
御出現まします所は淸き土　彫人
神洗ふ水もあしたは星の井戸　巣山

草薙に氏子の殘す鬼あざみ　慶金
唐人を髭題目で二度退治　美德
鉢の子を明るとち丶にかぶり付き　轉寐
人間はわづか五十に足らぬ忠　賤丸
妙な石投てうかむは伊澤川　三木
其時の御馬深田のどろ月毛　金牛
御親ッ子も放れぬ文字の御神號　煙幸
動なき人のあじする御神木　林鳥
筑摩祭に出たやうな御弟子也　梅舍
ぽつたりとちるは會式の櫻也　有幸
鍬に迄はごたへのした孝の德　可笑
燒石に酢とはめてたき騷ぎよふ　猿子
そば好きと見えて藪から坊主出る　キヌタ
病人も皆歸妙法願ッほどき　雨麥
御利生は諸國へひゞく乳の願ん　豆人
祖師の櫻も吉野から涯て出し　金牛
出嫌ひといふやつ急度是がなし　賤丸
はら〳〵と櫻を浴てゆひ付る　一夕
旭をしよつて寒がるも名句也　亦樂
鬼の子〳〵と時神た丶きつけ　有幸

時に香煎なき時もさゆを出し　其岩
堅法花おしい娘を寐かし物　横町
野や草を江戸へ見に出る田舍者　一夕
牧狩の夜討の雨はいまだ降り　文笑
神號のうちにも御子がこもる也　和里
茗荷屋で馬鹿を言々呑で居る　酒好
産砂を淸き土からよなげ出し　里橋
瑠理どのといかめしくよむ三度笠　一夕
猿が千疋ぶらりつと御寶前　森鳥
じだらくそうな泥坊は袴だれ　賤丸
いく度言直しても下女せうしがい　谷水
足で足かく立聞の足と足　笑艸
鬼の眼に淚で和子の御行衛　可興
水車見て居る髮に風車　愼盟
硯石洗ひ織女は口よごれ　菊主
うけ出すと亂筆になる八文字　散壳
片節季程は暮せる市が立ち　美德
世の中の小言をきけば栗の花　横町
釣落す魚の咄のたいそうさ　梅里
穴五ッ猿三疋でおつぷさぎ　散壳

御寺號を喰て再び筆を入れ　白駒
酒池肉林へ三昧せんが二三挺　梅舍
重ね着をしてにくまれる小夜衣　一夕
遣ると取る廻るとむしる風車　白人
少しづゝ五臓六腑を針いなめ　古柳
へんてつもないと辨慶夫ッきり　賤丸
盗人をとらへて母は聲を下げ　散壳
鳳凰を飼はごかねのまき餌也　松里
眼かどの強さ會式に着た小袖だの　東平
下女こりて月に一筋づゝかのみ　三木
抱付てから魂が入かわり　牛住
御百度にねりのきや判はうつて付け　和里
毛を撫て尻からはめる筆のさや　伊勢遊
かゝる有難き御利生と乳母よがり　綾丸
孕だで次男むこくにやつつける　嘉猿

賤丸評

天然さ清き土から御出現　酒好
かるからん七字は波の上へうき　豆人
人間の極位しつぽに波がうち　白人
擂鉢を豐あし原へおつぷせる　亦樂

御進獻わけて千とせは松へ來る　文笑
愛奴やいどんちやんどんを釋迦笑ひ　里橋
光陰の十段めには入りがあり　吹唐
すめる代は濁らぬ水を升でのみ　若蝶
雪をてらして眞直な道へ行き　愼盟
名將も勇士もしれぬおだやかさ　一夕
風ふくと田毎の月は皺になり　梅枡
名號の一字一里にあたる所こ　美德
はら〳〵と櫻を浴て結びつけ　一夕
佛縁で神も大いに行はれ　螢火
千羽舞ふ時は黃色に日が當り　可笑
孝行さ子にかへ母に乳をあたへ　金升
水晶も及ぬ玉と水を礜め　和里
裏表裾つぎそへて壹歩貳朱　金升
尊とさは神なし月も太神樂　菊主
井の内の橋大海へ七字　美德
池よりも堀より谷の有難さ　和里
願ンがけのきいたは繪馬の耳だらい　豆人
千人の末の子いまだ乳のみ也　圓丸
敷島の道で首計ヵ黑くする　林鳥

六ッの内で親玉を宮へいれ　美徳
鍬に迄歯ごたへのした孝の徳　可笑
松の木のせり下ヶの場が嫁の出端　扇町
繼穂して鍔口たゝく愛らしさ　猿子
安藝は來にけらし紅葉の御諫言　可興
十四不足でも龍神感にたえ　金牛
月花に嫁の手垢がたんとつき　亦樂
雑司か谷五色の風の廻る所こ　愼盟
伏勢の禿かよはき腕をこき　金牛
猿が千疋ぶらりつと御寳前　森鳥
御親ん子も放れぬ文字の御神號　煙幸
僧正は榎の眞木をよ程たき　小雨
天晴の勇士體よくふられてる　松里
衣々の肩へもん日をたゝき込み　散壳
祖師は橘尊體はざくろなり　和里
山吹が咲てくるわを井出の里　一夕
こわくかわゆくあまやかす御神號　和里
紙の櫻に駒くら餅をつなぎ　酒好
大裏ちはせつない時の僧だのみ　美徳
うまい事草履を持て横にくる　入野

人行院を見殘すと耻のやう　手枕
喜四郎や茂助甚助さしをわけ　美徳
孟宗も鯉もこふ／＼亭でくひ　猿子
高みで見物を伍子胥するつもり　白駒
遣唐使牛も少しは喰ならひ　其岩
愛敬に吹ながら出す風ぐるま　横町
參詣はめうがに餘る有難さ　山湖
大名の夜鷹をかうは野居へ也　文笑
人の和にしかず大根とからしみそ　亦樂
ちよつと置琴へふろ敷菱にかけ　一夕
繻子の帶〆てお百度はかどらず　酒好
此頃は鬼とも組と禮參り　豆人
しる人に百度參りは目で會釋　雨麥
駕舁に上手を遣ふ立場茶屋　梅枡
人は桶雀はたらひぶせになり　其岩
破風ぎわの黒雲に綱氣が付ず　若蝶
身どもを野暮とぬかいたといきどふり　一夕
ざくろから柚子と柿とが土産也　笑艸
穴五ッ猿三疋でおつぶさぎ　散壳
金入れで百足折々しやがれ聲　巢山

棹がごろつくと雷ぼしがおち　古柳
干した物あるとしらせる門涼み　扇町
ラリルレロ舌が上はあごたゝく也　久世成
かりた子をむりに泣せる倦だ頃　梅里
それ壹歩花じやと淺黄相渡し　和里
今逃た魚の咄しの大そうさ　梅里
百度めは子に投させる願ほどき　有幸
紫を赤で煮るのは江戸のみそ　亦樂
灸みせて禿の親に安堵させ　若蝶
小ゆびで結び私とあの男　曲撥
待人の墓おかしな形りに出來　酒好
山が見えては糸だてはもふ入らず　金牛
俗おどし法印光る袈裟をかけ　伊勢遊
鬼子母神やつたら祈る子安ばゝ　野鯨
鉢の子をあけると乳にかぢりつき　轉寐
氣のきいた手引きない眼をかけられる　東平
太々の料理ものせる旅日記　雨江
玉眼を火箸で入る安い面ん　猿子
美濃で泣子を近江からすかされる　三木
こんな下駄置てうせたとぷん／＼し　猿子

いつ屆いてもいゝかしてけふし也　若蝶
川口の飴はてりふりなしにうれ　新右
嚢中錢んなければ先質を置き　梅舍
家をしよひ遊んであるく蝸牛　一夕
産綱の傳受こうしてウンといへ　猿子
聞てくりや夕べの首尾は先斯うよ　曲撥
安々と三人になるはづかしさ　彫人
來る尻を夏中うける涼臺　可笑
せうちする娘だん／＼貌を下げ　笑艸
お百度に練の脚半はうつてつけ　和里
下女が文よんべうるしく候と書き　扇町
おせば明きまゐらせ候と下女がふみ　可笑
あの後家の蟲を貴公は御存歟　草山
小原女と局は牛をよくつかひ　若蝶
寶の山を挑燈でおりる也　横町
おともかも空へぬけてく田植の屁　散売
さあらば鈴を鰐口へ參らしよう　可笑
大尾　御戸帳をまくつて年の豆を取り　酒好
軸　咲匂へいく代も法りの花柘榴　眠亭賤丸

賤丸評

鳳凰も出よしつけき松の風　雨麦
稲の波空迄とゞく御大國　金牛
御吉例むかでのやうな足で漕き　綾丸
御神徳天へも滿る宮つくり　有幸
東海の姫氏をさゝがにあるく也　和里
くも二つ和漢詩歌の道しるべ　雨旦
濱松は戸ざゝぬ御代の御吉左右　蛙聲
大あづき閙扇へあける川の中　金牛
藤四郎矢よりも早く御注進　住人
頂戴に片袖かけて座を下り　一陶
耳塚は和漢へひゞく手がら也　一龜
畝が粉になる筈茶臼山御陣　谷水
かつて兜の緒を〆ぬ桶狹間　若蝶
身を賣つて下さいましの孝行さ　板人
牛の首ひつ込すのは耳の水　新右
みの笠の十日めに出るおだやさ　吹唐
奈良の里獵師は山をみる所　猿人
九十三盃めはよし盛がおさめ　我獨
其筈じやないと言ふ間に堀を埋　酒好
德に入門の戸たゝく初登山　谷水

又乳か針があるよと片よせる　扇町
一人の袈裟で出家が二人出來　住人
死に縁があつて名迄がけさ御前　雨麦
そも〳〵遊びのらんせうは櫻也　森鳥
父母の慈悲四季にくわせる赤團子　好成
八艘は舟八町は駕で飛び　雨旦
堪忍の虹の出る迄雨舍り　金牛
イヨ佛さまと入道譽給ひ　巣山
蚊柱をくづしてみせる子ぼんのふ　樂志
智者は過ぎ愚者は及ばぬ仲の町　金牛
花軍では鑓梅が先きをかけ　同
寒いのは餘り暑いは殘る也　三木
母の眼へ反哺の乳をしぼり込み　雨旦
二三尺蝶々猫をつりあげる　手枕
たばこのみせ葉呑過て迷ひ出し　金牛
重忠の捌十三筋に聞き　一龜
二味せんになると八文もつてかけ　酒好
むごい事檢使に捨子笑ひかけ　扇町
彌次郎をとらへ釘ぬき〳〵よ　久世成
藏前の近所にはいゝ俵町　住遊

酢で候うの生姜のとおめでたさ　金牛
むねに矢のたつは白羽のいゝ娘　林鳥
子を乘せた四つ手に帶を〆させる　雨麥
夕部歸りましたと母慈悲過る　梅舍
へぼせうぎ二百疋には目もかけず　吹唐
さば〳〵をしなと脊中をからげてる　梅舍
金時を升で計るはこく問屋　伊勢遊
精靈をちまきにくゝる御齋日　曲撥
ひつこするやうにすがゝきひいて居る　酒好
書きのし計りくつている首陽山　瓢花
さびのある所で落る豐後梅　雨旦
二階中笑ひ禿の自びん也　有幸
あなどると針と山椒でつゝこまれ　佳人
おくたびれだろうと穴のむじなくる　梅舍
太神樂きのふの窓のあぢをしめ　曲撥
人魚だと思ひ龍神出しぬかれ　慶金
鬼燈の丸藥をうるあたご山　煙幸
はへぬきの娵をもつてる組屋敷　松葉
祭りの子たのしんだ日を肩にねる　瓢花
歸朝した船人咥はつき次第　金牛

石碑成就する迄に嫁居とげ　金牛
渡唐の天神とはおとつさんかの　三木
身重もではないかと足駄叱られる　金牛
ゆどふふに海苔さら〳〵と押もんで　其岩
實躰さけして上へをばみぬ息子　酒好
しゆろ箒角兵衞じゝする長い客　三木
俄雨馬士が一俵あるいてく　金牛
子の聲でよんだで高い眞桑瓜　扇町
乙姫のおやぢいつちく太右衞門殿　青奴
精靈の客にむゑんが付ケに來る　同
あぐらをかいたばつかりで持參金　巢山
呼々と突いき蛤のしんき樓　大丸
蜘の手のやうに引つぱる土用干　入野
どふしたか下女うたゝねにこり〳〵し　如流
御ん女郎の植た稻でもおつ孕み　金牛
土俵際むつくと起てかゝさんや　便諸堂
おつかあは每晩泣とがんせなさ　東平
三助とお三が中かのむつまじさ　彫入
男だと釜をかぶせる祭り也　金牛
大尾
どふしたか下女摺子木を鹽みがき　佳遊

五題亂撰　忠、孝、月、芝居、狂句、

金牛評

忠臣を八萬二百御所持也　〆子
三日月へ煙りのかゝる御吉例　雨夕
三年はつくらぬ孝の道普請　賤丸
何なしと小町は歌のうつわもの　元祿
霜に花咲せて貌をみせる所　松里
裂と着る衣和漢の忠義也　吹唐
稻妻と雪はあかるき孝の道　畔道
筋くまの唐迄届く江戸の花　曲撥
御白洲へ親子めさるゝ有難さ　礫川
三階菱は花菱のあらしなり　同
月をまねかば清盛ははれ病ひ　梅舍
三か所で工藤をねらふ日の永さ　里松
孝の道からは五常の道へ出る　杓子
田毎程月を並べる歌がるた　留人
古來稀なるおどり子は七十餘　和文
ゆび折るは役者も江戸のかきつばた　有幸
夜るわたる祭はあじな猿田彦　可笑
孝心も氷もあつくはり詰る　里梅

子を捨て母へ反甫の乳をあたへ　手枕
袋にも入らぬは月の弓計り　笠下
櫻木を削るは八重な忠義也　志丸
船唄も芝居も猿がはじめ也　一龜
江戸でする本望京の字は入らず　散売
狂言に實が入藝に花が咲き　志丸
うたがゐを月にかけたる名句也　雨夕
大入と酒呑童子へ書て出し　礫川
床の海ふとんの島へ大つなみ　志丸
雷のはれて墓所へいとま乞　牛佐
晦日の夜郭巨初めて安心し　螢火
信女の月を流させるどら和尚　釣好
大山伏を夢に見て弓削めされ　賤丸
年號の名酒に殘る孝の道　雨夕
三笠山檢唐にして月の歌　青露
其なえのおほいなる語を下女笑ひ　盤谷
切落つい奧樣と下女がいひ　夫善
下女が忠臣此世はじまつて初つ　有幸
棧敷から祟つる首を下女伸し　樂我
赤穂鹽四斗七升にせんじつめ　錦重

惚ぬ筈山椒の魚を焼てかけ　半下
二千里も行程きばる月の駕　木駕
孝行さ嫁杖になり笠になり　志丸
さえぬ返事がきいしたと月の文　雨旦
對面の三方日々にあらた也　和文
大きいも白いも石は忠義也　有幸
旅役者すのこ舞臺も踏だ奴　錦重
亡君へ西瓜を一つ冬そなえ　其流
地團子をくふのは息子嫌ひ也　笠下
後の月上戸の膝の馔が見え　巣山
下女が忠節けし炭を二俵ため　扇町
兜首後家夜つぴてへ泣あかし　其久賀
わるい所へお國からよふ御出　梅、枡
畜生道をうかみ出てやるなヱヘ　錦重
二三人來るととふ〳〵たらり也　礫川
寐るが惜いと小夜更てぐわあら〳〵　森鳥
謎々かけよがとかんすか月の事　賤丸
目を四つよせて泣出すいゝ藥　古遊
申子の願んしておがみ〳〵　亦樂
腮で蝿男めかけの忠義也　一夕

大尾
逆鉾の先きへ日本の寄る如し　散売
賤丸評
日の御座も守護なす月の名所也　志丸
もろ肌を脱くが忠義の極意也　留人
孝行さ天鳥獸にたがやさせ　坂下
名月に奥は雲井の調べ也　雨旦
橘の香をなつかしみ孝へ入れ　柳雨
月影の調子くるわぬ琵琶の海　青露
高島の海で湖月の草紙出來　半下
御書院へ御下駄を廻す三日の月　笠下
忠臣さ達磨へきせる緋の衣　和文
汝なくばと次信がまくらもと　梅舎
地名にも武さしの芝に露の月　雨旦
翌す芝居奥は明石の浦に寐る　青露
ゆび折りは役者も江戸の杜若　有幸
忠々と淺岡しとふ雀の子　雨麥
黑髪を孝婦おんまくじつて置き　金牛
竹村は五町芳村二町まち　木賀
どつ鯉と言て王祥起あがり　扇町
是で茶を煎て上げますと郭巨言ひ　金牛

月でなくのは籠の鳥時の鳥　可笑
迦陵頻月宮殿へむすこ揚げ　木賀
九合にて十分んにうつ孝の德　ヤマキ
妾う芝居十五六篇摺て行き　金牛
人情にかけても月は名所也　雨旦
漆屋で見たが豫讓がほんの顔　亦樂
村雲はかつら男にかたきやく　樂我
かつたりといふと千兩箱がふり　巣山
役者の發句箱せこへ仕廻ふ也　金牛
海老を誰だとはタ、、たわけもの　同
孝行な息子は五人並をもち　笠下
將碁の駒はやつぺしにかゑり忠　金牛
がくやの風呂へ範頼公の御入り　同
だき柏きやつ幽靈のかしらぶん　松里
どの鳥もトヒョ〳〵と計り啼き　保竹
切落し人の所領も押領し　和文
辨當兩役酒のさかなにすし　一夕
ふけへきな月見兎の論ではて　巣山
たな引雲の絶間より月はばあ　金牛
忠の字は元祿の頃言はじめ　柳下

きつかけを空に知つてゝ雪がふり　金牛
はねまへに一寸來てみる茶屋の下女　半下
親に生うだと羅漢から譽る也　雨旦
大笑ひ三番叟から淺黄ほめ　〆子
春べりは十六夜からと兎いひ　小雨
天のなす所隣りの棧敷へ美　金牛
しつたふりせなあ市川菊之丞　木賀
畜生道をうかみ出てやるなヱヘ　錦重
わたりましたと百旦那追出され　梅枡
惡方を取殺さんと下女思ひ　巣山
か樣あそばせと鸚鵡びくつかせ　金牛
夜角力の闕稲荷山床の海　里梅
雪隱でヱヘンといふと月を譽め　如猿
ぬれの幕嫁は頭べをたれて居る　酒好
大味ぢを承知で和田は拜領し　ト、ク
かき廻す程がいゝよと茶せん髮　菊圭
勅諚だ坊主ずぬけを罷出せ　美德
余のてれつくは派のきかぬ御字とかや　金牛
男木ではへば女は水でまち　手枕
毛をばくり〳〵と女郎ひんむしり　美德

助兵衞と九次郎相撲極こん意　一龜
かくあらんとは思ひしが女悦丸　金牛
大珍事ぬれの幕にて下女氣絶　酒好
大尾
まだ月のさはりにならぬ姫小松　猿子

文日堂評

手がらさは反古にして來る御墨付　金牛
秋の夜の足らぬは月の譽れ也　巣山
西の丸へ百萬石の家中が來　曲撥
月の鏡で化粧する咲屋姫　紀樂
れんじから月はさゝせぬ渡邊家　金牛
琴三弦で十六宵の賑かさ　青露
善盡し美盡し五軒續き也　金牛
孝行さ柄杓のたゝぬ飯を焚　志丸
更科の月に打こむ小夜砧　野鯨
淺野にも深き根入りの要石　樂志
白糸に月をからんで落る瀧　梁主
一富士に高き譽れは曾我の孝　柳雨
蚊屋を釣度に孝子を思ひ出し　留人
霜に花咲せて顏をみせる所こ　松里
白壁で太夫を五軒塗ふさぎ　手枕

いろはがな名も高輪に殘る石　豆人
入りの有うちは敵を討もらし　畔道
名月に息子孫呉が術もつき　梅舍
うづらではなくつて目白棧敷也　金牛
爪のたつ所があるで跡を出し　同
月かさに知識の出來る花の宵　和文
から麥で一幕みせる旅芝居　金牛
柏子木に嫁はむすびの口をふき　畔道
中秋はだんご十五の月見也　辻木
譽ことば賴朝公に手をつかせ　金牛
見せは星座敷は月の騷ぎ也　有幸
始終どんちやんは素人芝居也　板人
鹽から聲で赤穗記を講じてる　金牛
革財布闇と月夜を二度あるき　同
荷はかるく忠義は重きたばこ賣　柳雨
抹香も國府も匂ふ品の月　和文
もろ肌をぬくが忠義の極意也　留人
田毎より手毎の月を息子春負　雨旦
眞黑なしら波井戸の中から出　市東
よわい武士月を切かけられて逃　賤丸

こいつ妙だと思つたら月を喰ひ　　賤丸
月二つしよつて息子は立ちきれず　　酒好
忠と見せ不忠とないた大鼠　　雨柳
岡に住かつぱの多い二町まち　　桃和
はじまると又いき升と堺町　　如猿
跡足はわさびおろしに出世也　　金牛
唐人の月見に家の直が上り　　元祿
安芝居竹のかわから虎を出し　　雨旦
むくれたりはちけたりする十三夜　　其笠
ぬれの幕下女べらぼうに伸上り　　酒好
月の座へ親に抱れて出る子芋　　水治
氏なくて道鏡玉の腰をする　　牛仕
たま茎を娘にきかれ母こまり　　紀樂
舟を漕よふに茶臼を下女は挽き　　若蝶
這入つてもよしかに腰をつかひ止め　　春駒
御不勝手腰も大きくつかわれず　　金牛
五十文二番原とはいゝ出所こ　　其流
くりからの松茸をくふ廣い奴つ　　谷水
ろくろ首どくろを卷て口をすひ　　同
大山伏を夢に見て弓削召され　　賤丸

大尾
むくれば金んが下にある御家柄　　雨夕

賤丸評

實語教孝靈五より前の作く　　金牛
不二の夢御神酒も三國山を上げ　　樂我
長柄のないが笑止さに松茂り　　金牛
爼板に紫の乘るいゝ日和　　彫人
盛久と靜の跡で千羽舞ひ　　一夕
八拾貳斤茶にしても引つたゝず　　白人
澤邊のあやめ引に出る雲の上　　一龜
嵐にも名高き花の名所也　　桃和
扨長い和田一族の系圖也　　和田
烏賊化して鷺となる比時鳥　　金牛
年の市すこぶる百鬼夜行也　　同
繼母そだち夜中う啼子規　　雨旦
忠度は其夜小櫻おどし也　　里梅
こいつふるとみたら手を付べからず　　梅枡
唐崎は合羽にみへのいらぬ土地　　柳下
四郎兵衛が闕へも千鳥通ふ也　　板人
砥石またげは關守の名智也　　琥珉
鬼の中猿も一疋淺草寺　　三木

うちぞ床しき駕脇の美しさ　雨旦
木枯の落葉に蟹も穴まどゐ　曲撥
わすれても乳が餘るので思ひ出し　樂志
せんたくに鬼は留守かと綱は聞　釣好
大黒柱しよつて居る白鼠　一龜
眞つ裸でもおきせんのなれの果　紫雪
仲人は小田原町に鐵炮洲　梅舍
唯頼めとは欲氣なき觀世音　有幸
暖簾迄秋を染たるあか蔦屋　瓢花
若世になつて御妾は本意也　東平
麻の葉を手桶に染る薄氷　瓢花
きみ〳〵たるを玉子屋はよつて居る　里梅
糊のきゝ過たやうなは母の雛　金牛
床花を些少ながらと淺黃出し　雨麥
お座なりに藝者調子を合せてる　松里
龍宮へうつ白波は女なみ也　金牛
日本の上り口から聟はづし　伊勢遊
紫になる程つめる江戸藝者　田夫
あやふやな歌では啼ぬ時鳥　金牛
山吹のかはりにまつは菊をやり　板人

ぬかりなき人も踏込む戀の道　雨旦
すい息子からい親父にあまい母　里梅
御妾の書籍ありやす草雙紙　松里
ふられたる意趣には蛔を立て出る　花好
雪の日に女房ちら〳〵あてこすり　里梅
井戸を堀るのに足代を上へかけ　煙幸
病みついた客にかぶせる夜着ふとん　雨旦
彼岸だと言を姑女いきどふり　新右
嫁のふみいつそいびられ申候　梅舍
いなだ姫肴屋の子と下女思ひ　煙幸
お尻がちつとまあがつて澁い柹　一夕
青い手を突て二三日言のべる　煙幸
そうしたらしまりもしようと嫁のさた　梅舍
通らねばならぬ所に禿たち　板人
外に家名もあろふのにしもふた屋　梅舍
こげた飯鍛冶屋女房に叱られる　一夕
お先きへ拜見と女房文を出し　雨旦
燒飯をほうばりめゝづぶち殺し　猿子
息子の寐言なぜつめる〳〵　淸我
送り膳何の龜相か追人が來　手枕

化た醫者手の出し入であらはれる　樂我
思案するかつぱ天窓に水がなし　歸厚
尤さ持參丸わたとりかねる　淸我
からくりの上にぎこわな太鼓うち　飄花
犬ころをちよつと蹴て行八つ下り　好成
內儀を迯しまづ筆をひつたくり　金升
かり豆のお客に馬をつけてやり　雨旦
並んでたれて小侍しかられる　梅舍
やいの〳〵と姬ごぜは御くどき　金牛
氣を取直し〳〵嫁はらみ　梅枡
おやばからしいと本屋にぶつ付る　梅舍
くらへども味ひ娘しよて知らず　釣好
大尾
夜も晝も尻から譽る宇治の里　雨旦

賤丸評

御軍慮を千里の外へめぐらされ　礫川
拜領のぼた餅を着る御立身　板人
光陰にたるみをつける閏月　一龜
幕串をちりもおわらぬ所こへ建て　礫川
趙高が一ちもつしかも馬のやう　釣好
氣の永さ錦木九十九本たて　保竹

漁父と見たのが樂天はひが目也　一夕
天地人かぶつて庵の煤を取り　キヌタ
江戸の闕九十四萬でおツぱさみ　坂下
すぼまらぬ御扇子になる御立身　一夕
國道あるゆへ大佛錢にされ　其岩
月は妓女花は祇王と一とさかり　金牛
霓裳羽衣の曲をなし母へ孝　同
傘をさす手はもたぬ御立身　礫川
穴の中いわゆる是が秦んの闇　同
橋大工砥水へ鮒をいけて置き　太丸
片乳房摑るが欲の出來初め　礫川
行燈を押へて譽る立ち習ひ　金牛
だけれどもしんぼうしやと里の母　梅舍
權五郎目ざす敵は彌三郎　里梅
まだ正氣だと劔菱をやたらしひ　酒好
壹步女郎を是也とは息子せず　金牛
不審紙だらけな四書の拂物　梅枡
おやま所作事太刀打の神樂堂　金牛
仁和寺は鼎手捕は淺草寺　雨旦
吉原の伏勢どれも赤備へ　花好

上菓子屋仲におがまれ扱こまり　礫川
菜が來たら呼べと水餅嗅てみる　同
にぎ〳〵であわゝと笑ふ遣り手ばゞ　里梅
イヤア立派だと霜月十五日　扇町
隣の嫁を譽るのがくせ事よ　金牛
鳴よとよんでこけつこのびりを買ひ　礫川
いふな御用と鷄の毛をむしり　梅舍
本堂へ鮓しを漬るが談議僧　松里
片身こそ今は仇なれ中氣病み　雨旦
錢あれば濡まじものを俄雨　大權
床でとく帶たぐつても〳〵　礫川
大晦日閻魔の内へ鬼が來る　キヌタ
人間にならふと牛は喰つて寢る　梅枡
鉢卷で立聞をする辛子かき　大丸
舊臘はお日柄もよくけちな嫁　扇町
女房に手を抑れる病み上り　大丸
大尾
蛙こゝろに思ふやうくそ坊主　金牛
川柳評
千鶴は萬里へひゞく放生會　樂我
忠度の外は浪路に行暮る　雨旦

煤の日は太夫の部屋に内證の子　梅枡
十三日役にたゝずは美しき　金牛
氣になつて新造鼠を撫育する　礫川
占かたになるのは龜の萬年目　同
地色をば伊東が舘に御座の時　金牛
我身世に肌をふらぬを百へ入れ　松里
人柱迄に請負度々倒れ　金牛
そこら中つめ〳〵される三會目　礫川
何か出やうやらしれぬもの丸綿　金牛
座敷窄爪で鼻毛を拔て居る　礫川
鉢肴下戸とう櫛にして仕廻ひ　大權
國家老わつちがほしい儘にせず　礫川
閻魔樣どつちりきこし召たよふ　同
淋しさをうまく聞せる忍び駒　雨旦
顏見せは仕立おろしの馬に乗り　其岩
淺黄裏うつ〳〵として樂しまず　賤丸
見ないふり逃よふと迄いつたやつ　扇町
魚すくふように浪人かゝんで來　綾丸
時に斯ういふ理屈だと小便所　賤丸
サア事だ髮ゆひ賃を一歩出し　如猿

酉の日に息子持病が又おこり　白人
ほんに忘れはせぬけれど金がなし　雨旦
かつもつてふる氣ではなし寢る氣也　手枕
振り新は禿に三本毛が多し　礫川
なんにしろ春屋が喰た跡の事　林鳥
大部屋を出て來る御用ほゑつ顔ら　礫川
つらい事眼も歯もよくて今一つ　花好
二百が嚢に仲間んの首計　金牛
門限がきれて淺黄が青く成り　口口
あれあの火を見なせへと下女もがき　松里
大尾
馬上だと斷る相撲見上げ果て　板人

俳風柳多留五十八篇　終

俳風柳多留四十九篇

俳風やなぎたる後住むくにゆたか　菅裏

五十九

和文評

是天のなす所にて御開運　藤波
雨風にまけぬ冥加な簑と笠　志夕
萬木に勝れて琴の音を調　可笑
松しまはかわらぬ御代の名所也　三松
人はいさ白梅匂ふ小倉山　杜蝶
鶴へ乘る馬は翅の如く也　青露
簾を卷く官女雪より淸らかさ　同
古今の譽れ牢中へ勅使也　杜蝶
雲の帶衣々山にしめられる　新右
青首をとるは治世の勇士也　散売
泰平にせんじやうへ出る御欒師　亦樂
手には鷹足には鵜の目返し也　山笑

野馬臺の上へ字突がぶら下り　藤波
洗ひばへしたは小町が雙紙也　笑丸
日本なら養由直ぐに時服也　遊高
仲麿が歌をちんぷん感じ入　器水
疵ものも入て名高い六玉川　古遊
指折の弟子に八つ橋をも拜し　香貞
鷗見てあれにして置け都鳥　磯川
雪に寢た小松子の日にゆり起し　是樂
忠孝は漆と酒を身になすり　器水
爪音を蹄にかけて嵯峨へ出し　カテウ
花嫁の禮を見捨て歸る雁　青露
文道は箸武道では樫を持　春駒
百ふしも並ぶ御庭の綿ぼふし　亦樂
七所ほどて白歯は見染られ　古遊
人の子と通りすがひの名句也　雨夕
御祐筆人を遣ふも筆の先き　葉千
何卒と十六筋で嫁を責　青露
鶯も蛙もよみし大和文　鷺舟
大敵を知者三つ指で追返し　留人
只一騎せきとめられぬ勇しさ　目多丸

嫁の母殊に〳〵と目出たがり　手枕
炭部屋は一入目立雪あがり　器水
梅壺とすいな咄しも御所のうさ　横好
淺間にも裾野は白きそばの花　龜樂
ふん切た母は機して綾錦　玉陶
硯の海を卷上る長い文　半下
鳥追は空音で通る江戸の關　春駒
さなきだに重き筑摩の鍋二つ　雨旦
百増て成長させる妙義坂　三木
深い智惠有て淺瀨を聞て置　里松
紅葉笠召傾城にみたれそめ　喜丸
御師の旅宿に伊勢町はきつい事　木賀
とつさんの迷子札だと御菜の子　鷺舟
天道を見人に世界の大芝居　同
三尋ほど兎へかける月の罠　天龍
初大師一箇の庄を買て來る　萬仁
百人をのけて禮者を居らせる　青露
陳じてもかなわぬ親の照魔鏡　古臼
琴三味線で奥中が不破の關　可笑
皮切の三つはあつい父母の恩　釣好

梅屋敷亭主年始に鶯菜　水治
隠し妻在とは主人相知らず　竿下
袴だれ八重九重にしばられる　酒好
樽かいに裸にされるこもかぶり　辻木
こて／＼と左官の女房夕化粧　横好
是見やれ富を取たと市戻　青狸
千金の一夜ぐらしは五丁町　手枕
七里とはあるかぬ旅は子供つれ　雨旦
杉本が眞似も妾の謀事　雨夕
田樂で燒やもしほの親子中　梅琴
村芝居頼朝さまあ庄屋の子　龜樂
江戸に無い奴祇園で落を取　加丈
まかなくに十六の春きつとはへ　水治
柳の下の御事は夜たかなり　雨旦
させもが露を命だと下女もさせ　雨聲
鳩杖を突ても止ぬ豆いじり　二松
床闇で開くは下女の岩戸也　留人

錦鳥評

御錺の松もゆるがぬ五德しめ　山笑
鶴へ乗る馬は翅の如く也　青露

東海は御庭で木曾は御林　和文
御屛風は墨を付たで御寶物　煙幸
綻る梅に針ほど草めぐみ　笑丸
我が年を積とは見えぬ寶舟　猿子
御國から鯛の廣さも世に聞え　亦樂
花の里芥子からそだつ女郎花　三松
正月は字を染四月紋を染　其末
雪にもふ足跡の有はせを塚　青露
それともと母は朝湯を覗く也　葉千
白鼠穴を明るがきらひ也　笠下
唐倭七十一字忠と孝　和文
郭公月を去る事矢のごとし　雨聲
金比羅さまへ御似顔の繪馬を上　春駒
今炭を買たと見える雪の門　龜樂
思ふ事一つ叶へば神酒二つ　金牛
年玉で目差の鶴を尋出し　亦樂
花も主に一度なる歌の德　留人
追はねはよほどはつんだ娘也　笑丸
一寸の草にも五分の春の色　目夕丸
物思ひそばで禿は春を待　賤丸

そかれたゝ洗つた耳も世に響　笑丸
扣かれた達摩の瘤は内へはれ　時佳
鐵砲を廻ると鰒に引込れ　艶里
いつちいゝ事だとやたら餅をしい　喜丸
唐の下女大和の國の二字を譽　雨朝
ちつと見ぬうちに縁が松と成　木偶坊
繼親が啼と兒きが笑ひ出し　留人
歌がるたつんぼと下女と餅を燒　器水
炭俵敷石にする安玄關　香貞
木琴のよふな身とくやるかまぼこや　酒好
大笑ひ谷中で杓子おつことし　三木
おめへの氣猫の目玉と下女しやれる　茂柳
おかみさまの御好には亭主大こまり　青狸
勝負附鼠にはねがはへて飛　松歌
餅につく娘は年もふける也　有幸
七種にたゝくは人の喰な也　雨旦
年男疱で兒がまご／＼し　同
手が有て客の足をも近く呼　酒好
三河から切組て來る杜立　木賀
かゝさんへ地震がそんなにいゝかへ　兎禿

古筆見を猪の醫者かと下女思　香貞
下女出逢あこぎが網へ引かゝり　龜樂
お頭巾になさいと花嫁わたをくれ　和田
又一里近く成身も若やきて　七助
看板も口を吸てる結納屋　時佳
足入と名付手入をさせに行　カテウ
名山と茄子びを猿は味しらず　七助
陸奥のはては牡丹の畑也　物成
積てはわかれもつらき雪の肌　笠下
明て見ろ二兵衞が裏の梅の花　花町
飛鳥の山で差たり押へたり　艶里
水鷄より和漢の鳥でたゝかれる　牛下
お節がらごまめ大根のとゝまじり　雨旦
雪中に縮かへつて織て居る　柳糸
齋日は閻魔も夫婦づれで出る　福松
おいらんは乘せる禿は漕て居る　手枕
女房悦べ兩國で買て來た　樂志
てんほふにたかる虱の蓮强さ　雪下
天德寺拜見あらば下女が聞　金牛
傘の引ときを着るむごひ猪々　有幸

松脂で熊坂穴の毛をぬかれ　天龍
大尾
祝言は三つ組床は二つ組　有幸
初日の出我が衣手に松の露　青露
武は藏め豐に暮す國ぶり　春駒
高砂は御代蓬萊は四里四方　里梅
實にならぬ山吹歌に實を入らせ　鷺舟
日月は燈火蒼海は油也　同
根上りの松へ響ける片男波　亦樂
火が消て史記も左傳もづぶくさり　器水
更衣の間御馳走時鳥　和文
幾疋も百足のつゝく惣登城　笑丸
實のならぬ花を耻しそふに出し　器水
首が有たら江戸中が皆氏子　梅舍

藤波評

紫の都に瑠理の御造營　酒好
日本一をふたつ見る日本橋　春駒
爪音は敵に引かせるはかり琴　加丈
國に無い花に楊貴妃名を殘し　三松
年號も正き德の御制札　半下
唐迄もまねぐ薄の御名城　古鳥

京は菊葵は江戸の土に合　山笑
魚篇の無いので虎の御門也　其笠
鳥の羽を縫ふのは武士の手利也　留人
實の王は右近左近は花の王　金牛
身の寶知惠は五つの藏から出　雨旦
和の味噌は一夜造りの九合鹽　留人
六つ時分門に片目の國家老　喜丸
覆面んになると別ある雛の箱　其笠
ぬれた御衣隣の山で干し給ひ　散売
御諱も御歌も道の眞なり　東平
御扇子は御蓮のひらく御印し　器水
耳と鼻きくは鰹とほとゝぎす　其笠
笑ふので四百餘州の民は泣き　若蝶
木綿から絹布へ落る孝行さ　可笑
まだ文も見ず雛箱のふたを取り　喜丸
忠孝の道には曲る辻はなし　木賀
天然さ源氏の内を御定紋　煙幸
日の光る君は源氏の目貫也　其雪
是まさに凡人の見る夢でなし　古鳥
茶臼山粉なにしやうとの御陣營　其流

一品んの菊を櫻の中へうゑ　散壳
櫻木へ埋木をさせる御立身　和文
錢の穴あたりが丁度御本坊　古鳥
鳥影の客は大きなすゞめ也　釣好
又はだか此人にしてこのやまひ　手枕
繪のよふに櫻の咲た屏風坂　三松
三本の爪を能ある嫁かくし　雨旦
薄雲は七布を明けて三布に寐る　シクト
內裏造營四分板と小割也　散壳
名木の一本かれる湊川　葉千
富士は雪すそ野あたた鷹花茄子　其末
十八に分て常盤の御稱號　金牛
其まゝに御盆太ト輪に遊され　其流
今の御代ざつくと着るは簑計り　物成
吉日に杜若の紋を大工建て　和文
富士の夢明る日雪の衣を召し　散壳
ふられても濡ずに伽羅の下駄を召し　可笑
なる程と指を折らせる杜若　和文
御吉例柊の角ももげる也　散壳
梅の花五つならべた御緣日　晴風

中指を折ると明智はしてやられ　金牛
五六文長くて親の手にあまり　みつね
神佛へ後家空錠の額を上げ　樂志
持參金切れのある面ら計り也　賤丸
むすこの千社九郎助が仕廻也　留人
かゝみ山忠義は下女の天下一　和文
しら波におどろき千鳥音を發し　艷里
玉のいゝ所へ目のよる格子さき　樂志
鬼の豆まきおらお內〳〵　綾丸
四つ足は喰ふもくはぬもあつたまり　辻木
花嫁は桃のやう〳〵年始也　里梅
猫と馬黃色な聲でいがみ合　芋洗
吉原は櫻さへ實はもたぬ所こ　紀樂
こはめしが出たかとつぴきぴいがやみ　木賀
下女が閨竹光公の御來臨　金升
さりとては又おしい事穴がなし　志丸
大王のもん日遣り人もついて出る　津邑

錦鳥評

花よりも松の都と唱へたし　有・幸
御扇子の風で味方は暑にまけず　亦樂

勅額へ手のとゞくのは春と秋　志夕
孝行と神慮和漢の厚氷　里梅
廻らずに持つは撞樓の水車　三松
づぶぬれに成たで太田名が高し　金升
嫁のかく辛子がきいて姑泣き　匕助
八重垣の内へはいれぬ唐詩選　カテウ
郭公娘にくどきおとされる　木賀
嵐より雪より雨で名をあげる　里松
ながれる沓をうけたのは張子房　散売
お月さま丁度廿ちに成給ふ　艶里
きやつ〳〵と手はづを配る割普請　柳水
雪げして鞁が瀧は亂びやうし　カテウ
千両出した口留は世に知れる　三松
よくもめた嫁は紙子にやはらかさ　志丸
山路を鹿は見事にあゆむ也　加丈
送り膳美しいかときいて見る　夢中
琴爪もはまらぬ程に世帶じみ　斗丸
萩の戸の風にも母はおきて見る　青露
糸道のよこへきれたが戀の道　散売
初登山岑にはくらい道はなし　斗丸

神にうらみはかづ〳〵ごさる疱瘡　加丈
柚子と桃なる程かゝる軍也　津邑
けんどんを配りによほうな夫婦こし　古鳥
實方を四五羽生取る雪の朝　笑丸
煮ころばししごく大事に座頭喰　三木
いつもならけふかざるねと娘待ち　酒好
鶴ケ岡石生娘のやうに出し　三木
ふつゝりりんきせまいぞと母いけん　東平
馬の耳蛙のつらに母こまり　鷺舟
手まへのが出來りや禿のすそが切れ　雪下
蛇の病氣此節蚊さへ通りかね　金牛
三の夢猿一口にしてやる氣　木賀
美しい下女で見にくい事が出來　眉長
あゝも似るものかと綱は空をねめ　里松
ちよんの間はわたしが部家と下女がしやれ　雨朝
是は〳〵と母のまつ遅櫻　雨旦
にへたつた女房へ下女が水をさし　其雪
さいそくに座頭目鼻を付ろ也　雪下
宇治橋の下たに書てん張ている　庭花
坂東が銀杏であてる川柳　是樂

純友がきてさそひ出す花の山　和文
盃を眞中にさし嫁はにげ　木賀
初午の娘鳥居をことわられ　如猿
かあいさのあまり泣かせる二日灸　志夕
上段をくるふ御間かと下女思ひ　香貞
ゑちごから鹽の廻つた甲斐もなし　井蛙
殿さまは我のせ兄を馬にのせ　里松
ひや〳〵にあらたに切れて下女こまり　菅裏
足のぬけがらを茶碗と取かへる　里梅
餅草も化るとあつい團子なり　東平
おつかさん坊もいくよと目を覺し　艶里
夫ともと母は寐卷をあつためる　釣好
何とて待はつれないと淺黃言い　遊高
晝過ほふろく朝は櫻草　香貞
百座敷きこえませぬぞ才三さん　里梅
わたしのも戸ざゝぬ御代と下女しやれる　雪下

酒好評

野に餓莩無きは苅穗の御製也　亦樂
有難き御代賑てしづかなり　里梅
御衣に似る羽色は鳥の冥加也　東猴

武のつよい國迯たのは水計り　金牛
御目出たさ馬もはやめの御使者也　里梅
歌の德時鳥まで梅で啼き　留人
一國の錢は四角に廻るなり　古臼
孝ぞつもりで扶持となる有がたさ　春駒
そも〳〵松の化物を目出たがり　其流
穩さ矢狹をてゝつぽうがぬけ　藤波
美濃へ穴明けて三河を嫁覗き　金牛
桃の宵重忠程に嫁をせめ　雨旦
清濁をわけてもてなす雛の客　里梅
一ところゑは鶴にも増るほとゝぎす　可笑
御高盛り寶永の頃かさへわけ　其笠
雛のしん極大切に嫁は切り　釣好
扇おつとり立あがる鐘の寸　東猴
旅僧へぬれ手で粟の飯をしひ　三松
十軒の家さがしをする奥御用　亦樂
柿の歌となへてしぶい眼が覺る　三松
生田びかじたいに及ぶ嫁の藝　金牛
かこち顏して月の夜の手くだ也　梅舍
花の山下戸は肴のあらし也　釣好

ふもんごん二十五もある候の文字　芋洗
竹村をくふのはふしの無い女房　三松
これがよく着られた物と御虫干し　春駒
十三はぱつかり町の出來はじめ　ヤマキ
三河にはなくて難波に眞半分　木偶坊
兄よりも弟は十四多いなり　同
あつたかなやつにはとける雪の肌　里梅
榕枕計り此人このやまひ　匕助
入れかけて名ごりをおしむ雛の箱　岩猿
あびた酒ざつとふり出す袖の梅　古鳥
なま長い名の客人のむづかしさ　鷺舟
新世帶ほどはかつてく初の雛　雨旦
榊より猿の先だつ小牧山　ヤマキ
皃まげのやうにして置琴の糸　志夕
つうじのけいこはこくうにおかしがり　古臼
燈もとろり禿もとろり〳〵也　釣好
もてた翌すわけて嬉しく眠くなし　梅枡
すけんとはしらぬが佛かごいかご　若蝶
豆いりの手は止む事を得ざる也　天龍
蜘あつて苦もなく讀る妙智力　里松

櫛と餅和漢で寐ものがたり也　新右
梅屋敷禿もついのうぐひす茶　水治
天神は昔こゝにと御菜いひ　夏木
ヲヤにくらしいとたぐり出す〆た晩　綾丸
右手左手上段下段遣り手の目　板人
昔々あつたとさ今浪人　猿子
そのざまで雛かと亭主はな毛也　花町
母の雛しやちこばつても壁にされ　松里
まゝ事のけんくわ家財を沒收され　木賀
たがいにゐいやと引拍子百おとし　綾丸
おいらんにしかられいすとけちな晩　ヤマキ
下女が色山葵おろしをにぎり合　雪下
下女手代三里と尻のごみを吹き　東猴
するはづの池だとしやれるずるい後家　木賀
下女いやとマアそふいつてみた物さ　金牛
ふと棹で後家を泣せる三の切　藤波
サアまくれ〳〵〳〵と御關所　猿子

錦鳥評

凡人の細工に出來ぬ高枕　半下
御領地は九曜の星へ六をかけ　古鳥

御祐筆壽師よりはれな馬を書き　春駒
九つの星であかるい和歌の道　同
さわらびも栞もやわらかな物語　三松
おたやかな雨がぼたんへ二度かゝり　青狸
君が代の雨は牡丹へ二度かゝり　金牛
初かつほ跡先を見て喰はぐり　杜蝶
萬木にすぐれ四海に枝をたれ　同
月雪にもめる扇のはなやかさ　燕子
松を切り竹を吹くのも忠義也　酒好
仰向けば花うつむけば鹽干狩　梅鳥
洗はれて笑はれ草の種をまき　古鳥
嫁にたのまぬ針めどのむつかしさ　三松
傳奏を嫁のつとめる桃の御所　青露
花の山空に知られる銀世界　古鳥
三夫婦の口にはこまる水かげん　杜蝶
莊子が夢の飛あるくうらゝかさ　其雪
節句前箱で取こむ女の子　香貞
內中がはやおき家も寢かさぬ氣　雨旦
日が西へ入るとむすこは北へ入り　金升
足がるに早ひきやくとはいゝ見立　亦樂

寢てまつたくわほふを妾うみおとし　散売
ふらそこに酒の壽命のすき通り　月圓
臍をほりからして臑をかぢり出し　天龍
直が出來てたましい入る無一物　月圓
紙ひなのかしこまる程母は老　青露
おすき見をまぐろの事と下女思ひ　香貞
櫻からかへれば女房雉子の聲　古臼
引馬に駄賃をやるはけちな客　近勘
田樂で夜喰かたまりみそをつけ　晴風
ながし眼で梟の見ている後家あひる　金牛
けいせいは休のないに母こまり　和文
紋所は丁目織たは帳の紐　古鳥
尻くらいくわんおん下女がひねり出し　龜水
朝がへり母猪牙舟のかぢを取り　水治
夢計りなる手枕に下女はらみ　杜蝶
月にゑんこうきたないと下女思ひ　雨朝
遣人では無くて取人のばゝあなり　柳糸
遣り手とはいへど二階の取り人也　東平
木娘はもふ愛敎のこぼれ梅　其笠
鵜の後ちゆくへの知れぬ猪の早太　杜蝶

三日月の櫛に柳のあらひ髪　古臼
加賀みやげ雨と日和を持て來る　其笠
行かぬはづ下女はゑんこうだいし也　遊高
つよく見せよわき安宅の杖のさき　其末
針箱がつぶれまするとひきく言ひ　夢中
手のついた下女は五日に尻をすへ　眉長
りんびやうと號して馬に乘りたがり　夏木
やきながら女房一人でくつている　酒好
なむあみたぶつもふ聟が極つた　物成
すゝびたる雛にも嫁の一とくろう　夏木
雪の肌へは振るもふりとけもとけ　金牛
孝は釜不孝は母の臍を掘　可笑
五右衛門びつくり權兵へが足をふみ　古鳥
夕顔を枕にてゝらひつぱつし　同
おそく來てばゝア目出度しかられる　岩猿
置右衛門が來てしちくどくしやべつてる　夢中
大尾
六あみだ女房羽二重餅のやう　一露

鷺舟評

月と日を居て明るき三箇條　庭花
麟鳳も出よ直ぐ成君が御代　和文

三綱を張るは五常の御成道　雨旦
水菓子に沓冠の掟有　其流
五百坪千代田の松の生茂り　藤波
身の丈ヶに餘る二人は師の敎　喜丸
尊さは九月の花に四月の葉　其流
雪の夜にこりかたまつた鹽が解　艶里
五七五に折目のわかる唐衣　古鳥
汐の差引大海の息遣ひ　友松
此花を見ろと唐迄貌を出し　亦樂
忠臣の鳥居は朱になる覺悟　半下
浴衣着て出る時筆の軸も切　無譯
一つ家仁在て出かわり靜也　香貞
其當座こがねの鶴ヶ岡と言　山猿
水菓子の火に成ほどの御怒　木賣
我が門で鞠躬如たり朝歸　散売
ヒッ呵り忠盛糠で手を洗ひ　同
鵺の雲迯て行跡に郭公　杜蝶
居はさんごじゆ齒にはるりの露　留人
燕のやうに大名子を揃へ　雨朝
椎の實で戀のいろはを書習　海老

つまづけば姉が手を引小倉山　岩猿
貸本を母の投込座敷牢　其雪
神に九頭龍里芋に八つ頭　亦樂
灰吹の蛇は龍王の烟で出來　雪下
替玉に月をして行郭公　留人
小道具や見入た鮫にけふも來る　志夕
周倉も貳百貫た初幟　三松
化されて三圍廻る中反甫　晴嵐
おのれ時平と黑雲の絕間より　賤丸
神農も質草計なめ殘し　猿子
海山を仕出てたつた一かつぎ　龜樂
見臺は唐天竺の客座敷　鬼禿
弦音に御里を的に矢のごとし　可笑
椎たけを出しに芝居を嫁進　里梅
御座敷の似貌を大工懷中し　其流
何時だ女三の宮に聞で來な　香貞
心盡しのナアト嫁はひき　古鳥
陸士衡雁の便を狗でする　杜蝶
擧ながら立て受取藤の花　雨旦
瀨戸物や投賣にしてかけが出來　同

客を釣る文に蚯蚓をのたくらせ　手枕
山に波立ば夫も道を立　雨旦
歌でさえ業平は手をにぎらせる　同
釣臺は明くとよろけてかつぎ出し　晴風
子牙ない錢で糸を買竿をかひ　散壳
鰹の手紙三月と書て消し　葉千
子福者の每夜寐所のさかい論　喜圓
持て來た社領で荒る山の神　新右
女房がわたを拔てる初鰹　夏木
讀きらぬうちに取なと姑言ひ　酒好
無くばマアこもでもいゝと太田言　其末
名にほれて長命丸を姑呑み　マイタ
品川へ醫者で行のは古方也　雨旦
また鐘馗けんで呑でるせふぶ酒　松里
あゆひやれて打太郎兵衞が種が島　和田
鼻色が持參いかぐり緣女也　芋洗
番太郎むくれて居るとかたわ也　喜圓
大尾
饅頭の毛で氣のそれる光大寺　雨朝
同評　感吟九員
有難さ絜矩の道に塵はなし　壳丸

白い鶴規短準縄の上を舞　金牛
武藏野の月より今は武の光　マイタ
虎の半てんで御國迄一と走　友松
何時も起らぬ論の撓炭　金松
青雲の心鏡であきれはて　雨朝
鶺鴒も家老も片目無て濟　杜蝶
三人が寄て笑てこけ出し　新右
不老門暦で水を盛てたて　山水

錦鳥評

繁昌さ臥猪の床も町續き　板人
千貫で駿河の田畑買のる也　柳糸
文道は筑紫武道は箙也　手枕
雛に似た御客へも出る囃子方　春駒
紫に湖水で藤の色を上　板人
朽木より命の親がとんで出る　龜樂
鐵砲のねらひはつれぬ五百挺　志丸
和漢とも船と屏風は手詰也　手枕
雨にぬれ雪に轉んで名が高し　梅鳥
目移がして頼政は一首詠　雨夕
和歌草の末世にかれぬ小倉山　雨旦

閑子鳥とふふを買ふも小半道　雨夕
山吹は譽たが太田ぬれた儘　藤波
水無月の布子は天へ屆きそふ　雨夕
此花を見ろと唐迄顔を出し　亦樂
鍋ふたが沉んで浮む釜のふた　辻木
冷飯を喰ふと正雪知れぬとこ　喜圓
高砂の夫婦は顔に四海波　友松
豆腐やは浮み紅葉は沈む也　酒好
拜領の頭巾梶原ぬいちゝめ　樂志
泥水で住吉の田を植て居る　山笑
又來る爲だ貸もせと越の傘　里松
おふくろと親仁は箱根よりあつち　喜圓
打波も七里はだゝふたふと打　庭花
伊吹山露にぬれつゝ駕蓬　志丸
孝行の道に屆かぬ橋をかけ　マイタ
一心の外に連なき孝の道　散売
替玉に月をして行郭公　留人
緋の袴こしをかけたが化仕廻　琴糸
しにめをも下たから讀す碁の上手　其末
初幟妾だん／＼上を見る　金松

噺をば跡から配る京土屋　有幸
ふり出すと一番先きへ鐘馗迯　山笑
夕ぐれに嫁が姑をいぶし出し　梅鳥
上下も羽折も負て丸はだか　木偶坊
飯のたねかんでくゝめる親のじひ　半下
梅ヶ枝に鶯松ヶ枝に盗人　木偶坊
見えぬ目も澁いめも明く柿の元　亦樂
花嫁へつらき姑の山嵐　手枕
硝子師ひうとろ〱でたばこ也　庭花
きり〱の工面かゝアが引眉毛　東猴
關羽てうひは桃薗が過て賣　三松
五條ではぶたれ安宅でぶちのめし　其雪
棒屋半兵衞證人に取にくし　葉千
火のふるは水に遣ひしむくい也　龜樂
受出して見れば病の重荷也　手枕
とふつ下女目をなくなして笑ふ也　樂志
白壁の畫賛御用と藥取　都水
土でしたはんへん達磨けつへ付　眉長
乳母晝寢すんでの事にはせふ風　福松
湯屋の義理あかの他人をながし合　山笑

はね蚯蚓ひとり角力を取て居　猿子
ねた刄を合て忍び入る枕がや　亦樂
上手の手から水のもる傘や　水治
捨杵に下女立臼を持上る　燕子
居候雲氣のたゝぬ飯をくひ　志夕
色紙針たんざくほどな繼もあて　其流

庭花評

結構な御寶物は八萬騎　和文
日を暮す里に明石の御神影　雨旦
孝靈の御代から盡ぬ雪の種　同
長篠の頃が破竹の御威勢　柳水
弓取の神へ馬上で矢のごとし　里梅
一つ身と二つ身顏も對ゆかた　晴風
銕漿に矢の根の腐る穩かさ　有幸
相剃も扨姦しい松が岡　龜樂
目隱しを手の鳴る廓の窓へ打　有幸
嗜に堪忍袋五兩入れ　半下
硝子もわれると跡は水いらず　新右
去り狀を握て乳をしぼり込　賤丸
三味線と師匠男の弟子が張　錦重

二親を三筋の糸で引たてる　マイタ
實躰な息子に親仁唾をつき　如鶴
恪にしては太々とした料理　里梅
降らぬ日も四方糸竪の小賣也　有幸
お妾の味噌を喰てる柏餅　其笠
尻口で夏は寝られぬ宇治の里　柳水
茶に螢宇治は寐られぬ馳走也　柳糸
叟が相談三下りで筆を止め　散壳
あふ事の絶てしなくと下女かこち　雪下
闇にあや有て娘の螢狩　目多丸
さは／＼に乳母が春中の片荷つり　亀樂
岡崎は女郎衆よりも能い俵　其笠
魚淵に踊る十日の御縁日　哇道
大森は莚の屛風外とへ立　半下
十九忽ち賣れ切れる感應寺　柳水
いかんともすべきやう有いゝ暮し　酒好
堅い名を末世に殘す望夫石　鷺舟
挑燈でとぼした下女を餅につき　晴風
十三と十六只の年でなし　マイタ
亀にてはいかゞと秩父中上　雨夕

亀ならば萬放しても高が知れ　坂人
見ぬ顔にほれる質屋の土用干　笠下
まゝ事の世帯崩れも泣わかれ　五右
ヲヤ唾は客人ほどはつきいせん　鷺舟
はやり風按摩引つぱり凧にされ　梅鳥
片乳房握るは欲の出來初め　岩猿
婚禮は種蒔よしの日に極め　半下
挑灯はかわらけ町の木戸で消え　芋洗
山へ立前にふじへも灸をする　里梅
幕がしまると百棧敷喰たそふ　樂志
女房に引ずり下駄は禁句也　雨朝
一生けん命おいらん屁が出そふ　加丈
煮ても燒ても喰れぬをいせやかひ　和文
鎌倉の案内石が大尾也　加丈
中指と人差指があしをしめ　花町
出てうせふ汝元來蜜柑かご　雪下
横つゝらはるやうに蠅生けどられ　眉長
飛あるくやうに蛙を子に喰せ　志丸
嫁をねめ／＼糠味噌をかき廻し　思京
仲人の所へすりこ木春負て行　器水

六月へまたぐ五月の雨の足　水治
吹屋町だから折々ゐたる也　志孝
棟梁は上手の手から水を盛　半下
紙子計が和らかな姑也　三松
此山で銭を鑄たかと同者聞　有幸
水賣の身過ぎぞ夏の印也　板人
母親を穴のむじなが來て化かし　有幸
川中のからくり武田大はたき　三京
筋違の近所で直ぐな道へ入　志丸
いまだ參上いたさぬはふられたの　雨柳
花に馬繋で七日淋しく寐　目多丸

錦鳥評

不二山も蓬萊山も橋で見え　留人
孝靈の御代から盡ぬ雪の種　雨旦
御日永に奥海に成山になり　同
いつの間にたれか植たと安樂寺　器水
見たり聞たり喰たりで名句也　三京
手のうちを出たは九品の淨土也　山猿
尾は出ても下卑にはならぬ肴籠　山水
東帶の國の地名も綾にしき　三松

引越した先もとなりに轡虫　賀好
玉のよふなると御使者は汗をふき　可笑
ひやうたんの根絶し暑い盛也　杜蝶
凡脳は曲り菩提はすつと行　柳糸
井出といふ時山吹をくんなんし　雨柳
鶴ほどに首を伸して舟は待　青露
五月雨に世話のかゝらぬ内職　和文
その當座樂天風の心地也　手枕
歌の德天も感涙ながすよふ　芋洗
花の仇雪で打たる本望さ　和文
山吹を取たが娘返事也　山笑
二つとは火入も暑き涼臺　雨夕
下手の釣やたら太公望にされ　其流
車では浮み舟では沈む也　雨旦
見たより輕いと産籠かして遣　美山
大病の猿は餅もなめかねる　有幸
急ぎ候ろふほどに晝夜をくらひ　雨柳
からし味噌鹽の目をして唘る也　志孝
竹村の月を朝日の彌陀へ上　三松
目に乳を差たがほんにくされ縁　夏木

内陣へみすを丸めて入て置　山猿
似せ升で田舎をはかる旅役者　散売
たばこ屋が宿で葉向のいゝ妾　常住
馬にはちつとおとり人には並はづれ　東猴
のらくらとしたよに鰻薬也　山笑
綻を頼み糸豚引て見る　山猿
大道へ氷の出来る暑い事　雨朝
けちな客雪の無心にいざさらば　山猿
子の迎ひ母の出て来る大恩寺　散売
旅歸り此箸紙はたれがのだ　雨夕
刼に成たと盧久保の水を呑　古鳥
信濃と相撲上下たの大喰ひ　三松
盗人の方から亭主五両取　有幸
蠅が陣引けば又蚊がときの聲　雨朝
いぶされてもえ立胸を嫁押へ　山笑
お妾の味噌を喰てる柏餅　其笠
割れ鍋を金でいかけて緣に付　散売
眞實と啌でかためた柳橋　クツワ
鼻うたのきせる疊をおどつてる　眉長
魚籠に堅くて初ては歯がたゝず　器水

ぶう〳〵を言ふはづ尻を抱かせられ　酒好
鬼すだれせふきは見えぬ仲の町　近勘
ひとり寐も添寐もつらき身の勤　笠下
いぶされる嫁蚊のすねのやうにやせ　山笑
誘はれて帯が左りへ廻り過ぎ　夏木
ぐつと手に取ると水音高く成　古鳥
銀包醫者もやつぱり豚を引　其笠
翠帳紅閨唐人の名と思ひ　三松
本生たがわず花紙で追拂ひ　庭花
朝歸り親仁闘十息子ぐにや　東猴
乳貰の道々しぼる袖と乳　笠下
門口へ増鹽をするけちな客　留人
初花が咲くと垣根の母支度　マイタ

俳風柳多留五十九篇　終

俳風柳多留六十篇

和文評

國々へ枝葉の茂る御代の松　志夕
夢の間に和漢へ薫る梅の花　金松
八雲から次第にはれる和歌の道　雨且
燃出づる草を氷で薙ぎ給ひ　手枕
雲井迄御手の届いた御庭也　可笑
紫は末世に白き名を殘し　其雪
行らんの一首は八重の垣と成り　雨且
冬枯に無地に流るゝ立田川　鷺舟
能い折に咲いて名高い杜若　木賀
上を見てほうづの無イは千羽鶴　斗丸
御凱陣無事は古郷へにしき也　鷺舟
御しとねの下たに尋た歌がるた　留人
白石の礎御家のかため也　亦樂
孝貞に和漢二つの虎が石　山笑
實のならぬ花で實の有る返事也　杜蝶
紫を人の奪はぬ御留川　金牛

二聲と啼かぬ小倉の郭公　賤丸
大江山保昌流の舞をまひ　里梅
升形は空音を計る關でなし　是樂
七本の鑓は武勇も一つ本木　古鳥
雪氷解けても水にならぬ孝　散売
花と花八重になる日は蝶二つ　手枕
樂天も渡りかねたる知恵の海　鷺舟
學に實が入つたで麥を皆流し　加丈
一所存在るできれいな城渡し　シクト
須磨寺の花には指もさゝぬ也　古臼
母親は曇れば旅の空を見る　賀好
生きたより後藤が馬は直が高し　加丈
唐韻も茶摘もよほど聞覺え　鷺舟
霞から秋風迄は長いうそ　志孝
紫と喜撰は江戸の水に合ひ　加丈
朽木から源氏の運の芽を出し　山猿
志し松葉に煙る佐野の雪　三松
十番をはいて小栗は碁盤也　晴風
水鳥の羽音が夢の覺めはじめ　山猿
到來の鰹へ直ぐに羽根がはへ　古臼

寝返ると近江へ近いみのぶとん　金牛
米と麥辶かけぬ心がけ　梅枡
其扇くれさつしやいと村子ども　梅鳥
花陽道土手で親仁に逢つたやう　シクト
お妾は禮義を知つて不首尾也　岩猿
弓と成る父母へ矢たけを嫁盡し　マイタ
笠縫の手元山また山巡り　其笠
きかぬ氣の唐人耳の無いやつら　佳遊
女竹裸にならぬしほらしさ　葉千
天人の化粧足代などをかけ　有幸
廿四も孝三千も孝ざんす　常佳
舞つて出た時は鼎がぶつさらひ　里松
漕ぐ船の鼻へ小まりの竿を差し　加丈
女房が成有つて猛き朝歸　里松
まあお聞きなさいと嫁の朝歸り　杜蝶
そばかすが有つて二八の厚化粧　晴風
薄すらと十六夜の頃すゝきはへ　山笑
三分のもわたしがのもと下女ぬかし　葉千
豆を喰ふ齒も無く成つて鳩の杖　三松

錦鳥評

木地は照り極彩色は光る宮　古鳥
是を入ると四番目が茄子也　亦樂
御扇子で螢押へる關ケ原　柳水
執事札を枝折に立てる花の山　有幸
名の高い櫻備後と薩摩也　古鳥
賑かさ古今武總の凉舟　亦樂
幾千代も後家は風雅な名を殘し　庭花
末世迄雪で明るき學の道　雨期
小便は五文字雨には十七字　錦重
孝行さその身の肌も冷え氷　里梅
忠は書き孝は櫻へ乘せて賣り　手枕
隣國の牡丹をにらむ鶴が二羽　葉千
神國の蜘は詩歌の道しるべ　鷺舟
寐た家を身を粉なにして引起し　常佳
出る月の和漢を照らす三笠山　梅麿
尻の火で車胤は胸を明るくし　樂志
ひんやりとするは氷の土用干　斗丸
夕立と雪見の間に秋葉道　雪下
沈むほど乘て亡者をうらませる　志一
山吹の茶漬喰ても身にならず　山笑

暑い事狐を片身井戸へ下げ　酒好
虫賣のそばでせんひり虫が啼き　水鏡
腹に月見えるで嫁の花が散り　金牛
看板のやうなら天狗長かろふ　岩猿
貞女両夫にまみえたで子を助け　其雪
すきや川岸とは奈良茶やにいゝ所　庭花
緣遠さ三味線もたけ琴もたけ　シクト
百合の花誤り入つて咲いて居る　鷺舟
肩あげもおりぬに尻が綻びる　雪下
あたまへ日高買て來る河童の子　玉
ぬれ佛元を糺せば色出入　有幸
雷の太鼓でふれる入梅の入　半下
今晩は義仲寺の句と淺黄しやれ　新右
紀伊國は八日尾張は九日也　有幸
横に寐る娘は親をたてすごし　柳水
久助を箱入にして暑氣見舞　半下
俺相な細工結構な土地で出來　散壳
職分をみがく玉やは能く光り　晴風
黑鯛を遣るとはすいな留守見舞　京道
おたふくで能いはそら豆ばかり也　志夕

つゞらからお化を出して下女は干し　玉
かごのへつゝいへ女房の釜を入れ　是樂
鰹節の所勞ぬけたをそばや干し　其流
盃を出した芝居は人に醉ひ　手枕
子福者の女房馬上で安氣也　辻木
松坂は八助伊勢は八兵衞　山笑
曇つてる時に狐は嫁入らず　杜蝶
油虫豆へたかつてどくづかれ　住遊
足の有る女房亭主をふみ付ける　酒好
聲色も唄も似たりの安凉み　樂志
四ツ目では眠る八ツめで開く也　マイタ
素一分の無念四ッ手に追ぬかれ　若蝶
佛師屋は佛のにくで蚊をいぶし　喜丸

志夕評

泰平さ知者も勇者もしれぬ御代　板人
日々に色增は常盤の都也　鷺舟
淋しさといふ秋はなし花の江戶　目多丸
萬民の咽を潤す松の露　近勘
松のかげ疊の上で月見也　玉
浦舟はかくれ名歌は世に殘り　可笑

蓬莱の地をかためるも鶴と龜　里梅
日を抱いて月をおぶつた吠屋姫　新右
洗濯でさつぱりとした和歌の論　三松
御捌は丸し掟は四角也　猿子
能い眞似を賞し給はる孝の德　和文
一箱は思案の外で立つ煙　東子
神農は鋸草で舌を切り　加丈
空解けをせぬのは繻子も年に耻ぢ　錦重
薄では手も切れ指もきれる也　玉
見物で氣のはる鶴の料理人　山水
咲く花も殺さぬやうに池の坊　梅麿
遣ふのも溜るも金に面白し　辻木
堪忍が味方短氣が敵也　雨旦
花瓶へ身を投入の若隱居　花町
其あした渡邊手持ぶさた也　水鏡
心にも無いあくたいは盆踊　梅鳥
鍬樂の種とて鋤間なくかせぎ　常住
嫁芝居顏の仕上げもふたい香　里梅
女房ほど母の迎はこはくなし　有幸
朝がほとゝもにしほるゝ朝歸り　三松

秋風をよける持參の金屛風　葉千
人橋をかけて玉屋は譽させる　庭花
取膳で鉢合せする中の能さ　留人
とうろうへたかるは里の油虫　喜丸
親どうせうと不孝者言初め　玉
氣ばらし程は給んすとうまい首尾　山猿
醫者の奥の手もやつぱり逃る也　木偶坊
さかなやはから半臺をしけ〳〵見　庭花
釣て來たのがおかしいと女房燒き　近勘
なかぬはず聟が買つたきり〴〵す　樂志
四會目へ行かぬは損と母へ言ひ　マイタ
なんとでもおつしやいやしとちゞれ髮　和文
善の綱日差のやうにぶら下り　杜蝶
聲自慢下女挽臼のひきがたり　葉千
肌ぬぐと命をかけた女房出る　志孝
つぼ口をして首をふる澁ッ柹　板人
三會目お花おとるが罷出で　金松
勸學屋蓮をうぬがのやうに見せ　花町
相性を見てとぬかすは下女奢り　藤丸

錦鳥評

鏡山裏は湖水の天下一　定岡
御祐筆繪師ほど馬に骨を折り　日多丸
二つ無い山を三つの內へ入れ　里梅
居ながらにひろふは濱の眞砂子也　同
壽老人ほどに餌蒔は愛す也　有幸
白猫を鼠の袖へ申請け　古鳥
越前と越後は橋の內と外　春駒
美しい目元で蜘の巢に見とれ　千虎
花の咲く方を賴政申受け　散売
花の姿を梅干の中へ置き　手枕
寒國で織た着物で暑を凌ぎ　京道
子ゆゑの闇にあかるみへ常盤出る　龜樂
鳩の喰ふ豆で喰つてる繁昌さ　日多丸
看經の後ろでいぶす嫁の孝　板人
櫻にはゑもん梅には袖が有り　刀鶖
春先は囀しの高い飼鳥や　賀好
唐銅の鳥居で蟬は燒どをし　辻木
月を掃くやうに薄は穗に出る　山水
時宗は矢の根は有るが弓はなし　田傳
なまけると天秤棒のてんは逃げ　常住

村の蛸せなあ〆てる芋畑　雨旦
六右衛門の中で五右衛門一首詠み　留人
腮をうちはに遣はせる美しさ　梅鳥
とぐやうに鏡が池の水すまし　有幸
姥は山娘は月の里へ捨て　金牛
御相談なら御無用と月の事　杜蝶
松茸を切るのに嫁は松へ行き　手枕
暑い事帆をかけて行く牛車　山猿
青貝の先箱で來る黑ん坊　刀鶖
子子の身振でおどるばかばやし　鷺舟
盆踊だてにつれ立つ手長島　雨旦
附木やのかゝあ亭主をつくぐゝ見　庭花
收月を旦那の尻と下女思ひ　千虎
早く目が覺めたで內の飯を喰ひ　笑丸
もうだれか來てもと糠を一つかみ　龜樂
刺刀に羽子のこほどな息をかけ　水鏡
水をぬふやうに游ぐは針目高　半下
間のわるさ間ふの四つに乘つ付る　新右
內兜見ぬいて妾組しかれ　山猿
朝歸り敷居夕部のふとんほど　マイタ

喰付いて迯げるは戀のいろは也　伊せ遊
抱留めた手柄權兵衛五郎丸　三京
氣晴らしほどは給んすとうまい首尾　山猿
箱根からあちらの嫁を幕に呼び　樂志
打て來る箒を息子傘で請け　古丹
大尾
御代參には喰たらぬ蓮の飯　喜丸

板人評

御老躰だけに御歌も夜や寒し　雨夕
諸國から鐙の國へ駒を引き　其流
破魔弓は光陰の矢の引き初め　山猿
深淵に行き薄氷を孝子踏み　器水
いゝ島を石田に着せるおしい事　和文
たらぬ乳の足しにうごかす管簾　素牛
權六は瓶彈正は釜を割り　木偶坊
異國とは琴かはりたる太鼓の音　刀鵞
唐崎は一本琵琶は水調子　ヤマキ
御切戸があくと御庭の日本橋　加丈
白菊はまどはせ月はうたがはせ　後丸
歌を忘れて目あかしの神と詠み　葉千
白がねの猫眞黑な手で貰ひ　伊勢遊

琴三昧は箱迄反りがあはぬ也　新右
國家老撥に袋へ納めさせ　志夕
弱ものゝ交り和歌の四天王　五連
鐘の聲風に伸びたり縮んだり　辻木
獏曰く周公旦はたべつけぬ　柳水
鹿の春を分けて晒にしみが出來　器水
備後は詩薩摩はやまとうた　山笑
右でひつかいて左で嫁たゝき　三松
鈴の音に來るのが客の三番叟　同
榮果の夢はさめて乘る五十間　笠下
しやれた年玉で一休申入れ　杜蝶
水引草の結ぶのは露ばかり　半下
長者町寶の山の麓也　有幸
目が覺て見れば敷居も高くなし　亦樂
誰ぞや此夜中と質や戸を明けず　青露
是が和の昌平橋と通辭言ひ　雨夕
一番に錢金の山田舍見る　香貞
道明寺他人の詰めたやうでなし　柳
蛤も女郎も月にしんきろう　青露
月の穴明けてあかるく内へ知れ　雨期

醫書に無い事名月が癪のたね　三松
切れますといやれど伯父のつけ燒及　香貞
殿さまへ魔をさす猫の美しさ　雨夕
けんぼう流を稽古して皆わすれ　鷺舟
草臥たやつが見付ける一里塚　龜樂
唐もろこしを重言ときいたふう　和田
其明るばんも射留める源三位　五連
傘を輪違ひにさす伏見町　山花
ざつな木戸石をつるして〆させる　酒好
おつとせい轉んだ藥だとたわけ　新右
此事のみは御自身の御しんまく　里梅
につこりと滿珠を握る御忠節　金牛

錦鳥評

文のみか武にも小松の御遊也　山笑
水は迯げ鐙は爰に踏止め　松里
御太鼓で開くは散らぬ櫻也　雨夕
神國に不時をねだつた親はなし　新右
お脈をと我が爲ならぬ手を焙り　其流
信濃路は武勇も月も影が有り　古鳥
三日月の弟子の北斗が芝へ飛び　一河

萩の土地紅葉はとんと植付けず　五連
賤心有つて實の無い花を出し　有幸
犬に虎けしかけたので猿が勝ち　木偶坊
飛石にする程つゞく帆かけ船　梅麿
孝の德美濃は生醉だらけ也　三松
片腕でたくさん有と關羽打ち　梅鳥
目を一つ持つたが坐頭出世也　山笑
賣聲は雛の伸びてる干だいこ　有幸
本牧の鼻へ杉田の梅かほる　定岡
紺地に白き立葵こま廻し　春駒
緋威を木曾は巴にねだられる　香貞
三味線の手も草臥れる山盡し　三松
針ほどなもの棒になる雪景色　梅下
鶯のまゝ子も梅で一度啼き　三松
無理留の加勢に雪がちいら〳〵　金牛
冷酒の者に禿しかられる　手枕
かくし藝する頃袴しわに成り　一河
きつい啌嫁にまかせて置きまする　青露
下た心有つてうは氣なはなし也　龜樂
親も子も大物入と仲人しやれ　雨夕

飯どきに目移りのする茄子の色　水治
鼻へ穴明けて引出すうし丸太　三京
轉んでも只起ぬやつあしだはき　和田
丑の時參りはのろい女也　山笑
仙人も古郷は忘じがたく落ち　山猿
糸爪の水でも取らうかと居候　梅鳥
もませれば下女尻つぺたを屎づかみ　里梅
御寢間では太い音も出す三の糸　同

亦樂評

有難さ野に遺賢無き君子國　鷺舟
琴にせず高枕とは御妙策　同
隅田の水卷上そうな御山號　器水
君樂の一味は松の根に生じ　里梅
有難さ白銀孝は徳の元　雨夕
品川の霧一本はれ二本晴　柳糸
柘榴から凡慮の知らぬ火を生じ　金牛
關が原序に凡夫責たがり　友松
まだ母の力嬉しき碪の音　志孝
唐崎へ夜來風雨のしらべ琴　可笑
邪は繼にもならぬ孔子縞　東猴

孟此子爰において母安堵　松里
母親は慈悲と持病の咳をせき　留人
善惡の飴は二流と唐で賣り　雨旦
神徳は返し武徳は呼び給ひ　春駒
爪折に吾妻の雨を御凌ぎ　金牛
まき錢になると神樂も亂拍子　其笠
酒臭ひ涎車を見て流し　物成
盃が濟むと柳の雪を取り　其雪
やれ散るな〳〵と師匠花の山　雨旦
乳は辛しとあきらめる閏年　クツワ
土手ともに十三丁の名所也　藤波
咳拂娘に付る鳴子也　里松
此鉢卷の御不審が安鰹　春駒
一ト夜さに十萬年が生る也　三橋
鯛の片身が八百の元手也　三松
景清はなくし伍子胥は眼を殘し　木賀
笈ずりを娘はゑがほで縫て居る　和文
豆腐やと下駄や一度に藏を立て　友松
伯夷叔齊日坂へ來る所　木賀
醒の一つ雪見に下戸交り　山水

子の鼻を義理で乳貰撮む也　雪水
天に口有て生酔くだを巻き　常住
ゆきたけは親の鼻毛とゝもに延び　芋洗
二四不同佛も横と竪に成り　雨旦
上帶に眞田をしめた夏御陣　ヤマキ
藏宿は玉もの前にくどかれる　山水
開帳のはれに和尙のちゝぶ絹　其笠
枳(からたち)と桃で相馬の紫宸殿　雨夕
晝行くを女房夢にだも知らず　和文
產所へも見へる内裡の御造營　香貞
野雪隱人にかたるな女郎花　山猿
蜀の魂日本を飛あるき　其雪
十七の文字へ達磨の物語り　和文
いよ紀伊國屋と三千人で譽め　猿子
末世迄雪折のせぬ孝の竹　マイタ
岡釣に四馬の車はあたりもの　春駒
滿汐に德利干上る汐干船　龜樂
孝行な嫁は守りに三百匁　其笠
孝行さ敵が死で出家する　山猿
巾子も夢ばかりでは出來ぬ也　柳糸

水瓶へ打た礫は世に響き　古鳥
半聲は向ふ神田で時鳥　東猴
作る後家佛を尻に敷て居る　山猿
太刀は鞘目貫も錺もしとね也　柳水
他の梅を臥龍と賣るも謀事　雨旦
敵を粉にする砂ごしの知惠袋　半下
たいこ醫者お燗の脉を見る計り　雨旦
こんな腰有りと出口へ植て置き　器水
義貞は荒布の道を踏分る　古鳥
韓信はくゞり助六くゞらせる　志夕
いせの留守女房あこぎに網を引　金升
夜講釋初日は耳ッぱりばかり　杜蝶
干物を唐の蝙だと下女思ひ　雨朝
文してと書きは書いたが下女こまり　葉千
いびつなものでいびつなを好にさせ　七助
花の供下女直作の髮でなし　金牛
はり替へた太鼓を和田は夜る扣き　散壳

錦鳥評

神德は歸し武德は呼び給ひ　春駒
六十は名月百は時雨也　三松

松の魚第一番に松へ上げ　艶里
國の名の頭に松を御拜領　半下
和かの浦左右は朝と夜るの躰　マイタ
わかの道明るくてらす湖月集　鷺舟
孝行の外は道無き雪の中　マイタ
濱荻を詠みそうな伊勢蘆を詠み　梅鳥
行けば蜘くれば神風吹きなびけ　古鳥
江戸は卯の花都では梅で啼き　是樂
八つ鷹が寄つて雀の御評定　和文
御きん玉掴んで知るは古狸　友松
小判で三度文錢で一度しめ　杜蝶
青龍と蛇棒でしばる桃の枝　和文
道法も末社ほど有る伊勢參　晴風
花の山坊主持する雨大師　有幸
ちいさくて口へは入らぬ初茄子　半下
名高いは和漢で皿と瓶を割り　新右
小便に花が咲いたで名句也　梅鳥
穴無しも目なしも交る小ぐら山　若蝶
散ぎはゝ小町櫻もあはれ也　其雪
茶が好きになるとあたまが藥鑵也　山猿

弔ひを見て直の出來る初鰹　春駒
御居間の下へ黒がねのしんを入れ　古臼
骨折も三日坊主は本能寺　山水
いきな傘朝せんで鬼と言ひ　山人
もうおれも玉に疵だと權五郎　志丸
ひつつめるように嫁なを姑つみ　雨旦
ゑぼし魚何より高い三番そう　三京
田の草の歌をしのぶとはぎで取り　クツワ
朝顔は朝寐の人にしかみつら　マイタ
ひなを仕廻ふと人間の直を付る　是樂
黒い絽で行燈をはる貧學者　時仕
初孫の力姑の角を折り　三橋
辨當は武將箸には茶人也　釣好
山開き辰巳はきせんぐんじゆ也　山笑
納つた御代は錢迄四海浪　志丸
鎌倉をもどれば桃や栗もなり　葉千
ほふられたとこで達磨は座禪をし　杜蝶
下手將棊あたま餘ッ程早くはげ　雨旦
ぬひものに母のしつけが見へる也　煙幸
夜具の出來たが暖かな御客人　酒好

組うちの圖も入れて有具足櫃　古臼
細ツそりと柳も見へる松が岡　釣好
かねの出る穴が有ので寐てくらし　石水
禪坊主らせつしてから無一物　藤波
火のよわい炬燵にゆだんすべからず　其流
月夜烏でざんすから寐なんしな　松里
傾城も手取で花をよく貰い　半下
飯ばかり和らかなのに嫁こまり　口口
問屋場の手代人ものみ馬も呑み　木偶坊
ねん猫で寐せ犬の子でたゝき付け　雨旦
一聲も三聲も呼ばぬ玉子賣　雪水
葺替て猪狽もこわく成り　近勘
未（ひつじ）だか未だか未だわかりかね　里松
待てどもこねば若いもの〳〵　若蝶
女房は角を出し蛇は舌を出し　雪下
重荷をかつぎかることは是いかに　和文
葉たばこに吹ぶりのする寒い事　クッワ
生盛の玉をねろうは娘の子　志夕
寒念佛冷て佛に成がゝり　杜蝶
幽靈のとまり木花屋門に植ゑ　酒明

ずるい嫁芋をやかせて喰て居る　板人

ヤマキ評

金に色かへぬで松の位也　賤丸
はんじやうさすみに都や花の廓　雨夕
つうれいの女郎にふれぬ大鳥毛　可笑
小むらさき江戸の氣性を立とをし　山笑
けいせいのけんなるはかのもみぢ也　杜蝶
第三に遣つたで花のてには留め　松里
日向より月にしをれる女郎花　三松
來べき宵櫻へ毛虫ぶらさがり　雨旦
あげまきを鉢巻で買ふ江戸の張　梅烏
打こけた客へ古郷のものがたり　三京
一間づゝ禿がふれる夜るの雪　〆子
はご板は客をはづます道具也　三松
けいせいをおもき枕の嫁に取り　手枕
たままつりたんすへ女郎手を合せ　玉章
傾城のまことはもみぢかきつばた　礫川
しんじつはてうしの濱へつけとゞけ　和文
花よりも心のちるは仲の町　志丸
つれ〳〵なる儘に晝みせ文をかき　玉章

素二朱もち引ぞわづらふまじりみせ　萬仁
かごの口鳥の空音ははからせず　礫川
ほとゝぎす初會はまぢり／＼聞き　雨夕
はいかんを道々くだく朝がへり　雪下
六千の枕半分あてがなし　常住
たそや此夜中あかるき五丁町　山笑
とうろ過ぎ長居は月へおそれ也　シクト
丑の日にのろりとかへるいゝ男　梅京
髮切りはいづれ狐のしわざ也　里梅
もてたのも御身いかなるゆゑにより　新右
さあ見せへお直り候へ鈴の音　雨夕
しんぞうへ落葉かく成る迄かよい　青露
春眠曉をおぼへず新造　其流
雪月花いづれ承知でもてる也　芋ウ
吉原は竹の中から月がでる　有幸
文月の下旬に雪の返す書き　松里
どうせうの相談をきく矢大臣　梅夫
中直りすりや明けの鐘おしい事　有幸
禿がいはくそれだつてかしんせん　手枕
ちとあちらへと面白く店をたて　柳雨

からだんすありんすやうにぴんとしめ　三京
たてひざでよむがそだよと袖をひき　花町
鳳凰の巣だちは長い返事也　藤波
夕べにきいて大門へあした待ち　シクト
おもしろさ文へかもじを入れて來る　同
他に事をよせてふられたいざをいゝ　マイタ
初會ぎりかよふの神に見かぎられ　喜丸
さいつ頃來た客じやはと淺黄うら　礫川
大ぶしゆびむすこ櫻を八重に見る　是樂
唐の親大こん代に子をしづめ　升子
よしなんといつて氣のつくへんな嫁　雨柳
なきにしもあらず二人は丸はだか　鷺舟
たいこ持ありんす國のつうじ也　和文
いそぐはづ番頭內も四つ手也　時住
こむそうの顏を鏡ですくひ取り　萬仁
深川へ身のせんたくにのつ付る　時住
腹だちをふみつけて行くうはぞうり　有幸
むりどめにわかれの羽織肩がひけ　金牛
わたしのほんのとゝさんは芋をうり　是樂
うれぬばん見世に四五さう舟が付き　シクト

手が有るで足を袋へいれるなり　錦重
もめができ一座ばら〳〵扇也　半下
くらがへは一の谷から下の關　木賀
甲胄は見なすけんだと下の關　萬仁
遣り手ばゞ女郎のはてとおもはれず　同
市の客禿へ弓削のものがたり　雨夕
かやうりの聲につられる四六見世　雨旦
道くさをくふをつき馬ゆだんせず　梅鳥
いき杖がしやりゝといふとモシ旦那　礫川
古市で大和廻りにきづがつき　カテウ
一疋のねこ百疋にうれるなり　其雪
とくびこんとく丸山の三會目　シクト
こはいかに不慮な災難しりをだき　松里
鳥の目を鷹にとられる二合半　〆子
ゐつゝけを不仕を見てひよぐり　杜蝶
てつぽう見世のきさんじはすると出る　雨夕
やすものゝはなうしなひは吉田町　金牛
大津繪のいきてはたらくかるい澤　木賀
にくらしいネとたぐりだすしめたばん　綾丸

しのぶずりしのぶにあまる御いかり　賤丸
花の里これもあづまの名所也　ヤマキ
いゝ田地櫻に鍬の入るばかり　可笑
舟車同じながれのうきしづみ　杜蝶
よし町へ度々一院の御つかひ　和文
けいせいの鏡を舟ではぎやくする　シクト
きの國や姜維がきもの男也　和文
座敷持小道具やほどかざりつけ　志夕
きついやつ最中の月を二拜くひ　和文
袖留は孫のかたづくほどかゝり　有幸
かんろ梅女げい者の加役也　玉章
三立目に松をせり出す大じかけ　柳水
親のためおちこち人に身をまかせ　ヤマキ
どうぞ節會を仕廻つてと下の關　和文
はな聲で俄たうろう見物し　ヤマキ
朝がへりもう是切とおもへども　同
改易をせられて川岸の住居也　杜蝶
草も木もねるに書いてる長いふみ　金牛
遣り手の子さててへ〳〵が上手也　ヤマキ
かんづいているに袴で出るやつさ　物成

目がさめりや茶や舟宿のつらにくし　口口
うらおもてまであさぎなげられる　松里
年こしに氏子をあるくつかはしめ　玉章
めやうな晩禿やつべし耳に口　金升
花やかなあるじをむすこ宿とする　梅鳥
かくてははてじとせげんかごへ乗せ　雨夕
下女でなし禿でも無し小ぢよく也　礫川
一度かひおれが女房もすさまじい　ヤマキ
仲の町せなあすこぶる仰天し　同
かんどうに神はあがらせ給ひけり　杜蝶
三度めにいとらうたけたばゝあ出る　ヤマキ
見きつたかほれたか女郎いけん也　シクト
ぼろ〳〵とした客どれもひとよぎり　里松
おそるべしゑくぼへ人をはめたがり　ヤマキ
無一物たんすにざせん豆ばかり　山笑
芋が子はゑご〳〵とした禿也　ヤマキ
くどきしらけてけいせいのいんぎんさ　礫川
せいろうへふけた息子をもちにつき　綾丸
見申したやうでざんすと首尾のよさ　山笑
遣り手ばゞ女でないといゝ角力　ヤマキ

根津の文大工の所へ釘のおれ　三松
どらおやぢ鴨居ひくゝてくゞりかね　雨旦
風呂敷と三分にぎつて禿かけ　ヤマキ
素一歩は陳倉道を只一騎　和文
過ぎたるもふられ及ばざるもふられ　金牛
うりぶりのわるさ癪だの頭痛だの　シクト
花が見たくば吉原がいつちよし　芋洗
もてた部家ふられたやつが居候　三木
やさしく申すもの哉ほれんした　ヤマキ
月のふみ息子よしなにくみわける　金牛
さあ事だおやぢ土手迄出馬也　手枕
かんざしでぢれつたい穴二ッ三ッ　マイタ
柳橋火縄ちよつきり丁度也　其笠
ちかくして遠し格子の内と外　ヤマキ
請出した時分はこゝらでのくらし　杜蝶
そのにくさ遣り手いたゞきましやう也　ヤマキ
遣ひはたして女郎やにさしだらけ　三松
名を聞けば八兵衛といふ女郎なり　シクト
入かへのならぬ代呂物息子うけ　金升
四百ごみ三歩は禿でかしたり　礫川

朝がへりつく〴〵思やかつぱの屁　金升
かるい澤どろ田を棒にふるところ　猿子
朝がへりあらおそろしの山の神　可笑
たがひにゑいやと引く拍子百おとし　綾丸
黑助の湯立でれつくさらへくべ　礫川
朝がへりさんなすむゆの論が出來　龜樂
据風呂で夕部の客のたなおろし　玉章

誹風柳多留六十篇終

近世文藝叢書第九終

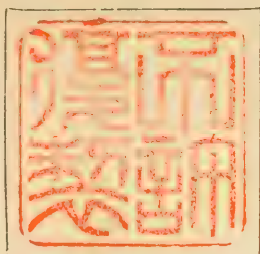
難波常雄
田口重男
文傳正與　校

（近世文藝叢書第九奧附）

非賣品

明治四十四年六月廿五日印刷

明治四十四年六月三十日發行



編輯兼發行者　東京市京橋區新榮町五丁目三番地　國書刊行會代表者　早川純三郎

印刷者　東京市京橋區新榮町四丁目三番地　高橋赤次郎

印刷所　東京市京橋區新榮町四丁目三番地　國書刊行會第一工場

發行所　東京市京橋區新榮町五丁目三番地　國書刊行會

